宮城県文化財調査報告書第175集

山王遺跡町地区の調査

－県道泉塩釜線関連調査報告書Ⅱ－

平成10年3月

宮城県教育委員会

宮城県土木部

上 Ⅻ区、Ⅻ区全景（北から）
下 SX2823方形周溝墓全景（南から）

SX2823 方形周溝墓出土土器

古墳時代中期の土器

序　　文

近年、各自治体が歴史と風土に根ざした地域の活性化を推進するために、郷土にある文化財を再確認し、それを地域づくりの拠点として整備し活用していこうといった考え方を持つところが多くなってきております。

宮城県としても本間知事の提唱により平成２年度から「われらみやぎの東北学おこし事業」を実施するなど、国際化の推進や産業経済の発展の基盤となる歴史と風土に根ざした東北の「地域らしさ」の確立に努め、21世紀に向けた新たな県土づくりに取り組んでいるところであります。

一方、近年の本県における各種開発事業の活発化には目を見張るものがあります。道路建設やほ場整備など生活関連事業をはじめ、ゴルフ場などの大規模なレジャー施設や工場団地・住宅団地の進出が著しく、これらの開発によって埋蔵文化財が破壊の危機にさらされる場合が多くなってきています。

改めて申すまでもなく、埋蔵文化財は文献などに記録されていない地域の歴史を即物的に解明することが出来る貴重な歴史資料であるばかりでなく、その地域に住んでいる人々にとって最も親しみやすく、精神的なよすがとなるものであります。まさに「東北学」を考える上での最も基本となる資料と言えます。

しかし、埋蔵文化財は土地との関連で保存されてきたものであるため、各種開発事業によって絶えず破壊・消滅のおそれにさらされております。当教育委員会としては開発関係機関等との協議を通してこのような貴重な文化財を保存し、後世に伝えることに努めているところであります。

本書は開発関係機関等との協議・調整に基づき平成７・８年度に当教育委員会が行った発掘調査の成果を収録したものであります。これらの成果が地域の歴史的解明と文化財保護思想の高揚のため役立てていただければ幸いです。

最後に、協議にあたり各遺跡の保護調整に理解を示され、調査にあたっても多大なご協力・ご支援をいただきました関係機関各位、および発掘作業にあたられた皆様に深く感謝申し上げる次第です。

平成10年3月

宮城県教育委員会教育長　遠　藤　嘉　彬

例　　言

1. 本書は県道泉塩釜線の道路改良事業にともなう山王遺跡の平成７・８年度の発掘調査報告書である。
2. 調査は宮城県教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課が担当した。
3. 本書における土色の記述については、『新版標準土色帖』(小山・竹原：1973)を使用した。
4. 本書の第２図は、多賀城市都市計画図（1：5000）を複製して使用した。
5. 本書の写真図版1は、昭和24年に米軍が撮影した空中写真を国土地理院の了承を得て掲載した。
6. 発掘調査の測量は、山王遺跡八幡地区内の第Ｘ系国家座標Ｘ＝－188,880.000、Ｙ＝13,230.000を原点とした東西・南北の基準線をもとに 3mの方眼を設定しておこなった。本書に掲載した遺構図中に示された方位はすべて座標北を指している。なお、磁北との偏差は西に８°30′40″である。
7. 本書の遺構番号は、遺構の種別に関わらず、発掘現場で付されたものをそのまま使用した。遺構は種別にしたがって、以下の記号を使用した。

   竪穴住居跡（ＳＩ）、掘立柱建物跡（ＳＢ）、塀跡・柱列（ＳＡ）、井戸跡（ＳＥ）、土壙（ＳＫ）、溝跡・河川跡（ＳＤ）、水田跡・小溝状遺構群（ＳＦ）、道路跡・土器埋設遺構・整地層・その他性格不明の遺構（ＳＸ）
8. 発掘調査および整理・報告書の作成に際して、以下の方々と関係機関から指導、助言を賜った(五十音順、敬称略）。

   相沢清利、石田明夫、石本敬、大平聡、木暮亮、佐藤甲二、高倉敏明、高橋圭蔵、千葉孝弥、辻誠一郎、西村博幸、丹羽茂、藤沢　敦、藤沼邦彦、本田泰貴、松本秀明、山中敏史

   多賀城市埋蔵文化財調査センター、東北歴史資料館、宮城県多賀城跡調査研究所
9. 本書の整理、遺構・遺物のトレースは、村田晃一・早川英紀・八嶋伸明・星清・柬理浩明・佐藤悦子・佐久間広恵・庄子善昭・菅原友子・菊地大介・渡辺清史・酒井亜希子がおこなった。
10. 本書の執筆は、調査担当者との協議ののちに以下のような分担でおこない、村田晃一が編集した。

    第Ⅰ章Ａ、第Ⅱ章……柬理浩明

    第Ⅰ章Ｂ、第Ⅲ章Ａ－3、第Ⅲ章Ｂ－2、第Ⅳ章Ｃ……八嶋伸明

    第Ⅲ章Ａ－1・2、第Ⅳ章Ａ・Ｂ……村田晃一

    第Ⅲ章Ｂ－1、Ｃ、Ｄ……早川英紀、柬理

    第Ⅴ章……村田、八嶋
11. 付編１の「山王遺跡町地区出土木製品の樹種同定」はパレオ・ラボの松葉礼子氏、付編２の「山王遺跡町地区出土の大型植物遺体」については大阪市立大学大学院の福田美和氏に執筆をお願いした。
12. 本遺跡の調査成果については、宮城県遺跡調査成果発表会でその内容の一部を報告しているが、これと本書の記載内容が異なる場合は、本書が優先する。
13. 発掘調査の記録や整理した資料・出土遺物は宮城県教育委員会が保管している。

目　　次

第I章　はじめに …… 1
　A．遺跡の位置と環境 …… 1
　B．調査の経過 …… 8
第Ⅱ章　基本層序 …… 10
第Ⅲ章　発見された遺構と遺物 …… 13
　A．ⅩⅡ区 …… 13
　　1．古墳時代中期 …… 13
　　2．奈良・平安時代 …… 31
　　3．江戸時代以降 …… 46
　B．ⅩⅠ区 …… 77
　　1．奈良・平安時代 …… 77
　　2．江戸時代以降 …… 121
　C．Ⅸ・Ⅹ区 …… 127
　　1．古墳時代前期 …… 127
　　2．奈良・平安時代以降 …… 141
　D．Ⅴ・Ⅵ区 …… 146
第Ⅳ章　考　察 …… 151
　A．古墳時代 …… 151
　　1．前　期 …… 151
　　2．中　期 …… 156
　B．奈良・平安時代 …… 166
　C．江戸時代以降 …… 188
第Ⅴ章　ま と め …… 190
付編１　山王遺跡町地区出土木製品の樹種同定 …… 198
付編２　山王遺跡町地区出土の大型植物遺体 …… 205

調 査 要 項

遺 跡 名：山王遺跡（宮城県遺跡登録番号 18013）
遺跡記号：ＦＩ
所 在 地：宮城県多賀城市南宮字八幡・伊勢・町
発掘面積：約 7100 ㎡
調査期間：平成 7 年(1995 年)4 月 10 日～12 月 12 日、平成 8 年(1996 年)4 月 8 日～12 月 4 日
調 査 員：村田晃一・早川英紀・星清（平成 7 年度）
　　斎藤吉弘・村田晃一・八嶋伸明・東理浩明（平成 8 年度）

挿　図　目　次

第１図　仙台平野北部の地形 ･･1
第２図　多賀城南面の方格地割りと周辺の遺跡 ･･････････････････････････････････5・6
第３図　基本層序 ･･11
第４図　ＸＩ・ＸⅡ区の検出以降〔古墳時代中期〕 ･･････････････････････････････14
第５図　ＳＩ2983 住居跡･･15
第６図　ＳＩ2983 住居跡出土遺物（1） ･･････････････････････････････････････16
第７図　ＳＩ2983 住居跡出土遺物（2） ･･････････････････････････････････････17
第８図　ＳＩ2988 住居跡･･18
第９図　ＳＩ2988 住居跡出土遺物･･･19
第10図　ＳＩ3395 住居跡出土遺物･･･19
第11図　ＳＩ3022 住居跡･･20
第12図　ＳＩ3022 住居跡出土遺物（1） ･･････････････････････････････････････21
第13図　ＳＩ3022 住居跡出土遺物（2） ･･････････････････････････････････････22
第14図　ＳＩ3012 住居跡･･23
第15図　ＳＩ3012 住居跡出土遺物･･･24
第16図　ＳＩ3293・3525 住居跡出土遺物･･････････････････････････････････････24
第17図　ＳＫ3041 土壙･･25
第18図　XIII区中央部の遺構 ･･26
第19図　ＳＫ3041・3071・3378・3390 土壙、ＳＤ3540 溝跡出土遺物 ･･････････27
第20図　ＸＩ区南端からＸⅡ区北端の遺構 ･･････････････････････････････････････28
第21図　ＳＤ3369 溝跡断面図･･･29
第22図　ＳＤ3369 溝跡土器出土状況･･29
第23図　ＳＤ3540 溝跡断面図･･･29
第24図　ＳＤ3540 溝跡出土遺物･･30
第25図　ＸⅡ区の検出遺構〔奈良・平安時代〕（1） ･･････････････････････････31
第26図　ＸⅡ区の検出遺構〔奈良・平安時代〕（2） ･･････････････････････････32
第27図　ＳＢ3400～3403 建物跡柱穴断面図･･･････････････････････････････････33
第28図　ＸⅡ区中央から南側の遺構 ･･34
第29図　ＳＢ3400・3403・3408 建物跡出土遺物･･･････････････････････････････35
第30図　ＳＢ3404・3409 建物跡柱穴断面図･･･････････････････････････････････36
第31図　ＸⅡ区中央から南側の遺構 ･･37
第32図　ＳＢ3405～3408 建物跡柱穴断面図･･･････････････････････････････････38
第33図　ＸＩ区からＸⅡ区北端の遺構 ･･40
第34図　ＳＢ3410・3430～3432 建物跡柱穴断面図･･･････････････････････････41
第35図　ＳＫ3014 土壙出土遺物･･43

第 36 図　ＳＫ3014・3042・3524 土壙、ＳＸ2999 土器埋設遺構断面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45
第 37 図　ＸⅡ区遺構・表土出土遺物 ・・45
第 38 図　ＸⅡ区の検出遺構〔江戸時代以降〕（1） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47
第 39 図　ＸⅡ区の検出遺構〔江戸時代以降〕（2） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48
第 40 図　ＸⅡ区南部の遺構 ・・49
第 41 図　ＳＢ3439・3440・3442・3443・3445 建物跡柱穴断面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・50
第 42 図　ＳＢ3444・3447・3448・3450・3453 建物跡柱穴断面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
第 43 図　ＸⅡ区中央部の遺構 ・・53
第 44 図　ＳＢ3451・3452・3454・3455・3457・3459 建物跡柱穴断面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54
第 45 図　ＸⅡ区井戸跡断面図 ・・57
第 46 図　ＳＥ2925・3527 井戸跡、ＳＫ3021・3522 土壙出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・59
第 47 図　ＳＫ2938・2960・2986・2997・3518 土壙断面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・61
第 48 図　ＳＫ2986・3021・3522 土壙出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63
第 49 図　ＳＤ3009Ａ・Ｂ溝跡断面図 ・・・64
第 50 図　ＳＤ3009Ｂ溝跡出土遺物 ・・64
第 51 図　ＳＤ3396Ａ・Ｂ溝跡断面図 ・・・65
第 52 図　ＳＤ3396Ａ溝跡出土遺物（1） ・・・65
第 53 図　ＳＤ3396Ａ溝跡出土遺物（2） ・・・66
第 54 図　ＳＤ3396Ｂ溝跡出土遺物（1） ・・・68
第 55 図　ＳＤ3396Ｂ溝跡出土遺物（2） ・・・69
第 56 図　ＳＤ3396Ｂ溝跡出土遺物（3） ・・・70
第 57 図　ＳＤ3396Ｂ溝跡出土遺物（4） ・・・71
第 58 図　ＳＤ3396Ｂ溝跡出土遺物（5） ・・・72
第 59 図　ＳＤ3396Ｂ溝跡出土遺物（6） ・・・73
第 60 図　表土出土遺物 ・・76
第 61 図　ＸⅠ区の検出遺構〔奈良・平安時代〕（1） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・78
第 62 図　ＸⅠ区の検出遺構〔奈良・平安時代〕（2） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・79
第 63 図　ＸⅠ区の検出遺構〔奈良・平安時代〕（3） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・80
第 64 図　ＸⅠ区の検出遺構〔奈良・平安時代〕（4） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・80
第 65 図　ＸⅠ区の検出遺構〔奈良・平安時代〕（5） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・81
第 66 図　ＳＸ3106 道路跡断面図 ・・82
第 67 図　ＸⅠ区南側の遺構 ・・・83
第 68 図　ＳＢ3411～3417 建物跡柱穴断面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・84
第 69 図　ＳＸ3106 道路跡、ＳＢ2888・3416・3422・3424 建物跡出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・85
第 70 図　ＳＢ3417～3419 建物跡柱穴断面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・86
第 71 図　ＸⅠ区中央部の遺構 ・・87
第 72 図　ＳＢ3420～3425 建物跡柱穴断面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・88
第 73 図　ＳＢ2889・2890・3427・3436～3438 建物跡柱穴断面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・90

第 74 図　ＸＩ区北西部の遺構 ･･･91
第 75 図　ＳＢ2886～2888・3426・3428・3429 建物跡柱穴断面図 ･････････････････････････････93
第 76 図　ＸＩ区北部西側の遺構 ･･･94
第 77 図　ＳＢ2883～2885 建物跡、ＳＡ2881・2882 柱列跡柱穴断面図 ･････････････････････95
第 78 図　ＸＩ区北部中央西側の遺構 ･･･96
第 79 図　ＸＩ区北部中央東側の遺構 ･･･98
第 80 図　ＳＫ2763・2774・2777・2850・2861・2864・2893・3124・3503 土壙断面図 ･･････････100
第 81 図　ＳＫ2774・2793・2859・2860・3124・3503 土壙出土遺物 ･････････････････････････101
第 82 図　ＳＫ2861 土壙出土遺物（1） ･･103
第 83 図　ＳＫ2861 土壙出土遺物（2） ･･104
第 84 図　ＳＫ2861 土壙出土遺物（3） ･･105
第 85 図　ＳＫ2850 土壙出土遺物 ･･･106
第 86 図　ＳＫ2763 土壙出土遺物 ･･･108
第 87 図　ＳＫ2819・2851 土壙出土断面図 ･･･109
第 88 図　ＳＫ2764・2851 土壙出土遺物 ･･･110
第 89 図　ＳＫ2851 土壙出土遺物 ･･･111
第 90 図　ＳＤ2766・2816・3115 溝跡、ＳＦ3179 小溝状遺構群断面図 ･････････････････････113
第 91 図　ＳＤ2766・2816・2820・2862 溝跡、ＳＦ3477 小溝状遺構群出土遺物 ･････････････114
第 92 図　ＳＤ2771・2794・2820・2862 溝跡、ＳＦ3473～3475・3478 小溝状遺構群断面図････117
第 93 図　ＸＩ区北部西側の小溝状遺構 ･･118
第 94 図　ＸＩ区北部東側の小溝状遺構群 ･･･119
第 95 図　ＸＩ区の検出遺構〔江戸時代以降〕 ･･･121
第 96 図　ＳＥ3091・3108・3109 井戸跡断面図 ･･･122
第 97 図　ＳＥ3091 井戸跡、ＳＤ3089 溝跡出土遺物 ･･････････････････････････････････122
第 98 図　ＳＧ3098 池跡出土遺物 ･･･124
第 99 図　ＳＧ3098 池跡、ＳＤ3089・3514 溝跡 ･･････････････････････････････････････125
第 100 図　ＳＤ3072 溝跡断面図 ･･126
第 101 図　Ｘ区中央部の遺構〔古墳時代前期〕 ･･････････････････････････････････････127
第 102 図　ＳＸ2823 方形周溝墓 ･･128
第 103 図　ＳＸ2823 方形周溝墓周溝北側の土器出土状況 ･･････････････････････････････128
第 104 図　ＳＸ2823 方形周溝墓出土遺物（1） ･･････････････････････････････････････129
第 105 図　ＳＸ2823 方形周溝墓出土遺物（2） ･･････････････････････････････････････130
第 106 図　ＳＸ2818 方形周溝墓出土遺物 ･･･131
第 107 図　ＳＸ2818 方形周溝墓、ＳＢ2879 建物跡、ＳＫ2814 土壙 ･･････････････････････132
第 108 図　ＳＢ2879 建物跡柱穴断面図 ･･133
第 109 図　ＳＩ2869 住居跡、ＳＫ2870 土壙 ･･133
第 110 図　ＳＩ2869 住居跡出土遺物 ･･･134
第 111 図　ＳＫ2814・2870 土壙断面図 ･･134

第 112 図　ＳＤ2833・2837・2891 溝跡断面図 …… 135
第 113 図　ＳＫ2814 土壙、ＳＤ2833・2835・2841・2873 溝跡出土遺物 …… 136
第 114 図　ＳＦ3480 小溝状遺構群、Ｘ区第 5 層出土遺物 …… 137
第 115 図　ＳＦ3552 水田跡 …… 138
第 116 図　ＳＦ3552 水田跡断面図 …… 138
第 117 図　Ｘ区西側の遺構 …… 139
第 118 図　ＳＸ2842 遺構断面図 …… 139
第 119 図　Ⅸ区の遺構 …… 140
第 120 図　Ｘ区西端付近の遺構 …… 141
第 121 図　Ｘ区東端付近の遺構 …… 142
第 122 図　ＳＤ2798・2800・2806・2807 溝跡断面図 …… 143
第 123 図　ＳＫ2815 土壙、ＳＤ2798・2801・2806 溝跡、ＳＦ3481 小溝状遺構群出土遺物 …… 143
第 124 図　ＳＦ3482 小溝状遺構群 …… 145
第 125 図　ＳＦ3482・3483 小溝状遺構群 …… 145
第 126 図　Ⅵ区東側の遺構 …… 146
第 127 図　Ⅴ区の遺構 …… 147
第 128 図　ＳＫ2761 土壙、ＳＤ2754・2758・2762 溝跡断面図 …… 149
第 129 図　ＳＫ2760・2761 土壙、ＳＤ2754・2762 溝跡、ＳＤ2894 河川跡出土遺物 …… 149
第 130 図　ＳＸ2823 方形周溝墓出土土器 …… 151
第 131 図　古墳時代前期の遺構重複関係 …… 152
第 132 図　ＳＸ2823 周溝内の土器出土状況 …… 155
第 133 図　土器分類図〔古墳時代中期〕 …… 157
第 134 図　ＳＩ2983・3022 住居跡、ＳＤ3369 溝跡出土土器 …… 160
第 135 図　南小泉式期の土器 …… 162
第 136 図　土器分類図〔奈良・平安時代〕 …… 167
第 137 図　ＳＫ2763・2764・2850・2861・3014 土壙出土土器 …… 171
第 138 図　坏の法量 …… 172
第 139 図　坏・小型坏・小皿の法量 …… 174
第 140 図　赤焼土器坏類の比較 …… 174
第 141 図　宮城県内出土の羽釜 …… 175
第 142 図　ＸＩ・ＸⅡ区の遺構重複関係 …… 176
第 143 図　ＸＩ区・ＸⅡ区の主な遺構 …… 180
第 144 図　ＸＩ・ＸⅡ区の遺構変遷図 …… 183
第 145 図　多賀城南面の方格地割 …… 185
第 146 図　山王遺跡東町浦・西町浦地区の検出遺構 …… 186
第 147 図　江戸時代以降の遺構重複関係 …… 187
第 148 図　江戸時代以降の主な遺構 …… 188

表　目　次

第１表　ＳＤ3396Ｂ溝跡出土遺物観察表 …… 74
第２表　宮城県内の周溝墓 …… 154
第３表　遺構出土土器一覧表〔古墳時代中期〕 …… 159
第４表　赤彩土器の割合 …… 163
第５表　竪穴住居跡一覧表〔古墳時代中期〕 …… 164
第６表　遺構出土土器一覧表〔奈良・平安時代〕 …… 169
第７表　掘立柱建物跡一覧表〔奈良・平安時代〕 …… 178

写　真　図　版　目　次

図版１　昭和24年当時の遺跡周辺、ＸＩ区からＸII区全景（北から） …… 211
図版２　ＸII区中央からＸＩ区全景（南から）、ＸII区全景（北から） …… 212
図版３　ＳＩ2983住居跡（全景、床面土器出土状況、P5床面土器出土状況） …… 213
図版４　ＳＩ2988住居跡（全景、壁材痕跡確認状況） …… 214
図版５　ＳＩ3022住居跡（全景、床面土器出土状況、カマド）、ＳＩ3012住居跡カマド付近 …… 215
図版６　ＸII区中央から南側の遺構（北から）、ＳB3400建物跡（柱穴断面、礎板） …… 216
図版７　ＸII区中央の遺構（北から）、建物跡柱穴断面図（ＳB3409・3439・3441） …… 217
図版８　ＳK2939土壙床面木製品出土状況、ＳK2997土壙断面、ＳE2023井戸跡断面図 …… 218
図版９　ＸII区中央北側の置こう（西から）、ＳB3408建物跡柱穴断念、ＳK3014土壙断面、ＳK3041土壙床面土器出土状況 …… 219
図版10　ＸII区北端西側の遺構（北から）、ＳB3406建物跡柱穴断面、ＳB3430建物跡（柱穴断面、礎板） 220
図版11　ＳB3430建物跡柱穴礎板、ＳB3431・3432建物跡柱穴断面、ＳD3369溝跡断面と土器出土状況、ＸII区北側の地山断面 …… 221
図版12　ＸＩ区全景（北から）、ＸＩ区全景（南から） …… 222
図版13　ＳX3106東西道路跡（全景、側溝完掘後） …… 223
図版14　ＳX3106東西道路跡（側溝の重複状況、北側断面）、ＳD2766Ａ・Ｂ区画溝断面図 …… 224
図版15　ＸＩ区南側の遺構（北から）、ＸＩ区南端付近の遺構（北から） …… 225
図版16　ＳB3419建物跡柱穴礎板、建物跡柱穴断面（ＳB2887・2829）、ＳD2816Ａ・Ｂ区画溝断面 …… 226
図版17　ＸＩ区北拡張区とＳD2766Ａ・Ｂ区画溝跡、ＳK2861・2864土壙断面、土壙遺物出土状況（ＳK2851・2860・3503） …… 227
図版18　ＳG3098池跡（全景、北壁の護岸施設）、ＸＩ区南側の基本層序 …… 228
図版19　ＳD3396Ａ・Ｂ区画溝断面図、ＳD3514溝跡樋検出状況、ＳD3396Ｂ溝跡木製品出土状況 …… 229
図版20　Ｘ区第４層の検出遺構（東から）、Ｘ区第５層の検出遺構（東から） …… 230
図版21　Ｘ区第５層の検出遺構（西から）、ＳX2818方形周溝墓周辺の遺構（東から） …… 231
図版22　ＳX2823方形周溝墓（全景、周溝内土器出土状況） …… 232

図版23　ＳＸ2818・2823方形周溝墓調査風景（西から）、ＳＸ2818方形周溝墓周溝断面、ＳＩ2869住居跡（北西から）…… 233
図版24　ＳＦ3480土器出土状況、ＳＦ3552水田跡・ＳＸ2842遺構、ＳＦ3552水田跡（南から）、ＳＸ2842遺構（東から）…… 234
図版25　ＸＩ区・Ｘ区全景（東から）、Ⅵ区・Ⅶ区全景（東から）、Ⅴ区・Ⅵ区・Ⅶ区全景（東から）…… 235
図版26　ＳＸ2823方形周溝墓出土土器（1）…… 236
図版27　ＳＸ2823方形周溝墓出土土器（2）…… 237
図版28　Ｘ区古墳時代前期の遺構、旧表土出土土器…… 238
図版29　ＸⅡ区古墳時代中期の遺構、ＳＩ2983住居跡出土土器…… 239
図版30　ＳＩ2983・3022住居跡出土土器…… 240
図版31　ＳＩ3022住居跡出土土器…… 241
図版32　古墳時代中期の住居跡、ＳＫ3041土壙出土土器…… 242
図版33　ＳＫ3041・3071土壙、ＳＤ3369・3540溝跡出土土器…… 243
図版34　石製品、木製品…… 244
図版35　ＳＫ2763・2764・3014土壙出土土器…… 245
図版36　ＳＫ2761・2764・2851・3124土壙、ＳＦ3477小溝状遺構出土土器…… 246
図版37　ＳＫ2861土壙出土土器…… 247
図版38　ＳＫ2850・2861土壙出土土器…… 248
図版39　ＸＩ区、ＸⅡ区の遺構出土土器、坏底面のヘラ記号…… 249
図版40　土師器、須恵器、赤焼土器坏・皿類の技法と痕跡…… 250
図版41　墨書土器の文字、ＳＤ3396Ａ・Ｂ溝跡出土陶磁器…… 251
図版42　ＳＤ3396溝跡、ＳＧ3098池跡、ＳＫ3021土壙、表土出土陶磁器…… 252
図版43　井戸跡・土壙・池跡・区画溝跡出土木製品・金属製品…… 253
図版44　井戸跡、土壙、区画溝跡出土木製品（下駄）…… 254
図版45　土壙・池跡・区画溝跡出土木製品（木簡、その他）…… 255
図版46　出土木材顕微鏡写真（1）…… 256
図版47　出土木材顕微鏡写真（2）…… 257
図版48　出土木材顕微鏡写真（3）…… 258
図版49　出土木材顕微鏡写真（4）…… 259
図版50　出土木材顕微鏡写真（5）…… 260
図版51　山王遺跡出土の植物遺体（1）…… 261
図版52　山王遺跡出土の植物遺体（2）…… 262

第Ⅰ章　はじめに

A．遺跡の位置と環境

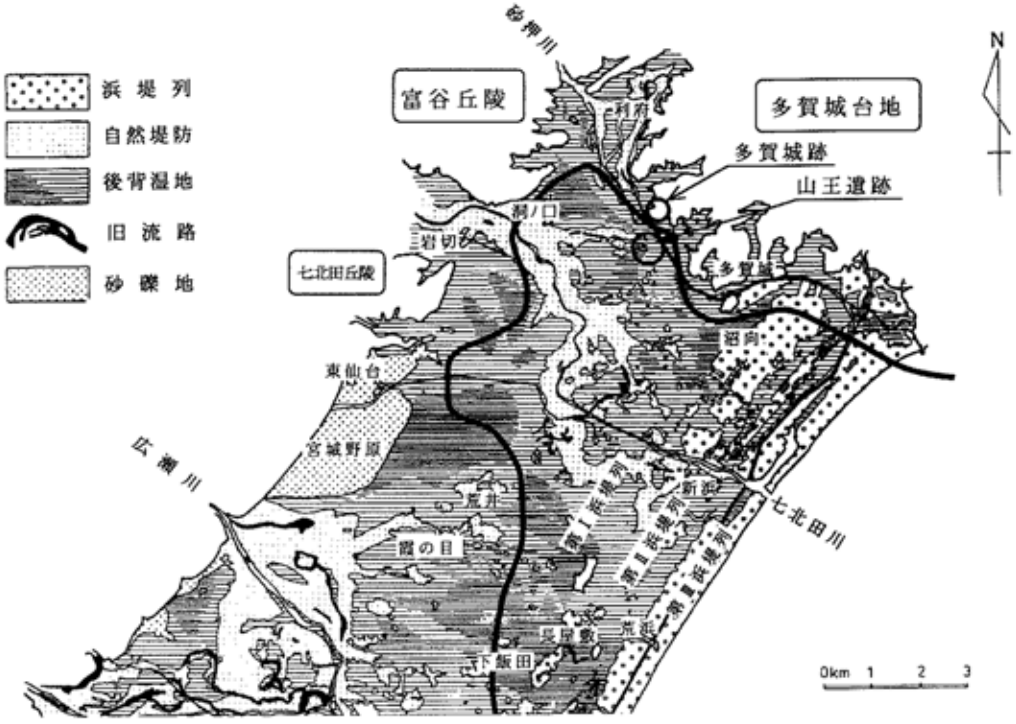
1．遺跡の位置

山王遺跡は宮城県多賀城市の西部に位置する。大字では山王・南宮の両地区にまたがり、また多くの小字をもっていくつかの地区に区分されている。ＪＲ陸前山王駅付近を中心として、東西約2.5km、南北約1.5㎞以上におよぶ広大な遺跡である。西は新田遺跡、東と北は市川橋遺跡と接し、さらにその北東には特別史跡多賀城跡がある。

2．地形的環境（第１図）（註1）

山王遺跡は仙台平野の北端部、七北田川左岸の沖積低地上に位置している。この沖積低地は周囲を台地や丘陵地に囲まれている。山王遺跡の北東は、ゆるやかな起伏をもつ丘陵地状の多賀城台地である。多賀城台地の標高は50m前後であるが、塩釜・松島方面へ海抜高度をあげながら連続する。また本遺跡の北西約2.5㎞には標高60～100mの富谷丘陵がひろがる。このうち砂押川が流下する入菅谷方面には軽石質砂岩が広く分布し、砂押川に沿う沖積地の砂質堆積物の供給源となっている。沖積低地の埋積過程において、七北田川の河道沿いには自然堤防が形成された。この自然堤防と浜堤列、および富谷丘陵と多賀城台地に取り囲まれた後背湿地部分には、広大な谷地（湿地帯）が広がっていたと考えられる。過去の自然状態では七北田川および砂押川の河道は一定ではなく、洪水時には冠水した谷地のなかで常に流路を変えながら流下したことが想像できる。

本遺跡付近の微地形についてみると、遺跡東端を流れる砂押川沿いは、地表では自然堤防の発達がみられない。一方、七北田川左岸の自然堤防の一部は洞の口付近から分岐し、その東方にあたる山王



第１図　仙台平野北部の地形（松本：1995）

字千刈田付近に伸び、砂押川付近で確認できなくなる。これは過去の自然状態の七北田川が上に述べたようにその位置を変遷させながら流下した過程で形成されたと考えられる。現在、自然堤防は県道泉・塩釜線に沿う標高5～6mの微高地となっている。山王遺跡および隣接する新田遺跡、市川橋遺跡はこの自然堤防上を中心とし、周辺の低地の一部を取り込んで立地している。

3．これまでの調査成果（第2図）

山王遺跡は弥生時代から近世までの長い期間にわたり、断続的に営まれてきた複合遺跡である。本遺跡と一連の遺跡である新田・市川橋などの多賀城跡南面の遺跡調査は昭和53年以降、多賀城市教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所・宮城県教育委員会によって継続的におこなわれている。その結果、各時代の古地形や遺跡の様相、土地利用のあり方などがあきらかになりつつある。ここでは山王とその周辺遺跡の調査成果からみた多賀城市西部の歴史的環境について、時代ごとにみていく（註2）。

a．弥生時代

八幡地区において弥生時代中期の桝形囲式期に属する包含層（後藤ほか：1994）と包含層より古い水田跡（千葉・鈴木ほか：1996）が確認されている。包含層の標高は 2mにみたない。また新田遺跡後地区では、この時期の溝跡と土器が発見されている。

弥生時代の層や遺構を確認するためには、多くの場合現地表から 2m以上の掘削が必要である。そのため調査例は少なく、いまのところこの時期の包含層や遺構が確認されているのは、上記の2地区だけである。竪穴住居跡などの集落跡を示す遺構は発見されておらず、また自然堤防のひろがりもあきらかではないが、本遺跡周辺にこの時期の集落の存在が想定できる。

b．古墳時代

八幡地区では弥生時代中期の層が堆積したのち、層の厚さが 0.5～1mにおよぶ土砂の堆積があり、自然堤防が拡大する。その上に古墳時代前期、塩釜式期の旧表土や堆積層が認められる。この層は山王遺跡の広い範囲で確認されており、その成果から当時の地形は現在よりもかなり起伏に富んでいたことがわかっている。さらに自然堤防周辺の微地形は、中小河川の侵食・堆積作用により、古墳時代をとおして複雑に変化している。

古墳時代前期、塩釜式期の遺構は八幡地区（千葉・鈴木ほか：前掲）、多賀前地区（菅原ほか：1995）、西町浦地区や新田遺跡南寿福寺地区で水田跡が発見されている。さらに新田遺跡の南寿福寺地区や北寿福寺地区、後地区では土壙や溝などが確認されている（高倉：1991）が、自然堤防上においては竪穴住居跡などの集落の存在を直接示す遺構は、これまで発見されていなかった。一方、山王遺跡の東方約2㎞の台地上に位置する多賀城廃寺跡（高崎遺跡）では竪穴住居跡が3軒以上、多賀城跡五万崎地区では方形周溝墓1基が発見されるなど、標高10m前後の台地では集落や墓地の存在が確認されている。（宮城県多賀城跡調査研究所：1976・1978）

古墳時代中期、南小泉式期になると、八幡地区や東町浦・西町浦地区、新田遺跡後地区で多数の竪穴住居跡や祭祀遺構が発見されており、自然堤防上に大きな集落が出現したと考えられる。このうち、八幡地区の集落跡は南小泉式期の前半段階に属し、鍛冶工房を含む多数の竪穴住居跡をはじめ、土壙・河川跡などが検出されている。とくに河川跡の落ち際に形成された遺物包含層からは、この集落の社

会・生活の様相を物語る多種多様の遺物が出土した（宮原・吾妻ほか：1994）。

東町浦・西町浦地区では豪族居館の一部とみられる遺構や墓壙の可能性がある遺構が検出され、八幡地区ではほとんど出土していない須恵器が10数点出土するなど、八幡地区とは遺構や遺物の様相が大きく異なっている（高倉：前掲）。また、西町浦地区の竪穴住居跡の中には石製模造品の製作工房とみられるものがある。八幡から西町浦地区の中期の遺構からは、北海道系の黒曜石製石器が出土している。とくに西町浦地区からは続縄文土器も発見されている（高倉：前掲）。このほか中期の遺構は砂押川の東にもみられ、市川橋遺跡館前地区では河川跡の落ち際で祭祀遺構が、高崎遺跡では石製模造品の製作工房を含む竪穴住居跡が発見されている。

古墳時代後期は、栗囲式期の集落が八幡地区や市川橋遺跡館前地区、新田遺跡後地区で確認されている（註3）。八幡地区の竪穴住居跡のなかには4軒重複するものがあり、長期間にわたって集落が営まれたことが知られる（後藤ほか：1994）。また同地区の集落内を流れる河川跡からは多量の土器とともに木器、骨角器、獣骨などのほか柄香炉や多量の卜骨、斎串が出土しており、仏教との関わりや祭祀のあり方を知るうえで興味深い。

一方、新田遺跡後地区では祭祀遺構が検出され、大量の土器にまじって臼玉・琥珀玉などが出土している（多賀城市埋蔵文化財調査センター：1988）。この時期の古墳としては、山王遺跡の東約2kmの台地上に位置し横穴式石室を持つ稲荷殿古墳（加藤・辺見：1982）や、多賀城跡の外郭南門西側の築地基礎地業下で発見された田屋場横穴墓群（高野：1986）がある。

c．奈良時代

8世紀前半、山王遺跡の北東約0.5㎞の多賀城台地南西端に陸奥国府多賀城が築かれる。多賀城は1辺が670～1,000mの不整方形の範囲を築地で囲まれ、ほぼ中央に築地で囲まれた政庁がおかれた。政庁は大別して4期の変遷があり、このうち第Ⅰ期、第Ⅱ期が奈良時代にあたる。外郭線上の3カ所に門が開かれ、南門から政庁に向かって延びる道路や東門と西門を結ぶ城内の道路の存在もあきらかになっている。また南門の傍らには日本三古碑の一つである「多賀城碑」がある。付属寺院である多賀城廃寺は、多賀城と同時期に創建され廃絶年代も同じ項とみられる。

この時期の多賀城周辺は全体的に遺構が少なく、自然堤防上の山王遺跡八幡・千刈田地区、市川橋遺跡館前地区、新田遺跡後・北寄福寺地区や、丘陵上の高崎遺跡井戸尻・弥勒地区において、竪穴住居跡や掘立柱建物跡などが散在的に検出されている（千葉：1997）。住居の主体をなすのは竪穴住居である。ただし、多賀城跡の南西部に隣接した八幡地区や千刈田地区で発見された竪穴住居跡や掘立柱建物跡、あるいは溝跡や材木塀跡などの区画施設の方向は、いずれも多賀城の政庁中軸線の方向とほぼ一致しており、多賀城の規制を受けた空間が城外にも存在していたと考えられる。また、八幡地区から出土した漆紙文書・添付着土器や、鉄滓・炉壁などからは、漆工房や鍛冶工房の存在が考えられる（佐藤則之ほか：1997）。

d．平安時代

平安時代になると、多賀城周辺の広い範囲で多数の遺構や遺物がみられるようになる。とくに多賀城の南から南西部にあたる、市川橋遺跡館前地区および山王遺跡の各地区においては、幅23mの南北

大路や幅12mの東西大路をはじめとする、多賀城の政庁中軸線や外郭南辺を基準とした南北、東西方向の道路跡が多数検出され、自然堤防上に約1町四方の方格地割が存在したことがあきらかになっている（第2図）。

方格地割の範囲についてみると、西側が西9南北道路まで、北側は八幡地区の場合、道路は古砂押川を越えては建設されておらず、北3東西道路付近が方格地割の北辺部にあたる。しかも北3道路や西6道路が他の道路と平行しないなど、あきらかに変則的なあり方を示している（後藤ほか：1994）。南側については調査例が少なく不明な点が多いが、多賀前地区南部では南2東西道路以南に水田が営まれていたことが確認されている（菅原ほか：1996）。また、南北大路より東側については調査例が少なく不明な点が多いが、自然堤防上に立地する西側にくらべて地形的な制約を大きく受けている。

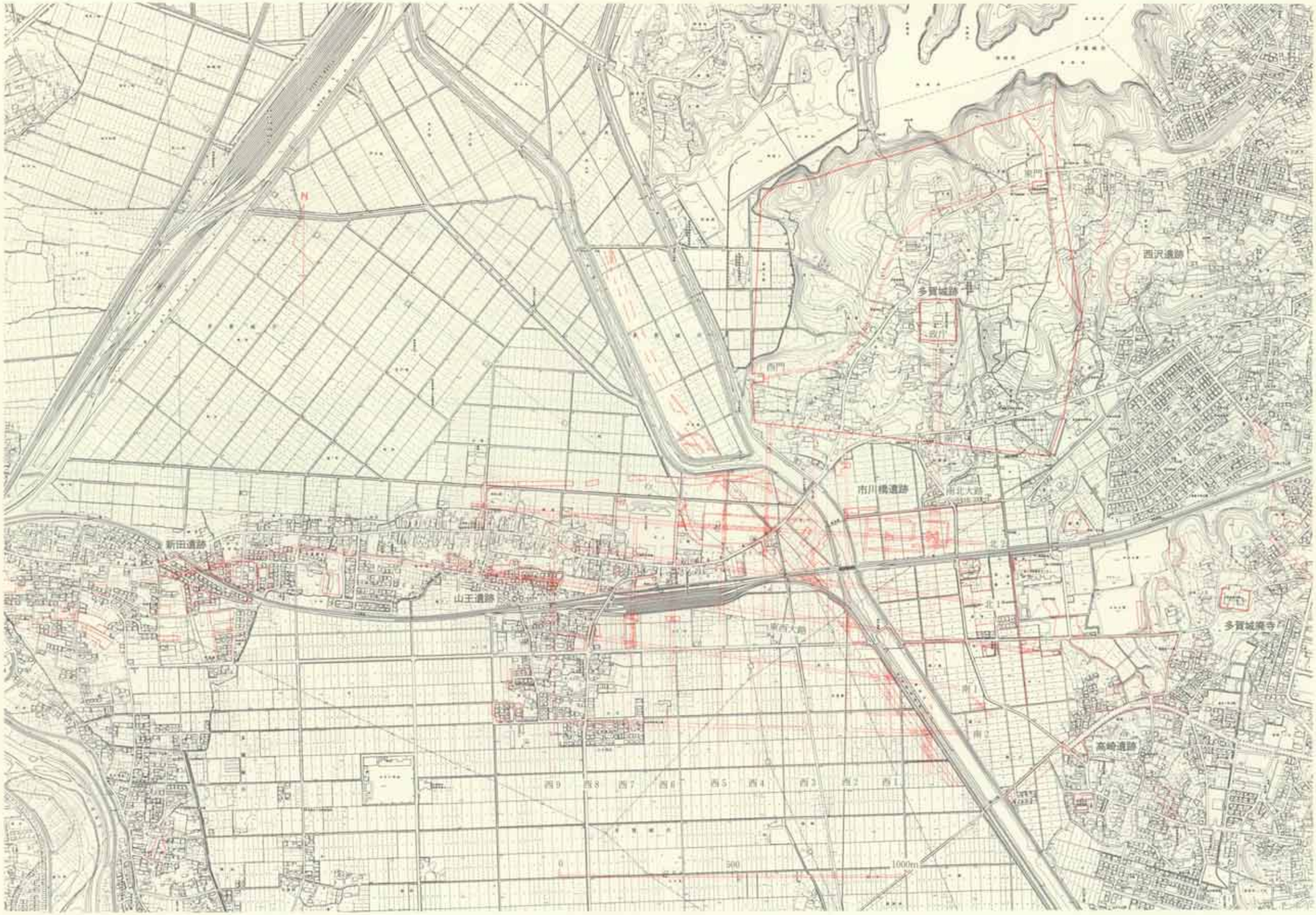
方格地割の内部は道路と方向をそろえた掘立柱建物跡や竪穴住居跡などが多数発見されている。住居の主体は掘立柱建物である。地割内部の使われ方は大路沿いの区域と大路から離れた区域で異なる。前者（多賀前・千刈田地区）は方1町相当の敷地全部を使い、廂付き大型建物を中心に付属建物、井戸などの各施設が配された上級官人の官舎街として利用されていた（註 4）。後者は敷地内部を道路や塀、区画溝で細分され、建物も小規模なものが主体となり、輸入陶磁器や施釉陶器といった奢侈品の出土が少ない。鍛冶工房や漆作業に使った遺物などから、多賀城に関わる作業やこれらを支えた階層の低い人々の生活の場であったと考えられている（菅原：1993など）。

これらの地割の整備は一律になされたものではなく、1）8世紀末頃の基幹道路（東西大路）の整備→2）9世紀初頭頃の東西大路を中心とした方格地割の形成→3）9世紀後半頃の方格地割の南北への拡大といった3段階の変遷をへて完成している。ただし、これらの基準となる方向は、場所や時期によって異なり、また間隔も110～140mとばらつきが認められる。方路地割の終末年代は10世紀後半代とみられ、ほぼ多賀城の終末年代と一致している（菅原ほか：前掲）。

つぎに方格地割外部の様子をみると、西9南北道路以西の東町浦地区・西町浦地区においても平安時代の遺構や遺物は発見されているが、遺構の密度は希薄である。このうち東町浦地区の土壙からは「万燈会」のような仏教行事に使用したとみられる土器が大量に出土している。また、東西大路の延長は新田遺跡北寿福寺地区においても方向を変更て確認されており、周囲でこの時期の遺構も確認されている（菅原：1994）。

南北大路の東側では、東西大路の延長線上で通路跡や北2東西道路跡は発見されているが、西側にくらべて地形的な制約を受ける部分が多く、遺構のあり方は散在的である。館前遺跡や市川橋遺跡大臣宮地区は低平な独立丘陵上に立地する。計画的に配置された大規模な建物跡が発見され、国司クラスの上級官人の館と推定されている（高倉：1980、高倉・千葉・福沢：1984）。市川橋遺跡水入・高平地区では小規模な掘立柱建物跡や竪穴住居跡が発見され、低湿な部分は水田として利用されている（高倉：前掲）。また水入地区においては、方格地割と方向の異なる道路跡も確認されており、八幡地区同様に方格地割縁辺部の道路のあり方を示している。

丘陵部についてみてみると、多賀城の東に接する西沢遺跡では、鍛冶作業に関係した竪穴住居跡が多く確認されている。また高崎遺跡弥勒地区でも丘陵斜面全体から竪穴住居跡が発見されており、な



第2図　多賀城南面の方格地割と周辺の遺跡

かには鍛冶や漆の工房もあることから多賀城廃寺に関わる集落と考えられる（千葉：1997）。さらに同遺跡井戸尻地区では山王遺跡東町浦地区と同様、仏教行事に使用したとみられる土器が大量に廃棄されていた（千葉ほか：1995）。

以上のように、本遺跡を含む多賀城周辺の自然堤防付近および丘陵上では、9 世紀前後を境にして、多賀城およびその関連施設に関わる人々が生活する、「地方都市」ともいうべき景観が展開した。こうした平安時代における多賀城周辺地域の整備は、多賀城内の画期とほぼ同時期におこなわれ、終末も同じ頃であり、多賀城と盛衰をともにしたと考えられている（菅原ほか：1996）。

ｅ．中世

中世の遺構としては、山王遺跡八幡・伏石地区や新田遺跡寿福寺地区で発見された、溝で区画された屋敷跡がある。とくに寿福寺地区では 12 世紀後半から 16 世紀までほぼ連続して屋敷が営まれており、広大な区画と出土した奢侈品から、上級武士の館と推定されている。このような屋敷跡は、本遺跡北方の内館跡や南方の大日南遺跡、仙台市洞の口遺跡でも見つかっており、自然堤防上を中心とする広い範囲で数多く、隣接して営まれたことがわかる。これらの屋敷跡は、中世に付近一帯が留守氏の支配する「高用名」および「南宮庄」に含まれる地域であったことから、留守氏に関連した武士層が居住していたと推定されている（千葉孝弥：1992）。

ｆ．近世

1590 年、留守氏は所替えによって去り、遺跡が存在する山王村・南宮村一帯はその後、伊達家の組頭成田氏の采邑となった。成田氏配下の足軽たちが構えた屋敷をはじめとして、塩竈街道沿いに住宅が建ち並び、現在のような町並みが形成されていったと考えられる。

西町浦地区では、このような街道沿いの屋敷地のひとつ、賀川家の宅地が調査されている。この家はかつて酒造業を営んだという記録があり、調査の結果出土した木簡からそれが裏付けられた。調査地点は屋敷の南端部に当たり、堀跡と井戸跡が発見された。堀跡は屋敷地の東辺・南辺を画するもので、木の枝や廃材でしがらみを組み護岸されていた。南辺の堀は東西にわかれ、両者は余水ばけとみられる木の樋で連結されていた。井戸跡は一基を除いて全て素掘りであった（高倉：前掲）。

このほか山王遺跡で発見された近世の遺構としては、八幡地区で発見された墓域がある。また本遺跡周辺の丘陵上には、多賀城跡作貫地区で発見された塩竈神社神官の屋敷跡、高崎丘陵上の留ケ谷遺跡や高崎遺跡で発見された屋敷跡などがある（桑原・高野・千葉：1993）。

註 1）山王遺跡周辺の地形的環境については、松本秀明氏が詳述している。本節の記述にあたっては、氏の以下の論考を参考にした。また、第 1 図は松本(1995)で使用した図「仙台平野北部の地形と山王遺跡」を転載したものである。

1981：「仙台平野の沖積層と後氷期こおける海岸線の変化」『地理学評論』54

1994：「仙台平野の成り立ち」『仙台市史』特別編－自然－

1995：「山王遺跡の位置と遺跡周辺の地形環境」『山王遺跡Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第 167 集

1997：「山王遺跡の地形学的背景」『山王遺跡Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第 171 集

註 2）この節を記述するにあたっては、主に以下を参考にした。

菅原弘樹（1993）：「多賀城周辺の様子」『日本歴史』第 544 号

菅原弘樹（1994）：「方格地割と遺跡の性格」『第 20 回古代城柵官衙遺跡検討会資料』
菅原弘樹ほか（1995）：「山王遺跡と周辺の遺跡」『山王遺跡Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第 167 集
高倉敏明（1991）：「山王遺跡」「市川橋遺跡」『多賀城市史』4　考古資料
千葉孝弥（1993）：「多賀城周辺の道路遺構」『古代交通研究』第 2 号
千葉孝弥（1994A）：「多賀城周辺遺跡の様相」『第 20 回古代城柵官衙遺跡検討会資料』
千葉孝弥（1994B）：「多賀城周辺の道路遺構」『季刊考古学』第 46 号
千葉孝弥（1995）：「多賀城城外の道路と方格地割り」『古代文化』第 47 巻第 4 号
千葉孝弥（1997）：「多賀城外の様子」『第 23 回古代城柵官衙遺跡検討会資料』
千葉・鈴木ほか（1997）：「遺跡の概要」『山王遺跡Ⅰ』多賀城市文化財調査報告書第 45 集

註 3)　現在のところ、山王遺跡周辺では古墳時代後期の前半、住社式期の様相は不明である。市川橋遺跡館前地区の調査で古墳時代中期から後期の河川跡を確認しているが、南小泉式期と粟囲式期の間には住杜式土器をはじめ、ほとんど遺物を含まない層が厚く堆積している。

註 4)　多賀前地区や千刈田地区の東西大路に面した区域は「国司館」と推定されている。それぞれの時期は多賀前地区南側の南 1 西 2 区は 9 世紀前葉から後半頃、同北側の北 1 西 3 区は 9 世紀後半から 10 世紀前半頃、千刈田地区の北 1 西 7 区は 10 世紀前半頃と考えられている。国司館は国司の交代にあたって他の場所に移ることもあったと考えられており、山王遺跡の場合も国司館が一定の場所に営まれたものではなく、東西大路沿いの区画を動いていたとみられる。また、東西大路沿いの区画がすべて上級官人の官舎として使われたわけではなく、地形的な条件が悪いところ（湿地など）は耕作域などに利用されていた。

B．調査の経過

今回の調査は、多賀城市の北側を東西に横断する県道泉塩釜線にバイパス的な機能をもたせた都市計画道路玉川・岩切線の建設にともなうものである。また多賀城市八幡地区には仙塩道路建設計画によって仮称「多賀城インター」が建設されることになり、玉川・岩切線は「多賀城インター」にアクセスさせることとなった。

都市計画道路にともなう発掘調査は、宮城県教育委員会が八幡地区北側を対象として平成 4・5 年におこなっている（後藤ほか：1994）。今回は前回の調査区の西側にあたる区域、南北 30m、東西約 550mが事前調査の対象となったが、計画が暫定 2 車線開通と変更されたことから調査対象面積はその半分の約 8250 ㎡となった。さらに道路は用地買収の関係で多賀城農協ライスセンターより西側はまだ建設の目途が立たないため、暫定的に現在の県道への迂回路も建設することとなり、今回はその地域約 1650 ㎡もあわせての調査となった。なお、この岩切・玉川線にともなう発掘調査は山王遺跡の東に位置する市川橋遺跡も対象となっており、本遺跡の調査と併行して調査をおこなうこととなった。

山王遺跡の発掘調査は、昭和 53 年から多賀城市教育委員会や宮城県教育委員会によって継続的に実施されており、その結果、本遺跡は弥生時代から近世にわたる重複した遺跡であり、なかでも古墳時代から平安時代にかけての遺構の密度が高く、とくに平安時代には多賀城を基準とした南北・東西道路による方格地割の存在があきらかになってきている。

発掘調査は以上の調査成果などを踏まえて平成 7・8 年に実施した。平成 7 年は平成 5 年におこなったIII区の西側からライスセンターに至る地域が対象となり、4 月 12 日から表土剥ぎを開始した。前回の調査成果から、八幡地区北側は平安時代の遺構が西へいくほど密度が希薄になる一方、古墳時代前期の遺構の存在が想定された。調査の結果、東側のⅤ区・VI区では古墳時代前期の溝跡や河川跡、平安時代以降の土壙・溝跡・小溝状遺構を検出した。後者の遺構密度が希薄なのはⅠ区から続く微高

地が西へ向かってゆるやかに傾斜するためで、Ⅵ区西端からは湿地となっている。なお、平成５年の調査で弥生時代中期の包含層を確認しており、今回はその有無を確認するために数カ所の掘り下げをおこなったが遺構・遺物は検出されなかった。

湿地はⅧ区西端まで続くがその西は再び高くなり、Ⅸ区やＸ区では奈良・平安時代の土壙や溝跡、小溝状遺構を検出した。さらに標高が高くなるⅪ区では掘立柱建物跡や堆積土に灰白色火山灰を含む東西溝跡、土掘、小溝状遺構を検出した。また、Ｘ区の東側では古墳時代前期に北へ延びるやせ尾根状の微高地を確認している。微高地からは方形周溝墓・竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土壙・溝跡・小溝状遺構を、その西側では水田を検出した。なお、Ｖ区からＸ区東側にかけては平安時代の西 6～9 南北道路跡の存在が想定される地域である。当時湿地であった部分は道路跡の想定位置を中心に調査区を設定した（Ⅶ・Ⅷ区）が、いずれの調査区でも道路跡は確認できなかった。

これら検出遺構については、国家座標Ｘ＝－188,880.000、Ｙ＝13,230.000 を原点とした 3×3mのグリットを設定し 1/20 平面図・断面図を作成、35 ㎜および 6×7 カメラによる写真撮影による記録を残し 12 月 12 日に終了した。

平成 8 年は、Ⅺ区の南側から現在の多賀城農協南宮支所の東側に水路をはさんでⅪ区、Ⅻ区を設定し、4 月 8 日から表土剥ぎをおこなった。調査区が現道部分にあたり迂回路を確保せざるを得ないため、東側から調査をおこない、その終了後東側を埋戻して西側を調査した。調査地は前年にⅫ区東隣接地を多賀城市教育委員会が発掘しており、その成果から古墳時代中期・奈良・平安時代、江戸時代の遺構の存在が予想された。

調査の結果、Ⅻ区では古墳時代中期の竪穴住居跡や土壙・溝跡、奈良・平安時代の東西道路跡・区画溝跡・掘立柱建物跡・土壙・溝跡・小溝状遺構、江戸時代以降の区画溝跡・掘立柱建物跡・井戸跡・池跡・溝跡・土壙などを多数検出した。なかでも東西道路跡は西 9 南北道路鋤から西の地域で初めて確認された。位置や方向、規模からみて北 2 道路跡と考えられ、この発見は方格地割の範囲を考える上で、重要な発見となった。また、Ⅺ区では堆積土に灰白色火山灰を含む東西・南北方向の区画溝を検出し、建物はそれらに方向や位置が規制されていることがわかった。

これら検出遺構については前年同様平面図や断面図を作成し、必要に応じて写真撮影をおこなった。発掘調査の一切が終了したのは 12 月 4 日である。

第Ⅱ章　基本層序

基本層序は調査範囲が東西 550m、南北 175mにわたり、各地点で地形および土層の堆積状況が異なるため一括して示すことはできない。そこで、各地点の堆積状況を柱状図にして模式的に示した。

各地点の土層は大別すると 8 層に分けられる。以下、各層の特徴を記す（第 3 図）。

第 1 層

表土である。地点によって近現代の盛土（1ａ）や水田耕作土（1ｂ・ｃ）などがあり、厚さも 0.1～1.5mと幅がある。地表の標高はXII区で 6.0m、水田耕作面の標高はＶ区で 3.7m、XI区北側で 4.5mである。また、1ｂ・ｃ層との新旧関係は不明だが、XI区の南からXII区では黒褐色（10ＹR3/2～2/3）シルト（1ｅ）、褐灰色（10ＹR5/1）粘土質シルト（1ｆ）、黒褐色（10ＹR3/1）粘土質シルト（1ｇ）などの堆積層を確認している。厚さは 5～20cmで、江戸時代の遺構を覆っている。

第 2 層

XI区やXII区に部分的に残存していた 2ａ層は、江戸時代以前の旧表土である。黒褐色（10ＹR3/2）や黒色（2.5Y2/1）のシルト質粘土で、平安時代の遺構を覆っている。厚さは最大で約 20cm、上面の標高は 4.4～4.9mである。

また 2ａ層との新旧関係は不明だが、VII・VIII区では水田耕作土（2ｂ）を確認している。暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）ないし黒褐色（10ＹR3/1）の粘土質シルトで、10 世紀前葉に降下した灰白色火山灰を巻き込んでいる。厚さは 10 ㎝前後、上面の標高は 3.3～3.5mである。

第 3 層

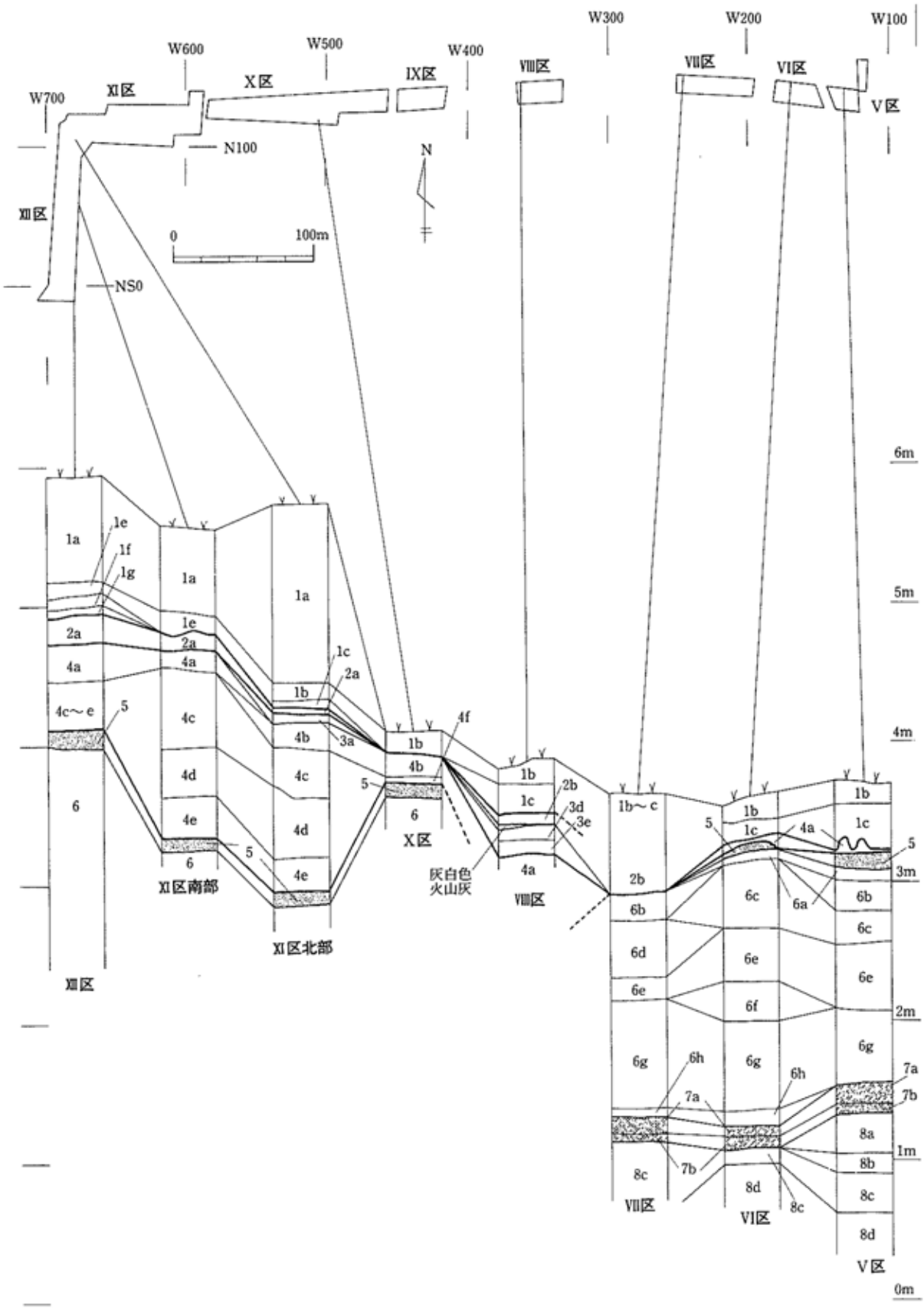
XI区の北部にのみ残存していた 3ａ・ｂ・ｃ層は、平安時代以前の旧表土である。3ａ層は褐灰色（10ＹR4/1）粘土、3ｂ層は浅黄色（2.5Y7/3）粘土、3ｃ層は黒色（2.5Y2/1）粘土で、厚さは 10 ㎝前後である。3ａ層上面の標高は 4.3～4.4mである。

また 3 日・b・ｃ層との新旧関係は不明だが、VIII区では 3ｄ・ｅ層を確認している。3ｄ層は黒褐色（2.5Y3/1）、3ｅ層は黒色（10ＹR2/1）の粘土質シルトで、厚さは 10 ㎝前後である。3ｄ層の上面には、部分的に灰白色火山灰が堆積している。3ｄ層上面の標高は 3.4mである。

第 4 層

XII区を除く各区で確認した古墳時代中期以前の地山である。厚さはXI区が最も厚く、1.3m前後ある。八幡地区の調査（後藤ほか：1994）の第 3 層に対応する。土質や、Ｘ区の第 5 層を掘込む遺構の残存状況から洪水などといった、下層に対するなんらかの削平をともなって堆積したものと考えられる。上面の標高はＶ区で 3.3m、XI区北部で 4.3m、XI区南側からXII区で 4.7mである。

XI区やXII区ではａ～ｅの 5 層に細分される。4ａ層は灰黄～にぶい黄色（2.5Y6/1～3）のシルトないし砂質シルトで、北側ほど砂を多く含む。厚さは最大で 25 ㎝である。4ｂ層はＸ区とXI区北側でみられ、土色はにぶい黄色（2.5Y6/3）～灰褐黄色（2.5Y4/2）、土質は粘土質シルトないし粘土で、厚さは 10～25cmある。4ｃ・ｄ・ｅ層は、それぞれ灰オリーブ色（5Y6/2）細砂・オリーブ黄色（5Y6/3）シルト・黄褐色（2.5Y5/3）粘土を主体とする水性堆積層である。厚さはそれぞれ 30～60 ㎝・40～50 ㎝・25～35㎝


W700
W600
W500
W400
W300
W200
W100
XI区
X区
IX区
VIII区
VII区
VI区
V区
XII区
N100
N
0
100m
NS0
6m
5m
4m
3m
2m
1m
0m
1a
1e
1f
1g
2a
4a
4c～e
5
6
4c
4d
4e
1b
1c
4b
3a
4f
2b
3d
3e
1b～c
6b
6c
6d
6e
6f
6g
6h
7a
7b
8a
8b
8c
8d
XI区南部
XI区北部
X区
灰白色
火山灰
VIII区
VII区
VI区
V区
XII区

第3図　基本層序

ある。なお4ｃ～ｅ層との新旧関係は不明だが、Ｘ区で黒褐色（10ＹＲ3/1）シルト質粘土（4f 層）を確認している。炭化物を含む黒褐色（10ＹＲ2/2）砂となる部分もあり、厚さは5㎝前後である。

第5層

Ⅶ区・Ⅷ区をのぞく各区で確認した、古墳時代前期の遺物を含む層である。厚さは 10 ㎝前後で、八幡地区の調査（後藤ほか：1994）の第4層に対応する。Ⅴ・Ⅵ区では黒褐色（2.5Ｙ3/2）～黒色（2.5Ｙ2/1）のシルトで、塩釜式期の土師器片が少量出土している。Ⅲ区から連続しており、上面の標高は3.3～3.4mである。

Ｘ区中央から東側は、自然堤防がやせ尾根状に北へ張出しており、その部分（標高：3.8m）から古墳時代前期の遺構が多く発見されている。土色はオリーブ褐色（2.5Ｙ4/3）～黒褐色（10ＹＲ3/1）、土質はシルトないし細砂である。塩釜式期の土師器小壺（第114図7・8）・壺（第114図6）・甑（第114図5）・高坏・甕・坏・台付甕・器台などが出土している。微高地の東は湿地、西はⅪ区の東側にかけて水田となり、その西は湿地となる。水田の標高は3.1～3.5mである。

Ⅺ区からⅫ区では、自然堤防の中心に近い南にむかって高くなるが、遺構や遺物は発見されていない。Ⅺ区では黒褐色（2.5Ｙ3/1）、Ⅻ区では褐灰色（10ＹＲ4/1）の粘土である。標高はⅪ区北部で3.0m、Ⅻ区南側で4.1mである。

第6層

Ⅷ区をのぞく各区で確認した、古墳時代前期以前の地山である。八幡地区の調査（後藤ほか：1994）の第5層に対応する。厚さは1.5～2mで、遺物は出土していない。上面の標高はⅤ～Ⅶ区で2.9～3.1m、Ｘ区中央付近で3.6m、Ⅺ区北側で2.9m、Ⅻ区南側で4.0mである。

Ⅴ～Ⅶ区では6ａ～ｈの9層に細分される。6ａ層は黄褐色（2.5Ｙ4/3）シルトである。6ｂ・ｃ・ｄ・ｅ・ｆ・ｇ層は、それぞれ灰褐黄色（2.5Ｙ4/2）シルト・オリーブ褐色（2.5Ｙ4/3）砂・オリーブ黒色（5Ｙ3/1）粘土・暗緑灰色（10ＧＹ4/1）粗砂・オリーブ黒色（7.5Ｙ2/2）シルト・灰褐黄色（2.5Ｙ4/2）粘土質シルトを主体とする。6ｈ層はオリーブ黒色（7.5Ｙ3/2）粘土質シルトであり、6ｂ層以下はグライ化が著しい。

第7層

八幡地区の調査（後藤ほか：1994）で枡形囲式期の弥生土器が出土した第6層と対応する。図中には示していないが、その広がりはW594付近まで続いている。

ａ・ｂの2層に細分され、それぞれ八幡地区の6ａ・6ｂ層に対応する。7ａ層は黒色（10Ｙ2/1）粘土で、厚さは10㎝ある。7ｂ層は暗緑灰色（5G3/1グライ）砂とａの黒色粘土が混ざり、厚さは5～10cmある。7ａ層の上面の標高は1.2～1.5mである。遺物は出土していない。

第8層

第7層以下を一括して第8層とした。上面の標高は1.0～1.3mで、各層ともグライ化が著しい。Ⅴ区ではａ～ｄの4層に細分される。8ａ層は緑灰色（10ＧＹ5/1）粗砂である。8ｂ層はグライ化した砂で、八幡地区の第 8 層に対応する。8ｃ層は灰色（10Ｙ4/1）粘土質シルトを主体とする水性堆積、8ｄ層はオリーブ黒色（7.5Ｙ3/1）粘土質シルトである。

第Ⅲ章　発見された遺構と遺物

今回の調査で発見した遺構は竪穴住居跡 8、掘立柱建物跡 68、掘立柱列跡 2、東西道路跡 1、区画溝跡 9、井戸跡 18、池跡 1、溝跡 41、土壙 48、方形周溝墓 2、水田跡 1、小溝状遺構群 15 などがある。出土遺物には土師器・須恵器・陶器・磁器・石製品・金属製品・木製品・物遺体があり、総量はテンバコで 140 箱になる。これらを時期別にみると古墳時代前期、古墳時代中期、奈良・平安時代、江戸時代以降に大別できる。調査区は東西 570m、南北 180mにわたり、東からⅤ～XII区と名付けた。以下、遺構の概要については遺物を出土したものを中心に記述し、その順序は遺構の密度が濃いXII区から東へおこなうこととする。

Ａ．ＸⅡ区

本調査区で発見した遺構は竪穴住居跡 6、区画溝跡 4、掘立柱建物跡 36、土壙 25、溝跡 17、井戸跡 14 などがあり、検出面は第 4 層である。出土遺物には土師器・須恵器・陶器・磁器・石製品・木製品・植物遺体などがある。これらの遺構の時期は重複関係や堆積土の特徴、出土遺物からみて古墳時代中期、奈良・平安時代、江戸時代以降の 3 つに大別できる。以下、大別時期にしたがって記述する。

1．古墳時代中期

古墳時代中期の遺構は竪穴住溝跡 6、土壙 7、溝跡 2 などがある。遺構の密度は薄いが調査区全体に分布している（第 4 図）。出土遺物には土師器・須恵器・石製品・植物遺体がある。同時期の遺構は、ほかにXI区南端で検出したＳＩ3525 住居跡があるが、その記述もここでおこなうことにする。

（1）竪穴住居跡

ＳＩ1983 住居跡（第 5 図）

調査区南側で検出した竪穴住居跡で、西壁部は削平をうけて残っていない。ＳＩ2988 住居跡、ＳＢ3400・3403・3443 建物跡、ＳD2965 溝跡、ＳＸ2923 より古い。平面形は南北が 5.6m、東西が 5.2m 以上の方形をなし、方向は東壁で測るとN4°Ｅである。

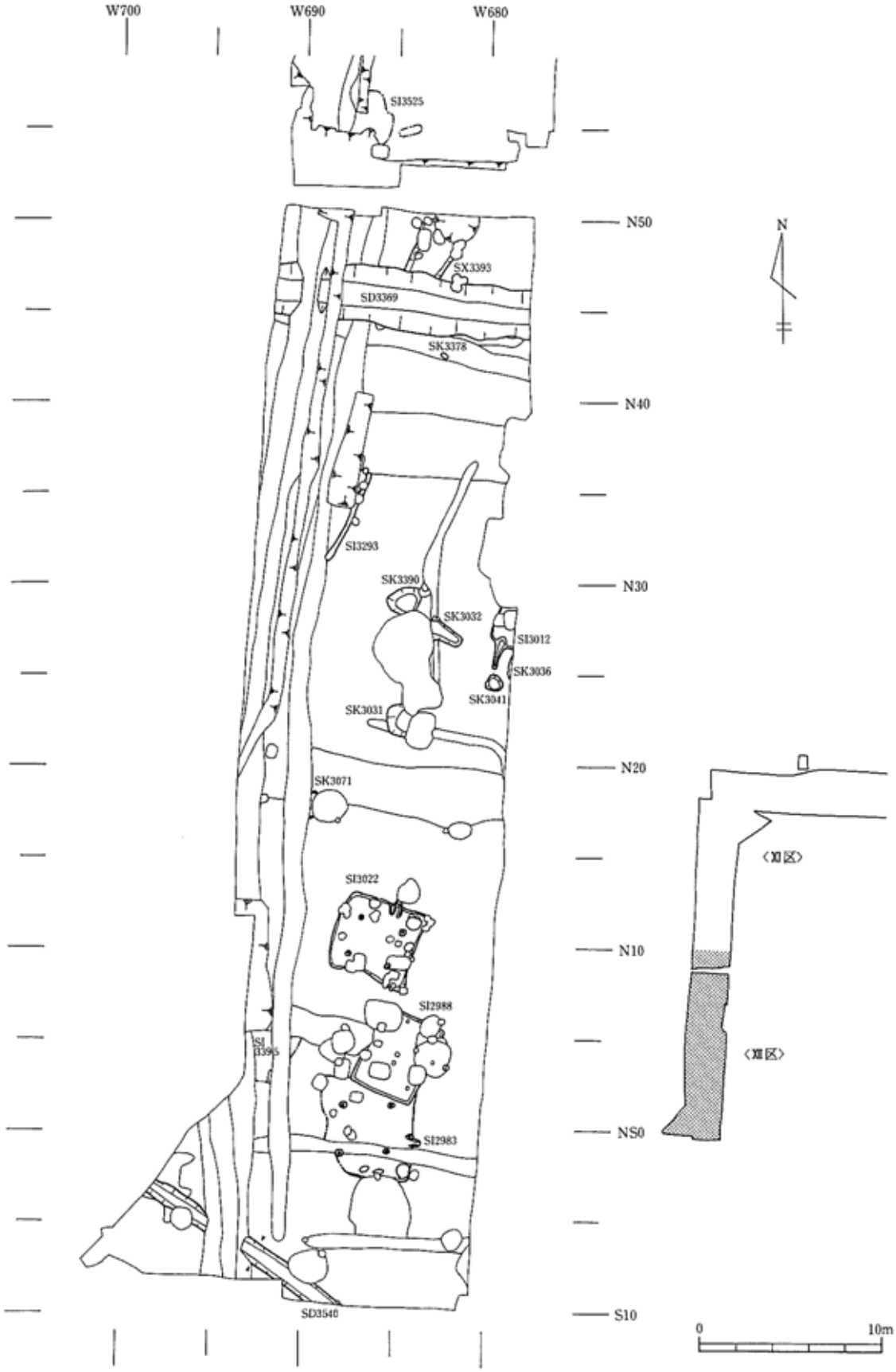
〔堆積土〕住居内の堆積土は 2 層、カマド内の堆積土は 3 層に分けられる。5 層は焼土ブロックを含む炭化物層で焼けた骨片を多く含んでおり、カマド機能時の堆積土と考えられる。1 層は焼土や炭化物を多く含む黄褐色シルトで床面を直接覆っており、本住居は廃絶後埋め戻されたと考えられる。

〔壁〕地山の黄褐色シルトを壁としている。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは北壁で 15cmある。

〔床面〕ほぼ平坦で、掘方埋土の地山ブロックや炭化物を多量に含む褐灰色シルトを床としている。カマドの左に 40 ㎝×60 ㎝の焼面が認められ、南側の中央部では 70 ㎝×140 ㎝の範囲に炭化物が分布する。

〔柱穴〕主柱穴は対角線上の 4 箇所で検出している（P1～P4）。掘方は径 40 ㎝ほどの歪んだ円形をなし、深さは 50～60 ㎝である。すべての柱穴で柱痕跡を確認しており、径は 14 ㎝ある。

〔カマド〕東壁の南よりに付設されている。煙道部の先端は削平のため失われている。側壁は地山の粘土で構築されており、規模は前端幅 50 ㎝以上、奥行 100 ㎝以上である。燃焼部底面は浅く凹む。また、

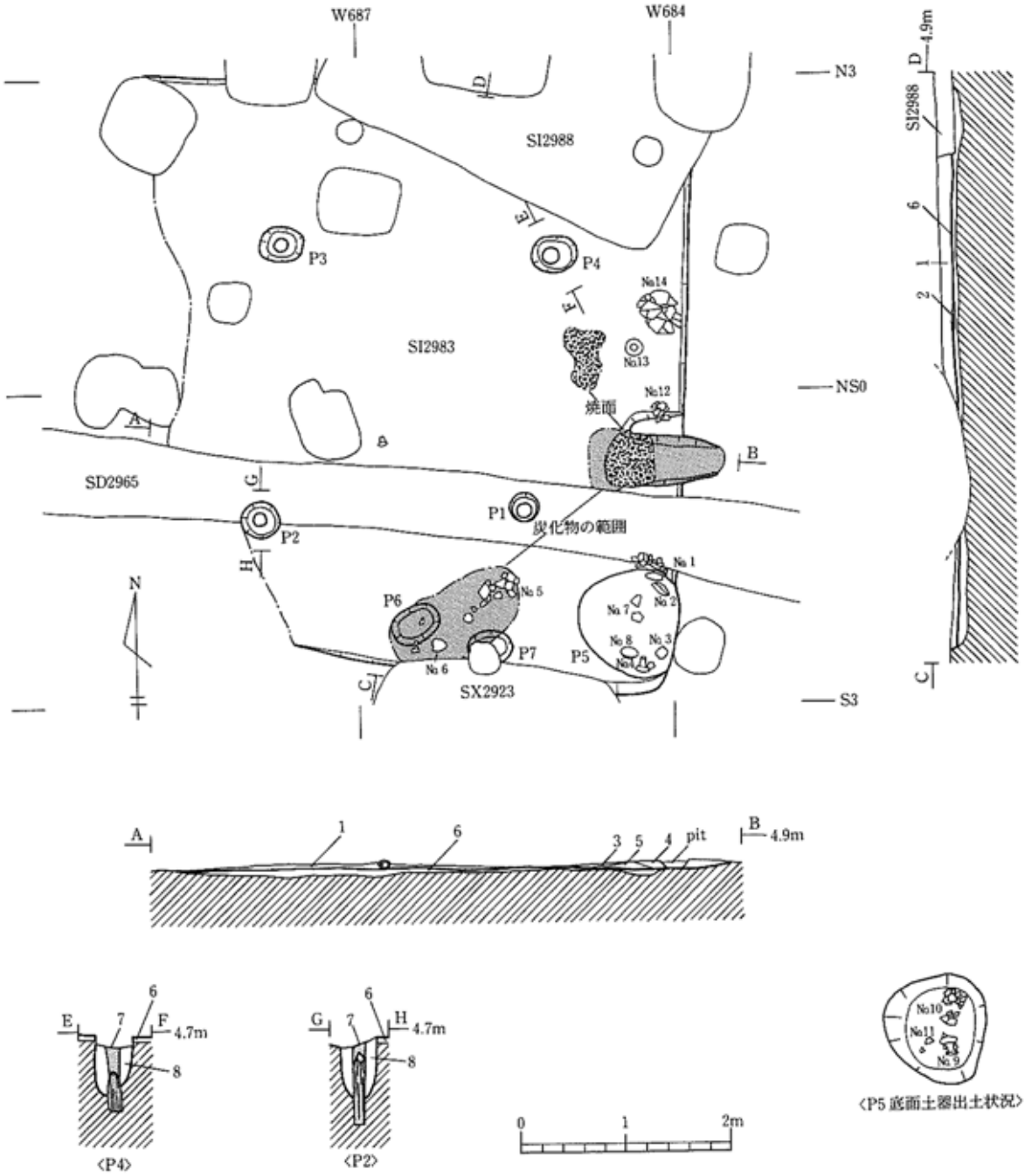


第４図　Ⅺ・Ⅻ区の検出遺構〔古墳時代中期〕

煙道部底面にかけては連続しており、特に区画はない。

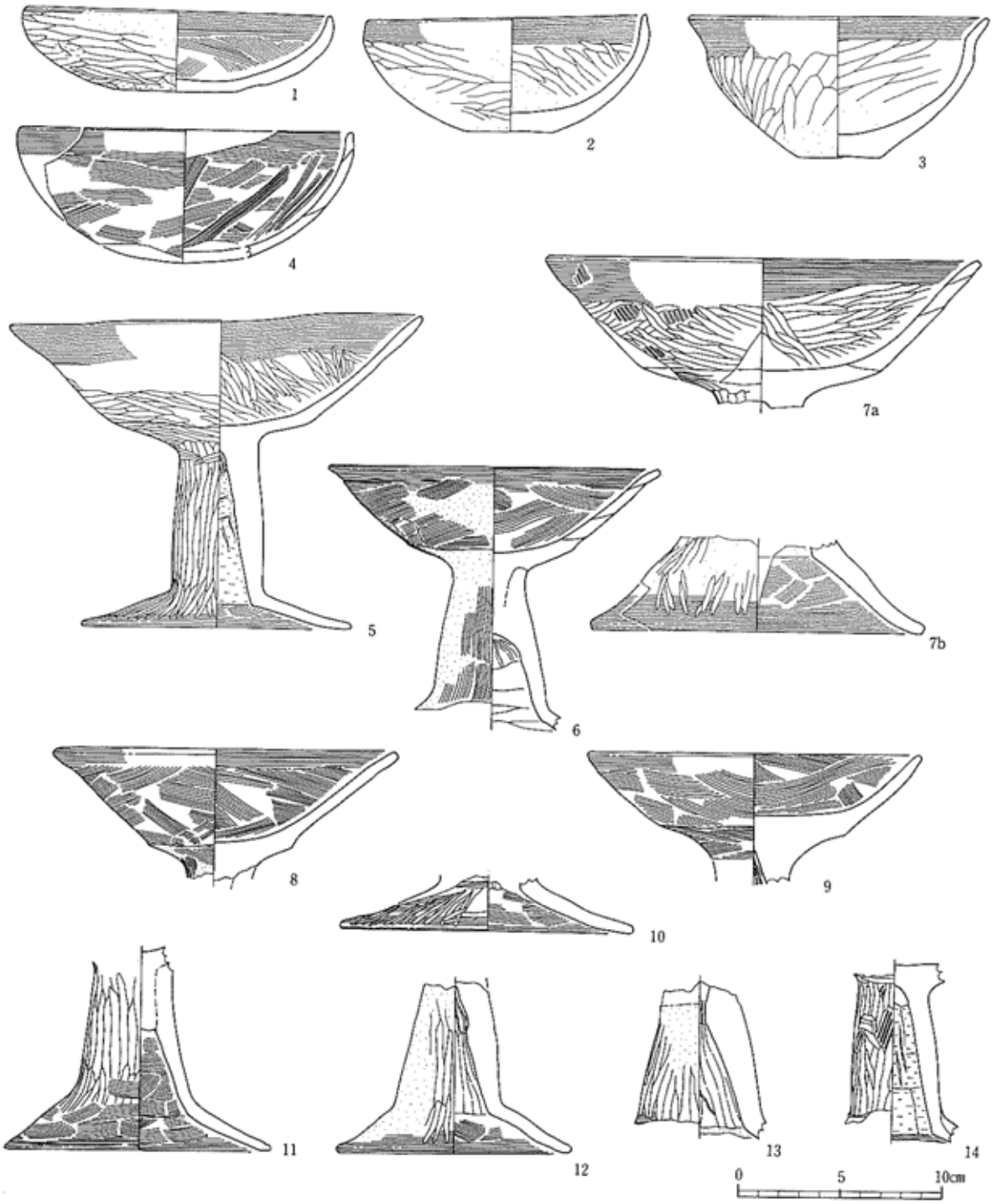
〔貯蔵穴状ピット〕南東隅の床面で検出した（P5）。径100㎝ほどの歪んだ円形で、深さは30㎝である。堆積土は2層に大別できる。下層は5㎝ほどの厚さで焼土・炭化物層と炭化物を含む褐灰色粘土層からなる。上層は地山主体土で、人為的な埋土である。

〔その他のピット〕南壁中央付近の焼土・炭化物層の下から2個検出している（P6、P7）。平面形



層No	土色・土性	混入物など	備考
1	明黄褐色(10YR7/6)シルト	炭化物・焼土を多く含む	人為堆積
2	褐灰色(10YR5/1)粘土質シルト		生活層
3	明黄褐色(10YR7/6)シルト	焼土・炭化物を含む	カマド内堆積土
4	暗褐色(10YR3/3)シルト	地山ブロック・焼土・炭化物を多く含む	
5	灰＋焼土ブロック層		カマド機能時の堆積土
6	明黄褐色(10YR7/6)シルト	炭化物を多く含む。褐灰色シルトを含む	住居掘方埋土
7	褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト		柱痕跡
8	浅黄色(2.5Y7/4)シルト	黒褐色シルトを少し含む	柱穴掘方埋土

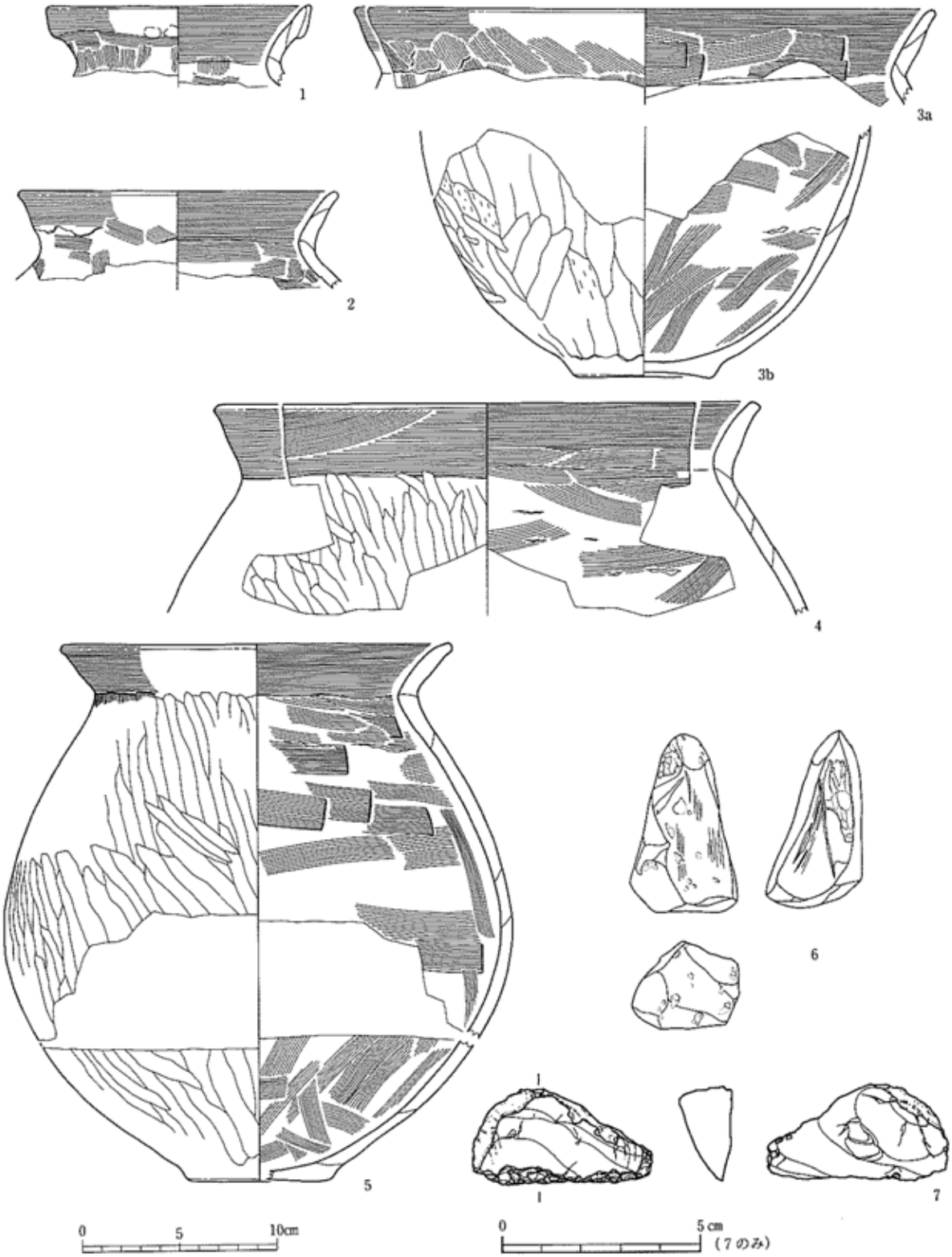
第5図　SI2983住居跡



（単位：cm）

No	種別	層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	分類	写真図版
1	土師器・坏	堆積土	赤彩（両面）　外面：〔口〕ヨコナデ〔体〕ヘラケズリ→粗いミガキ〔底〕ヘラケズリ　内面：〔口〕ヨコナデ〔体～底〕ナデ	(15.4)	(6.0)	4.0	2/3	A 2 a	29－2
2	土師器・坏	床面（No 6）	外面：〔口〕ヨコナデ〔体〕粗いミガキ　内面：〔口〕ヨコナデ〔体～底〕粗いミガキ	13.8	4.2	5.7	3/4	A 2 a	29－3
3	土師器・坏	床面（No 3）	赤彩（両面）　外面：〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ　内面：〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	14.7	4.1	7.0	4/5	D 2	29－4
4	土師器・坏	堆積土	赤彩（両面）　外面：〔口〕ヨコナデ〔体～底〕ナデ　内面：〔口〕ヨコナデ〔体～底〕ナデ	(16.3)	－	(6.6)	1/4	A 2 a	
5	土師器・高坏	P5底面（No9）	外面：〔坏〕ヨコナデ、ヘラミガキ〔脚〕ヨコナデ→ヘラミガキ　内面：〔坏〕ヨコナデ→ヘラミガキ〔脚〕シボリ目→ヘラケズリ、ヨコナデ→ナデ	20.2	13.2	(15.2)	9/10	A 2 b	29－6
6	土師器・高坏	床面（No7+No8）	赤彩（坏部両面、脚部外面）　外面：〔坏〕ヨコナデ→ナデ〔脚〕ナデ　内面：〔坏〕ヨコナデ→ナデ〔脚〕ナデツケ、ナデ	16.2	－	－	2/3	A 2 a	29-5, 30-4・5
7	土師器・高坏	P5底面（No10）	外面：〔坏〕ハケメ→ヨコナデ、ヘラミガキ〔脚〕ヘラミガキ、ヨコナデ　内面：〔坏〕ヨコナデ→ヘラミガキ〔脚〕ヨコナデ→ナデ	(21.4)	(16.4)	－	1/2	A 2 b	29－8
8	土師器・高坏	床面（No13）	赤彩（坏部両面）　外面：〔坏〕ヨコナデ、ナデ　内面：〔坏〕ヨコナデ→ナデ	17.0	－	－	1/2	A	30－1
9	土師器・高坏	床面（No 2）	赤彩（坏部両面）　外面：〔坏〕ヨコナデ→ナデ　内面：〔坏〕ナデ	16.4	－	－	1/2	A	30－2
10	土師器・高坏	P5底面（No11）	赤彩（脚部外面）　外面：〔脚〕ヨコナデ、ナデ→ヘラミガキ　内面：〔脚〕ヨコナデ→ナデ、ナデツケ？	－	(14.4)	－	一部	2	
11	土師器・高坏	床面（No4）	赤彩（坏部内面、脚部外面）　外面：〔脚〕ヘラミガキ、ヨコナデ→ナデ　内面：〔坏〕ナデ〔脚〕ヨコナデ→ナデ	－	13.1	－	1/2	2 a	29－7
12	土師器・高坏	堆積土	外面：〔脚〕ヘラミガキ、ヨコナデ　内面：〔脚〕シボリ目、ナデツケ、ヨコナデ→ナデ	－	(11.6)	－	1/4	2 b	30－3
13	土師器・高坏	掘方埋土	外面：〔脚〕ハケメ→ヘラミガキ　内面：〔坏〕ヘラミガキ〔脚〕シボリ目→ヘラケズリ、ヨコナデ	－	－	－	一部	2 b	
14	土師器・高坏	床面（No15）	外面：〔脚〕ヘラミガキ、ヨコナデ　内面：〔脚〕シボリ目？、ナデツケ、ナデ？	－	－	－	一部	2 a	

第６図　SI2983 住居跡出土遺物（１）



（単位：cm）

No.	種別	層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	分類	写真図版
1	土師器・壺	堆積土	外面：〔口〕指オサエ→ヨコナデ→ナデ　内面：〔口〕ヨコナデ→ナデ	(13.2)	－	－	一部	A	
2	土師器・壺	床面（No.5）	外面：〔口〕ヨコナデ、ナデ　内面：〔口〕ヨコナデ、ナデ	(16.4)	－	－	一部	B 2	
3	土師器・壺	床面（No.5）	外面：〔口〕ヨコナデ→ナデ　〔体〕ヘラケズリ→ナデ　内面：〔口〕ヨコナデ、ナデ　〔体～底〕ナデ	(29.5)	7.0	－	一部	A	
4	土師器・壺	P5底面(No.10)	外面：〔口～体〕ヨコナデ→ヘラミガキ　内面：〔口～体〕ヨコナデ、ナデ	(27.5)	－	－	1/4	A	
5	土師器・壺	床面（No.1）	外面：〔口〕ヨコナデ〔体～底〕ナデ　内面：〔口〕ヨコナデ〔体～底〕ヘラナデ	(19.8)	7.4	27.5	1/3	B 1	
6	礫　石	堆積土	長9.2　幅5.5　厚4.5						
7	スクレイパー	P 5底面	黒曜石製　長2.4　幅4.5　厚1.3　腹面刃縁に沿って顕著な磨耗痕　黒曜石は縞模様入る						34－11

第７図　SI2983 住居跡出土遺物（２）

は楕円形で、規模はP6が30㎝×50㎝で深さ10㎝、P7が30㎝×40㎝で深さ20cmである。堆積土は焼土や炭化物を多く含む黒褐色シルトである。

〔遺物の出土状況〕床面と貯蔵穴（P5）の底面やその埋土上面から土師器や石製品がまとまって出土している（第5～7図）。さらに住居内やカマドの堆積土、掘方埋土からも土師器や石製品が出土している（第6・7図）。

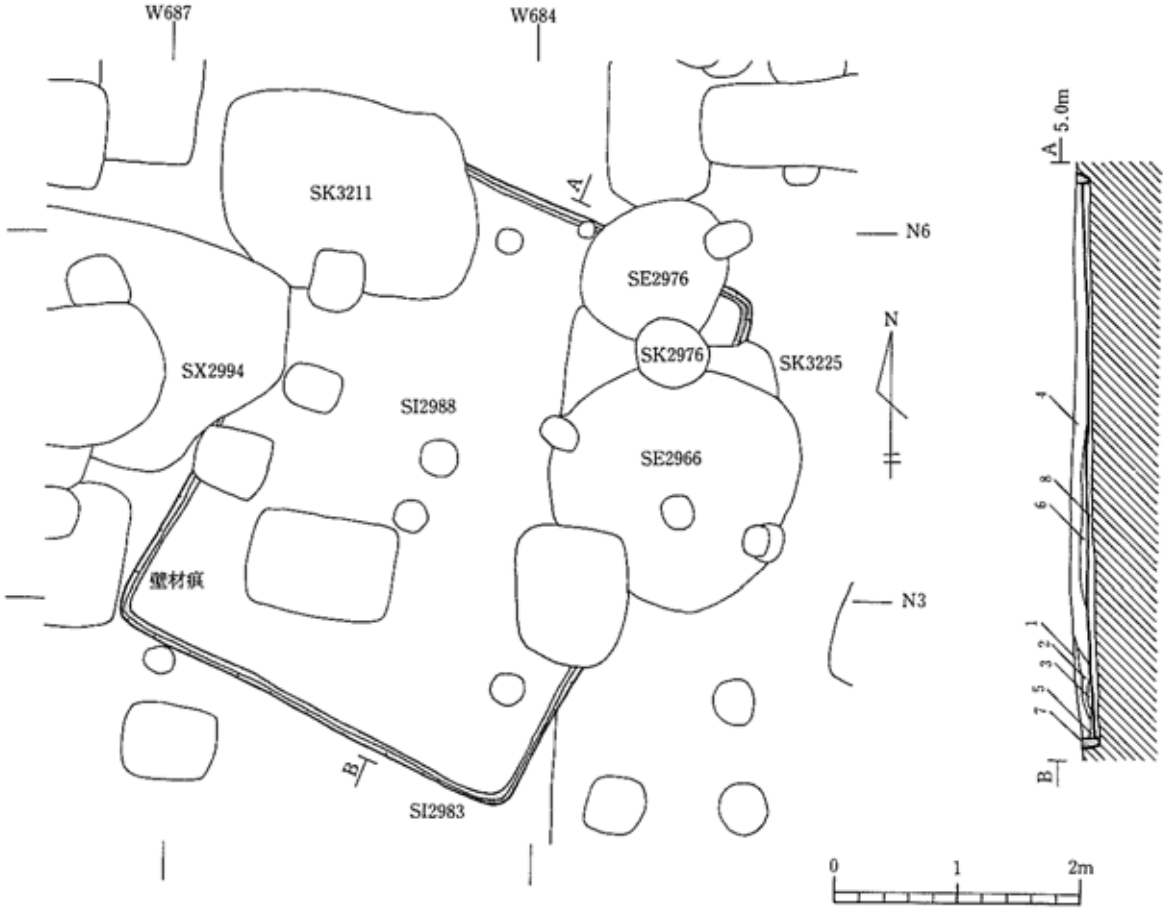
ＳＩ2988住居跡（第8図）

調査区南側で検出した竪穴住居跡である。ＳＩ2983住居跡より新しく、ＳＢ3400・3403・3443・3444建物跡、ＳＥ2966・2976井戸跡、ＳＫ3211・3225土壙、ＳＸ2994より古い。平面形は東壁で4.6m、南壁で3.6mの長方形をなし、方向は東壁で測るとN25°Ｅである。

〔堆積土〕住居内の堆積土は6層に分けられたが、2層に大別が可能である。下層（5・6層）は床面上で部分的に認められる。焼土や炭化物からなる生活層である。上層（1～4層）は炭化物を含む黄褐色シルトである。

〔壁〕地山の黄褐色シルトを壁としている。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは北壁で15㎝ある。

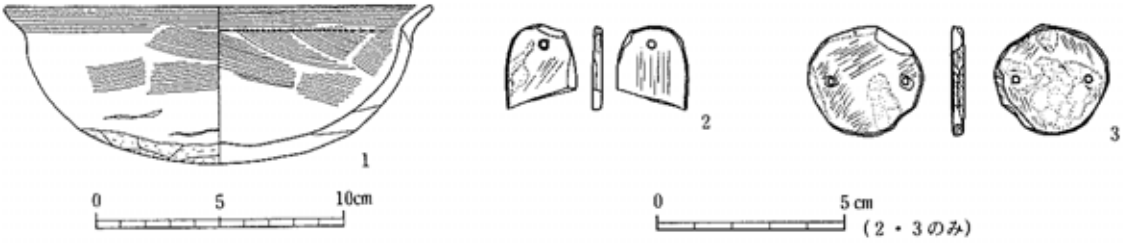
〔床面〕ほぼ平坦で、掘方埋土の地山ブロックや炭化物を含む黒褐色シルトを床としている。



層No	土色・土性	混入物など	備考
1	明黄褐色(10YR7/6)シルト	褐灰色粘土・炭化物を含む	堆積土上層
2	明黄褐色(10YR7/6)シルト		
3	明黄褐色(10YR7/6)シルト	褐灰色粘土・炭化物を含む	
4	明黄褐色(10YR7/6)シルト	黄灰色粘土・炭化物をブロック状に含む	

層No	土色・土性	混入物など	備考
5	褐灰色(10YR5/1)粘土	炭化物を多量に含む	堆積土下層
6	明黄褐色(10YR7/6)シルト	焼土・炭化物ブロックを多量に含む	
7	焼土＋炭化物ブロック層		壁材痕
8	明黄褐色(10YR7/6)シルト	黒褐色シルト・炭化物を含む	住居掘方埋土

第8図　SI2988住居跡



（単位：cm）

No	種別	層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	分類	写真図版
1	土師器・坏	床面	赤彩（両面）　外面：〔口～体〕ヨコナデ→ナデ〔底〕ヘラケズリ　内面：〔口～体〕ヨコナデ→ナデ〔底〕ナデ	(17.3)	－	6.4	1/3	D1a	32－6
2	石製模造品	堆積土	剣形　破損品　長(2.3)　幅1.9　厚0.3						34－3
3	石製模造品	堆積土	有孔円板　ほぼ完形　2孔　径3.0前後　厚0.3						34－1

第９図　SI2988 住居跡出土遺物

〔壁材〕壁の直下には幅７㎝、深さ６～８㎝の壁材の痕跡が認められる。

〔遺物の出土状況〕床面、堆積土、掘方埋土から土師器が若干と石製模造品が出土している（第９図）。

ＳＩ3395 住居跡(第４図)

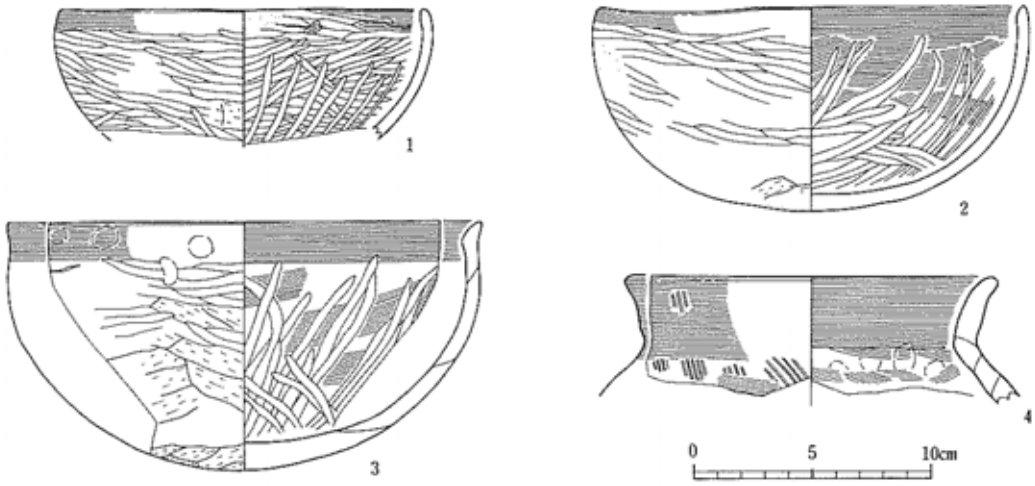
調査区南側で検出した竪穴住居跡で、完全に削平されており、掘方埋土のみ残る。ＳＢ3403 建物跡、ＳＤ3009Ａ・Ｂ・3396Ａ・Ｂ溝跡より古い。平面形は方形とみられ、南北 2.8m以上、東西 2.7m以上ある。方向は南辺で測るとＥ7°Ｓである。掘方埋土は地山ブロックを多量に含む黒褐色シルトである。

〔遺物の出土状況〕掘方底面から土師器がまとまって出土している（第 10 図）。

ＳＩ3022 住居跡（第 11 図）

調査区南側で検出した竪穴住居銑である。ＳＢ3400・3403・3448・3450 建物跡、ＳＥ2949 井戸跡より古い。平面形は北壁で 4.0m、西壁で 4.3mの方形をなし、方向は北壁で測るとＥ19°Ｓである。

〔堆積土〕住居内の堆積土は６層、カマド内の堆積土は４層に分けられる。このうち床面を直接覆う５層は焼土や炭化材を多量に含む炭化物層で１～４層は炭化物を多く含む褐灰色や浅黄色シルトである。このことから本住居は焼失住居であり、その後埋め戻されたと考えられる。

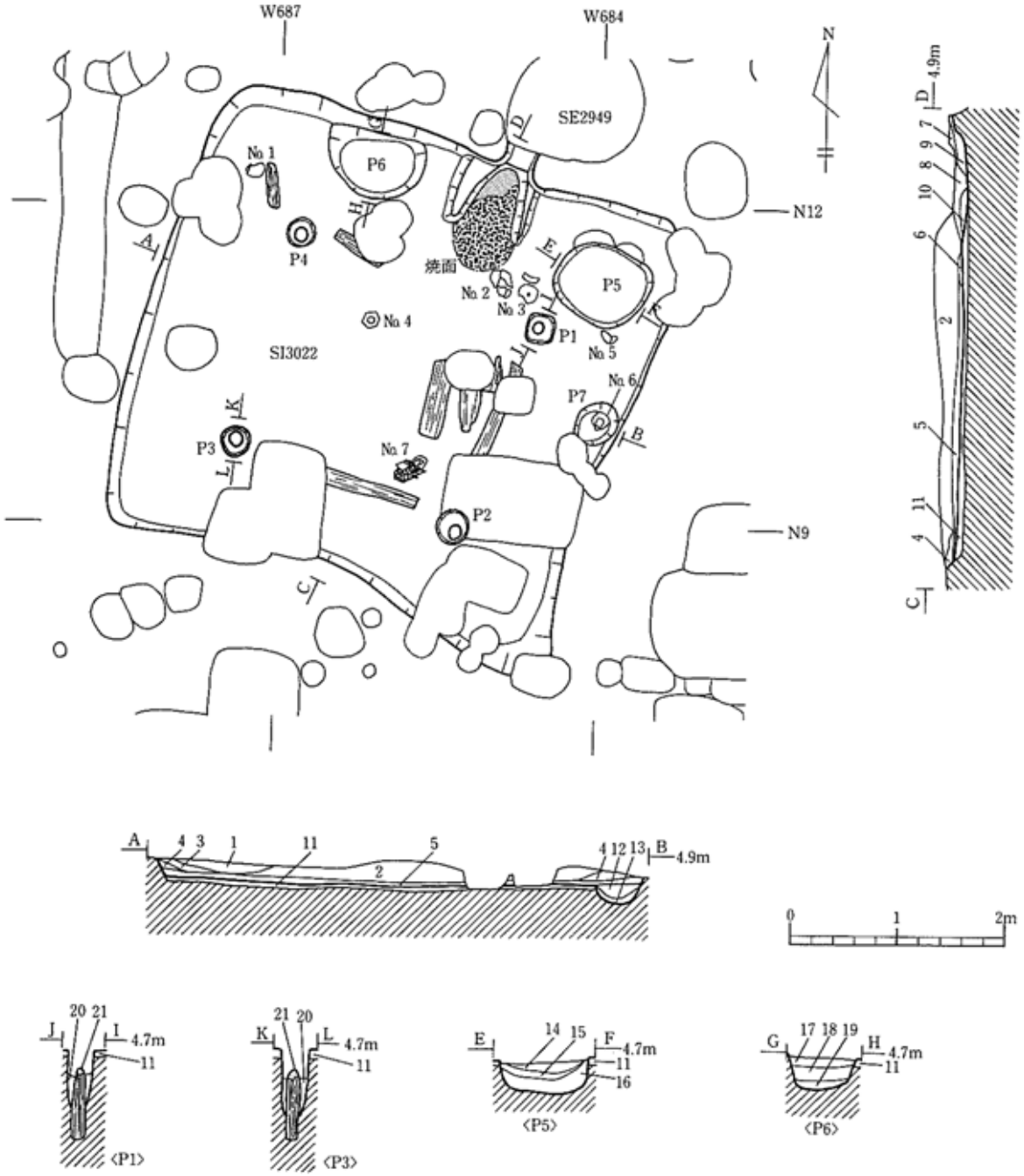


（単位：cm）

No	種別	層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	分類	写真図版
1	土師器・坏	掘方底面	赤彩（両面）　外面：〔口～体〕ヨコナデ→ヘラミガキ　内面：〔口～体〕ヨコナデ→ヘラミガキ	(15.4)	－	－	一部	A1	
2	土師器・坏	掘方底面	赤彩（両面）　外面：〔口～体〕ヨコナデ→ヘラミガキ〔底〕ヘラケズリ　内面：〔口～体〕ヨコナデ、ナデ→ヘラミガキ〔底〕ヘラミガキ	(18.4)	－	8.7	1/2	A2b	32－5
3	土師器・坏	掘方底面	外面：〔口〕指オサエ→ヨコナデ〔体〕指オサエ→ヘラケズリ→ヘラミガキ〔底〕ヘラケズリ　内面：〔口〕ヨコナデ〔体～底〕ナデ→ヘラミガキ	(20.0)	－	(10.5)	一部	C2	
4	土師器・甕	掘方底面	外面：〔口〕ハケメ→ヨコナデ〔体〕ハケメ→ナデ　内面：〔口～体〕ヨコナデ、指オサエ→ナデ	(15.8)	－	－	一部	B2	

第10図　SI3395 住居跡出土遺物

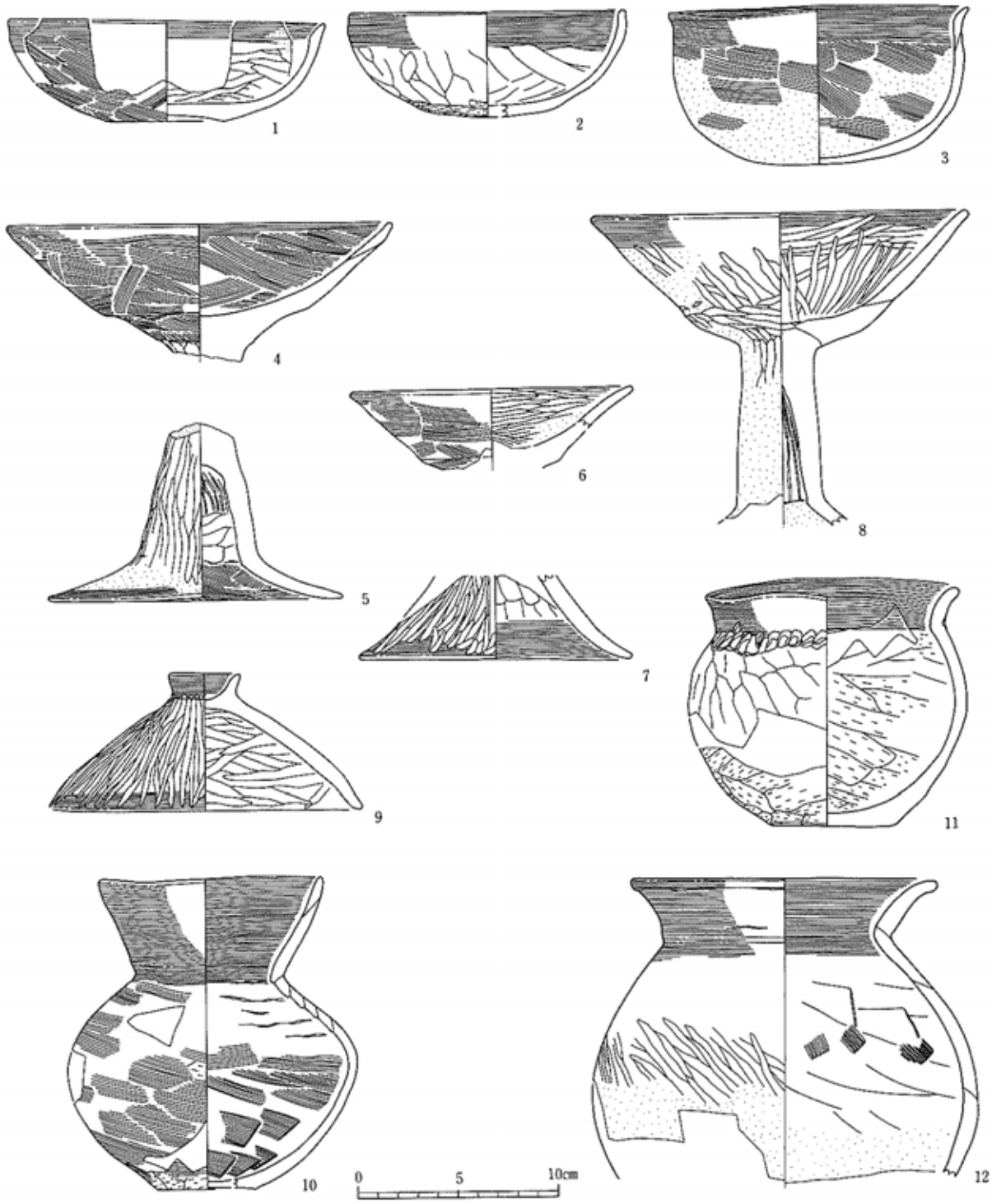
〔壁〕地山の黄褐色シルトを壁としている。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは北壁で 20 ㎝ある。
〔床面〕ほぼ平坦で、掘方埋土の地山ブロックを多量に含む浅黄色シルトを床としている。
〔柱穴〕主柱穴は対角線上の 4 箇所で検出している（P1～P）。掘方は径 30 ㎝ほどの円形をなし、



層No	土色・土性	混入物など	備考
1	褐灰色(10YR4/1)シルト	炭化物を多く含む	住居内堆積土
2	浅黄色(2.5Y7/4)シルト	炭化物を含む	
3	にぶい黄橙色(10YR7/4)シルト	褐灰色シルトを含む	
4	明黄褐色(10YR7/6)シルト	褐灰色シルト・炭化物を含む	
5	浅黄色(2.5Y7/4)シルト	炭化物をブロック状に多く含む	
6	褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト	炭化物を多く含む	カマド機能時の排出土
7	浅黄色(2.5Y7/4)シルト	焼けて赤変している部分がある	カマド天井崩落土
8	黒褐色(10YR3/1)シルト	黄橙色シルトをブロック状に多く含む	カマド内堆積土
9	黒褐色(5YR2/1)粘土質シルト	灰を含む	
10	明褐灰色(5YR7/2)粘土質シルト	炭化物・焼土・灰・骨片を多く含む	カマド機能時の堆積土
11	浅黄色(2.5Y7/4)シルト	炭化物を含む	住居掘方埋土

層No	土色・土性	混入物など	備考
12	浅黄色(2.5Y7/4)シルト	炭化物を含む	Pit 7 堆積土
13	黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト	炭化物を多く含む	
14	浅黄色(2.5Y7/4)シルト	炭化物をブロック状に多く含む	Pit 5 堆積土
15	黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト	焼土・炭化物を縞状に多く含む	
16	浅黄色(2.5Y7/4)シルト	黄灰色シルト層を間にはさむ	
17	黒色(10YR2/1)シルト	炭化物・焼土・灰をブロック状に多く含む	Pit 6 堆積土
18	明黄褐色(10YR7/6)シルト	褐灰シルトを含む	
19	黒色(10YR1.7/1)シルト	炭化物をブロック状に多く含む	
20	浅黄色(2.5Y7/4)シルト	黒褐色シルトを含む	柱穴掘方埋土
21			主柱

第11図　SI3022 住居跡



（単位：cm）

No	種別	層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	分類	写真図版
1	土師器・坏	床面（No.4）	赤彩（両面）　外面：〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ〔底〕ヘラケズリ　内面：〔口～体〕ヨコナデ→ヘラミガキ〔底〕ナデ	(15.8)	6.1	5.1	1/2	C 1	30－6
2	土師器・坏	P 6底面	赤彩（両面）　外面：〔口～体〕ナデ→ヨコナデ〔底〕ヘラケズリ　内面：〔口～体〕ヨコナデ→ナデ〔底〕ナデ	(13.6)	－	5.3	2/5	A 2 a	
3	土師器・坏	埋戻土	赤彩（両面）　外面：〔口〕ヨコナデ〔体～底〕ナデ　内面：〔口～体〕ヨコナデ→ナデ〔底〕ナデ	15.0	－	8.0	4/5	D 1 a	30－7
4	土師器・高坏	床面（No.1）	赤彩（両面）　外面：〔坏〕ヨコナデ→ナデ、脂オサエ　内面：〔坏〕ヨコナデ→ナデ	19.3	－	－	1/2	A	31－1
5	土師器・高坏	貯蔵面（No6）	外面：〔脚〕ヨコナデ→ヘラミガキ　内面：〔脚〕シボリ目→ナデ、ヨコナデ→ナデ	－	14.7	－	2/5	2 a	30－9
6	土師器・高坏	床面	赤彩（両面）　外面：〔坏〕ヨコナデ、ナデ　内面：〔坏〕ヘラミガキ	14.1	－	－	1/4	B	
7	土師器・高坏	カマド付属埋土	外面：〔脚〕ヘラミガキ→ヨコナデ　内面：〔脚〕ナデ→ヨコナデ	13.3	－	－	一部	1	
8	土師器・高坏	床面（No.3）	外面：〔坏〕ヨコナデ→ヘラミガキ〔脚〕ヘラミガキ　内面：〔坏〕ヨコナデ→ヘラミガキ〔脚〕シボリ目、ナデ	18.8	－	－	3/5	A 2 a	31－2
9	土師器・蓋	床面（No.5）	外面：〔つまみ〕ヨコナデ〔口～天井〕ヨコナデ→ヘラミガキ　内面：〔つまみ〕ヨコナデ〔口～天井〕ヘラミガキ	15.6	－	6.9	ほぼ完形		30－8
10	土師器・甕	1層	赤彩（外面、口縁部）　外面：〔口〕ヨコナデ〔体～底〕ヘラケズリ→ナデ　内面：〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ、ヘラナデ〔底〕ヘラナデ	(11.0)	4.9	15.6	4/5	B 1	31－5
11	土師器・甕	床面（No.7）	外面：〔口〕ヨコナデ〔体〕ヘラケズリ→ナデ→剥落〔底〕ヘラケズリ　内面：〔口～体〕ヨコナデ→ヘラケズリ→ナデ〔底〕ヘラケズリ	13.6	6.3	(11.9)	4/5	C	32－1
12	土師器・甕	床面（No.7）	外面：〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ→ヘラミガキ　内面：〔口〕ヨコナデ〔体〕ヘラナデ→ハケメ	15.1	－	－	1/3	B 1	31－4

第12図　SI3022 住居跡出土遺物（1）

深さは50～60㎝である。すべての柱穴で柱および柱痕跡を確認しており、径は12㎝ある。なお、柱は樹種同定の結果、クリやクヌギ節であることがわかった。

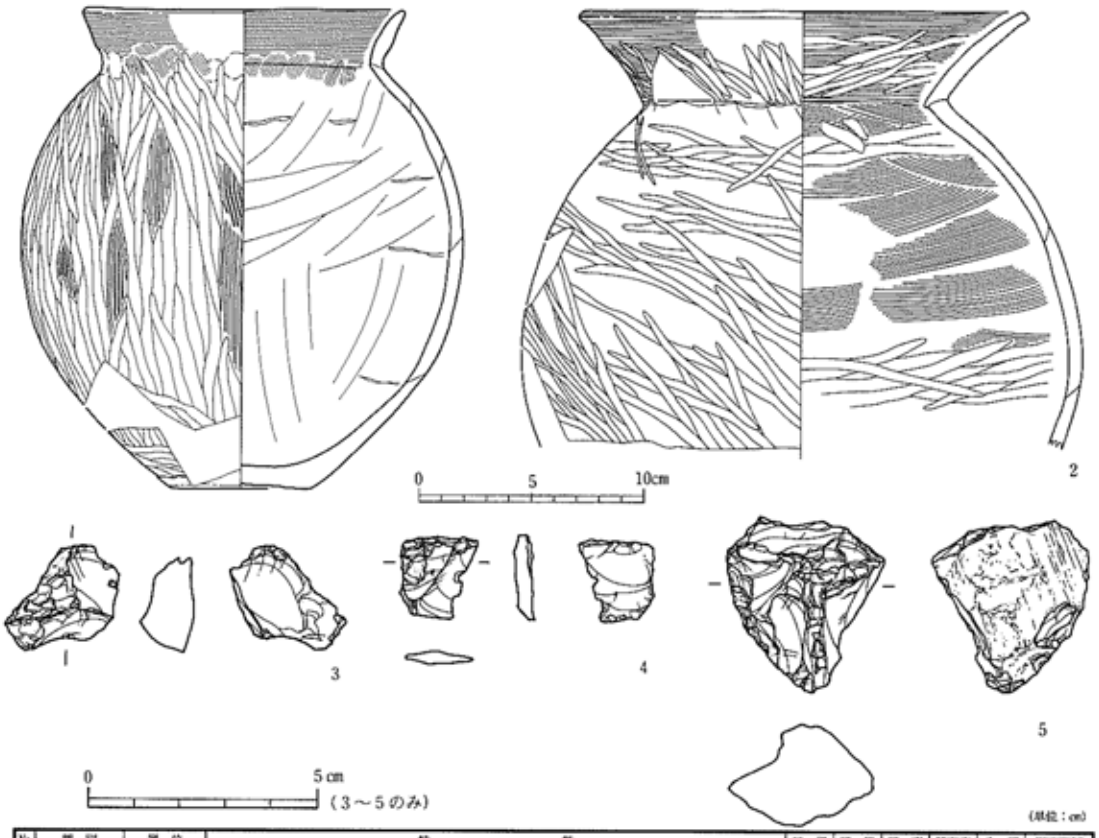
〔カマド〕北壁の中央からやや東よりに付設されている。煙道部の大部分はＳＥ2949に壊されている。側壁は地山の粘土で構築されており、規模は前端幅50cm、奥行は70㎝ある。燃焼部底面は床面より浅く凹み、煙道部底面との間には10cmの段がつく。

〔貯蔵穴状ピット〕カマドの左右で検出した。右に位置するP5は70㎝×90㎝の楕円形で、深さは30㎝である。堆積土は3層に分けられる。3層は黄灰色シルトを含む浅黄色シルト、2層は焼土や炭化物を多量に含む黒褐色シルト、1層は炭化物をブロック状に含む浅黄色シルトである。2層は住居内堆積土の6層、1層は1層に対応する。

カマドの左に位置するP6は60㎝×90㎝の歪んだ楕円形で、深さは30㎝である。堆積土は3層に分けられる。3層は炭化物をブロック状に含む黒褐色粘土質シルト、2層は明黄褐色シルト、1層は焼土・炭化物・灰をブロック状に含む黒色シルトである。1層は住居内堆積土の6層に対応する。

〔その他のピット〕東壁中央で1個検出している（P7）。平面形は径が40㎝の歪んだ円形で、深さは20㎝である。堆積土は2層に分けられる。2層は黒褐色粘土質シルト、1層は浅黄色シルトである。

〔遺物の出土状況〕床面やP6・7の底面から土師器がまとまって出土したほか、P5から黒曜石製石器、掘方埋土から琥珀片（写真図版34－12・13）、堆積土から土師器が出土している（第12・13図）。



（単位：cm）

No.	種別	層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	分類	写真図版
1	土師器・甕	床面	外面：(口) ヨコナデ、指オサエ→ナデ (頸) ハケメ、ヘラケズリ→ヘラミガキ (底) ナデ 内面：(口) ヨコナデ→ナデ (胴～底) ナデ	(14.3)	6.1	21.4	3/5	B	31－3
2	土師器・甕	床面（No.2）	外面：(口) ヨコナデ→ヘラミガキ (体) ナデ→ヘラミガキ 内面：(口) ヨコナデ→ヘラミガキ (体) ヘラナデ→ヘラミガキ	20.0	－	－	1/4	B1	31－6
3	スクレイパー	P5底面	黒曜石製　破損品　長(2.1)　幅(2.7)　厚1.1　黒曜石は縞模様入る						34－10
4	チップ	堆積土	スクレイパー2次加工時のチップ　黒曜石製　長1.8　幅1.7　厚0.3　黒曜石は縞模様入る						34－8
5	石核	P5底面	黒曜石製　長3.9　幅3.4　厚2.4　稜線は著しくつぶれている　黒曜石は縞模様入る						34－9

第13図　SI3022住居跡出土遺物（2）

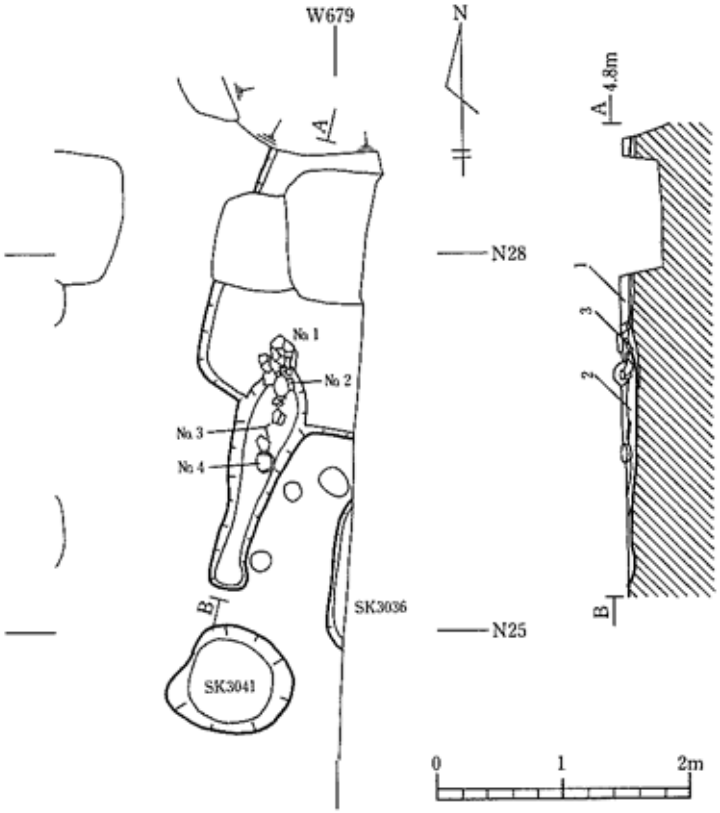
ＳＩ3012 住居跡（第 14 図）

調査区中央やや北側で検出した竪穴住居跡で、住居の南西部のみ確認しており、他は調査区外に延びる。ＳＢ3407・3408・3456 建物跡より古い。平面形は東西 1.4m以上、南北 1.9m以上の方形をなし、方向は西壁で測るとN18°Ｅである。

〔堆積土〕2 層に分けられる。2 層は炭化物と灰の互層で焼土や焼けた骨片を多く含んでおり、カマド機能時の堆積土と考えられる。1 層は焼土や炭化物を含む明黄褐色シルトで床面を直接覆っている。

〔壁〕地山の黄褐色シルトを壁としている。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは西壁で 10cmある。

〔床面〕ほぼ平坦で、掘方埋土の地山ブロックを多量に含む褐色シルトを床としている。



層No.	土色・土性	混入物など	備考
1	明黄褐色(10YR7/6)シルト	褐灰色シルト・焼土・炭化物を含む	人為堆積
2	黒褐色(10YR3/1)シルト	炭化物・灰・焼土・焼けた骨片を多く含む	カマド機能時の堆積土
3	明黄褐色(10YR7/6)シルト	褐灰色シルト・地山砂を含む	住居掘方埋土

第14図　SI3012 住居跡

〔カマド〕住居の南西隅に付設されている。側壁は失われているが、燃焼部底面が浅く凹んでいることから規模は前端幅、奥行とも 50 ㎝ほどと推定される。燃焼部底面から煙道部底面へは連続しており、特に区画はない。

〔遺物の出土状況〕2 層上面から土師器がまとまって出土している（第 14・15 図）ほか、堆積土から土師器が少量出土している。

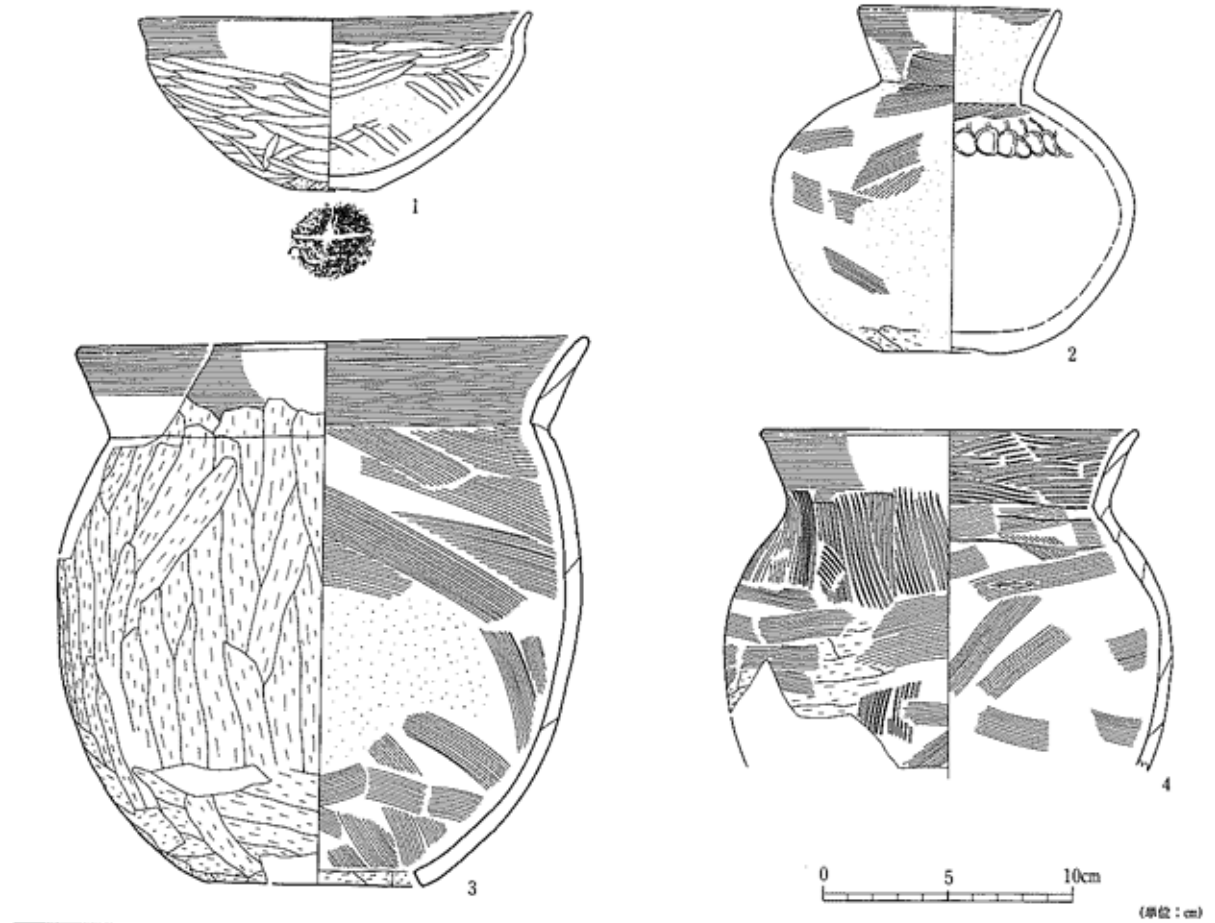
ＳＩ3293 住居跡（第 18 図）

調査区北側で検出した竪穴住居跡である。住居は東壁付近のみ確認しており、周溝と掘方埋土が残る。ＳＢ3433 建物跡、ＳＤ3052・3009Ａ・Ｂ溝跡より古い。平面形は東西 1.3m以上、南北 5.2mの方形をなし、方向は東壁で測るとN26°Ｅである。周溝は上端幅 30 ㎝、底面幅が 10～14 ㎝で断面はU字形をなしている。壁材の痕跡は確認できなかった。掘方埋土は褐灰色シルトを含む黄褐色シルトである。遺物は周溝と掘方埋土から土師器が出土している（第 16 図）。掘方埋土出土の甕はＳＫ3041 土壙底面と接合した（第 19 図 3）。

ＳＩ3525 住居跡（第 20 図）

XI区南端で検出した竪穴住居跡である。堆積土と床面の一部が残存するにとどまる。規模は東西 3.7m以上、南北 2.7m以上ある。掘方埋土の地山ブロックを多量に含む褐色シルトを床としている。堆

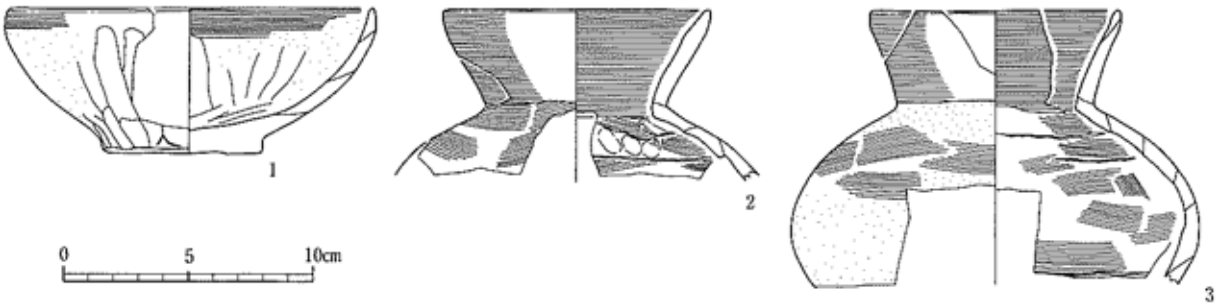
積土は2層に分けられる。2層は炭化物層で床面をうすく覆う。1層は浅黄色シルトである。遺物は床面と堆積土から土師器が少量出土している（第16図）。



（単位：cm）

No	種別	層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	分類	写真図版
1	土師器・坏	2層上面(No4)	赤彩（調整）外面：〔口～体〕ヨコナデ→ヘラミガキ〔底〕ヘラナズリ→ヘラミガキ 内面：〔口～体〕ヨコナデ→ヘラミガキ〔底〕ヘラミガキ 底部にヘラ記号	(15.6)	3.0	(6.9)	4/5	D 2	32－4
2	土師器・壺	2層上面(No2)	赤彩（外面、口縁部） 外面：〔口〕ヨコナデ、ナデ〔体〕ナデ、ヘラケズリ 内面：〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ、指オサエ	8.2	5.7	13.9	完形	B 2	32－2
3	土師器・甕	2層上面(No1)	外面：〔口～体〕ヨコナデ→ヘラケズリ 内面：〔口～体〕ヨコナデ→ナデ〔底〕ヘラケズリ	(20.3)	8.5	(21.8)	4/5		32－3
4	土師器・甕	2層上面(No3)	外面：〔口～体〕ヨコナデ、ヘラケズリ→ハケメ→ナデ 内面：〔口～体〕ヨコナデ→ハケメ→ナデ	(15.2)	－	－	1/4	B 2	

第15図　SI3012 住居跡出土遺物



（単位：cm）

No	種別	出土遺構・層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	分類	写真図版
1	土師器・坏	SI3293・周溝	外面：〔口～体〕ヨコナデ→ナデ〔底〕ナデ 内面：〔口～体〕ヨコナデ→ナデ〔底〕ナデ	14.7	6.3	5.8	2/3	A 2 a	32－7
2	土師器・壺	SI3525・床面	赤彩（外面、内面口縁部） 外面：〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ 内面：〔口〕ヨコナデ〔体〕指オサエ→ナデ	(10.5)	－	－	一部	B 2	
3	土師器・壺	SI3525・床面直上	外面：〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ 内面：〔口〕ヨコナデ〔体〕指オサエ→ナデ	(9.8)	－	－	一部	B 2	

第16図　SI3293・3525 住居跡出土遺物

（2）その他の遺構

ＳＫ3071 土壙（第 18 図）

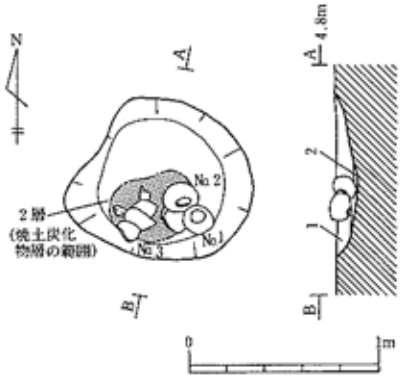
調査区中央で検出した土壙である。ＳＥ3023 井戸跡、ＳＤ2998Ａ・Ｂ・3009Ａ・Ｂ溝跡より古い。平面形はＳＥ3023 とＳＤ3009Ｂに大きく壊されており不明である。規模は南北 1.4mで、深さは 0.1mあり、断面形は皿形である。堆積土は炭化物を含む黄褐色シルトである。底面から土師器坏が出土している（第 19 図 4）。

ＳＫ3031 土壙（第 18 図）

調査区中央で検出した土壙である。ＳＫ3014・3021 土壙、ＳＤ3015 溝跡より古い。東側はＳＫ3014・3021 に壊されているが、平面形は歪んだ円形とみられる。規模は東西 1.3m以上、南北 1.8mで、深さは 0.1mである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。底面直上にはうすく焼土・炭化物層がのり、その上を暗灰黄色砂質シルトが覆う。遺物は堆積土から土師器が若干出土している。

ＳＫ3041 土壙（第 17・19 図）

調査区中央やや北側で検出した土壙である。平面形は東西 1.0m、南北 0.9mの歪んだ円形をなし、深さは 0.1mである。底面は中央に向けて緩く傾斜しており、壁も緩やかに立ち上がる。堆積土は 2 層に分けられる。2 層は焼土と炭化物からなり、底面の南側に分布している。2 層上面から頸部を欠いた土師器甕 1 個体（第 19 図 3）が出土している。1 層は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトであり、本土壙は底面に焼土や炭化物とともに土器を置いたのち埋め戻されたと考えられる。遺物は上記以外に 2 層上面から土師器坏・甕、堆積土から土師器甕が出土している。なお、第 19 図 3 の土師器甕はＳＩ3293 の掘方埋土と接合している。



第17図　SK3041 土壙

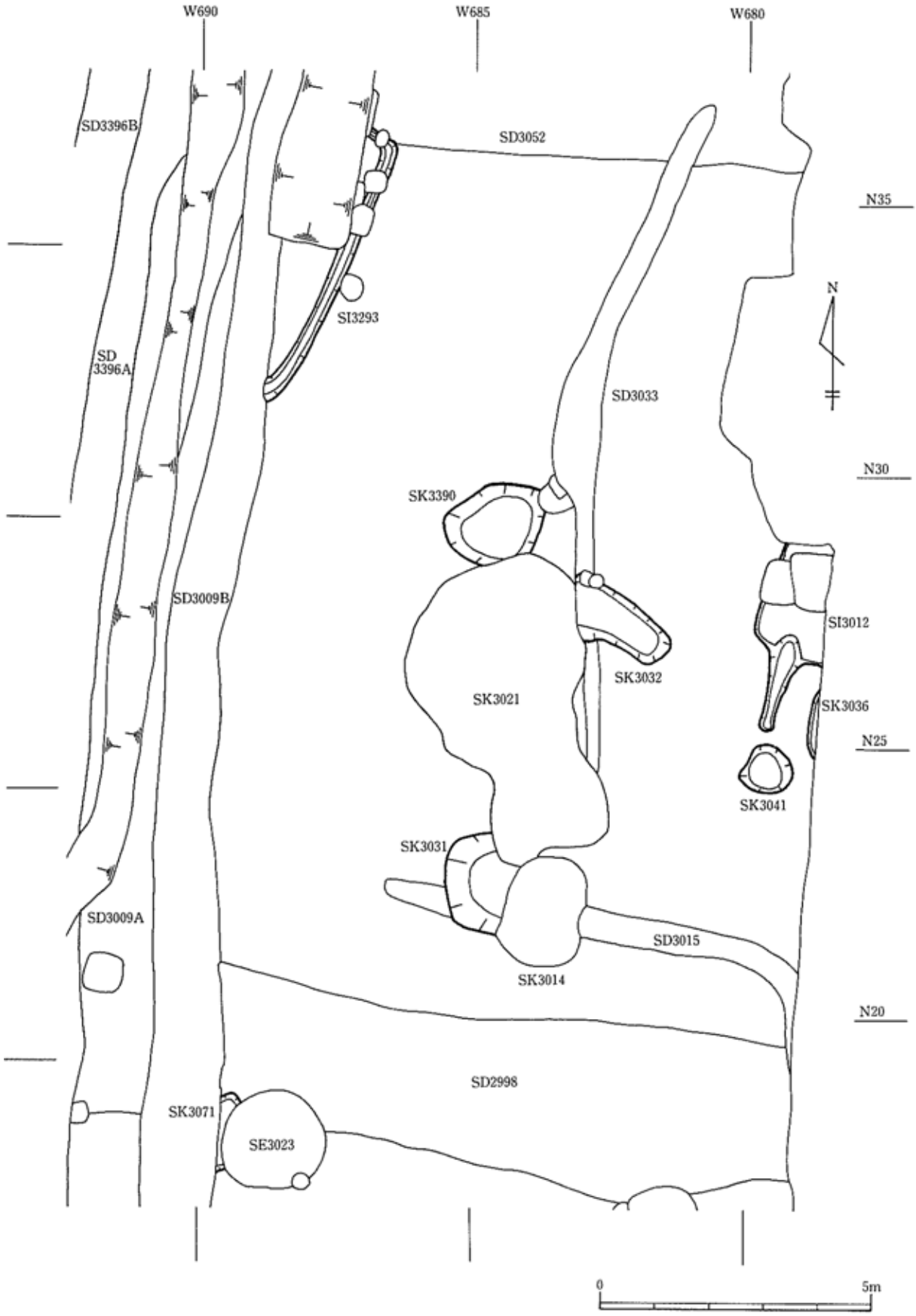
ＳＫ3036 土壙（第 18 図）

調査区中央やや北側で検出した土壙である。西壁付近を検出したにとどまり、大部分は調査区外に延びる。平面形は楕円形もしくは隅丸方形とみられ、規模は南北 1.2m深さは 0.2mで、断面形は皿形である。底面直上にはうすく炭化物層がのり、その上を炭化物を多量に含む明黄褐色シルトが覆っており、本土壙は人為的に埋め戻されたと考えられる。遺物は底面や炭化物層、埋土から土師器が少量出土している。

ＳＫ3032 土壙（第 18 図）

調査区中央やや北側で検出した土壙である。ＳＫ3457 建物跡、ＳＫ3021 土壙、ＳＤ3033 溝跡より古い。西側はＳＫ3021 に壊されているが、平面形は歪んだ隅丸方形とみられる。規模は長軸 1.8m以上、短軸 1.0mで、深さは 0.2mである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は焼土や炭化物を多量に含む灰黄褐色シルトであり、本土壙は人為的に埋め戻されたと考えられる。遺物は底面から土師器が若干出土している。

ＳＫ3390 土壙（第 18 図）

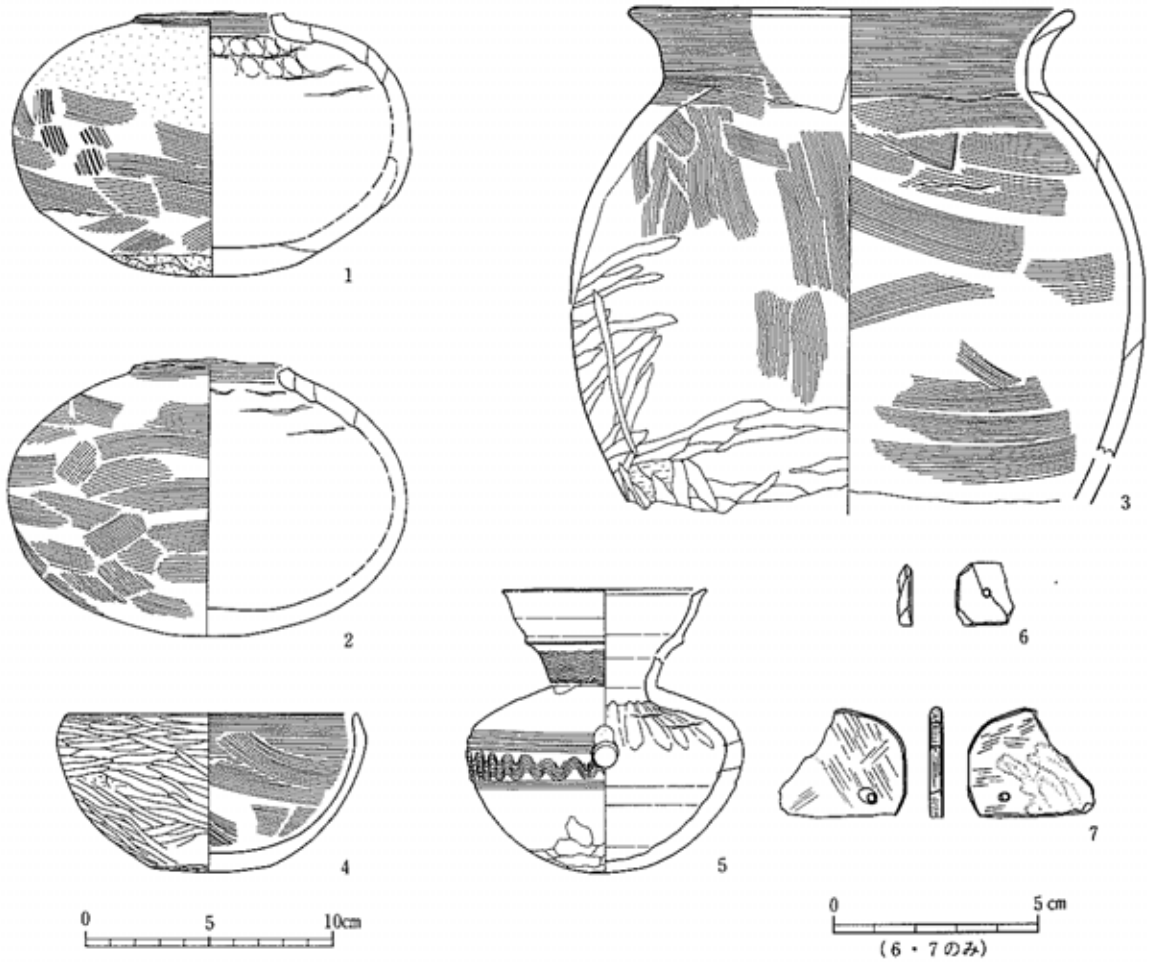


第18図　Ⅲ区中央部の遺構

調査区中央やや北側で検出した土壙である。ＳＢ3406 建物跡、ＳＫ3021 土壙より古い。東側を柱穴に、南側をＳＫ3021 に壊されているが、平面形は歪んだ円形とみられる。規模は東西 1.8m、南北 1.7m で、深さは 5 ㎝前後である。底面は若干の凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は炭化物や褐灰色粘土を含む灰黄色粘土質シルトである。遺物は堆積土から土師器が若干と石製模造品が出土している（第 19 図 7）。

ＳＫ3378 土壙（第 20 図）

調査区北側で検出した土壙である。ＳＤ3056 溝跡より古い。北側をＳＤ3056 に壊されているが、平面形は方形とみられる。規模は東西 0.5m、南北 0.2m以上で、深さは 0.3mである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。底面直上にはうすく炭化物層がのり、その上を暗黄灰色シルトが覆っている。遺物は堆積土から土師器や石製模造品（第 19 図 6）が少量出土している。



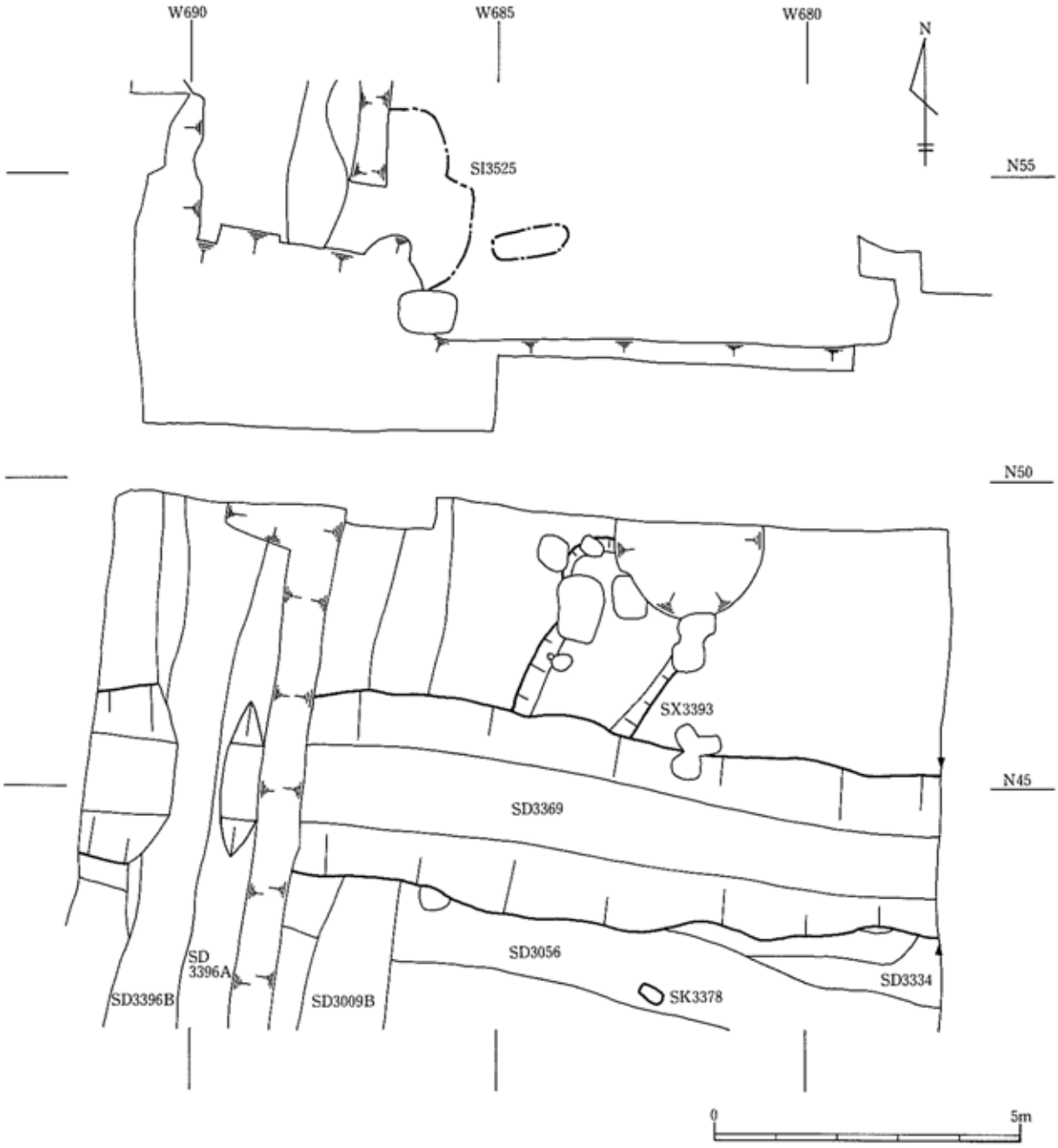
（単位：cm）

No	種別	出土遺構・層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	分類	写真図版
1	土師器・壺	SK3041・底面(No1)	外面：〔口～体〕ヨコナデ、ハケメ→ナデ〔底〕ヘラケズリ　内面：〔口～体〕ヨコナデ、指オサエ→ナデ〔底〕ナデ	－	－	－	2/3	B 2	32－8
2	土師器・壺	SK3041・底面(No2)	赤彩(外面、内面口縁部)　外面：〔口～体〕ヨコナデ、ナデ〔底〕ナデ　内面：〔口～体〕ヨコナデ、指オサエ→ナデ〔底〕ナデ	－	－	－	2/3	B 2	32－9
3	土師器・甕	SK3041・底面(No3)	外面：〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ→ヘラミガキ、ヘラケズリ→ヘラミガキ　内面：〔口～体〕ヨコナデ→ナデ　SK3203 新方埋土と接合	18.1	－	－	2/3	B 2	33－1
4	土師器・坏	SK3071・底面	外面：〔口～体〕ヨコナデ、ヘラケズラ→ヘラミガキ〔底〕ヘラケズリ　内面：〔口～体〕ヨコナデ→ナデ〔底〕ナデ	11.8	5.0	6.5	2/3	B	33－10
5	須恵器・甕	SD3540・堆積土	外面：〔口～底〕頸部に段、櫛描き波状文　〔胴〕平行沈線間に櫛描き波状文　〔底〕ナデ　〔胎色 TK216 窯式期〕	(8.2)		(11.5)	3/4		33－11
6	石製模造品	SK3378・堆積土	剣形？　破損品　長1.5以上　厚0.3以上						34－4
7	石製模造品	SK3390・堆積土	有孔円板　破損品　2孔？　径3.1以上　厚0.3						34－2

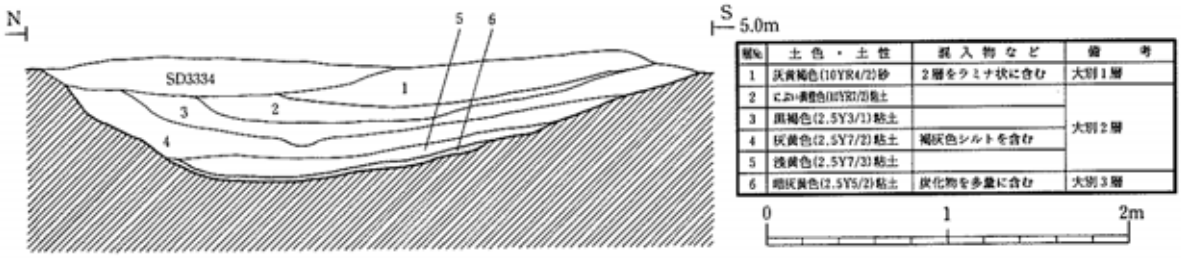
第19図　SK3041・3071・3378・3390 土壙、SD3540 溝跡出土遺物

ＳＤ3369 溝跡（第 20・21 図）

調査区北端で検出した東西溝跡である。長さ 14m分を検出した。上幅 3.4m、底面幅 1.0mで深さは 0.6mである。底面は中央に向けて緩やかに傾斜し、断面はゆるやかな「U」字状をなす。方向はＥ6°Ｓである。堆積土は 6 層に分けられるが、3 層に大別できる。3 層は炭化物層で、一括土器とともに主として北側に分布する（第 22 図）。このことから 3 層と一括土器は溝の北側から投棄されたものと考えられる。1・2 層は自然堆積で、2 層は粘土層で浅黄色から黄橙色を呈するものが主体である。1 層は灰黄褐色の砂である。

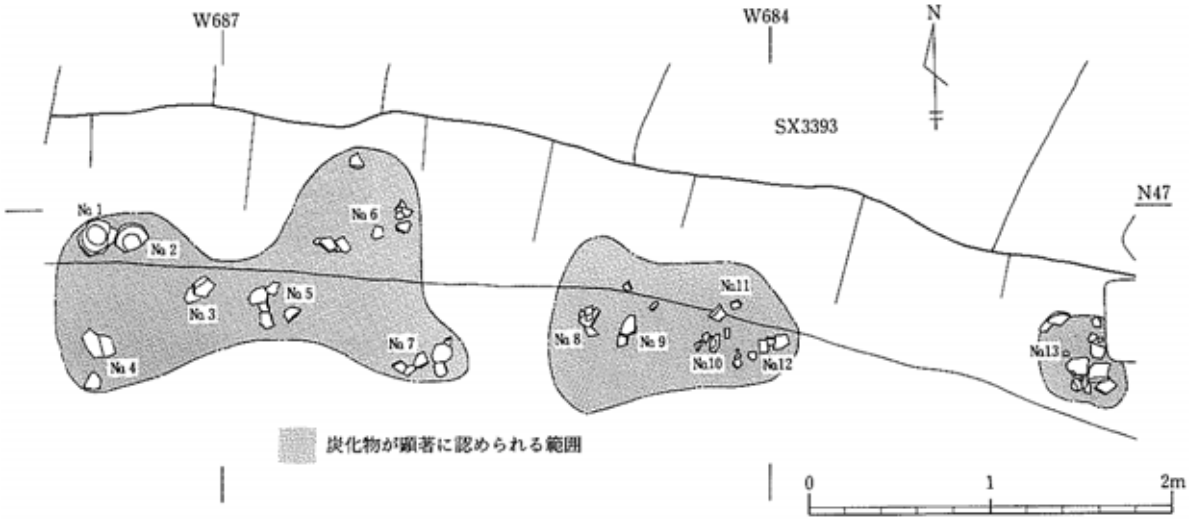


第20図　Ⅺ区南端からⅫ区北端の遺構



層No.	土色・土性	混入物など	備考
1	灰黄褐色(10YR4/2)砂	2層をラミナ状に含む	大別1層
2	にぶい黄褐色(10YR5/3)粘土		大別2層
3	黒褐色(2.5Y3/1)粘土		
4	灰黄色(2.5Y7/2)粘土	褐灰色シルトを含む	
5	浅黄色(2.5Y7/3)粘土		
6	暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土	炭化物を多量に含む	大別3層

第21図　SD3369 溝跡断面図



第22図　SD3369 溝跡土器出土状況

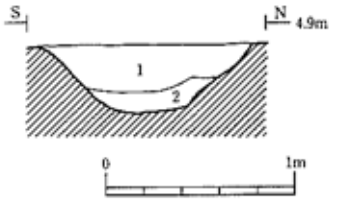
遺物は3層から土師器がまとまって出土している（第22・24図）ほか、1・2層からも出土するが量は少ない（第24図）。なお、3層からモモの種子が出土している。

ＳＸ3393（第20図）

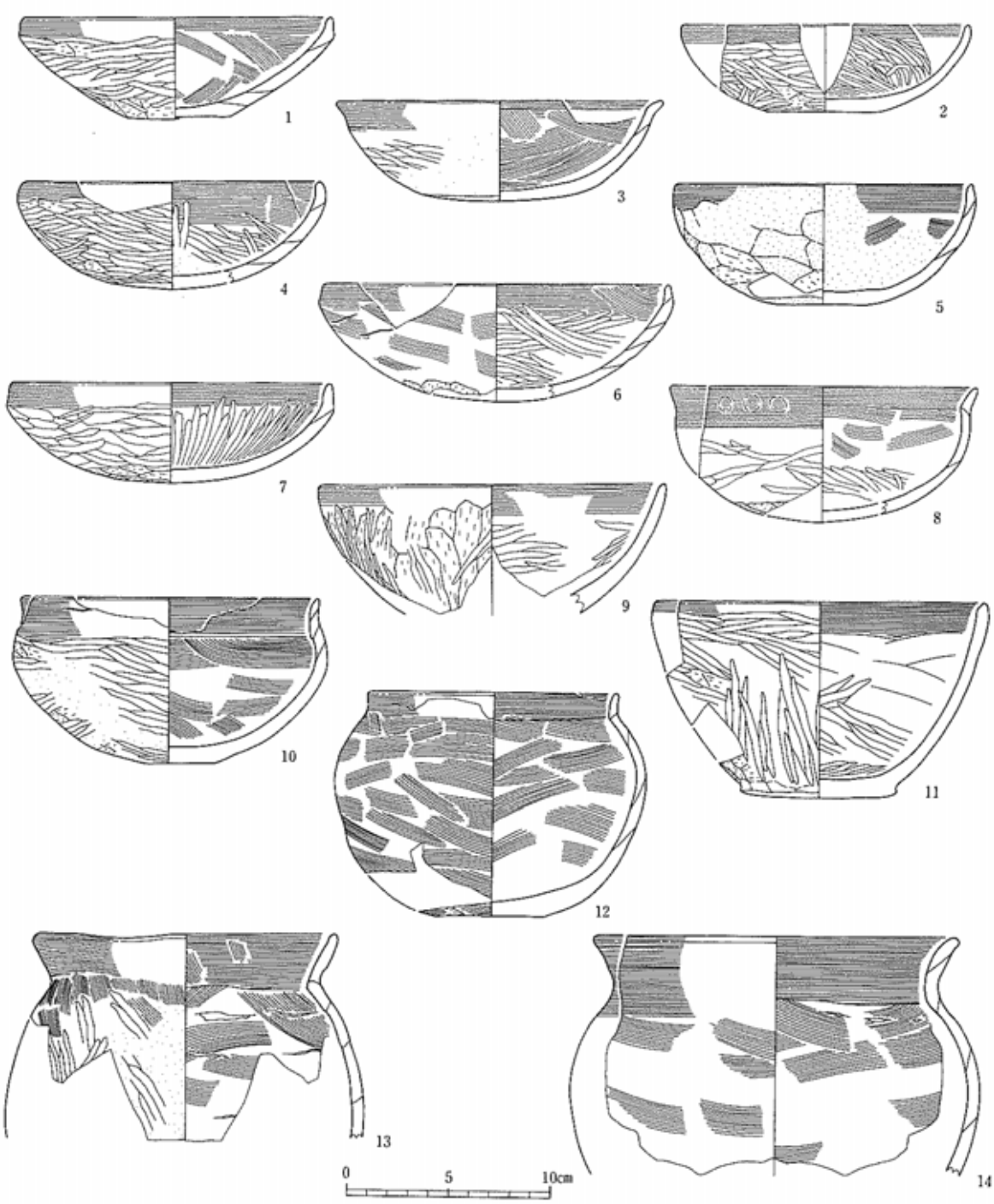
調査区北端で検出した遺構である。ＳＢ3410・3430・3431・3432建物跡やＳＤ3369溝跡より古い。南側をＳＤ3369に壊されているが、平面形は不整な方形とみられる。規模は東西2.0m、南北3.1m以上で、深さは5㎝前後である。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は褐灰色シルトである。遺物は堆積土から土師器が若干出土している。

ＳＤ3540 溝跡（第4・23図）

調査区南端で検出した東西溝跡である。長さ12.5m分を検出した。ＳＥ 2920・3527井戸跡、ＳＫ3522土壙、ＳＤ3009Ａ・Ｂ・3396Ａ・Ｂ溝跡より古い。上幅は1.2m、底面幅0.7m、深さが0.5mで断面は逆台形をなす。方向はN55°Wである。堆積土は2層に大別できる。2層は砂を多く含む褐灰色シルト、1層は地山を互層状に含む黒褐色シルトであり、自然堆積と考えられる。遺物は1層の上部から須恵器はそうが出土している（第19図5）。



第23図　SD3540 溝跡断面図



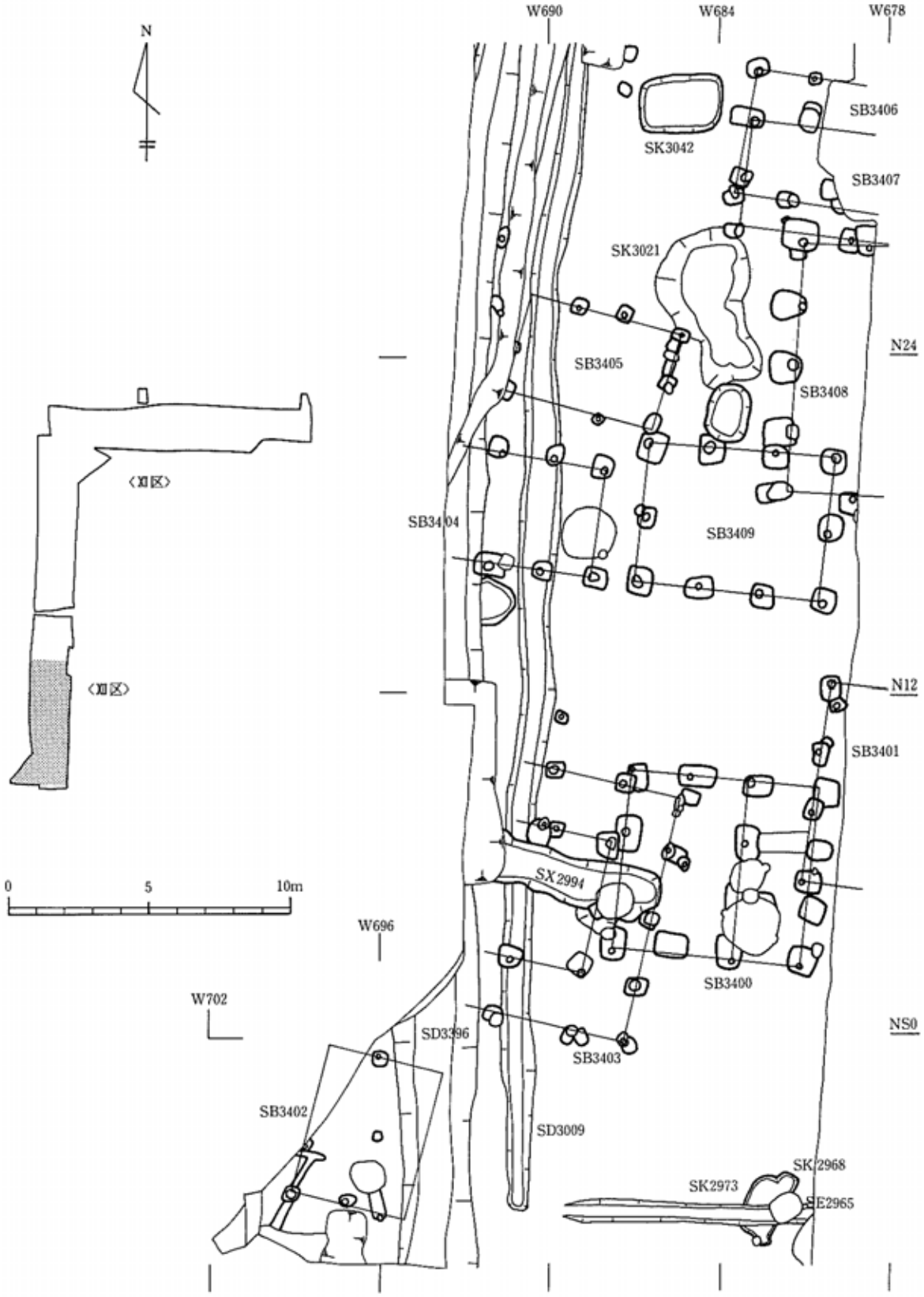
（単位：cm）

No	種別	層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	分類	写真図版
1	土師器・坏	2層	赤彩（両面） 外面：〔口〕ヨコナデ〔体〕ヘラケズリ→ヘラミガキ〔底〕ヘラケズリ 内面：〔口〕ヨコナデ〔体～底〕ナデ	(15.0)	4.9	5.0	2/5	B	33－3
2	土師器・坏	3層(No.6)	赤彩（両面） 外面：〔口～体〕ヨコナデ→ヘラミガキ〔底〕木葉痕→ヘラケズリ 内面：〔口〕ヨコナデ〔体～底〕ヘラミガキ	(14.2)	(5.4)	4.3	一部	A 2 a	
3	土師器・坏	3層(No.2)	赤彩（両面） 外面：〔口〕ヨコナデ〔体〕ヘラミガキ 内面：〔口～体〕ヨコナデ→ナデ〔底〕ナデ	15.8	－	5.0	4/5	D 1 a	33－4
4	土師器・坏	2層	赤彩（両面） 外面：〔口～体〕ヨコナデ→ヘラケズリ→ヘラミガキ 内面：〔口～体〕ヨコナデ→ナデ→ヘラミガキ	(14.5)	－	－	1/4	A 2 a	
5	土師器・坏	3層（X5＋7）	赤彩（両面） 外面：〔口〕ヨコナデ〔体〕ヘラケズリ 内面：〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	(14.4)	4.6	6.0	1/2	A 2 a	33－6
6	土師器・坏	3層(No.9)	赤彩（両面） 外面：〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ〔底〕ヘラケズリ 内面：〔口～体〕ヨコナデ→ヘラミガキ	(15.8)	－	5.8	2/5	B	33－8
7	土師器・坏	3層(No.7)	外面：〔口〕ヨコナデ〔体〕ヘラミガキ〔底〕ヘラケズリ 内面：〔口～体〕ヨコナデ、ナデ→ヘラミガキ〔底〕ヘラミガキ	(15.5)	－	4.9	1/2	B	33－2
8	土師器・坏	3層(No.11)	外面：〔口〕指オサエ→ヨコナデ〔体〕ヘラミガキ、ヘラケズリ 内面：〔口～体〕ヨコナデ→ナデ、ヘラミガキ	(15.0)	－	(6.7)	一部	D 1 a	
9	土師器・坏	3層(No.12)	外面：〔口〕ヨコナデ〔体〕ヘラケズリ→ヘラミガキ 内面：〔口～体〕ヨコナデ→ヘラミガキ	(16.9)	－	－	1/4	A 3 a	
10	土師器・坏	3層(No.1)	外面：〔口～体〕ヨコナデ→ヘラケズリ→ヘラミガキ〔底〕ヘラケズリ→ヘラミガキ 内面：〔口～体〕ヨコナデ→ナデ〔底〕ナデ	(14.6)	－	8.2	3/5	E 1	33－5
11	土師器・鉢	3層(No.10)	外面：〔口〕ヨコナデ〔体〕ヘラケズリ→ヘラミガキ〔底〕ナデ 内面：〔口～体〕ヨコナデ→ナデ→ヘラミガキ〔底〕ヘラミガキ	(16.6)	7.5	9.7	1/3	A 3 b	33－9
12	土師器・鉢	3層(No.8)	赤彩（両面） 外面：〔口～体〕ナデ〔底〕ヘラケズリ→ナデ 内面：〔口～体〕ヨコナデ→ナデ〔底〕ナデ	(12.5)	5.2	10.0	3/5	E 2	33－7
13	土師器・甕	3層(No.7)	外面：〔口～体〕ヨコナデ→ナデ→ヘラミガキ 内面：〔口～体〕ヨコナデ→ナデ	(15.0)	－	－	一部	B 2	
14	土師器・甕	3層(No.13)	外面：〔口～体〕ヨコナデ→ナデ 内面：〔口～体〕ヨコナデ→ナデ	(18.0)	－	－	一部	B 2	

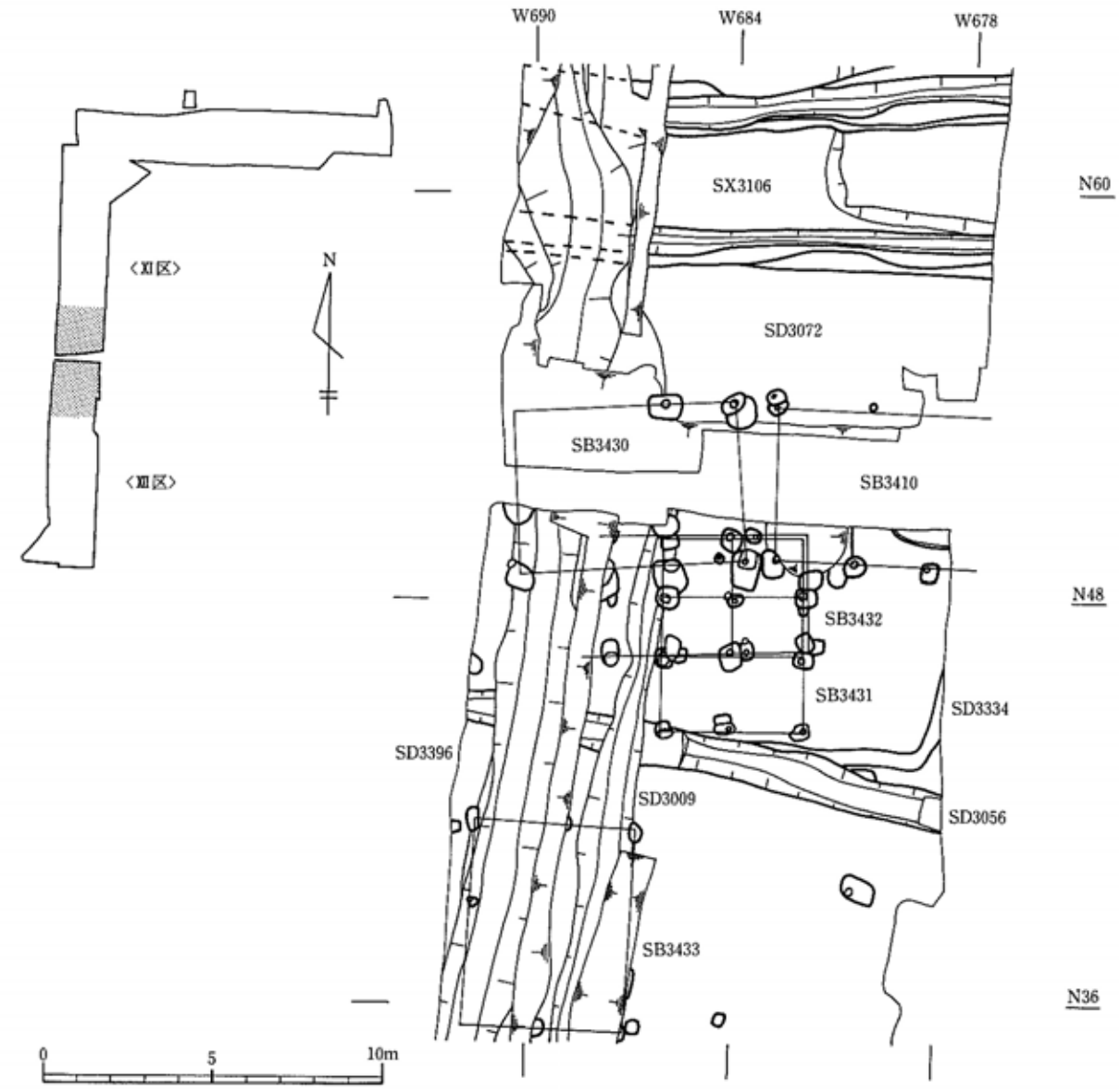
第24図　SD3369 溝跡出土遺物

2. 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺構は掘立柱建物跡 15、土壙 14、溝跡 2 などがある。遺構は調査区全体に分布している（第 25・26 図)。出土遺物には土師器・須恵器・石製品などがある。



第25図　Ⅻ区の検出遺構〔奈良・平安時代〕（1）



第26図　Ⅻ区の検出遺構〔奈良・平安時代〕（２）

（1）掘立柱建物跡

ＳＢ3402 建物跡（第 25・27 図）

調査区南西隅で検出した南北３間、東西２間の南北棟建物跡である。ＳＤ3529 溝跡より新しく、ＳＫ3522 土壙、ＳＤ3396Ａ・Ｂ溝跡より古い。

柱穴は４箇所で検出しており、すべてで径 12～14 ㎝の柱痕跡、２箇所で柱抜取穴を確認している。平面規模は桁行が西側柱列で総長 5.50m、柱間寸法は南から 1.65m、3.85m（２間分）であり、梁行が南妻で総長 3.80mとみられる。建物の方向は西側柱列で測るとN15°Ｅである。柱穴は一辺が 0.5～0.6mの方形をしており、深さは 0.4mである。埋土は黒褐色シルトが主体で、含まれる地山ブロックの量で細分できる。

遺物は柱穴埋土からロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器の坏・甕、灰釉陶器椀が少量出土している。須恵器坏の中にはヘラ切りのものがある。柱抜取穴からはロクロ調整の土師器坏や須恵器甕が出土している。

ＳＢ3400 建物跡（第 27・28 図）

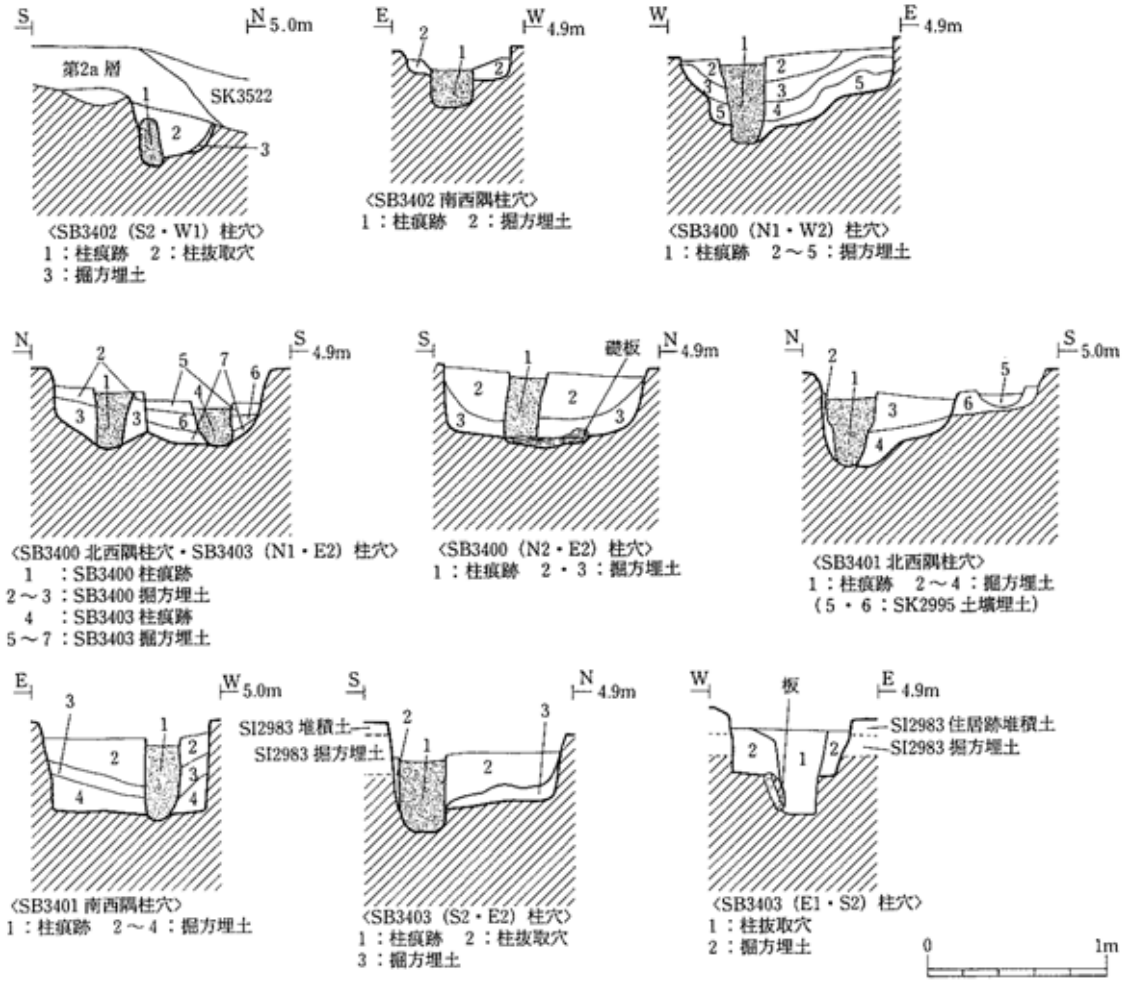
調査区南側で検出した南北３間、東西３間の東廂付き南北棟建物跡である。ＳＩ2983・2988・3022 住居跡より新しく、ＳＢ3401・3403・3443 建物跡、ＳＥ2932・2966・2976・2982 井戸跡、ＳＫ2938・2960 土壙、ＳＸ2994 より古い。

柱穴は 13 箇所で検出しており、うち 9 箇所で径 24cmの柱痕跡、3 箇所で柱の沈下を防ぐ礎板、2 箇所で柱抜取穴を確認している。平面規模は桁行が東入側柱列で総長 6.25m、柱間寸法は南から 2.11m、2.02m、2.13m、梁行が南妻で総長 4.25m、廂の出は 2.39mである。建物の方向は西側柱列で測るとN6°Eである。柱穴は一辺が 1mほどの方形もしくは 1.2m×0.8mの長方形をしており、深さは 0.6mである。埋土は黒褐色や褐灰色シルトが主体で、含まれる地山ブロックの量で細分できる。

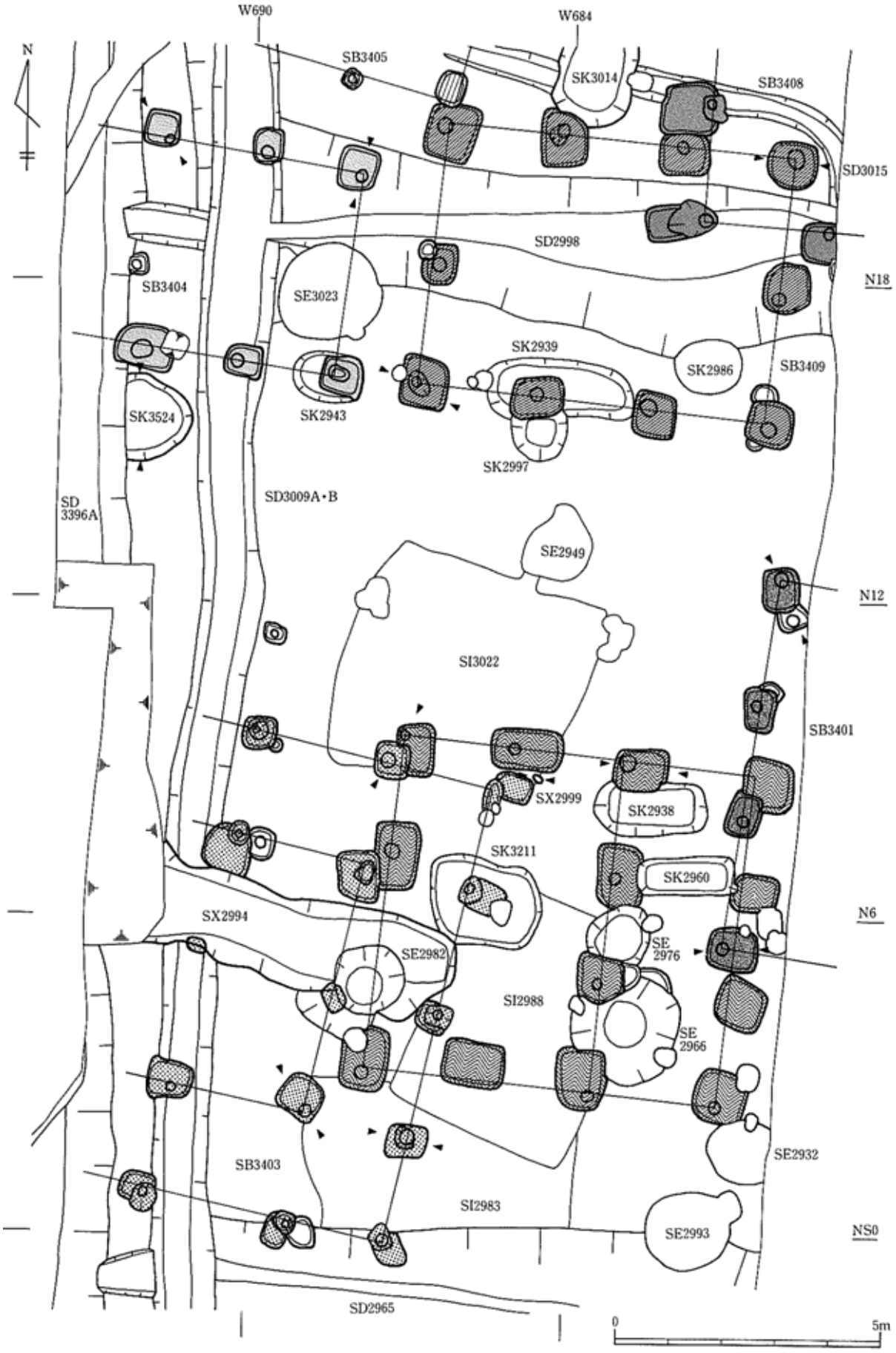
遺物は柱穴埋土から土師器坏・甕、須恵器の坏・蓋・壷・甕や土錘（第 29 図 5）、漆椀が出土している。土師器はロクロ調整のものを含み、タタキの施された長胴甕がある。須恵器坏の中にはヘラ切りがある。柱痕跡や柱抜取穴からは土師器甕やヘラ切りの須恵器坏が若干出土している。

ＳＢ3401 建物跡（第 27・28 図）

調査区南側で西側柱列のみ検出した南北３間、東西１間以上の南北棟とみられる建物跡である。ＳＢ3400 建物跡より新しく、ＳＢ3444 建物跡より古い。柱穴は 4 箇所で検出しておりすべてで径 22cm



第27図　SB3400～3403 建物跡柱穴断面図



第28図　Ⅻ区中央から南側の遺構

の柱痕跡、1箇所で柱抜取穴を確認している。うち2箇所で柱材、1箇所で柱の沈下を防ぐ礎板が残存していた。両者は樹種同定をおこなったところ、クリであることがわかった。建物の平面規模は桁行が総長7.09m、柱間寸法は南から2.46m、2.17m、2.47mで、方向はN8°Eである。柱穴は一辺0.8mほどの方形もしくは0.8m×0.6mの長方形をしており、深さは0.5mである。埋土は黒褐色や褐灰色シルトが主体で、含まれる地山ブロックの量で細分できる。

遺物は柱穴埋土からロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器の坏・甕が少量出土している。須恵器坏の中にはヘラ切りのほか手持ちケズリが施されたものがある。柱痕跡からは回転糸切りの土師器坏や須恵器坏が若干出土している。

ＳＢ3403建物跡（第27・28図）

調査区南側で検出した南北4間、東西3間以上の東西棟建物跡である。建物の西側はＳD3396溝跡で壊されているが、南・北・東の三面に廂をもつ。ＳＩ2983・2988・3022・3395 住居跡、ＳB3400建物跡より新しく、ＳB3448建物跡、ＳE2982井戸跡、ＳK3211土壙、ＳD2965・3009Ａ・Ｂ・3396Ａ・Ｂ溝跡、ＳX2994より古い。

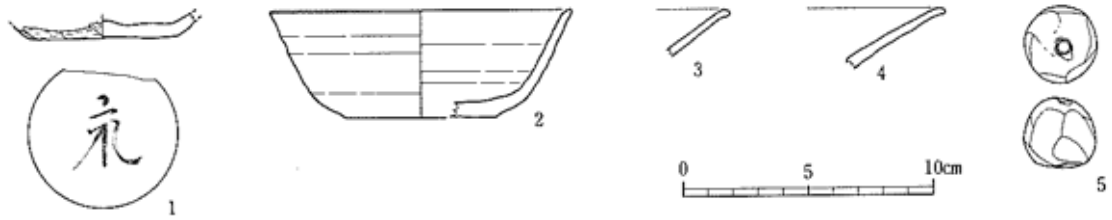
柱穴は14箇所で検出しており、うち身舎の4箇所で径26㎝の柱痕跡、廂の8箇所で径14㎝の柱痕跡、3箇所で柱の沈下を防ぐ礎板、11箇所で柱抜取穴を確認している。礎板については樹種同定をおこなったところ、クリであることがわかった。平面規模は桁行が南入側柱列で2.55m以上、廂の出は1.98m、梁行が東妻で総長4.79m、廂の出は北が2.02m、南で2.15mある。建物の方向は東側柱列で測るとN12°Eである。

柱穴は身舎が一辺0.8～0.9mほどの方形をしており、深さは0.6mである。廂は一辺0.6mほどの方形をしており、深さは 0.4mである。埋土は身舎が黒褐色シルトが主体で地山ブロックを含む層と地山ブロックが主体で黒褐色シルトを含む層との互層である。廂は黒褐色が主体で、含まれる地山ブロックの量で細分できる。

遺物は柱穴埋土からロクロ調整の土師器坏・鉢・甕、須恵器の坏・甕や灰釉陶器皿（第29図3・4）が出土している。須恵器坏の中にはヘラ切りと糸切りがあり、後者の底径は比較的大きい。柱痕跡や柱抜取穴からはロクロ調整の土師器坏・甕や須恵器坏・甕が少量出土している。

ＳＢ3404建物跡（第28・30図）

調査区中央部で検出した南北2間、東西3間以上の東西棟建物跡である。ＳE3023井戸跡、ＳK2943



（単位：cm）

No.	種別	出土遺構・層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	分類	写真図版
1	須恵器・坏	SB3408・最下層土	外面：ロクロナデ→手持ちヘラケズリ　内面：ロクロナデ　底面に墨書「永」	－	6.0	－	一部		41－5
2	須恵器・坏	SB3408・最下層土	外面：ロクロナデ、手持ちヘラケズリ　内面：ロクロナデ	(12.1)	(6.0)	4.3	1/4	A II c2	
3	灰釉陶器・皿	SB3403・最下層土	内外面：ロクロナデ→灰釉　漬掛塗　【黒笹14～90号窯式期】	－	－	－	一部		
4	灰釉陶器・段皿	SB3403・最下層土	内外面：ロクロナデ→灰釉　漬掛塗　【黒笹14～90号窯式期】	－	－	－	一部		
5	土　錘	SB3400・最下層土	完形　径3.1　孔径0.5						39－12

第29図　SB3400・3403・3408建物跡出土遺物

土壌、ＳＤ2998・3009Ａ・Ｂ・3396Ａ・Ｂ溝跡より古い。

柱穴は6箇所で検出しており、すべてで径20㎝の柱痕跡、2箇所で柱抜取穴を確認している。平面規模は桁行が北側柱列で総長3.57m以上、柱間寸法は東から1.75m、1.82m、梁行が東妻で総長3.80mである。建物の方向は東妻で測るとN4°Eである。柱穴は一辺が0.6mの方形もしくは0.8m×1.0mの長方形をしており、深さは 0.3mである。埋土は黒褐色シルトが主体で、含まれる地山ブロックの量で細分できる。

遺物は柱穴埋土からロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器の坏・甕が少量出土している。須恵器坏の中には手持ちヘラケズリが施されているものがあり、須恵器甕の中には福島県会津若松市大戸窯の製品がある。柱痕跡からはロクロ調整の土師器坏・甕が若干出土している。

ＳＢ3409 建物跡（第28・30図）

調査区中央部で検出した南北2間、東西3間の東西棟建物跡である。ＳＫ2939・2997・3014土壙、ＳＤ2998溝跡より古い。

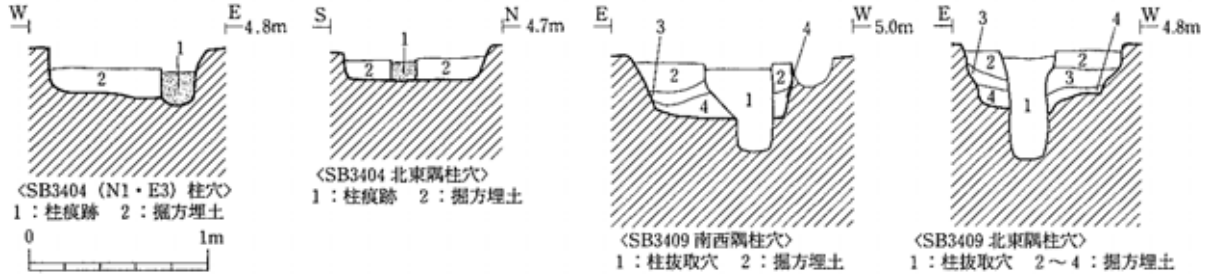
柱穴は10箇所で検出しており、すべてで径25cmの柱痕跡、2箇所で柱抜取穴を確認している。平面規模は桁行が北側柱列で総長6.70m、柱間寸法は西から2.31m、2.22m、2.17m、梁行が東妻で総長5.12m、柱間寸法は北から2.67m、2.45mである。建物の方向は東妻で測るとN5°Eである。柱穴は一辺が0.9～1.0mの方形をしており、深さは0.4mである。埋土は黒褐色もしくは褐灰色シルトが主体で、含まれる地山フロックの量で細分できる。

遺物は柱穴埋土からロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器の坏・壷・甕が出土している。土師器では手持ちヘラケズリが施されている坏があり、タタキの施された甕がある。須恵器坏の中にはヘラ切りのものがある。柱痕跡からはロクロ調整の土師器坏・甕が若干出土している。

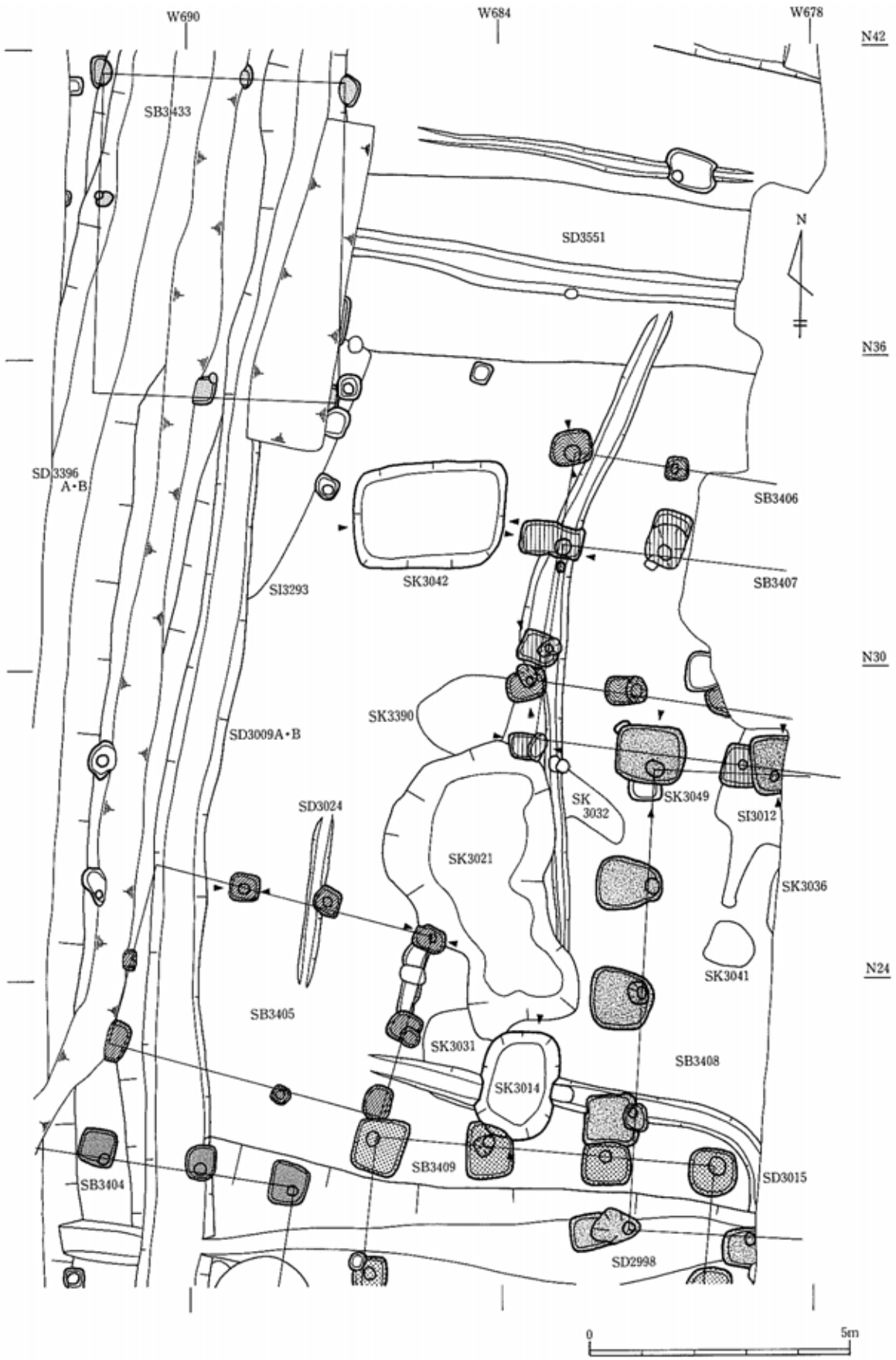
ＳＢ3405 建物跡（第31・32図）

調査区中央部で検出した南北2間、東西3間の東西棟建物跡である。ＳＫ3021土壙、ＳＤ3009Ａ・Ｂ・3024溝跡より古い。

柱穴は8箇所で検出しており、4箇所で径16㎝の柱痕跡、1箇所で柱抜取穴を確認している。平面規模は桁行が北側柱列で総長5.45m、柱間寸法は東から2.13m、1.63m、1.69m（推定）、梁行が東妻で総長3.55m、柱間寸法は北から1.90m、1.65mとみられる。建物の方向は北側柱列で測るとE15°Ｓである。柱穴は一辺が0.6～0.7mの方形をしており、深さは0.2mである。埋土は黒褐色シルトが主体で、地山ブロックを含むものと地山ブロックが主体で黒褐色シルトを含むものとがある。遺物は柱穴



第30図　SB3404・3409 建物跡柱穴断面図



第31図　Ⅻ区中央部の遺構

埋土から土師器甕が若干出土している。

ＳＢ3408 建物跡（第 31・32 図）

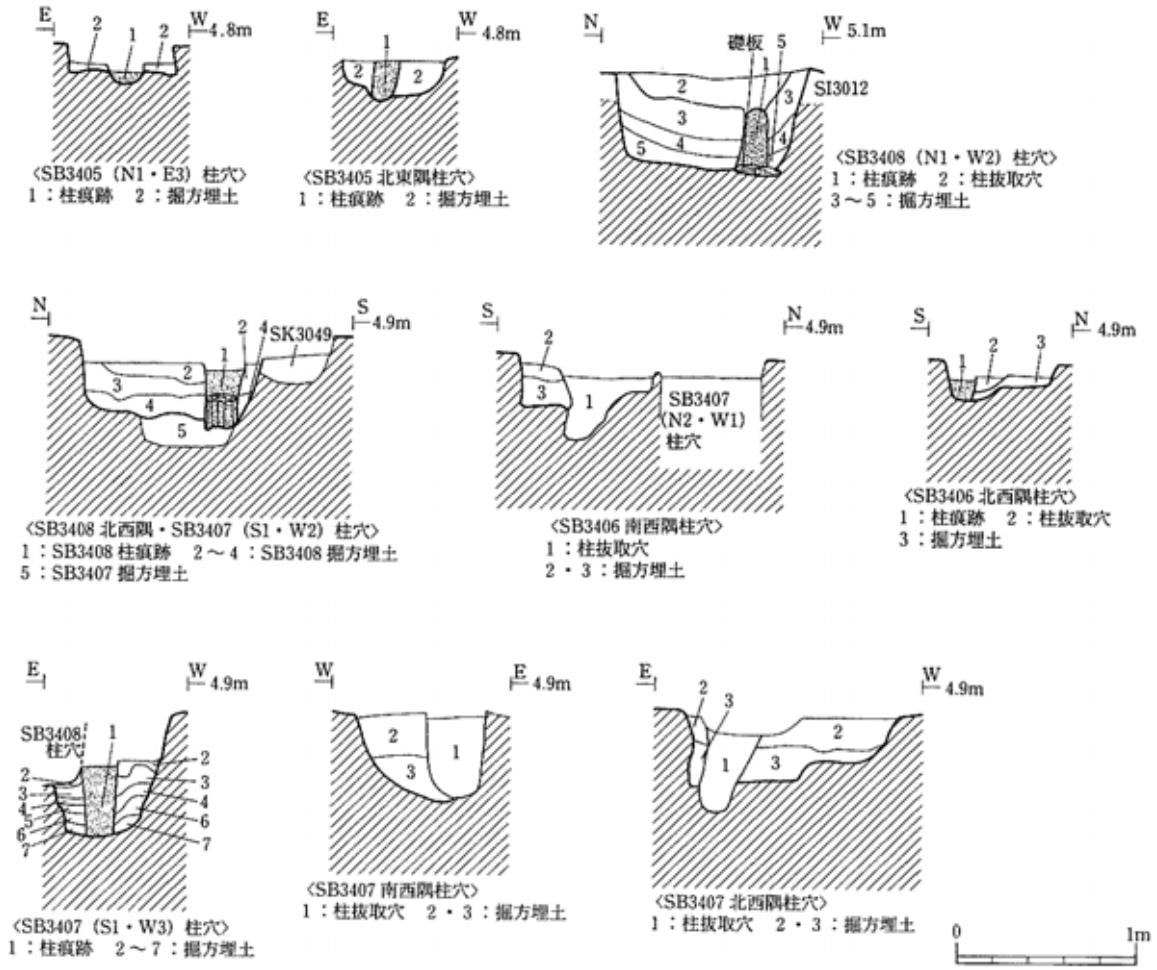
調査区中央部で検出した南北 4 間、東西 2 間以上の南北棟建物跡である。ＳＩ3012 住居跡、ＳＢ3407 建物跡より新しく、ＳＤ2998・3015・3033 溝跡より古い。

柱穴は 7 箇所で検出しており、すべてで径 26cmの柱痕跡、5 箇所で柱抜取穴を確認している。平面規模は桁行が西側柱列で総長 8.83m、柱間寸法は北から 2.24m、2.12m、2.27m、2.19m、梁行が北妻で総長 2.34m以上である。建物の方向は西側柱列で測るとN4°Ｅである。柱穴は一辺が 1.0～1.2mの方形をしており、深さは 0.6mである。埋土は黒褐色もしくは褐灰色シルトが主体で、含まれる地山ブロックの量で細分できる。

遺物は柱穴埋土からロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器の坏・甕が出土している。土師器坏の中には回転ヘラケズリや手持ちヘラケズリが施されているものがあり、須恵器坏の中にはヘラ切りのものや手持ちヘラケズリが施されているもの（第 29 図 2）がある。須恵器坏には底面に「永」と墨書されたものがある（第 29 図 1）。柱痕跡からは須恵器坏が若干出土している。

ＳＢ3406 建物跡（第 31・32 図）

調査区北側で検出した南北 2 間、東西 3 間以上の東西棟建物跡である。ＳＫ3390 土壙より新しく、



第32図　SB3405～3408 建物跡柱穴断面図

ＳＤ3033 溝跡より古い。

柱穴は 6 箇所で検出しており、3 箇所で径 20cmの柱痕跡、3 箇所で柱抜取穴を確認している。平面規模は桁行が南側柱列で総長 4.07m以上、柱間寸法は西から 2.07m、2.00m（推定）、梁行が西妻で総長 4.42m、柱間寸法は北から 2.10m、2.32mとみられる。建物の方向は西妻で測るとN12°Eである。柱穴は一辺が 0.4mの方形もしくは 0.6m×0.8mの長方形をしており、深さは 0.3mである。埋土は黒褐色シルトが主体で、含まれる地山ブロックの量で細分できる。

遺物は柱穴埋土からロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器の坏・甕が微量出土している。柱抜取穴からはロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏が若干出土している。土師器坏の中には手持ちヘラケズリが施されているものがある。

ＳＤ3407 建物跡（第 31・32 図）

調査区北側で検出した南北 2 間、東西 3 間以上の東西棟建物跡である。ＳＩ3012 住居跡、ＳＫ3022 土壙より新しく、ＳＢ3408 建物跡、ＳＫ3021 土壙、ＳＤ3033 溝跡より古い。

柱穴は 6 箇所で検出しており、4 箇所で径 20 ㎝の柱痕跡、5 箇所で柱抜取穴を確認している。平面規模は桁行が南側柱列で総長 3.93m以上、柱間寸法は西から 2.11m、1.82m、梁行が西妻で総長 3.73m、柱間寸法は北から 1.96m、1.77mである。建物の方向は西妻で測るとN9°Eである。柱穴は 0.7m×1.0～1.2mの長方形をしており、深さは 0.7mである。埋土は黒褐色シルトが主体で、地山ブロックを含む層と地山ブロックが主体で黒褐色シルトを含む層との互層である。

遺物は柱穴埋土からロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器の坏・甕が微量出土している。柱抜取穴からは土師器甕、ヘラ切りの須恵器高台坏が若干出土している。

ＳＢ3433 建物跡（第 31 図）

調査区北側で検出した南北 3 間、東西 2 間の南北棟建物跡である。ＳＩ3293 住居跡より新しく、ＳＤ3009Ａ・Ｂ・3396Ａ・Ｂ・3551 溝跡より古い。

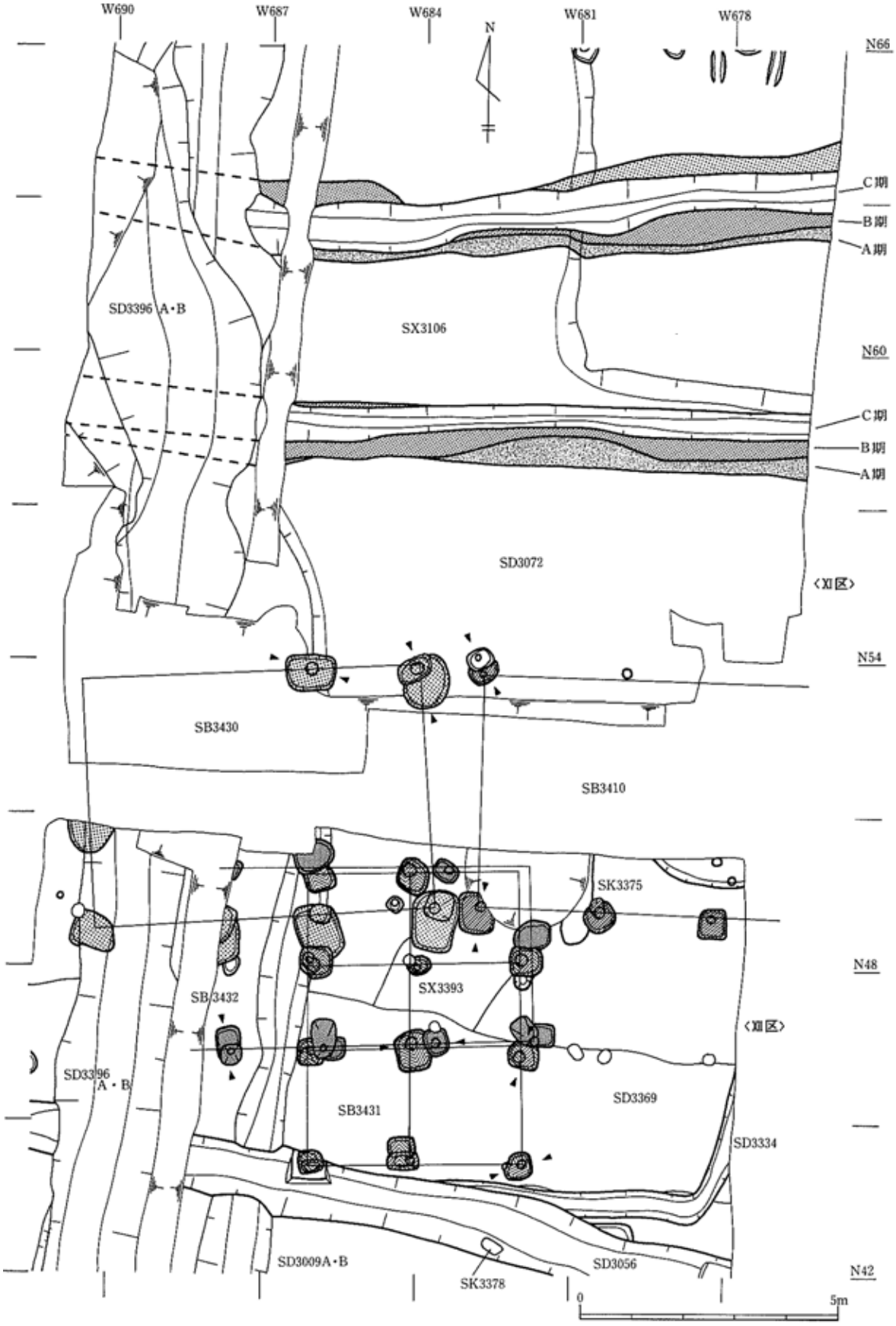
柱穴は 7 箇所で検出しており、1 箇所で柱抜取穴を確認している。平面規模は桁行が東側柱列で総長 6.00m、梁行が北妻で総長 4.80m、建物の方向は東側柱列で測るとN2°Eみられる。柱穴は一辺が 0.6m前後の方形をしており、深さは 0.3mである。埋土は黒褐色粘土質シルトが主体で、地山ブロックを含んでいる。遺物は出土していない。

ＳＢ3410 建物跡（第 33・34 図）

調査区北端からⅫ区南端で検出した南北 2 間、東西 3 間以上の東西棟建物跡である。ＳＫ3375 土壙、ＳＸ3393 より新しく、ＳＤ3072 溝跡より古い。

柱穴は 4 箇所で検出しており、すべてで径 15 ㎝の柱痕跡、1 箇所で柱抜取穴を確認している。平面規模は桁行が南側柱列で総長 4.51m以上、柱間寸法は西から 2.33m、2.18m、梁行が梁行で総長 4.52mである。建物の方向は南妻で測るとほぼ真北を向く。柱穴は一辺が 0.6mの方形をしており、深さは 0.4mである。埋土は黒褐色シルトが主体で、含まれる地山ブロックの量で細分できる。

遺物は柱穴埋土からロクロ調整の土瓶器坏・甕、須恵器の坏・高台坏・甕が少量出土している。このうち、土師器坏は手持ちヘラケズリが施されるものがある。須恵器坏にはヘラ切りや回転糸切りが



第33図　XI区南端からXII区北端の遺構

あり、高台坏は回転糸切りである。柱痕跡からはヘラ切りの須恵器坏が若干出土している。

ＳＢ3430 建物跡（第 33・34 図）

調査区北端からⅫ区南端で検出した南北 2 間、東西 3 間とみられる東西棟建物跡である。ＳＩ3395 住居跡、ＳＸ3393 より新しく、ＳＢ3431 建物跡、ＳＤ3009Ａ・Ｂ・3072・3396Ａ・Ｂ溝跡より古い。

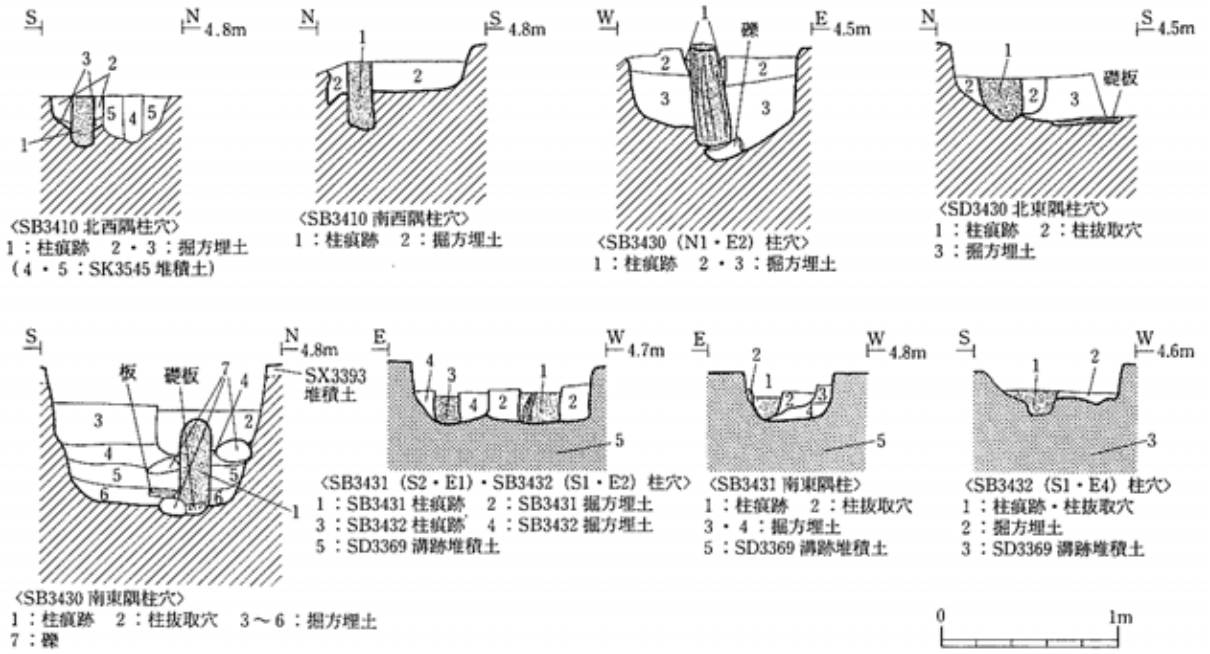
柱穴は 6 箇所で検出しており、5 箇所で径 24 ㎝の柱痕跡、一箇所で柱抜取穴を確認している。うち 1 箇所で柱材、4 箇所で柱の沈下を防ぐ礎板や石が残存していた。柱と礎板については機種同定をおこなった結果、クリであることがわかった。建物の平面規模は桁行が南側柱列で総長 6.32m、柱間寸法は東から 2.21m、4.11m（2 間分）、梁行が東妻で総長 4.59mである。方向は東妻で測るとN4°Ｅである。柱穴は 0.8m×1.0mの長方形をしており、深さは 0.8mである。埋土は黒褐色シルトが主体で、地山ブロックを含む層と地山ブロックが主体で黒褐色シルトを含む層との互層である。

遺物は柱穴埋土からロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器の坏・高台坏・甕が少量出土している。須恵器坏の中にはヘラ切りがある。柱痕跡や柱抜取穴からはロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕が若干出土している。

ＳＢ3431 建物跡（第 33・34 図）

調査区北端で検出した南北 3 間、東西 2 間とみられる南北棟総柱建物跡である。ＳＢ3430 建物跡、ＳＤ3056・3369 溝跡、ＳＸ3393 より新しく、ＳＢ3432 建物跡、ＳＤ3009Ａ・Ｂ溝跡より古い。

柱穴は 11 箇所で検出しており、9 箇所で径 20 ㎝の柱痕跡、5 箇所で柱抜取穴を確認している。平面規模は桁行が西側柱列で総長 5.85m、柱間寸法は北から 1.77m、1.77m、2.31m、梁行が南妻で総長 4.00m、柱間寸法は西から 1.82m、2.18mとみられる。建物の方向は西側柱列で測るとN3°Ｗである。柱穴は一辺が 0.4～0.8mの方形をしており、深さは 0.3mである。埋土は黒褐色シルトが主体で、これに含まれる地山ブロックの量で細分できる。



第34図　SB3410・3430～3432 建物跡柱穴断面図

遺物は柱穴埋土からロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器の坏・甕が少量出土している。このうち、土師器坏は回転ヘラケズリが施されるものがある。須恵器坏にはヘラ切りや回転糸切りがあり、手持ちヘラケズリが施されるものもある。柱痕跡や柱抜取穴からは土師器甕、回転糸切りの須恵器坏が若干出土している。

ＳＢ3432 物跡（第 33・34 図）

調査区北端で検出した南北 2 間、東西 4 間以上の東西棟建物跡である。ＳＢ3431 建物跡、ＳＤ3369 溝跡、ＳＸ3393 より新しく、ＳＤ3009Ａ・Ｂ・3396Ａ・Ｂ溝跡より古い。

柱穴は 8 箇所で検出しており、5 箇所で径 15cmの柱痕跡、3 箇所で柱抜取穴を確認している。平面規模は桁行が南側柱列で総長 5.86m以上、柱間寸法は東から 1.83m、2.23m、1.80m、梁行が東妻で総長 5.86m、柱間寸法は北から 1.30m、2.10mとみられる。建物の方向は南側柱列で測るとＥ3°Ｎである。柱穴は 0.4～0.5m×0.5～0.7mの長方形をしており、深さは 0.4mである。埋土は黒褐色シルトが主体で、これに含まれる地山ブックの量で細分できる。

遺物は柱穴埋土からロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕、丸瓦が微量出土している。須恵器坏の中には回転糸切りがある。柱抜取穴からはロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・壷・甕が若干出土している。このうち、土師器坏は手持ちヘラケズリが施されるものがあり、須恵器坏の中には回転糸切りがある。

（2）その他の遺構

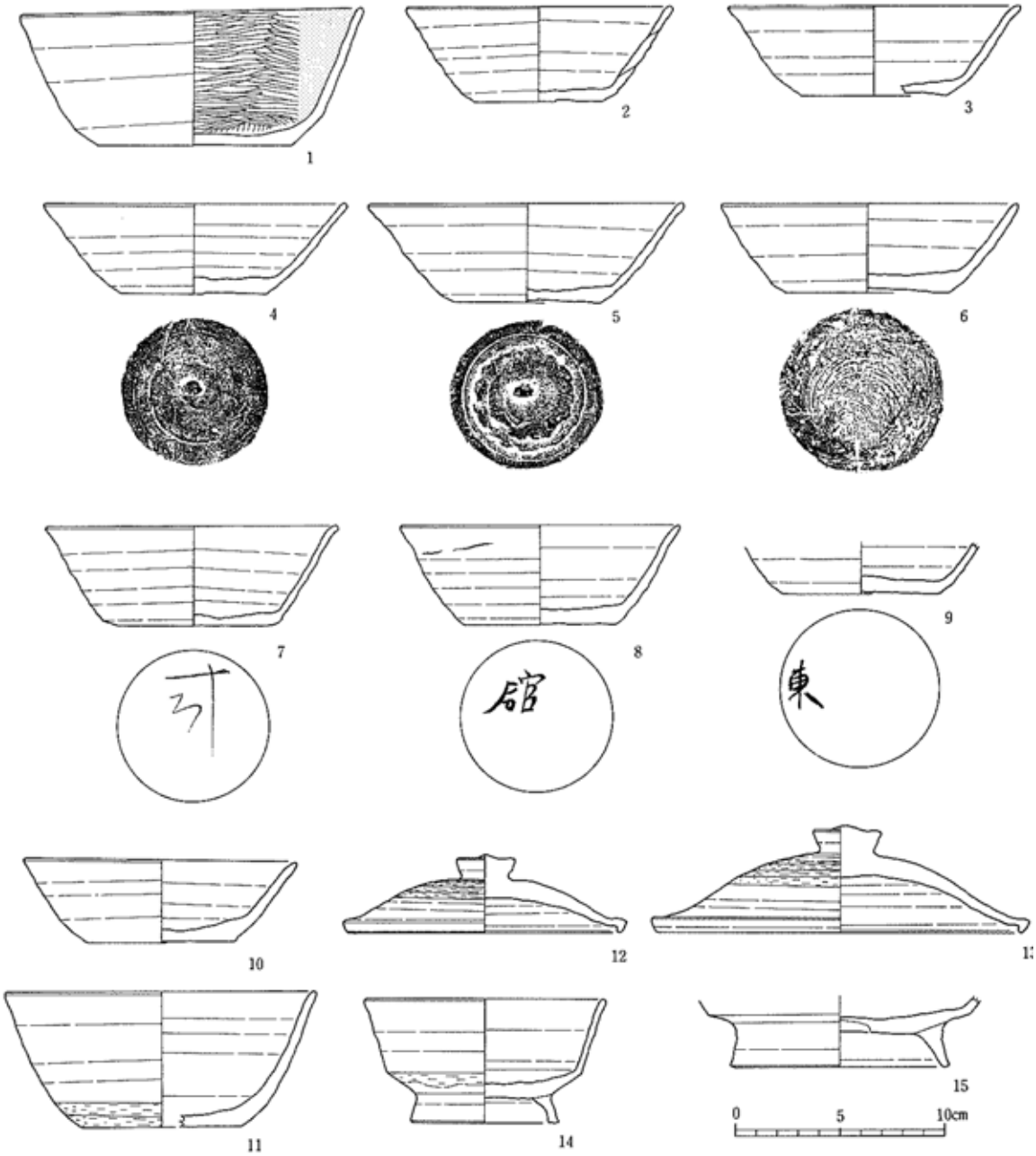
ＳＫ3014 土壙（第 31・36 図）

調査区中央部で検出した土壙である。ＳＢ3409 建物跡、ＳＫ3031 土壙より新しく、ＳＫ3021 土壙、ＳＤ3015 溝跡より古い。東西 1.5m、南北 2.1mの楕円形で、深さは 0.6mである。底面はほぼ平坦で、壁は比較的急に立ち上がる。堆積土は 11 層に分けられたが、3 層に大別できる。3 層は壁の崩壊土と植物遺体や木片を多量に含む黒褐色出土質シルトで、底面を直接覆っている。2 層は炭化物層と灰・焼土・炭化物・地山ブロックを含む黒褐色シルトとの互層である。1 層は焼土や炭化物を多く含む黒色シルトである。いずれも人為堆積土で、1 層と 2 層の遺物には接合関係が多く認められることから、本土壙は短期間のうちに埋め戻されたと考えられる。

遺物は底面から須恵器坏が出土している（第 35 図 6）ほかは、第 1 層と第 2 層からロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・高台坏・椀・高台盤・蓋・壷・甕、製塩土器、砥石などが出土している（第 35 図、第 37 図 1～3）。食膳具は須恵器が多く、なかでも器形は逆台形でヘラ切りの坏が主体を占めている。墨書土器は 4 点出土している（第 35 図 7～9、第 37 図 1）。このうち読みがわかるのは 3 点で、「館」、「陳」、「主」と書かれている。墨書の位置は 3 点が須恵器坏の底面、1 点は須恵器蓋のつまみ上面である。

ＳＫ3524 土壙（第 29・36 図）

調査区中央部西側で検出した土壙である。ＳＤ3396Ａ溝跡より古い。平面形は歪んだ円形とみられ、規模は東西 1.3m以上、南北 1.7m、深さは 0.1mである。断面形は舟底形である。堆積土は炭化物を多



（単位：cm）

No.	種別	層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	分類	写真図版
1	土師器・坏	2 層	外面：ロクロナデ、ヘラ切り　内面：ヘラミガキ→黒色処理	16.5	9.3	(6.5)	1/2	B Ⅰ a	35－7
2	須恵器・坏	2 層	外面：ロクロナデ、ヘラ切り→手持ちヘラケズリ　内面：ロクロナデ	(12.8)	6.2	4.6	1/2	A Ⅱ a	
3	須恵器・坏	2 層	外面：ロクロナデ、ヘラ切り　内面：ロクロナデ	(14.0)	(7.0)	4.3	1/4	A Ⅱ a	
4	須恵器・坏	1 層	外面：ロクロナデ、ヘラ切り　内面：ロクロナデ	14.6	7.1	4.4	4/5	A Ⅱ a	35－2
5	須恵器・坏	1 層	外面：ロクロナデ、ヘラ切り　内面：ロクロナデ	(15.2)	7.1	4.8	3/5	A Ⅱ a	35－5
6	須恵器・坏	底面	外面：ロクロナデ、回転糸切り→手持ちヘラケズリ　内面：ロクロナデ	14.2	7.8	4.3	9/10	A Ⅰ b2	35－1
7	須恵器・坏	2 層	外面：ロクロナデ、ヘラ切り　内面：ロクロナデ　底面に墨書「□」	14.0	7.3	4.8	9/10	A Ⅱ a	35－4
8	須恵器・坏	2 層	外面：ロクロナデ、ヘラ切り　内面：ロクロナデ　底面に墨書「館」	(13.4)	7.3	4.8	1/2	A Ⅱ a	35－3
9	須恵器・坏	2 層	外面：ロクロナデ、ヘラ切り　内面：ロクロナデ　底面に墨書「東」	－	7.6	－	1/3		41－3
10	須恵器・坏	2 層	外面：ロクロナデ、ヘラ切り　内面：ロクロナデ	13.1	7.2	4.0	3/5	A Ⅰ a	
11	須恵器・坏	1 層	外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ　内面：ロクロナデ	15.0	9.6	6.5	破片	A Ⅲ c1	35－8
12	須恵器・坏蓋	2 層	扁平な宝珠形つまみ(径：2.8)　外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ→つまみ接合後ロクロナデ　内面：ロクロナデ	13.6	－	3.8	4/5	C	35－6
13	須恵器・坏蓋	2 層	扁平な宝珠形つまみ(径：3.3)　外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ→つまみ接合後ロクロナデ　内面：ロクロナデ	18.1	－	5.2	3/4	A	35－10
14	須恵器・高台坏	1 層	外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ→高台接合後ロクロナデ　内面：ロクロナデ	(11.6)	7.0	6.0	2/5	B	35－9
15	須恵器・高台盤	1 層	外面：ロクロナデ→ヘラ切り？→回転ヘラケズリ→高台接合後ロクロナデ　内面：ロクロナデ	－	(10.4)	－	一部		

第35図　SK3014 土壙出土遺物

く含む黒褐色シルトである。底面から回転糸切りののち体部下端に手持ちヘラケズリが施された須恵器坏が1点出土している（第37図5）。

ＳＫ2968土壙（第25図）

調査区南側で検出した土壙である。ＳＥ2965 より古く、ＳＫ2973 との新旧関係は不明である。平面形は隅丸方形とみられ、規模は東西0.7m、南北0.8m以上、深さは0.2mである。断面形は舟底形である。堆積土は灰黄褐色シルトで、自然堆積である。堆積土から回転糸切りの須恵器坏が1点出土している（第37図7）。

ＳＫ3042土壙（第31・36図）

調査区北側で検出した土壙である。東西2.9m、南北2.0mの隅丸方形で、深さは0.3mである。底面は西に向けて緩やかに傾斜しており、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は3層に分けられる。3層は褐灰色シルトで、底面をうすく覆っている。2 層は炭化物層で 3 層上面に部分的に認められる。1層は地山ブロックや炭化物を多く含む褐灰色シルトである。1・2層は人為堆積土と考えられる。

遺物は3層からヘラ切りの須恵器坏、1層からロクロ調整の土師器坏・皿・甕が出土しているが、量は少ない。1 層の土師器坏は手持ちヘラケズリが施されるものがあり、須恵器坏はヘラ切りと糸切りがある。

ＳＸ2999土器埋設遺構（第28・36図）

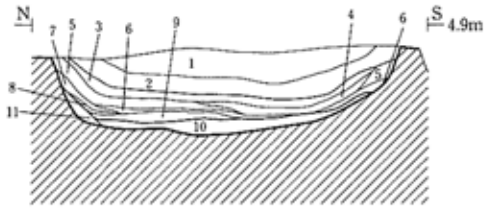
調査区南側で検出した土器埋設遺構である。据え方は径が 17 ㎝の円形をなす。断面形はU字形で深さは17cmある。底面から5㎝ほど上にヘラ切りの須恵器坏（第37図4）を正位に据えている。埋土は地山粒を多く含む黄灰色シルトである。本遺構の位置と土器の年代からみてＳＢ3400建物跡にともなう地鎮跡と考えられる。

ＳＤ3056溝跡（第33図）

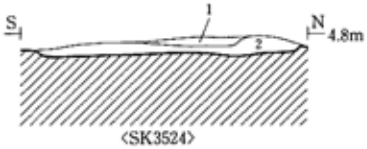
調査区北端で検出した東西溝跡である。長さ14.3m分を確認した。ＳＫ3378土壙、ＳＤ3334・3369溝跡より新しく、ＳＢ3431建物跡、ＳＤ3009Ａ・Ｂ・3396Ａ・Ｂ溝跡より古い。上幅は1.0～1.4m、底面幅が0.3～0.7m、深さが0.3mで断面形は皿形である。方向はE12°Ｓ前後である。堆積土は2層に分けられる。2層は底面をうすく覆う黒色粘土、1層は地山ブロックを含む黒褐色シルトで、いずれも自然堆積と考えられる。遺物は堆積土からロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕、土錘（第37図10）が少量出土している。須恵器坏にはヘラ切りがある。

ＳＤ3334溝跡（第33図）

調査区北端で検出した「Ｌ」字形の溝跡である。ＳＤ3369 溝跡より新しく、ＳＤ3056 溝跡より古い。上幅は0.4～0.6m、底面幅が0.3～0.4m、深さが0.1mで断面形は皿形である。堆積土は地山ブロックを少し含む黒褐色シルトで、自然堆積とみられる。遺物は堆積土からロクロ調整の土師器坏・甕が微量出土している。



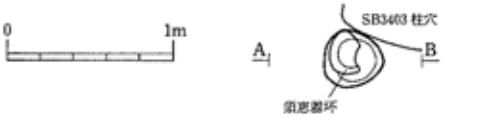
〈SK3014〉

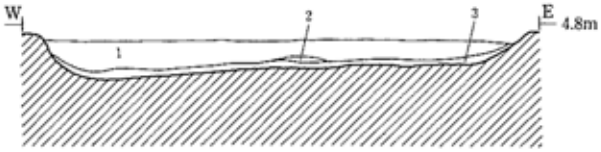


〈SK3524〉

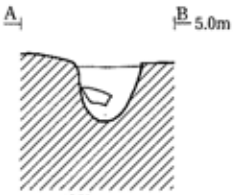
層No.	土色・土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR3/1)シルト	炭化物を多く含む	
2	黒褐色(2.5Y3/2)シルト	地山ブロックを多く含む	

層No.	土色・土性	混入物など	備考
1	黒色(10YR2/1)シルト	地山シルトの小ブロック・炭化物・焼土を含む	大別1層
2	黒色(10YR2/1)シルト	地山シルトを含む。炭化物・焼土を多く含む	
3	黒色(10YR2/1)シルト	炭化物・灰・焼土を多く含む	大別2層
4	灰＋焼土層	炭化物を多く含む	
5	黒褐色(10YR3/1)シルト	地山シルトブロックを多く含む。炭化物を含む	
6	炭化物層		
7	黒褐色(10YR3/1)シルト	地山シルトブロックを多く含む。炭化物を含む	
8	炭化物層		
9	黒褐色(10YR2/2)粘土質シルト	地山をブロック状に含む	
10	黒褐色(10YR2/2)粘土質シルト	植物遺体・木片を多く含む	大別3層
11	灰黄褐色(10YR5/2)砂質シルト	黒褐色シルトを含む	





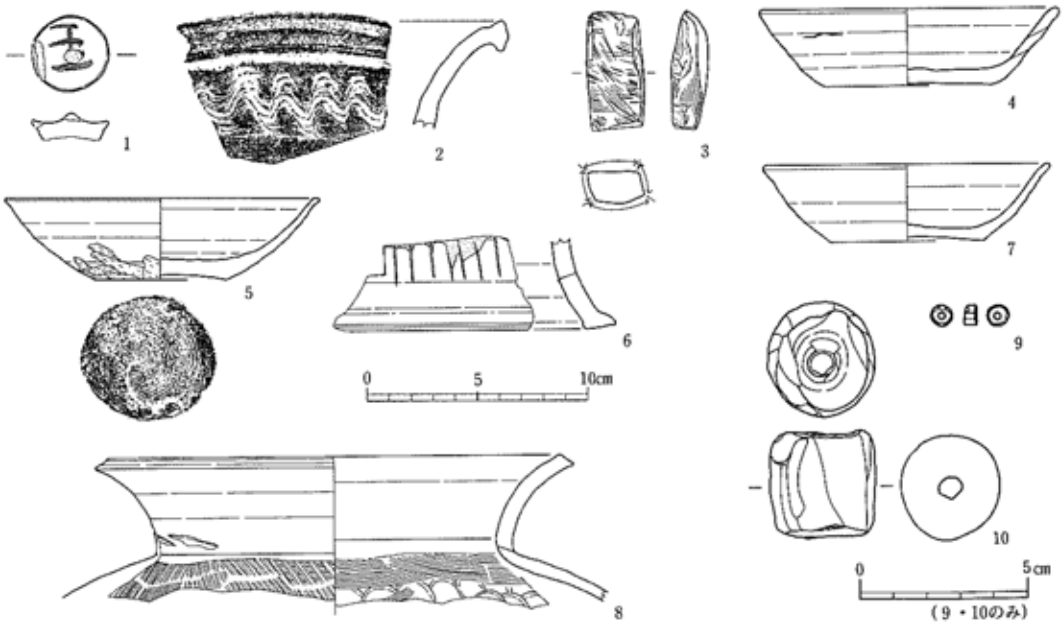
〈SK3042〉



〈SX2999〉

層No.	土色・土性	混入物など	備考
1	暗灰色(10YR4/1)シルト	地山ブロック・炭化物を多く含む	人為堆積土
2	黒色(10YR1.7/1)粘土質シルト		炭化物層
3	暗灰色(10YR5/1)シルト		

第36図　SK3014・3042・3524 土壙、SX2999 土器埋設遺構断面図



(9・10のみ)

(単位：cm)

No.	種別	出土遺構・層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	分類	写真図版
1	須恵器・坏蓋	SK3014・2層	扁平な宝珠形つまみ(径：3.5)　つまみ上端に墨書「玉」	－	－	－	一部		41－2
2	須恵器・大甕	SK3014・1層	外面：ロクロナデ→櫛描波状文　内面：ロクロナデ	－	－	－	一部	A	
3	砥石	SK3014・2層							
4	須恵器・坏	SX2999	外面：ロクロナデ、ヘラ切り　内面：ロクロナデ	13.6	7.6	3.5	3/4	A1a	39－8
5	須恵器・坏	SK3524・底部	外面：ロクロナデ、回転糸切り→手持ちヘラケズり　内面：ロクロナデ	(14.1)	6.0	3.7	2/5	BⅢb2	
6	須恵器・円面硯	表土	外面：ロクロナデ→透かし、縦位沈線　内面：ロクロナデ	－	－	－	一部		39－11
7	須恵器・坏	SX2968	外面：ロクロナデ、回転糸切り　内面：ロクロナデ	(13.1)	(6.9)	3.6	1/3	BⅢb	
8	須恵器・甕	SK3054・堆積土	外面：(口～頸) ロクロナデ (胴) 平行タタキ(木目斜交)　内面：(口～頸) ロクロナデ (胴) 無文アテ具→ナデ	(21.6)	－	－	一部	B	
9	白玉	SD0945・堆積土	径0.6　厚0.4　孔径0.2						34－7
10	土錘	SD0056・堆積土	径3.4　高3.2　孔径0.6～0.7						39－13

第37図　Ⅻ区遺構・表土出土遺物

3．江戸時代以降

主な検出遺構としては掘立柱建物跡 21、区画溝跡 4、井戸跡 14、土壙 3、溝跡 10 がある。遺構は調査区の中央から南側に掘立柱建物跡、井戸跡、土壙などが密に分布し、北側には掘立柱建物跡、溝跡、土壙などが疎らに分布している（第 38.39 図）。確認面は古代の遺構と同じく第 4 層である。しかし、堆積土は黒褐色の粘土やシルトを主体とするという特徴が古代の遺構と著しく異なること、出土遺物に近世の陶磁器や銭がみられることから、同一面で確認した古墳時代中期や奈良・平安時代の遺構と区別できる。出土遺物には陶磁器・土師質土器・瓦質土器・土製品・瓦・木製品・金属製品などがある。

（1）掘立柱建物跡

ＳＢ3439 建物跡（第 40 図・41 図）

調査区南端で検出した東西 3 間、南北 2 間の東西棟建物跡である。ＳＢ3540 建物跡より新しい。横穴は 9 箇所で検出しており、うち 3 箇所で径 16 ㎝の柱痕跡、5 箇所の柱穴で礎板として用いられた石や瓦を確認している。平面規模は桁行が北側柱列で総長 6.32m、柱間寸法は東から 2.29m、2.12m、1.91m、梁行が西妻で総長 2.83m、柱間寸法は北から 1.38m、1.46mである。

建物の方向は北側柱列でみると、E6°Ｓである。柱穴は一辺が 30 ㎝前後の隅丸方形のものと径 30 ㎝前後の円形のものがあり、深さは最も残りの良いもので 15 ㎝ある。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。遺物は出土していない。

ＳＢ3440 建物跡（第 40・41 図）

調査区南端で検出した南北 1 間以上、東西 2 間以上の建物跡である。柱穴は 3 箇所で検出しており、うち 1 箇所で径 14 ㎝の柱痕跡を確認している。平面規模は不明で柱間寸法は北側柱列で 2.23m以上、西側柱列で 2.64m以上である。

建物の方向は西側柱列でみるとN5°Ｅである。柱穴は径 26 ㎝の円形で、深さは 15 ㎝ある。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。遺物は出土していない。

ＳＢ3441 建物跡（第 40・41 図）

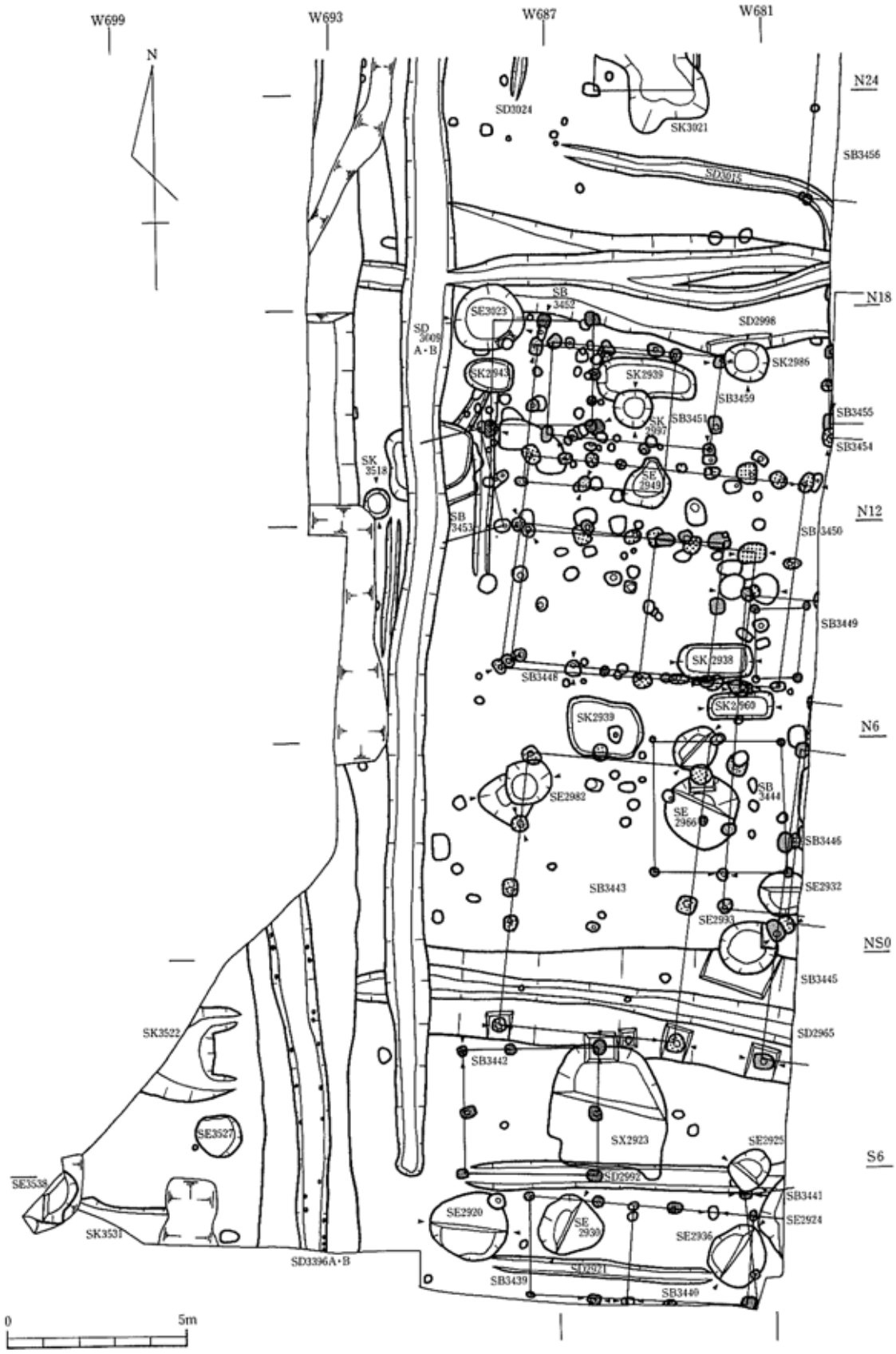
調査区南端で検出した南北 2 間以上、東西 1 間以上の建物跡である。ＳＤ2992 溝跡、ＳＥ2936 井戸跡より新しく、ＳＥ2925 井戸跡より苦い。

柱穴は 3 箇所で検出しており、すべての柱穴で径 13 ㎝の柱痕跡を確認している。平面規模は不明で柱間寸法は西側柱列で北から 2.27m、0.90m以上である。建物の方向は西側柱列でみるとN6°Ｗである。柱穴は一辺 25cm前後の隅丸方形で、深さは 20 ㎝ある。埋土は地山ブロックを少量含む黒色シルトである。遺物は出土していない。

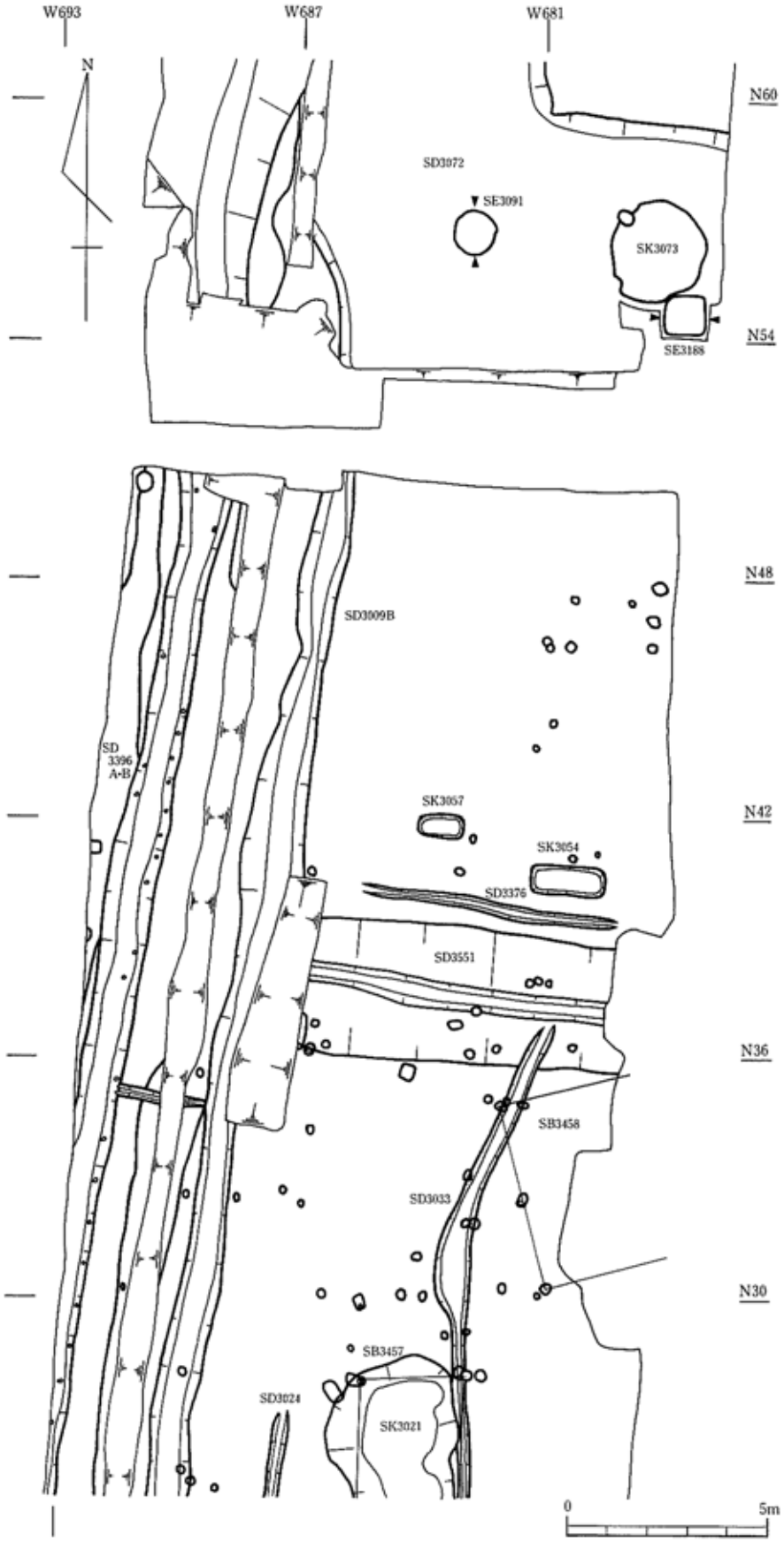
ＳＢ3442 建物跡（第 40・41 図）

調査区南側で検出した東西 3 間、南北 2 間とみられる東西棟建物跡である。ＳＩ2983 住居跡、ＳＤ2992・2965 溝跡、ＳＸ2923 より新しい。

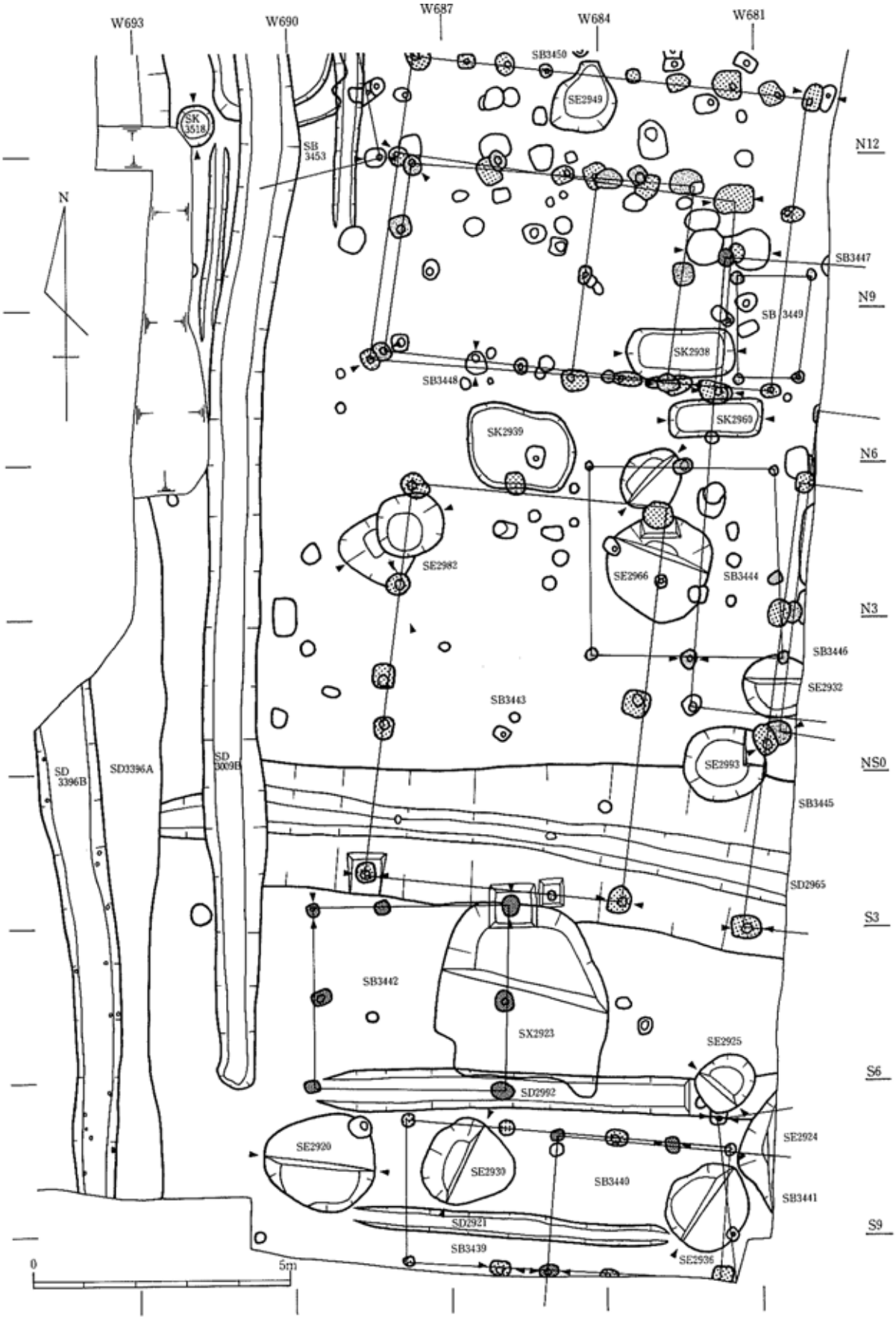
柱穴は 7 箇所で検出しており、3 箇所で径 12cmの柱痕跡、2 箇所で柱抜取穴を確認している。平面規模は桁行が北側柱列で総長 3.82m、柱間寸法は西から 1.35m、2.46m（2 間分）、梁行が東妻で総長



第38図　Ⅲ区の検出遺構（江戸時代以降）（1）



第39図　Ⅲ区の検出遺構（江戸時代以降）（２）



第40図　Ⅻ区南部の遺構

3.57m、柱間寸法は北から1.83m、1.74mとみられる。

建物の方向は東妻でみるとN1°Eである。柱穴は一辺が21～43cmの隅丸方形で、深さは35㎝である。埋土は地山ブロックを含む黒色や黒褐色のシルトである。遺物は出土していない。

ＳＢ3443建物跡（第40・41図）

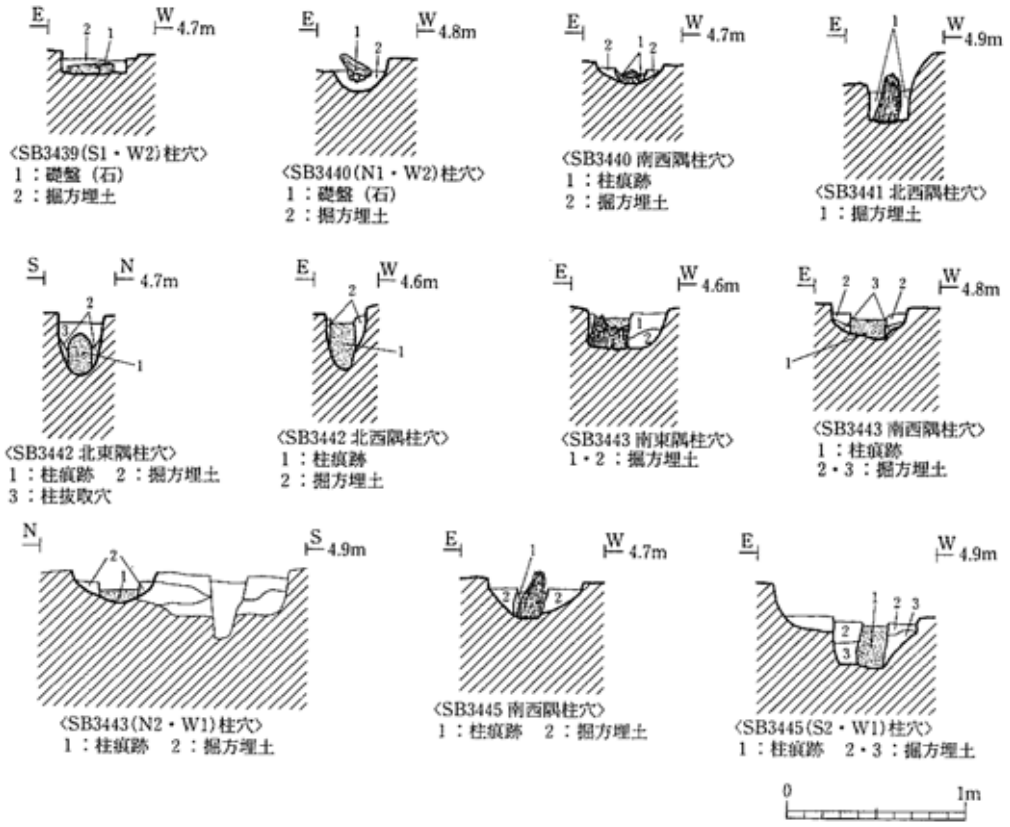
調査区南側で検出した南北4間、東西2間の南北棟建物跡である。ＳＩ2988住居跡、ＳＢ3400建物跡、ＳＥ2966・2976井戸跡、ＳＤ2965溝跡、ＳＸ2994より新しく、ＳＥ2982井戸跡より古い。

柱穴は11箇所で検出しており、1箇所で径15～23㎝の柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が西側柱列で総長7.46m、柱間寸法は桁行が西側柱列で北から1.88m、1.86m、0.89m、2.83m、梁行が北妻で総長4.77m、柱間寸法は東から2.87m、1.90mである。建物の方向は西側柱列でみると、N7°Eである。柱穴は一辺23～55cmの隅丸方形で、深さは43㎝ある。埋土は地山ブロックを含む黒色や黒褐色のシルトである。遺物は出土していない。

ＳＢ3445建物跡（第40・41図）

調査区南側で検出した南北3間以上、東西1間以上の南北棟建物跡である。西側柱列のみ確認した。ＳＢ3400・3446建物跡、ＳＥ2993井戸跡、ＳＤ2965溝跡より新しい。

柱穴は4箇所で検出しており、うち2箇所で径16㎝ほどの柱痕跡を確認している。平面規模は不明で、西側柱列は総長8.70m以上、柱間寸法は北から2.54m、3.18m、3.59mである。建物の方向はN8°Eである。柱穴は一辺が42～55㎝の隅丸方形で、深さは30㎝ある。埋土は地山ブロックを多く含む黒色や黒褐色のシルトである。遺物は出土していない。



第41図　SB3439・3440・3442・3443・3445建物跡柱穴断面図

ＳＢ3446 建物跡（第 40 図）

調査区南側で検出した南北 3 間以上、東西 1 間以上の南北棟建物跡である。西側柱列のみ確認した。ＳＢ3400・3401 建物跡、ＳＥ2993 井戸跡より新しく、ＳＢ3445 建物跡より古い。

柱穴は 4 箇所で検出しているが、柱痕跡は確認していない。平面規模は不明で、桁行が西側柱列で総長 6.26m以上、柱間寸法は北から 1.01m、2.88m、2.37mである。建物の方向はN10°Ｅである。柱穴は一辺が 30～50cmの隅丸方形で、深さは 30cmある。埋土は地山ブロックを含む黒褐色のシルトである。遺物は出土していない。

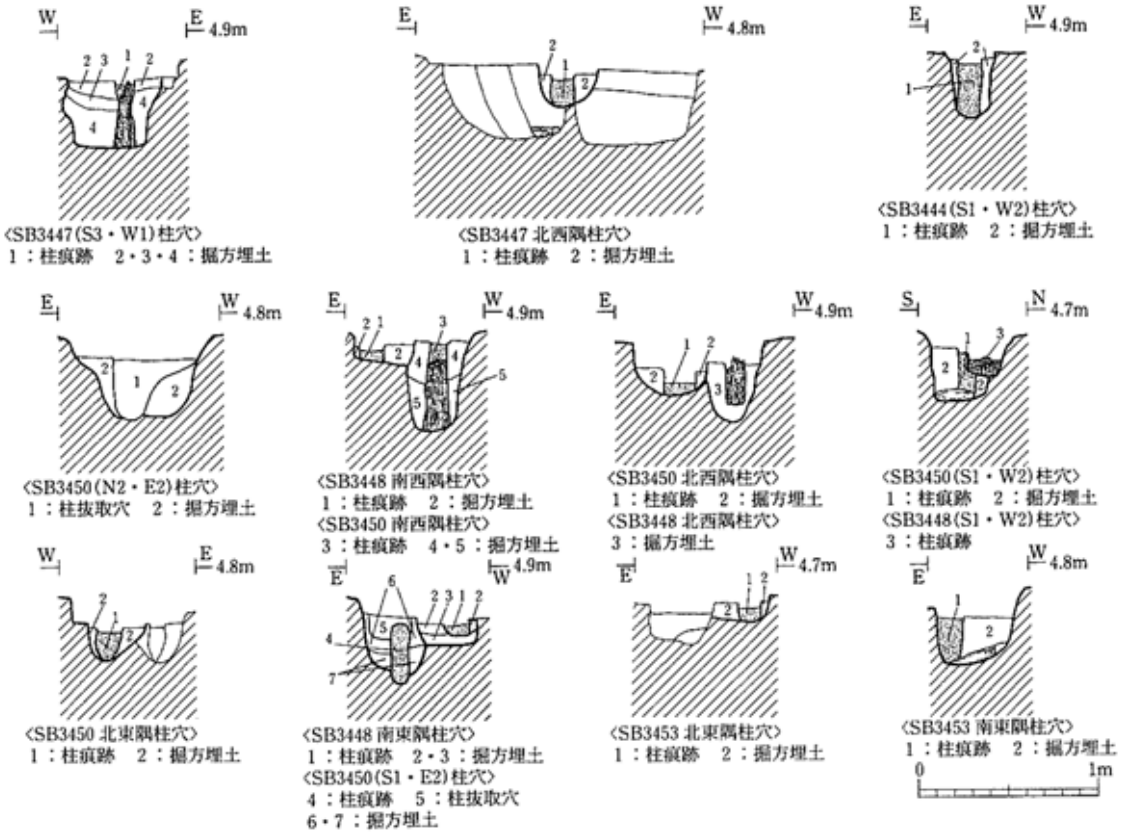
ＳＢ3447 建物跡（第 40・42 図）

調査区南側で検出した南北 5 間以上、東西 2 間以上の南北棟建物跡である。ＳＢ3450 建物跡、ＳＥ2966 井戸跡より新しく、ＳＫ2960 土壙より古い。

柱穴は 7 箇所で検出しており、うち 5 箇所で径 15cmの柱痕跡、1 箇所で柱抜取穴を確認している。平面規模は不明で、桁行は西側柱列で総長 8.88m、柱間寸法は北から 1.28m、1.44m、2.10m、1.87m、2.19mである。建物の方向は西側柱列で測るとN6°Ｅである。柱穴は一辺が 37～65cmの隅丸方形もしくは円形で、深さは 40cmある。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。遺物は出土していない。

ＳＢ3444 建物跡（第 40・41 図）

調査区南側で検出した東西 2 間、南北 2 間以上の東西棟建物跡である。ＳＩ2988 住居跡、ＳＢ3401 建物跡、ＳＥ2976・2932 井戸跡より新しい。柱穴は 7 箇所で検出しており、2 箇所で径 16cmの柱痕跡を確



第42図　SB3444・3447・3448・3450・3453 建物跡柱穴断面図

認している。平面規模は桁行が北側柱列で総長3.60m、柱間寸法は東から1.77m、1.83m、梁行が東妻で総長3.64m、柱間寸法は北から2.13m、1.51mである。建物の方向は西妻でみるとN1°Wである。柱穴は一辺が20㎝～35cmの隅丸方形もしくは円形で、深さは30㎝ある。埋土は地山ブロックを微量に含む黒褐色シルトである。遺物は出土していない。本建物跡は位置からみてＳＥ2966井戸跡の上屋と考えられる。

ＳＢ3448建物跡（第40・42図）

調査区中央で検出した東西4間、南北2間の東西棟建物跡である。ＳＩ3022住居跡、ＳＢ3450建物跡より新しく、ＳＫ2938土壙より古い。

柱穴は12箇所で検出しており、8箇所で径15㎝の柱痕跡、2箇所で柱抜取穴を確認している。平面規模は桁行が北側柱列で総長5.50m、柱間寸法は東から1.09m、0.59m、2.21m、1.62m、梁行が東妻で総長3.70m、柱間寸法は北から1.63m、2.07mである。建物の方向は西妻でみるとN8°Eである。

柱穴は一辺もしくは直径が34㎝～64㎝の隅丸方形や円形で、深さは30㎝ある。埋土は地山ブロックを含む黒褐色や褐色のシルトである。遺物は出土していない。

ＳＢ3449建物跡（第40図）

調査区中央で検出した南北1間、東西1間の南北棟建物跡である。

柱穴は4箇所で検出しており、2箇所で径13㎝の柱痕跡を確認している。南東隅柱穴では柱材を確認しており、樹種同定をおこなったところスギ材であることがわかった。平面規模は桁行が西側柱列で1.96m、梁行が南妻で1.26mである。建物の方向は西側柱列でみるとN4°Eである。柱穴は径25㎝の円形で、深さは22㎝ある。埋土は地山ブロックを含む黒褐色のシルトである。遺物は出土していない。

ＳＢ3450建物跡（第42・43図）

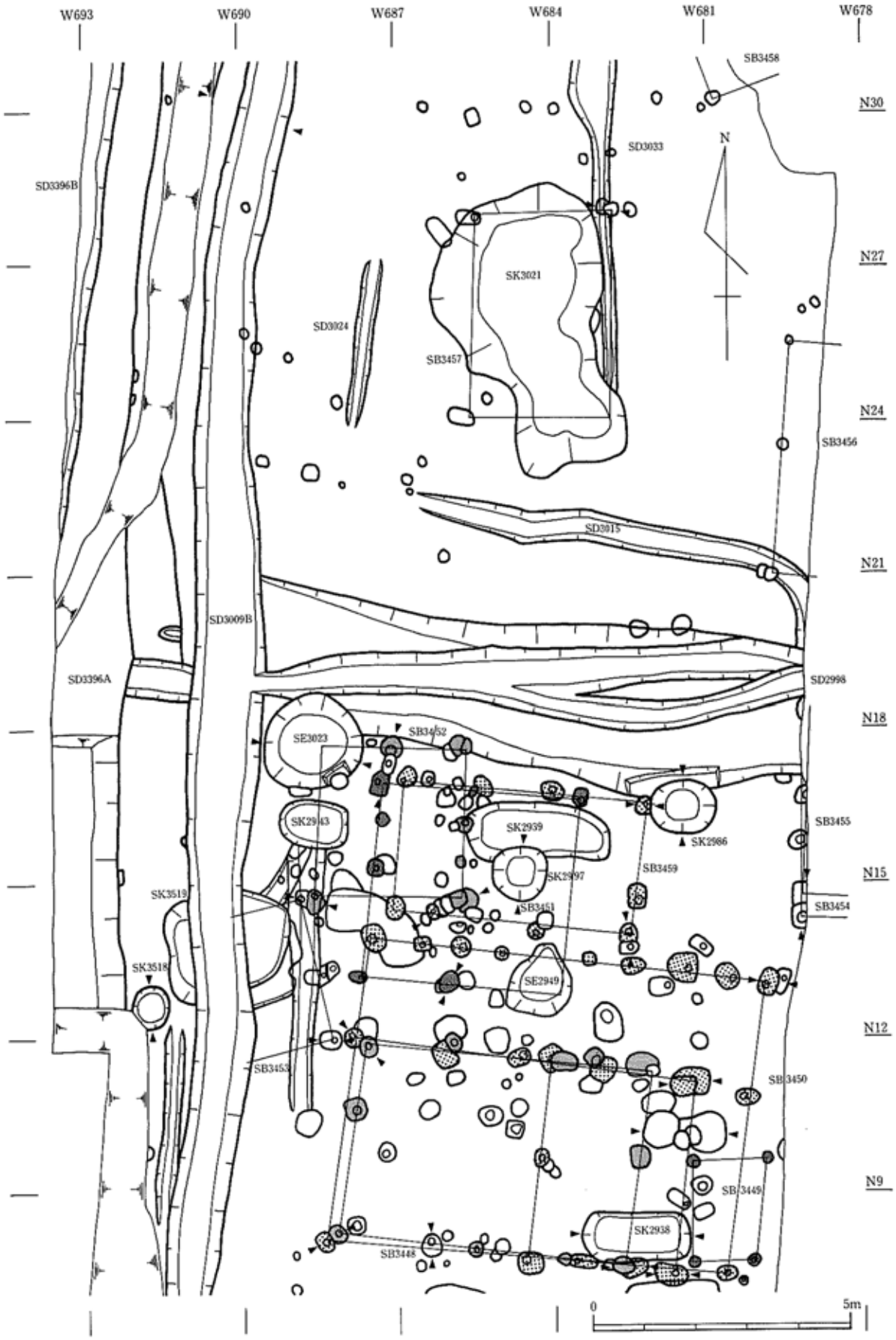
調査区中央で検出した東西5間、南北3間の東西棟建物跡である。北と東に廂がつき、身舎の東から2間目に間仕切りがある。ＳＩ3022住居跡、ＳＢ3400建物跡、ＳＫ2945土壙より新しく、ＳＢ3448・3447建物跡、ＳＫ2938・2960土壙より古い。

柱穴は26箇所で検出しており、17箇所で径15㎝の柱痕跡、5箇所で柱抜取穴を確認している。また、6箇所で柱材を確認しており樹種同定をおこなったところ、クリであることがわかった。平面規模は桁行が身舎北入側柱列で総長6.63m、柱間寸法は西から1.75m、1.55m、0.53m、1.00m、1.90m、廂の出は1.03mである。梁行が東入側柱列で総長3.62m、柱間寸法は南から1.35m、1.35m、0.92m、廂の出は1.89mである。建物の方向は西妻でみるとN10°Eである。柱穴は一辺もしくは直径30～75㎝の隅丸方形や円形で、深さは45㎝ある。埋土は地山ブロックを含むにぶい黄褐色や黒褐色のシルトである。遺物は出土していない。

ＳＢ3453建物跡（第42・43図）

調査区中央で検出した南北2間、東西1間以上の鏡物跡である。ＳＢ3452建物跡、ＳＤ3009Ａ・Ｂ・3396Ａ・Ｂ区画溝跡、ＳＤ3024溝跡よりも古い。

柱穴は3箇所で検出しており、3箇所で径12㎝ほどの柱痕跡、1箇所で礎板に用いられた石を確認



第43図　Ⅻ区中央部の遺構

している。平面規模は不明で、東側柱列は総長2.94m、柱間寸法は北から1.62m、1.32mである。建物の方向は東側柱列で測るとN14°Wである。柱穴は径30㎝の楕円形で、深さは30㎝ある。埋土は地山ブロックを含む黄褐色や黒褐色のシルトである。遺物は出土していない。

ＳＢ3459建物跡（第43・44図）

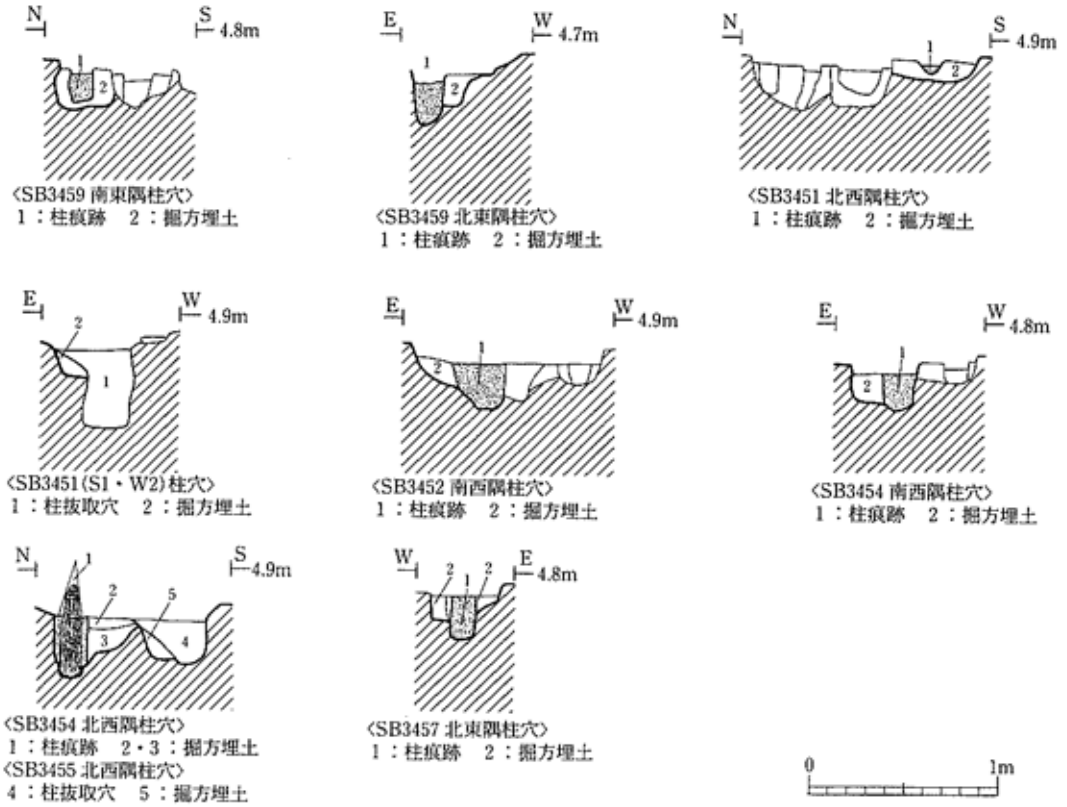
調査区中央で検出した東西3間、南北2間の東西棟建物跡である。ＳＤ2998溝跡より新しく、ＳＢ3451建物跡、ＳＫ2986土壙より苦い。

柱穴は9箇所で検出しており、7箇所で径15㎝の柱痕跡、1箇所で柱抜取穴を確認している。このうち3箇所の柱穴で柱材を確認しており、樹種同定をおこなったところスギであることがわかった。平面規模は桁行が北側柱列で総長4.79m、柱間寸法は東から1.86m、1.53m、1.41m、梁行が東妻で総長2.44m、柱間寸法は北から1.84m、0.60mである。建物の方向は東側柱列で測るとN8°Eである。柱穴は径27～48㎝の円形で、深さは25cmある。埋土は地山ブロックを含む黒色や黒褐色のシルトである。遺物は出土していない。

ＳＢ3451建物跡（第43・44図）

調査区中央で検出した南北4間、東西2間とみられる南北棟建物跡である。ＳＢ3459・3409建物跡より新しく、ＳＥ2949井戸跡より古い。

柱穴は7箇所で検出しており、5箇所で径15cmの柱痕跡、1箇所で柱抜取穴を確認している。平面規模は桁行が西側柱列で総長3.85m、柱間寸法は北から0.77m、0.85m、2.26m（2間分）、梁行が北妻で総長3.93mで、柱間寸法が東から2.07m、1.86mある。建物の方向は西側柱列でみるとN5°Eで



第44図　SB3451・3452・3454・3455・3457・3459建物跡柱穴断面図

ある。柱穴は一辺が25～50㎝の隅丸方形で、深さは40cmある。埋土は地山ブロックを含む浅黄色や黒褐色のシルトである。遺物は出土していない。

ＳＢ3452建物跡（第43・44図）

調査区中央で検出した南北4間、東西2間とみられる南北棟建物跡である。ＳＢ3453建物跡、ＳＫ2939土壙、ＳＤ2998・3024溝跡より新しく、ＳＥ3023井戸跡より古い。

柱穴は6箇所で検出しており、3箇所で径20㎝の柱痕跡、3箇所で柱抜取穴を確認している。平面規模は桁行が東側柱列で総長3.04m、柱間寸法は北から1.53m（2間分）、0.75m、0.76m、梁行が南妻で総長2.72m、柱間寸法は東から1.50m、1.22mである。建物の方向は東側柱列で測るとN3°Ｅである。柱穴は一辺が25～50㎝の隅丸方形で、深さは30㎝ある。埋土は地山ブロックを含む褐灰色や黒色のシルトである。遺物は出土していない。

ＳＢ3454建物跡（第43・44図）

調査区中央で検出した南北2間以上、東西1間以上の建物跡である。西側柱列のみ確認した。ＳＤ2998溝跡より新しく、ＳＢ3455建物跡より古い。

柱穴は3箇所で検出しており、2箇所で径15㎝の柱痕跡を確認している。平面規模は不明で、西側柱列は総長3.51m、柱間寸法は北から1.72m、1.79mである。建物の方向は西側柱列でみるとN2°Ｅである。柱穴は一辺が40㎝ほどの隅丸方形で深さは35㎝ある。埋土は地山ブロックを含む黒褐色のシルトや粘土である。遺物は出土していない。

ＳＢ3455建物跡（第43・44図）

調査区中央で検出した南北、東低とも1間以上の建物跡である。ＳＢ3454建物跡より新しい。

柱穴は2箇所で検出しており、1箇所で径14㎝の柱痕跡、1箇所で柱抜取穴を確認している。平面規模は不明で、柱間寸法は西側柱列で1.55mである。建物の方向はN3°Ｅである。柱穴は一辺が30～45㎝の隅丸方形で深さは25㎝ある。埋土は地山ブロックを含む黒褐色のシルトと粘土である。遺物は出土していない。

ＳＢ3456建物跡（第43図）

調査区中央で検出した南北2間、東西1間以上の建物跡である。ＳＤ3015溝跡より古い。

柱穴は3箇所で検出している。平面規模は不明で、西側柱列は総長4.62m、柱間寸法は北から1.98m、2.64mである。建物の方向はN4°Ｅである。柱穴は径18～30㎝の円形で、深さは7㎝ある。埋土は地山ブロックを含む黒褐色のシルトである。遺物は出土していない。

ＳＢ3457建物跡（第43・44図）

調査区中央で検出した南北2間、東西1間とみられる南北棟建物跡である。ＳＫ302土壙、ＳＤ3033溝跡より古い。

柱穴は3箇所で検出しており、2箇所で径14mの柱痕跡、1箇所で柱抜取穴を確認している。平面規模は桁行が西側柱列で3.83m、梁行が北妻で2.56mである。建物の方向は西側柱列で測るとN3°Ｅである。柱穴は一辺が30～45㎝の隅丸方形で、深さは35㎝ある。埋土は地山ブロックを含む黒褐色のシルトや粘土である。遺物は出土していない。

ＳＢ3458 建物跡（第 39 図）

調査区北側で検出した南北 2 間、東西 1 間以上の建物跡である。ＳＤ3033 溝跡より古い。

柱穴は 3 箇所で検出しており、1 箇所で径 13 ㎝の柱痕跡、2 箇所で柱抜取穴を確認している。平面規模は不明で、西側柱列は総長 4.71m、柱間寸法は北から 2.38m、2.33mである。建物の方向は西側柱列で測るとN14°Wである。柱穴は径 30 ㎝の円形で、深さは 30 ㎝ある。遺物は出土していない。

（2）井戸跡

近世の井戸は 14 基検出している。すべて素掘りの井戸である。

ＳＥ2920 井戸跡（第 40・45 図）

調査区南側で検出した素掘りの井戸跡である。ＳＤ3540 溝跡より新しい。平面形は歪んだ円形をなし、径は 2.1m、深さは 1.0mである。断面形は布掘状である。堆積土は 4 層に分けられる。色調はすべて黒褐色で 4 層は粘土、3 層がシルト質粘土、2 層粘土、1 層砂質シルトである。2～4 層では自然木や植物遺体が出土している。

ＳＥ2930 井戸跡（第 40・45 図）

調査区南側で検出した素掘りの井戸跡である。平面形は歪んだ円形をなし、径は 1.8m、深さは 0.8 mである。断面形は逆台形で、西壁に較べて東壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は 3 層に分けられる。色調はすべて黒褐色で 3 層は粘土、2 層がシルト質砂、1 層シルト質粘土である。

3 層から 18 世紀代の陶器が出土している。産地は不明である。

ＳＥ2936 井戸跡（第 40・45 図）

調査区南側で検出した素掘りの井戸跡である。ＳＤ2921 跡より新しく、ＳＢ3441 建物跡より古い。平面形は歪んだ円形をなし、径は 1.8m、深さは 1.3mである。断面形は布掘状である。堆積土は地山ブロックを含む黒褐色粘土であり、本井戸は人為的に埋戻されたと考えられる。遺物は出土していない。

ＳＥ2924 井戸跡（第 40 図）

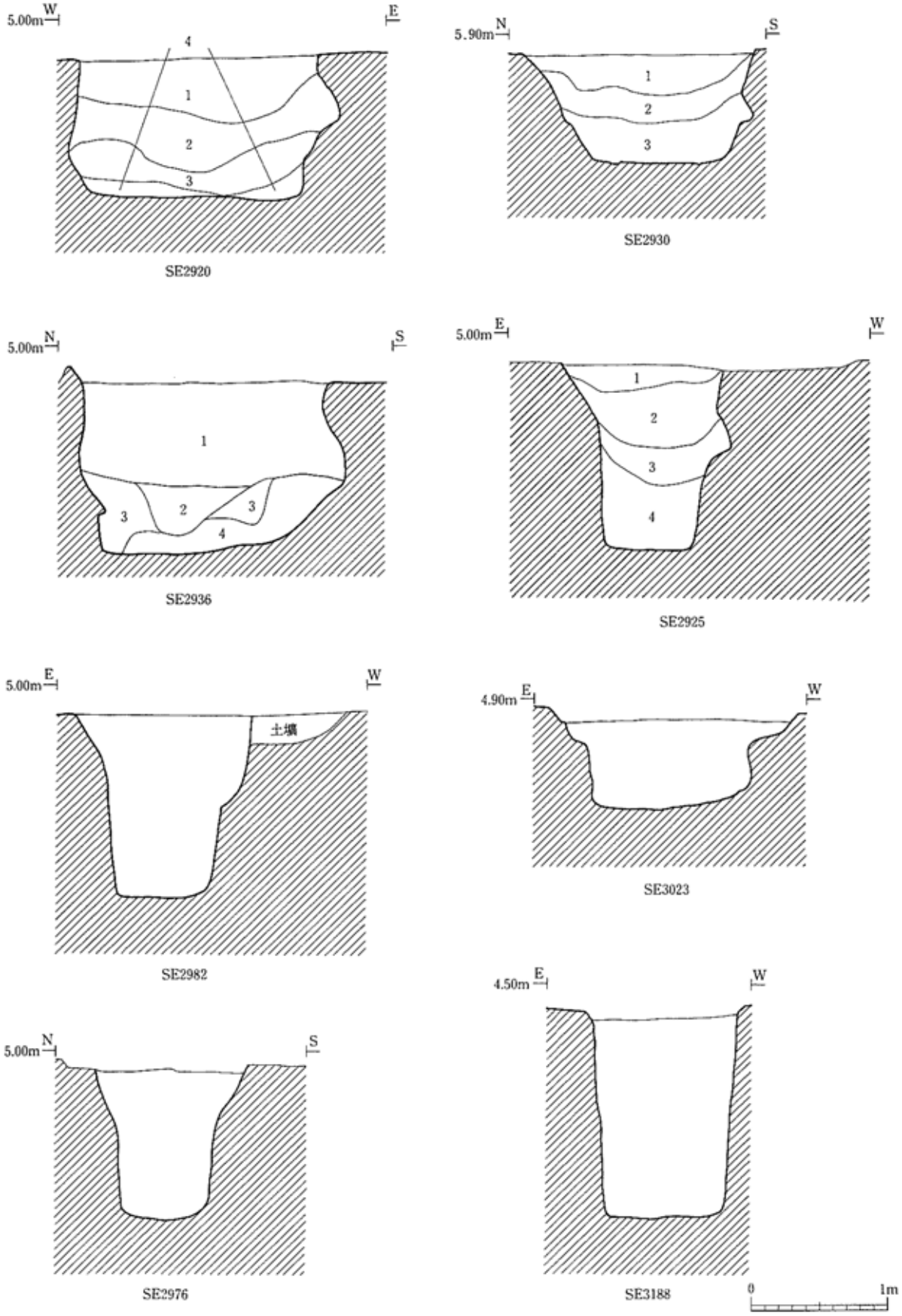
調査区南側で検出した素掘りの井戸跡である。ＳＤ2992 溝跡より新しく、ＳＥ2925 井戸跡より古い。東側が調査区外へ続くため平面形、規模は不明である。堆積土は地山ブロックを含む灰黄褐色シルトであり、人為堆積とみられる。

堆積土から産地、時期とも不明の陶器が出土している。

ＳＥ2925 井戸跡（第 40・45 図）

調査区南側で検出した素掘りの井戸跡である。ＳＢ3441 建物跡、ＳＥ2924 井戸跡、ＳＫ2973 土壙、ＳＤ2922 溝跡より新しい。平面形は歪んだ円形をなし、径 1.2m、深さ 1.4mである。断面形は東側が開く布掘状である。堆積土は 4 層に分けられる。4 層は黒色シルト質粘土、3 層が黒褐色粘土、2 層黒褐色シルト質粘土、工層灰黄褐色シルトである。

4 層から差歯下駄（第 46 図 1）、2 層からモモの種子が出土している。差歯下駄の樹種は同定をおこなった結果、ケヤキであることがわかった。



第45図　Ⅻ区井戸跡断面図

ＳＥ2993 井戸跡（第 40 図）

調査区の南側で検出した素掘りの井戸跡である。ＳＤ2965 溝跡より新しく、ＳＢ3445・3446 建物跡より古い。平面形は円形をなし、径 1.6mである。断面形や深さは堆積土にしまりがなく、壁が崩落する危険性があり、底面まで下げていないため不明である。堆積土は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトで、人為堆積とみられる。遺物は出土していない。

ＳＥ2932 井戸跡（第 40 図）

調査区南側で検出した素掘りの井戸跡である。ＳＢ3400 建物跡より新しく、ＳＢ3444 建物跡より古い。平面形は円形をなし、径は 1.2mである。堆積土にしまりがなく崩落の危険があり、掘り切ることをしなかったため、断面形、深さは不明である。堆積土は地山ブロックを多く含む黒褐色粘土質シルトで、人為堆積とみられる。遺物は出土していない。

ＳＥ2982 井戸跡（第 40・45 図）

調査区南側のＳＸ2994 検出面で確認した素掘りの井戸跡である。ＳＢ3403・3443 建物跡より新しい。平面形は歪んだ円形をなし、径 1.3m、深さ 1.3mである。断面形は漏斗状で、西側の中ほどに段がある。堆積土は黒褐色シルトである。

堆積土から時期不明の肥前産染付の磁器碗、大正時代以降の瀬戸産の銅板絵付による磁器碗、産地や時期が不明の陶器碗・焙烙・すり鉢のほかモモの種子が出土している。

ＳＥ2966 井戸跡（第 40 図）

調査区南側で検出した素掘りの井戸跡である。ＳＩ2988 住居跡、ＳＢ3400 建物跡、ＳＫ3325 土壙より新しく、ＳＢ3443・3447 建物跡、ＳＫ3227 土壙より古い。平面形は歪んだ円形をなし、径 2.0m、深さ 0.6mである。堆積土は地山ブロックを多く含む褐灰色シルトであり、人為堆積とみられる。遺物は出土していない。

ＳＥ2976 井戸跡（第 40・45 図）

調査区南側で検出した素掘りの井戸跡である。ＳＩ2988 住居跡、ＳＢ3400 建物跡より新しく、ＳＢ3443 建物跡より古い。平面形は円形をなし、径 1.3m、深さ 1.1mである。断面形は漏斗状である。堆積土は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトで、人為堆積とみられる。遺物は出土していない。

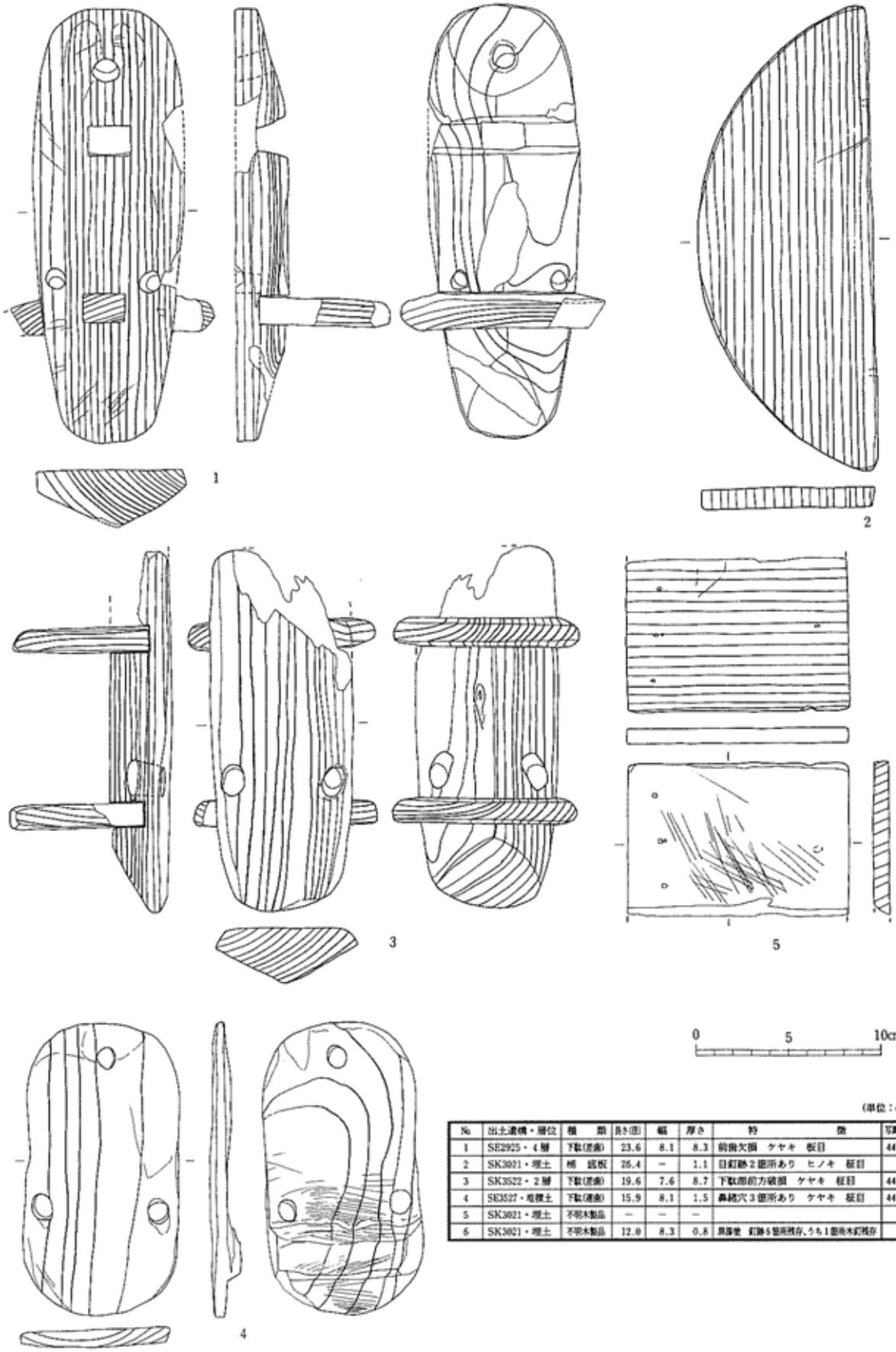
ＳＥ2949 井戸跡（第 43 図）

調査区南側で検出した素掘りの井戸跡である。ＳＩ3022 住居跡、ＳＢ3450・3451 建物跡よりも新しい。平面形は歪んだ円形をなし、径は東西 1.2m、南北 1.4m、深さ 0.4mである。断面形は逆台形である。堆積土は 2 層に分けられる。下層が黒褐色粘土質シルト、上層がオリーブ黒色粘土質シルトである。

上層から産地や時期が不明な染付磁器のほか、福島県浪江町大堀相馬産で時期不明の陶器が出土している。

ＳＥ3023 井戸跡（第 43・45 図）

調査区中央部で検出した素掘りの井戸跡である。ＳＢ3452 建物跡、ＳＫ3071 土壙、ＳＤ2998 溝跡より新しい。平面形は円形で、径 1.8m、深さ 0.8mである。断面形は箱状で上部に段がつく。堆積土は地山ブロックを多く含む灰色砂質シルトで、人為堆積とみられる。遺物は出土していない。



(単位：cm)

No	出土遺構・層位	種　　類	長さ(径)	幅	厚さ	特　　徴	写真図版
1	SE2925・4層	下駄(歯)	23.6	8.1	8.3	前歯欠損　ケヤキ　板目	44-3
2	SK3021・埋土	板　底板	26.4	－	1.1	目釘跡2箇所あり　ヒノキ　柾目	
3	SK3522・2層	下駄(歯)	19.6	7.6	8.7	下駄部前方破損　ケヤキ　柾目	44-1
4	SE3527・埋積土	下駄(歯)	15.9	8.1	1.5	鼻緒穴3箇所あり　ケヤキ　柾目	44-4
5	SK3021・埋土	不明木製品	－	－	－		
6	SK3021・埋土	不明木製品	12.0	8.3	0.8	黒漆塗　釘跡5箇所残存、うち1箇所木釘残存	

第46図　SE2925・3527 井戸跡、SK3021・3522 土壙出土遺物

ＳＥ3538 井戸跡（第 38 図）

調査区南西部で検出した素掘りの井戸跡である。調査区外へ延びるため平面形や断面形は不明である。堆積土は地山ブロックを多く含む黒褐色粘土で、人為堆積とみられる。遺物は出土していない。

ＳＥ3527 井戸跡（第 38 図）

調査区南西部で検出した素掘りの井戸跡である。ＳＤ3540 溝跡より新しい。平面形は歪んだ円形をなし、径 1.8m、深さ 1.1mである。堆積土は地山ブロックや炭化物を少量含む黒褐色シルトである。堆積土から連歯下駄（第 46 図 4）が出土している。樹種は同定の結果、ケヤキであることがわかった。

（3）土壙

ＳＫ3531 土壙（第 38 図）

調査区南西部で検出した土壙である。平面形や断面形は不明であるが、規模は東西 2.0m以上、南北 1.0m以上ある。堆積土は炭化物を少量含む黒褐色シルトであり、自然堆積とみられる。

堆積土から産地・時期が不明の磁器、陶器すり鉢が出土している。

ＳＫ3522 土壙（第 38 図）

調査区南西部で検出した土壙である。ＳＤ3540 溝跡、ＳＫ3534 土壙より新しい。平面形は方形をなし、規模は幅 2.6m、深さは 0.4mである。断面形は皿状である。東側に 2 箇所の張り出しがあり、その底面は西の土壙本体へ傾斜している。堆積土は 4 層に分けられる。4 層は黒褐色粘土、3 層が黒褐色粘土、2 層灰黄褐色粘土質シルト、1 層褐灰色粘土である。

2 層から 19 世紀前半～中頃の大堀相馬産の陶器皿（第 48 図 3）・土瓶（第 48 図 5）、産地や時期が不明の灯明皿（第 48 図 4）が出土している。木製品は漆器椀（第 48 図 7）・蓋（第 48 図 8）、差歯下駄（第 46 図 3）、柄杓の身（第 48 図 13）が出土している。木製品の樹種は同定の結果、漆器椀・蓋がブナ属、差歯下駄がケヤキ、柄杓がタケ亜科であることがわかった。このほか 3 層からモモの種子が出土している。

本土壙はＳＤ3396Ａ・Ｂ区画溝跡の西に近接する。堆積土が似ており、張り出し部がＳＤ3396 に向けて延びることから、両者は同時期に機能していたと考えられる。その場合、張り出し部の底面は西へ傾斜しており、ＳＫ3522 はＳＤ3396 から水を引き込んでいたと考えられる。

ＳＫ3211 土壙（第 40 図）

調査区南側で検出した土壙である。ＳＩ2988 住居跡、ＳＢ3403 建物跡、ＳＫ3157・3335 土壙、ＳＸ2994 より新しい。平面形は不整方形をなし、規模は東西 2.1m、南北 1.6m、深さ 0.1mである。堆積土は 2 層に分けられる。下層が炭化物や地山ブロックを多く含む褐灰色シルト、上層がにぶい黄澄色シルトである。遺物は出土していない。

ＳＫ2960 土壙（第 40・47 図）

調査区南側で検出した土壙である。ＳＢ3400 建物跡、ＳＫ3280 土壙より新しい。平面形は隅丸長方形をなし、規模は東西 1.8m、南北 0.7m、深さ 0.2mである。断面形は逆台形である。堆積土は黒褐色砂質粘土を主体としており、地山ブロックの入り方によって 4 層に分けられる。人為堆積土とみられる。

2 層から 17 世紀代の中国産磁器小皿、17 世紀後半～18 世紀前半の唐津産内面に刷毛目が施された陶器大皿、17 世紀末～18 世紀初めの肥前産で内面に青釉が施された陶器中皿が出土している。

ＳＫ2938 土壙（第 40・47 図）

調査区南側で検出した土壙である。ＳＢ3400 建物跡、ＳＫ3236・3200 土壙より新しい。平面形は隅丸長方形をなし、規模は東西 2.1m、南北 1.0m、深さ 0.3mである。断面形は逆台形である。堆積土は黒褐色粘土を主体とし、2 層に分けられる。いずれも人為堆積土とみられる。

下層から時期不明の肥前産磁器、大堀相馬産陶器碗、産地不明のすり鉢が出土している。

ＳＫ3518 土壙（第 40・47 図）

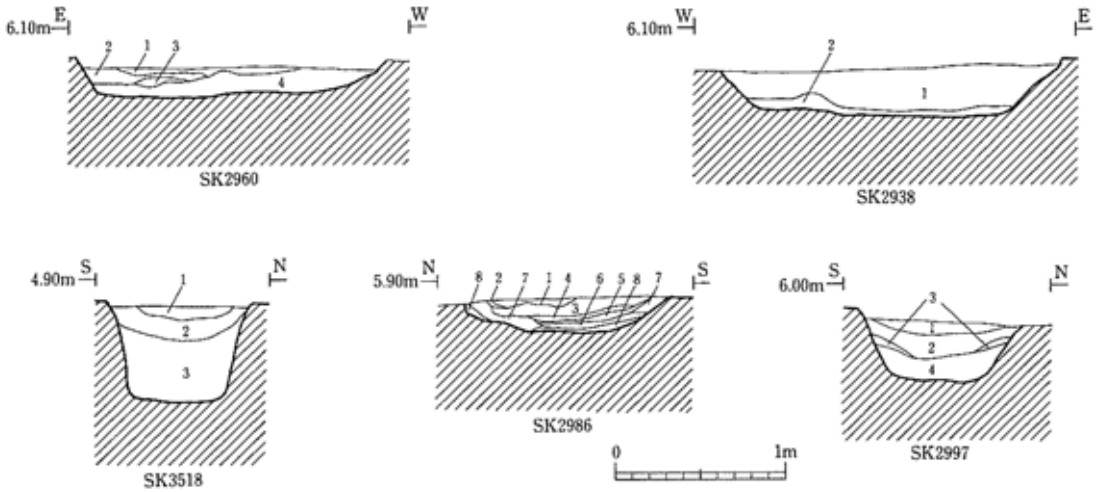
調査区南側で検出した土壙である。平面形は円形をなし、規模は径 0.9m、深さ 0.5mである。断面形は上方が若干開く円筒形である。堆積土は 3 層に分けられる。いずれも地山ブロックを多く含んでおり、人為堆積とみられる。遺物は堆積土から美濃産の 16 世紀末～17 世紀初めの陶器片が出土している。

ＳＫ3519 土壙（第 43 図）

調査区南側で検出した土壙である。ＳＤ3009Ａ・Ｂ区画溝跡、ＳＤ3024 溝跡より古い。平面形は不整方形をなし、規模は東西 2.5m、南北 1.9m、深さ 0.1mである。堆積土は黒褐色シルトであり、自然堆積とみられる。堆積土から産地・時期とも不明の陶器が出土している。

ＳＫ2943 土壙（第 43 図）

調査区南側で検出した土壙である。ＳＢ340 建物跡より新しく、ＳＤ3024 溝跡より古い。平面形は



SK2960

層No.	土色・土性	混入物など	備考
1	にぶい黄褐色(10YR4/3)砂	灰黄褐色・黒褐色粘土を粒状に含む	
2	黒褐色(10YR2/2)シルト質粘土	黄褐色砂質粘土を粒状に含む	
3	黒褐色(10YR3/2)シルト質粘土	黒褐色砂質粘土を点状に少量含む	
4	黒褐色(10YR2/2)シルト質粘土	黄褐色・黒色粘土を粒状に含む	

SK2938

層No.	土色・土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR2/2)シルト質粘土	褐色砂質粘土をブロック状に含む	
2	黒褐色(10YR2/3)シルト質粘土	暗灰黄色シルト斑状に含む	人為堆積土

SK3518

層No.	土色・土性	混入物など	備考
1	にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト		人為堆積土
2	黒褐色(10YR3/1)シルト	1 層をブロック状に含む	人為堆積土
3	黒褐色(2.5Y3/2)シルト質粘土		人為堆積土

SK2986

層No.	土色・土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR2/2)砂質シルト	炭化物を多く含む	
2	黒褐色(10YR2/2)シルト質砂	ややしまっている	
3	黒褐色(10YR3/1)シルト	黒褐色砂質シルトを粒状に少量含む	人為堆積土
4	黒褐色(2.5Y3/1)砂	黒褐色シルト質粘土を斑状に含む	人為堆積土
5	黒褐色(10YR3/1)粘土	炭化物を多く含む	
6	黒褐色(10YR2/2)粘土	黒色シルト質粘土を粒状に含む	人為堆積土
7	黒褐色(10YR2/3)粘土	黒褐色砂を斑状に含む	人為堆積土
8	黄褐色(2.5Y4/1)シルト質砂	黒褐色砂質シルトを斑状に含む	人為堆積土

SK2997

層No.	土色・土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR3/1)粘土		
2	黒褐色(2.5Y3/2)シルト		
3	灰白色(10Y7/1)細砂		
4	暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土	植物遺体を多く含む	人為堆積土

第47図　SK2938・2960・2986・2997・3518 土壙断面図

楕円形をなし、規模は長径1.4m、短径0.9m、深さ0.2mである。断面形は皿状である。堆積土は地山ブロックを若干含む黒褐色シルトである。

堆積土から時期不明の大掘相馬産陶器碗が出土している。

ＳＫ2997 土壙（第43・47図）

調査区南側で検出した土壙である。ＳＢ3409 建物跡、ＳＫ2939 土壙より新しい。平面形は円形をなし、規模は径1.0m、深さ0.3m、断面形は逆台形である。堆積土は4層に分けられる。4層は暗灰黄色粘土、1～3層は黒褐色粘土と灰白色細砂が主体であり、4層は人為堆積、他は自然堆積とみられる。

4層から植物遺体が多量に出土している。同定の結果、イネ・ヒエの籾、ソバ・シソ属の植物の実、ヒユ属・ウリ属・ナス属・ナシ属・ウリ科・ウメの植物の種子とわかった。したがってこの土壙は食べかすなどを捨てたゴミ穴と考えられる。

ＳＫ2939 土壙（第43図）

調査区南側で検出した土壙である。ＳＢ3409 建物跡より新しく、ＳＤ3554 溝跡、ＳＫ2997 土壙より古い。平面形は隅丸長方形をなし、規模は東西2.8m、南北1.0m、深さ0.1mである。断面形は皿状である。堆積土は地山ブロックを多く含む黒褐色粘土質シルトであり、人為堆積とみられる。堆積土から板状の木製品が出土している。

ＳＫ2986 土壙（第43・47図）

調査区南側で検出した土壙である。ＳＫ2942 土壙、ＳＤ2998 溝跡より新しい。平面形は円形をなし、規模は径1.2m、深さ0.2m、断面形は皿状である。堆積土は黒褐色シルトが主体で8層に細分できる。

4層から18世紀の肥前産の見込みに五弁花コンニャク判のある、いわゆるくらわんか手の磁器中皿が出土している（第48図2）。5層からは用途不明であるが、角棒状で角が面取りしてある木製品が出土している（第48図11）。この木製品の樹種は同定の結果、スギであることがわかった。このほか堆積土からモモの種子が出土している。

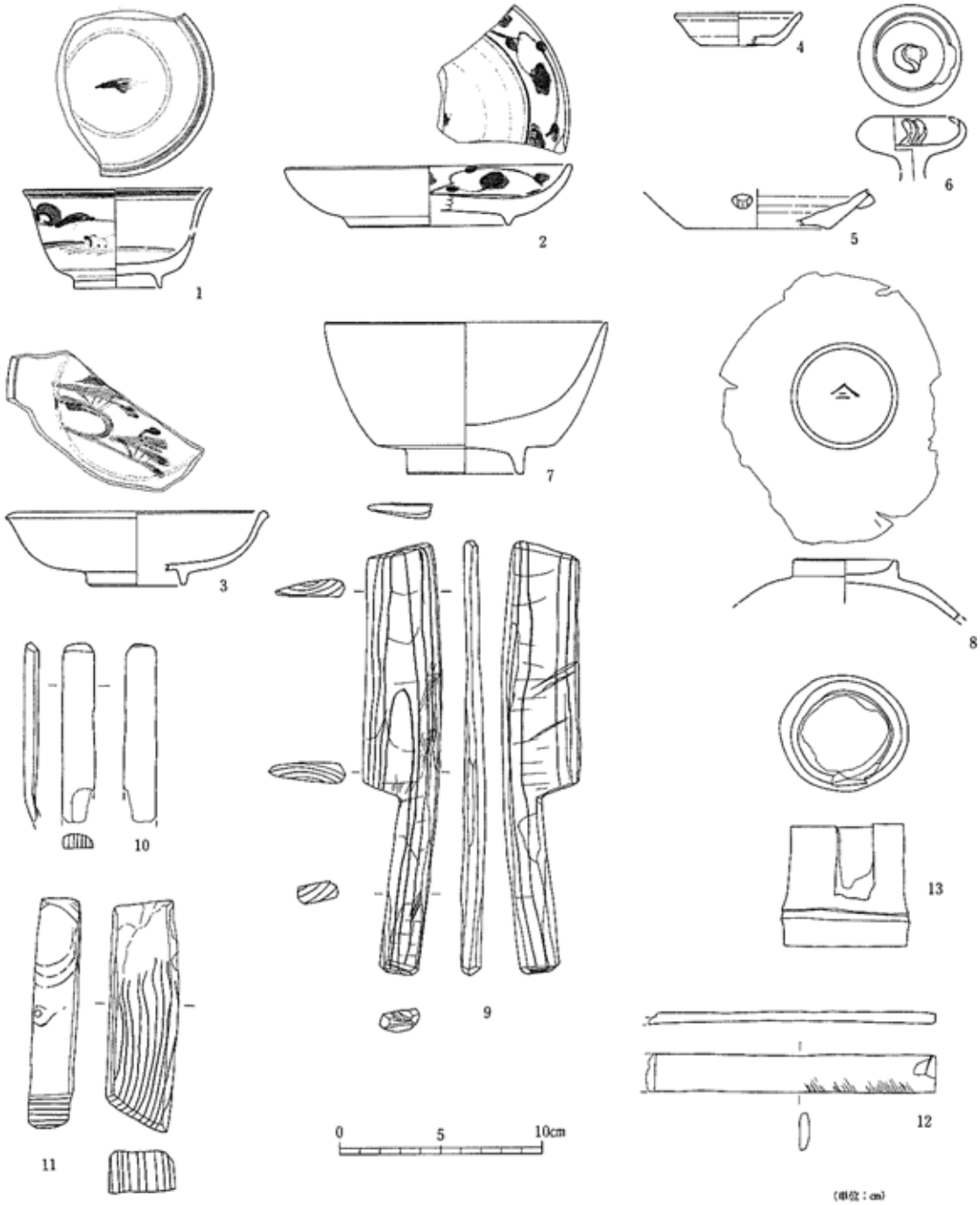
ＳＫ3021 土壙（第43図）

調査区中央部で検出した土壙である。ＳＢ3405・3407・3457 物跡、ＳＤ3033 溝跡、ＳＫ3390・3031 土壙より新しい。平面形は楕円形をなし、南北5.6m、東西1.6m、深さは0.6mである。堆積土は地山ブロックを多量に含む黒褐色粘土で、本土壙は人為的に埋め戻されたと考えられる。

遺物は埋土から陶磁器、木製品、モモの種子などが出土している。磁器は19 世紀前半～中頃の肥前産染付中碗（第48図1）、大正時代以降の瀬戸産の銅版絵付による碗が出土している。陶器は大堀相馬産で時期不明の緑釉鉢、19世紀前半～中頃の秉燭（第48図6）が出土している。木製品は刀形（第48図9）、不明木製品（第46図5・6・第48図12）、桶底板（第46図2）、漆塗りのしゃもじの柄（第48図10）が出土している。木製品の樹種は同定の結果、刀形がヒノキ、不明木製品がサクラ属、桶底板がヒノキ、しゃもじの柄がヒノキ科であることがわかった。

ＳＫ3057 土壙（第39図）

調査区北側で検出した土壙である。平面形は隅丸長方形をなし、東西1.1m、南北0.6m、深さ0.1mである。断面形は逆台形である。堆積土は黒褐色粘土ブロックを含むにぶい浅黄色シルトで、人為堆



（単位：cm）

No	出土遺構・層位	種　類	口径	底径	器高	特　徴	産地・(系)	製作年代	写真図版
1	SK3021・埋土	磁器 中碗	9.4	4.3	4.9	見込み：蛇籠紋	肥前	19世紀前半～中頃	
2	SK2986・4層	磁器 中皿	14.2	8.0	3.0	くらわんか手　内：草花文　見込み：こんにゃく版五弁花文	肥前	18世紀代	
3	SK3522・2層	施釉陶器中皿	13.0	4.9	3.7	内：松	大堀相馬	19世紀前半～中頃	
4	SK3522・2層	陶器灯明皿?	6.3	3.7	1.7	内：すす付着			
5	SK3522・2層	施釉陶器土瓶	－	7.1	－	内：灰釉　外：すす付着　下半部にボタン状の突起物あり	大堀相馬	19世紀前半～中頃	
6	SK3021・埋土	施釉陶器茶碗	5.4	－	－		大堀相馬	19世紀前半～中頃	42-23
7	SK3522・2層	漆器　椀	14.0	5.8	7.8	内外：黒漆　ブナ属			43-4
8	SK3522・2層	漆器　蓋	－	5.2	－	内外：朱漆　つまみ部に黒漆で「山ニ」記銘あり　ブナ属			

No	出土遺構・層位	種　類	長さ	幅	厚さ	特　徴	写真図版
9	SK3021・埋土	刀形	21.4	3.8	1.1	背部に樹皮残存　樹種：ヒノキ　板目	45-4
10	SK3021・埋土	しゃもじの柄	8.9	1.6	0.7	面取りした部分に朱漆塗　樹種：ヒノキ科　柾目	
11	SK2986・5層	不明木製品	11.6	3.4	2.1	角部面取り　樹種：スギ	
12	SK3021・埋土	不明木製品	14.3	1.8	0.5	4箇所に刃物傷あり　樹種：サクラ属　柾目	
13	SK3522・2層	柄杓	6.0	6.0	2.2	接合部加工痕跡あり　樹種：タケ亜科　柾目	

第48図　SK2986・3021・3522 土壙出土遺物

積土とみられる。遺物は出土していない。

ＳＫ3054 土壙（第 39 図）

調査区北側で検出した土壙である。平面形は隅丸長方形をなし、東西 1.8m、南北 0.7m、深さ 0.2 mである。断面形は逆台形である。堆積土は黒褐色粘土ブロックを多く含むにぶい浅黄色シルトで、人為堆積土とみられる。遺物は出土していない。

（4）溝跡

溝跡は 14 条検出した。このうち区画溝跡は南北方向のものが 2 条あり、それぞれ 2 時期の変遷がある。ＳＤ3396Ａ・Ｂ区画溝跡はXI区まで延びるが、記載はここでおこなう。

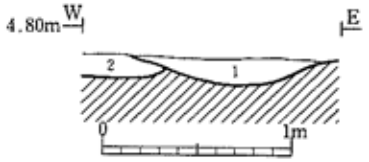
ＳＤ3009Ａ・Ｂ区画溝跡（第 38・39・49 図）

調査区西側で検出した南北に延びる区画溝跡で、長さ 58m分を確認した。ＳＩ3293・3295 住居跡、ＳＢ3403・3404・3405・3430・3431・3432・3433・3453 建物跡、ＳＫ3071・3519 土壙、ＳＤ2965・2998・3369・3517・3540 溝跡より新しい。

2 時期の変遷（Ａ→Ｂ）がある。Ｂ期は上端幅 0.7～1.6m、底面幅 0.2～0.9mで、深さは 0.3m程である。方向は溝の心心で測るとN5°Ｅである。断面形は緩やかに開くＵ字状をなし、底面はほぼ平坦である。堆積土は黒褐色シルトの自然堆積土である。Ａ期はＢ期に壊されるため規模は不明である。堆積土は黒褐色シルトの自然堆積土である。

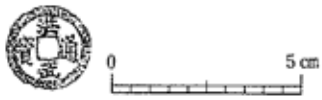
Ｂ期の堆積土から近世と考えられる陶磁器、洪武通宝（初鋳 1368 年、第 50 図）、モモの種子が出土している。

本溝跡は調査区南端で止まる。その東 1.2mには東西方向のＳＤ2992 溝跡がある。両者は直交する位置にあること、堆積土が似ていることから同時期に機能していたと考えられる。さらにＳＤ2991 溝跡はＳＤ2992 の南に 2.2m離れて平行しており、この溝もＳＤ3009 溝跡と同時期の可能性がある。また、ＳＤ3009 溝跡の北側には「コ」字状に巡るＳＤ3072 区画溝跡がある。両者の関係は攪乱のため不明であるが、堆積土が似ること、底面レベルがほぼ同じであることからＳＤ3009 とＳＤ3072 は接続していたと考えられる。



層No.	土色・土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR3/1)シルト	下部に地山を粒状に少量含む	B期堆積土
2	黒褐色(2.5Y3/1)シルト	下部に地山を粒状に少量含む	A期堆積土

第49図　SD3009A・B 溝跡断面図



（単位：cm）

No.	層位	種類	径	特徴	写真図版
1	堆積土	銭　洪武通宝	2.3	孔径：0.5cm	43-18

第50図　SD3009B 出土遺物

ＳＤ3396Ａ・Ｂ溝跡（第 38・39・51・95 図）

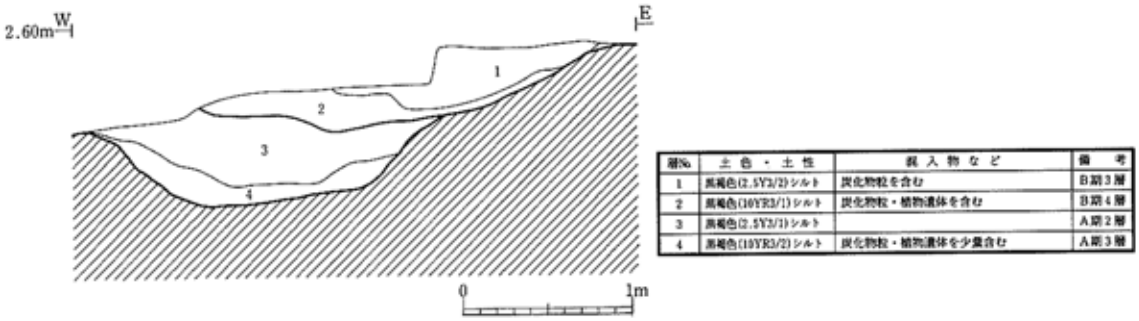
調査区南西端からXI区西側中央部にかけて南北に延びる区画溝跡で、長さ 98m分を確認した。ＳＩ3295 住居跡、ＳＢ3414・3418・3430・3433・3453 建物跡、ＳＤ2965・2998・3072・3114・3115・3369・

3540 溝跡より新しい。

2 時期の変遷（A→B）がある。B期は上端幅 1.2m～5.1m、底面幅 0.4～3.0mで、深さは 0.5m である。方向は溝の心心で測るとN4°Eである。底面はほぼ平坦で、断面形はゆるやかなU字状をなす。壁には護岸のため径 10 ㎝ほどの杭が一列に打ち込まれている。また、XI区南側では東西方向のＳD3111 溝跡が本溝に接続している（第 95 図）。堆積土は 4 層に分けられる。4 層は砂、植物遺体、炭化物を含む黒褐色シルト、3 層が炭化物を食む黒褐色シルト、2 層黒褐色粘土、1 層灰黄色砂である。

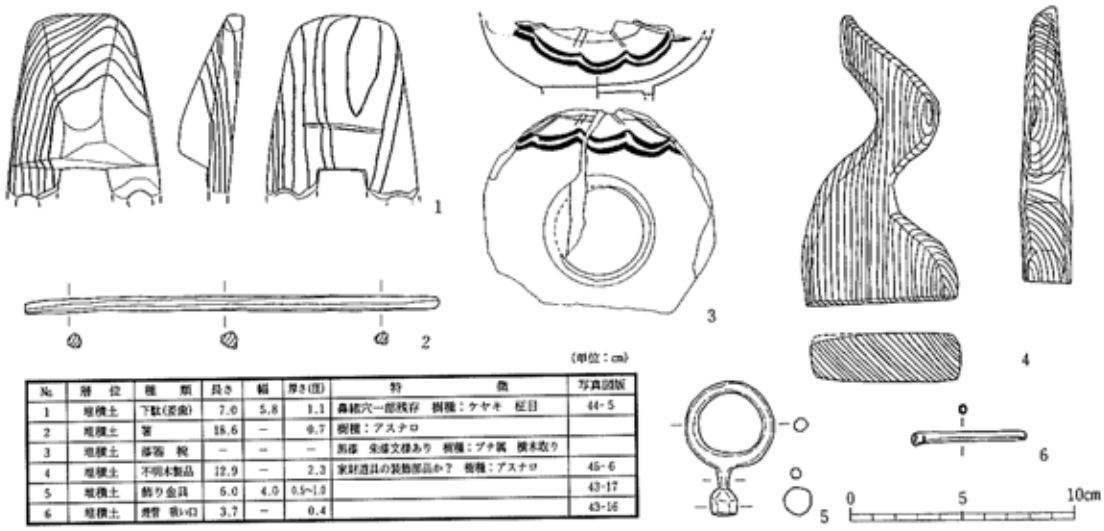
A期は上端幅 1.9～3.0m、底面幅 1.7mほど、深さは 0.7mである。底面はほぼ平坦で、断面形は緩やかなU字状をなす。堆積土は 3 層に分けられ、下から 3 層炭化物を含む黒褐色シルト、2 層砂を含む黒褐色シルト、1 層灰黄色砂である。

A期、B類ともに堆積土から肥前産を中心とした染付磁器、大掘相馬産を中心とした陶器のほか漆椀・下駄などの木製品、金属製品が出土している（第 52 図～59 図）。A期の磁器は碗が肥前産 18 世紀の染付中碗でいわゆるくらわんか手と呼ばれるもの（第 53 図 1・2）、肥前産 18 世紀磁器仏飯器（第 53 図 4）、宮城県宮崎町切込窯産の 19 世紀前半～中頃の中椀（第 53 図 5）、肥前産 18 世紀の小碗（第 53 図 6）がある。皿は中国産 17 世紀の小皿（第 53 図 3）や中皿（第 53 図 7）がある。ほかに御神酒徳利（第 53 図 8）、香合（第 53 図 9）がある。陶器は碗が朝鮮産とみられる中碗（第 53 図 10）、肥前産 17 世紀後半～18 世紀前半の京焼き風中碗（第 53 図 11）、大掘相馬産の小碗（第 53 図 12）がある。皿は肥前系（唐津）



層No	土色・土性	混入物など	備考
1	黒褐色(2.5Y3/2)シルト	炭化物粒を含む	B期3層
2	黒褐色(10YR3/1)シルト	炭化物粒・植物遺体を含む	B期4層
3	黒褐色(2.5Y3/1)シルト		A期2層
4	黒褐色(10YR3/2)シルト	炭化物粒・植物遺体を少量含む	A期3層

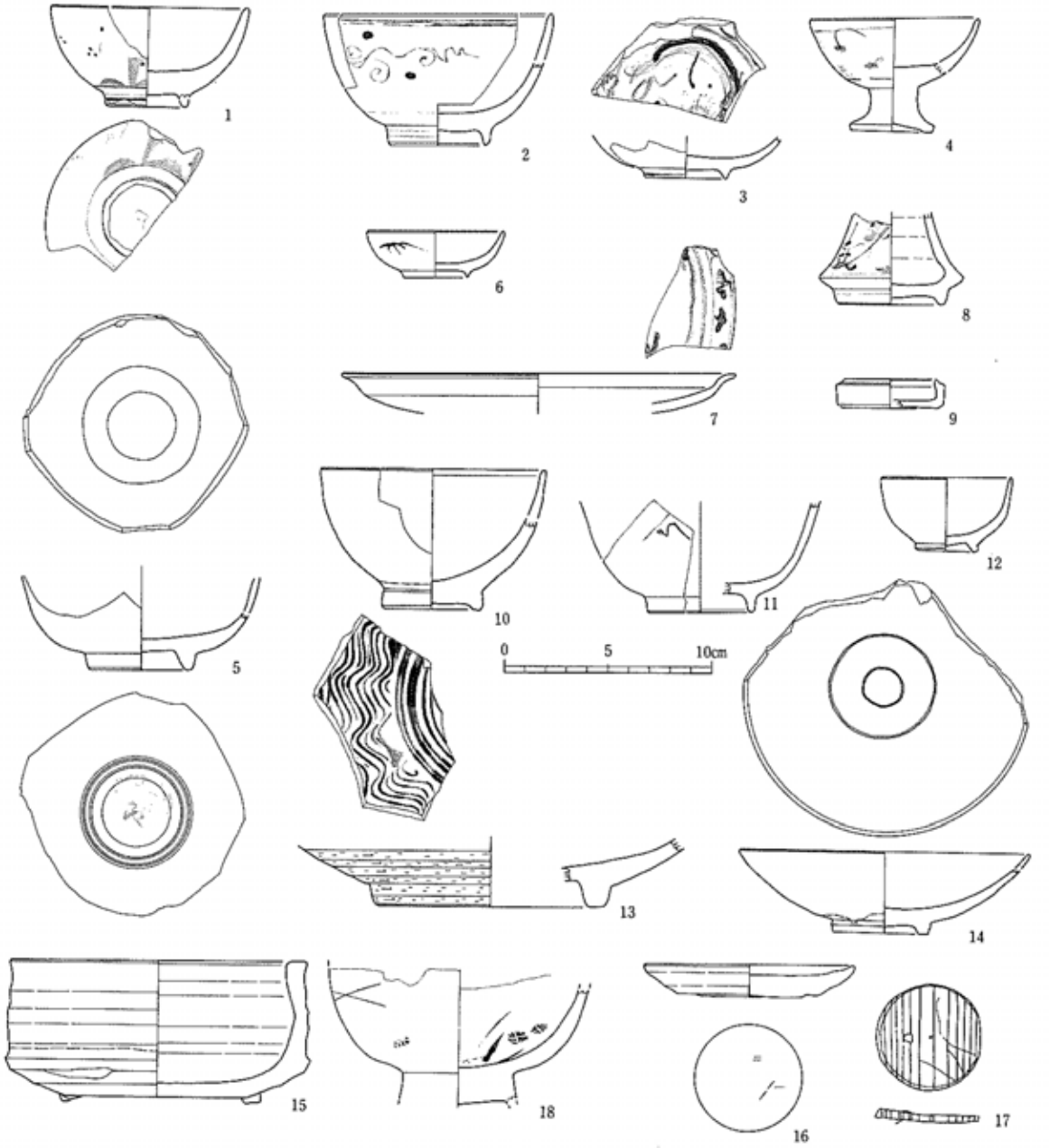
第51図　SD3396A・B 溝跡断面図



（単位：cm）

No	層位	種類	長さ	幅	厚さ(径)	特徴	写真図版
1	堆積土	下駄(足痕)	7.0	5.8	1.1	鼻緒穴一部残存　樹種：ケヤキ　柾目	44-5
2	堆積土	箸	18.6	－	0.7	樹種：アスナロ	
3	堆積土	陶器　椀	－	－	－	肥前　朱線文様あり　樹種：ブナ属　横木取り	
4	堆積土	不明木製品	12.9	－	2.3	家財道具の装飾部品か？　樹種：アスナロ	45-6
5	堆積土	飾り金具	6.0	4.0	0.5～1.0		43-17
6	堆積土	煙管　吸い口	3.7	－	0.4		43-16

第52図　SD3396A 溝跡出土遺物（1）



(単位：cm)

No.	層位	器類	口径(現)	底径	器高(残)	文様・特徴	産地(系)	製作年代	写真図版
1	堆積土	磁器 中碗	9.6	4.0	4.8	くらわんか手 外：草花文	波佐見系	18世紀代	41-8
2	堆積土	磁器 中碗	11.0	4.9	6.4	くらわんか手 外：草花文	肥前	18世紀代	41-7
3	堆積土	磁器 中皿	－	4.0	－		中国	17世紀前半	
4	堆積土	磁器 仏飯器	8.2	4.1	5.1	外：蓮唐草文	肥前	18世紀代	41-11
5	堆積土	磁器 中碗	－	5.1	－	見込み：釉剥ぎ	切込	19世紀前半～中頃	41-6
6	堆積土	磁器 小碗	6.6	3.1	2.3	外：竹文	肥前	18世紀代	41-10
7	堆積土	磁器 中皿	19.0	－	－	内：草花文	中国	17世紀前半	
8	堆積土	磁器 御神酒徳利	－	5.3	－	外：草花文	肥前？	19世紀前半～中頃	41-9
9	堆積土	磁器 香合	4.4	4.6	1.5	白磁	肥前		
10	堆積土	施釉陶器 中碗	10.8	4.6	6.8	高台部：釉無し	朝鮮？		41-15
11	堆積土	施釉陶器 中碗	－	5.2	－	京焼き風陶器 外：施文有	肥前	17世紀後半～18世紀前半	41-12
12	堆積土	施釉陶器 小碗	6.3	3.0	3.6	灰釉かけ	大堀相馬	18世紀後半	41-13
13	堆積土	施釉陶器 大皿	－	11.1	－	内：鉄釉刷毛目(三島手・褐色・白色)	唐津	17世紀後半～18世紀前半	41-14
14	堆積土	施釉陶器 中皿	7.0	4.7	5.0	内：青釉 見込み：釉剥ぎ	肥前	17世紀後半～18世紀前半	41-17
15	堆積土	施釉陶器 香炉	14.3	8.8	6.9	内外：鉄釉 底部足1つ残存(三足)	瀬戸？		41-16
16	堆積土	漆器 小皿	10.2	5.1	1.6	樹種：ブナ属			43-1
17	堆積土	不明木製品	5.2	－	0.4	小型曲げ物の底板か？中央部穿孔有(1mm)樺皮残存 樹種：アスナロ			
18	堆積土	漆器 椀	－	－	－	内外：黒漆 朱漆文様・金泥スタンプ状の文様有 樹種：ブナ属			43-10

第53図 SD3396A 溝跡出土遺物（2）

の（第 53 図 13）、肥前産の中皿（第 53 図 14）がある。

木製品は差歯下駄（第 52 図 1）、漆器椀（第 52 図 3、第 53 図 18）、漆器皿（第 53 図 16）、箸（第 52 図 2）、不明木製品（第 52 図 4、第 53 図 17）がある。樹種同定の結果、漆器椀・皿はブナ属、箸はアスナロ、下駄はケヤキ、不明木製品はアスナロであることがわかった。金属製品には飾り具（第 52 図 5）、煙管の吸い口（第 52 図 6）がある。

B期出土の磁器は碗が瀬戸産の 19 世紀前半～中頃の中碗（第 54 図 2・5）、切込産で 19 世紀前半～中頃の小碗（第 54 図 4）、肥前産の 18 世紀の中碗（第 54 図 8）、瀬戸産の 19 世紀後半の大碗（第 54 図 15）がある。皿は肥前産の 17 世紀中頃の中皿（第 54 図 10・11・12・13・17）、18 世紀の中皿（第 54 図 14）、19 世紀後半の中皿（第 54 図 16）がある。陶器では碗が大堀相馬産の 18 世紀後半中碗（第 55 図 21・22・23・25・26・27）、肥前産 17 せ世紀後半～18 世紀前半の中碗（第 55 図 24）がある。皿は肥前産の 18 世紀の中皿（第 55 図 29）、肥前系（唐津）の 17 世紀後半～18 世紀前半の中皿（第 55 図 30）、肥前系（唐津）の 16 世紀末の向付（第 55 図 31）がある。

金属製品には小刀（第 59 図 62）、鞘（第 59 図 63）、煙管の雁首（第 59 図 64・65）、吸い口（第 59 図 66）、永楽通宝（第 59 図 66）、寛永通宝（第 59 図 67～71）がある。

木製品では漆器椀（第 56 図 39～44）、差歯下駄（第 57 図 47）、連歯下駄（第 57 図 48）、横槌（第 56 図 50）、墨壺の滑車（第 56 図 53 9、槽（第 59 図 61）などがある。このほか木簡が 2 点出土している（第 58 図 57・58）。樹種同定の結果、漆器椀はブナ属、差歯下駄はケヤキ、連歯下駄はスギ、横槌はクヌギ節、滑車はケヤキ、槽はトチノキ、木簡はアスナロとアカマツであることがわかった。

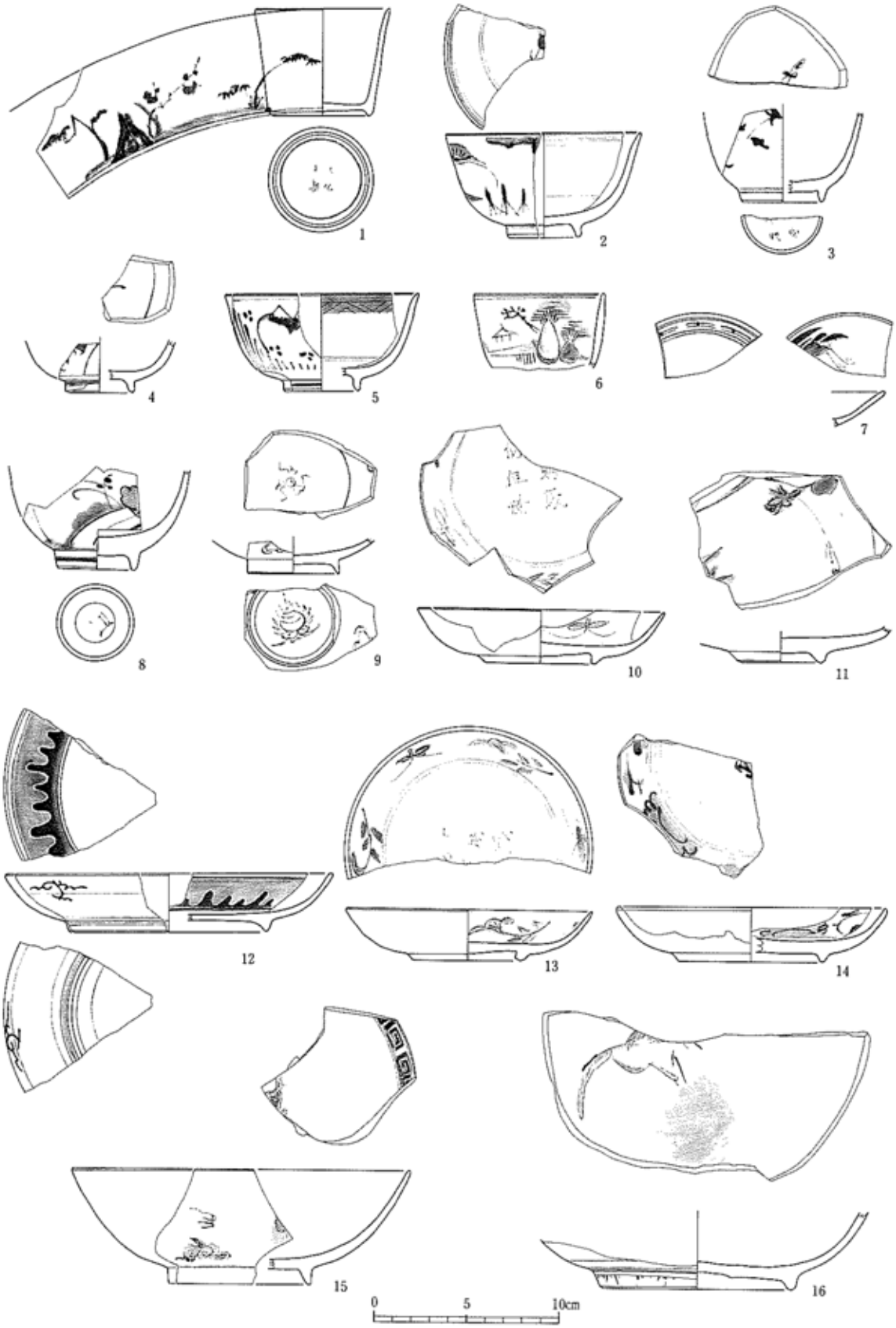
木簡は 2 点とも両面に記述がみられる。1 は下半部が欠損しており、墨痕も不明瞭である。また、上部に径 1mmの穿孔がみられる。この記述内容、形状、穿孔から考えての荷札の可能性が高い。2 は下半部が欠損し墨痕が不明瞭で記述内容は判読できないが、形態が 1 と似ていることからこの木簡も荷札とみられる。

1．・「　　籾壱□（　　籾壱）
　　三斗三升入　　（三斗三升入）
　・「□□
2．・「□　□□□
　　□　□
　　「□□□□□

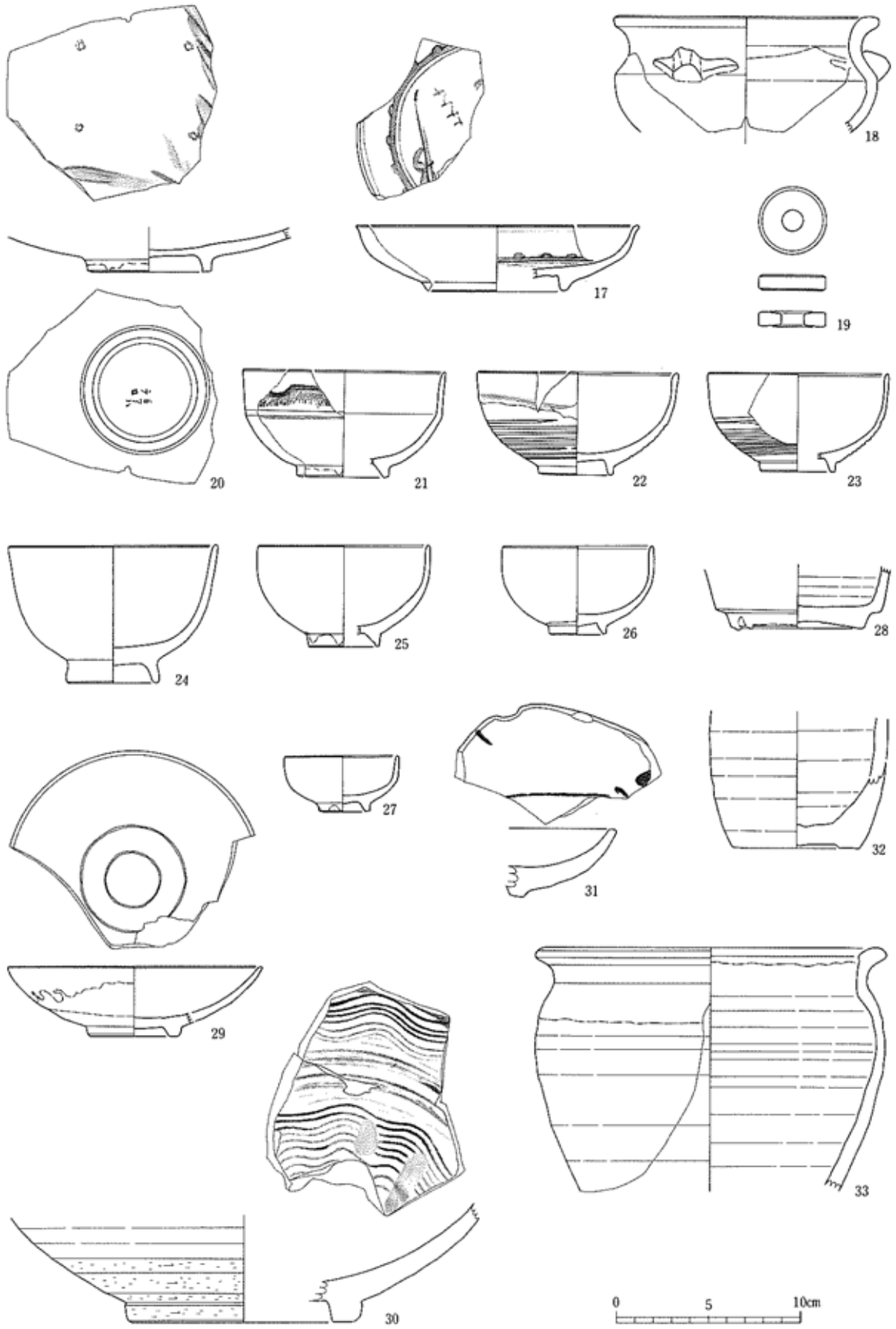
このような荷札は仙台城二の丸第 5 地点（藤沢：1993）などでも出土例があり、江戸時代においては荷物を送る際、荷札として木簡が頻繁に使われていたと考えられる。

また、A・Bどちらの堆積土中からも植物遺体が出土している。同定の結果、A期の植物遺体はモモやトチノキ、B期はモモ・カヤ・オニグルミの種子であることが判明した。

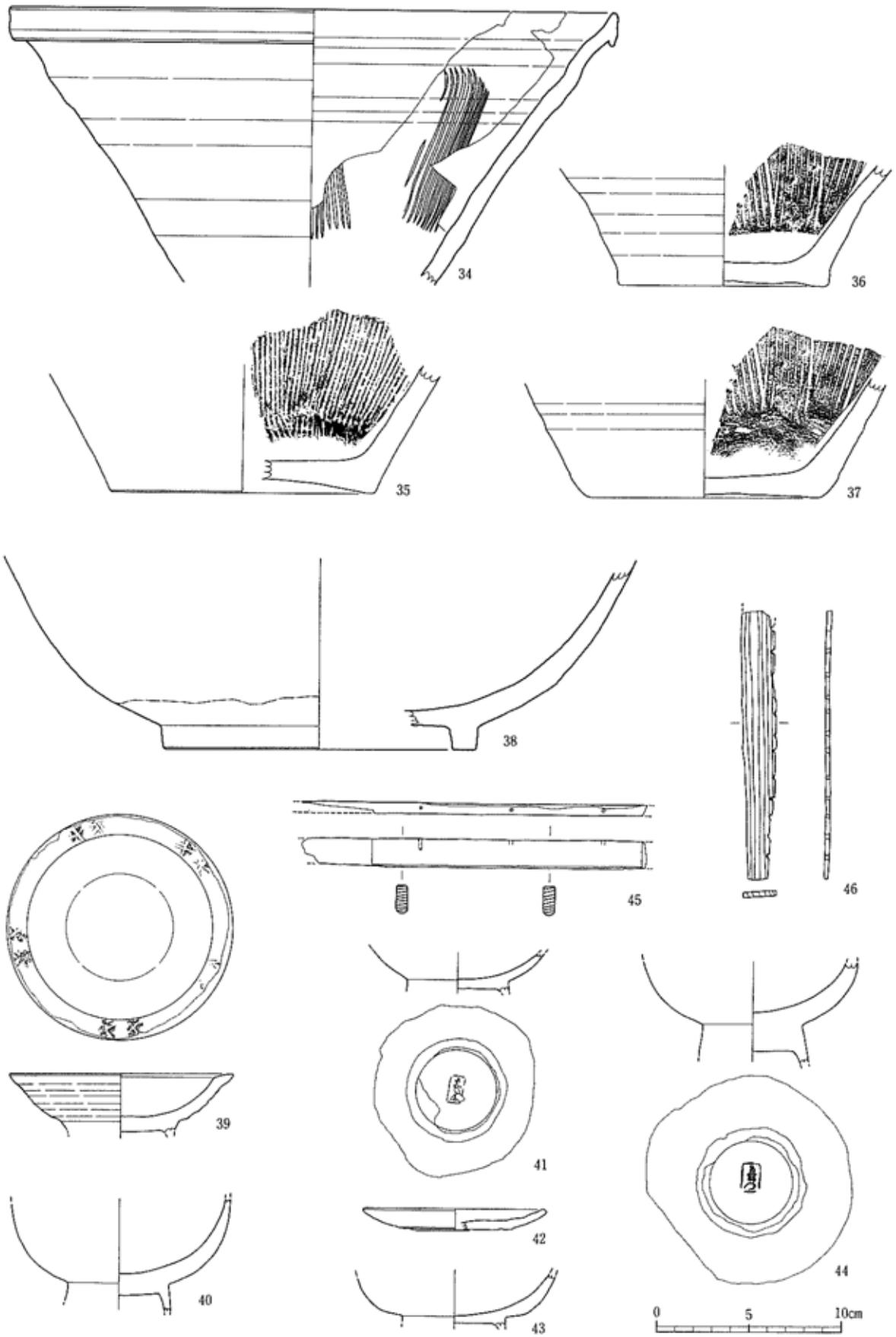
なお、本溝跡とは直接の関係がつかめなかったが、XII区南西部で検出したＳK3522 土壙（第 39 図）、XI区南側で検出したＳD3114 溝跡（第 95 図）は堆積土が似ることからＳD3396 に接続していたと考えられる。その場合、ＳK3522 の 2 箇所の張り出し部は西へ傾斜しており、ＳD3514 の底面は東に傾斜



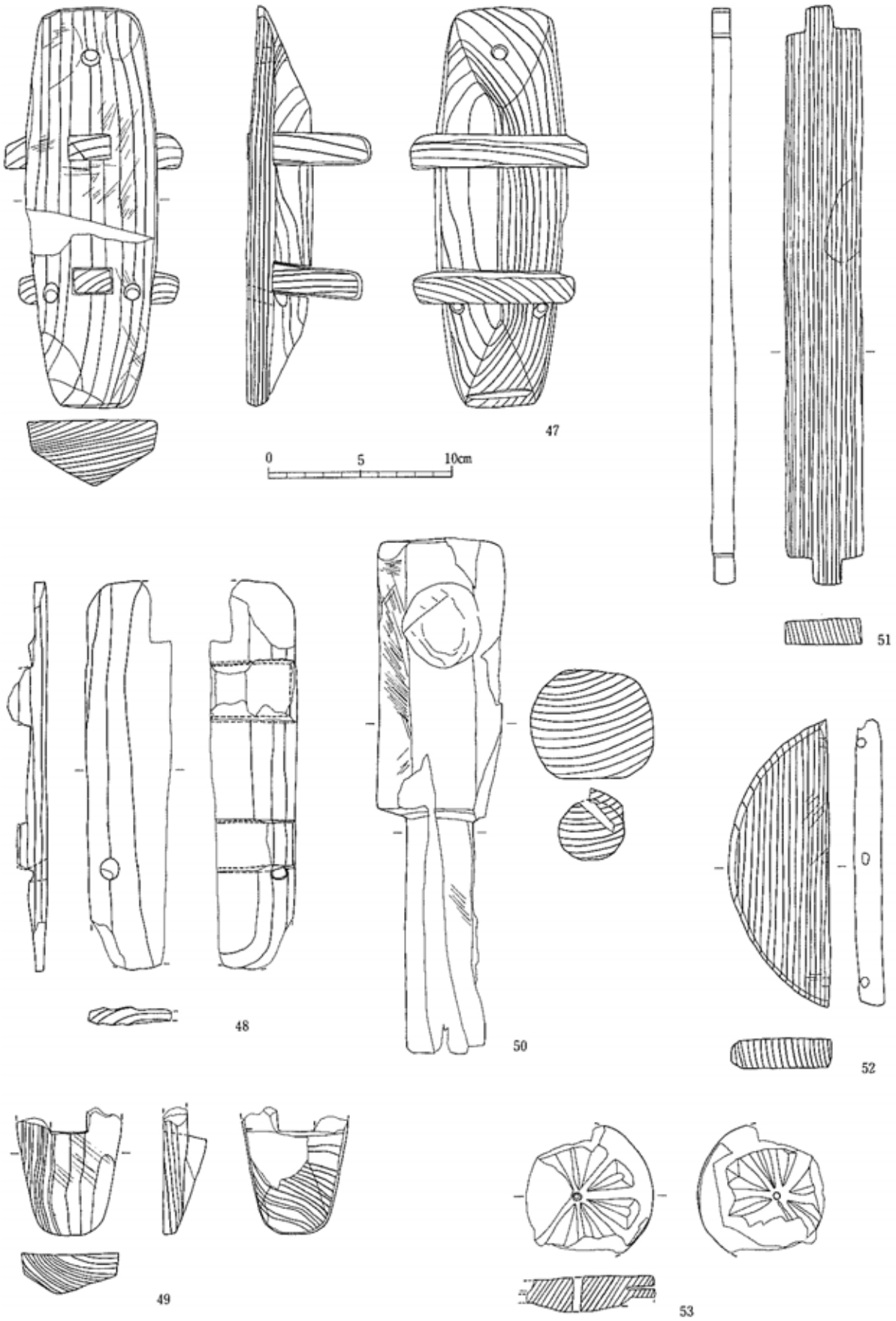
第54図　SD3396B 溝跡出土遺物（1）



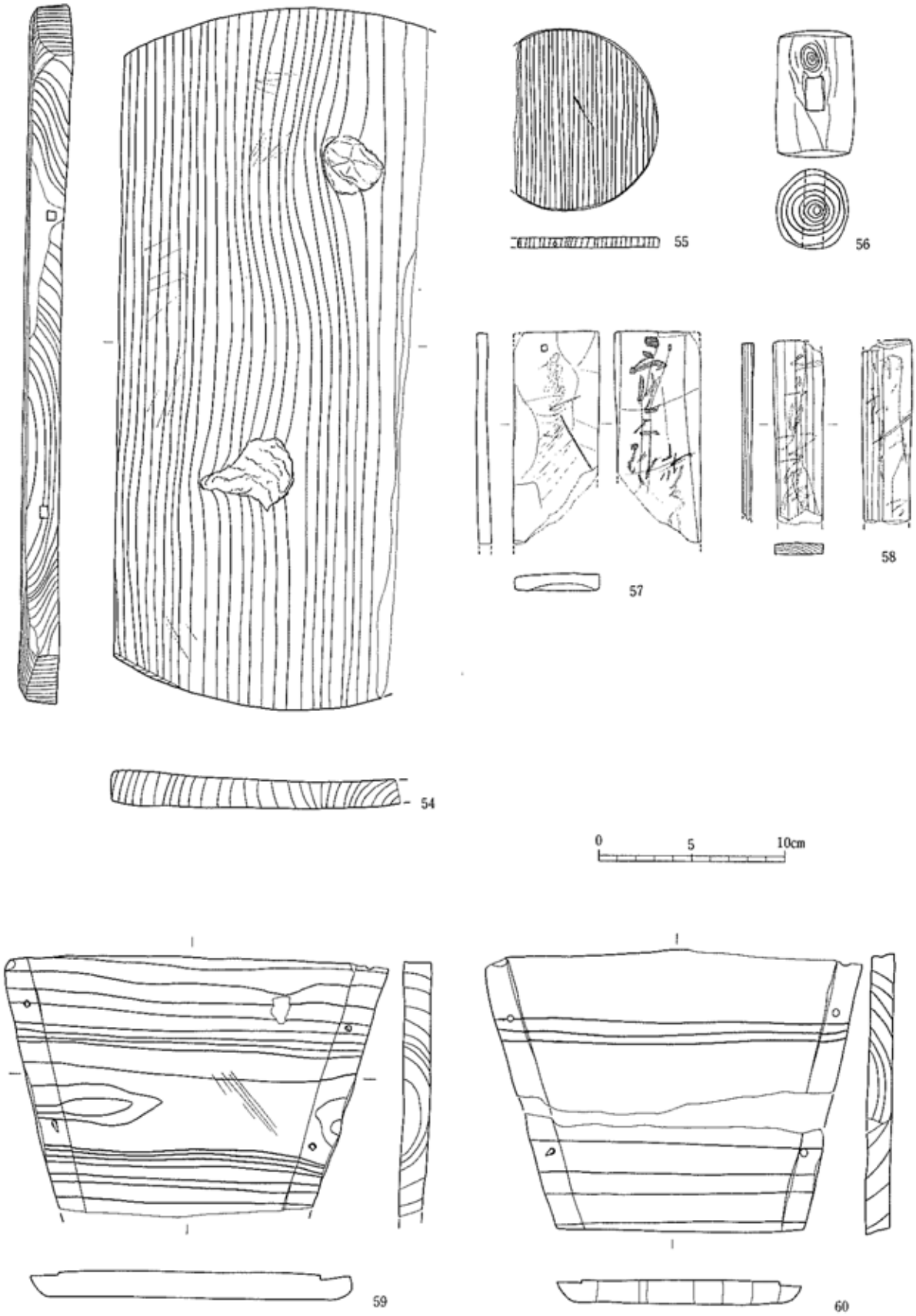
第55図　SD3396B 溝跡出土遺物（2）



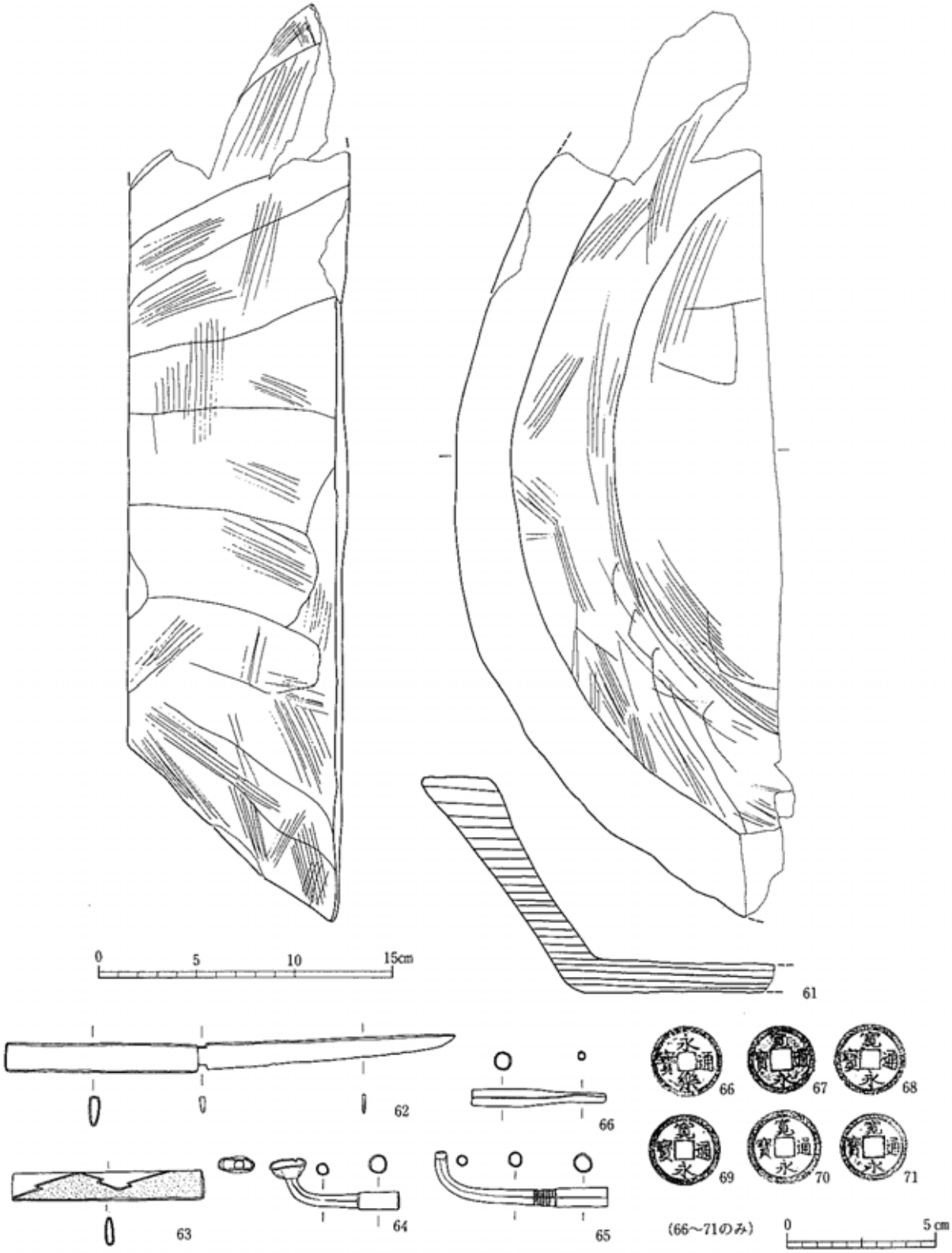
第56図　SD3396B 溝跡出土遺物（3）



第57図　SD3396B 溝跡出土遺物（4）



第58図　SD3396B 溝跡出土遺物（5）



第59図　SD3396B 溝跡出土遺物（6）

（単位：cm）

No.	層位	種類	口径	底径	器高	特徴	産地(系)	製作年代	写真図版
1	堆積土	磁器 猪口	7.3	5.7	5.8	染付	肥前	18世紀後半	41-24
2	堆積土	磁器 中碗	10.6	4.0	5.7	染付	瀬戸	19世紀前半～中頃	41-20
3	堆積土	磁器 中碗	－	4.5	－	色絵付け　外：唐草(漆接ぎ痕跡あり)	肥前	17世紀後半	41-22
4	堆積土	磁器 中碗	－	3.8	－	染付	切込	19世紀前半～中頃	
5	堆積土	磁器 中碗	10.6	4.7	5.3	染付　外：こうもり	瀬戸	19世紀前半～中頃	41-19
6	堆積土	磁器 小碗	7.1	－	－	染付　外：一揆山水	肥前	19世紀前半	41-25
7	堆積土	磁器 不明	5.2	－	－	染付	切込	19世紀前半～中頃	
8	堆積土	磁器 中碗	－	4.3	－	染付　くらわんか手　外：雪輪に草花紋	肥前	18世紀？	41-21
9	堆積土	磁器 中皿	－	5.0	－	染付	中国	17世紀前半	42-1
10	堆積土	磁器 中皿	13.4	6.0	2.9	染付　外：蝶(大明成化年製記銘有)	肥前	17世紀中頃	
11	堆積土	磁器 中皿	－	4.7	－	染付	肥前	17世紀前半	
12	堆積土	磁器 中皿	17.8	10.9	3.2	染付　外：唐草　焼き接ぎ痕跡有	肥前	17世紀末	
13	堆積土	磁器 中皿	13.4	6.1	2.9	染付　内：蝶(大明成化年製記銘有)	肥前	17世紀中頃	
14	堆積土	磁器 中皿	14.7	7.9	3.0	染付　くらわんか手　内：五弁花紋(こんにゃく版)	波佐見系	18世紀	
15	堆積土	磁器 中皿	18.4	7.8	6.3	色絵付け　内：雷紋	瀬戸	19世紀後半以降	41-23
16	堆積土	磁器 中皿	－	20.6	－	色絵付け	肥前	19世紀後半以降	
17	堆積土	磁器 中皿	15.4	7.7	3.6	色絵付け	肥前	17世紀中頃	
18	堆積土	青磁 香炉	14.4	－	－		肥前	18世紀	
19	堆積土	磁器 戸車	3.7	1.2	0.8	側面擦跡有り			
20	堆積土	施釉陶器 大皿	－	6.8	－	内：色絵付け、目跡有り　外：底部に墨書	大堀相馬	19世紀前半～中頃	
21	堆積土	施釉陶器 中碗	11.0	5.0	5.8	外：鉄釉系流し掛け　内外：灰釉系	大堀相馬	18世紀後半	
22	堆積土	施釉陶器 中碗	10.9	4.1	5.6	外：腰部刺線紋(鉄釉)　口縁部：灰釉系流し掛け　内：灰釉系	大堀相馬	18世紀後半	41-26
23	堆積土	施釉陶器 中碗	9.9	4.1	5.4	外：腰部刺線紋(鉄釉)　口縁部：灰釉系流し掛け　内：灰釉系	大堀相馬	18世紀後半	
24	堆積土	施釉陶器 中碗	11.1	5.0	7.6	ごき手　灰釉系	肥前	17世紀末～18世紀初頭	41-27
25	堆積土	施釉陶器 中碗	9.3	3.8	5.6	灰釉系		18世紀	
26	堆積土	施釉陶器 中碗	8.2	3.1	5.9	灰釉系	大堀相馬	18世紀後半	42-2
27	堆積土	施釉陶器 小碗	6.3	2.8	3.1	灰釉系	大堀相馬	18世紀後半	42-3
28	堆積土	施釉陶器 香炉	－	7.3	－	灰釉系	中国？		42-8
29	堆積土	施釉陶器 中皿	13.7	4.8	3.8	外：灰釉　内：青釉(見込み蛇の目釉剥ぎ)	肥前	17世紀末～18世紀初頭	
30	堆積土	施釉陶器 大皿	－	12.1	－	外：ロクロナデ　内：鉄釉刷毛目(三島手、褐色・白色)	唐津	17世紀後半～18世紀前半	42-5
31	堆積土	施釉陶器 向付	－	－	3.8	内：絵付け　内外：すす・油煙付着	唐津	16世紀末	42-4
32	堆積土	施釉陶器 不明	－	6.9	－	外：鉄釉　内：ロクロナデ			42-6
33	堆積土	施釉陶器 甲壺	19.1	－	－	口縁部：なまこ釉	瑞	19世紀前半～中頃	
34	堆積土	施釉陶器 擂鉢	33.0	－	－	内外：鉄釉　内：筋目(9本一組)	瀬戸美濃	17世紀後半～18世紀前半	
35	堆積土	施釉陶器 擂鉢	－	14.4	－				42-9
36	堆積土	施釉陶器 擂鉢	－	11.1	－				42-10
37	堆積土	施釉陶器 擂鉢	－	12.8	－				
38	堆積土	施釉陶器 大壺	－	－	－	外：なまこ釉	瑞	19世紀代	42-7

No.	層位	種類	口径	底径	器高	特徴	写真図版
39	堆積土	漆器 椀	12.2	－	－	樹種：ブナ属　横木取り	
40	堆積土	漆器 椀	－	－	－	樹種：ブナ属　横木取り	43-5
41	堆積土	漆器 椀	－	－	－	底部記銘有　樹種：ブナ属　横木取り	43-7
42	堆積土	挽物 小皿	10.1	6.2	1.2	底部(外面から内面に0.6cmの穿孔あり)　樹種：ブナ属　横木取り	43-2
43	堆積土	漆器 椀	－	－	－	樹種：ブナ属　横木取り	
44	堆積土	漆器 椀	－	－	－	底部記銘有(寿)　樹種：ブナ属　横木取り	43-8

No.	層位	種類	長さ(現)	幅	厚さ	特徴	写真図版
45	堆積土	不明木製品	－	1.6	0.6	赤漆塗　側面に釘穴あり　樹種：ヒノキ	
46	堆積土	不明木製品	14.7	1.8	0.3	樹種：ヒノキ　柾目	
47	堆積土	下駄(差歯)	22.0	7.2	9.8	樹種：ケヤキ　柾目	44-2
48	堆積土	下駄(連歯)	21.4	4.7	2.1	樹種：スギ　柾目	
49	堆積土	下駄(差歯)	7.0	5.8	2.4	樹種：ケヤキ　柾目	
50	堆積土	農具 横槌	28.5	6.8	6.0	樹種：クヌギ節　丸木	
51	堆積土	手桶把手	31.8	4.2	1.4	樹種：アスナロ　柾目	
52	堆積土	曲物 底板	17.0	－	1.6	側面に木釘痕跡あり(3箇所)	
53	堆積土	墨壺の滑車？	8.1	－	1.9	樹種：ケヤキ　斜め	45-5
54	堆積土	桶底板	37.8	－	2.0		
55	堆積土	曲物 底板	9.8	－	0.6		
56	堆積土	不明木製品	7.0	－	4.0	中央部にほぞ穴有(貫通)　樹種：ヒノキ科　丸木	
57	堆積土	木簡	11.4	4.1	1.0	樹種：アスナロ　板目	45-7
58	堆積土	木簡	9.9	2.7	0.6	樹種：アカマツ　板目	45-8
59	堆積土	不明木製品	15.2	20.1	1.5	内面外側段有り・外側より4箇所に釘残存　樹種：ヒノキ　斜め	
60	堆積土	不明木製品	15.2	20.1	1.5	内面外側段有り・外側より4箇所に釘残存　樹種：ヒノキ　斜め	
61	堆積土	櫛	46.1	－	1.5	樹種：トチノキ	
62	堆積土	小刀	22.7	1.5	0.5	鞘部は銅製	43-11
63	堆積土	鞘	9.7	1.4	0.4	片面に刻印有り	43-12
64	堆積土	煙管 雁首	6.6	－	－	火皿高0.8　首部径0.6　羅部径0.9	43-13
65	堆積土	煙管 雁首	8.8	－	－	首部径0.7　羅部径1.0　火皿欠損	43-14
66	堆積土	煙管 吸い口	6.9	－	－	末端径4.5	43-15
67	堆積土	銭 永楽通宝	2.4	－	－	孔径：0.6	43-21
68	堆積土	銭 寛永通宝	2.3	－	－	孔径：0.5	
69	堆積土	銭 寛永通宝	2.4	－	－	孔径：0.5	
70	堆積土	銭 寛永通宝	2.3	－	－	孔径：0.6	
71	堆積土	銭 寛永通宝	2.3	－	－	孔径：0.5	43-22

第1表　SD3396B 溝跡出土遺物観察表

していることから、それぞれの遺構はＳＤ3396 から水を引き込んでいたと考えられる。

ＳＤ2921 溝跡（第 40 図）

調査区南側で検出した東西溝跡で、長さ 6.2m分を確認した。ＳＥ2936 井戸跡、ＳＤ3540 溝跡より新しく、ＳＥ2920 井戸跡より古い。上端幅 0.5m、底面幅 0.2m、深さ 0.2mである。方向は溝の心心で測るとＥ6°Ｓである。断面形は逆台形をなし、底面は緩やかに西に傾斜している。堆積土は 2 層に分けられ、下層は黒褐色砂質粘土、上層は黒褐色砂質シルトの自然堆積土である。遺物は出土していない。

ＳＤ2922 溝跡（第 40 図）

調査区南側で検出した東西溝跡で、長さ 9.1m分を確認した。ＳＫ2973・3149 土壙、ＳＸ2923 より新しく、ＳＥ2925 井戸跡より古い。上端幅 0.5～0.8m、底面幅 0.4m、深さ 0.3mである。方向は溝の心心で測るとＥ2°Ｓである。断面形は逆台形をなし、底面はほぼ平坦である。堆積土は黒褐色粘土で自然堆積土とみられる。遺物は出土していない。

ＳＤ2965 溝跡（第 40 図）

調査区南側で検出した東西溝跡で長さ 12.5m分を確認した。ＳＩ2983 住居跡、ＳＫ2993・3389・3391 土壙、ＳＸ2923 より新しく、ＳＤ3009Ａ・Ｂ・3396Ａ・Ｂ区画溝跡、ＳＫ2937・3001・3002・3147・3148 土壙より古い。上端幅 2.4～3.5m、底面幅 0.2～0.8m、深さ 0.2mである。方向は溝の心心で測るとＥ9°Ｓである。断面形は舟底形で底面中央がくぼむ。遺物は出土していない。

ＳＤ3517 溝跡（第 40 図）

調査区南側で検出した南北溝跡で長さ 4m分を確認した。ＳＤ3009Ａ・Ｂ溝跡より古い。上端幅 0.3m、底面幅 0.1m、深さ 0.1mほどである。方向は溝の心心で測るとＮ3°Ｅである。断面形は逆台形をなし、底面はほぼ平坦である。堆積土は黒褐色シルトで自然堆積土とみられる。遺物は出土していない。

ＳＤ3015 溝跡（第 43 図）

調査区中央部で検出した溝跡で、長さ 8.9m分を確認した。方向は調査区内が東西で、東壁際で南にＬ字状に折れ曲る。ＳＫ3013・3014・3070・3074 土壙より新しい。上端幅 0.4～0.5m、底面幅 0.2m、深さ 0.1mである。東西の方向は溝の心心で測るとＥ11°Ｓである。断面形は逆台形をなし、底面は東に向かって緩やかに傾斜している。堆積土は炭化物粒を若干含む黒褐色粘土である。堆積土から宮城県仙台市堤窯の製品と思われる焙烙が出土している。

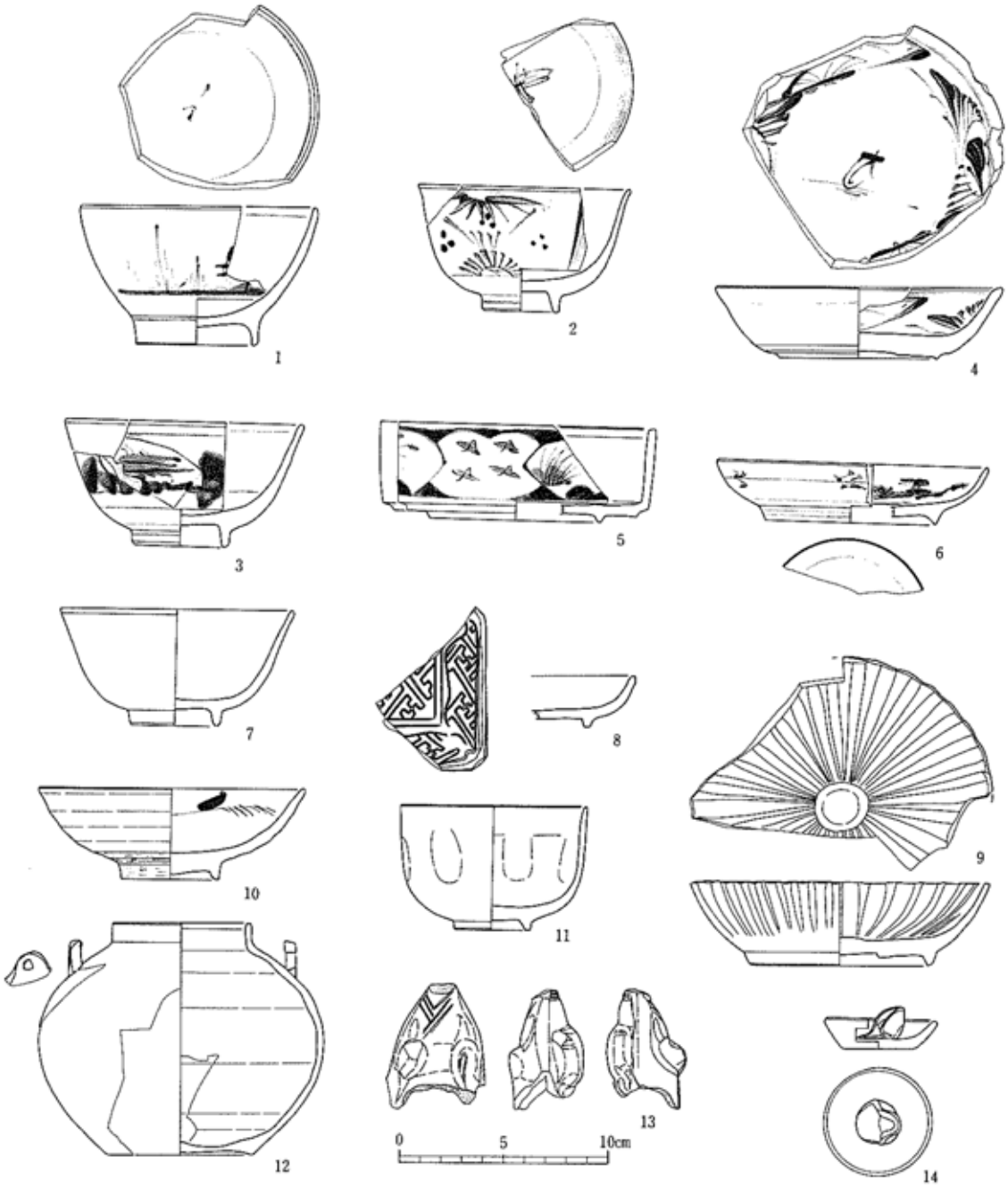
本溝跡はＳＤ3024・3033 溝跡と堆積土が似ること、底面レベルがほぼ同じであることから一連の溝と考えられる。

ＳＤ3024 溝跡（第 43 図）

調査区中央部で確認した南北溝跡で、長さ 3.4m分を確認した。上端幅 0.5m、底面幅 0.3m、深さ 0.1mほどである。方向は溝の心心で測るとＮ7°Ｅである。断面形は逆台形をなし、底面はほぼ平坦である。堆積土は炭化物粒を若干含む黒褐色粘土である。遺物は出土していない。

ＳＤ3033 溝跡（第 39・43 図）

調査区中央部で検出した南北溝跡で、長さ 13.1m分を確認した。ＳＢ3406・3407 建物跡、ＳＫ3032 土壙より新しく、ＳＫ3021 土壙より古い。上端幅 0.2～0.8m、底面幅 0.2～0.6m、深さ 0.1mほどである。



（単位：cm）

№	種　類	口径	底径	器高	文　様　・　特　徴	産地(系)	製作年代	写真図版
1	磁器　中碗	13.4	5.8	6.7	広東形	肥前		42-15
2	磁器　中碗	10.2	3.8	6.0	外：竹　見込み：記銘あり「□」（寿か）	瀬戸	19世紀前半～中頃	42-13
3	磁器　中碗	11.4	4.6	6.0	見込み：荒磯文	平清水？		42-14
4	磁器　中皿	13.8	7.6	3.4	内：草花文		19世紀前半～中頃	42-20
5	磁器　段重	13.2	8.2	4.6	外：雀	肥前	19世紀前半～中頃	42-16
6	磁器　中皿	13.0	8.2	2.9	くらわんか手　内外：草花文	肥前	18世紀代	42-19
7	白磁　中碗	11.2	4.3	5.6	口縁部に鉄釉		19世紀前半～中頃	42-17
8	白磁　角皿	－	2.5	－		平清水	19世紀前半～中頃	
9	白磁　中皿	14.4	8.8	4.0	菊皿	切込	19世紀前半～中頃	42-21
10	施釉陶器　中皿	12.8	4.7	4.4	灰釉　内：鉄釉による施文あり	志野	17世紀代	
11	施釉陶器　中碗	9.0	3.8	6.0	灰釉民し掛け	大堀相馬	19世紀前半～中頃	42-18
12	施釉陶器　土瓶	6.7	7.0	11.2	外：下半部釉無し　突起は4個あったと推定　内：下半部にすす付着	大堀相馬	19世紀前半～中頃	42-24
13	土製人形	6.1	4.7	3.6	前後合わせの素焼	堀		
14	陶器　灯明皿	5.4	3.2	1.5		堀		42-22

第60図　表土出土遺物

方向は北にいくほど東に傾くが、両端の心心で測るとN9°Eである。断面形は逆台形をなし、底面はほぼ平坦である。堆積土は炭化物粒を若干含む黒褐色粘土である。遺物は出土していない。

ＳＤ3551 溝跡（第 39 図）

調査区中央部で検出した東西溝跡で、長さ 7.5m分を確認した。ＳＫ3065・3379・3380 土壙より古い。上端幅 3.0～3.5m、底面幅 0.2m、深さは 0.1mある。方向は溝の心心で測るとE11°Ｓである。断面形は漏斗状で中央部がくぼむ。底面はほぼ平坦である。堆積土は黒褐色シルト質粘土で自然堆積土とみられる。遺物は出土していない。

ＳＤ3376 溝跡（第 39 図）

調査区北側で検出した東西溝跡で、長さ 6.5m分を確認した。ＳＫ3053 土壙より古い。上端幅 0.1～0.4m、底面幅 0.1m、深さ 0.1mである。方向は溝の心心で測るとE7°Ｓである。断面形は逆台形をなし、底面はほぼ平坦である。堆積土は灰黄色粘土で自然堆積土とみられる。遺物は出土していない。

（5）表土出土の遺物（第 60 図）

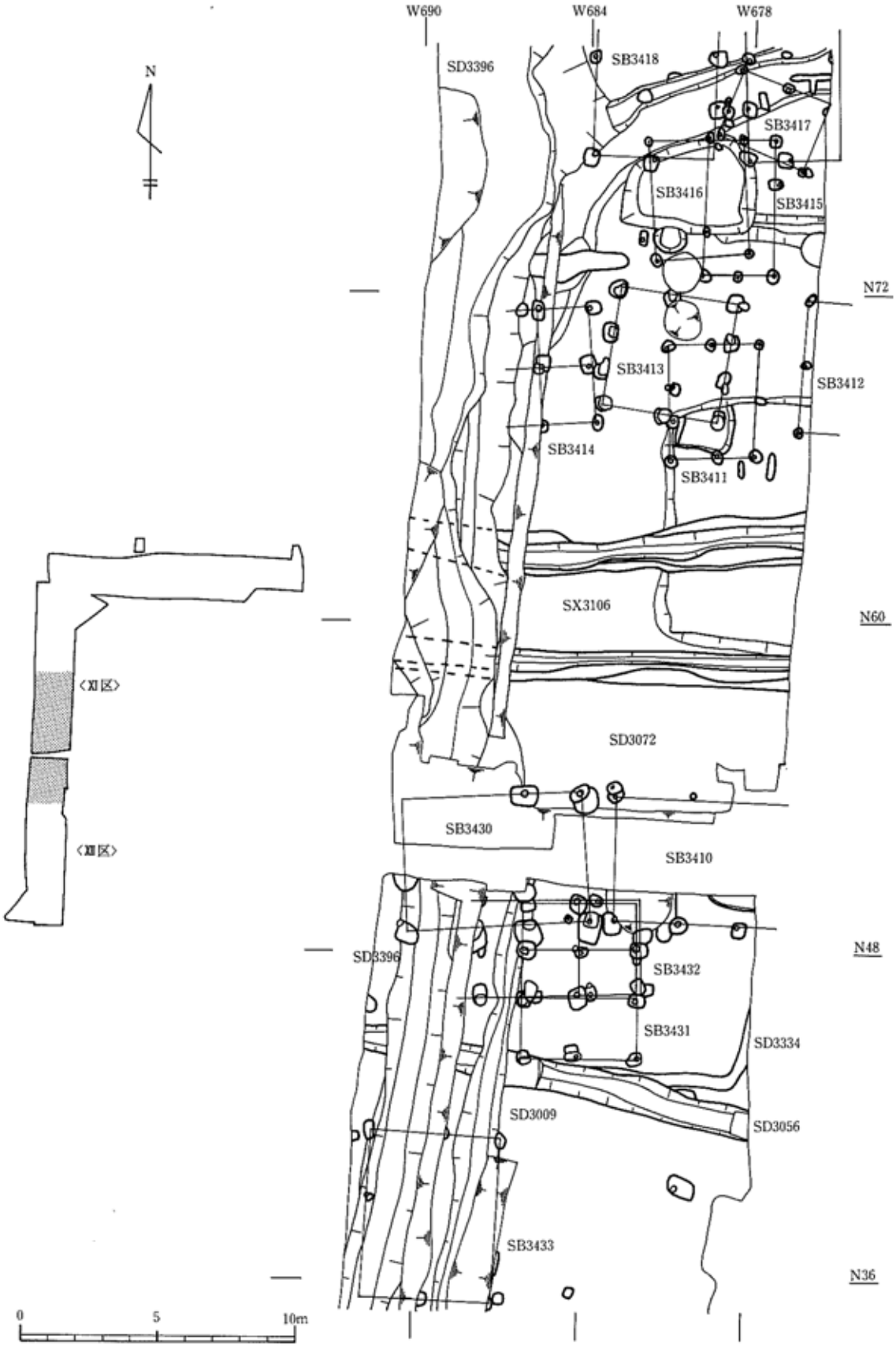
XII・XI区の第 1 層（表土）からは江戸時代の遺物が多数出土している。肥前産の染付磁器碗（1）・段重（5）・くらわんか手の 18 世紀の中皿（6）、瀬戸産の 19 世紀前半～中頃の染付磁器碗（2）、宮崎町切込窯の製品と考えられる 19 世紀前半～中頃磁器の菊皿（9）、志野産の 17 世紀の陶器皿（10）、大掘相馬産の 19 世紀前半～中頃の陶器中碗（11）・土瓶（12）、仙台市堤窯の製品と考えられる土製雛人形（13）などが出土している。

Ｂ．ＸＩ区

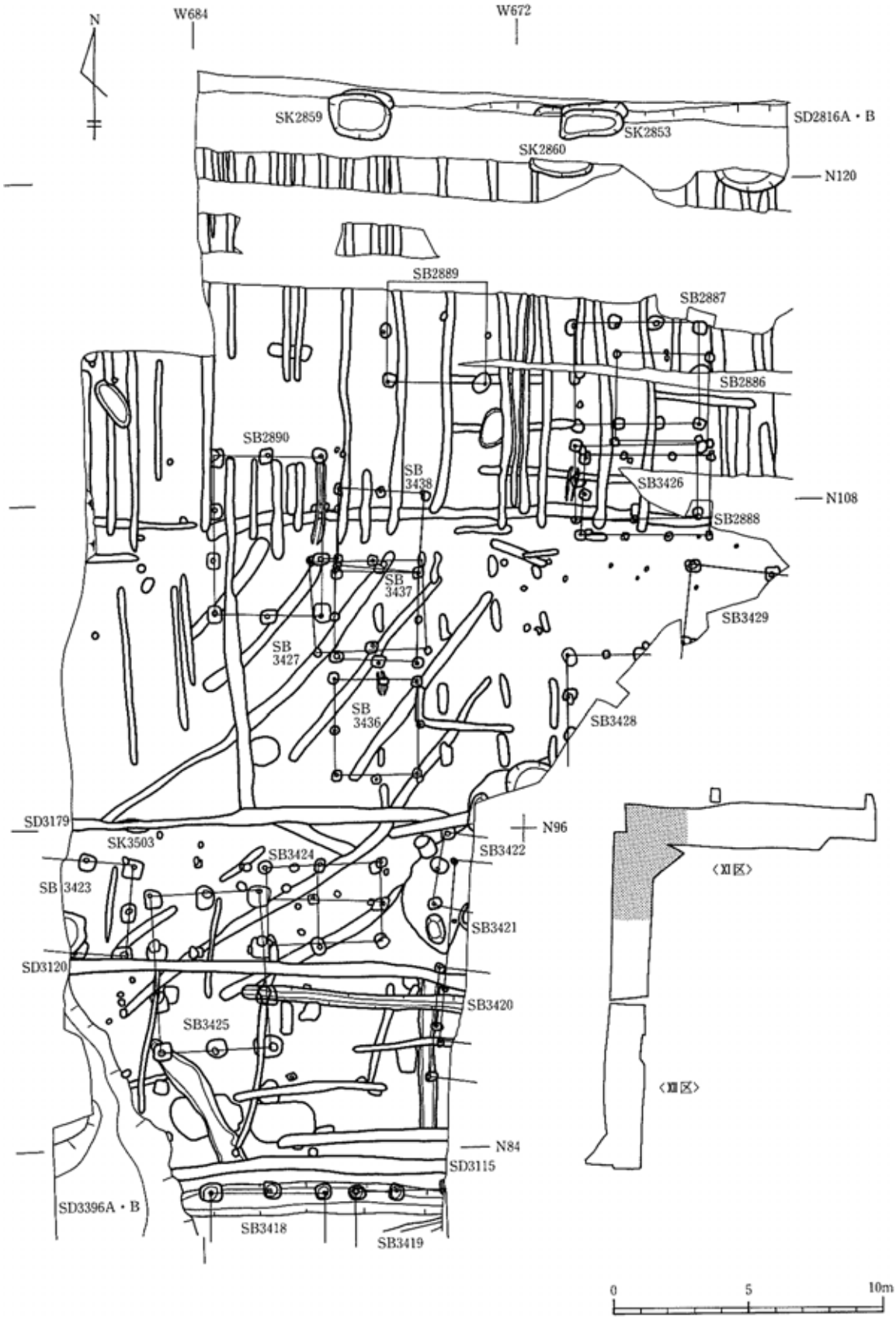
本調査区で発見した遺構は第 4 層と第 5 層のものとがある。前者で検出した遺構としては東西道路跡 1、竪穴住居跡 1、掘立柱建物跡 31、掘立柱列跡 2、区画溝跡 7、土壙 18、溝跡 13、池跡 1、井戸跡 4、小溝状遺構群 9 などがある。このうち第 3 層が部分的に残る調査区北部では、遺構が第 3 層を掘り込んでいる。出土遺物には土師器・須恵器・陶器・磁器・石製品・木製品・植物遺体などがある。これらの遺構の時期は重複関係や堆積土の特徴、出土遺物からみて古墳時代中期、奈良・平安時代、江戸時代以降の 3 つに大別できる。第 5 層では古墳時代前期の水田跡を確認した。このうち、古墳時代の遺構については中期のＳＩ3525 住居跡がXII区で、前期のＳＦ3552 水田跡はX区で記載しており、ここでは奈良・平安時代、江戸時代以降の主な遺構について記述する。なお、これらの遺構の検出面についてはとくに記載していない場合、第 4 層である。

1．奈良・平安時代

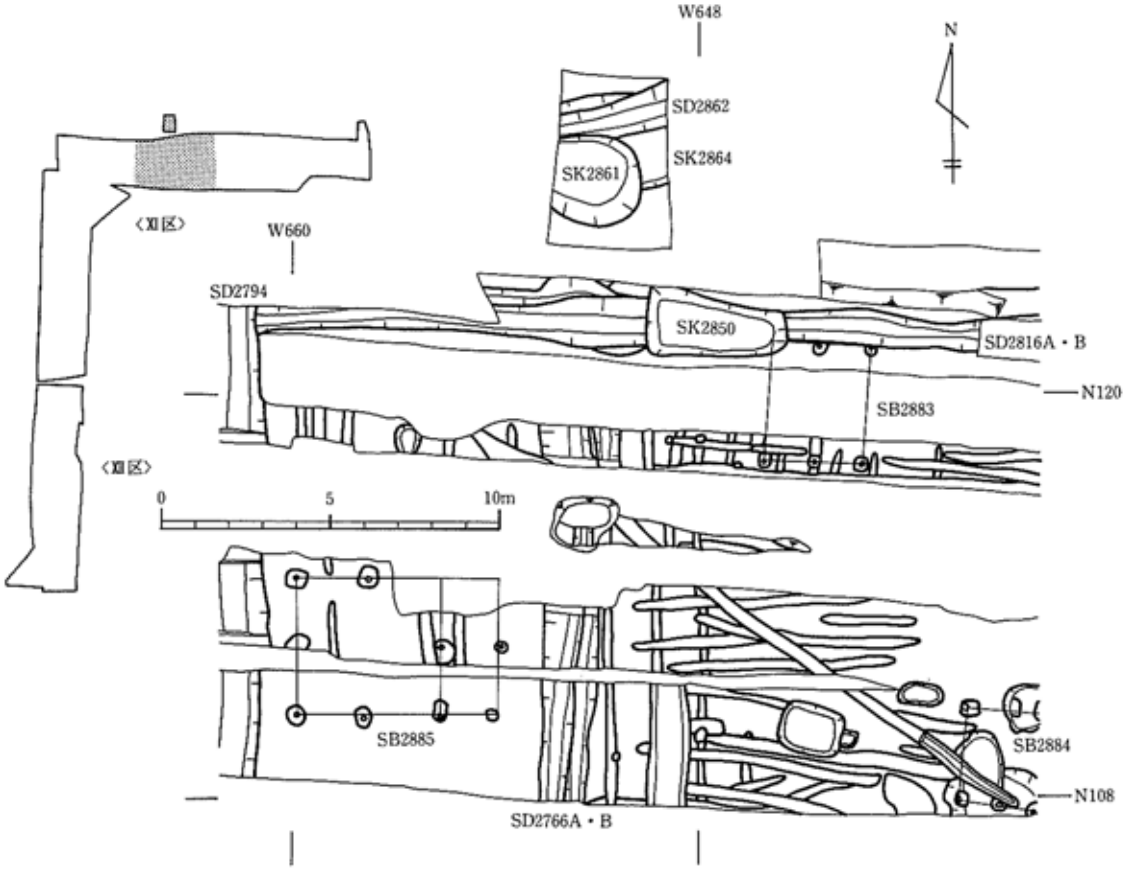
奈良・平安時代の遺構は東西道路跡 1、掘立柱建物跡 31、掘立柱列跡 2、区画溝跡 4、土壙 17、溝跡 9、小溝状遺構群 9 などがある（第 61～65 図）。これらのうち、掘立柱建物跡は調査区北部中央にあるＳＤ2766Ａ・Ｂ南北溝跡の西に多く分布しており、東側は小溝状遺構群が目立つ。出土遺物には土師器・須恵器・石製品・木製品などがある。



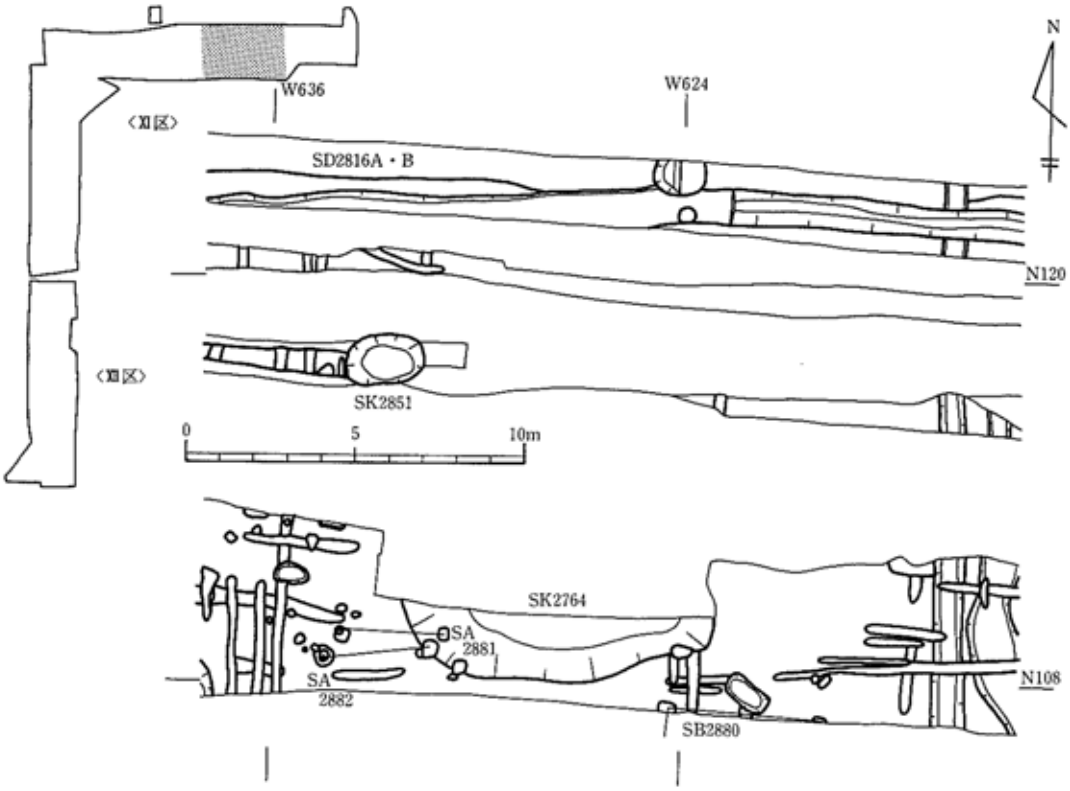
第61図　XI区の検出遺構（奈良・平安時代）（1）



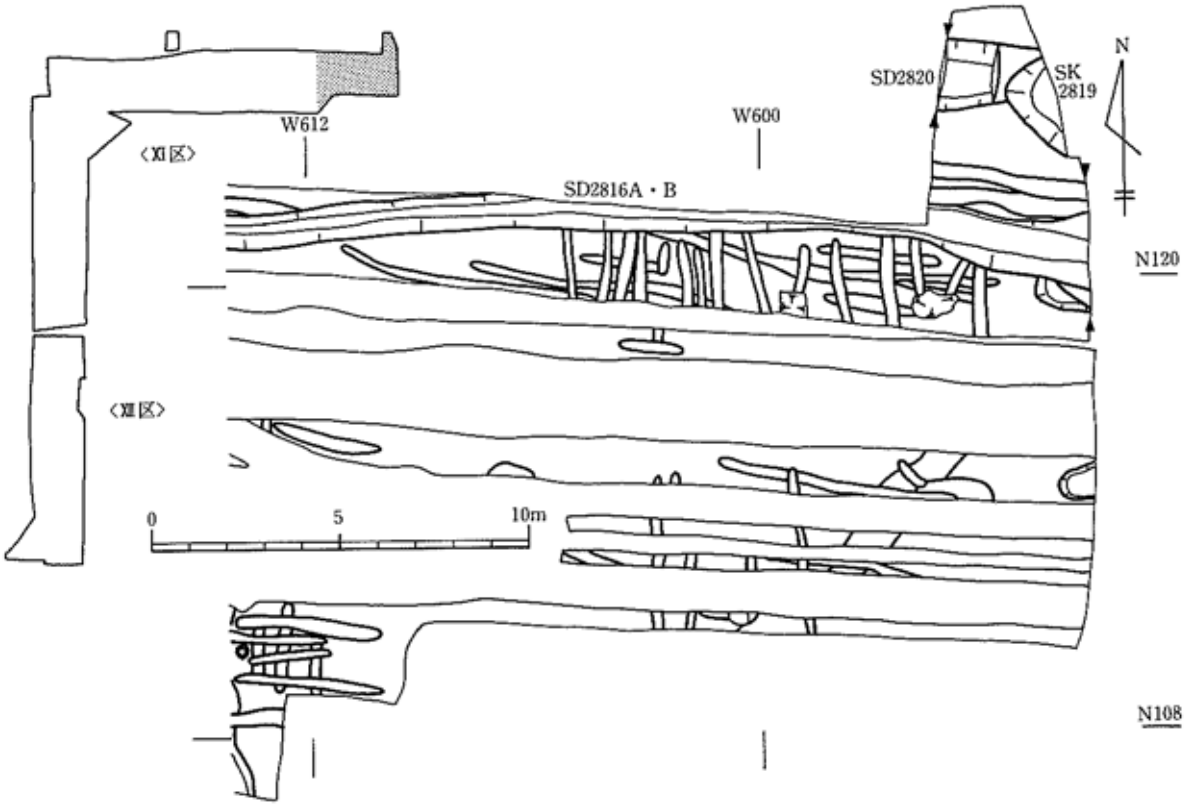
第62図　XI区の検出遺構（奈良・平安時代）（2）



第63図　Ⅺ区の検出遺構〔奈良・平安時代〕（3）



第64図　Ⅺ区の検出遺構〔奈良・平安時代〕（4）



第65図　XI区の検出遺構〔奈良・平安時代〕（5）

（1）道路跡

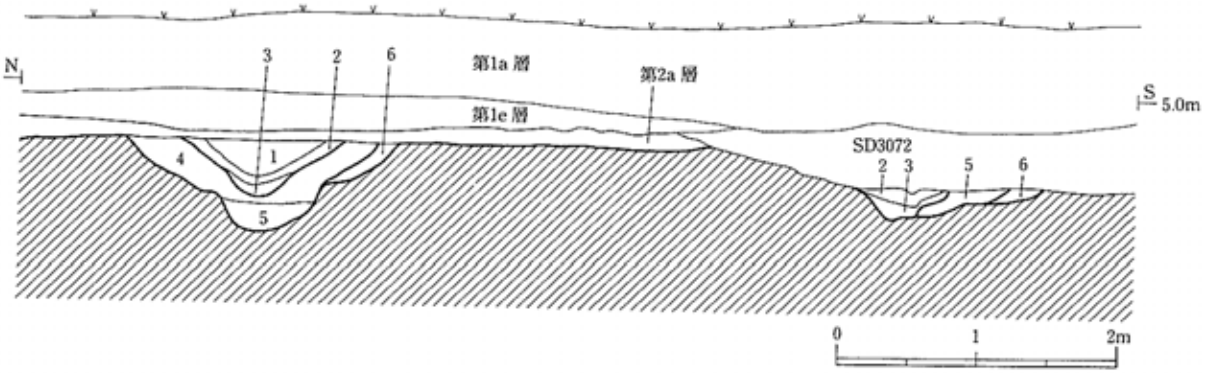
ＳＸ3106 道路跡（第 66・67 図）

調査区の南端で検出した東西道路跡で、長さ 14.4m分を確認した。ＳＤ3072・3396Ａ・Ｂ溝跡より古い。道路の両端には素掘りの側溝をともなっており、それぞれ 3 時期の変遷（A→B→C）がある。路面と路面堆積土は後世の削平のため残っていない。溝の規模はC期で上端幅 0.7～1.0m、底面幅 0.3～0.5mで、深さは 0.4mである。底面は舟底形で壁はゆるやかに立ち上がる。

側溝の堆積土はC期が 3 層に分けられる。3 層は黒褐色粘土、2 層が灰白色火山灰ブロックを多量に含む黄灰色粘土、1 層は黒褐色粘土質シルトである。いずれも自然堆積と考えられる。B期は 2 層に分けられる。下層は地山ブロックを含む黒色粘土、上層は黒褐色シルト質粘土で自然堆積と考えられる。A期の堆積土は地山ブロックを多量に含む黒褐色粘土である。

道路の方向は南側溝で測るとＥ2°Ｓである。路幅はC期が側溝心心間の距離で 3.8～4.5mになる。A期やB側の路幅についてもC期と同規模と考えられる。本道路跡は八幡地区の調査時に検出したＳＸ300 東西道路跡（佐藤則之ほか：1997）の西延長線上に位置すること、規模や方向がＳＸ300 とほぼ同じことから、北 2 道路と一連のものと考えられる。

遺物はC期の堆積土からロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器高台坏・甕、瓦が少量出土している。このうち、土師器坏には「□（生カ）」、「上□」と墨書されたものがある（第 69 図 1）。B期の堆積土からはロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器蓋・甕、瓦が微量出土している。土師器坏には回転糸切りがある。A期からはロクロ調整の土師器坏や須恵器坏が微量出土している。土師器坏には回転糸切り



層No	土色・土性	混入物など	備考
1	黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルト		C期側溝
2	黄灰色(2.5Y4/1)粘土	灰白色火山灰ブロックを多量に含む	
3	黒褐色(2.5Y3/1)粘土		

層No	土色・土性	混入物など	備考
4	黒褐色(2.5Y3/1)シルト質粘土		B期側溝
5	黒色(10YR2/1)粘土	地山ブロックを含む	
6	黒褐色(10YR3/1)粘土	地山ブロック(大)を多量に含む	A期側溝

第66図　SX3106 道路跡断面図

がある。

（2）掘立柱建物跡

ＳＢ3411 建物跡（第 67・68 図）

調査区南側で検出した東西 2 間の南北棟建物跡である。桁行は西側柱列で 3 間、東側柱列で 2 間ある。ＳＢ3413 建物跡、ＳＤ3072 溝跡、ＳＸ3116 整地層より古い。

柱穴は 9 箇所で検出しており、8 箇所で径 10 ㎝の柱痕跡、1 箇所で柱抜取穴を確認している。平面規模は桁行が西側柱列で総長 4.05m、柱間寸法は北から 1.42m、1.25m、1.40m、梁行が北妻で総長 3.45m、柱間寸法が東から 1.81m、1.64mである。建物の方向は西側柱列で測るとN3°Wである。柱穴は一辺 0.3～0.4mの隅丸方形をしており、深さは 0.3mである。埋土は地山ブロックが主体で、含まれる黒褐色シルトの量で細分できる。

遺物は掘方埋土から両面黒色処理の土師器椀が微量出土している。

ＳＢ3412 建物跡（第 67・68 図）

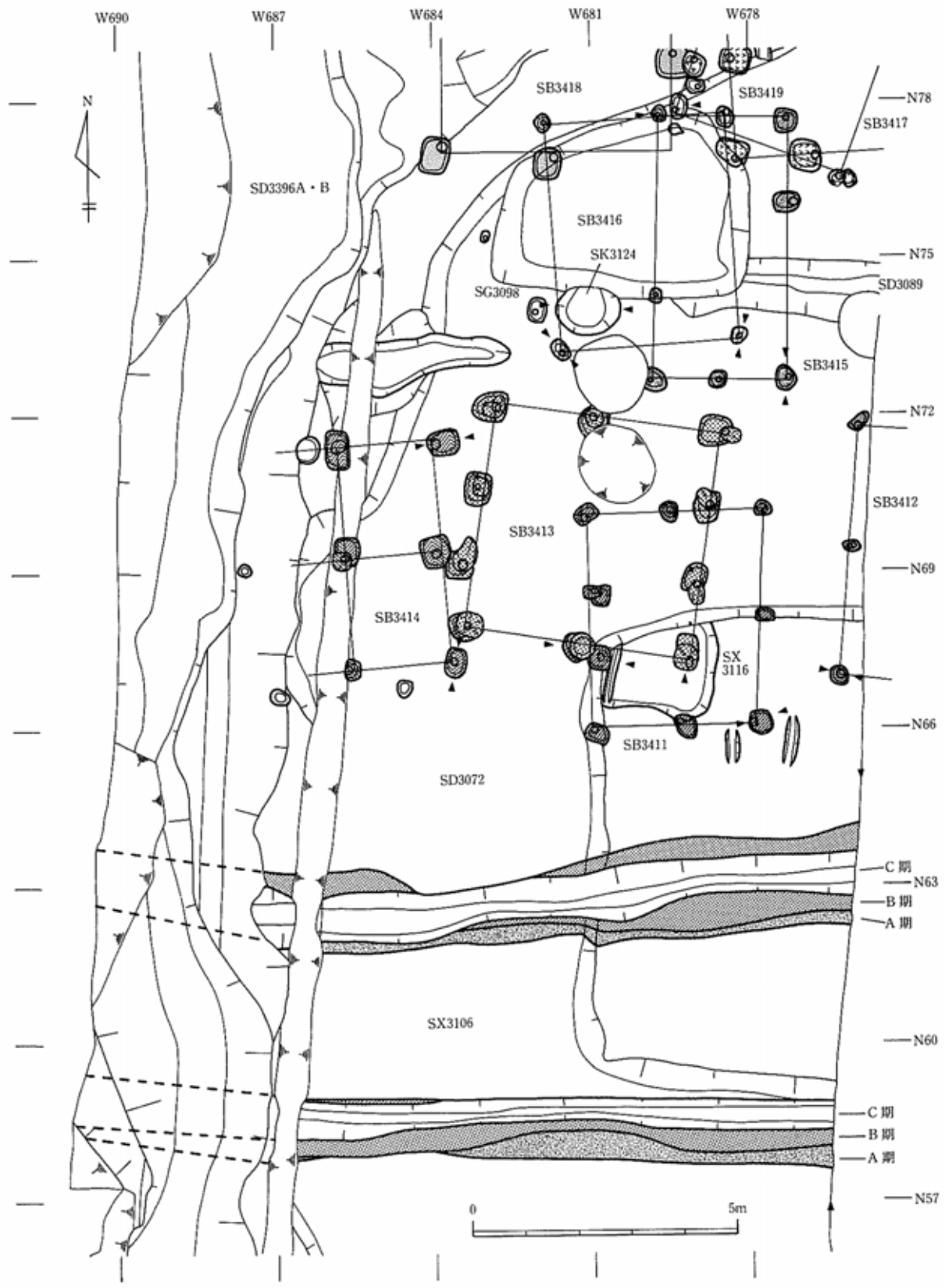
調査区南側の壁際で検出した南北 2 間、東西 1 間以上の建物跡である。西側柱列のみ確認した。ＳＤ3072 溝跡より古い。

柱穴は 3 箇所で検出しており、すべてで径 10～14 ㎝の柱痕跡を確認している。西側柱列は総長 4.76m、柱間寸法が南から 2.42m、2.32mである。建物の方向はN4°Eである。柱穴は一辺 0.2～0.4 ㎝の隅丸方形をしており、深さは 0.2mある。埋土は地山粒を少量含む黒褐色シルトである。遺物は出土していない。

ＳＢ3413 建物跡（第 67・68 図）

調査区南側で検出した南北 3 間、東西 2 間の南北棟建物跡である。ＳＢ3411・3414 建物跡より新しく、ＳＤ3072 溝跡、ＳＥ3018・3019 井戸跡、ＳＸ3116 整地層より古い。

柱穴は 10 箇所で検出しており、うち 9 箇所で径 12～15 ㎝の柱痕跡、10 箇所すべてで柱抜取穴を確認している。平面規模は桁行が東側柱列で総長 4.47m、柱間寸法は北から 1.46m、1.52m、1.49m、梁行



第67図　XI区南側の遺構

が北妻で総長4.34m、柱間寸法は東から2.48m、1.86mである。建物の方向は東側柱列で測るとN9°Eである。柱穴は一辺0.4～0.7mの隅丸方形をしており、深さは0.4mである。埋土は暗褐色もしくは黒褐色シルトが主体で、含まれる地山ブロックの量で細分できる。

遺物は掘方埋土から土師器坏・甕、須恵器坏・甕が少量出土している。柱抜取穴からは須恵器坏・甕、ロクロ調整のものを含む土師器甕や瓦が少量出土している。

ＳＢ3414建物跡（第67・68図）

調査区南側で検出した東西2間以上、南北2間の総柱建物跡である。ＳＢ3413建物跡、ＳＤ3072・3396Ａ・Ｂ溝跡より古い。

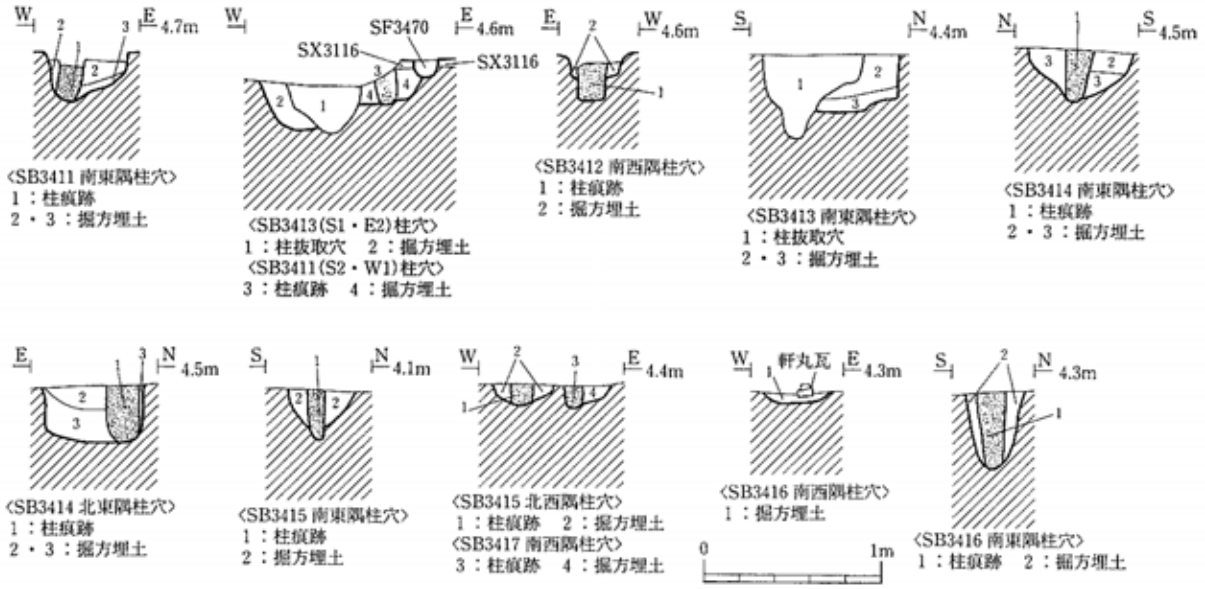
柱穴は6箇所で検出しており、すべてで径約15㎝の柱痕跡、3箇所で柱抜取穴を確認している。平面規模は東側柱列で総長4.19m、柱間寸法は北から2.09m、2.10m、北側柱列で総長1.79m以上である。建物の方向は東側柱列で測るとN4°Wである。柱穴は長辺0.6～0.7m、短辺0.4～0.5mの隅丸長方形をしており、深さは0.3mある。埋土は黒褐色ないし灰褐色シルトが主体で、含まれる地山ブロックの量で細分できる。

遺物は掘方埋土から土師器椀・甕、須恵器坏や有段丸瓦が少量出土している。このうち土師器椀は両面とも黒色処理が施されており、土師器甕には内面に漆が付着したものがある。柱抜取穴や柱痕跡からは土師器甕が微量出土している。

ＳＢ3415建物跡（第67・68図）

調査区南側で検出した南北3間、東西2間の南北棟建物跡である。ＳＢ3416建物跡より新しく、ＳＧ3098池跡、ＳＤ3072・3089溝跡、ＳＥ3019井戸跡より古い，

柱穴は8箇所で検出しており、すべてで径9～12㎝の柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が東側柱列で総長4.97m、柱間寸法は北から1.62m、3.34m（2間分）、梁行が北妻で総長2.40m、柱間寸法は東から1.15m、1.25mである。建物の方向は東側柱列で測るとほぼ真北を向く。柱穴は一辺が0.2～0.4mの隅丸方形をしており、深さは0.2mある。埋土は灰オリーブないし黒褐色シルトが主体



第68図 SB3411～3417 建物跡柱穴断面図

で、含まれる地山ブロックの量によって細分できる。

遺物は掘方埋土からロクロ調整の土師器坏や須恵器坏が少量出土している。須恵器坏にはヘラ切りがある。

ＳＢ3416 建物跡（第 67・68 図）

調査区南側で検出した東西、南北とも 2 間とみられる南北棟建物跡である。ＳＢ3415 建物跡、ＳＤ3072 溝跡、ＳＧ3098 池跡、ＳＥ3019 井戸跡より古い。

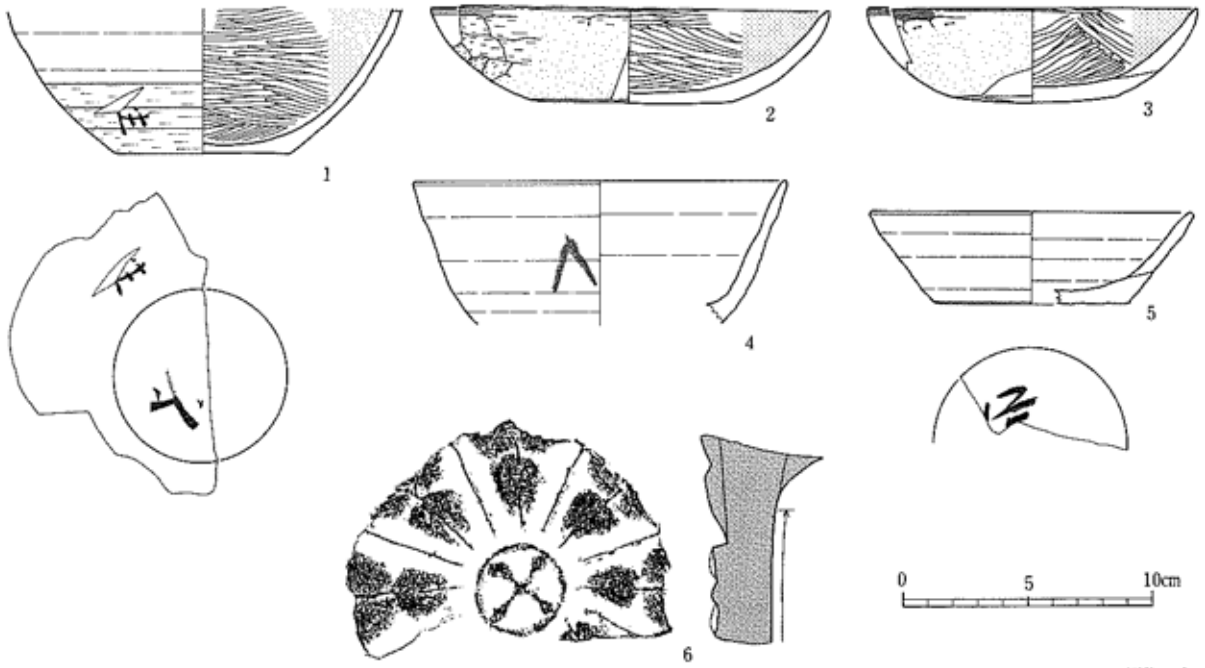
柱穴は隅柱のみを 3 箇所で検出しており、2 箇所で径 8 ㎝の柱痕跡を確認している。南西隅柱は残りが悪く柱痕跡は確認できなかったが、礎板に転用されたと考えられる軒丸瓦があり、柱の位置が推定できる。平面規模は桁行が西側柱列で総長 4.36m、梁行が北妻で総長 3.39mである。建物の方向は西側柱列で測るとN5°Wである。柱穴は一辺が 0.3～0.4mの隅丸方形をしており、深さは最も残りの良いもので 0.4mある。埋土は黒褐色のシルトおよびシルト質粘土が主体で、含まれる地山の量によって細分できる。

遺物は柱痕跡から土師器甕が微量出土している。また前述の軒丸瓦（第 69 図 6）は多賀城政庁跡遺構期第Ⅰ期の重弁蓮花文軒丸瓦である。

ＳＢ3417 建物跡（第 68・70・71 図）

調査区南側の東壁際で検出した南北 2 間、東西 2 間の東西棟建物跡である。ＳＧ3098 池跡、ＳＤ3072・3111 溝跡より古い。

柱穴は 6 箇所で検出しており、5 箇所で径 8～12 ㎝の柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が南



（単位：cm）

No	種別	出土遺構・層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	分類	写真図版
1	土師器・坏	SX3106北側溝・C期1層	外面：ロクロナデ→手持ちヘラケズリ　内面：ヘラミガキ→黒色処理　外面に墨書「□」（生の木横位）　底面に墨書「上□」	－	(7.0)	－	1/4	BⅡc	
2	土師器・坏	SB3422・柱穴確認面	外面：〔口〕ヨコナデ〔体～底〕手持ちヘラケズリ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(15.8)	(8.0)	3.8	1/4	A	
3	土師器・坏	SB3424・柱抜取穴	外面：〔口～体〕ヨコナデ→手持ちヘラケズリ〔底〕手持ちヘラケズリ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(13.0)	－	3.8	1/4	A	
4	須恵器・坏	SB2888・掘方埋土	外面：ロクロナデ　内面：ロクロナデ　外面に墨書「A」	(15.0)	－	－	一部		41－4
5	須恵器・坏	SB2888・掘方埋土	外面：ロクロナデ、ヘラ切り　内面：ロクロナデ　底面に墨書「□」	(12.8)	(7.8)	3.7	1/3	AⅠa	
6	軒丸瓦	SB3416・掘方埋土	瓦当面：重弁蓮華文　多賀城分類130　瓦当裏面：ナデ　礎板に転用						39－10

第69図　SX3106 道路跡、SB2888・3416・3422・3424 建物跡出土遺物

側柱列で総長 3.35m、柱間寸法は北側柱列で西から 1.99m、1.36m、梁行が西妻で総長 2.60m、柱間寸法は北から 1.31m、1.34mである。建物の方向は西妻で測るとN20°Eである。柱穴は径 0.3～0.4mの楕円形をしており、深さは 0.2mである。埋土は黒褐色シルトおよび粘土が主体で、含まれる地山ブロックの量によって細分できる。遺物は出土していない。

ＳＢ3418 建物跡（第 70・71 図）

調査区中央やや南よりで検出した南北 3 間、東西 2 間の南北棟建物跡である。ＳＧ3098 池跡、ＳＤ3111・3112・3114・3396Ａ・Ｂ溝跡より古い。

柱穴は 8 箇所で検出しており、すべてで径 15～20 ㎝の柱痕跡を確認している。うち 3 箇所で柱材が残っており、このうち北東隅樹こついて樹種同定をおこなったところ、クリであることがわかった。平面規模は桁行が西側柱列で総長 5.46m、柱間寸法は北から 1.90m、3.56m（2 間分）、梁行が北妻で総長 4.24m、柱間寸法は東から 2.04m、2.20mである。建物の方向は西側柱列で測るとほぼ真北を向く。柱穴は一辺が 0.5～0.8mの方形および長方形をしており、深さは 0.3mである。埋土は黒色ないし黄灰色の粘土および粘土質シルトが主体で、含まれる地山ブロックの量で細分できる。

遺物は掘方埋土から土師器甕、ヘラ切りの須恵器坏・須恵器甕が少量出土している。

ＳＢ3419 建物跡（第 70・71 図）

調査区中央の東壁際で検出した南北 3 間、東西 2 間の南北棟建物跡である。ＳＧ3098 池跡、ＳＤ3072・3111・3112・3114 溝跡より古い。

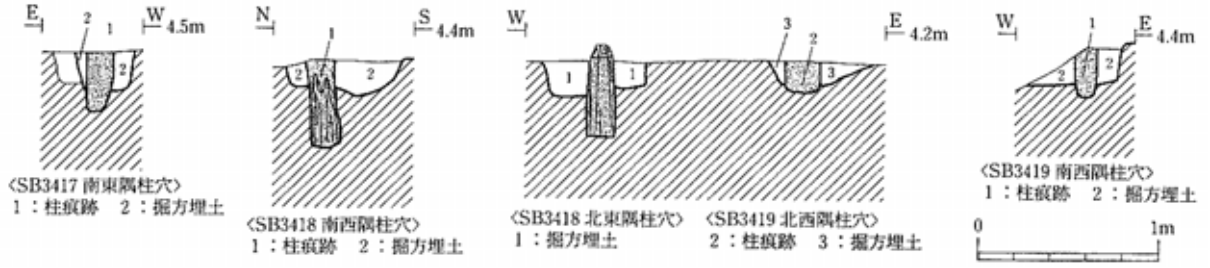
柱穴は 8 箇所で検出しており、6 箇所で径 14～20 ㎝の柱痕跡、1 箇所で柱の沈下を防ぐ礎板、1 箇所で柱抜取穴を確認している。礎板については樹種同定をおこなったところ、クリであることがわかった。平面規模は桁行が西側柱列で総長 5.62m、柱間寸法は北から 1.93m、1.76m、1.93m、梁行が北妻で総長 3.30m（推定）、柱間寸法は西から 1.52m、1.78m（推定）とみられる。建物の方向は西側柱列で測るとN2°Wである。柱穴は一辺が 0.5～0.6mの隅丸方形をしており、深さは 0.3mある。埋土は地山ブロックを少量含む黒色粘土である。

遺物は掘方埋土から土師器甕、須恵器甕が微量出土している。柱痕跡からは土師器甕が微量出土している。

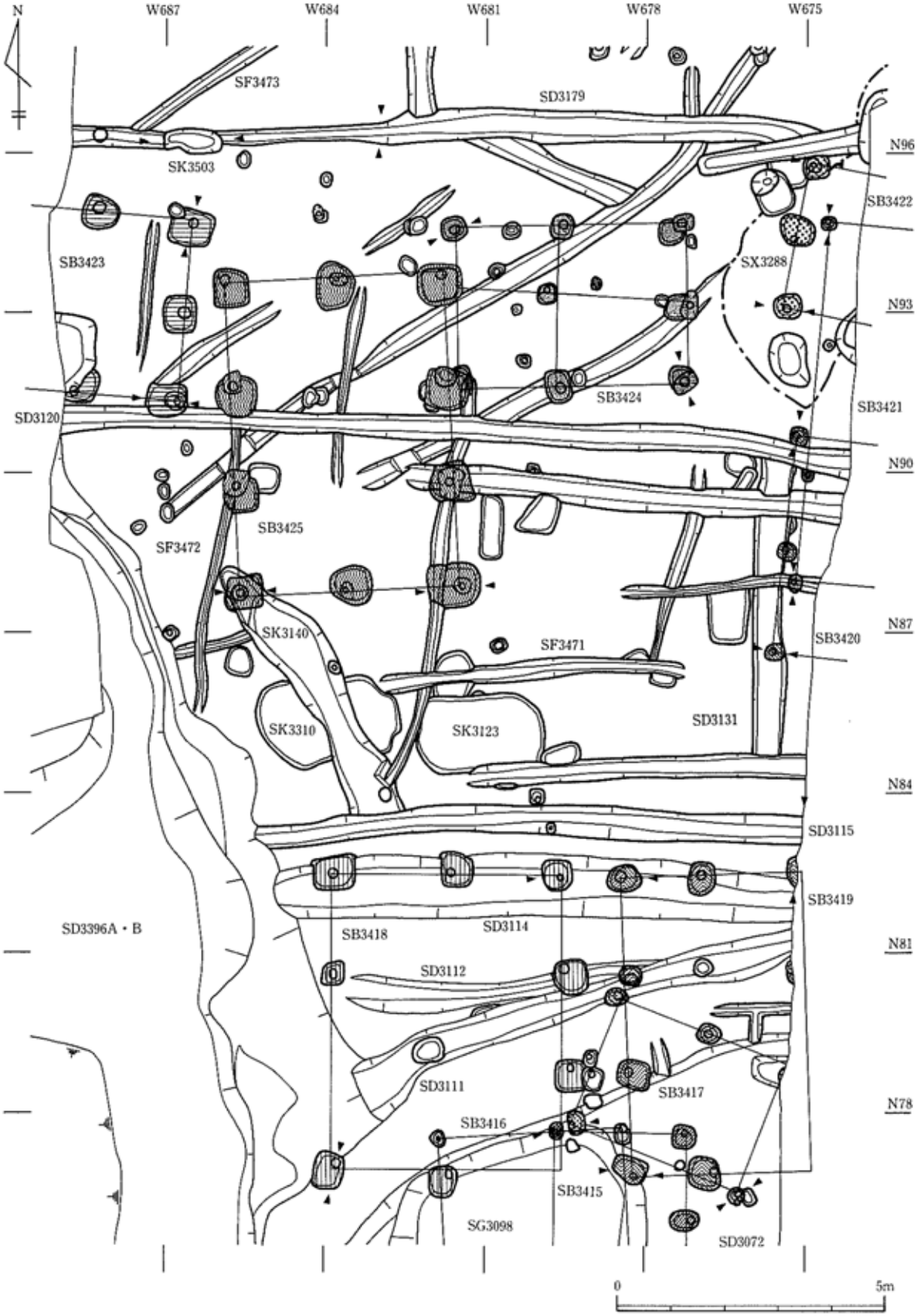
ＳＢ3420 建物跡（第 71・72 図）

調査区中央の東壁際で検出した南北 2 間、東西 1 間以上の建物跡である。ＳＤ3131 溝跡、ＳＦ3471 小溝状遺構群より古い。西側柱列のみ確認した。

柱穴は 3 箇所で検出しており、すべてで径 15 ㎝の柱痕跡を確認している。西側柱列は総長 4.10m、柱



第70図　SB3417～3419 建物跡柱穴断面図



第71図　Ⅺ区中央部の遺構

間寸法が北から2.20m、1.90mである。建物の方向はN6°Eである。柱穴は一辺が0.3～0.4mの隅丸方形で、深さは0.2mある。埋土は黒色シルト質粘土が主体で、含まれる地山ブロックの量で細分できる。遺物は柱痕跡からヘラ切りの須恵器坏が微量出土している。

ＳＢ3421建物跡（第71・72図）

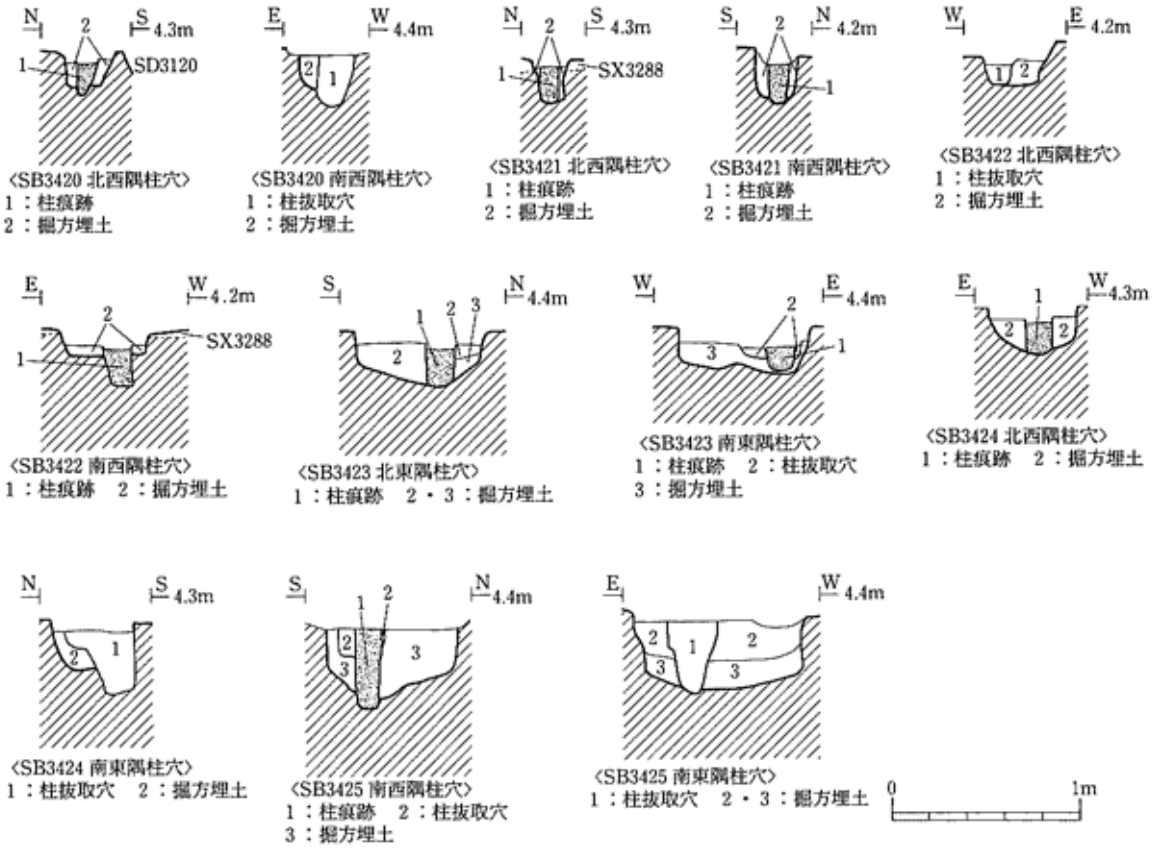
調査区中央の東壁際で検出した南北3間、東西1間以上の南北棟とみられる建物跡である。西側柱列のみ確認した。ＳＤ3120溝跡、ＳＦ3471小溝状遺構群より古い。

柱穴は4箇所で検出しており、すべてで径12cmの柱痕跡を確認している。西側柱列は総長6.73m、柱間寸法は南から2.02m、4.71m（2間分）である。建物の方向はN6°Wである。柱穴は一辺が0.2～0.3mの隅丸方形で、深さは0.2mある。埋土は黒色シルトが主体で、含まれる地山ブロックの量で細分できる。遺物は出土していない。

ＳＢ3422建物跡（第71・72図）

調査区中央の東壁際で検出した南北2間、東西1間以上の建物跡で、西側柱列のみ確認した。ＳＤ3242溝跡より古い。柱穴は3箇所で検出しており、すべてで径15cmの柱痕跡、1箇所で柱抜取穴を確認している。西側柱列は総長2.76m、柱間寸法は北から1.45m、1.31mである。建物の方向はN10°Eである。

柱穴は一辺0.4～0.6mの隅丸方形である。深さは0.2mある。埋土はオリーブ黒色シルト質粘土が主体で、含まれる地山ブロックの量で細分できる。遺物は柱穴確認面から土師器坏（第69図2）・甕、須恵器坏・甕が少量出土している。土師器坏は非ロクロ調整で平底である。



第72図　SB3420～3425建物跡柱穴断面図

ＳＢ3423 建物跡（第 71・72 図）

調査区中央の西壁際で検出した南北 2 間、東西 2 間以上の東西棟とみられる建物跡である。ＳＦ3473 小溝状遺構群より新しく、ＳＤ3120 溝跡より古い。

柱穴は 5 箇所検出しており、すべてで径 10～20 ㎝の柱痕跡、1 箇所で柱抜取穴を確認している。平面規模は桁行が北側柱列で総長 2.69m以上、柱間寸法は東から 1.79m、0.90m以上、梁行が東妻で総長 3.37m、柱間寸法は北から 1.69m、1.68mである。建物の方向は東妻で測るとN5°Ｅである。柱穴は一辺が 0.6～0.8mの隅丸方形で、深さは 0.3mある。埋土は黒色粘土が主体で、含まれる地山ブロックの量で細分できる。遺物は掘方埋土から須恵器坏が微量出土している。

ＳＢ3424 建物跡（第 71・72 図）

調査区中央で検出した南北 2 間、東西 2 間の東西総棟総柱建物跡である。ＳＦ3473 小溝状遺構群より新しく、ＳＢ3425 建物跡、ＳＦ3472 小溝状遺構群より古い。

柱穴は 8 箇所で検出しており、7 箇所で径 15～20 ㎝の柱痕跡、3 箇所で柱抜取穴を確認している。平面規模は桁行が北側柱列で総長 4.24m、柱間寸法は東から 2.20m、2.04m、梁行が東妻で総長 3.07m、柱間寸法は北から 1.57m、1.50mである。建物の方向は東妻で測るとN2°Wである。柱穴は一辺 0.4～0.5mの隅丸方形で、深さは 0.3mある。埋土は黒色ないし黄灰色粘土が主体で、含まれる地山ブロックの量で細分できる。

遺物は掘方埋土から土師器甕、須恵器坏・鉢が少量出土している。須恵器坏は手持ちヘラケズリが施されたものがある。柱抜取穴からは土師器坏（第 69 図 3）・甕が少量出土している。土師器坏は非ロクロ調整で平底である。

ＳＢ3425 建物跡（第 71・72 図）

調査区中央で検出した南北 3 間、東西 2 間の南北棟建物跡である。ＳＢ3424 建物跡、ＳＦ3473 小溝状遺構群より新しく、ＳＤ3120・3140 溝跡より古い。

柱穴は 10 箇所で検出しており、9 箇所で径 15 ㎝の柱痕跡、9 箇所で柱抜取次を確認している。平面規模は桁行が西側柱列で総長 5.86m、柱間寸法は北から 1.99m、1.84m、2.03m、梁行が北妻で総長 4.07m、柱間寸法は東から 1.98m、2.09mである。建物の方向は西側柱列で測るとN3°Wである。柱穴は一辺が 0.6～0.9mの隅丸方形である。深さは 0.4mある。埋土は黒褐色シルトが主体で、含まれる地山ブロックの量で細分できる。

遺物は掘方埋土から土師器甕が微量出土している。また柱痕跡から土師器坏・須恵器甕が微量出土している。土師器坏には手持ちヘラケズリが施されている。

ＳＢ3427 建物跡（第 73・74 図）

調査区北部西側の第 3 層で検出した東西 2 間、南北 2 間とみられる東西棟建物跡である。ＳＦ3473 小溝状遺構群より新しい。

柱穴は 6 箇所で検出しており、すべてで径 10～14 ㎝の柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が南側柱列で総長 4.05m、柱間寸法は東から 2.03m、2.02m、梁行が東妻で総長は 3.27mある。建物の方向は東妻で測るとN3°Wである。柱穴は一辺が 0.2～0.4mの隅丸方形で、深さは 0.3mある。埋土はオ

リーブ黒色ないし黒褐色の粘土が主体で、含まれる地山ブロックの量で細分できる。

遺物は掘方埋土からロクロ調整のものを含む土師器甕が微量出土している。

ＳＢ3436 建物跡（第 73・74 図）

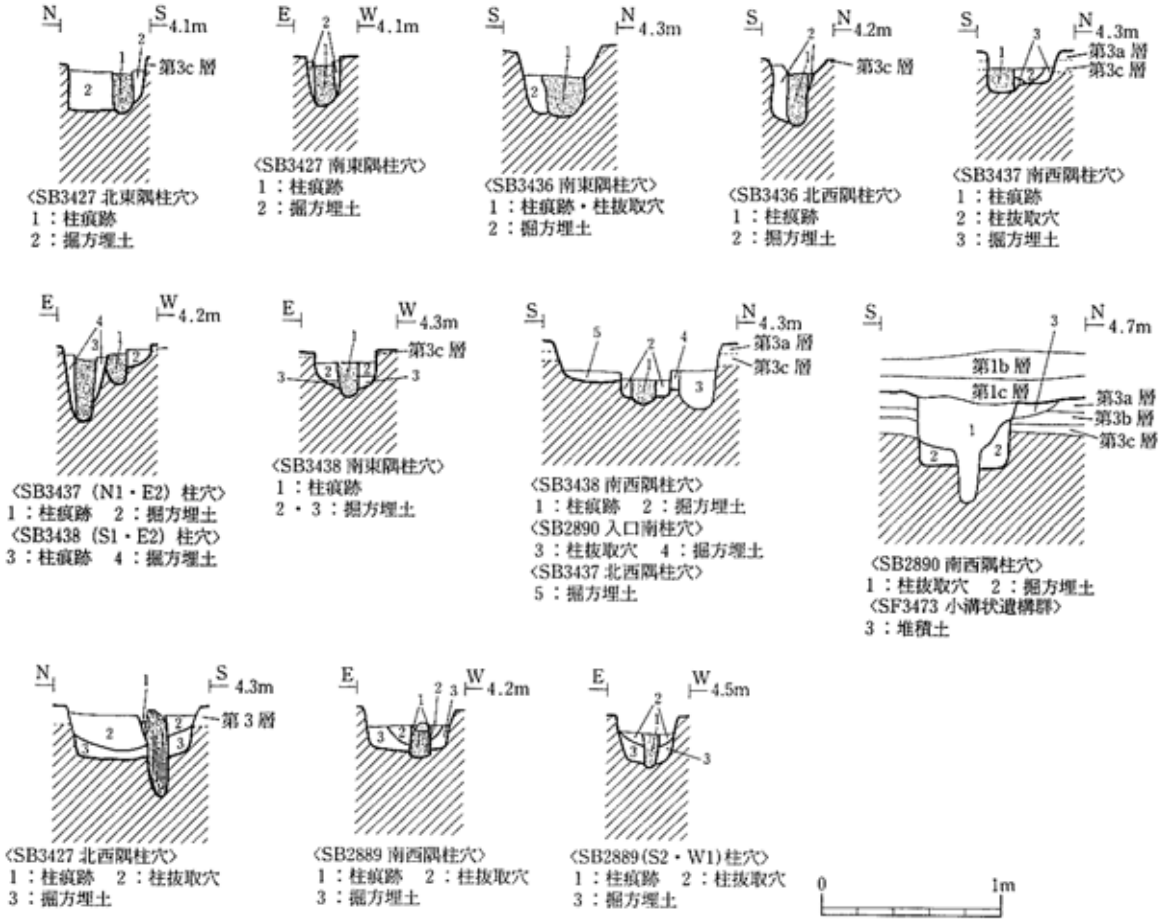
調査区北部西側の第 3 層で検出した南北 2 間、東西 2 間の南北棟建物跡である。ＳＦ3473 小溝状遺構群より新しく、ＳＦ3474 小溝状遺構群より古い。

柱穴は 8 箇所で検出しており、5 箇所で径 12 ㎝の柱痕跡、5 箇所で柱抜取穴を確認している。平面規模は桁行が西側柱列で総長 3.54m、柱間寸法は北から 1.90m、1.64m、梁行は南妻で総長 3.00m、柱間寸法は東から 1.55m、1.45mである。建物の方向は西側柱列で測るとほぼ真北を向く。柱穴は隅柱穴が一辺 0.3～0.4m、その他の柱穴が一辺 0.2～0.3mの隅丸方形である。深さは 0.4mある。埋土は黒色ないし黒褐色シルト質粘土が主体で、含まれる地山ブロックの量で細分できる。南西隅柱の柱痕跡には灰白色火山灰ブロックが認められた。遺物は出土していない。

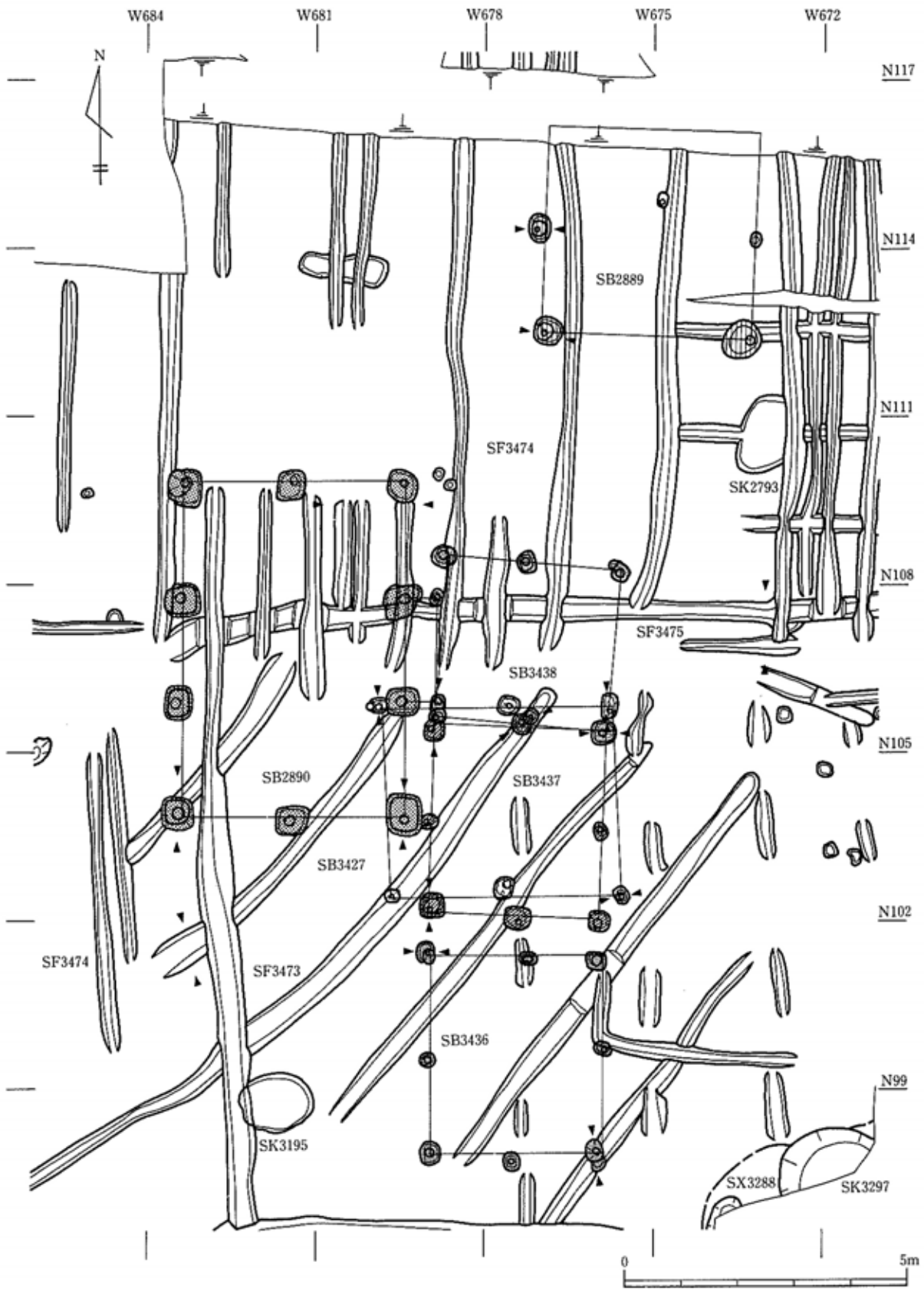
ＳＢ3437 建物跡（第 73・74 図）

調査区北部西側の第 3 層で検出した南北 2 間、東西 2 間の南北棟建物跡である。ＳＦ3473 小溝状遺構群より新しく、ＳＢ3438 建物跡より古い。

柱穴は 8 箇所で検出しており、すべてで径 11～16 ㎝の柱痕跡、1 箇所で柱抜取穴を確認している。平面規模は桁行が西側柱列で総長 3.25m、柱間寸法は北から 1.64m、1.61m、梁行が南妻で総長 3.00 m、



第73図　SB2889・2890・3427・3436～3438 建物跡柱穴断面図



第74図　Ⅺ区北西部の遺構

柱間寸法は東から1.43m、1.57mである。建物の方向は西側柱列で測るとほぼ真北を向く。柱穴は隅柱穴と棟持柱穴が一辺0.3～0.5m、その他の柱穴が一辺0.2～0.3mの隅丸方形である。深さは0.2mある。埋土は黒色ないし黒褐色粘土が主体で、地山ブロックを多く含む。

遺物は掘方埋土からロクロ調整のものを含む土師器甕が微量出土している。

ＳＢ3438建物跡（第73・74図）

調査区北部西側の第3層で検出した南北1間、東西2間の東西棟建物跡である。ＳＢ2890・3437建物跡、ＳＦ3473小溝状遺構群より新しく、ＳＦ3474小溝状遺構群より古い。

柱穴は6箇所で検出しており、すべてで径12～16㎝の柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が北側柱列で総長3.17m、柱間寸法は東から1.68m、1.49m、梁行が東妻で2.89mある。建物の方向は東妻で測るとN6°Eである。柱穴は一辺が0.3～0.4mの隅丸方形で、深さは0.4mある。埋土は黒色粘土もしくは黒褐色シルト質粘土が主体で、含まれる地山ブロックの量で細分できる。南東隅柱の柱痕跡には灰白色火山灰ブロックが認められる。遺物は出土していない。

ＳＢ2890建物跡（第73・74図）

調査区北部西側の第3層で検出した南北3間、東西2間の南北棟建物跡である。ＳＦ3473小溝状遺構群より新しく、ＳＢ3438建物跡、ＳＦ3474・3475小溝状遺構群より古い。

柱穴は10箇所で検出しており、すべてで径16㎝前後の柱痕跡を確認している。5箇所で柱材が残存しており、このうち北東隅柱について樹種同定を行ったところ、クリであることがわかった。また7箇所で柱抜取穴を確認している。平面規模は桁行が西側柱列で総長5.86m、柱間寸法は北から2.05m、1.87m、1.94m、梁行が北妻で総長3.87m、東から1.93m、1.94mである。建物の方向は西側柱列で測るとほぼ真北を向く。柱穴は一辺が50～70㎝の隅丸方形で、深さは0.4mある。埋土は黒褐色粘土もしくは褐灰色粘土質シルトが主体で、地山ブロックを多く含む。

また本建物跡には、東側柱列の外側約0.6mの位置に、2箇所の小柱穴がともなう。これらはいずれも径10cmの柱痕跡と柱抜取穴を有し、一辺0.2～0.3mの隅丸方形で、深さは0.3mあり、埋土は身舎と同じである。建物の入口に関係する施設の跡とみられる。

遺物は柱痕跡からロクロ調整の土師器甕・須恵器坏が微量出土している。

ＳＢ2889建物跡（第73・74図）

調査区北部西側で検出した南北2間、東西2間の南北棟とみられる建物跡である。ＳＦ3475小溝状遺構群より新しい。

柱穴は4箇所で検出しており、3箇所の柱穴で径11～18㎝の柱痕跡、2箇所で柱抜取穴を確認している。平面規模は桁行が西側柱列で総長3.33m以上、柱間寸法は南から1.88m、1.50m以上、梁行が南妻で総長3.64mある。建物の方向は南妻で測るとE2°Sである。柱穴は南東隅柱が径0.6mの円形、それ以外が一辺0.3～0.5mの隅丸方形である。深さは0.3mある。埋土は黒褐色シルトが主体で、地山小ブロックを多く含む。遺物は掘方埋土から須恵器坏が微量出土している。

ＳＢ3426建物跡（第75・76図）

調査区北部西側で検出した南北2間、東西2間の東西棟建物跡である。ＳＢ2886建物跡より新しく、

ＳＦ3474・3475 小溝状遺構群より古い。

柱穴は 6 箇所で検出しており、5 箇所で径 9～15 ㎝の柱痕跡、3 箇所で柱抜取穴を確認している。平面規模は桁行が南側柱列で総長 4.57m、柱間寸法が東から 2.38m、2.19m、梁行が西妻で総長 2.75 m、柱間寸法が北から 1.25m、1.50mである。建物の方向は西妻で測るとほぼ真北を向く。柱穴は一辺が 0.4～0.7mの隅丸方形で、深さは 0.3mある。埋土はオリーブ黒色ないし黒褐色の粘土が主体で、含まれる地山ブロックの量で細分できる。

遺物は掘方埋土から土師器坏や須恵器甕が微量出土している。土師器坏には回転糸切りがみられる。柱抜取穴からは土師器や須恵器の甕が微量出土している。

ＳＢ3428 建物跡（第 75・76 図）

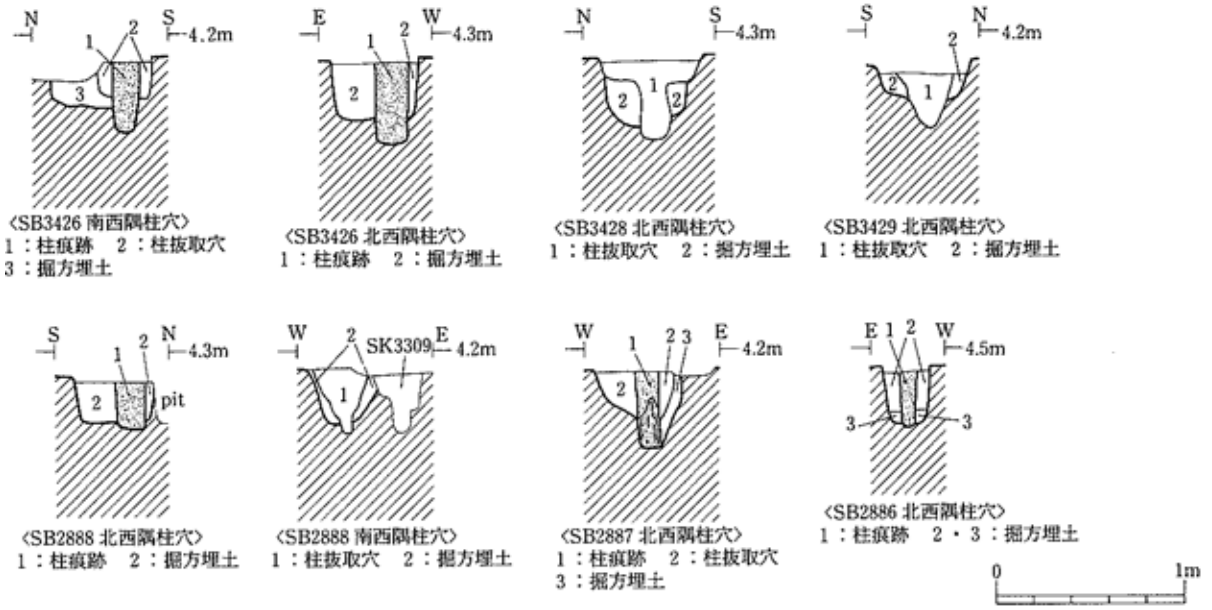
調査区北部西側で検出した南北 2 間以上、東西 2 間以上の建物跡である。柱穴は 5 箇所で検出しており、3 箇所で径 14cmの柱痕跡、4 箇所で柱抜取穴を確認している。平面規模は不明であるが、柱間寸法は西側柱列で北から 1.52m、1.50m（推定）、北側柱列で西から 1.41m、1.29mとみられる。建物の方向は北側柱列で測るとＥ1°Ｓである。柱穴は一辺 0.3～0.5mの隅丸方形で、深さは 0.4mある。埋土は地山ブロックを多く含む黒褐色粘土である。遺物は出土していない。

ＳＢ3429 建物跡（第 75・76 図）

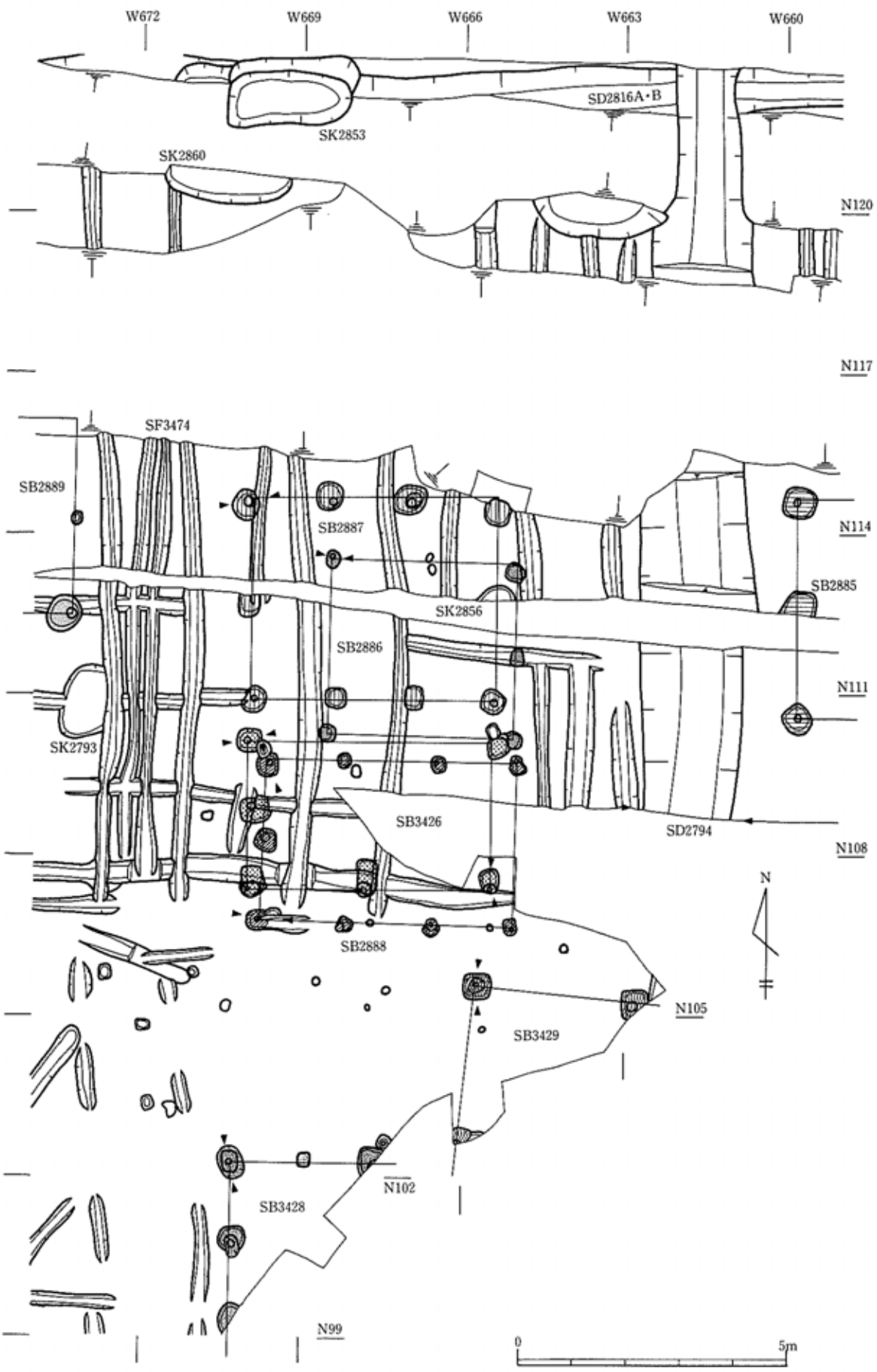
調査区北部西側で検出した東西･南北とも 1 間以上の建物跡である。柱穴は 3 箇所で検出しており、2 箇所で径 11 ㎝の柱痕跡、すべてで柱抜取穴を確認している。柱間寸法は西側柱列、北側柱列とも 2.97 mとみられる。建物の方向は西側柱列で測るとＮ7°Ｅである。柱穴は一辺が 0.4～0.5mの隅丸方形で、深さは 0.2mある。埋土は黒色粘土が主体で、含まれる地山ブロックの量で細分できる。遺物は出土していない。

ＳＢ2888 建物跡（第 75・76 図）

調査区北部西側で検出した東西 3 間、南北 2 間の東西棟建物跡である。ＳＦ3475 小溝状遺構群より古い。柱穴は 9 箇所で検出しており、8 箇所で径 11～16 ㎝の柱痕跡 3 箇所で柱抜取穴を確認してい



第75図　SB2886～2888・3426・3428・3429 建物跡柱穴断面図



第76図　Ⅺ区北部西側の遺構

る。平面規模は桁行が南側柱列で総長4.78m、柱間寸法は東から1.55m、1.66m、1.57m、梁行が西妻で総長2.90m、柱間寸法は北から1.41m、1.49mである。建物の方向は南側柱列で測るとE2°Sである。柱穴は一辺が0.2～0.4mの隅丸方形で、深さは0.3mある。埋土は黒色の粘土もしくは砂質シルトが主体で、含まれる地山ブロックの量で細分できる。

遺物は掘方埋土からロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・壺・甕が少量出土している。須恵器坏にはヘラ切りがあり、底面や体部に墨書が施されたものが2点ある（第69図4・5）。

ＳＢ2887建物跡（第75・76図）

調査区北部西側で検出した東西3間、南北2間の東西棟建物跡である。ＳＦ3474・3475小溝状遺構群より古い。

柱穴は10箇所で検出しており、5箇所で径14～20㎝の柱痕跡、2箇所で柱抜取穴を確認している。北西隅柱穴では柱材が残っていた。平面規模は桁行が南側柱列で総長 4.52mで、柱間寸法は西から1.54m、1.50m、1.48mとみられる。梁行が西妻で総長3.63mである。建物の方向は西妻で測るとほぼ真北を向く。柱穴は一辺が0.4～0.6mの隅丸方形で、深さは0.4mある。埋土は黒褐色シルトが主体で、地山ブロックを含む。遺物は掘方埋土から須恵器甕や有段丸瓦が微量出土している。

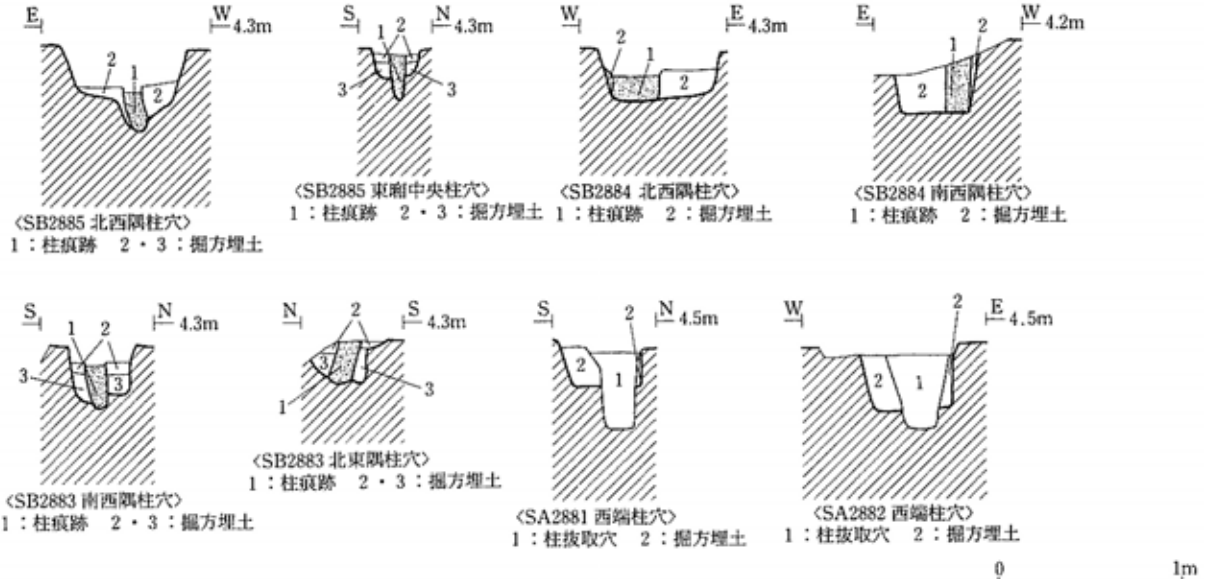
ＳＢ2886建物跡（第75・76図）

調査区北部西側で検出した南北2間、東西2間とみられる東西棟建物跡である。ＳＢ3426建物跡、ＳＦ3474・3475小溝状遺構群より古い。

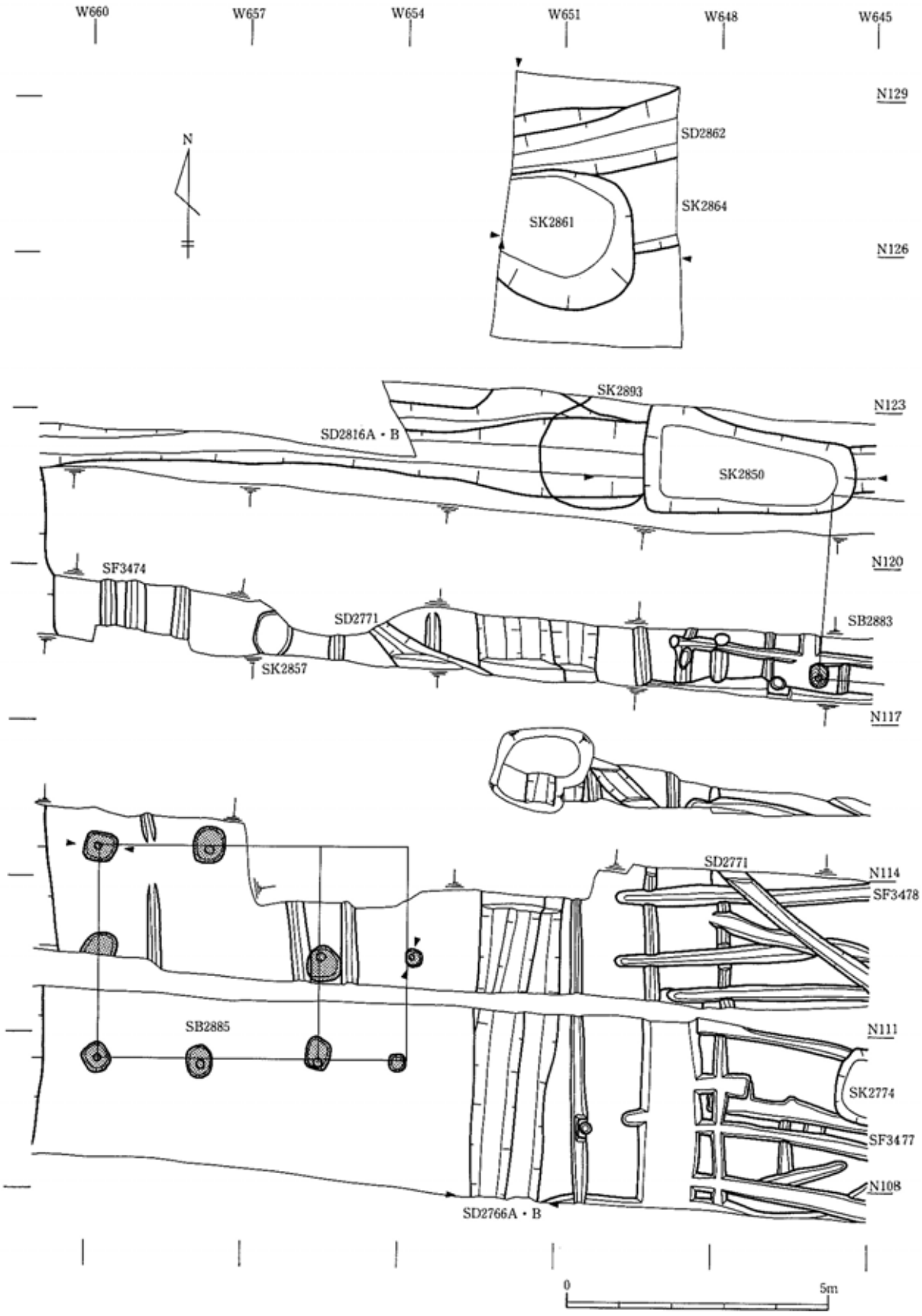
柱穴は6箇所で検出しており、1箇所で径10㎝の柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が北側柱列で総長3.45m、梁行は東側柱列で総長3.20mとみられる。建物の方向は東側柱列で測るとN1°Eである。柱穴は一辺が0.4m前後の隅丸方形で、深さは0.4mある。埋土は褐灰色シルトが主体で、含まれる地山ブロックの量で細分できる。遺物は出土していない。

ＳＢ2885建物跡（第77・78図）

調査区北部中央から西よりで検出した東西3間、南北2間の東廂付東西棟建物跡である。ＳＦ3474・3475小溝状遺構群より古い。



第77図　SB2883～2885建物跡、SA2881・2882柱列跡柱穴断面図



第78図　Ⅺ区北部中央西側の遺構

柱穴は9箇所検出しており、身舎の6箇所で径20㎝、廂の1箇所で径9㎝の柱痕跡を確認している。平面規模は南側柱列が総長4.22m、柱間寸法は西から1.98m、2.26mで廂の出は1.67m、西妻が総長4.04mである。建物の方向は西妻で測るとほぼ真北を向く。柱穴は身舎が一辺0.6mの方形で、深さが0.5m、廂は一辺が0.3mの隅丸方形で、深さは0.2mある。埋土は黒褐色シルトが主体で、含まれる地山ブロックの量で細分できる。

遺物は掘方埋土から土師器甕、須恵器坏・甕や平瓦が若干出土している。

ＳＢ2884 建物跡（第77・79図）

調査区北部中央で検出した東西2間、南北が2間とみられる南北棟建物跡である。ＳＫ2763・2777・2790土壙、ＳＤ2771溝跡、ＳＦ3476・3477小溝状遺構群より古い。

柱穴は6箇所で検出しており、2箇所で径18㎝の柱痕跡、2箇所で柱抜取穴を確認している。平面規模は桁行が西側柱列で総長2.76m、梁行は南妻で総長2.22m、柱間寸法は西から1.20m、1.22mとみられる。建物の方向は西側柱列で測るとN6°Ｅである。柱穴は一辺が0.4～0.6mの隅丸方形で、深さは0.3mある。埋土は褐灰色シルト質粘土が主体で、炭化物を少量、地山ブロックを多量に含む。

遺物は掘方埋土から土師器甕が少量出土している。

ＳＢ2883 建物跡（第77・79図）

調査区北部中央で検出した東西2間、南北が2間とみられる南北棟建物跡である。ＳＦ3476小溝状遺構群より新しく、ＳＫ2850土壙、ＳＤ2816B東西溝跡より古い。

柱穴は5箇所で検出しており、すべてで径13㎝の柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が東側柱列で総長4.60m、梁行が南妻で総長2.83m、柱間寸法は東から1.38m、1.45mである。建物の方向は東側柱列で測るとN3°Ｅである。柱穴は一辺が0.3～0.5mの隅丸方形で、深さは0.4mある。埋土は黒褐色粘土質シルトで、含まれる地山小ブロックの量によって細分できる。

遺物は掘方埋土から須恵器甕が微量出土している。

ＳＢ2880 建物跡（第64図）

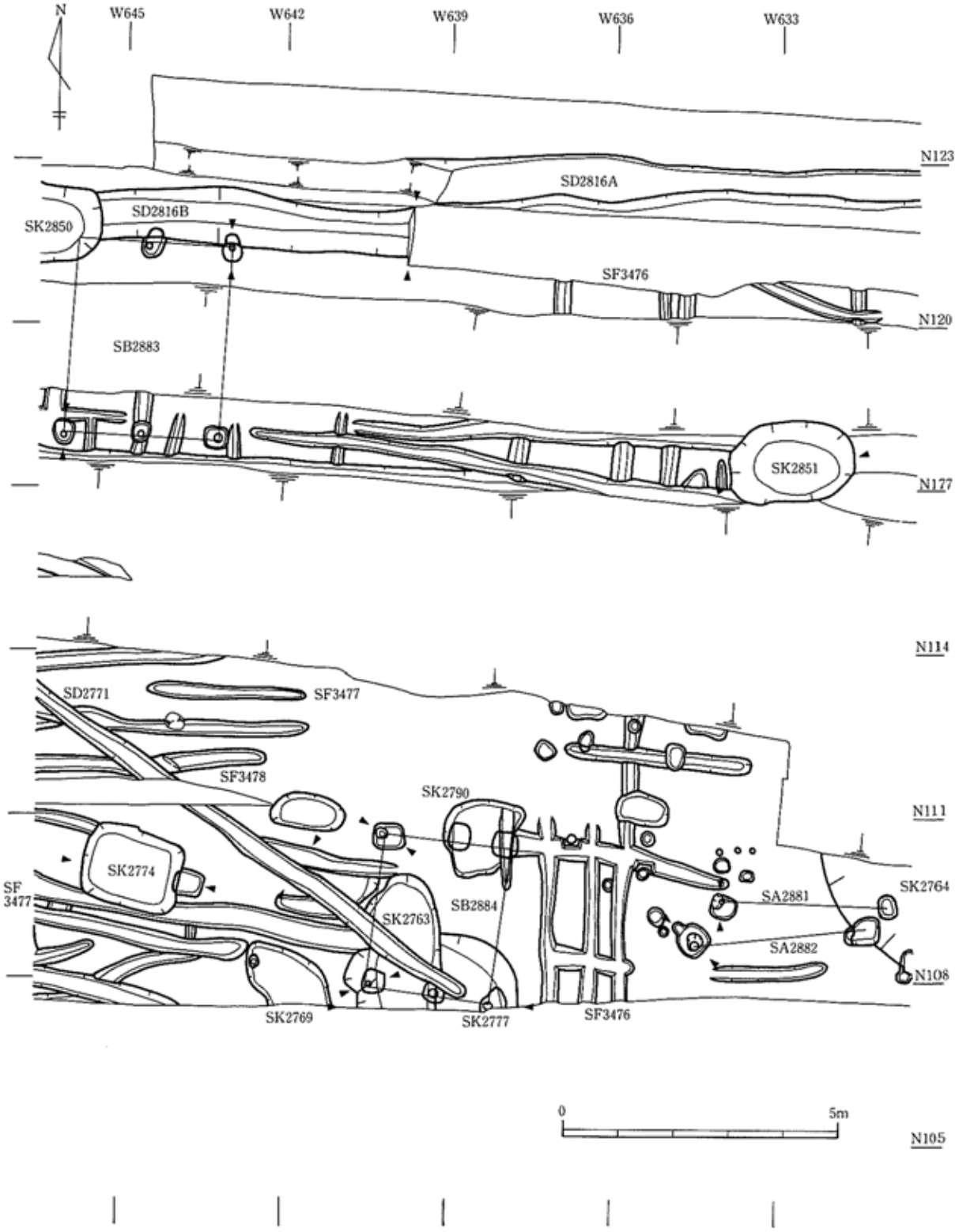
調査区北部東側で検出した東西2間以上の建物跡である。柱穴は3箇所で検出しているが、柱痕跡は不明である。柱間寸法は2.30m前後とみられる。建物の方向はＥ4°Ｓである。柱穴は一辺が0.4～0.6mの隅丸方形とみられる。埋土は褐灰色粘土質シルトが主体で、地山ブロックと炭化物を少量含む。

遺物は掘方埋土から土師器甕、ヘラ切りの須恵器坏が若干出土している。

(3) 掘立柱列跡

ＳＡ2881 柱列跡（第77・79図）

調査区北部中央で検出した東西1間の柱列跡である。東側の柱穴は撹乱で壊されており、ＳＫ2764土壙との新旧関係は不明である。柱穴は1箇所で径14㎝の柱痕跡、1箇所で柱抜取穴を確認している。柱間寸法は3.00m、方向はＥ2°Ｓとみられる。柱穴は一辺が0.4～0.5mの隅丸方形で、深さは0.2mある。埋土は灰黄褐色砂質シルトが主体で、地山ブロックを含む。遺物は掘方埋土からロクロ調整を含む土師器甕、須恵器坏が微量出土している。後者には内面に漆の付着したものがある。



第79図　XI区北部中央東側の遺構

ＳＡ2882 柱列跡（第 77・79 図）

調査区北部中央で検出した東西１間の柱列跡である。東側の柱穴は撹乱で壊されており、ＳＫ2764 との新旧関係は不明である。柱穴は１箇所で径 14 ㎝の柱痕跡、１箇所で柱抜取穴を確認している。柱間寸法は 3.20m、方向はＥ5°Ｎとみられる。柱穴は一辺が 0.4～0.6mの隅丸方形で、深さは 0.4m ある。埋土は灰色砂質シルトが主体で、地山ブロックを含む。遺物は掘方埋土からロクロ調整の土師器甕や須恵器坏が微量出土している。

（4）土壙

土壙は調査区全体から多く検出しているが、重複関係や出土遺物からある程度時期が把握できるものは、以下の 17 基である。

ＳＫ3124 土壙（第 67・80 図）

調査区南側で検出した土壙である。ＳＧ3098 池跡より古い。平面形は円形とみられ、規模は東西 1.3m、南北 0.9m以上で、深さは 0.2mある。断面形は浅い皿状である。堆積土は２層に分けられる。下層は黄灰色シルト、上層は地山ブロックを多量に含む黄灰色シルトであり、本土壙は人為的に埋め戻されたと考えられる。

遺物は底面から土師器坏（第 81 図 4）や須恵器坏（第 81 図 5）が出土している。土師器坏はロクロ調整で、回転糸切りののち手持ちヘラケズリが施されている。須恵器坏はヘラ切りののち手持ちヘラケズリが施され、底面には墨書が認められる。

ＳＫ3503 土壙（第 71・80 図）

調査区中央で検出した土壙である。ＳＤ3179 溝跡より古い。平面形は不整長方形で、規模は長さ 1.1m、幅 0.4mほどあり、深さは 0.3mある。底面は平坦で壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトであり、人為的に埋め戻されている。

遺物は底面近くの埋土中から土師器鉢（第 81 図 3）、須恵器坏（第 81 図 1）・高台坏（第 81 図 2）が出土している。土師器鉢の上部はＳＤ3179 の掘削によって破壊されている。須恵器坏・高台坏は皿形である。坏はヘラ切りで底面に「口」と墨書されている。高台坏は回転ヘラケズリが施されている。

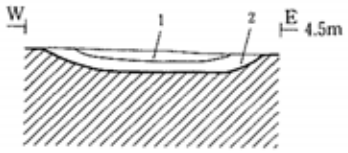
ＳＫ2793 土壙（第 74 図）

調査区北部西側で検出した土壙である。ＳＦ3474・3475 小溝状遺構群より古い。平面形は歪んだ楕円形とみられ、規模は長径 1.4m、短径 0.8m以上あり、深さは 0.1mある。断面形は浅い皿状である。堆積土は炭化物を含むオリーブ黒色粘土質シルトで、自然堆積とみられる。

遺物は確認面からロクロ調整でヘラ切りののち回転ヘラケズリが施された土師器坏（第 81 図 6）が出土している。

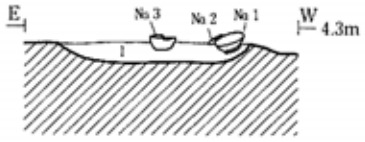
ＳＫ2860 土壙（第 76 図）

調査区北西部で検出した土壙である。ＳＦ3474 小溝状遺構群より新しい。土壙の中央を撹乱で壊されているが、平面形は隅丸方形で、規模は一辺が 2.5mほどとみられる。深さは 0.3mある。堆積土は２層に分けられ、いずれも自然堆積とみられる。下層は地山ブロックを含む黒褐色粘土質シルト、上



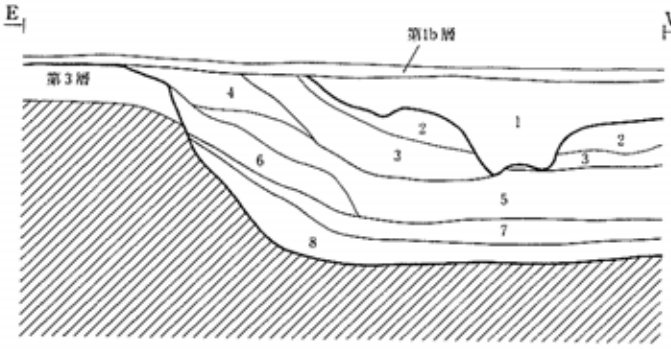
〈SK3124〉

層No	土色・土性	混入物など	備考
1	黄灰色(2.5Y4/1)シルト	地山ブロックを多く含む	人為堆積
2	黄灰色(2.5Y4/1)シルト		



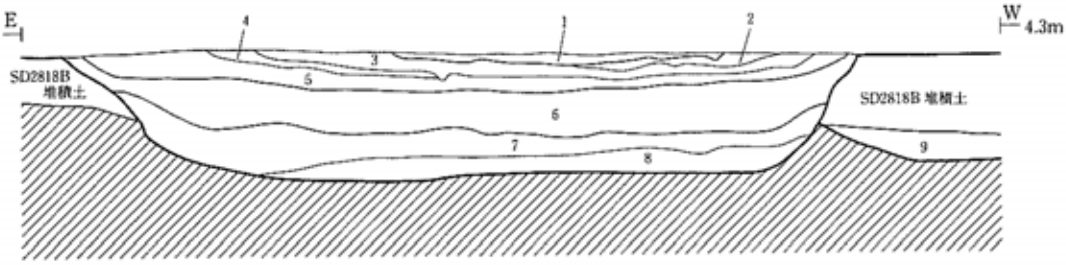
〈SK3503〉

層No	土色・土性	混入物など	備考
1	黒褐色(2.5Y3/1)シルト	地山ブロックをやや多く含む	人為堆積



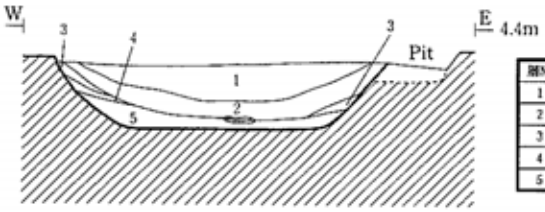
〈SK2861・2864〉

層No	土色・土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR3/2)シルト	オリーブ褐色・黒色シルトを含む	SK2864 堆積土
2	黄灰色(2.5Y4/1)シルト	黒褐色シルトをラミナ状に含む	SK2861 大別1層
3	暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト	砂質シルトをラミナ状に含む	
4	灰黄褐色(10YR5/3)シルト	砂質シルトを含む	SK2861 大別2層
5	オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト	砂質シルト・黒褐色シルトをラミナ状に含む	
6	暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト	砂質シルトをラミナ状に含む	
7	灰白色火山灰	上層は再堆積、下層は純堆積	SK2861 大別3層
8	黒褐色(10YR2/2)粘土質シルト	砂質シルトをラミナ状に含む	SK2861 大別4層



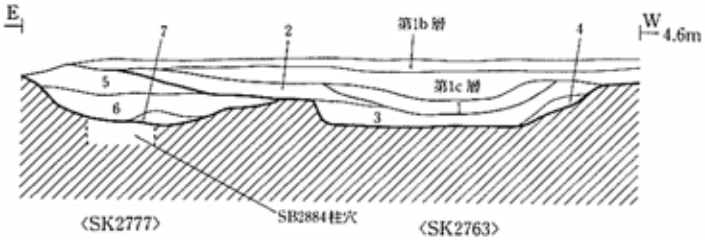
〈SK2850〉　〈SK2893〉

層No	土色・土性	混入物など	備考
1	黒色(10YR2/1)粘土質シルト		SK2850 大別1層
2	黒褐色(2.5Y3/2)シルト	黄灰色粘土質シルトを含む	SK2850 大別2層
3	褐灰色(10YR4/1)シルト	4層の土を含む	
4	暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土質シルト	黄灰色砂質シルトを含む	
5	灰褐黄色(10YR4/2)シルト	黒褐色粘土質シルトを含む	
6	黄灰色(2.5Y4/1)シルト	黄灰色砂質シルトをラミナ状に若干含む	SK2850 大別3層
7	褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト	黄灰色砂質シルトをラミナ状にやや多く含む	SK2850 大別4層
8	暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土質シルト	黄灰色砂質シルトをラミナ状に含む	
9	黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルト	砂質シルト小ブロックを含む	SK2893 堆積土



〈SK2774〉

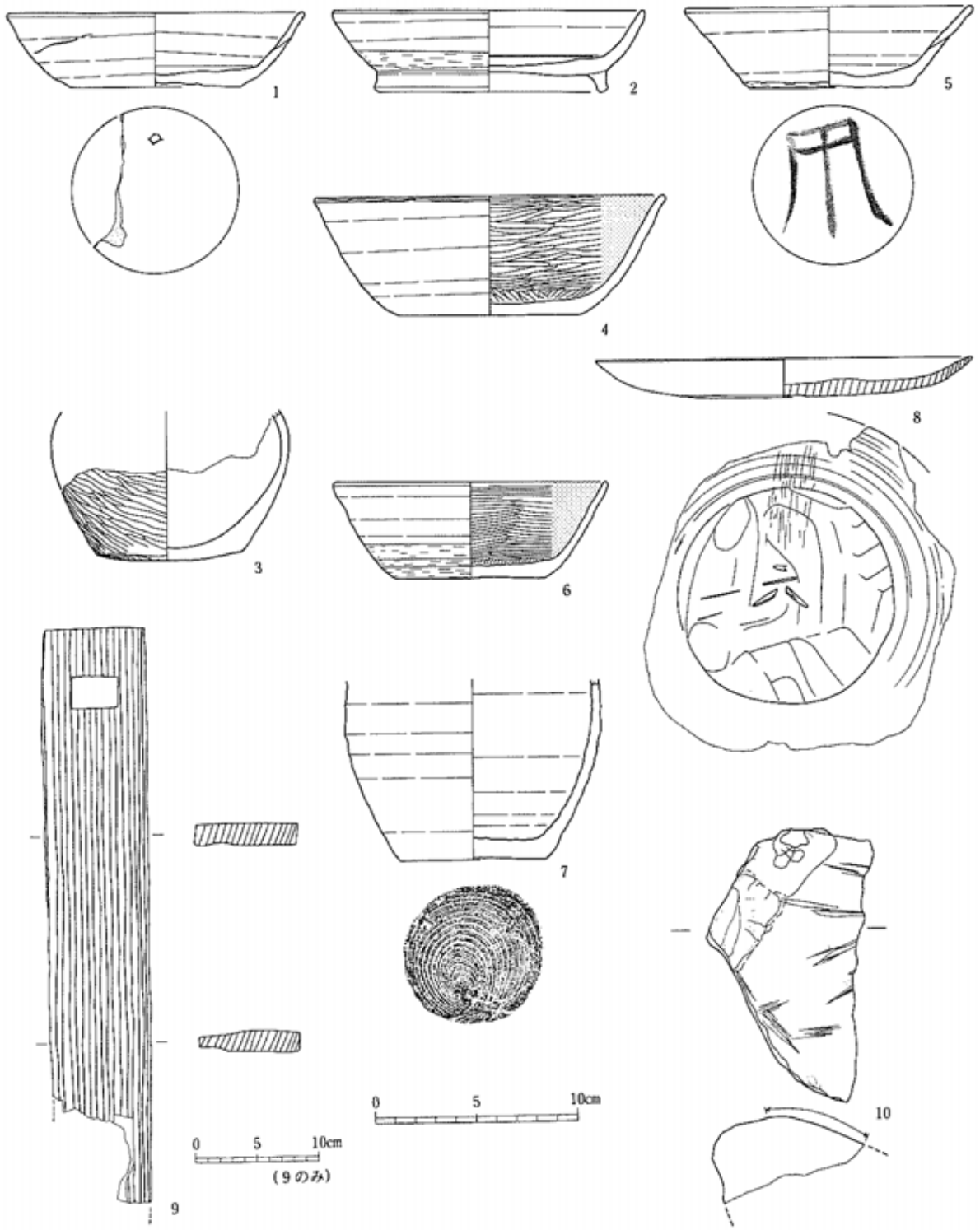
層No	土色・土性	混入物など
1	黒褐色(10YR3/1)シルト	地山ブロック・炭化物を含む
2	黒色(10YR2/1)粘土質シルト	炭化物を含む
3	黒色(10YR2/1)粘土質シルト	地山ブロックを含む
4	黒色(10YR2/1)粘土質シルト	炭化物を含む
5	黒色(10YR2/1)粘土質シルト	地山ブロックが主体



〈SK2777〉　〈SK2763〉

層No	土色・土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR2/2)粘土質シルト	炭化物を多く含む	SK2763 大別1層
2	褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト		SK2763 大別2層
3	暗褐色(10YR3/3)粘土質シルト	炭化物を含む	
4	灰黄色(2.5Y6/1)砂質シルト	地山主体、3層の土を含む	
5	黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト	地山ブロック・炭化物を含む	SK2777 1層
6	黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト	地山小粒・炭化物を含む	SK2777 2層
7	灰黄色(2.5Y6/1)粘土質シルト	地山主体、5・6層の土を含む	SK2777 3層

第80図　SK2763・2774・2777・2850・2861・2864・2893・3124・3503 土壙断面図



（単位：cm）

No	種別	出土遺構・層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	分類	写真図版
1	須恵器・坏	SK3503・上面(No2)	外面：ロクロナデ、ヘラ切り　内面：ロクロナデ　底面に墨書「口」	(14.7)	(8.3)	3.7	2/3	A I a	
2	須恵器・高台坏	SK3503・上面(No1)	外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ→高台接合後ロクロナデ　内面：ロクロナデ、沈線状のオサエ	(15.4)	(11.5)	4.1	4/5	B	39－9
3	土師器・鉢	SK3503・上面(No3)	外面：〔体～底〕ヘラケズリ→ヘラミガキ　内面：ナデ	－	(7.1)	－	1/3		
4	土師器・坏	SK3124・底面	外面：ロクロナデ、静止糸切り→手持ちヘラケズリ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(17.3)	9.0	5.9	完形	B I a	36－4
5	須恵器・坏	SK3124・底面	外面：ロクロナデ、ヘラ切り→回転ヘラケズリ　内面：ロクロナデ　底面に墨書「口」	(14.2)	7.9	4.0	1/2	A II a1	
6	土師器・坏	SK2793・確認面	外面：ロクロナデ、ヘラ切り→回転ヘラケズリ　内面：ヘラミガキ→黒色処理　外面底部に藁付着	(13.6)	7.3	4.8	2/5	B I b	39－7
7	土師器・甕	SK2859・堆積土	外面：〔胴〕ロクロナデ〔底〕回転糸切り　内面：ロクロナデ	－	7.2	－	1/3	B	
8	陶物・皿	SK2860・底面	外面底部に刻書「六」　樹種：ケヤキ　柾目取り	(18.6)	10.6	1.9			34－16
9	建築部材	SK2860・底面	長47.1以上　幅8.5　厚1.8　ほぞ穴3.8×2.5　樹種：スギ　柾目取り						34－17
10	砥石	SK2774・堆積土	長13.6以上　幅7.5以上　厚4.2以上　外面が焼けている						

第81図　SK2774・2793・2859・2860・3124・3503 土壙出土遺物

層は炭化物粒を多く含む黒褐色シルトである。

遺物は底面から挽物皿（第 81 図 8）や建築部材（第 81 図 9）、堆積土から土師器坏や須恵器坏・壺が微量出土している。挽物皿は底部に「六」と釘書きされている。建築部材は長辺の端部付近にほぞ穴を有している。樹種は同定の結果、皿がケヤキ、建築部材がスギとわかった。

ＳＫ2861 土壙（第 78・80 図）

調査区北部中央の拡張区で検出した土壙である。ＳＫ2864 土壙、ＳＤ2862 溝跡より古い。平面形は歪んだ円形で径約 2.9m、深さは 1.0mある。堆積土は 7 層に分けられたが、4 層に大別が可能である。4 層は黒褐色粘土質シルトを主体とする層である。3 層は灰白色火山灰層で上下に分けられ、下が純堆積、上は再堆積である。2 層は灰褐黄～暗オリーブ褐色シルトを主体とする層、1 層は黄灰～暗灰黄色シルトを主体とする層であり、いずれも自然堆積とみられる。

遺物は 4 層を除く各層から出土しているが、とくに 2 層からは土師器・須恵器・赤焼土器の食膳具が多量に出土している。3 層からは須恵器坏（第 82 図 3）、赤焼土器坏（第 82 図 1・2）が、2 層からは土師器坏（第 82 図 4～16・第 84 図 5）・高台坏（第 84 図 6）・甕、須恵器坏（第 82 図 7・第 83 図 1～9・第 84 図 1～3）・甕、赤焼土器坏（第 83 図 0～16・第 84 図 7～10）・高台皿（第 83 図 7）、瓦が出土している。1 層からは土師器坏、須恵器坏（第 84 図 11・12）、赤焼土器坏（第 84 図 13・14）が出土している。

このうち坏や皿のなかには墨書やヘラ記号が施されたものがある。墨書は須恵器坏 3 点の口縁部外面や底部（第 84 図 1～3）にみられるほか、赤焼土器坏の口縁部外面に「大万」と書かれたものがある（第 84 図 4）。ヘラ記号は体部や底部外面に施される。土師器や須恵器は「｜」（第 82 図 11、第 83 図 8）があり、赤焼土器には「｜」（第 83 図 16）のほか「×」のヘラ書きが施されたもの（第 83 図 10、写真図版 39－15）などがある。

ＳＫ2861 出土土器の多くは食膳具であり、とくに坏が大部分をしめる。各層の土器は特徴が共通しており、それらをまとめると以下のようになる。土師器坏は底径が小さく、底部の切り離し技法はすべて回転糸切りである。器形は内弯気味に立ち上がる「椀形坏」が主体を占める。内面のミガキは体下部が放射状であり、幅が広いものが多い。また、ミガキの施し方自体雑なものが目立つ。

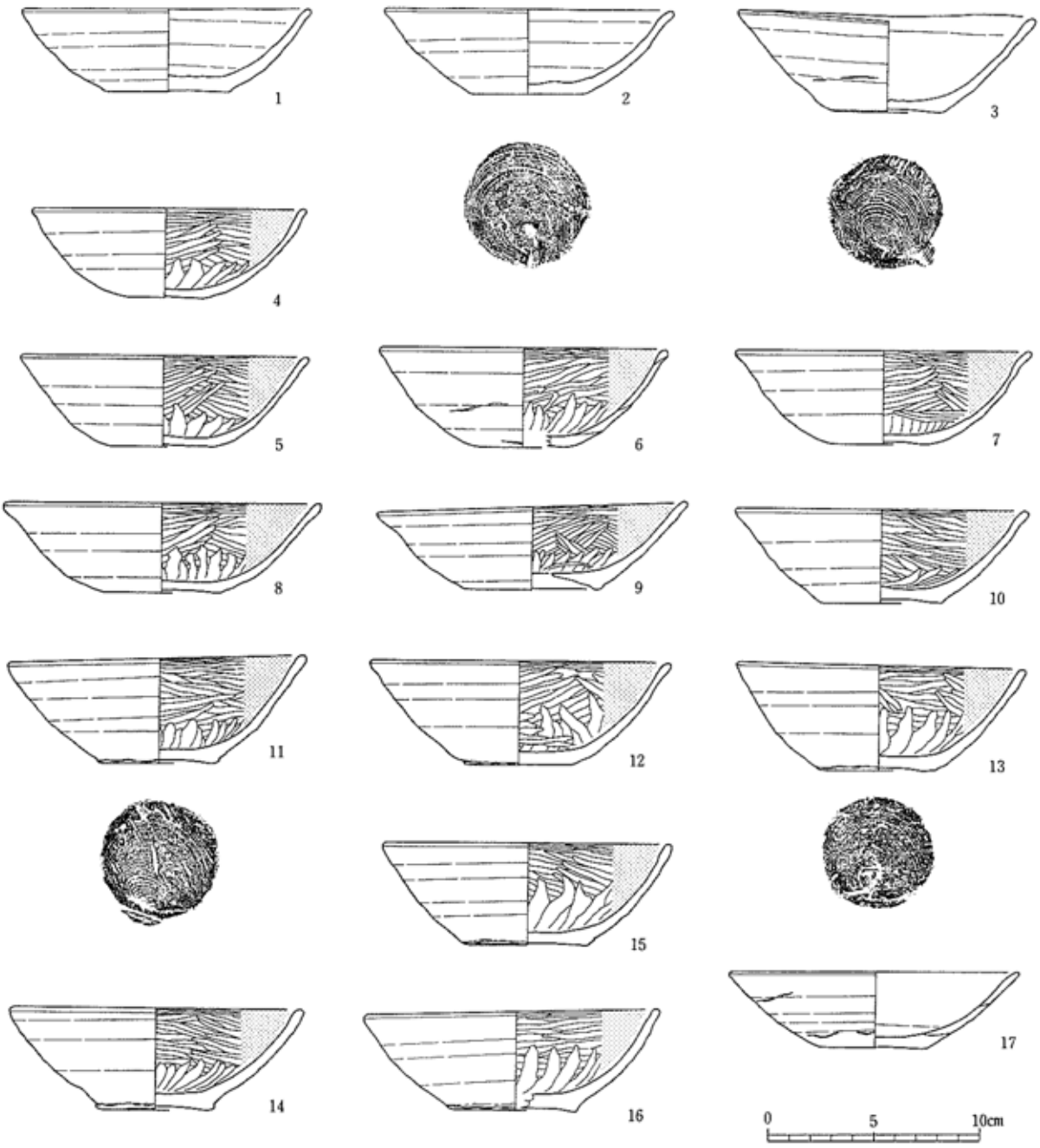
須恵器坏はすべて軟質で還元が不良なため灰白色を呈する。赤焼土器坏は土師器にくらべて小振りで、器壁がうすい。双方とも器形は底部から直線的に立ち上がるものと内弯気味に立ち上るものとがあり、底部は回転糸切りである。内面の仕上げにコテ状工具が使われるものが多い。

器面の残りがよい 2・3 層の坏や皿をみてみると、口縁部や底部の周辺に明瞭な使用痕がないのが多い。これに対し、1 点しかない高台坏は口縁部や高台の周辺に使用痕が認められる。

ＳＫ2864 土壙（第 78・80 図）

調査区北部中央の拡張区で検出した土壙である。ＳＫ2861 土壙より新しく、ＳＤ2862 溝跡より古い。土壙は調査区外まで続くため平面形は不明である。規模は南北 2.9m、東西 3.3m以上あり、深さは 0.3mある。底面に凹凸があるが、壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土はオリーブ黒色および黒色のシルトブロックを含む黒褐色シルトであり、人為的に埋め戻されている。

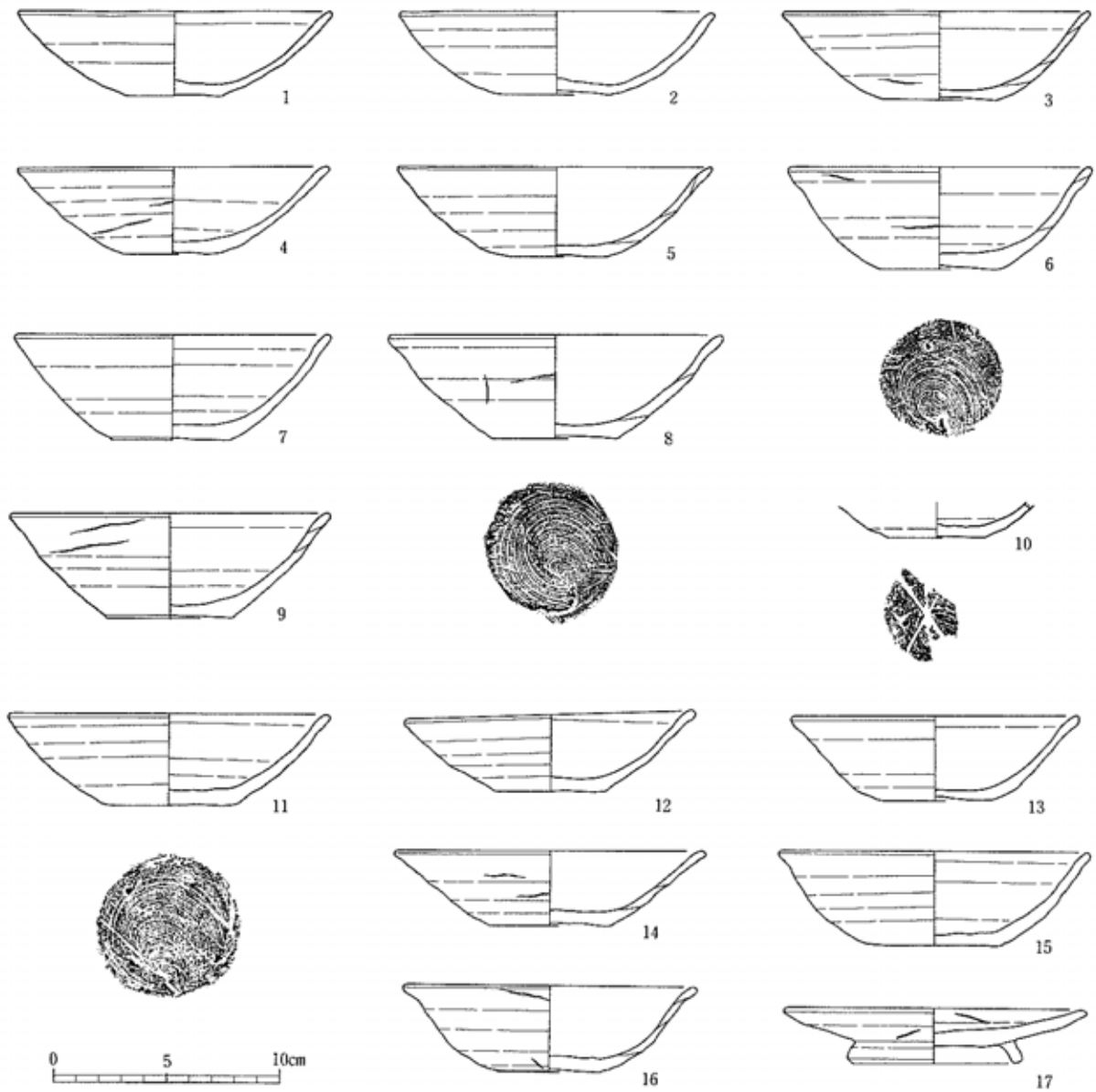
遺物は土師器・須恵器・赤焼土器などが出土している。いずれも器面の摩滅が著しい。



（単位：cm）

No.	種別	層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	分類	写真図版
1	赤焼土器・坏	3 層	外面：ロクロナデ、回転糸切り　内面：ロクロナデ　※外面体部に黒斑、内面底部付近に重ね焼きの痕跡、器面に明瞭な使用痕跡なし	13.6	5.9	3.9	完形	A Ⅲ	37－18
2	赤焼土器・坏	3 層	外面：ロクロナデ、回転糸切り（離し）　内面：ロクロナデ　※器面に明瞭な使用痕跡なし	13.6	5.6	4.0	完形	A Ⅳ	37－19
3	須恵器・坏	3 層	外面：ロクロナデ、回転糸切り　内面：ロクロナデ（コテ仕上げ）　※器面に明瞭な使用痕跡なし	(14.0)	5.3	(4.6)	完形	B Ⅰ bi	37－21
4	土師器・坏	2 層	外面：ロクロナデ、回転糸切り　内面：ヘラミガキ（雑）→黒色処理	13.0	4.4	4.2	1/2	B Ⅱ a2	
5	土師器・坏	2 層	外面：ロクロナデ、回転糸切り　内面：ヘラミガキ→黒色処理	13.6	5.0	4.3	1/4	B Ⅱ a2	
6	土師器・坏	2 層	外面：ロクロナデ、回転糸切り（離し）　内面：ヘラミガキ（雑）→黒色処理	(13.4)	(4.8)	4.7	1/4	B Ⅱ a2	
7	土師器・坏	2 層	外面：ロクロナデ、回転糸切り　内面：ヘラミガキ→黒色処理　※内面に明瞭な使用痕跡なし	(14.0)	4.6	4.4	1/2	B Ⅱ a3	37－4
8	土師器・坏	2 層	外面：ロクロナデ（雑）、回転糸切り　内面：ヘラミガキ（雑）→黒色処理　※器面に明瞭な使用痕跡なし	(15.0)	5.6	4.2	3/5	B Ⅱ a2	37－9
9	土師器・坏	2 層	外面：ロクロナデ、回転糸切り（離し）　内面：ヘラミガキ（雑）→黒色処理　※器面に明瞭な使用痕跡なし	(14.6)	6.4	3.9	口径完形	B Ⅱ a1	37－13
10	土師器・坏	2 層	外面：ロクロナデ（雑）、回転糸切り　内面：ヘラミガキ（雑）→黒色処理　※器面に明瞭な使用痕跡なし	13.8	5.7	4.4	4/5	B Ⅱ a2	37－2
11	土師器・坏	2 層	外面：ロクロナデ、回転糸切り、底に乾燥時の圧痕　内面：ヘラミガキ（雑）→黒色処理　※器面に明瞭な使用痕跡なし	13.0	4.4	4.2	1/2	B Ⅱ a4	
12	土師器・坏	2 層	外面：ロクロナデ（雑）、回転糸切り　内面：ヘラミガキ（雑）→黒色処理	14.1	5.0	4.9	3/5	B Ⅱ a2	37－1
13	土師器・坏	2 層	外面：ロクロナデ（雑）、回転糸切り　内面：ヘラミガキ（雑）→黒色処理　※器面に明瞭な使用痕跡なし	13.6	5.7	5.0	3/5	B Ⅱ a1	37－8
14	土師器・坏	2 層	外面：ロクロナデ（雑）、回転糸切り、底に乾燥時の圧痕　内面：ヘラミガキ（雑）→黒色処理　※底面にヘラ記号「－」、器面に明瞭な使用痕跡なし	(13.8)	5.6	4.8	1/2	B Ⅱ a2	37－3
15	土師器・坏	2 層	外面：ロクロナデ（雑）、回転糸切り　内面：ヘラミガキ（雑）→黒色処理　※器面に明瞭な使用痕跡なし	13.6	5.9	4.9	3/5	B Ⅱ a4	37-6、40-3
16	土師器・坏	2 層	外面：ロクロナデ（雑）、回転糸切り　内面：ヘラミガキ（雑）→黒色処理　※器面に明瞭な使用痕跡なし	13.8	5.8	4.6	4/5	B Ⅱ a4	37－5
17	須恵器・坏	2 層	外面：ロクロナデ、回転糸切り　内面：ロクロナデ（コテ仕上げ）　※外面体～底部に黒斑（形の吹出の内面の黒斑と一致）、口縁に明瞭な使用痕跡なし	13.6	4.9	3.6	4/5	B Ⅰ bi	38-3、40-1

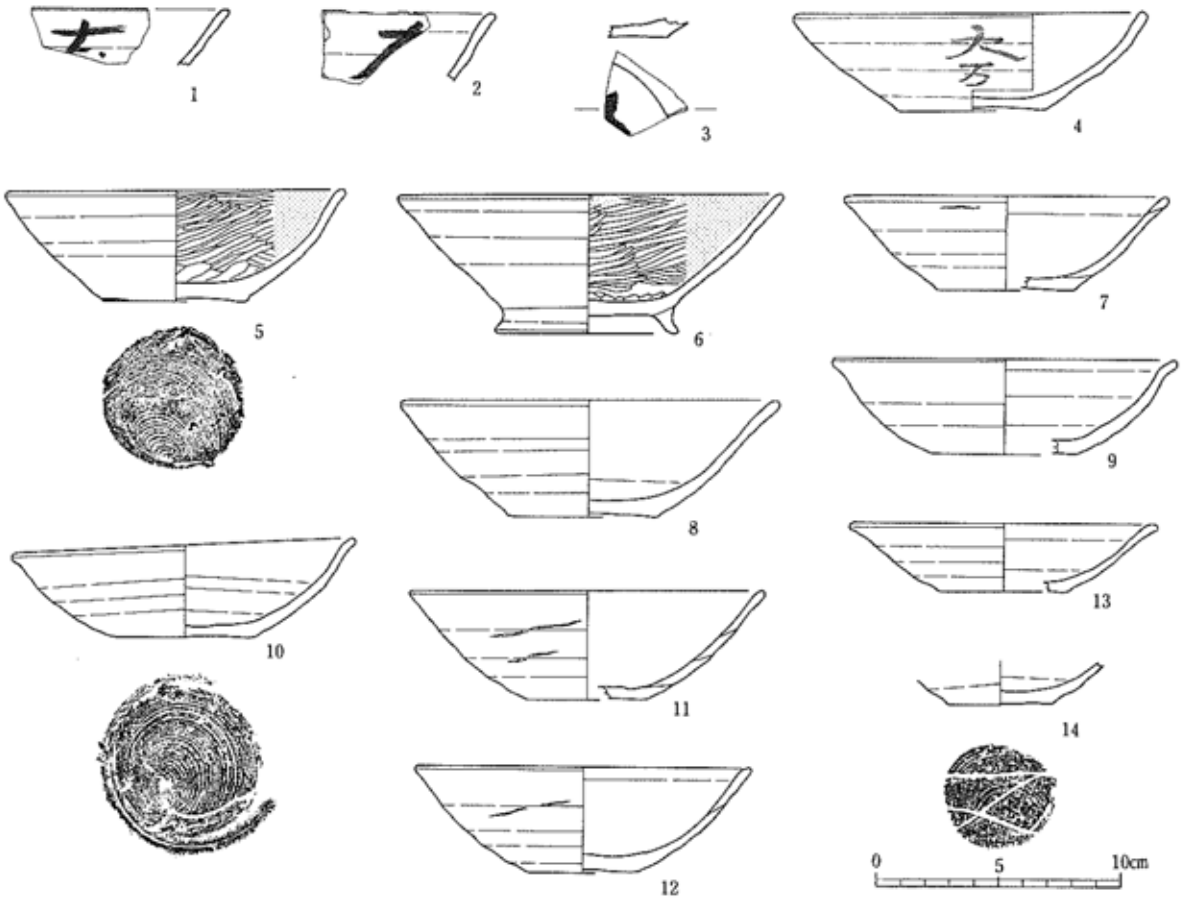
第82図　SK2861 土壙出土遺物（1）



(単位：cm)

No.	種別	層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	分類	写真図版
1	須恵器・坏	2層	外面：ロクロナデ、回転糸切り　内面：ロクロナデ(コテ仕上げ)　※底面にヘラ記号「－」、外面体～底部に黒斑、口縁部に明瞭な使用痕跡なし	(13.9)	4.3	3.8	1/4	B II bi	
2	須恵器・坏	2層	外面：ロクロナデ、回転糸切り　内面：ロクロナデ(コテ仕上げ)　※外面体～底部に黒斑、内面体部に黒斑	(13.9)	(4.9)	3.7	2/5	B III bi	
3	須恵器・坏	2層	外面：ロクロナデ、回転糸切り　内面：ロクロナデ　※両面の体～底部に黒斑	(13.3)	5.3	4.6	1/4	B II bi	38－2
4	須恵器・坏	2層	外面：ロクロナデ、回転糸切り　内面：ロクロナデ　※内面体～底部に黒斑(炭の切断面の内面の黒斑と一致)、器面に明瞭な使用痕跡なし	(13.7)	5.5	3.9	4/5	B II bi	37-20,40-2
5	須恵器・坏	2層	外面：ロクロナデ、回転糸切り　内面：ロクロナデ(コテ仕上げ)　※両面の体～底部に黒斑	13.9	4.3	4.0	1/2	B III bi	38－1
6	須恵器・坏	2層	外面：ロクロナデ、回転糸切り　内面：ロクロナデ　※器面に明瞭な使用痕跡なし	13.3	5.3	4.6	1/4	B II bi	
7	須恵器・坏	2層	外面：ロクロナデ、回転糸切り　内面：ロクロナデ(コテ仕上げ)　※器面に明瞭な使用痕跡なし	13.8	5.3	4.7	1/4	B I bi	
8	須恵器・坏	2層	外面：ロクロナデ、回転糸切り(離し)　内面：ロクロナデ(コテ仕上げ)　※外面体部にヘラ記号「－」、両面の体～底部に黒斑、器面に明瞭な使用痕跡なし	(14.8)	5.6	4.6	1/4	B I bi	
9	須恵器・坏	2層	外面：ロクロナデ、回転糸切り　内面：ロクロナデ　※両面の体～底部に黒斑、器面に明瞭な使用痕跡なし	(14.2)	(5.5)	4.7	1/2	B I bi	
10	赤焼土器・坏	2層	外面：ロクロナデ、回転糸切り　内面：ロクロナデ　※底面にヘラ記号「×」	－	(4.2)	－	一部		
11	赤焼土器・坏	2層	外面：ロクロナデ、回転糸切り(離し)、底に乾燥時の圧痕　内面：ロクロナデ　※外面底部に黒斑、器面に明瞭な使用痕跡なし	(14.0)	6.0	4.1	1/2	A I	37-10,40-6
12	赤焼土器・坏	2層	外面：ロクロナデ、回転糸切り(離し)　内面：ロクロナデ(コテ仕上げ)	12.7	4.8	3.4	3/5	A I	37－14
13	赤焼土器・坏	2層	外面：ロクロナデ、回転糸切り(離し)　内面：ロクロナデ(コテ仕上げ)　※器面に明瞭な使用痕跡なし	(12.7)	4.2	3.8	1/4	A I	
14	赤焼土器・坏	2層	外面：ロクロナデ、回転糸切り、底に乾燥時の圧痕　内面：ロクロナデ(コテ仕上げ)	(13.6)	5.4	3.3	1/2	A I	37－15
15	赤焼土器・坏	2層	外面：ロクロナデ、回転糸切り(離し)　内面：ロクロナデ　※外面底部に黒斑、内面底部付近に重ね焼き痕、器面に明瞭な使用痕跡なし	13.7	6.0	4.2	9/10	A IV	37-17,40-4
16	赤焼土器・坏	2層	外面：ロクロナデ、回転糸切り　内面：ロクロナデ(コテ仕上げ)　※外面にヘラ記号「－」、器面に明瞭な使用痕跡なし	(12.8)	5.5	3.8	1/3	A IV	
17	赤焼土器・高台皿	2層	外面：ロクロナデ、回転糸切り→高台接合後ロクロナデ、三日月高台　内面：ロクロナデ　※内外面にヘラ記号「－」、器面に明瞭な使用痕跡なし	13.4	7.2	2.5	完形	A	38－5

第83図　SK2861 土壙出土遺物（2）



（単位：cm）

No	種別	層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	分類	写真図版
1	須恵器・坏	2 層	外面：ロクロナデ　内面：ロクロナデ　外面口唇下に墨書「□」	－	－	－	一部		
2	須恵器・坏	2 層	外面：ロクロナデ　内面：ロクロナデ　外面口唇下に墨書「□」（大か）（正位）	－	－	－	一部		
3	須恵器・坏	2 層	外面：ロクロナデ、回転糸切り　内面：ロクロナデ　底面に墨書「□」	－	－	－	一部		
4	赤焼土器・坏	2 層	外面：ロクロナデ、回転糸切り（離し）　内面：ロクロナデ（コテ仕上げ）　※外面に墨書「大万」（正位）、器面に明瞭な使用痕跡なし	14.2	6.0	4.0	ほぼ完形	A II	37-12,40-1
5	土師器・坏	2 層	外面：ロクロナデ、回転糸切り　内面：ヘラミガキ（雑）→黒色処理　※器面に明瞭な使用痕跡なし	13.8	5.9	4.5	完形	B II a1	37－7
6	土師器・高台坏	2 層	外面：ロクロナデ、回転糸切り→高台接合後ロクロナデ　内面：ヘラミガキ（雑）→黒色処理　※口縁部付近と高台接地面付近に使用痕跡	15.7	7.5	5.7	ほぼ完形		38－4
7	赤焼土器・坏	2 層	外面：ロクロナデ、回転糸切り　内面：ロクロナデ（コテ仕上げ）　※器面に明瞭な使用痕跡なし	(13.0)	(5.6)	3.9	1/4	A III	
8	赤焼土器・坏	2 層	外面：ロクロナデ、回転糸切り　内面：ロクロナデ（コテ仕上げ）　※器面に明瞭な使用痕跡なし	15.3	5.9	4.8	4/5	A IV	37－16
9	赤焼土器・坏	2 層	外面：ロクロナデ、回転糸切り（離し）　内面：ロクロナデ　※器面に明瞭な使用痕跡なし	(13.8)	(5.8)	(3.9)	1/5	A III	
10	赤焼土器・坏	2 層	外面：ロクロナデ、回転糸切り（離し）　内面：ロクロナデ　※内面底部付近に重ね焼き痕、器面に明瞭な使用痕跡なし	14.1	5.9	3.8	ほぼ完形	A IV	37－11
11	須恵器・坏	1 層	外面：ロクロナデ、回転糸切り？　内面：ロクロナデ（コテ仕上げ）　※両面体～底部に黒斑	(14.4)	(5.0)	4.4	2/5	B II bi	
12	須恵器・坏	1 層	外面：ロクロナデ、回転糸切り　内面：ロクロナデ（コテ仕上げ）	(13.7)	4.6	4.3	2/5	B II bi	
13	赤焼土器・坏	1 層	外面：ロクロナデ、回転糸切り　内面：ロクロナデ	(12.5)	(5.4)	2.8	1/4	A IV	
14	赤焼土器・坏	1 層	外面：ロクロナデ、回転糸切り　内面：ロクロナデ　※底面にヘラ記号「×」	－	4.3	－	1/3		

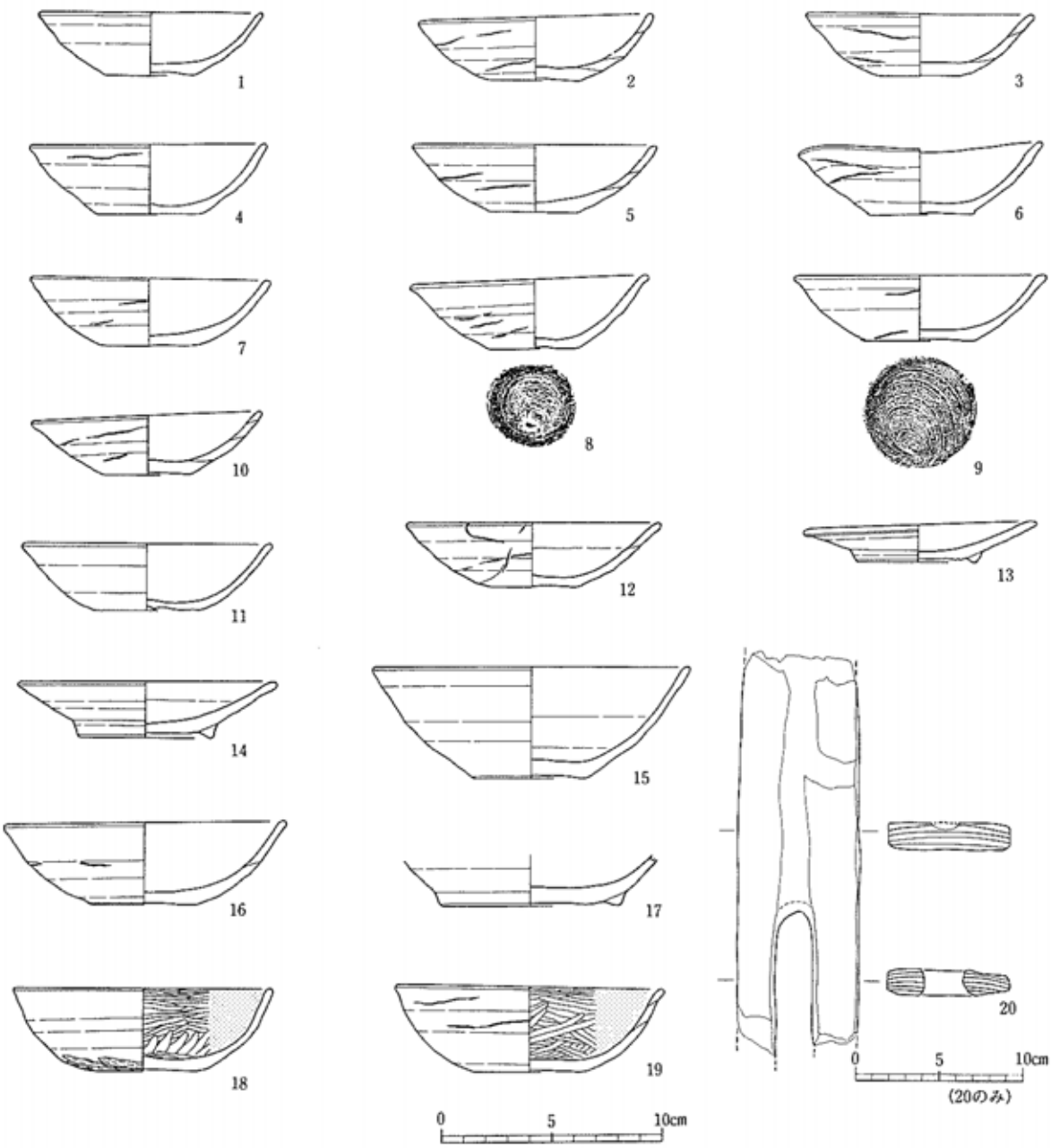
第84図　SK2861 土壙出土遺物（3）

ＳＫ2893 土壙（第 78・80 図）

調査区北部中央の北壁際で検出した土壙である。ＳＤ2816Ａ・Ｂ溝跡、ＳＫ2850 土壙より古い。平面形は歪んだ円形とみられ、径は 2.1mほど、深さは 0.6mある。断面形は逆台形で、壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は砂質土の小ブロックを含む黒褐色粘土質シルトで、自然堆積とみられる。遺物は出土していない。

ＳＫ2850 土壙（第 78・80 図）

調査区北部中央で検出した土壙である。ＳＫ2893 土壙、ＳＤ2816Ａ・Ｂ溝跡より新しい。平面形は隅丸長方形で、規模は長さ 4.1m、幅は 1.4～2.0m、深さは 0.7mある。断面形は逆台形である。堆積土は 8 層に分けられたが、4 層に大別が可能である。4 層は暗灰黄～褐灰色の粘土質シルトを主体とし



(単位：cm)

No.	種別	層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	分類	写真図版
1	赤焼土器・小型坏	3層上面	外面：ロクロナデ、回転糸切り(回し)　内面：ロクロナデ	(10.0)	(4.1)	(2.9)	1/4	B II	
2	赤焼土器・小型坏	3層上面	外面：ロクロナデ、回転糸切り(回し)　内面：ロクロナデ(コテ仕上げ)　※内面に明瞭な使用痕跡なし	10.5	4.2	2.9	7/10	B II	39－1
3	赤焼土器・小型坏	3層上面	外面：ロクロナデ、回転糸切り　内面：ロクロナデ	10.3	3.8	2.9	ほぼ完形	B II	38－17
4	赤焼土器・小型坏	3層上面	外面：ロクロナデ、回転糸切り　内面：ロクロナデ(コテ仕上げ)	10.7	4.8	3.2	完形	B II	38－16
5	赤焼土器・小型坏	3層上面	外面：ロクロナデ、回転糸切り(離し)　内面：ロクロナデ	11.0	4.1	3.1	ほぼ完形	B II	38－18
6	赤焼土器・小型坏	3層上面	外面：ロクロナデ、回転糸切り　内面：ロクロナデ	(10.5)	4.7	3.0	完形	B II	38－15
7	赤焼土器・小型坏	3層上面	外面：ロクロナデ、回転糸切り(離し)　内面：ロクロナデ(コテ仕上げ)　※器面に明瞭な使用痕跡なし	10.8	4.4	3.1	完形	B II	38－14
8	赤焼土器・小型坏	3層上面	外面：ロクロナデ、回転糸切り　内面：ロクロナデ(コテ仕上げ)　※器面に明瞭な使用痕跡なし	10.7	3.8	3.2	完形	B I	38－11
9	赤焼土器・小型坏	3層上面	外面：ロクロナデ、回転糸切り(離し)　内面：ロクロナデ(コテ仕上げ)　※外面にヘラ記号「一」、器面に明瞭な使用痕跡なし	11.4	5.0	3.0	完形	B II	38－10
10	赤焼土器・小型坏	3層上面	外面：ロクロナデ、回転糸切り　内面：ロクロナデ(コテ仕上げ)　※内面に明瞭な使用痕跡なし	10.3	4.1	2.7	7/10	B II	38－12
11	赤焼土器・小型坏	3層上面	外面：ロクロナデ、回転糸切り　内面：ロクロナデ(コテ仕上げ)	(11.2)	(4.8)	(3.0)	2/5	B II	
12	赤焼土器・小型坏	3層上面	外面：ロクロナデ、回転糸切り　内面：ロクロナデ　※外面体部にヘラ記号？　高温の炉へ底部に重ね焼き痕、器面に明瞭な使用痕跡なし	11.3	3.8	2.9	完形	B II	38－13
13	赤焼土器・高台皿	3層上面	外面：ロクロナデ、回転糸切り→高台接合後ロクロナデ、三角高台　内面：ロクロナデ　※器面に明瞭な使用痕跡なし	10.6	5.4	1.7	完形	B	39－2
14	赤焼土器・高台皿	3層	外面：ロクロナデ、回転糸切り→高台接合後ロクロナデ、三角高台　内面：ロクロナデ　※器面に明瞭な使用痕跡なし	11.6	6.0	2.6	完形	B	39-3, 40-5
15	須恵器・坏	3層上面	外面：ロクロナデ、回転糸切り　内面：ロクロナデ　※口縁部付近、底部付近に使用痕	(14.3)	5.2	5.0	1/4	B II b	
16	赤焼土器・坏	3層上面	外面：ロクロナデ、回転糸切り　内面：ロクロナデ(コテ仕上げ)　※器面に明瞭な使用痕跡なし	12.7	4.8	3.7	ほぼ完形	A III	38－9
17	赤焼土器・高台坏	2層	外面：ロクロナデ　内面：ロクロナデ(コテ仕上げ)	－	8.0	－	一部		
18	土師器・坏	3層上面	外面：ロクロナデ、回転糸切り→軽い手持ちヘラケズリ　内面：ヘラミガキ(雑)→黒色処理	11.7	4.7	3.8	完形	B II b	38－8
19	土師器・坏	3層上面	外面：ロクロナデ、回転糸切り　内面：ヘラミガキ(雑)→黒色処理	12.1	5.1	3.8	ほぼ完形	B II b	38－7
20	建築部材	埋積土	長24.4　幅7.3　厚1.6　樹種：ヒノキ						34－15

第85図　SK2850 土壙出土遺物

下部に崩壊土を含む層、3 層は黄灰色シルトを主体とする層、2 層は褐灰～黒褐色シルト、1 層は黒色粘土質シルトであり、いずれも自然堆積とみられる。

遺物は大別した堆積土のうち、2～4 層から出土している。4 層からはロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕が微量、3 層では赤焼土器高台皿（第 85 図 14）が 1 点出土している。3 層上面からは土師器坏（第 85 図 18・19）、須恵器坏（第 85 図 15）、赤焼土器坏（第 85 図 16）・小型坏（第 85 図 1～12）・高台皿（第 85 図 13）などが一括して出土している。2 層の遺物には土師器坏・甕、須恵器坏・甕、赤焼土器坏・小型坏・高台坏（第 85 図 7）や瓦がある。また、堆積土から建築部材とみられる木製品（第 85 図 20）が 1 点出土している。木製品の樹種は同定の結果、ヒノキであることがわかった。

ＳＫ2850 出土土器の多くは食膳具であり、とくに赤焼土器の小型坏が主体を占める。各層の土器は特徴が共通しており、それらをまとめると以下のようになる。土師器坏は口径が 12 ㎝前後の小型のもので、器形は底部から内弯気味に立ち上がる。須恵器坏は軟質で還元が不良であり、灰白色を呈する。赤焼土器坏は外面に粘土紐の巻き上げ痕を残すものが多く、内面はコテ状工具や革などで平滑に仕上げられている。胎土は砂粒の混入が少なく精選されているものが大部分であるが、なかには砂粒を多く含み全体に粗いものが 2 点ある。組成の主体は口径 10～11 ㎝台の小型坏で、高台皿や高台坏には低い三角高台が付く。

ＳＫ2774 土壙（第 79・80 図）

調査区北部中央で検出した土壙である。ＳＦ3477 小溝状遺構群より新しい。長辺 1.9m、短辺 1.4mの隅丸方形で、深さは 0.4mある。堆積土は 5 層に分けられる。2～5 層は炭化物を含む黒色粘土質シルトで、含まれる地山の量によって細分される。1 層は地山ブロックと炭化物を含む黒色シルトである。いずれも自然堆積と考えられる。

遺物は堆積土から土師器・須恵器のほか、砥石（第 81 図 10）や瓦が微量出土している。土師器は内面に漆が付着しているものもある。

ＳＫ2790 土壙（第 79 図）

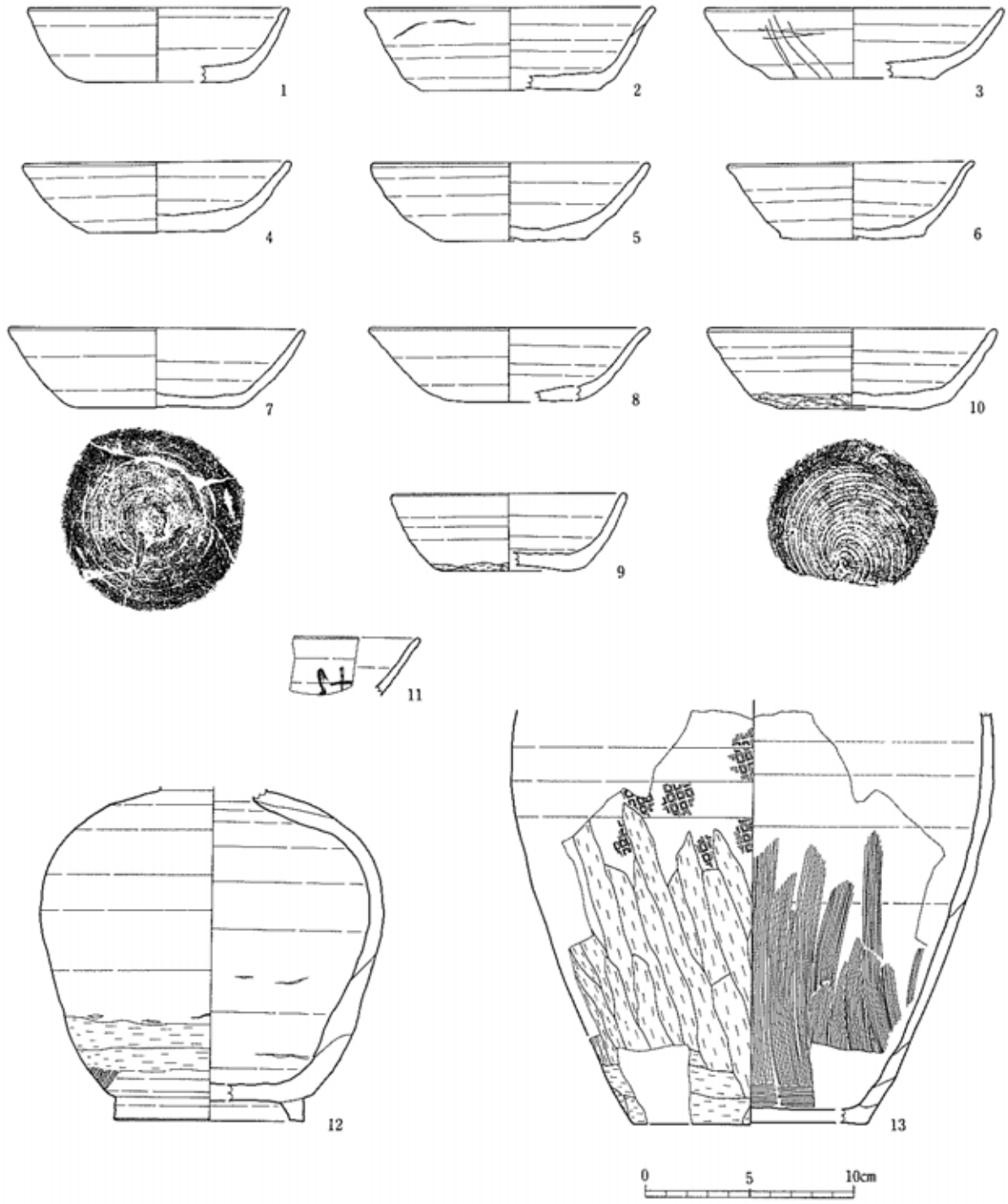
調査区北部中央で検出した土壙である。ＳＢ2884 建物跡、ＳＦ3476 小溝状遺構より新しく、ＳＦ3477 小溝状遺構群より古い。平面形は歪んだ円形で、径は 1.4m前後、深さは 0.2mある。断面形は浅い皿状である。堆積土は炭化物と地山ブロックを含む黒褐色シルトで、人為的に埋め戻されている。遺物は堆積土から土師器が微量出土している。

ＳＫ2777 土壙（第 79・80 図）

調査区北部中央で検出した土壙である。ＳＢ2884 建物跡より新しく、ＳＫ2763 土壙、ＳＤ2771 溝跡より古い。平面形は不明で、規模は東西。南北とも 1.4m以上ある。深さは 0.1mある。底面には凹凸があり、壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は地山を含む黒褐色粘土質シルトで、地山の含みかたによって 3 層に細分される。遺物は堆積土から、ロクロ調整の土師器甕が微量出土している。

ＳＫ2763 土壙（第 79・80 図）

調査区北部中央で検出した土壙である。ＳＢ2884 建物跡、ＳＫ2777 土壙より新しく、ＳＤ2771 溝跡、ＳＦ3477 小溝状遺構群より古い。平面形は楕円形とみられ、長径が 2.4m以上、短径 1.5m、深さは 0.3



(単位：cm)

No.	種別	層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	分類	写真図版
1	須恵器・坏	1 層	外面：ロクロナデ、ヘラ切り　内面：ロクロナデ	12.6	7.0	3.6	1/2	A I a	
2	須恵器・坏	1 層	外面：ロクロナデ、ヘラ切り？　内面：ロクロナデ　底面にヘラ記号「×」	14.0	8.6	4.0	2/5	A I a	
3	須恵器・坏	1 層	外面：ロクロナデ、ヘラ切り　内面：ロクロナデ　外面にヘラ記号「ㅠ」	(14.4)	(8.0)	3.4	1/3	A I a	
4	須恵器・坏	1 層	外面：ロクロナデ、ヘラ切り　内面：ロクロナデ	(13.0)	6.7	3.4	3/5	A I a	35−14
5	須恵器・坏	1 層	外面：ロクロナデ、ヘラ切り　内面：ロクロナデ　内面にヘラ記号　「⇔」	(13.4)	(7.2)	3.8	2/5	A I a	
6	須恵器・坏	1 層	外面：ロクロナデ、ヘラ切り　内面：ロクロナデ	11.9	7.0	3.7	1/2	A II a	35−11
7	須恵器・坏	1 層	外面：ロクロナデ、ヘラ切り　内面：ロクロナデ	14.3	8.0	3.9	4/5	A I a	35−12
8	須恵器・坏	堆積土	外面：ロクロナデ、ヘラ切り　内面：ロクロナデ	13.6	(6.6)	3.6	1/2	A I a	
9	須恵器・坏	1 層	外面：ロクロナデ、回転糸切り→手持ちヘラケズリ　内面：ロクロナデ	(11.4)	(6.4)	3.7	2/5	A I b2	35−15
10	須恵器・坏	1 層	外面：ロクロナデ、回転糸切り→手持ちヘラケズリ　内面：ロクロナデ	(14.0)	6.7	3.9	2/5	A I b2	35−13
11	須恵器・坏	1 層	外面：ロクロナデ　内面：ロクロナデ　外面に墨書「□」(子カ)（横位）	−	−	−	−		
12	須恵器・長頸壺	堆積土	外面〔胴〜底〕ロクロナデ→回転ヘラケズリ→高台接合後ロクロナデ　内面：〔胴〜底〕ロクロナデ	−	(9.0)	−	1/3		35−16
13	土師器・長胴甕	1 層	外面：〔胴〕格子タタキ→ロクロナデ→縦位ヘラケズリ〔底〕ナデ　内面：〔胴〜底〕ロクロナデ→縦位ナデ	−	(11.2)	−	一部	A	

第86図　SK2763 土壙出土遺物

mある。底面は平坦で壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は4層に分けられたが、2層に大別が可能である。2層は褐灰～暗褐色の粘土質シルト、1層は炭化物を多く含む黒褐色粘土質シルトであり、本土壙は人為的に埋め戻されている。

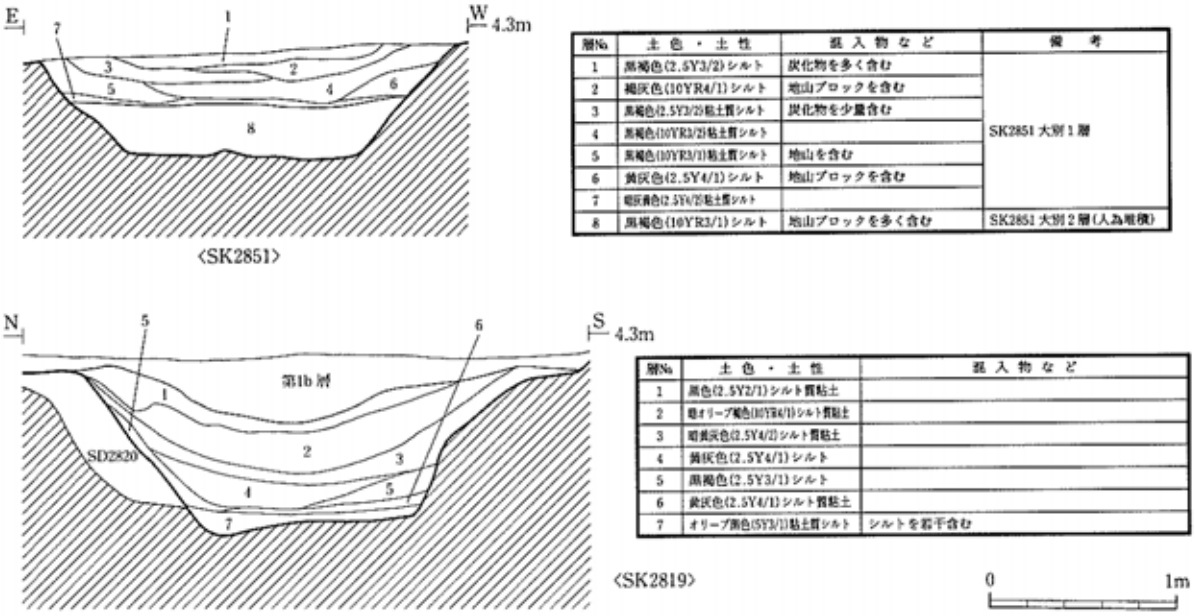
遺物は大別1層から出土したものと、堆積土全体から取り上げたものとがある。1層からは、土師器甕（第86図13）、須恵器坏（第96図1～7・9～11）・壺・甕、丸瓦が出土している。また堆積土から取り上げた遺物には、土師器坏・甕、須恵器坏（第86図8）・長頸壷（第96図12）・蓋・甕がある。須恵器には、回転糸切りののち手持ちヘラケズリが施されたもの2点（第86図9・10）を除くと、ほかはすべてヘラ切りである。これらの多くは器面に使用痕が明瞭に残る。また体部に墨書があるもの（第86図11）、底面にヘラ記号「×」があるもの（第86図2）、体部に刻書のあるもの（第86図3）が1点ずつある。須恵器長頸壷（第86図12）は在地産で、胴部下端に回転ヘラケズリが施されている。須恵器の破片のなかには、胎土や色調から会津大戸窯産の壷と考えられるものがある。土師器甕は格子タタキののちロクロ調整が施されている。土師器坏はロクロ調整であるが、量は少ない。

ＳＫ2851土壙（第79・87図）

調査区北部中央で検出した土壙である。ＳＦ3477・3478小溝状遺構群と重複するが、新旧関係はつかめなかった。長径2.3m、短径1.5mの楕円形で、深さは0.7mある。断面形は逆台形である。堆積土は8層に分けられたが、2層に大別が可能である。2層は地山ブロックを多く含む黒褐色シルト、1層は暗灰黄～黒褐色のシルトもしくは粘土質シルトを主体としており、2層は人為的な埋土、1層は自然堆積土と考えられる。

遺物は底面と堆積土から出土している。底面からは、土師器椀・須恵器坏（第88図1）・木製品（第89図）が出土している。須恵器坏はヘラ切りで、底面に「×」のヘラ記号、体部に墨書が施されている。木製品はクリ材を用いており、櫂の未製品と思われる。土師器椀はロクロ調整である。

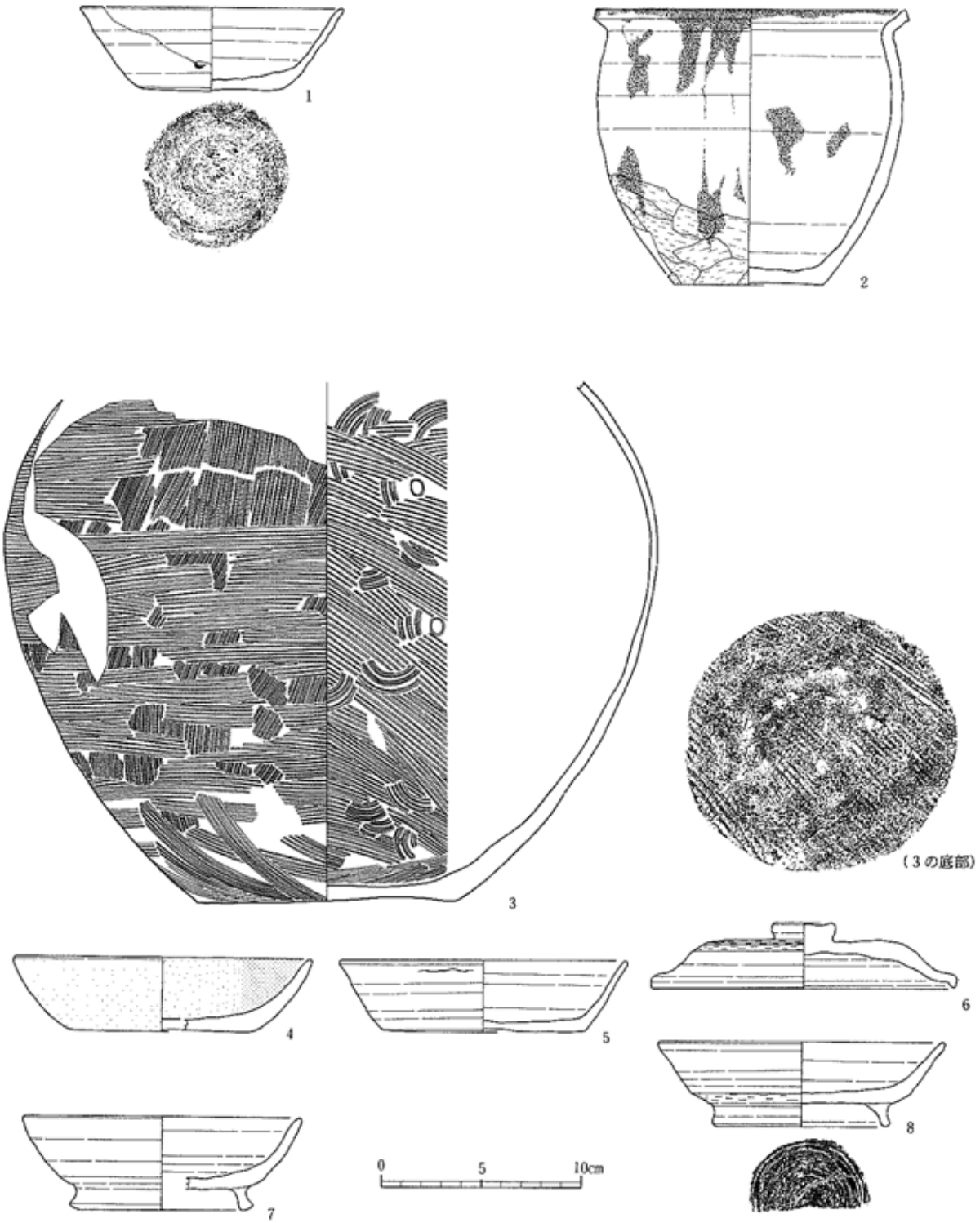
2層からは土師器甕（第88図2）や木製品が出土している。土師器甕は小型で、ロクロナデののち手持ちヘラケズリが施されている。両面の口縁部から胴部に漆状の付着物が認められる。木製品は小



層No	土色・土性	混入物など	備考
1	黒褐色(2.5Y3/2)シルト	炭化物を多く含む	SK2851 大別1層
2	褐灰色(10YR4/1)シルト	地山ブロックを含む	
3	黒褐色(2.5Y2/2)粘土質シルト	炭化物を少量含む	
4	黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト		
5	黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト	地山を含む	
6	黄灰色(2.5Y4/1)シルト	地山ブロックを含む	
7	暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土質シルト		
8	黒褐色(10YR3/1)シルト	地山ブロックを多く含む	SK2851 大別2層(人為堆積)

層No	土色・土性	混入物など
1	黒色(2.5Y2/1)シルト質粘土	
2	暗オリーブ褐色(10YR4/1)シルト質粘土	
3	暗黄灰色(2.5Y4/2)シルト質粘土	
4	黄灰色(2.5Y4/1)シルト	
5	黒褐色(2.5Y3/1)シルト	
6	黄灰色(2.5Y4/1)シルト質粘土	
7	オリーブ黒色(5Y3/1)粘土質シルト	シルトを若干含む

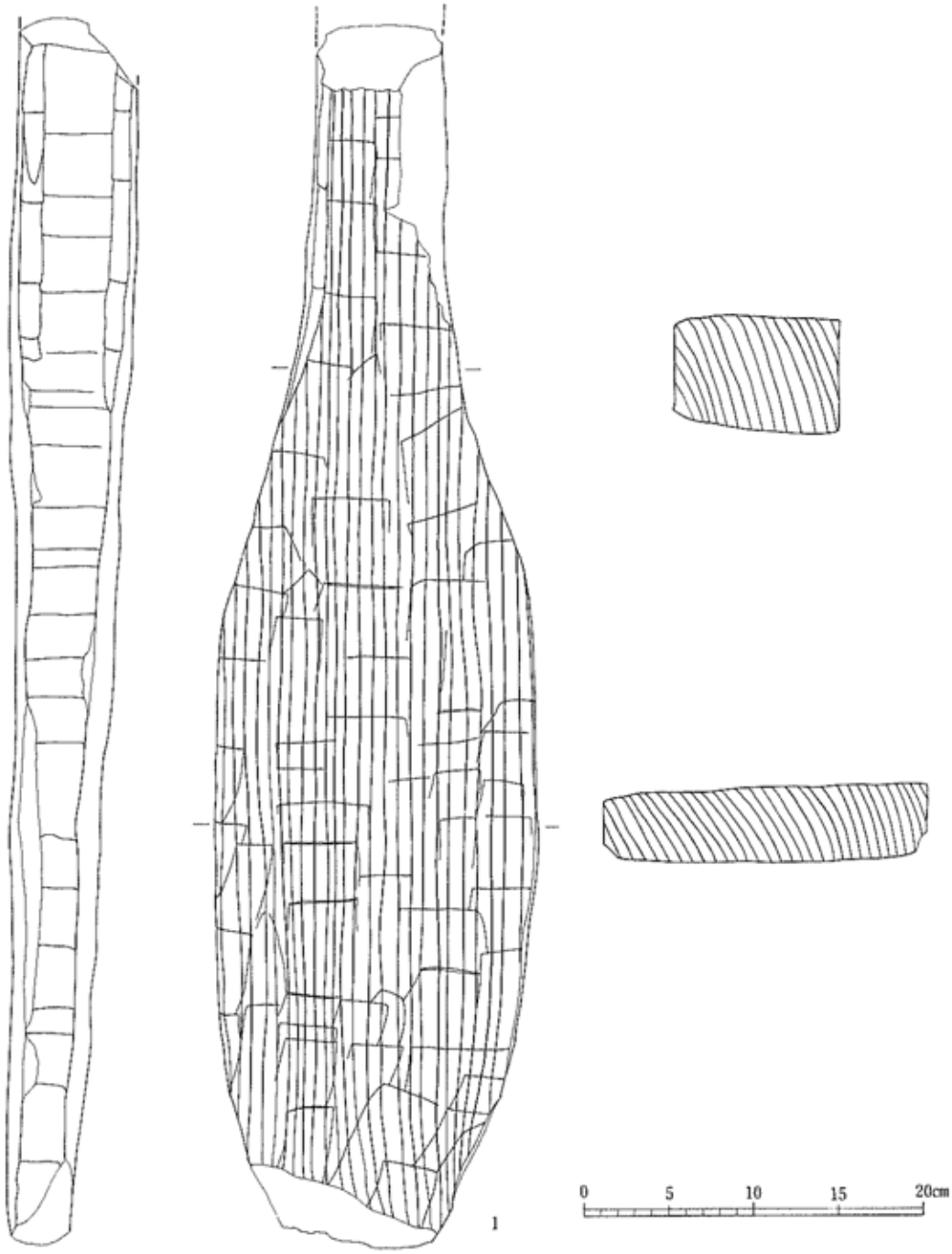
第87図　SK2819・2851土壙出土断面図



（単位：cm）

No.	種別	出土遺構・層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	分類	写真図版
1	須恵器・坏	SK2851・底面	外面：ロクロナデ、ヘラ切り　内面：ロクロナデ　底面にヘラ記号「×」　外面に墨書「□」	15.2	(9.3)	4.2	4/5	A II a	36-4,39-14
2	土師器・甕	SK2851・2層	外面：〔口～胴〕ロクロナデ→手持ちヘラケズリ〔底〕ナデ　内面：ロクロナデ　内外面に漆状付着物	(15.8)	7.5	13.9	2/5	B	36－5
3	須恵器・甕	SK2851・1層	外面：〔胴〕平行タタキ(木目直交)→カキメ〔底〕平行タタキ(木目直交)→ナデ　内面：〔胴〕同心円アテ具→カキメ〔底〕ナデ	－	13.0	－	1/2	B	36－7
4	土師器・坏	SK2764・堆積土	全体に摩滅　外面：〔口〕ヨコナデ〔体～底〕手持ちヘラケズリ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(15.0)	(8.9)	3.7	1/2	A	
5	須恵器・坏	SK2764・堆積土	外面：ロクロナデ、ヘラ切り　内面：ロクロナデ	14.5	10.2	3.6	3/5	A I a	35－17
6	須恵器・坏蓋	SK2764・堆積土	扁平な宝珠形つまみ(径：3.2)　外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ→つまみ接合後ロクロナデ　内面：ロクロナデ	(15.4)	－	3.3	2/5	B	36－1
7	須恵器・高台坏	SK2764・堆積土	外面：ロクロナデ、ヘラ切り→回転ヘラケズリ→高台接合後ロクロナデ　内面：ロクロナデ	(14.0)	(9.2)	4.7	1/3	B	
8	須恵器・高台坏	SK2764・底面	外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ→高台接合後ロクロナデ　内面：ロクロナデ	(14.4)	(8.8)	4.3	1/2	B	36－2

第88図　SK2764・2851 土壙出土遺物



(単位：cm)

No.	種別	層位	特徴	写真図版
1	木製品	底面	樹未製品か　破損品　長73.2以上　幅(身)19.1　(柄)7.6～7.9　厚(身)4.5　(柄)7.0　樹種：クリ	34－14

第89図　SK2851 土壙出土遺物

さい板状で、柾目取りのヒノキ材を利用している。1層からは土師器坏・甕、須恵器蓋・甕（第88図3）、平瓦が出土している。須恵器甕の底面には胴部と同じ平行タタキが認められる。

ＳＫ2764 土壙（第64図）

調査区北部中央で検出した土壙で、上半分を後世の撹乱によって壊されており、ＳＡ2881・2882 柱列、ＳＦ3476 小溝状遺構群との新旧関係は不明である。平面形は長楕円形とみられ、長径 18.2m、短径

3.9m以上、深さは0.6mある。堆積土は炭化物を含む黒褐色シルト質粘土で、自然堆積とみられる。

遺物は底面と堆積土から出土している。底面からは須恵器高台坏（第98図8）が出土している。皿形で回転ヘラケズリが施されている。底面にヘラ記号がみられる。また内外面の使用痕が顕著である。

堆積土からは土師器坏（第88図4）・甕、須恵器坏（第88図5）・高台坏（第88図7）・蓋（第88図6）のほか木製品が出土している。須恵器坏は皿形でヘラ切りのものが多い。また内外面の使用痕が顕著である。須恵器蓋のつまみは擬宝珠形で、器形や胎土、色調から会津大戸窯産とみられる。須恵器高台坏は皿形で回転ヘラケズリが施される。使用痕が顕著に認められる。土師器坏は非ロクロ調整で平底であり、破片を含めても量は少ない。土師器甕はロクロ調整である。木製品の樹種は同定の結果、スギであることがわかった。

ＳＫ2819土壙（第65・87図）

調査区北東部で検出した土壙で、東半部は調査区外へ続く。ＳＤ2820溝跡より新しい。平面形は不明で規模は南北が2.7m、深さは0.9mある。断面形は逆台形である。堆積土は7層に分けられる。8層はオリーブ黒色の粘土質シルト、7 層は黄灰色のシルト質粘土、5・6 層は黒褐～黄灰色シルト、2～4層は暗灰黄～黒色のシルト粘土、1層は黒褐色の粘土質シルトをそれぞれ主体とする。いずれも自然堆積とみられる。

遺物は堆積土から土師器甕、須恵器坏・甕、赤焼土器坏や瓦が少量出土している。

（5）溝跡

溝跡は多数検出しているが、重複関係・出土遺物などから、時期をある程度推定できるのは、以下の13条である。

ＳＤ2816Ａ・Ｂ溝跡（第62～65・76・78・79・90図）

調査区北部で検出した東西溝跡で、長さ83m分を確認した。2時期の変遷（A→B）がある。ＳＢ2883建物跡、ＳＫ2893土壙、ＳＦ3476・3479小溝状遺構群より新しく、ＳＫ2817・2850・2853土壙より古い。

B期の溝は上帳 0.7～1.5m、底面幅は 0.3～0.7mで、調査区の東端近くが広くなる。深さは 0.6mある。溝はほぼ真東を向く。底面は舟底形で壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は7層に分けられたが、3層に大別が可能である。3層は部分的に地山を含む褐灰～暗灰黄色シルトである。2層は灰白色火山灰層で、場所によっては下に純堆積、その上に再堆積が認められる部分がある。1 層は炭化物を少量含む灰黄褐～褐灰色シルトである。いずれも自然堆積とみられる。

A期の溝は大部分をB期に壊されているため規模などは不明だが、深さは 0.3mある。底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形とみられる。堆積土は暗灰黄色シルトであり、自然堆積と考えられる。

A溝、B溝とも堆積土から遺物が出土している。B溝は3層から土師器坏（第91図1・4）・甕・羽釜（第91図5）、須恵器坏・甕、赤焼土器坏が出土している。土師器坏は回転糸切りで、内面のミガキが放射状であり、うち1点は体部の2箇所に「大万」「禾」の墨書が認められる（第91図4）。羽釜はロクロナデののち手持ちヘラケズリが施されており、口唇部とつば部の高さがほぼ同じである。2層

からは、土師器甕と赤焼土器坏の破片が少量出土している。1 層からは、土師器坏・甕、会津大戸産とみられる須恵器壺、須恵器甕、赤焼土器坏が少量出土している。また、B溝の確認面から赤焼土器坏（第 91 図 2）が出土している。

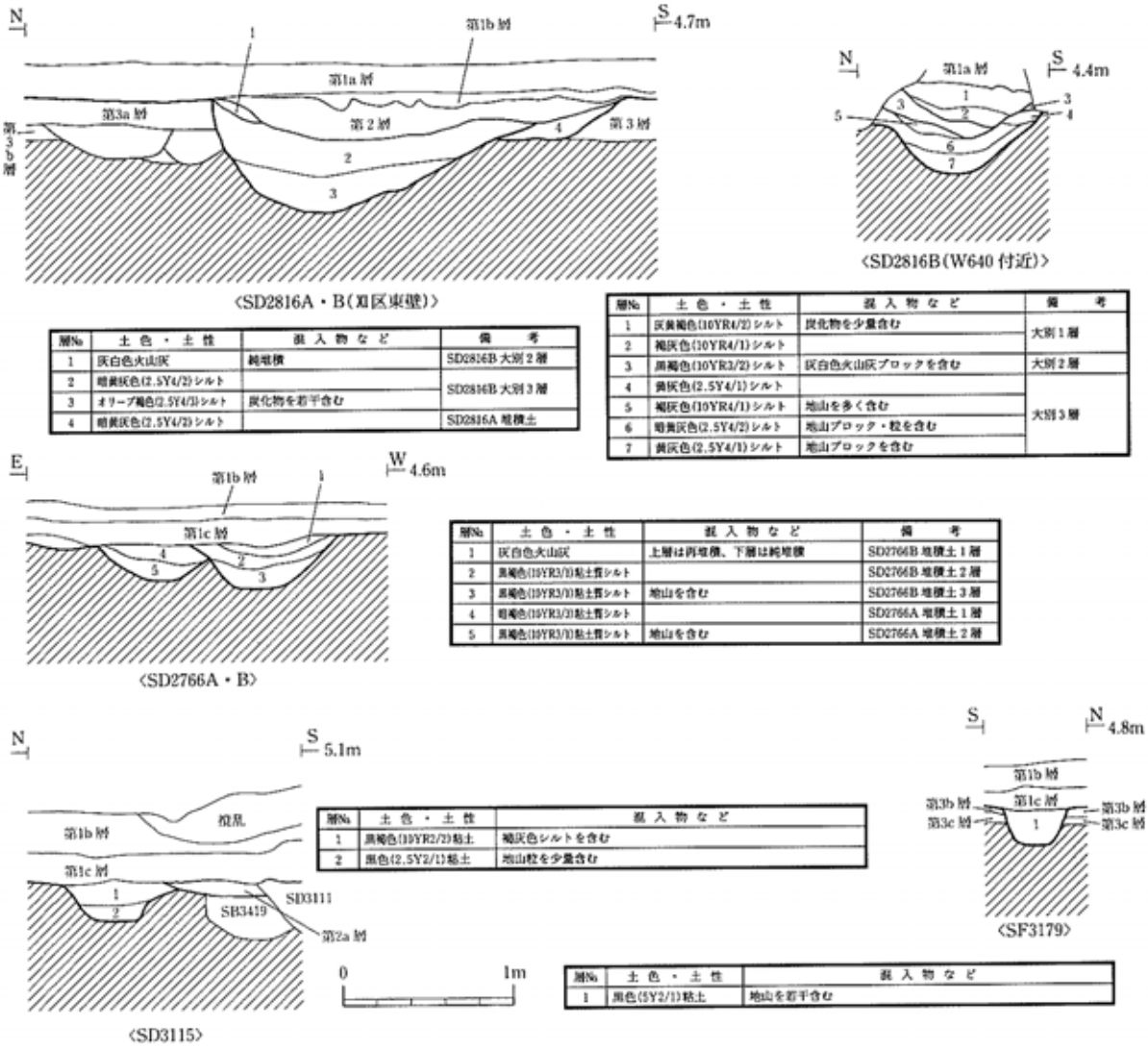
A溝の堆積土からは土師器坏・甕、ヘラ切りの須恵器坏・須恵器甕が小量出土している。

ＳＤ2766Ａ・Ｂ溝跡（第 63・78・90 図）

調査区北部中央で検出した南北溝跡で、長さ 11m分を確認した。2 時期（A→B）の変遷がある。ＳＤ2771 溝跡より古い。

B期の溝は上幅 0.9～1.7m、底面幅は 0.3m前後、深さは 0.4mある。溝の方向は、N3°Eである。底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形である。堆積土は 3 層に分けられ、いずれも自然堆積とみられる。2・3 層は黒褐色粘土質シルトで、3 層には壁崩壊土とみられる地山小ブロックが含まれる。1 層は灰白色火山灰層で、下に純堆積、その上に再堆積が認められる。

A期の溝は上幅 0.9m以上、底面幅は 0.4m以上、深さは 0.3mある。溝の方向はN5°Eである。底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形である。堆積土は 2 層に分けられ、自然堆積とみられる。2 層は壁崩壊



層No	土色・土性	混入物など	備考
1	灰白色火山灰	純堆積	SD2816B 大別 2 層
2	暗黄灰色(2.5Y4/2)シルト		SD2816B 大別 3 層
3	オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト	炭化物を若干含む	
4	暗黄灰色(2.5Y4/2)シルト		SD2816A 堆積土

層No	土色・土性	混入物など	備考
1	灰黄褐色(10YR4/2)シルト	炭化物を少量含む	大別 1 層
2	褐灰色(10YR4/1)シルト		
3	黒褐色(10YR3/2)シルト	灰白色火山灰ブロックを含む	大別 2 層
4	黄灰色(2.5Y4/1)シルト		大別 3 層
5	褐灰色(10YR4/1)シルト	地山を多く含む	
6	暗黄灰色(2.5Y4/2)シルト	地山ブロック・粒を含む	
7	黄灰色(2.5Y4/1)シルト	地山ブロックを含む	

層No	土色・土性	混入物など	備考
1	灰白色火山灰	上層は再堆積、下層は純堆積	SD2766B 堆積土 1 層
2	黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト		SD2766B 堆積土 2 層
3	黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト	地山を含む	SD2766B 堆積土 3 層
4	暗褐色(10YR3/3)粘土質シルト		SD2766A 堆積土 1 層
5	黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト	地山を含む	SD2766A 堆積土 2 層

層No	土色・土性	混入物など
1	黒褐色(10YR2/2)粘土	褐灰色シルトを含む
2	黒色(2.5Y2/1)粘土	地山粒を少量含む

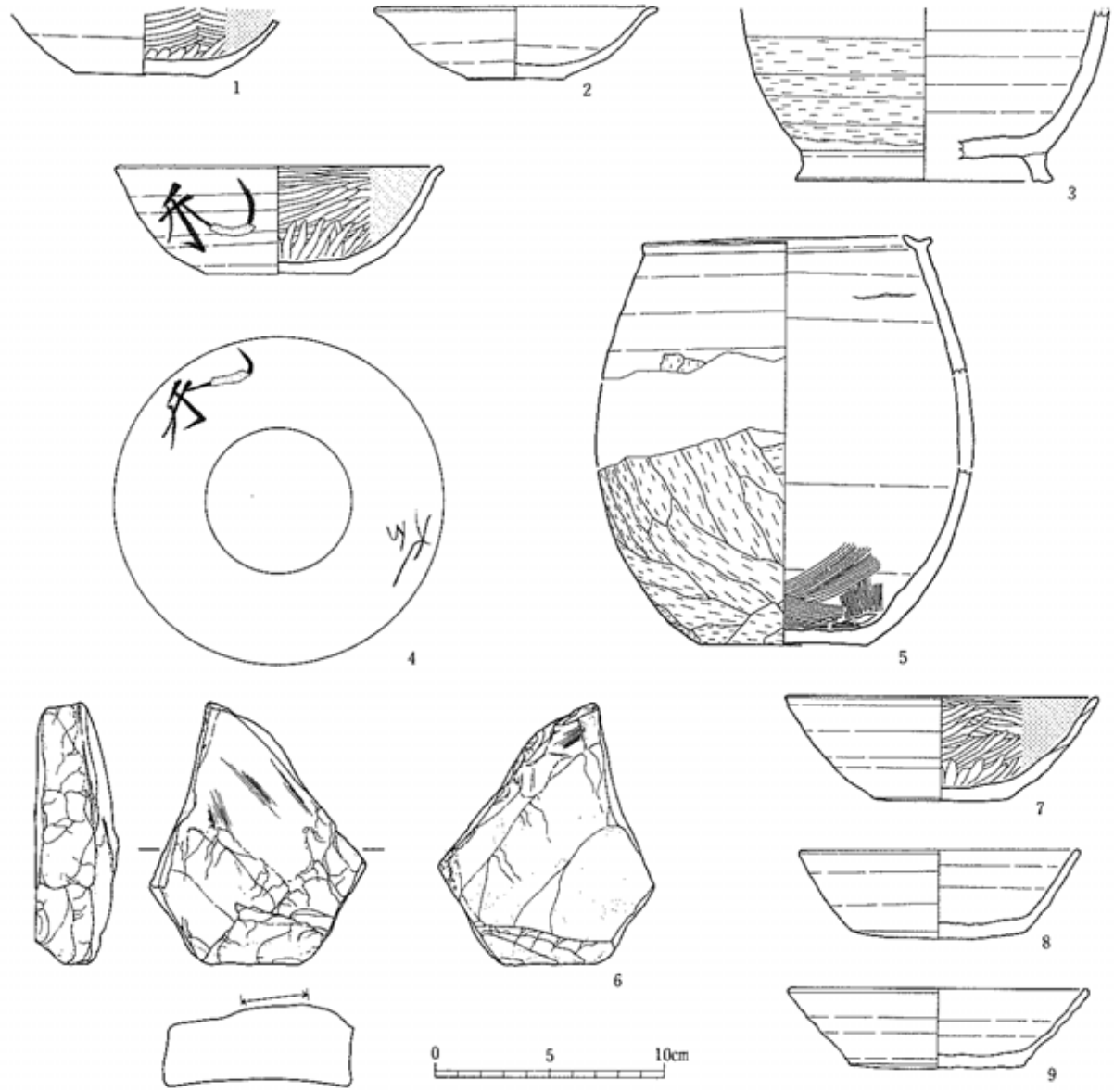
層No	土色・土性	混入物など
1	黒色(5Y2/1)粘土	地山を若干含む

第90図　SD2766・2816・3115 溝跡、SF3179 小溝状遺構群断面図

土の地山小ブロックを含む黒褐色粘土質シルト、1層は炭化物を含む暗褐色粘土質シルトである。

A溝、B溝とも堆積土から遺物が出土している。B溝の堆積土からは土師器甕、須恵器坏・高台坏・長頸壷（第91図3）・甕・蓋、砥石（第91図6）、丸瓦が出土している。須恵器長頸壷は回転ヘラケズリが施されている。須恵器坏には底面に「×」のヘラ記号が認められるものが1点ある。A溝の堆積土1層からは土師器坏や須恵器坏が微量出土している。

本溝は北側のＳＤ2816東西溝跡との接続部分が撹乱で壊されているが、その北に設けた拡張区で認められないこと、2時期の変遷があり新しい溝に灰白色火山灰が認められる点がＳＤ2916と共通する



（単位：cm）

No	種別	出土遺構・層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	分類	写真図版
1	土師器・坏	SD2816B・3層	外面：ロクロナデ、回転糸切り　内面：ヘラミガキ(雑)→黒色処理	－	6.0	－	一部	B II	
2	赤焼土器・坏	SD2816B・確認面	外面：ロクロナデ、回転糸切り(離し)　内面：ロクロナデ(コテ仕上げ)	(12.4)	4.2	(3.2)	1/2	A IV	39－5
3	須恵器・長頸壷	SD2766B・堆積土	外面：〔胴～底〕回転ヘラケズリ→高台接合後ロクロナデ　内面：〔胴～底〕ロクロナデ	－	13.2	－	一部		
4	土師器・坏	SD2816B・3層	外面：ロクロナデ、回転糸切り　内面：ヘラミガキ→黒色処理　外面に墨書「□」(禾か)、「大万」	14.3	6.4	4.8	完形	B II a3	39－4
5	土師器・羽釜	SD2816B・3層	外面：〔口～胴〕ロクロナデ→手持ちヘラケズリ〔底〕粗いナデ　内面：ロクロナデ、ナデ　つば径：(12.6)	(10.2)	7.2	(19.7)	3/5		39－6
6	砥石	SD2766B・堆積土	長11.6　幅9.5　厚3.3						
7	土師器・坏	SD2862・堆積土	外面：ロクロナデ、回転糸切り(板状圧痕)　内面：ヘラミガキ(雑)→黒色処理	(13.7)	5.8	4.6	1/4	B II a2	
8	須恵器・坏	SF3477・堆積土	外面：ロクロナデ、ヘラ切り　内面：ロクロナデ	(12.3)	(7.4)	3.9	3/5	A I a	
9	須恵器・坏	SD2820・堆積土	外面：ロクロナデ、ヘラ切り　内面：ロクロナデ	(13.2)	(7.7)	3.5	1/4	A I a	

第91図　SD2766・2816・2820・2862溝跡、SF3477小溝状遺構群出土遺物

ことから、ＳＤ2766 南北溝跡とＳＤ2816 東西溝跡とは「Ｔ」字状に接続していたとみられる。

ＳＤ3115 溝跡（第 71・90 図）

調査区南側で検出した東西溝跡で、長さ 10.1m分を確認した。ＳＤ3140 溝跡より新しく、ＳＤ3396 Ｂ溝跡より古い。

上幅は 0.4～0.6m、底面幅は 0.2m前後、深さは 0.3mある。溝の方向はほぼ真東を向く。底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形である。堆積土は 2 層に分けられ、下層は黒色粘土、土層は黒褐色粘土を主体としており、自然堆積とみられる。

遺物は堆積土から、ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・壺・甕、瓦が少量出土している。

ＳＤ3131 溝跡（第 71 図）

調査区中央で検出した南北溝跡で、長さ 4.3m分を確認した。ＳＢ3420 建物跡より新しく、ＳＤ3120 溝跡、ＳＦ3471 小溝状遺構群より古い。上幅は 0.5m前後、底面幅は 0.4m、深さは 0.1mある。溝の方向はN3°Ｅである。底面は平坦で、断面形は浅い皿形である。堆積土は暗オリーブ色シルト質粘土である。遺物は堆積土から土師器甕が微量出土している。

ＳＤ3140 溝跡（第 71 図）

調査区南側で検出した溝跡で、長さ 5.5m分を確認した。ＳＢ3425 建物跡、ＳＫ3310 土壙より新しく、ＳＤ3115 溝跡、ＳＦ3472 小溝状遺構群より古い。上幅は 0.6～1.1m、底面幅は 0.4～0.8mである。深さは 0.2mで、断面形は皿形である。堆積土は黒褐色粘土質シルトで、底面近くには壁崩壊土とみられる地山小ブロックが含まれる。遺物は堆積土から、ロクロ調整の土師器坏、土師器甕、須恵器甕が少量出土している。

ＳＤ3120 溝跡（第 71 図）

調査区中央で検出した東西溝跡で、長さ 14.7m分を確認した。ＳＢ3421・3423・3425 建物跡、ＳＤ3131 溝跡、ＳＦ3472・3473 小溝状遺構群より新しい。上幅は 0.5m、底面幅は 0.2m前後、深さは 0.2mある。溝の方向はＥ3°Ｓである。底面は平坦で、断面形は逆台形である。堆積土は黒褐色シルト質粘土で、底面近くには壁崩壊土とみられる地山小ブロックが含まれる。遺物は堆積土から須恵器坏が微量出土している。

ＳＤ3179 溝跡（第 71 図）

調査区中央の第 3ｂ層で検出した東西溝跡で、長さ 14m分を確認した。ＳＫ3503 土壙、ＳＦ3472・3473 小溝状遺構群より新しく、ＳＤ3187 溝跡より古い。

上幅は 0.5～0.6m、底面幅 0.3m前後で、深さは 0.1～0.2mある。溝の方向はほぼ真東を向く。底面はほぼ平垣で、断面形は「U」字形である。堆積土は黒色粘土で、壁崩壊土とみられる地山小ブロックが少し含まれる。遺物は堆積土から有段丸瓦が微量出土している。

ＳＤ2794 溝跡（第 76・92 図）

調査区北部西側で検出した南北溝跡で、長さ 13.9m分を確認した。ＳＤ2816Ａ・Ｂ溝跡より新しい。上幅は 1.7～2.2m、底面 0.5～0.8m、深さは 0.7mある。溝の方向はN1°Ｅである。断面形はゆるやかな「V」字形である。堆積土は 7 層に分けられる。7 層は褐灰色細砂、4～6 層は褐灰色～黒色粘

土、3 層はにぶい黄色の砂、2 層は暗灰黄色粘土質シルト、1 層は灰褐黄色の砂質シルトをそれぞれ主体としており、自然堆積とみられる。遺物は出土していない。

ＳＤ2771 溝跡（第 78・79・92 図）

調査区北部中央で検出した溝跡で、長さ 19.3m分を確認した。ＳＢ2884 建物跡、ＳＤ2766Ａ・Ｂ溝跡、ＳＫ2763・2777 土壙、ＳＦ3476・3477・3478 小溝状遺構群より新しい。上幅は 0.4～0.6m、底面幅は 0.2m、深さは 0.4mある。溝の方向はＥ34°Ｓである。底面は平坦であり、段面形は箱堀状である。堆積土は黒色粘土質シルトを主体とし、地山の混ざり方によって 5 層に細分される。遺物は堆積土から土師器甕、須恵器坏・甕が微量出土している。

ＳＤ2862 溝跡（第 78・92 図）

調査区北部の拡張区で検出した東西溝跡で、長さ 3.2m分を確認した。ＳＫ2861・2864 土壙より新しい。上幅は 2.3m、底面幅は 0.3～0.5m、深さは 0.8mある。溝の方向はＥ11°Ｎである。断面形は「Ｖ」字形で、堆積土は 5 層に分けられる。3～5 層は黒褐色～オリーブ褐色粘土質シルト、1・2 層は黒褐色シルトを主体としており、いずれも自然堆積とみられる。遺物は堆積土から土師器坏（第 91 図 7）、須恵器甕、赤焼土器坏が出土しているが、これらはその特徴から本来はＳＫ2861 土壙に帰属するものとみられる。

本溝跡は規模や深さ、断面形からＳＤ2820 溝跡と一連の遺構とみられる。

ＳＤ2820 溝跡（第 65・92 図）

調査区北東部で検出された東西溝跡で、長さ 2.6m分を確認した。ＳＫ2819 土壙より古い。上幅は 1.8m、底面幅 0.7～1.0m、深さは 0.5mある。溝の方向はほぼ真東を向く。断面形はゆるやかな「Ｖ」字形である。堆積土は 4 層に分けられる。4 層は暗オリーブ褐色シルト、2・3 層は黒褐色粘土質シルトを主体としている。1 層は地山ブロックを含む黒褐色シルトであり、いずれも自然堆積とみられる。遺物は堆積土から、ヘラ切りの須恵器坏（第 91 図 9）や須恵器甕が微量出土している。

本溝跡は規模や深さ、断面形からＳＤ2862 溝跡と一連の遺構とみられる。

（6）小溝状遺構群

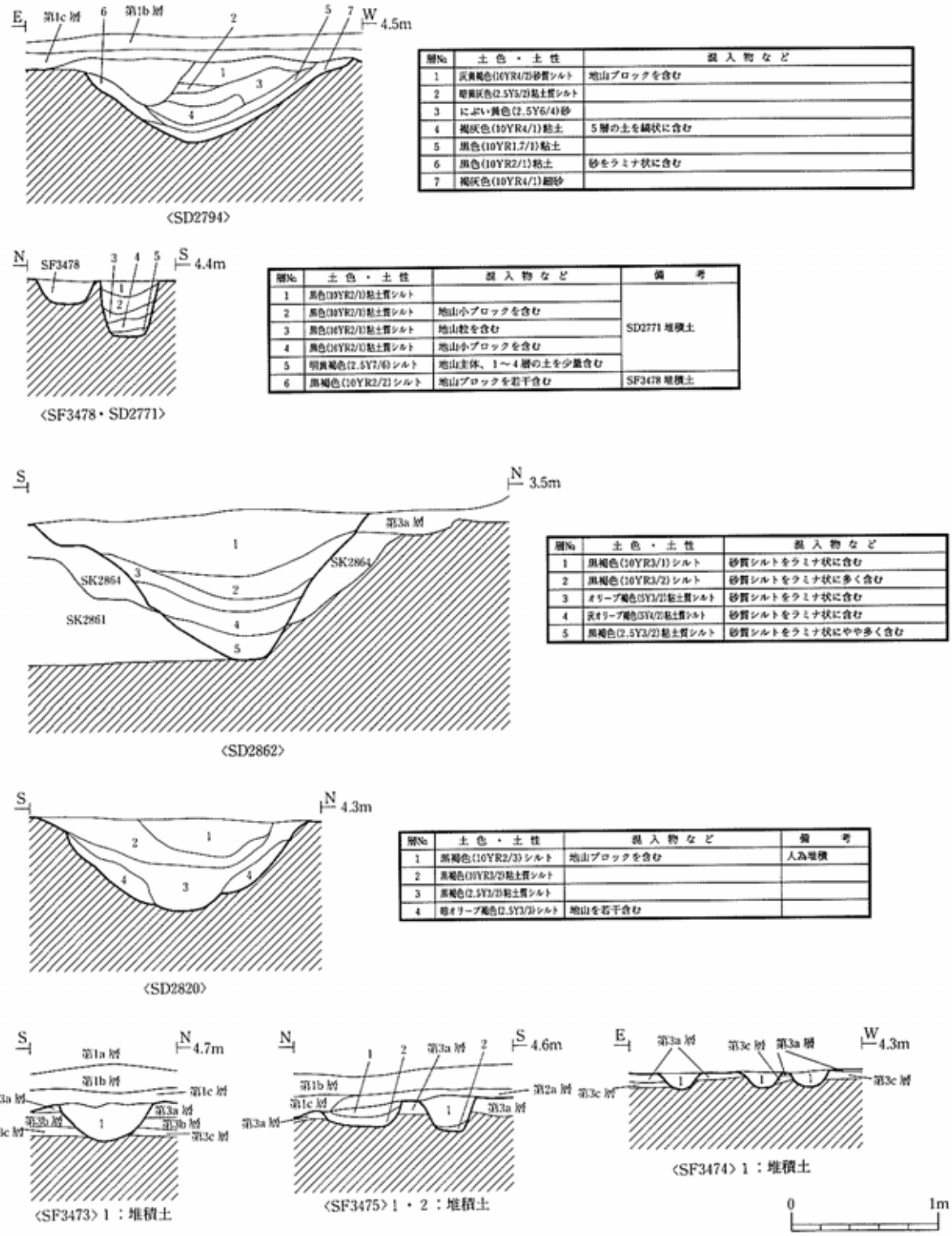
調査区全域にわたり、何条も平行に延びる小溝群を検出している。幅や深さにばらつきがあり、第 4 層で確認しているものがほとんどのため、断続的に残る部分もある。これらは畑跡と考えられ、並び・方向・重複関係から、以下の 9 グループに分けられる。

ＳＦ3471 小溝状遺構群（第 93 図）

調査区中央で検出した東西方向に平行して延びる小溝群である。ＳＢ3420・3425 建物跡、ＳＫ3123 土壙、ＳＤ3131 溝跡、ＳＦ3472・3473 小溝状遺構群より新しい。

検出長は最長 9.6mで、1.2～1.6m間隔で 4 条確認している。上幅は 0.2～0.4m、底面幅は 0.1～0.3m、深さは 0.1mある。底面には凹凸があり、断面形は「Ｕ」字形である。方向は最も北のものがＥ8°Ｓ、最も南のものがＥ2°Ｎであり、他の小溝はこの間におさまる。堆積土はオリーブ黒色～暗灰黄色シルト質粘土である。

遺物は堆積土から土師器坏・甕、須恵器坏・甕、赤焼土器坏、軒丸瓦・平瓦が出土している。赤焼土器坏の胎土は粗く、砂粒が目立つ。



層No	土色・土性	混入物など
1	灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルト	地山ブロックを含む
2	暗黄灰色(2.5Y5/2)粘土質シルト	
3	にぶい黄色(2.5Y6/4)砂	
4	褐灰色(10YR4/1)粘土	5層の土を縞状に含む
5	黒色(10YR1.7/1)粘土	
6	黒色(10YR2/1)粘土	砂をラミナ状に含む
7	褐灰色(10YR4/1)細砂	

層No	土色・土性	混入物など	備考
1	黒色(10YR2/1)粘土質シルト		SD2771 堆積土
2	黒色(10YR2/1)粘土質シルト	地山小ブロックを含む	
3	黒色(10YR2/1)粘土質シルト	地山粒を含む	
4	黒色(10YR2/1)粘土質シルト	地山小ブロックを含む	
5	明黄褐色(2.5Y7/6)シルト	地山主体、1～4層の土を少量含む	
6	黒褐色(10YR2/2)シルト	地山ブロックを若干含む	SF3478 堆積土

層No	土色・土性	混入物など
1	黒褐色(10YR3/1)シルト	砂質シルトをラミナ状に含む
2	黒褐色(10YR3/2)シルト	砂質シルトをラミナ状に多く含む
3	オリーブ褐色(5Y3/2)粘土質シルト	砂質シルトをラミナ状に含む
4	灰オリーブ褐色(5Y4/2)粘土質シルト	砂質シルトをラミナ状に含む
5	黒褐色(2.5Y3/2)粘土質シルト	砂質シルトをラミナ状にやや多く含む

層No	土色・土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR2/3)シルト	地山ブロックを含む	人為堆積
2	黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト		
3	黒褐色(2.5Y3/2)粘土質シルト		
4	暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト	地山を若干含む	

第92図　SD2771・2794・2820・2862 溝跡、SF3473～3475・3478 小溝状遺構群断面図

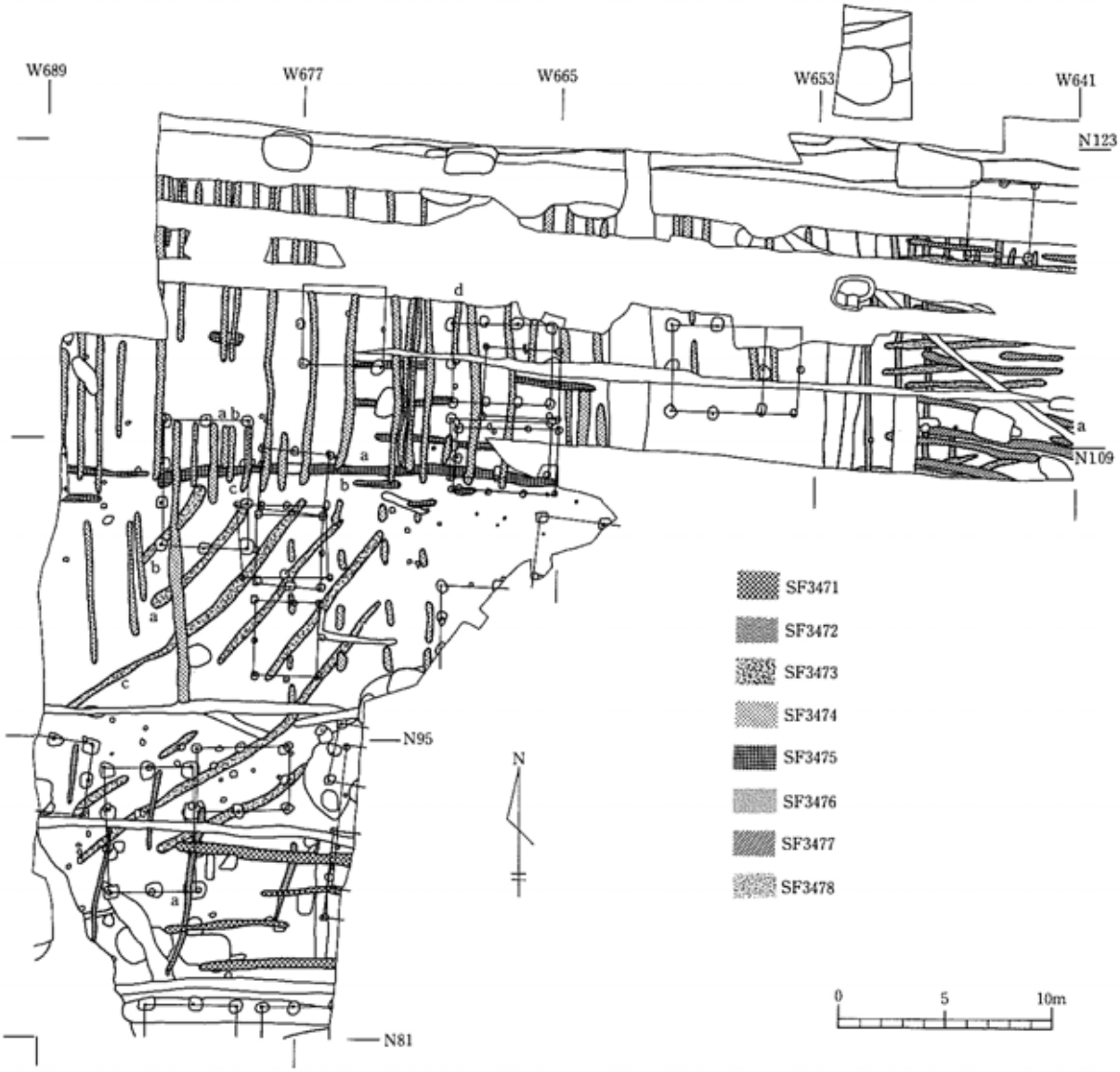
ＳＦ3472 小溝状遺構群（第 93 図）

調査区中央で検出した南北方向に平行して延びる小溝群である。ＳＢ3424・3425 建物跡、ＳＫ3123 土壙、ＳＤ3140 溝跡、ＳＦ3473 小溝状遺構群より新しく、ＳＤ3120 溝跡、ＳＦ3471 小溝状遺構群より古い。長短含めて５条検出している。長さ 10m分を確認した。

検出長は最長 10mで、間隔は 1.8～2.0mとみられ５条確認している。上幅は 0.2～0.3m、底面幅は 0.1～0.2m、深さは 0.1mある。底面には凹凸があり、断面形はゆるやかな「U」字形である。方向はN11°Ｅ前後である。堆積土は黒色～黄灰色の粘土ないしシルトで、部分的に地山を含む。遺物は堆積土から、ヘラ切りの須恵器坏が微量出土している。

ＳＦ3473 小溝状遺構群（第 92・93 図）

調査区中央の第３ａ層で検出した北東から南西方向に平行して延びる小溝群である。ＳＢ2890・



第93図　Ⅺ区北部西側の小溝状遺構群

3423・3424・3425・3427・3436・3437・3438 建物跡、ＳD3120・3179 溝跡、ＳＦ3471・3472・3474 小溝状遺構群より古い。

検出長は最長 19.8mで、1.5～2.0m間隔で 7 条確認している。上幅は 0.4～0.6m、底面幅は 0.1～0.4m、深さは0.3mある。底面には凹凸があり、断面形は「U」字形である。方向はN36°Ｅ～N55°Ｅである。堆積土は黒色～オリーブ黒色シルト質粘土で、部分的に地山を含む。遺物は出土していない。

ＳＦ3414 小溝状遺構群（第 92・93 図）

調査区北部西側の第 3ａ層で検出した南北方向に平行して延びる小溝群である。ＳB2886・2887・2890・3426・3436・3438 建物跡、ＳK2793 土壙、ＳＦ3473・3475 小溝状遺構群より新しく、ＳK2860 土壙より古い。

検出長は最長12.2mで、間隔は0.1～0.6mとみられ、37 条確認している。上幅は0.3～0.6m、底面幅は 0.1～0.4m、深さは 0.3mある。方向はN1°Ｅ前後である。底面には激しい凹凸があり、断面形はおおむね「U」字形である。堆積土は地山ブロックを含む黒色粘土で、底面近くでは地山の割合が多い。遺物は堆積土から土師器坏・甕、須恵器坏、赤焼土器坏、瓦が少量出土している。

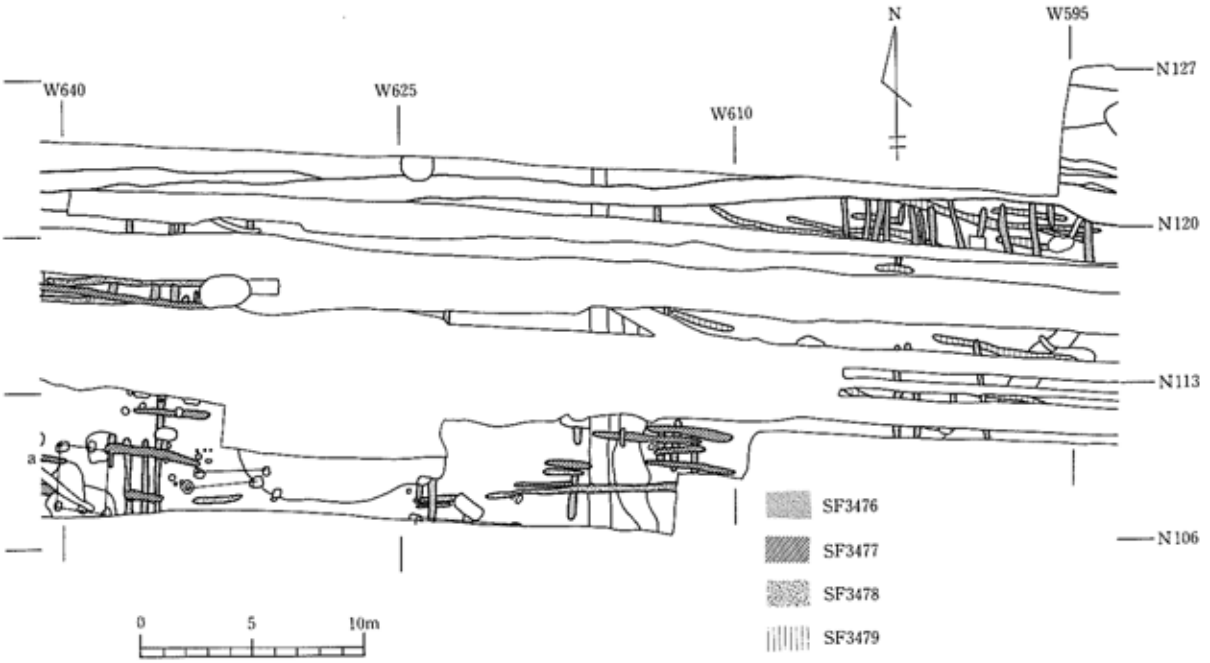
ＳＦ3475 小溝状遺構群（第 92・93 図）

調査区北部西側の第 3ａ層で検出した東西方向に平行して延びる小溝群である。ＳB2886・2887・2888・2890・3426 建物跡、ＳK2793 土壙より新しく、ＳB2889 建物跡、ＳＦ3474 小溝状遺構群より古い。

検出長は最長 12.2mで、1.3～1.5m間隔で 7 条確認している。上幅は 0.4～0.6m、底面幅は 0.1～0.4m、深さは 0.3mある。方向はE1°Ｓ前後である。底面には凹凸があり、断面形は「U」字形である。堆積土は黒褐色シルト質粘土で、底面近くに地山ブロックを含む。遺物は出土していない。

ＳＦ3476 小溝状遺構群（第 93・94 図）

Ｔ調査区北部中央から東側で検出した南北方向に平行して延びる小溝群である。ＳB2884 建物跡、Ｓ



第94図　XI区北部東側の小溝状遺構群

Ｆ3479 小溝状遺構群より新しく、ＳＢ2883 建物跡、ＳＫ2790 土壙、ＳＤ2771・2816Ａ・Ｂ溝跡、ＳＦ3477・3478 小溝状遺構群より古い。

検出長は最長 13.2mで、0.1～0.4m間隔で 40 条確認している。ただしW606～616 間とW624～635 間には認められなかったので、これを境により細かいグループに分かれる可能性がある。上幅は 0.3m前後、底面幅は 0.1～0.2m、深さは 0.2mある。方向はほぼ真北を向く。底面には凹凸があり、断面形は「U」字形である。堆積土は地山ブロックを少量含む黒褐色シルトである。遺物は堆積土から須恵器坏、土師器甕が微量出土している。

ＳＦ3477 小溝状遺構群（第 93・94 図）

調査区北部中央から東側で検出した東西方向に平行して延びる小溝群である。ＳＢ2884 建物跡、ＳＫ2763 土壙、ＳＦ3476・3478 小溝状遺構群より新しく、ＳＫ2774 土壙、ＳＤ2771 溝跡より古い。

検出長は最長 39.2mで、0.2～0.5m間隔で 11 条確認している。ただしW620～633 間には認められなかったので、これを境により細かいグループに分かれる可能性がある。上幅は 0.3m前後、底面幅は 0.1～0.2m、深さは 0.2mある。方向はＥ9°Ｓ前後である。底面には凹凸があり、断面形は「U」字形である。堆積土は、地山ブロックを少量含む黒褐色シルトである。遺物は堆積土からロクロ調整の土師器甕、ヘラ切りの須恵器坏（第 91 図 8）、須恵器甕や瓦が少量出土している。

ＳＦ3478 小溝状遺構群（第 92・93・94 図）

調査区北部中央から東側で検出した東西方向に平行して延びる小溝群である。ＳＦ3476 小溝状遺構群より新しく、ＳＤ2771 溝跡、ＳＦ3477 小溝状遺構群より古い。

検出長は最長 37.6mで、0.5m前後の間隔で 12 条確認している。ただしW624～630 間には認められなかったので、ここを境により細かいグループに分かれる可能性がある。上幅は 0.3m、底面幅は 0.1～0.2m、深さは 0.1mある。方向はほぼ真東を向く。底面には凹凸があり、断面形は「U」字形である。堆積土は地山ブロックを少量含む黒褐色シルトである。遺物は堆積土から須恵器坏、土師器坏や平瓦が少量出土している。

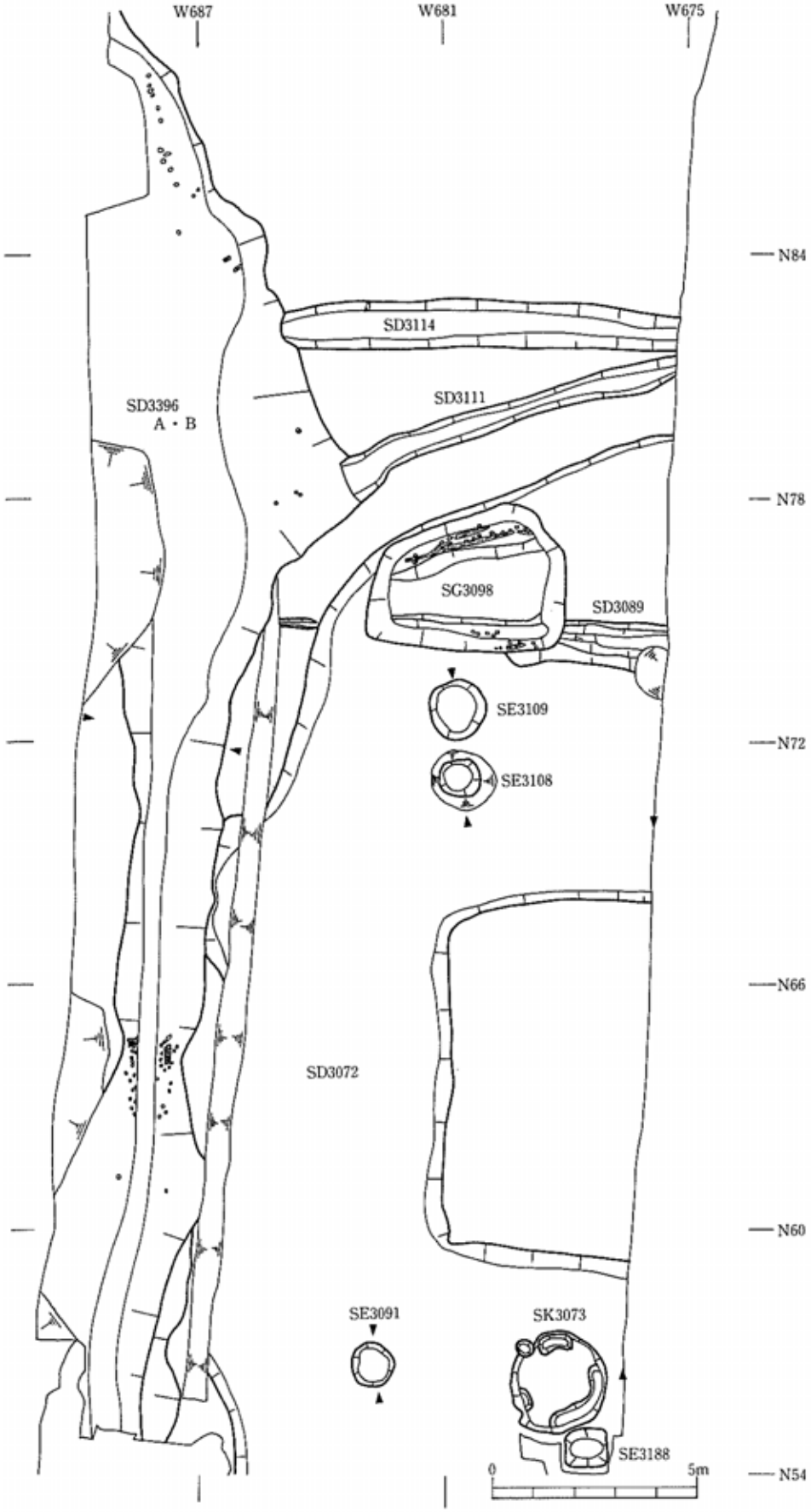
ＳＦ3479 小溝状遺構群（第 94 図）

調査区北部東端付近で検出した東西方向に平行して延びる小溝群である。ＳＦ2816Ｂ溝跡、ＳＦ3476 小溝状遺構群より古い。

検出長は最長 18mで、間隔は 0.2～0.5mとみられ、12 条確認している。上幅は 0.2m、底面幅は 0.1m前後、深さは 0.2mある。方向はＥ11°Ｓ前後である。底面は凹凸があり、断面形は「U」字形である。堆積土は地山ブロックを少量含む灰黄褐色粘土質シルトである。遺物は出土していない。

2．江戸時代以降

主な検出遺構としては区画溝跡 3、井戸跡 4、土壙 1、溝跡 2、池跡 1 がある（第 95 図）。確認面はXII区と同様に第 4 層である。遺構はXII区と比較して希薄で、XII区南側に多くみられた掘立柱建物跡は 1 棟もなく、調査区中央から南側に井戸跡、土壙、溝跡などが疎らに分布する。出土遺物は陶磁器・土製品・木製品・金属製品などがある。



第95図　XI区の検出遺構〔江戸時代以降〕

（1）井戸跡

井戸跡は4基検出している。すべて素掘りの井戸である。

ＳＥ3188 井戸跡（第95図）

調査区南側のＳＤ3072 溝跡底面の地山で検出した素掘りの井戸跡である。平面形は隅丸方形をなし、一辺1.0mほどで、深さ1.5mである。断面形は布掘状である。堆積土は地山ブロックを大量に含むオリーブ黒色粘土質シルトで人為堆積とみられる。遺物は出土していない。

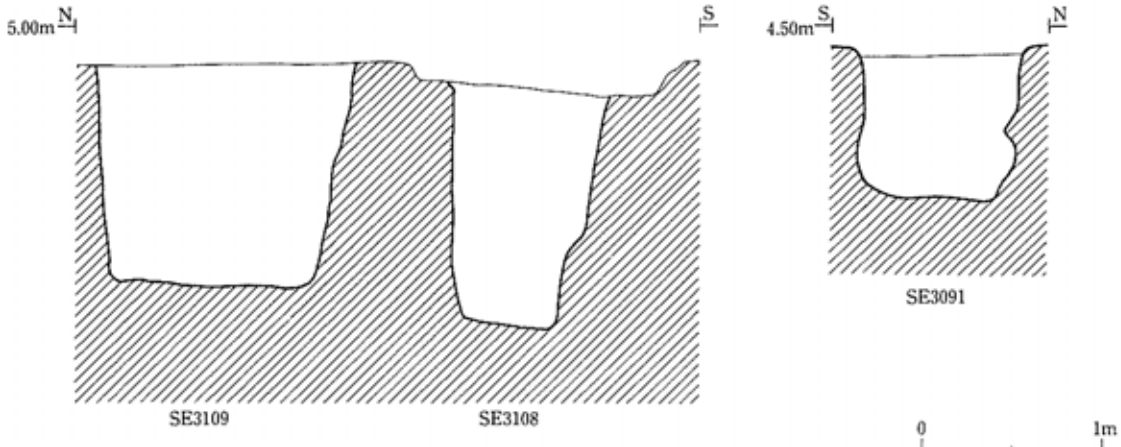
ＳＥ3091 井戸跡（第95・96図）

調査区南側のＳＤ3072 溝跡底面の地山で検出した素掘りの井戸跡である。平面形は円形をなし、径1.0m、深さ0.9mである。断面形は布掘状である。堆積土は地山ブロックを含む黒褐色粘土で人為堆積とみられる。

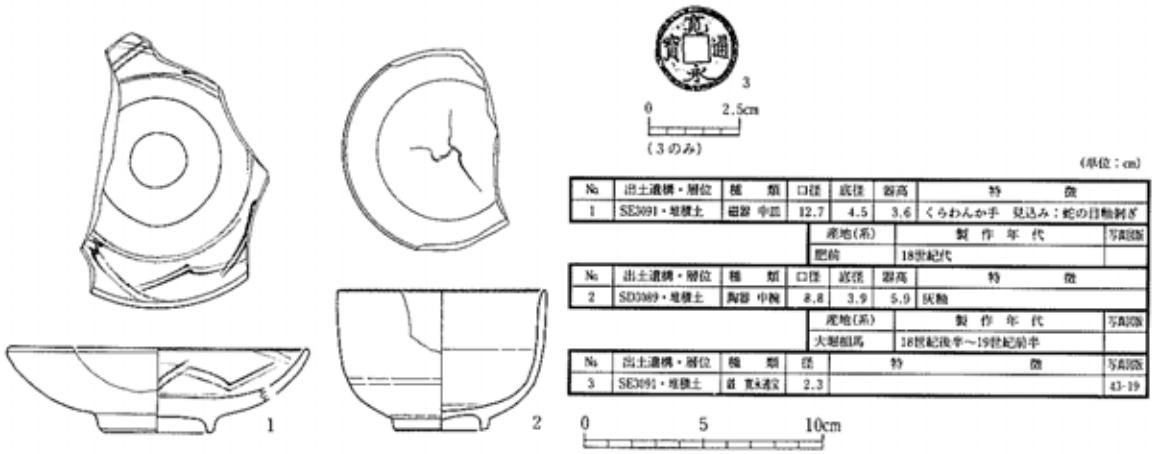
遺物は、堆積土中から肥前産のいわゆるくらわんか手の18世紀代の磁器中皿（第97図1）、寛永通宝（第97図3）が出土している。

ＳＥ3108 井戸跡（第95・96図）

調査区中央部のＳＤ3072 溝跡検出面で確認した素掘りの井戸跡である。ＳＢ3413 建物跡より新しい。平面形は上部を攪乱により壊されているが、底面近くでは径が 0.9mの円形である。深さは 1.5mある。



第96図　SE3091・3108・3109 井戸跡断面図



№	出土遺構・層位	種　類	口径	底径	器高	特　徴
1	SE3091・堆積土	磁器 中皿	12.7	4.5	3.6	くらわんか手　見込み：蛇の目釉剥ぎ

産地(系)	製作年代	写真図版
肥前	18世紀代	

№	出土遺構・層位	種　類	口径	底径	器高	特　徴
2	SD3089・堆積土	陶器 中鉢	8.8	3.9	5.9	灰釉

産地(系)	製作年代	写真図版
大堀相馬	18世紀後半～19世紀前半	

№	出土遺構・層位	種　類	径	特　徴	写真図版
3	SE3091・堆積土	銭 寛永通宝	2.3		43-19

第97図　SE3091 井戸跡、SD3089 溝跡出土遺物

断面形は布掘状である。堆積土は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトで人為堆積土とみられる。遺物は出土していない。

ＳＥ3109 井戸跡（第 95・96 図）

調査区中央部のＳD3072 溝跡検出面で確認した素掘りの井戸跡である。ＳB3413・3415 建物跡より新しい。平面形は円形をなし、径 1.4m、深さ 1.2mである。断面形は布掘状である。堆積土は地山ブロックを多く含むオリーブ黒色粘土質シルトで人為堆積とみられる。

遺物は堆積土中から産地・時期が不明のすり鉢が出土している。

（2）土壙

ＳK3073 土壙（第 95 図）

調査区南側のＳD3072 溝跡検出面で確認した土壙である。平面形は不整円形をなし、径 2.5mほどで、深さ 0.2mである。断面形は両端が溝状に窪む皿状である。堆積土は 2 層に分けられ、下層は地山ブロックを含む粘土、土層は黒色粘土である。下層より産地不明で 19 世紀後半以降の磁器が出土している。

（3）池跡及び関連施設

ＳG3098 池跡（第 99 図）

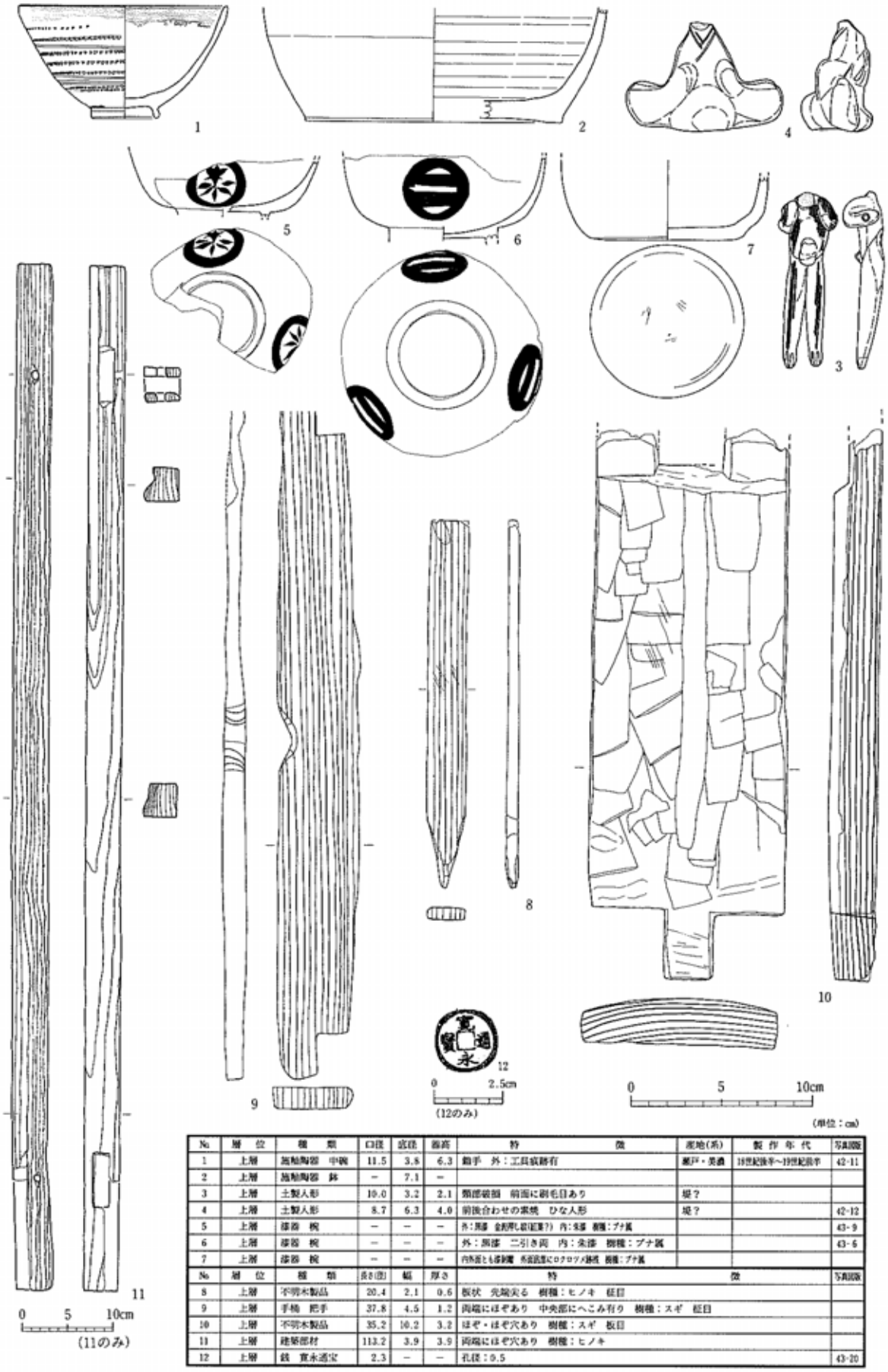
調査区南側のＳD3072 溝跡検出面で確認した南北に護岸をともなう池跡である。ＳB3415・3417・3419 建物跡、ＳK3124 土壙より新しい。平面形は不整長方形をなし、東西 4.5m、南北 2.3～3.7mで、深さは 0.5mある。底面はほぼ平坦で、東西の壁は緩やかに立ち上がる。これに対し南北壁は急に立ち上がり、一旦平坦面を形成したのち比較的緩やかに立ち上がる。護岸施設はこの平坦面および上位の壁で認められる。残りの良いところでみると、杭を打ち込み、枝や廃材を絡ませている（写真図版 18）。堆積土は 2 層に分けられ、下層が黒褐色粘土、上層が黒色粘土であり自然堆積土とみられる。

遺物は上層から瀬戸美濃産の 18 世紀後半～19 世紀前半の鎧手碗（1）、堤産の素焼きの雛人形が出土している（4）。木製品は漆器椀（5・6・7）、手桶把手（9）、建築部材（11）、不明品（8・10）が出土しており、漆器椀がブナ属、手桶把手がスギ、建築部材がヒノキ、不明品はヒノキ・スギとわかった（第 98 図）。

〈関連施設〉（第 99 図）

ＳD3089 溝跡はＳG3098 池跡の南東部に接続する東西溝跡で、長さ 3.1m分を確認した。上端幅 1.0m、底面幅 0.1～0.4m（接続部分 0.1～0.2m）、深さは接続部分が 0.3m、調査区の際で 0.5mある。方向は溝の心心で測るとＥ4°Ｓである。底面は他との接続部分が最も浅く、東へ傾斜している。底面幅も東へ向かって広がる。堆積土は 2 層に分けられ、下層が黒色粘土、上層が黒褐色粘土であり、ＳG3098 池跡の堆積土と共通する。遺物は堆積土から大堀相馬産 18 世紀後半～19 世紀前半の陶器中碗が出土している。

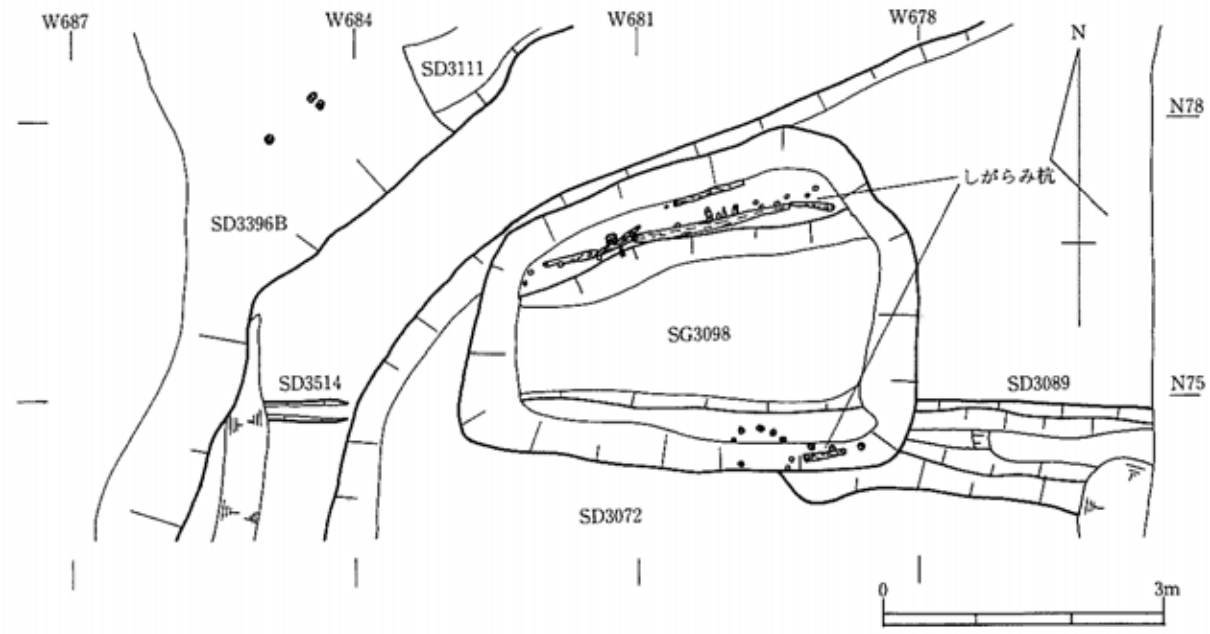
ＳD3514 溝跡は木製の樋を据えた東西溝跡で、長さ 4.6mを確認した。遺存状況は極めて悪い。残存している部分でみると、樋は上端幅 20 ㎝、底面幅 7cm、深さ 2 ㎝である。方向は心心で測るとＥ5°Ｓで



No.	層位	種類	口径	底径	器高	特徴	産地(系)	製作年代	写真図版
1	上層	施釉陶器 中碗	11.5	3.8	6.3	鉄手 外：工具痕跡有	瀬戸・美濃	18世紀後半～19世紀前半	42-11
2	上層	施釉陶器 鉢	－	7.1	－				
3	上層	土製人形	10.0	3.2	2.1	頭部破損 前面に刷毛目あり	堤？		
4	上層	土製人形	8.7	6.3	4.0	前後合わせの素焼 ひな人形	堤？		42-12
5	上層	漆器 椀	－	－	－	外：黒漆 金銀押し絵(紅葉?) 内：朱漆 樹種：ブナ属			43-9
6	上層	漆器 椀	－	－	－	外：黒漆 二引き両 内：朱漆 樹種：ブナ属			43-6
7	上層	漆器 椀	－	－	－	内外面とも漆刷毛 外面底部にロクロツメ跡痕 樹種：ブナ属			

No.	層位	種類	長さ(図)	幅	厚さ	特徴	写真図版
8	上層	不明木製品	20.4	2.1	0.6	板状 先端尖る 樹種：ヒノキ 柾目	
9	上層	手桶 把手	37.8	4.5	1.2	両端にほぞあり 中央部にへこみ有り 樹種：スギ 柾目	
10	上層	不明木製品	35.2	10.2	3.2	ほぞ・ほぞ穴あり 樹種：スギ 板目	
11	上層	建築部材	113.2	3.9	3.9	両端にほぞ穴あり 樹種：ヒノキ	
12	上層	銭 寛永通宝	2.3	－	－	孔径：0.5	43-20

第98図　SG3098 池跡出土遺物



第99図　SG3098 池跡、SD3089・3514 溝跡

ある。断面形は浅い皿形をなし、底面は東へ傾く。樋上部の堆積土は黒褐色シルトである。掘方は上端幅30㎝、底面幅8㎝、深さ7㎝で、断面形は浅い皿形である。埋土は地山粒を若干含む黒褐色シルトである。木製の樋は、上部に蓋がありその中を水が流れたと思われる。

ＳD3514はＳD3396Ａ・Ｂ区画溝跡とＳG3098池跡の間に位置し、ＳD3089はＳG3098の南西部に接続し、両者とも底面は東に傾斜している。したがって、ＳG3098池はＳD3396区画溝からＳD3514樋によって水を引き込み、余水をＳD3089溝から外部へ流していたと考えられる。

（4）溝跡

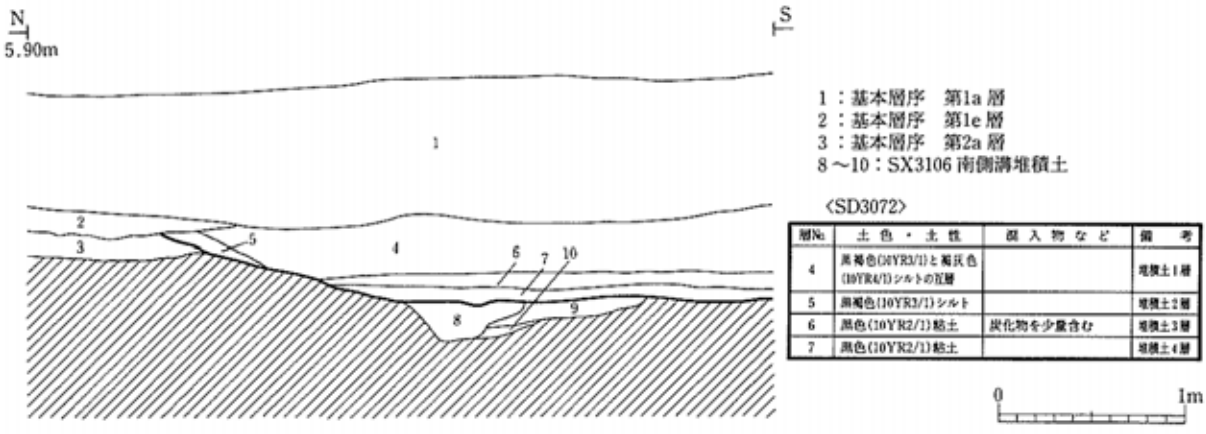
区画溝跡3条、溝跡2条を検出した。このうちＳD3396Ａ・Ｂ区画溝跡についてはXII区の事実記載で述べている。

ＳD3072区画溝跡（第95・100図）

調査区南側で検出した「コ」の字状の区画溝跡である。ＳＩ3525住居跡、ＳB3411～3418建物跡、ＳE3091井戸跡、ＳK3124土壙、ＳX3106東西道路跡より新しく、ＳD3396Ａ・Ｂ区画溝跡、ＳD3089溝跡、ＳE3108・3109井戸跡、ＳK3073土壙、ＳG3098池跡より古い。上端幅5.6m～11.6m、底面幅5.0m～11.0m、深さ0.5mである。底面はほぼ平坦で、断面形は浅い皿形である。

堆積土は4層に分けられる。4層は黒色粘土、3層は炭化物を含む黒色粘土、2層は黒褐色シルト、1層は黒褐色シルトと褐色シルトの互層である。いずれも自然堆積土とみられる。区画内部は方形で、規模は東西8.6m以上、南北4.8mある。この部分で遺構を確認していないため、内部の様子については不明である。

堆積土から肥前産の磁器、18世紀代の大掘相馬・瀬戸美濃・志野・唐津産の陶器、モモの種子が出土している。



〈SD3072〉

層No.	土色・土性	混入物など	備考
4	黒褐色(10YR3/1)と褐灰色(10YR4/1)シルトの互層		堆積土1層
5	黒褐色(10YR3/1)シルト		堆積土2層
6	黒色(10YR2/1)粘土	炭化物を少量含む	堆積土3層
7	黒色(10YR2/1)粘土		堆積土4層

第100図　SD3072 溝跡断面図

ＳＤ3111 溝跡（第 95 図）

調査区中央部で検出した東西溝跡で、長さ 8.5m分を確認している。ＳＢ3417・3418・3419 建物跡、ＳＤ3112 溝跡より新しく、ＳＤ3396Ｂ区画溝跡に接続する。上端幅 0.4m、底面幅 0.2mであるが、ＳＤ3396Ｂと接続する部分では上端幅 1.1m、底面幅 0.8mと広くなる。方向は溝の心心で測るとＥ18°Ｎである。底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形をなす。堆積土は 3 層に分けられる。下層が黒褐色シルト、中層は褐灰色粘土、上層が黒褐色粘土で自然堆積土とみられる。

堆積土から産地・時期不明の陶器が出土している。

ＳＤ3114 溝跡（第 95 図）

調査区中央部で検出した東西溝跡で、長さ 9.8m分を確認している。ＳＢ3417・3418・3419 建物跡より新しく、ＳＤ3396Ｂ区画溝跡より古い。上端幅 1.1m、底面幅 0.2～0.7mで、深さは 0.3mである。方向は溝の心心で測るとＥ1°Ｓである。断面形は船底形である。堆積土は 2 層に分けられ、下層は砂を少量含む黒色粘土、上層は黒褐色粘土と細砂の互層である。

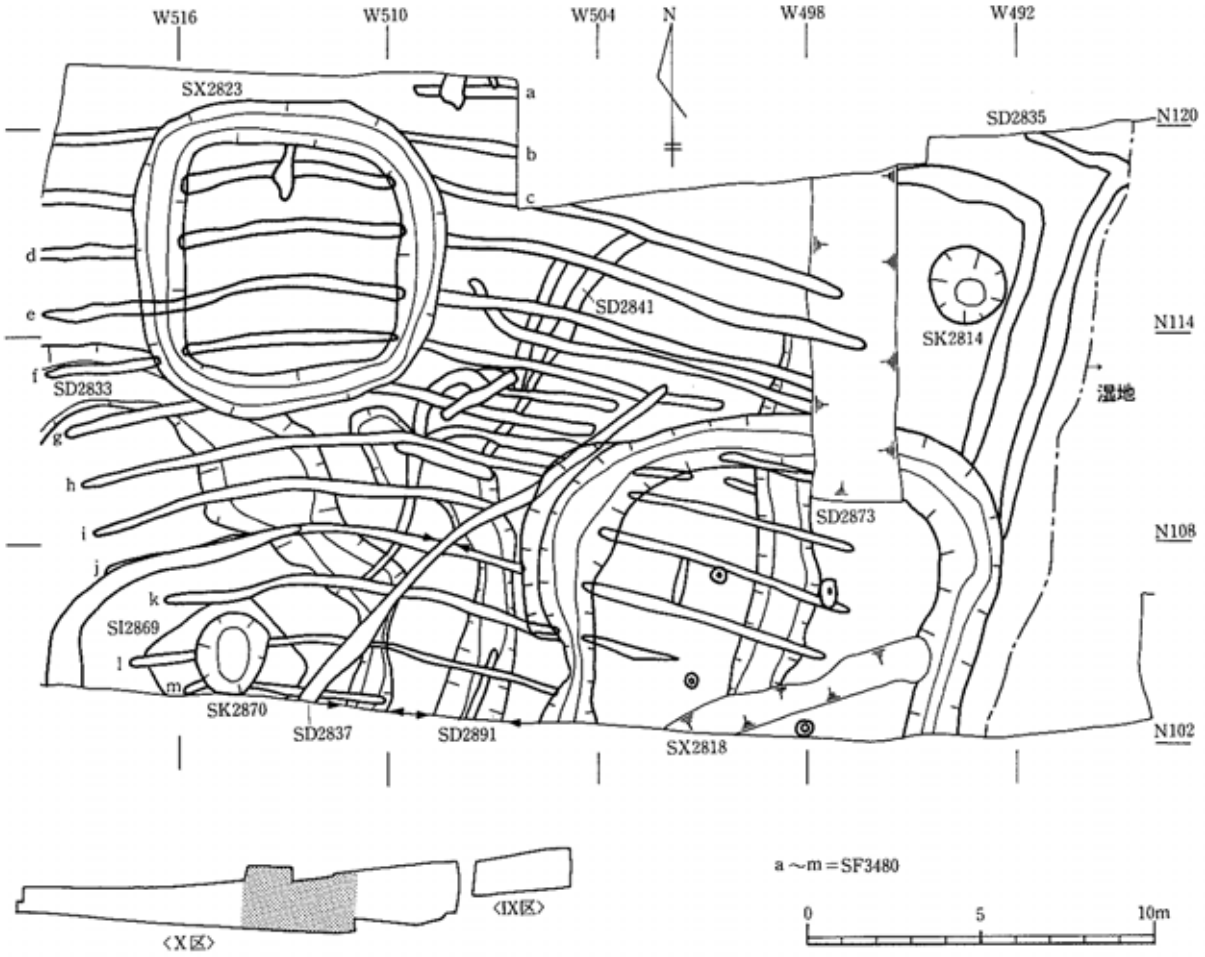
遺物は上層から産地・時期が不明の陶磁器、モモの種子が出土している。

Ｃ．Ⅸ・Ⅹ区

Ⅸ・Ⅹ区で発見した遺構は第 4 層と第 5 層のものがある。時期は前者が出土した土師器・須恵器の特徴から奈良・平安時代以降、後者は出土した土師器の特徴から古墳時代前期と考えられる。まず古墳時代前期について述べ、つづいて奈良・平安時代以降について記述する。

1．古墳時代前期

古墳時代前期の主な遺構には方形周溝墓 2、竪穴住居跡 1、掘立柱建物跡 1、土壙 2、溝跡 4、小溝状遺構群 1、水田跡 1 などがある。すべて第 5 層で検出した。Ⅹ区中央から東側は、南の自然堤防からやせ尾根が北へ張り出した微高地（標高：3.9m）となっており、そこに遺構が集中している。（第 101 図）。水田跡は微高地の西、Ⅹ区西側からⅪ区北部東側に認められる（標高：3.1～3.5m）。出土遺物には土師器・土製品・植物遺体がある。



第101図　X区中央部の遺構（古墳時代前期）

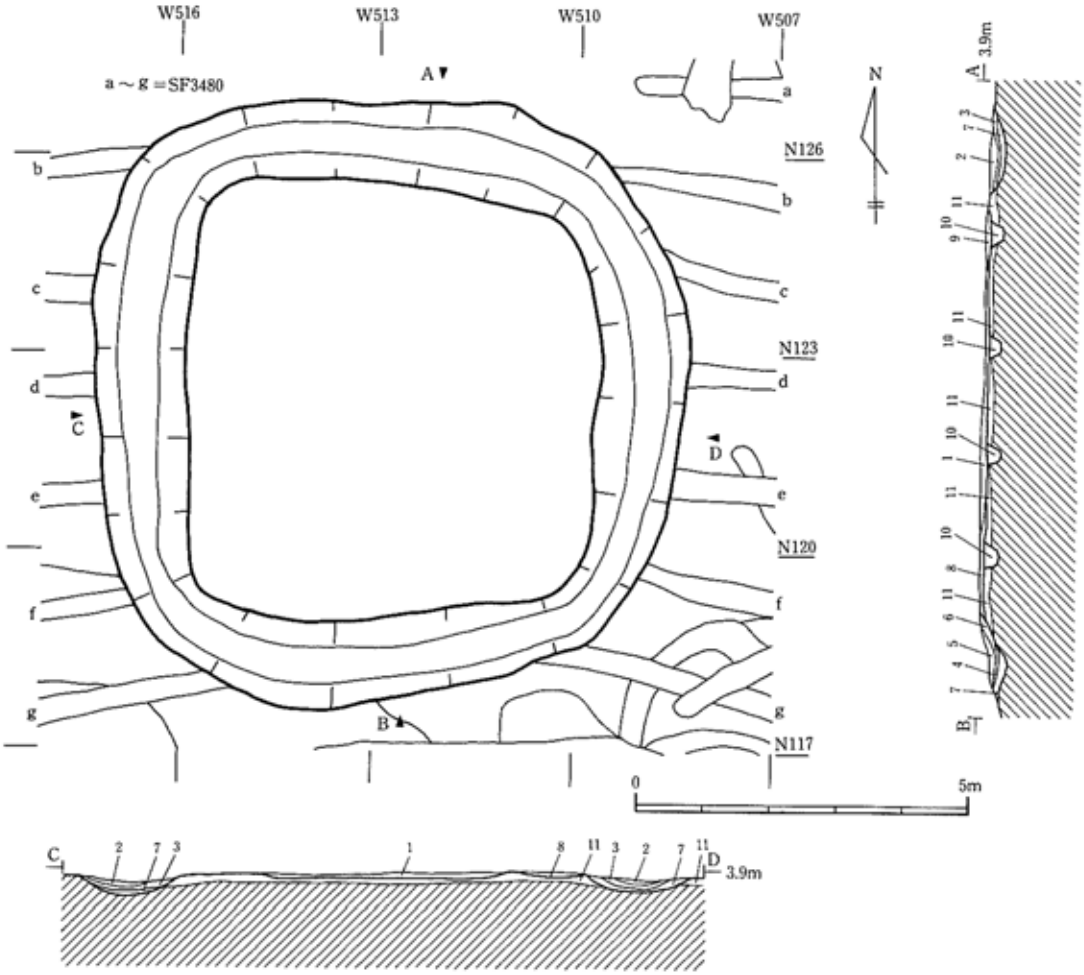
（1）方形周溝墓

ＳＸ2823 方形周溝墓（第 102 図）

Ｘ区中央で検出した方形周溝墓である。ＳＤ2833 溝跡、ＳＦ3480 小溝状遺構群より新しい。周溝を含めた全体の規模は東西・南北とも 8.9mの隅丸方形である。周溝内部の平面形は隅丸方形で、規模は東西 6.1m、南北 6.5mある。方向は周構内部の西辺で測るとほぼ真北を向く。

周溝は上幅が 1.0～1.5m、底面幅が 0.5～0.8m、深さ 0.3mある。底面はほぼ平坦で、ブリッジ状の高まりはない。壁は外側はゆるやかに立ち上がるが、内側はこれと比較してやや急に立ち上がる。堆積土は 3～4 層に分けられたが、2 層に大別が可能で自然堆積とみられる。2 層は灰黄褐色～黒色の砂質もしくは粘土質シルトである。1 層は明黄褐色粘土で、基本層位第 4b 層に対応する。

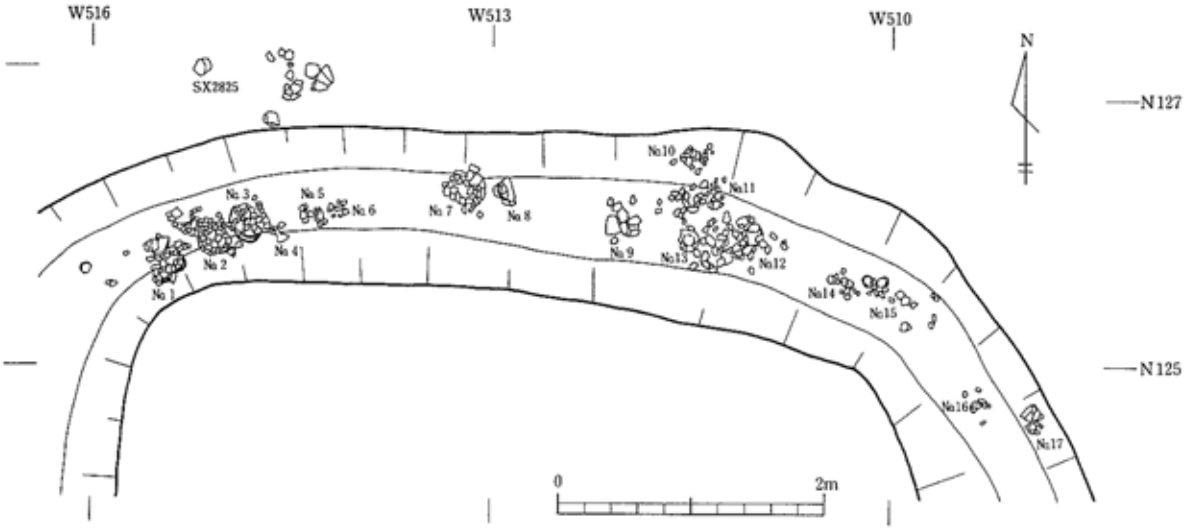
周溝内部の第 5 層（旧表土）の上に土層を確認している。2 層に分けられ、それぞれ暗褐色砂質シルトとにぶい黄褐色シルトであり、これらは方形周溝墓の積み土の一部であると考えられる。
遺物は周溝北側の底面付近からまとまって出土しており、いずれも積み土の崩壊とともに内側から周溝内へ転げ落ちたものとみられる（第 103 図）。土師器坏（第 104 図 1～3、10～12）・器台（第 104 図 4～9）・高坏（第 104 図 13）・甕（第 104 図 15・16、第 105 図 2～6）・甑（第 105 図 1）があり、坏の法



層No	土色・土性	混入物など	備考
1	黒色(10YR2/1)粘土質シルト		第4f層
2	明黄褐色(10YR7/6)粘土		SX2823 周溝大別1層
3	黒色(10YR2/1)粘土質シルト	旧表土主体	SX2823 周溝大別2層
4	黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト	積み土崩壊土を多く含む	
5	灰黄褐色(10YR5/2)シルト	積み土崩壊土を多く含む	
6	にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質シルト		

層No	土色・土性	混入物など	備考
7	灰黄褐色(10YR6/2)シルト	炭化物粒を含む	SX2823 周溝大別2層
8	暗褐色(10YR3/2)砂質シルト		SX2823 積み土
9	にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト		
10	黒褐色(2.5Y3/1)シルト		SF3480 埋戻土
11	灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルト		第5層(旧表土)

第102図　SX2823 方形周溝墓

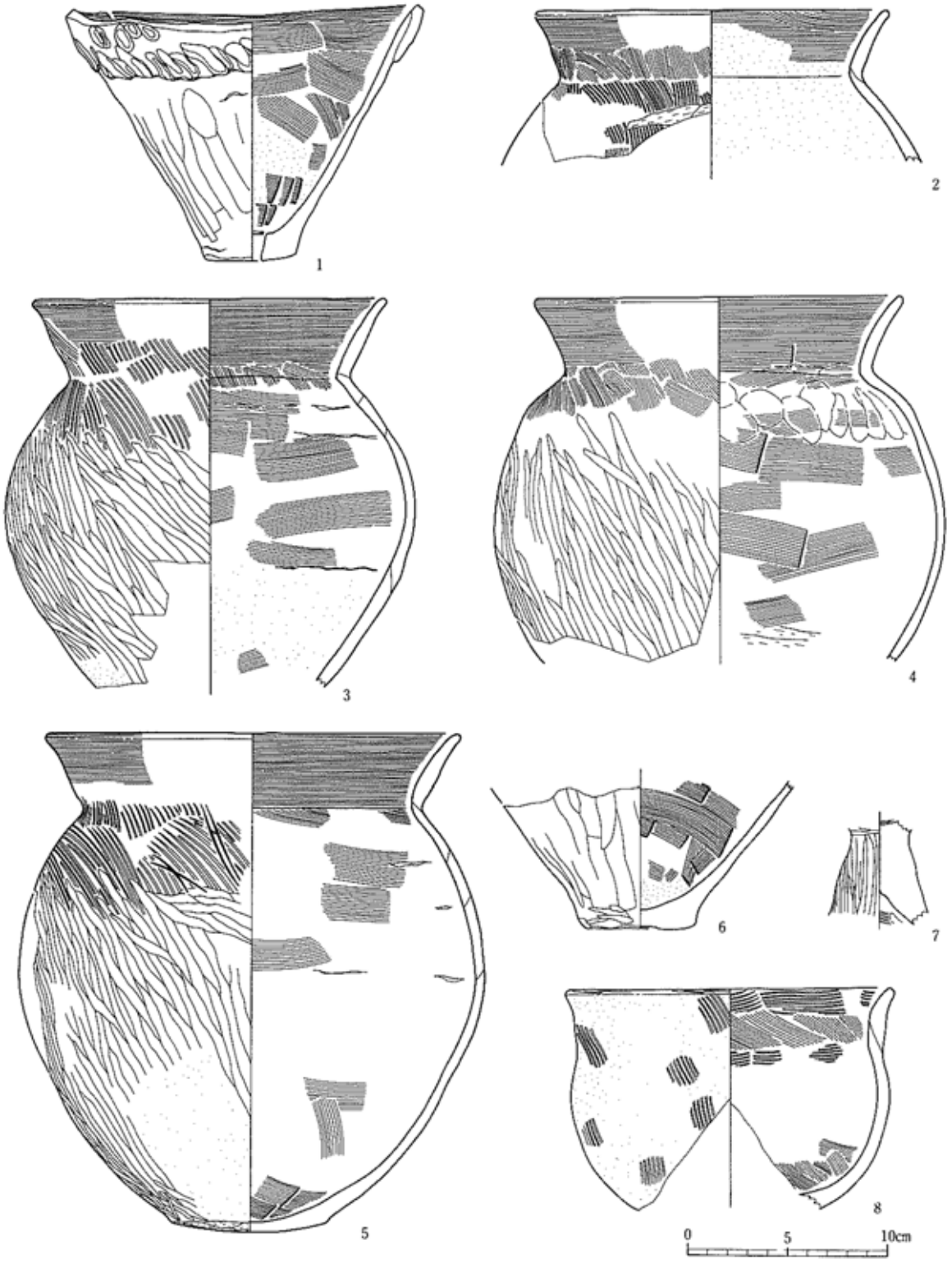


第103図　SX2823 方形周溝墓周溝北側の土器出土状況

（単位：cm）

№	種別	層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	写真図版
1	土師器・坏	周溝底面(№15)	外面：〔口〕ヘラミガキ〔体～底〕手持ちヘラケズリ→ヘラミガキ　内面：〔口〕ハケメ〔体～底〕ナデ→ヘラミガキ	(8.4)	3.0	(4.1)	3/5	26－4
2	土師器・坏	周溝底面(№15)	外面：〔口～体〕ヘラミガキ〔底〕ナデ　内面：〔口〕ヨコナデ→ヘラミガキ〔体～底〕ハケメ→ナデ	(10.2)	1.9	(5.2)	2/3	26－3
3	土師器・坏	周溝底面(№14)	外面：〔口～体〕ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ〔底〕凹底　ナデ？　内面：〔口〕ヨコナデ〔体～底〕ナデ	9.8	2.4	(7.2)	2/3	26－2
4	土師器・器台	溝底面(14+15+16)	外面：〔受け〕ヨコナデ、ヘラミガキ→円窓4(推定)〔脚〕ヘラミガキ　内面：〔受け〕ヨコナデ→ヘラミガキ→貫通孔〔脚〕ナデ	(7.1)	(8.3)	(7.6)	3/5	27－1
5	土師器・器台	周溝底面(№6)	外面：〔受け〕ヨコナデ、ヘラミガキ〔脚〕ヨコナデ、ヘラミガキ→円窓3　内面：〔受け〕ヨコナデ→ヘラミガキ→貫通孔〔脚〕ナデ、ヨコナデ	9.0	7.9	10.8	完形	26－8
6	土師器・器台	周溝底面(№5)	外面：〔受け〕ヨコナデ→ヘラミガキ〔脚〕ヨコナデ→ヘラミガキ→円窓5　内面：〔受け〕ヨコナデ→ヘラミガキ→貫通孔〔脚〕ナデ、ヨコナデ	8.4	9.1	9.4	ほぼ完形	27－2
7	土師器・器台	周溝底面(№4)	外面：〔受け〕ヨコナデ、ヘラミガキ〔脚〕ヨコナデ、ヘラミガキ→円窓4　内面：〔受け〕ヨコナデ→ヘラミガキ→貫通孔〔脚〕ヨコナデ→ナデ	8.4	8.8	9.4	ほぼ完形	26－9
8	土師器・器台	周溝底面(№16)	外面：ナデ　内面：ナデ	(8.5)	(10.2)	8.2	2/5	27－3
9	土師器・器台	周溝底面(№12)	外面：ナデ　内面：〔受け〕ヘラナデ、ナデ〔脚〕ヘラケズリ、ヘラナデ→ナデ	9.5	11.1	10.4	1/2	27－4
10	土師器・坏	周溝底面(№3)	外面：〔口～体〕ヘラケズリ→ヘラミガキ〔底〕ナデ？　内面：〔口〕ヘラミガキ〔体～底〕ヘラナデ→ヘラミガキ	16.4	2.6	(6.3)	4/5	26－5
11	土師器・坏	周溝底面(№9)	外面：〔口〕ヨコナデ→ヘラミガキ〔体〕ヘラミガキ〔底〕ナデ？　内面：〔口～体〕ハケメ→ヘラミガキ	18.5	3.8	(8.7)	2/3	26－6
12	土師器・坏	周溝底面(№1)	外面：〔口〕ヨコナデ、ハケメ→ヘラミガキ〔体～底〕ヘラミガキ　内面：〔口～底〕ヘラミガキ	(15.8)	6.0	(9.5)	1/2	26－7
13	土師器・高坏	周溝底面(№13)	外面：〔坏〕ハケメ、ヨコナデ→ヘラミガキ〔脚〕ヨコナデ→ヘラミガキ　内面：〔坏〕ヨコナデ、ハケメ→ヘラミガキ〔脚〕ヨコナデ	16.3	10.3	15.6	ほぼ完形	27－5
14	土師器・高坏	周溝・堆積土	外面：〔脚〕ヘラミガキ　内面：〔脚〕ハケメ→ナデ	－	－	－	一部	
15	土師器・壺	周溝底面(№9)	外面：〔口〕ヨコナデ、ハケメ→ナデ　内面：〔口〕ヨコナデ、ナデ	(14.9)	－	－	一部	
16	土師器・壺	周溝底面(№10)	外面：ヨコナデ→ヘラナデ　内面：ヨコナデ	(16.3)	－	－	一部	

第104図　SX2823 方形周溝墓出土遺物（1）



（単位：cm）

No	種別	層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	写真図版
1	土師器・甕	周溝底面(No.8)	単孔式　外面：〔口〕ナデ→指オサエ〔体～底〕ナデ　内面：〔口～体〕ヨコナデ、ヘラナデ	17.9	4.6	(12.5)	2/3	27－6
2	土師器・甕	周溝底面(No.17)	外面：〔口〕ヨコナデ→ナデ〔脚〕ハケメ→ナデ→ヘラケズリ　内面：〔口〕ヨコナデ	(17.6)	－	－	一部	
3	土師器・甕	周溝底面(No.7)	外面：〔口〕ヨコナデ→ハケメ〔脚〕ハケメ→ヘラミガキ　内面：〔口〕ヨコナデ〔脚〕ナデ	(17.8)	－	－	一部	27－7
4	土師器・甕	周溝底面(No.2+3)	外面：〔口〕ヨコナデ→ナデ〔脚〕ヘラケズリ？→ナデ、ヘラミガキ　内面：〔口〕ヨコナデ〔脚〕ヘラナデ、ヘラケズリ	(18.4)	－	－	一部	
5	土師器・甕	溝底面(No.11+12)	外面：〔口〕ヨコナデ〔脚〕ハケメ→ヘラミガキ〔底〕ヘラケズリ　内面：〔口〕ヨコナデ〔脚〕ナデ　外面にヘラ痕	(20.8)	(7.8)	25.1	3/5	27－8
6	土師器・甕	周溝底面(No.1)	外面：〔脚〕ナデ〔底〕凹底　ナデ？　内面：〔脚〕ヘラナデ	－	5.5	－	一部	
7	土師器・高坏	内部回収土(第5層)	赤彩(坏部内面、脚部外面)　外面：ヘラミガキ　内面：〔坏〕ヘラミガキ〔脚〕指オサエ→ナデ	－	－	－	一部	
8	土師器・坏	SX2825	外面：ハケメ　内面：〔口〕ハケメ→ナデ〔体〕ナデ	(16.5)	－	－	一部	

第105図　SX2823 方形周溝墓出土遺物（2）

量に大（第104図10〜12）・小（第104図1〜3）が認められ、器台は高坏形の精製品（第104図4〜7）と鼓形の粗製品（第104図8・9）がある。このほか、周溝堆積土から土師器坏・高坏（第104図14）・壷・甕が少量出土している。

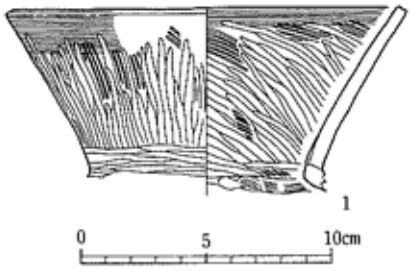
ＳＸ2818方形周溝墓（第107図）

Ｘ区中央から東よりで検出した方形周溝墓である。ＳＤ2935・2837・2873 溝跡、ＳＦ3480 小溝状遺構群より新しい。周溝を含めた全体の規模は東西13.8m、南北9.3m以上あり、周溝内部の平面形は隅丸方形とみられ、規模は東西9.4m、南北7.7m以上ある。方向は周溝内部の東辺で測るとN25°Ｅである。

周溝の上幅は1.5〜2.7m、底面幅は0.5〜0.8m、深さは0.6m前後である。一方、西辺中央付近は上幅1.0m、底面幅0.2mと狭くなり、深さも0.2mと浅くなる。底面は中央に向けてゆるやかに傾斜する。壁は外側がゆるやかに立ち上がるのに対し、内側は外側と比較してやや急に立ち上がる。堆積土は6層に分けられたが、2層に大別が可能である。2層は暗オリーブ褐色〜黒褐色のシルトもしくは粘土質シルトを主体とする。1層はＳＸ2823 と同様、第4ｂ層対応の明黄褐色粘土である。いずれも自然堆積とみられる。

周溝内部の第5層（旧表土）の上に土層を確認している。地山粒と炭化物を少し含んだ黒褐色シルトであり、方形周溝墓の積み土の一部と考えられる。

遺物は周溝堆積土から、土師器壷（第106図2）・甕が少量出土している。壷は単純口縁で、胴部に焼成後の盲孔が1個認められる。甕は胴部破片のみで、外面にハケメが施されている。また、積み土から単純口縁の土師器壷（第106図1）、複合口縁の土師器壷、土師器甑が少量出土している。



（単位：cm）

No.	種別	層位	特徴
1	土師器・壺	積み土	外面：ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ 内面：ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ、指オサエ→ナデ
2	土師器・壺	周溝堆積土	外面：（口）ヨコナデ、ハケメ→ヘラミガキ（体）ヘラミガキ、ハケメ→ヘラケズリ、丸れ 内面：（口）ヨコナデ、ハケメ→ヘラミガキ（体）ナデ

口径	底径	器高	残存率	写真図版
(16.0)	−	−	一部	
(14.3)	−	−	1/4	28−6

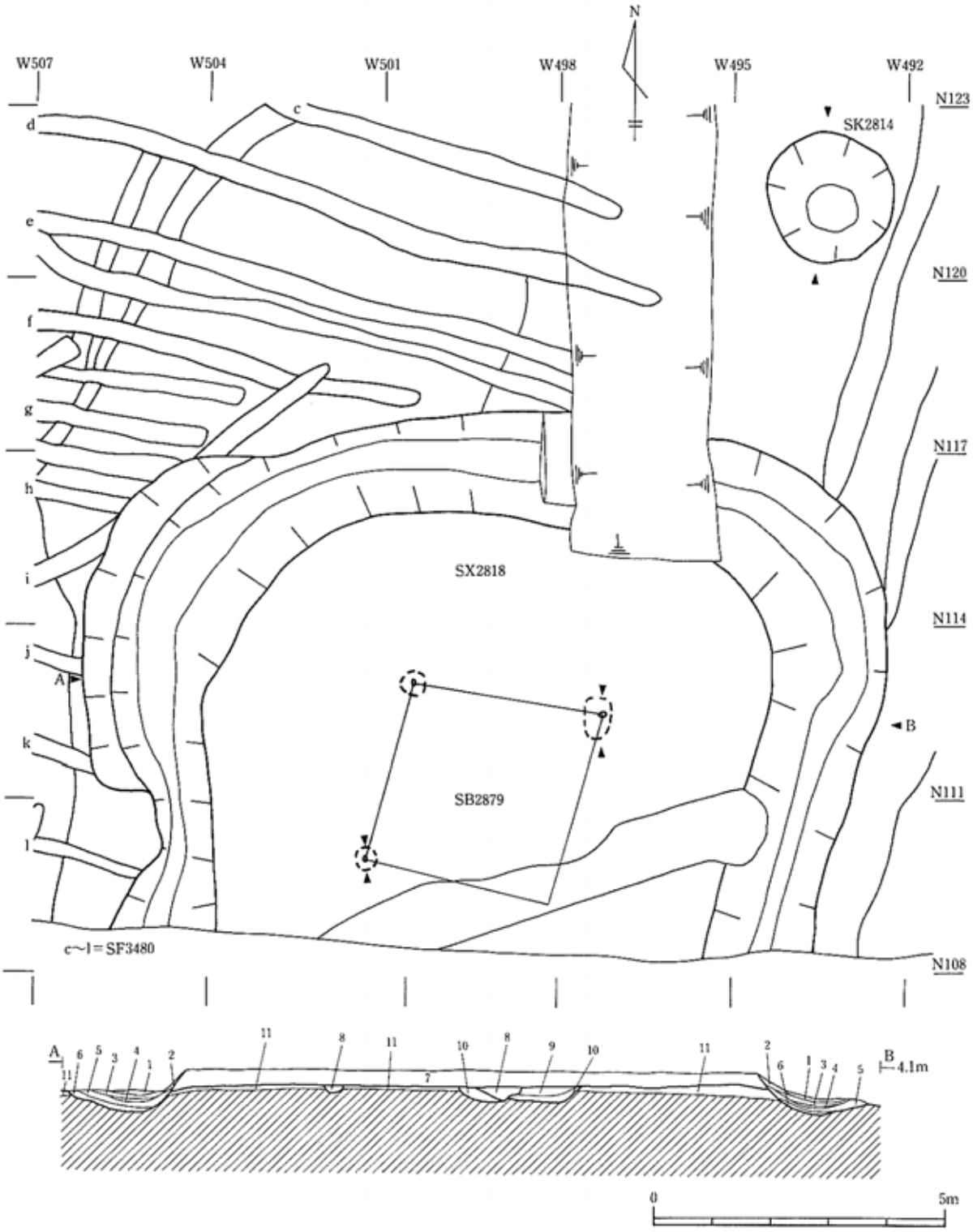
第106図　SX2818方形周溝墓出土遺物

（2）掘立柱建物跡

ＳＢ2879建物跡（第107・108図）

Ｘ区中央から東よりで検出した東西1間、南北1間の建物跡である。ＳＦ3480小溝状遺構群より新しい。ＳＸ2818方形周溝墓との新旧関係は確認できなかった。

柱穴は3箇所で検出しており、すべてで径15㎝の柱痕跡を確認している。これらは柱材も残ってお

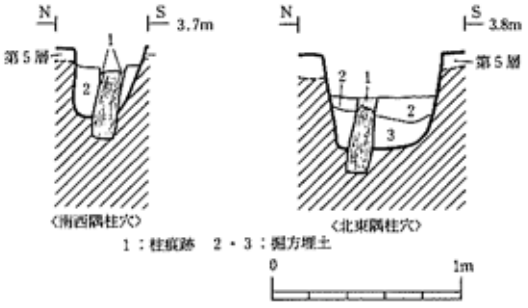


層No.	土色・土性	混入物など	備考
1	明黄褐色(10YR7/6)粘土		SX2818 周溝大別1層
2	にぶい黄褐色(10YR2/1)細砂	積み土崩壊土主体	SX2818 周溝大別2層
3	暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土質シルト	積み土崩壊土を少量含む	
4	黒褐色(2.5Y3/2)粘土質シルト	積み土崩壊土を少量含む	
5	黒褐色(2.5Y3/2)シルト	積み土崩壊土を少量含む	
6	暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト	積み土崩壊土を多く含む	

層No.	土色・土性	混入物など	備考
7	にぶい黄褐色(10YR2/1)細砂	地山を含む	SX2818 積み土
8	黒褐色(2.5Y3/1)シルト		SF3480 堆積土
9	暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト	地山・白色砂粒を含む	SD2873 堆積土1層
10	黒褐色(10YR3/1 シルト)	地山を少量含む	SD2873 堆積土2層
11	灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルト		第5層(旧表土)

第107図　SX2818 方形周溝墓、SB2879 建物跡、SK2814 土壙

り、このうち北東隅柱について樹種同定をおこなったところ、ハンノキ節であることがわかった。平面規模は西側柱列が3.56m、北側柱列が3.14mである。建物の方向は西側柱列で測るとN30°Eである。柱穴は北東隅柱がほぼ楕円形で長径 0.7m、短径 0.4m、それ以外がほぼ円形で径0.4m前後、深さは0.4mある。埋土は灰褐色シルト質粘土が主体で、含まれる地山の量で細分される。遺物は出土していない。



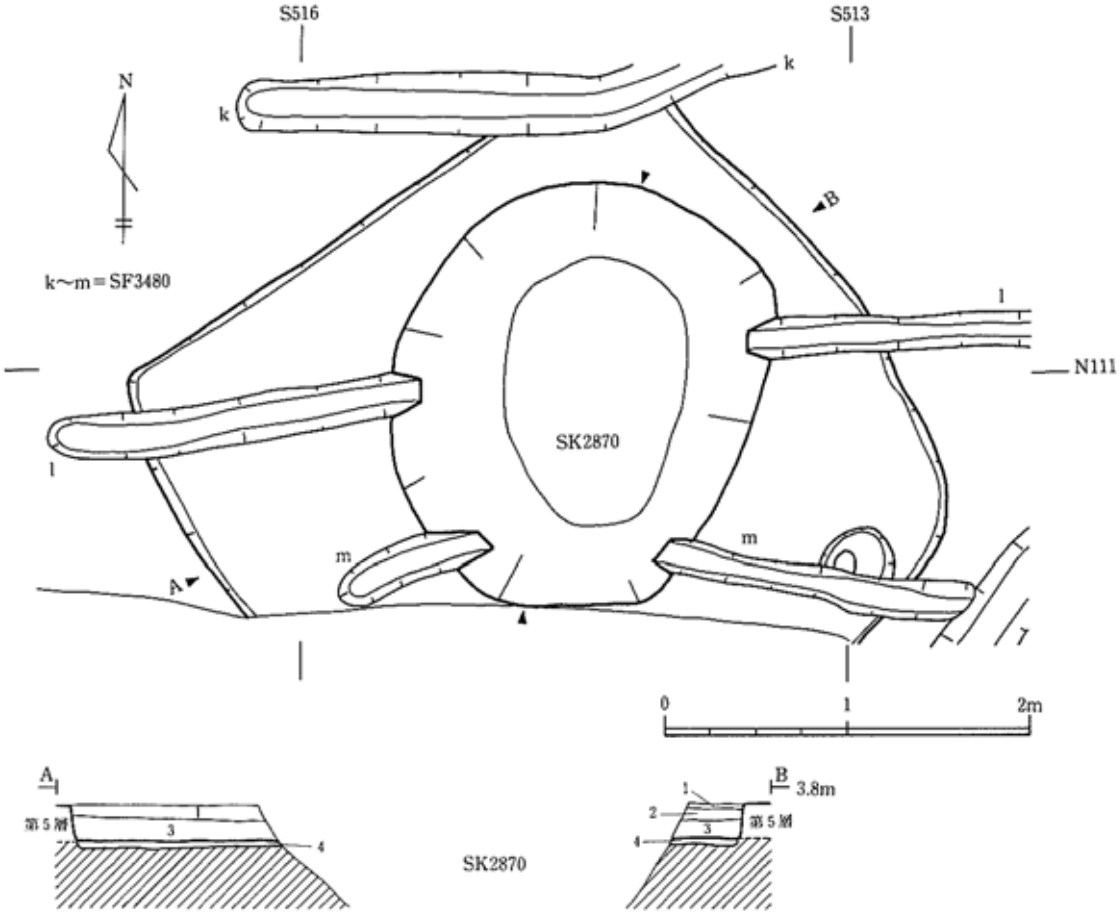
第108図　SB2879 建物跡柱穴断面図

(3) 竪穴住居跡

ＳＩ2869 住居跡（第109図）

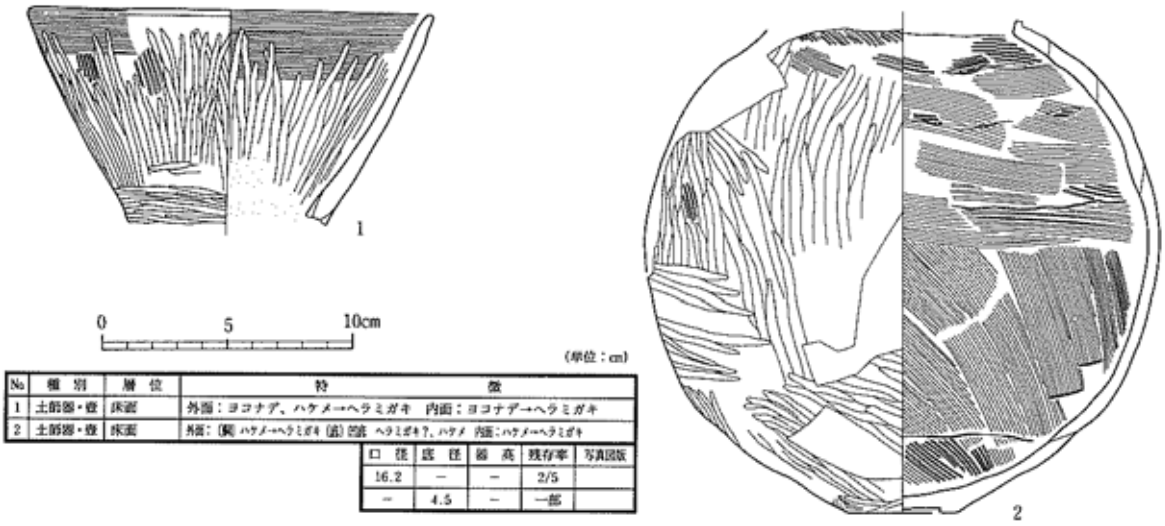
Ｘ区中央の南壁際で検出した竪穴住居跡である。ＳＫ2870 土壙、ＳＦ3490 小溝状遺構群より古い。平面形は方形で、規模は北壁で3.4m、東壁で3.5mある。方向は東辺で測るとN37°Wである。

〔堆積土〕3 層に分けられる。いずれも自然堆積で、暗オリーブ褐色～にぶい黄褐色シルトを主体としている。3 層は炭化物ブロックを含んでいる。



層No	土色・土性	混入物など	備考	層No	土色・土性	混入物など	備考
1	にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト		堆積土1層	3	暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト	炭化物・焼土・黒褐色シルトを含む	堆積土3層
2	オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト	黒褐色粘土を少量含む	堆積土2層	4	オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト		掘方埋土

第109図　SI2869 住居跡、SK2870 土壙



（単位：cm）

No.	種別	層位	特徴
1	土師器・壺	床面	外面：ヨコナデ、ハケメ→ヘラミガキ　内面：ヨコナデ→ヘラミガキ
2	土師器・壺	床面	外面：(頸) ハケメ→ヘラミガキ (胴) 凹凸 ヘラミガキ？、ハケメ　内面：ハケメ→ヘラミガキ

口径	底径	器高	残存率	写真図版
16.2	－	－	2/5	
－	4.5	－	一部	

第110図　SI2869 住居跡出土遺物

〔壁〕第５層（旧表土）のオリーブ褐色シルトや第６層（地山）の暗灰黄色シルトを壁としている。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは東壁で 20 ㎝ある。

〔床面〕ほぼ平坦で、掘方埋土のオリーブ褐色シルトを床としている。

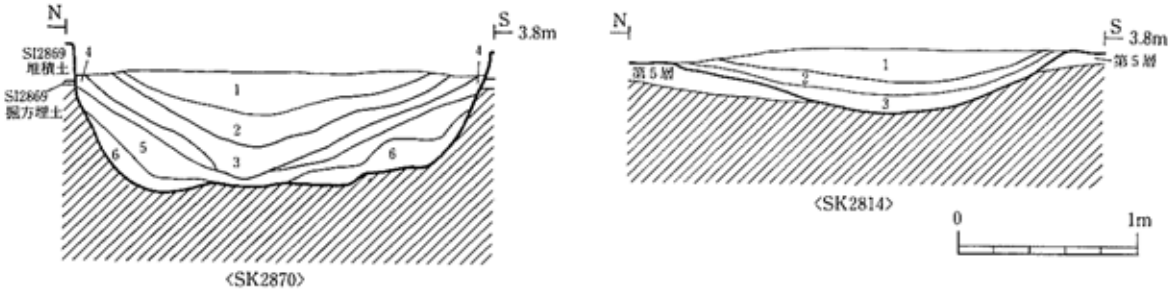
〔施設〕南東隅の床面でピットを１個検出した。一辺が 60cmの隅丸方形とみられ、深さは 20 ㎝ある。堆積土は炭化物ブロックを少し含む黒褐色シルトである。

〔遺物〕床面から土師器坏・壺（第 110 図１・２）・甕が少量出土している。

（4）土壙

ＳＫ2870 土壙（第 109・111 図）

Ｘ区中央の南側、ＳＩ2969 住居跡確認面で検出した土壙である。ＳＩ2869 住居跡、ＳＦ3480 小溝状遺構群より新しい。長径 2.5m、短径 2.0mの楕円形で、深さは 0.8mある。底面は小さな凹凸があり、壁は急に立ち上がる。堆積土は６層に分けられ、いずれも自然堆積とみられる。5・6 層は灰色～黒褐色のシルト、4 層は灰オリーブ色砂、3 層は黒色粘土、1・2 層は暗オリーブ褐色～暗灰黄色の粘土質シルトを主体としている。



層No.	土色・土性	混入物など
1	暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土質シルト	黒褐色粘土を少量含む
2	暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)粘土質シルト	黒褐色粘土を含む
3	黒色(2.5Y2/1)粘土	オリーブ黒色シルトを含む
4	灰オリーブ色(5Y4/2)砂	
5	黒褐色(2.5Y3/2)シルト	炭化物粒を少量含む
6	灰色(7.5Y4/1)シルト	５層の土と粗砂を含む

層No.	土色・土性	混入物など	備考
1	黒褐色(2.5Y5/3)粘土質シルト		第４b層
2	黒褐色(2.5Y3/1)シルト質粘土		
3	黒色(2.5Y2/1)シルト質粘土		

第111図　SK2814・2870 土壙断面図

遺物は堆積土の3層から土師器の壷または甕が微量出土している。また、モモの核が一点出土している。

ＳＫ2814 土壙（第107・111図）

Ｘ区中央東よりで検出した土壙である。長径1.8m、短径1.65mの楕円形で、深さは0.3mある。断面形は舟底形である。堆積土は3層に分けられ、いずれも自然堆積とみられる。2・3層は黒色～黒褐色のシルト質粘土、1層は第4ｂ層に対応する黄褐色粘土質シルトである。遺物は2層上面から土師器坏（第113図2）・器台（第113図1）・有段口縁の壷が少量出土している。

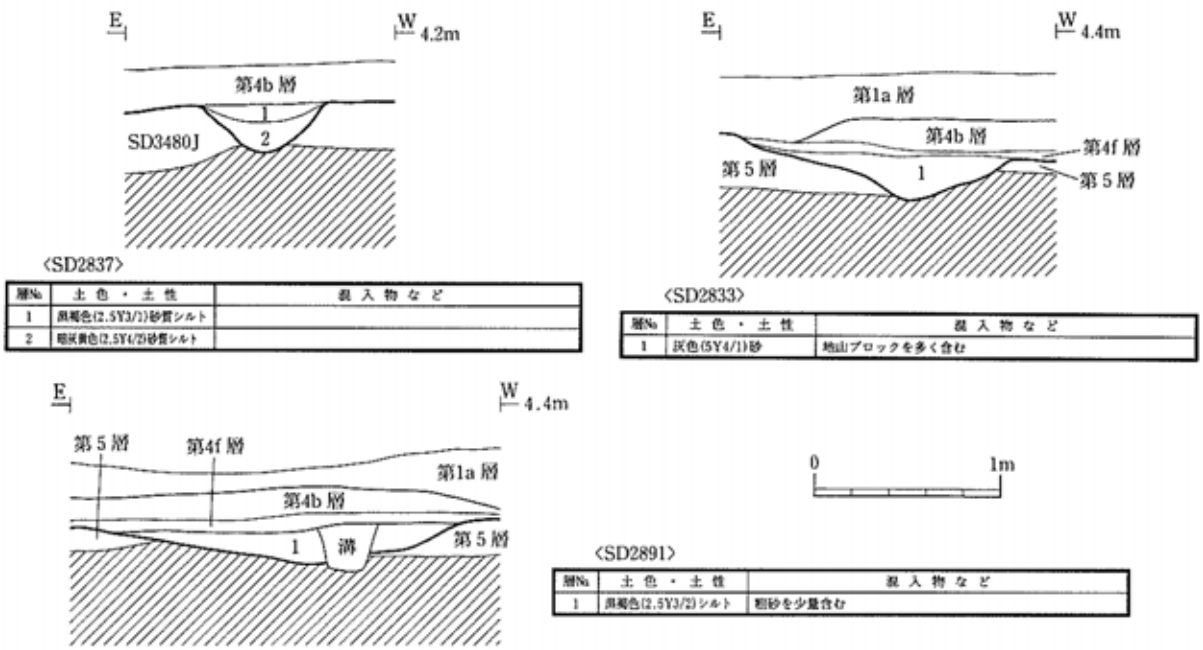
(5)溝跡

ＳＤ2833 溝跡（第101・112図）

Ｘ区中央の南側で検出した半円状を呈する溝跡である。ＳＸ2823 方形周溝墓、ＳＤ2837 溝跡、ＳＦ3480 小溝状遺構群より古い。上幅は1.0～3.9m、底面櫓は0.3～2.3mで、北西部が広く、南西部が狭い。深さは0.1～0.4mである。断面形は舟底型である。堆積土は地山ブロックを多く含む灰色砂である。遺物は堆積土から土師器坏・器台・甕（第113図5）・ミニチュア土器（第113図3）、土製支脚（第113図4）が少最出土している。

ＳＤ2837 溝跡（第101・112図）

Ｘ区中央の南側で検出した溝跡である。長さ13.6m分を確認した。ＳＤ2833・2891溝跡、ＳＦ3480小溝状遺構群より新しく、ＳＸ2818方形周溝墓より古い。上幅は0.4～0.6m、底面幅は0.2m、深さは0.2mある。底面は平坦で、断面形は「U」字形である。方向はN50°Eである。堆積土は2層に分けられ、灰黄色～黒褐色の砂質シルトを主体としている。遺物は堆積土から土師器と土製品が少量出土している。



層No	土色・土性	混入物など
1	黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルト	
2	暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルト	

層No	土色・土性	混入物など
1	灰色(5Y4/1)砂	地山ブロックを多く含む

層No	土色・土性	混入物など
1	黒褐色(2.5Y3/2)シルト	粗砂を少量含む

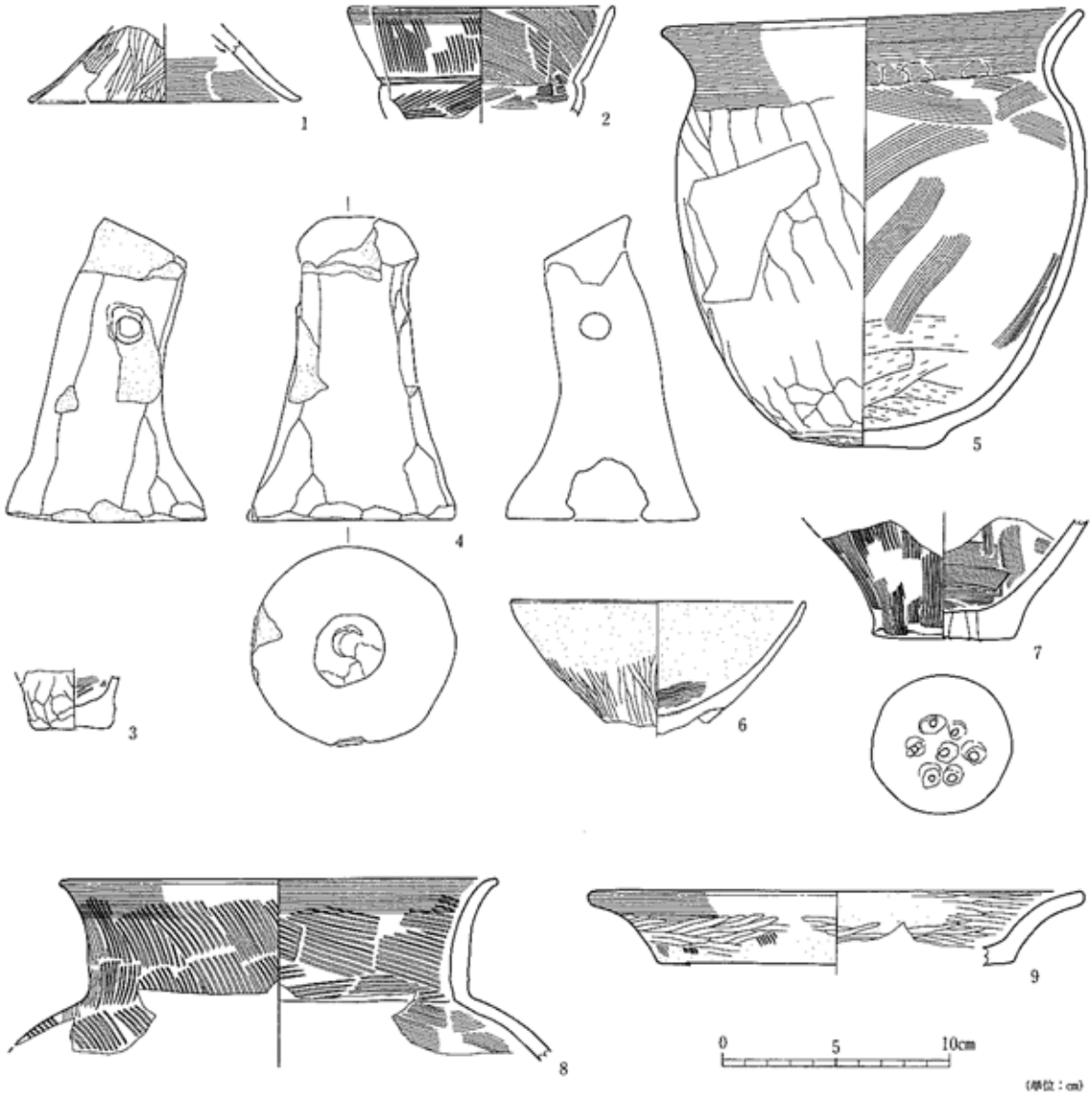
第112図　SD2833・2837・2891 溝跡断面図

ＳＤ2891 溝跡（第 101・112 図）

Ｘ区中央の南側で検出した溝跡である。長さ 11m分を確認した。ＳＤ2837 溝跡、ＳＦ3480 小溝状遺構群より古い。上幅は 1.2～2.1m、底面幅は 0.6～1.5mで、深さは 0.1～0.3mある。断面形は舟底形である。堆積土は黒褐色シルトを主体とする自然堆積である。遺物は出土していない。

ＳＤ2841 溝跡（第 101 図）

Ｘ区中央で検出した南北溝である。長さ 7.6m分を確認した。ＳＦ3480 小溝状遺構群より古い。上幅は 0.3～0.5m、底面幅は 0.2m、深さは 0.1mある。方向は南側で測るとN32°Ｅである。底面はほぼ平



（単位：cm）

No	種別	出土遺構・層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	写真図版
1	土師器・器台	SK2814・堆積土	赤彩(脚部外面)　外面：ヘラミガキ　内面：ナデ、ヨコナデ	－	12.0	－	1/3	
2	土師器・坏	SK2814・堆積土	外面：〔口～体〕ヨコナデ→ハケメ　内面：〔口〕ハケメ→ナデ〔体〕ナデ	(10.7)	－	－	一部	
3	ミニチュア土器	SD2833・堆積土	外面：ナデ　内面：ナデ	－	(3.4)	－	1/2	
4	土製支脚	SD2833・堆積土	ナデ		8.9	13.5	ほぼ完形	28－8
5	土師器・甕	SD2833・堆積土	外面：〔口～胴〕ヨコナデ→ナデ〔底〕ヘラケズリ　内面：〔口〕指オサエ→ヨコナデ〔胴～底〕ヘラケズリ→ヘラナデ	18.6	(6.7)	(19.1)	3/4	28－7
6	土師器・高坏	SD2835・堆積土	外面：ヘラミガキ　内面：ナデ	(13.0)	－	－	一部	
7	土師器・甑	SD2841・堆積土	多孔式　外面：〔体〕ハケメ→ナデ〔底〕ナデ　内面：ナデ	－	6.2	－	一部	
8	土師器・甕	SD2873・2層	外面：〔口～胴〕ハケメ→ヨコナデ　内面：〔口〕ハケメ→ヨコナデ〔胴〕ナデ	(19.4)	－	－	一部	
9	土師器・壺	SD2873・2層	複合有段口縁　外面：〔口〕ヨコナデ、ハケメ→ヘラミガキ　内面：〔口〕ヨコナデ→ヘラミガキ	(22.0)	－	－	一部	

第113図　SK2814 土壙、SD2833・2835・2841・2873 溝跡出土遺物

坦で、断面形は「U」字形である。堆積土は炭化物を微量に含む暗灰黄色シルトの自然堆積である。

遺物は堆積土から土師器坏・甑（第113図7）が少量出土している。甑は多孔式である。

ＳＤ2873 溝跡（第101・107図）

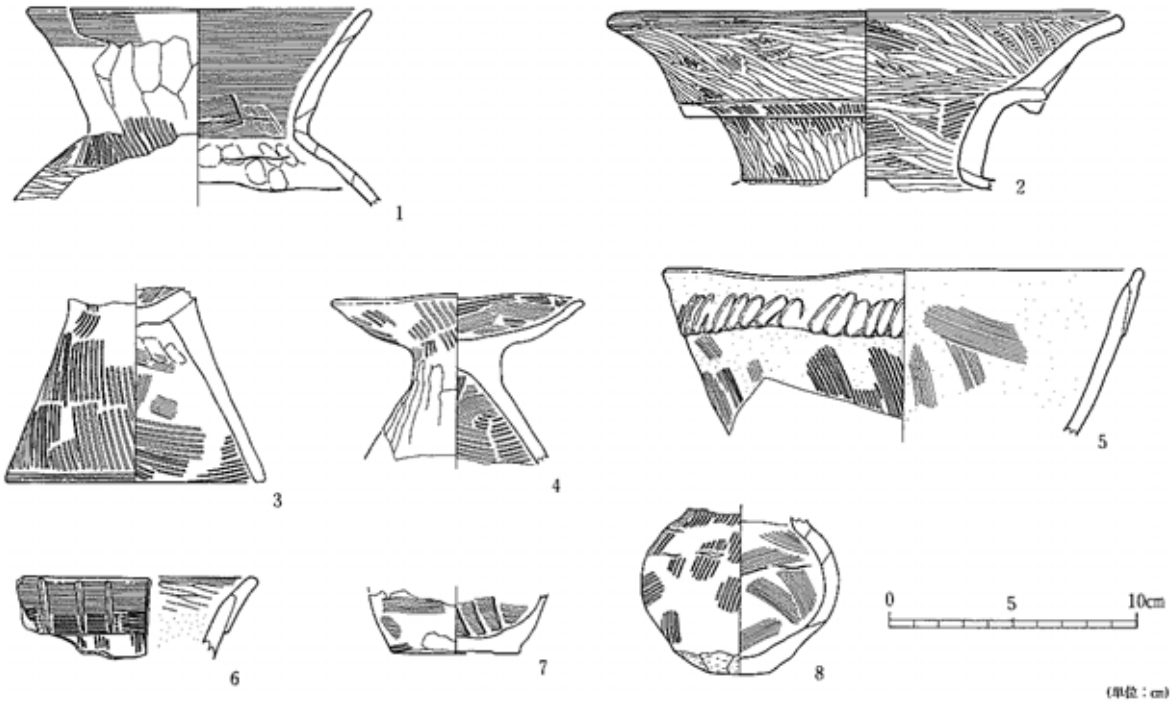
Ｘ区中央から東よりで検出した南北溝である。長さ 10.4m分を確認した。ＳＸ2818 方形周溝墓、ＳＦ3480 小溝状遺構群より古い。上幅は1.6～1.9m、底面幅は0.9m前後、深さは0.2mある。方向は南側で測るとN8°Eである。底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形である。堆積土は 2 層に分けられ、黒褐色～暗灰黄色シルトを主体とする自然堆積である。遺物は2層から有段口縁の土師器壷（第113図9）や土師器甕（第113図8）・壺が少量出土している。

（6）小溝状遺構群

ＳＦ3480 小溝状遺構群（第101・102図）

Ｘ区中央で検出した東西方向に平行して延びる小溝群である。ＳＩ2869 建物跡、ＳＤ2833・2841・2873・2891 溝跡より新しく、ＳＸ2818・2823 方形周溝墓、ＳＫ2870 土壙、ＳＤ2837 溝跡より古い。

検出長は最大 22.4m、1.0～1.2m間隔で 13 条確認している。上幅は 0.3～0.5m、底面幅は 0.1～0.3m、深さは0.2mある。底面は小さな凹凸があり、断面形は「U」字形である。堆積土は黒褐色～オリーブ褐色シルトである。遺物はいずれも土師器で、堆積土から有段口縁壷（第 114 図 2）・単純口縁壷（第 114 図 1）・台付甕（第 114 図 3）・器台（第 114 図 4）・甕が出土している。



（単位：cm）

No	種別	出土遺構・層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	写真図版
1	土師器・壺	SF3480・堆積土	外面：〔口〕ヨコナデ、ナデ〔体〕ハケメ、ミガキ　内面：〔口〕ヨコナデ→ナデ〔体〕指オサエ	(13.9)	－	－	一部	
2	土師器・壺	SF3480・堆積土	複合有段口縁　外面：〔口〕ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ〔頸〕ハケメ→ヘラミガキ　内面：〔口〕ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ〔頸〕ハケメ→ヘラミガキ	21.0	－	－	1/4	28－5
3	土師器・台付甕	SF3480・堆積土	外面：〔台〕ハケメ、ヨコナデ　内面：〔甕〕ナデ〔台〕指オサエ→ナデ→ハケメ	－	(10.5)	－	一部	
4	土師器・器台	SF3480・堆積土	外面：〔受け〕ハケメ〔脚〕ナデ　内面：〔受け〕ハケメ→ナデ〔脚〕ナデ→ハケメ	(10.2)	－	－	3/5	28－1
5	土師器・甕	第5層	外面：指オサエ、ハケメ　内面：ナデ	(19.4)	－	－	一部	
6	土師器・壺	第5層	複合口縁　外面：ハケメ→ヨコナデ→最位此線　内面：ヨコナデ→ヘラミガキ	－	－	－	一部	
7	ミニチュア土器	第5層	外面：ナデ〔底〕凹凸　内面：ヘラナデ	－	5.6	－	1/2	
8	ミニチュア土器・壺	第5層	外面：〔体〕ハケメ、ヘラケズリ〔底〕ナデ　内面：ナデ	－	(2.4)	－	3/5	28－3

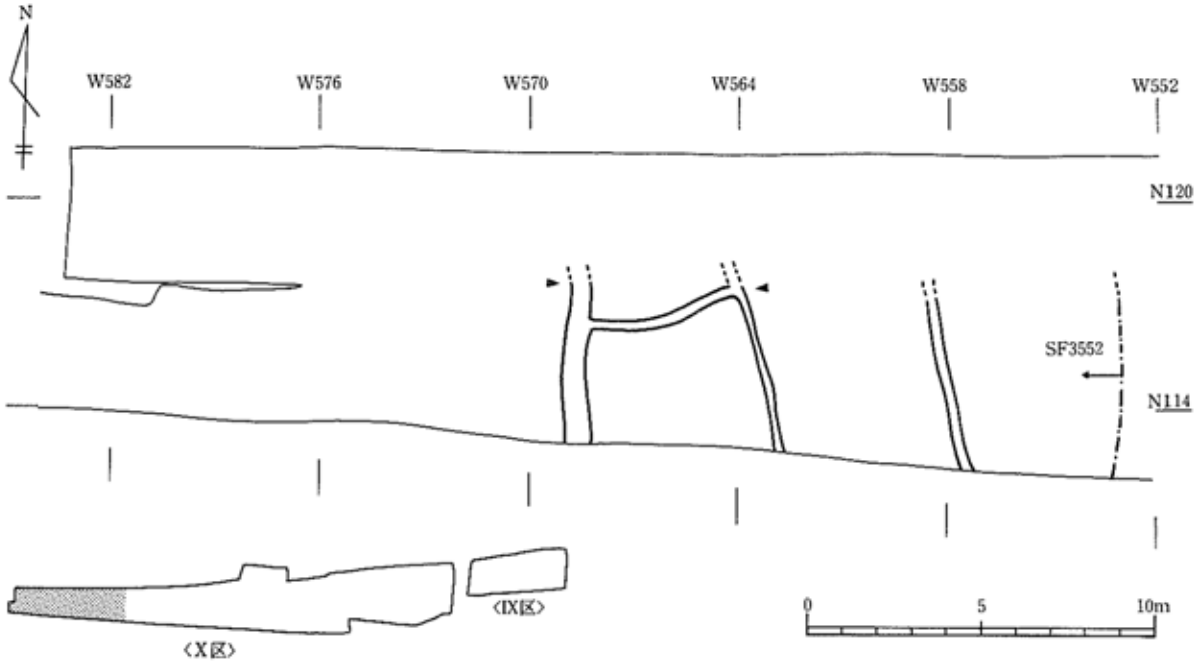
第114図　SF3480 小溝状遺構群、Ｘ区第５層出土遺物

（7）水田跡

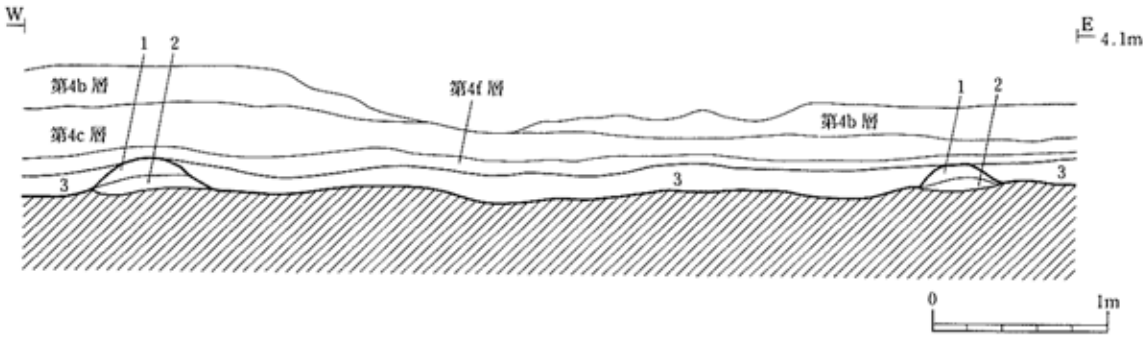
ＳＦ3552 水田跡（第 115・116 図）

Ｘ区西側からXI区北部の東側で検出した水田跡である。耕作土が確認できたのは東西 39mである。残存状況は非常に悪いが、Ｘ区では４枚の水田跡を検出している。水田面の標高は3.1～3.5mで、西へ傾斜している。水田１枚の面積や形状は、調査区内で全体を把握できるものがなく不明であるが、平面形は方形ないしは台形とみられる。耕作土はオリーブ黒色粘土質シルトで、厚さは 10cm前後あり、下面には凹凸が認められ、直下層を巻き込んでいる。

畦畔は南北３本、東西１本検出しており、最も西の南北畦畔は幅0.5～0.7m、その他は幅0.2～0.3mである。いずれも土盛り畦畔で断面形は台形もしくは半円状である。旧表土を基部とし、オリーブ黒色粘土質シルトを積上げてつくられている。XI区では、湧水のため平面での遺構確認ができなかったが、断面でみるとW592 付近までは耕作された形跡があり、以西は湿地となっている。畦畔は確認でき



第115図　SF3552 水田跡



層No	土色・土性	混入物など	備考
1	オリーブ黒色(5Y2/2)粘土質シルト		畦畔積み土
2	黒色(5Y2/1)粘土質シルト		第５層(旧表土)

層No	土色・土性	混入物など	備考
3	オリーブ黒色(5Y3/2)粘土質シルト	地山の土を巻き込む	耕作土

第116図　SF3552 水田跡断面図

なかった。

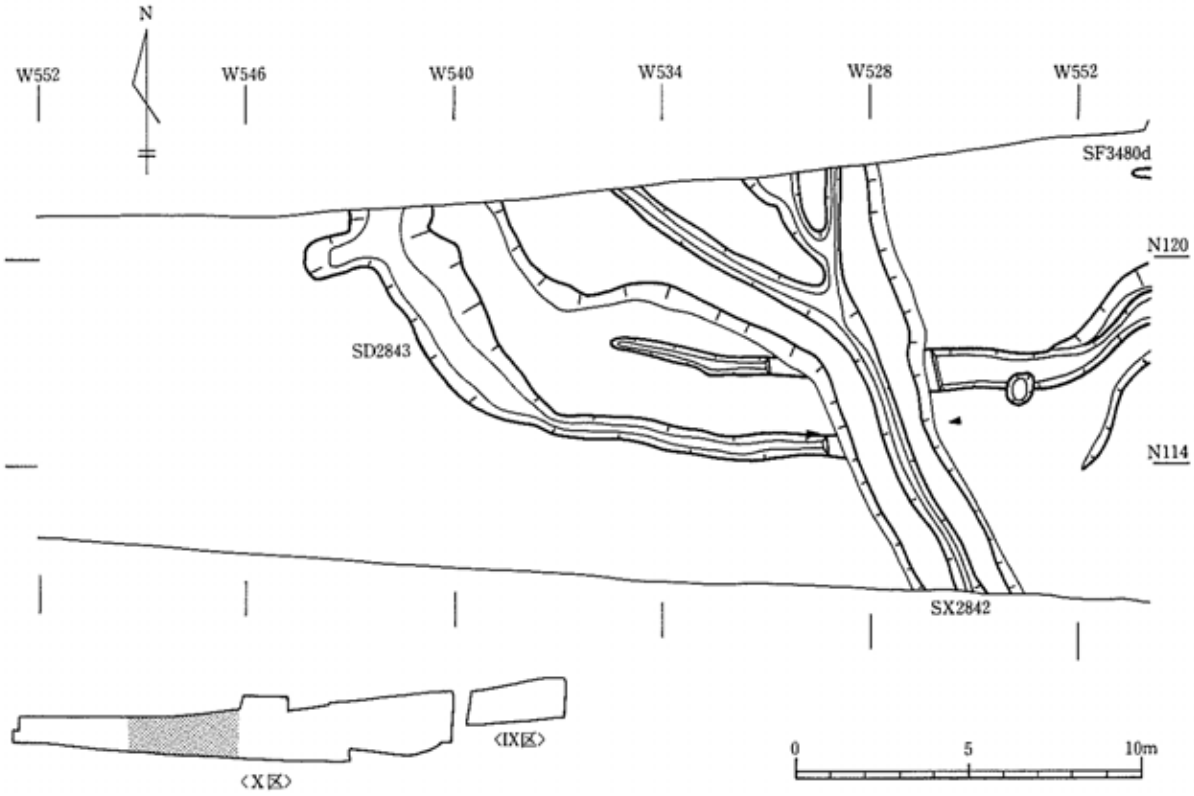
遺物は耕作土から土碧而器甕が微量出土している。

(8) その他の遺構

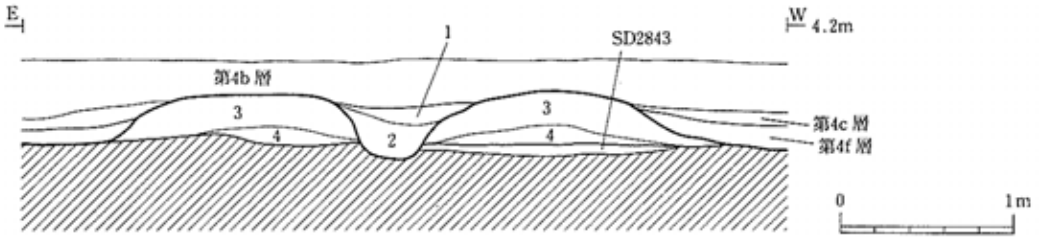
S X2842（第 117・118 図）

X区中央やや西側で検出した遺構である。旧表土（第 5 層）を削り、地山（第 6 層）上に畦畔状の高まりを構築し、その中央に溝をつくっている。長さ 13.4m分を確認した。S D2843 溝跡より新しい。幅は南側で 2.5m、北側は広くなり 11.5mある。積み土は 2 層に分けられ、下層は地山を主体とし、暗灰黄褐色シルトブロックを多く含む。1 層はオリーブ黒色粘土質シルトである。

溝跡は高まりが広くなる北側で 3 条に分かれる。幅は 0.5〜0.8m、底面幅は 0.3m前後、深さは



第117図　X区西側の遺構



層No	土色・土性	混入物など	備考	層No	土色・土性	混入物など	備考
1	黒色(2.5Y2/1)粘土質シルト		溝埋積土 1 層	3	オリーブ黒色(5Y3/1)粘土質シルト		積み土 1 層
2	灰色(5Y4/1)シルト		溝埋積土 2 層	4	灰黄褐色(2.5Y6/3)砂質シルト	地山主体、暗灰黄色シルトブロックを多く含む	積み土 2 層

第118図　SX2842 遺構断面図

0.1～0.3mである。方向は中央の溝で測るとN25°Wである。底面は南に傾き、北側の東・西の溝は浅くなる。断面形は「U」字形で、上端近くはやや開く。堆積土は2層に分けられ、下層はにぶい黄色砂質シルト、上層はオリーブ黒色粘土質シルトであり、自然堆積とみられる。遺物は堆積土から土師器坏が微量出土している。

本遺構は、山王多賀前地区の調査で検出した古墳時代前期のＳＦ3124水田跡の大畦3と形態が類似している（菅原ほか：1995）。したがって、ＳＸ2842遺構はＳＦ3552水田跡にともなう大畦畔であった可能性がある。その場合、水田の範囲は東西65mにおよび、ＳＸ2842は住居域や墓域であった微高地と水田域を画する施設であったと考えられる。

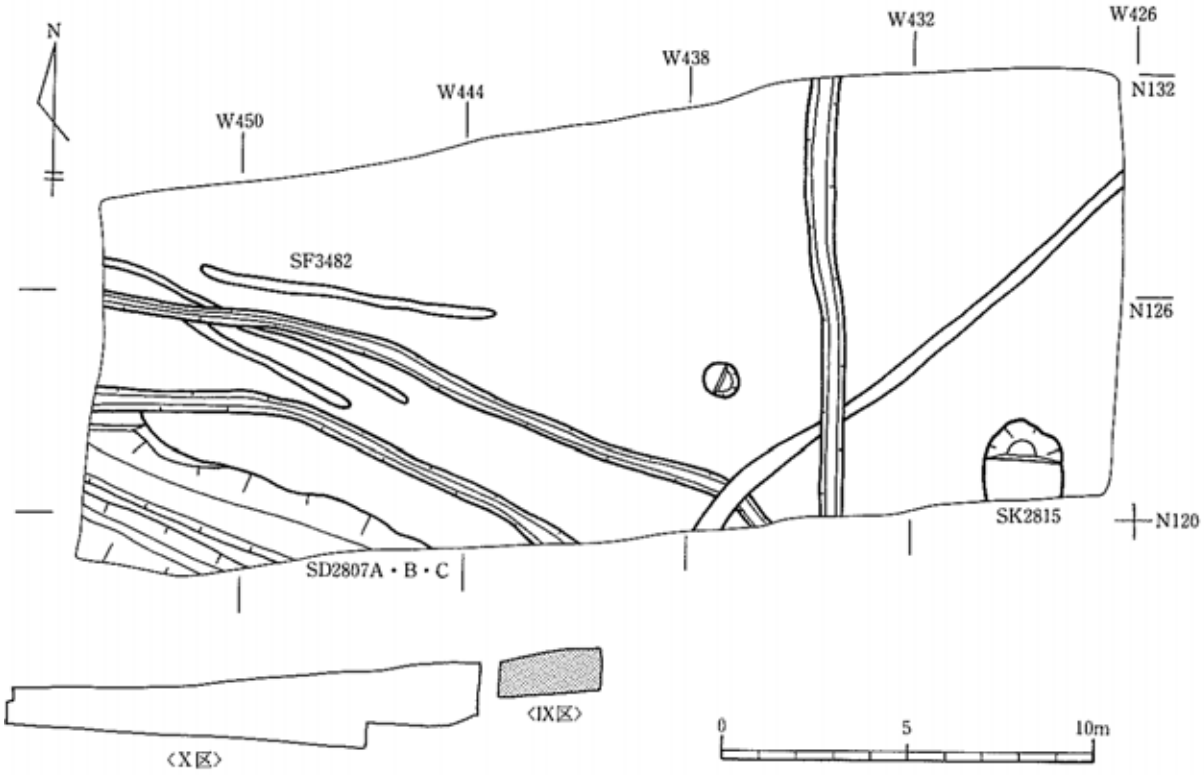
2．奈良・平安時代以降

奈良・平安時代以降の主な遺構には土壙1、溝跡6、小溝状遺構群3などがある。検出面は第4層である。出土遺物には土師器・須恵器・木製品・漆器がある。

（1）土壙

ＳＫ2815土壙（第119図）

IX区南東隅で検出した土壙である。平面形は不整な楕円形とみられ、南北1.8m以上、東西2.1m、深さは 0.7mある。断面形は逆台形である。堆積土は黒褐色粘土を主体としており、自然堆積とみられる。遺物は堆積土から漆器の皿1点（第123図4）が出土している。横木取りで、内面が赤漆、外面は黒漆塗りである。樹種はブナ属であった。遺物の特徴から本土壙は中世以降のものとみられる。



第119図　IX区の遺構

（2）溝跡

ＳＤ2798 溝跡（第 120・122 図）

Ｘ区西端部で検出した溝跡で、長さ 15m分を確認した。上幅は 1.1～1.9m、底面幅は 0.9m前後、深さは 0.5mある。方向はN41°Wである。底面は東側が深く、断面形は皿形である。堆積土は 3 層に分けられ、各層とも黄灰色～暗褐色シルトを主体とする自然堆積である。遺物は堆積土からロクロ調整の土師器坏・蓋、須恵器坏・高台坏（第 123 図 1）・甕や瓦などが少量出土している。

ＳＤ2800 溝跡（第 120・122 図）

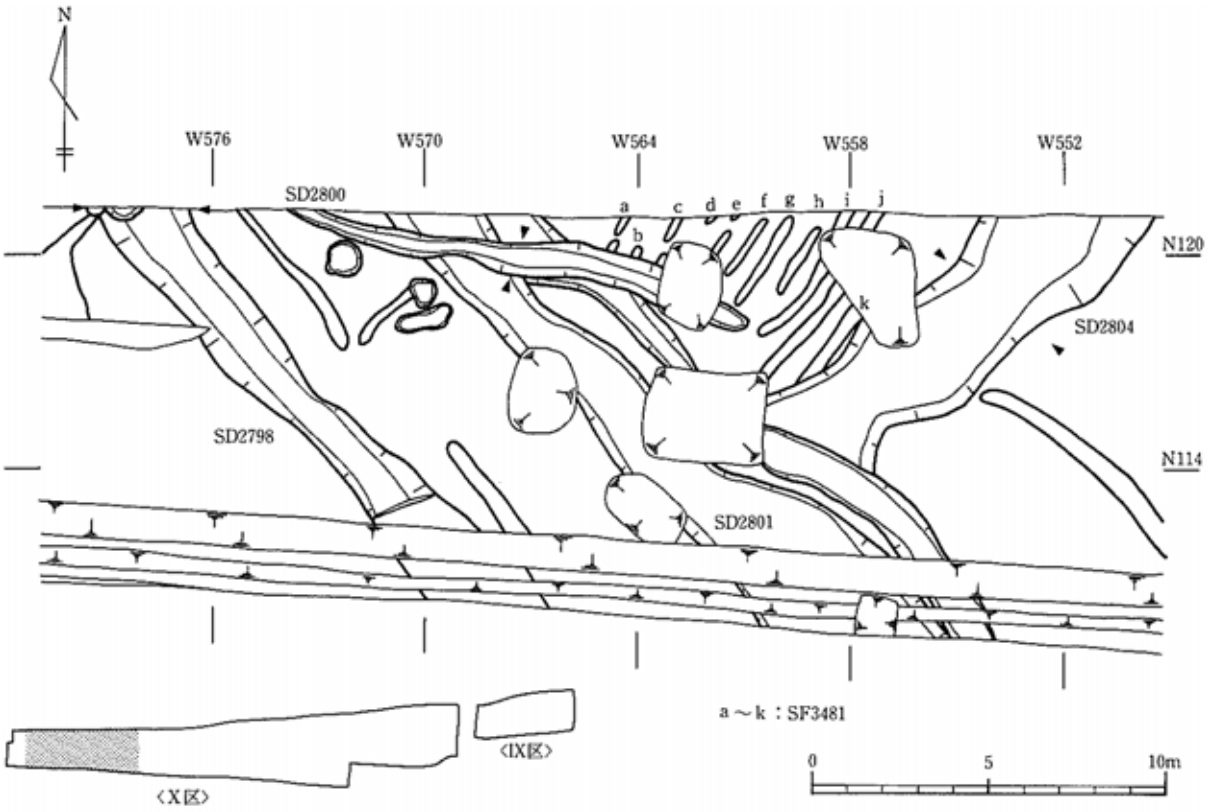
Ｘ区西端部で検出した溝跡で、長さ 6.5m分を確認した。ＳＦ3481 小溝状遺構群より新しく、ＳＤ2801 溝跡より古い。上幅は 0.5～1.0m、底面幅は 0.3～0.8m、深さは 0.4mある。方向はE7°Ｓである。底面はほぼ平坦で、断面は「U」字形である。堆積土は暗オリーブ灰色～暗灰黄色シルトを主体としており、自然堆積とみられる。遺物は堆積土から土師器や須恵器の小破片が微量出土している。

ＳＤ2801 溝跡（第 120 図）

Ｘ区西側で検出した溝跡で、長さ 8.5m分を確認した。ＳＤ2800・2804 溝跡より新しい。上幅は 1.5～4.0m、底面幅は 1.0～3.0m、深さは 0.2mである。方向はN7°Wである。底面はほぼ平坦で、断面形は浅い皿形である。堆積土は地山ブロックを少量含む黒褐色シルトであり、自然堆積とみられる。遺物は堆積土から曲物の底板（第 123 図 5）や須恵器蓋・甕が微量出土している。底板は柾目取りのスギ材である。

ＳＤ2804 溝跡（第 120・122 図）

Ｘ区西側で検出した溝跡で、長さ 9.5m分を確認した。ＳＤ2901 溝跡より古い。上幅が 2.3～3.9m、



第120図　Ｘ区西端付近の遺構

底面幅1.7～2.6mで、深さは0.4mある。方向はおおよそN50°Eである。底面はほぼ平坦で、断面形は浅い皿形である。堆積土は暗灰黄色シルトであり、自然堆積とみられる。遺物は堆積土から土師器坏・甕、須恵器坏・蓋・長頸壷と会津大戸窯の製品とみられる須恵器甕が少量出土している。

ＳＤ2806Ａ・Ｂ溝跡（第121・122図）

Ｘ区東端付近で検出した南北溝跡で、長さ 16.4m分を確認した。2 時期（Ａ→Ｂ）の変遷がある。ＳＦ3482小溝状遺構群より新しく、ＳＤ2807溝跡より古い。方向は2時期ともN3°Eである。

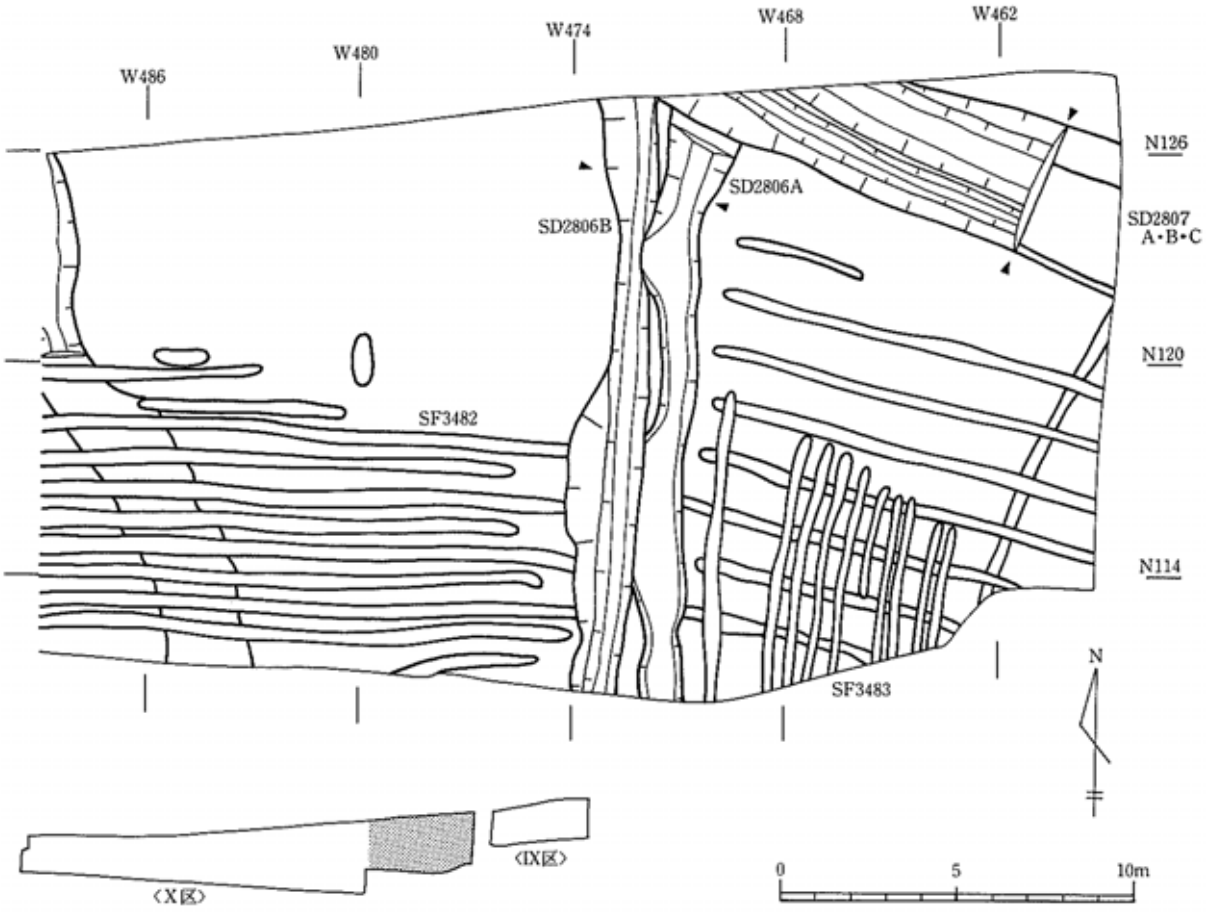
Ｂ期は上幅が1.0～1.8m、底面幅0.3～0.9m、深さは0.4mある。底面はほぼ平坦で、断面形は浅い皿形である。堆積土は2層に分けられるが、双方とも黒褐色シルトを主体しており、自然堆積とみられる。

Ａ期は、上幅が1.0m以上、底面幅が0.5m以上、深さは0.4mある。底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形であり、上端近くがやや開く。堆積土は3層に分けられる。各層とも黒褐色粘土質シルトもしくは黒褐色シルトを主体としており、自然堆積とみられる。

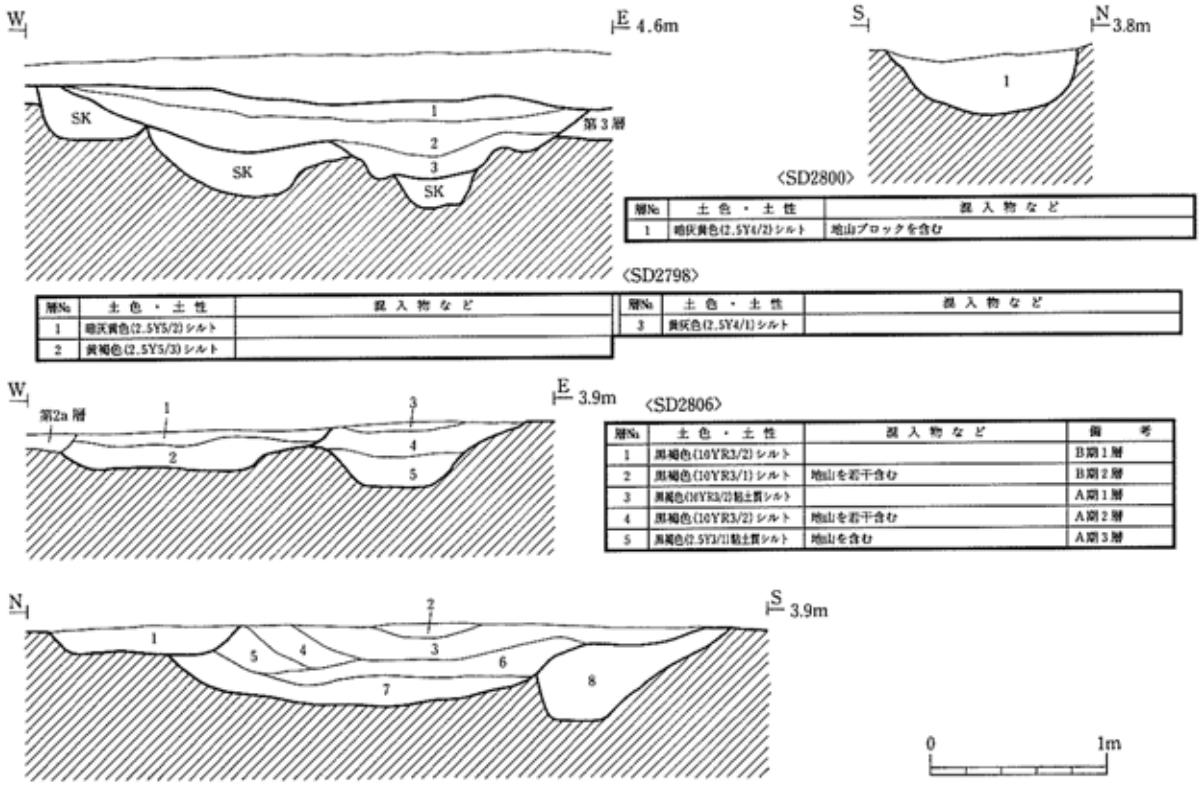
遺物はＢ期の堆積土から土師器坏、須恵器坏（第123図2）・甕、瓦や馬の歯が少量出土している。須恵器坏はヘラ切りである。

ＳＤ2807Ａ・Ｂ・Ｃ溝跡（第119・121・122図）

Ⅸ区南西隅からＸ区北東隅で検出した東西溝跡で、長さ22m分を確認した。ＳＤ2806Ａ・Ｂ溝跡よ



第121図　Ｘ区東端付近の遺構



〈SD2798〉

層No	土色・土性	混入物など
1	暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト	
2	黄褐色(2.5Y5/3)シルト	
3	黄灰色(2.5Y4/1)シルト	

〈SD2800〉

層No	土色・土性	混入物など
1	暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト	地山ブロックを含む

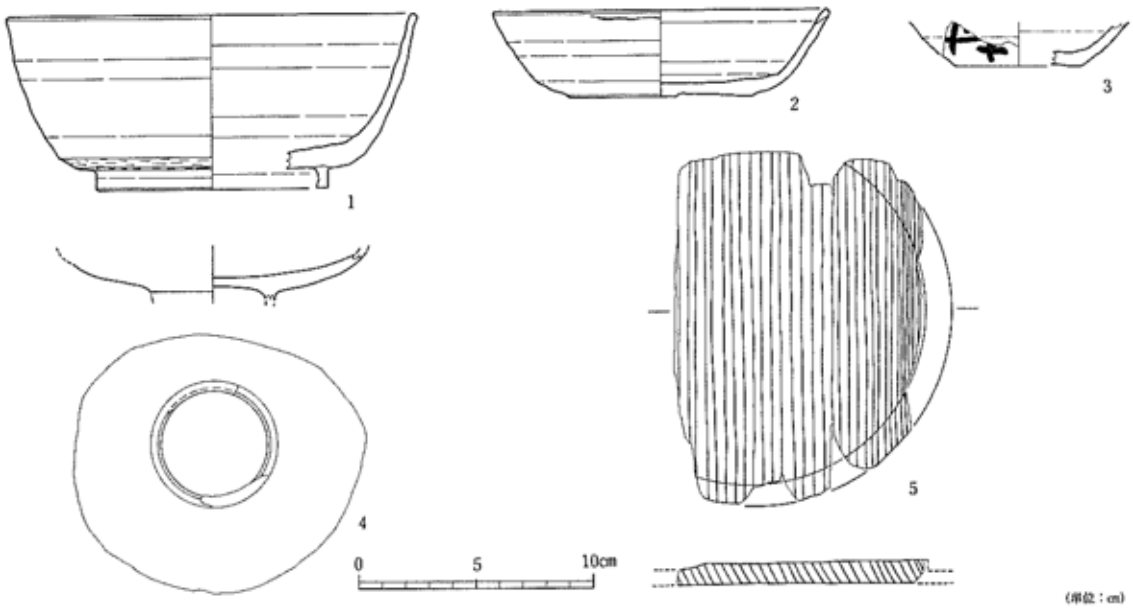
〈SD2806〉

層No	土色・土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR3/2)シルト		B期1層
2	黒褐色(10YR3/1)シルト	地山を若干含む	B期2層
3	黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト		A期1層
4	黒褐色(10YR3/2)シルト	地山を若干含む	A期2層
5	黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルト	地山を含む	A期3層

〈SD2807〉

層No	土色・土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト		C期堆積土
2	暗褐色(10YR3/3)シルト		B期大別1層
3	黒褐色(10YR3/2)シルト質粘土		
4	黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト	地山を含む	
5	黒褐色(2.5Y3/1)シルト	地山を含む	B期大別1層
6	黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト	地山を若干含む	
7	黒色(10YR2/1)粘土質シルト	地山を含む	B期大別2層
8	黒褐色(2.5Y3/2)シルト質粘土		A期堆積土

第122図　SD2798・2800・2806・2807 溝跡断面図



(単位：cm)

No	種別	出土遺構・層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	分類	写真図版
1	須恵器・高台坏	SD2798・堆積土	外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ→高台接合後ロクロナデ　内面：ロクロナデ	(17.6)	(9.9)	7.5	一部	A	
2	須恵器・坏	SD2806B・堆積土	外面：ロクロナデ、ヘラ切り　内面：ロクロナデ	(14.4)	(7.8)	3.8	1/4	A Ⅰa	
3	須恵器・坏	SF3481・堆積土	外面：ロクロナデ、回転糸切り　内面：ロクロナデ　外面に墨書「□」(村か)(倒位)	－	(5.3)	－	一部		
4	漆器・皿	SK2815・堆積土	外面：黒漆塗り　内面：赤漆塗り　樹種：ブナ属　横木取り						
5	曲物・底板	SD2801・1層	樺皮結合円形曲物　径16.7(推定)　厚1(周縁)0.5　樹種：スギ						

第123図　SK2815 土壙、SD2798・2801・2806 溝跡、
SF3481 小溝状遺構群出土遺物

り新しい。3時期の変遷（A→B→C）がある。方向は3時期ともN68°W前後である。

C期は上幅が0.9m、底面幅が0.7m、深さが0.2mある。底面はほぼ平坦で、断面形は皿形である。堆積土は黒褐色粘土質シルトであり、自然堆積とみられる。B期は上幅が3.0m、底面幅が1.7m、深さが0.5mある。断面形は舟底形で、上端近くがやや開く。堆積土は6層に分けられたが、2層に大別が可能である。2層は黒色粘土質シルト、1層が黒褐色のシルトもしくはシルト質粘土を主体としており、自然堆積とみられる。A期は上幅が推定で1.0m、底面幅が0.5m、深さは0.6mである。底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形であり、上端近くがやや開く。堆積土は2層に分けられるが、いずれも黒褐色シルト質粘土を主体としており、自然堆積とみられる。

遺物はB期の堆積土1層からロクロ調整の土師器坏、須恵器坏・蓋や瓦が少量出土している。

（3）小溝状遺構群

Ⅸ区西側からⅩ区東側にかけてとⅩ区西側の一部で、畑の畝と考えられる小溝群を検出している。これらは溝の方向や重複関係から、以下の3グループに分けられる。

ＳＦ3481小溝状遺構群（第120図）

Ⅹ区西側の北よりで検出した南北方向に平行して延びる小溝群である。ＳＤ2800溝跡より古い。検出長は最大5.7m以上あり、0.3～0.5m間隔で10条確認している。上幅は0.2～0.5m、底面幅は0.1～0.3m、深さは0.1mある。方向はN32°E前後である。底面には激しい凹凸があり、断面形は「U」字形である。堆積土は黒褐色シルトが主体で、部分的に地山ブロックを含む。

遺物は堆積土から回転糸切りで体部に墨書を有する須恵器坏（第123図3）が出土している。

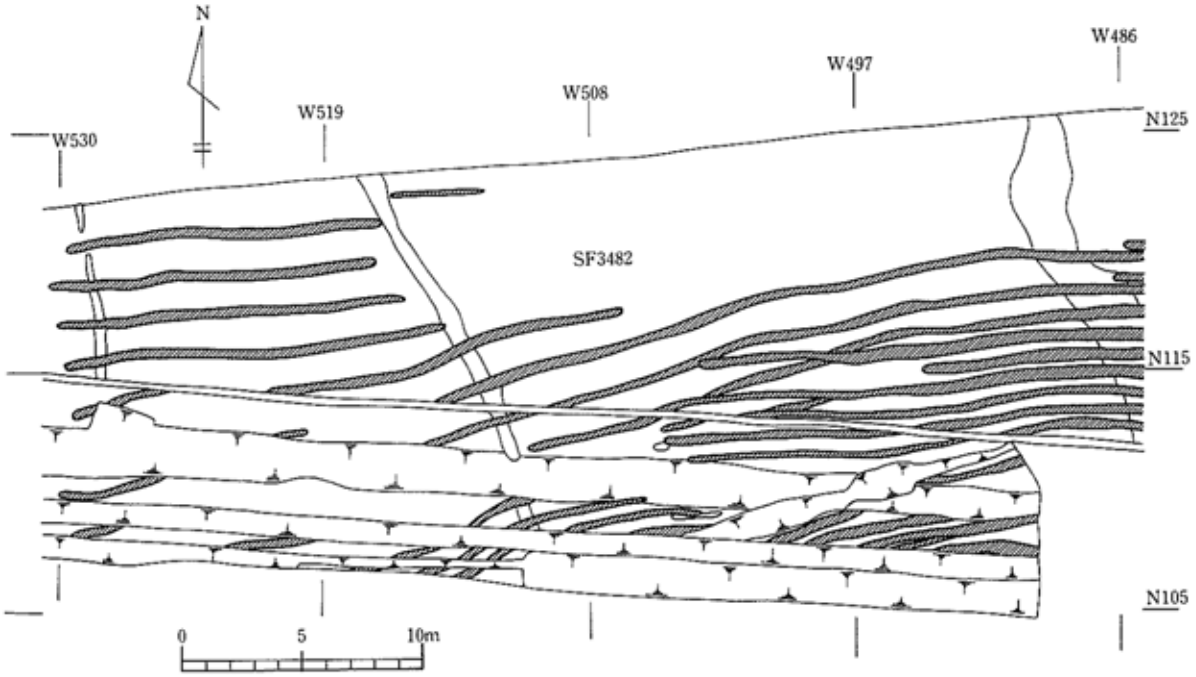
ＳＦ3482小溝状遺構群（第124・125図）

Ⅹ区東側からⅨ区西側で検出した東西方向に平行して延びる小溝群である。ＳＤ2806Ａ・Ｂ溝跡、ＳＦ3483小溝状遺構群より古い。本遺構は小溝同士が重複することから、少なくとも2時期以上の変遷がある。検出長は最大36.7mあり、0.3～1.5m間隔で53条確認している。上幅は0.3～0.7m、底面幅は0.1～0.4m、深さは0.2mある。方向は最も長く残っている1条で測ると、東側がほぼ真東方向、中央部がE16°N、西側はE3°Nであり、他の小溝もほぼこれに近い。底面には激しい凹凸があり、断面形は「U」字形である。堆積土は黒褐色シルトが主体で、部分的に地山ブロックを含む。

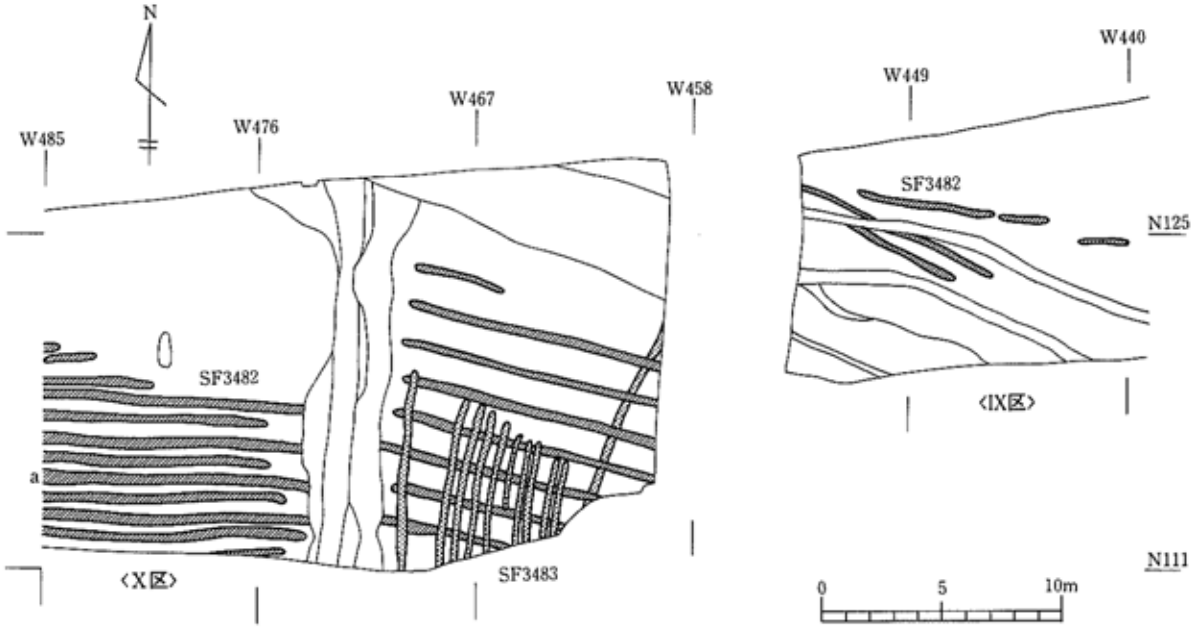
遺物は堆積土から土師器甕が微量出土している。

ＳＦ3483小溝状遺構群（第125図）

Ⅹ区東端付近で検出した南北方向に平行して延びる小溝群である。ＳＦ3482小溝状遺構群より新しい。検出長は最大8.9m以上あり、0.1～0.6m間隔で10条確認している。上幅は0.2～0.4m、底面幅は0.1～0.2m、深さは0.1mある。方向はN9°E前後である。底面には凹凸があり、断面形は「U」字形である。堆積土は黒褐色シルトが主体で、部分的に地山ブロックを含む。遺物は出土していない。



第124図　SF3482 小溝状遺構群



第125図　SF3482・3483 小溝状遺構群

D．V・VI区

本調査区では、第４層と第５層が薄く、両層での遺構確認が困難であることから、すべての遺構の検出を第６層でおこなった。主な遺構は土壙２、溝跡４、小溝状遺構群１、河川跡１などである。出土遺物には土師器・須恵器・赤焼土器・瓦などがある。遺構は出土土器の特徴から古墳時代前期、奈

良・平安時代の２つに大別できる。古墳時代前期の遺構はＳＤ2754 溝跡とＳＤ2894 河川跡である。

（1）土壙

ＳＫ2761 土壙（第 126・128 図）

Ⅵ区中央で検出した土壙である。ＳＤ2894 河川跡より新しく、ＳＤ2762 溝跡より古い。径 2.0mの円形で、深さは 0.5mある。断面は逆台形である。堆積土は 6 層に分けられる。各層は黒褐色～褐灰色粘土質シルトを主体としており、自然堆積とみられる。

遺物は堆積土から土師器甕、ミニチュア土器（第 129 図 5）が微量出土している。

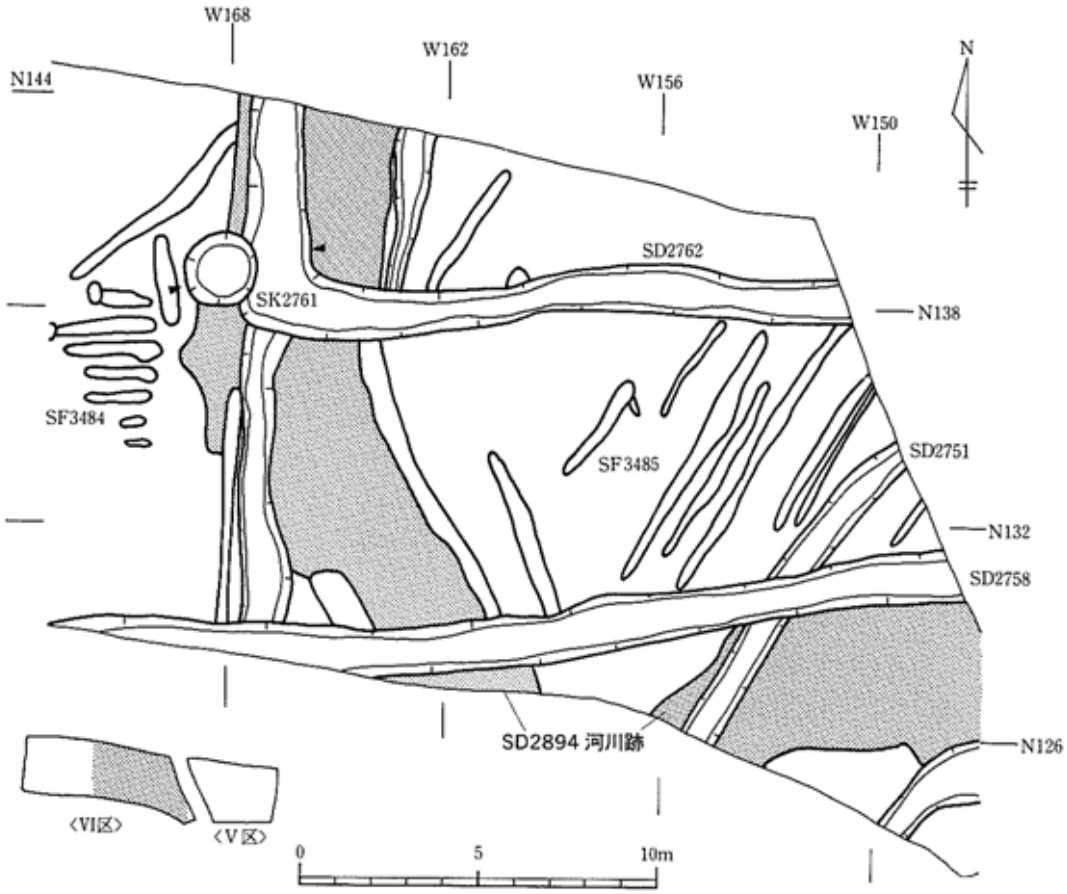
ＳＫ2760 土壙（第 127 図）

Ⅴ区北西隅で検出した土壙である。平面形は不明で、規模は南北が 1.6m以上ある。深さは 0.7mで、断面形は逆台形とみられる。堆積土は黒褐色粘土質シルトを主体とし、灰白色火山灰の小ブロックを含んでいる。遺物は堆積土から土師器甕、須恵器壷（第 129 図 6）・甕が少量出土している。須恵器壷は頸部で口縁部を欠き、再利用している。

（2）溝跡

ＳＤ2762 溝跡（第 126・128 図）

Ⅴ区北東部で検出した「Ｌ」字形の溝跡である。東西 21.4m分を確認した。ＳＫ2761 土壙、ＳＦ3485



第126図　Ⅵ区東側の遺構

小溝状遺構群、ＳＤ2894 河川跡より新しい。

上端幅は1.0～2.4m、底面幅は0.5～1.8mで、屈曲部が最も広くなる。深さは0.4mある。底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形である。方向は東西方向の部分がほぼ真東、南北方向の部分がほぼ真北を向く。堆積土は2層に分けられ、2層は褐灰色粘土質シルト、1層は黒褐色シルト質粘土を主体としており、自然堆積とみられる。遺物は2層から土師器坏、須恵器坏・甕、赤焼土器坏（第129図7）が微量出土している。

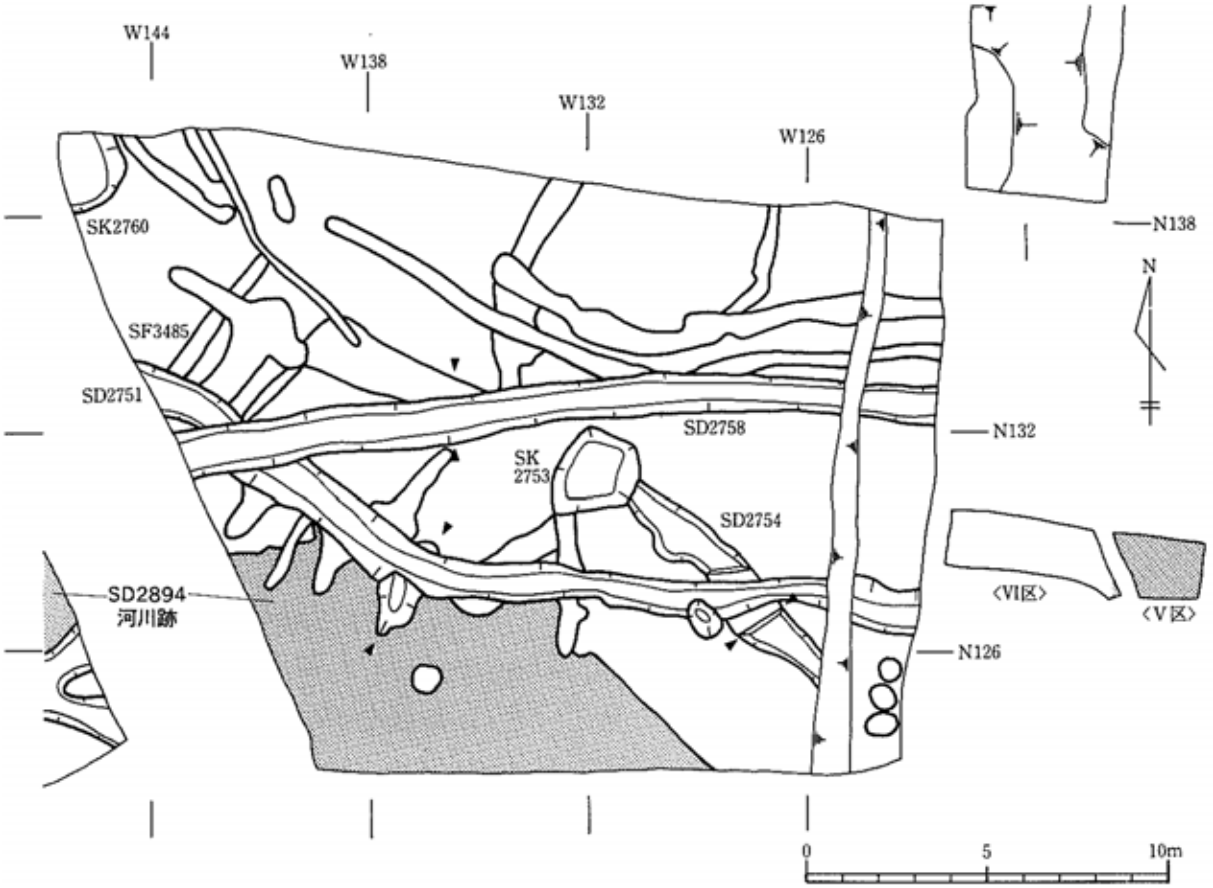
本溝の東にはＳＫ2760 土壙が位置する。堆積土の状況が似ているため、両者は一連の遺構である可能性がある。その場合、ＳＤ2762 は北を向く「コ」字形の区画溝となり、溝跡の東西の長さは約 23 mとなる。

ＳＤ2758 溝跡（第126・127図）

Ｖ区からⅥ区東側で検出した東西溝跡で、長さ 51m分を確認した。ＳＤ2751 溝跡、ＳＤ2894 河川跡より新しい。上端幅は0.9～1.6m、底面幅は0.6～1.2mで、深さは0.4mある。方向はE7°Nである。底面は平坦で、断面は皿形である。堆積土は2層に分けられる。2層は灰黄褐色砂、1層は黒褐色粘土質シルトを主体としており、自然堆積とみられる。遺物は堆積土から土師器甕が微量出土している。

ＳＤ2751 溝跡（第126・127図）

Ｖ区からⅥ区東側で検出した溝跡で、長さ 32m分を確認した。ＳＤ2754 溝跡、ＳＦ3485 小溝状遺構群、ＳＤ2894 河川跡より新しく、ＳＫ2752 土壙、ＳＤ2758 溝跡より古い。Ｖ区は東西方向をとるが、



第127図　Ｖ区の遺構

VI区との境で向きを変え、VI区では南北方向となる。上端幅が0.6～1.5m、底面幅が0.2～0.9mで、深さは0.4mある。底面はほぼ平坦で、断面形は「U」字形である。堆積土は2層に分けられる。両者とも黒褐色粘土質シルトを主体としており、自然堆積とみられる。遺物は堆積土から土師器、須恵器甕、瓦が微量出土している。

ＳＤ2754 溝跡（第127・128図）

Ｖ区東側で検出した溝跡で、長さ6.8m分を確認した。ＳＫ2753土壙、ＳＤ2751溝跡より古い。上端幅が0.7～1.5m、底面幅が0.6～1.3mで、深さは0.3mある。方向はN44°W前後である。断面形は舟底形である。堆積土は3層に分けられる。3層は黒褐色粘土質シルト、1・2層は暗灰黄色～暗オリーブ褐色粗砂を主体としており、自然堆積とみられる。遺物は堆積土から土師器台付甕（第129図1）・器台（第129図2）・甕（第129図3）が出土している。

（3）小溝状遺構群

ＳＦ3484 溝状遺構群（第126図）

Ｖ区中央部で検出した東西方向に平行して延びる小溝群である。検出長は最大2.8m、間隔は0.2～0.4mで、7条確認している。小溝の上端幅は0.6m前後、底面幅は0.3mほどで、深さは0.3mある。方向はほぼ真東を向く。底面には激しい凹凸があり、断面形は「U」字形である。堆積土は地山ブロックを少量含む黒褐色粘土質シルトである。遺物は堆積土から回転糸切りの須恵器坏、赤焼土器坏が微量出土している。

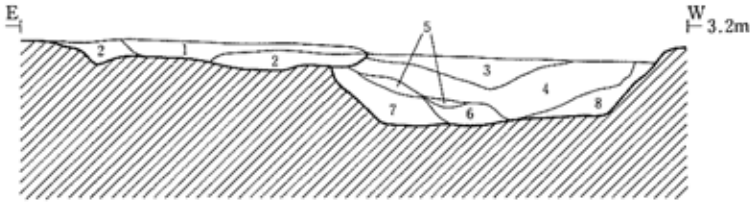
ＳＦ3485 小溝状遺構群（第126図・第127図）

Ｖ区西側からVI区東側で検出した南北に平行して延びる小溝群である。ＳＤ2894河川跡より新しく、ＳＤ2751・2758・2762溝跡より古い。検出長は最大8.7m、0.3～0.6m間隔で14条確認している。上端幅は0.2～0.5m、底面幅は0.1～0.4mで、深さは0.2mある。方向はN32°Eである。底面は凹凸があり、断面形は「U」字形である。堆積土は地山ブロックを少量含む黒褐色粘土質シルトである。遺物は出土していない。

（4）河川跡

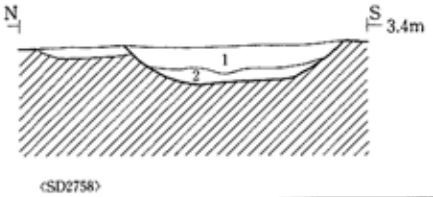
ＳＤ2894 河川跡（第126・127図）

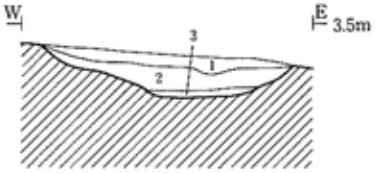
VI区東側からＶ区西側で検出した河川跡である。ＳＫ2761土壙、ＳＤ2751・2758・2762溝跡、ＳＦ3485小溝状遺構群より古い。Ｖ区中央を南北に縦断し、いったん調査区外にぬけ、再びVI区南東隅からＶ区南西隅にあらわれる。VI区中央部付近で断ち割ったところ、断面から2時期の変遷を確認している。上端幅は3.2～6m、深さは1.5mある。堆積土は粗砂を主体としており、最下層付近は砂層とスクモ層が互層をなす。遺物は以前におこなった試掘調査で、遺構確認面から複合口縁の土師器壺（第129図4）が出土している。



〈SK2761・SD2762〉

層No.	土色・土性	混入物など	備考
1	黒褐色(2.5Y3/2)シルト質粘土	地山・砂粒を若干含む	SD2762 1層
2	褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト	砂粒を多く含む	SD2762 2層
3	黒褐色(2.5Y3/2)粘土質シルト	砂粒・炭化物を若干含む	SK2761 1層
4	黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルト	砂粒を含む	SK2761 2層
5	黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルト	砂粒を多く含む	SK2761 3層
6	黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト	砂粒を含む	SK2761 4層
7	褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト	砂との互層	SK2761 5層
8	黒褐色(2.5Y3/2)粘土質シルト	黒色粘土との互層、地山を含む	SK2761 6層





0 1m

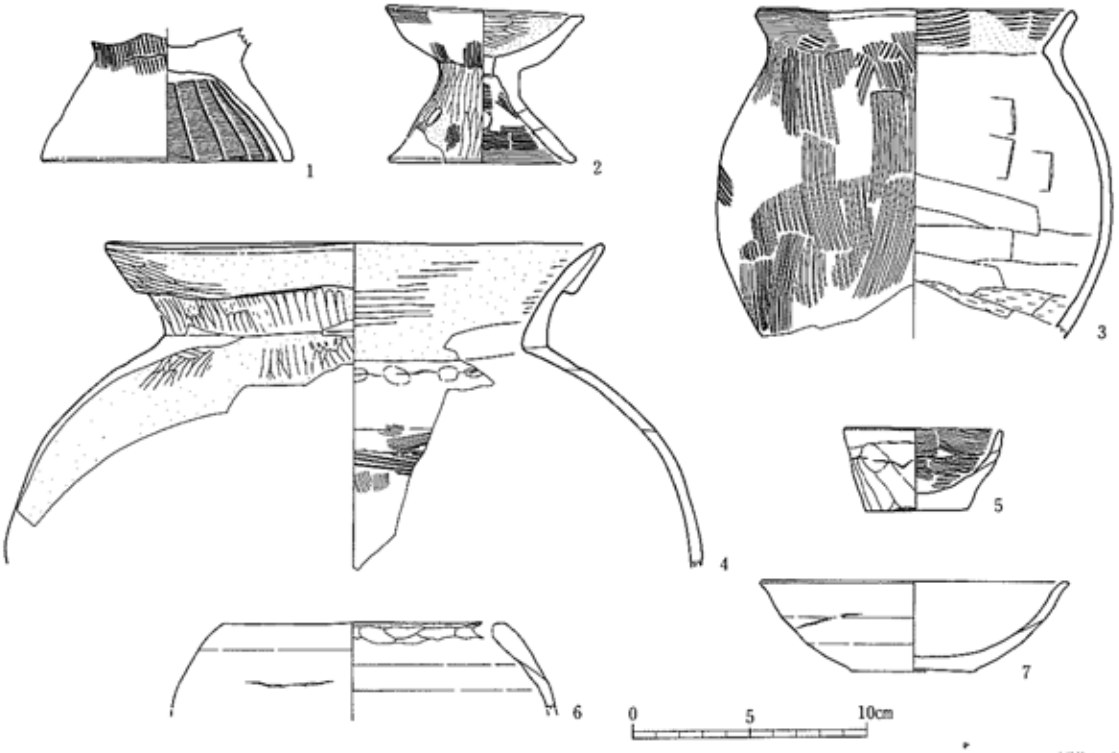
〈SD2758〉

層No.	土色・土性	混入物など
1	黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト	細砂をラミナ状に含む
2	灰黄褐色(2.5Y4/2)砂	細砂をラミナ状に含む

〈SD2754〉

層No.	土色・土性	混入物など
1	暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)粗砂	地山を含む
2	暗灰黄色(2.5Y4/2)粗砂	地山を若干含む
3	黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルト	

第128図　SK2761 土壙、SD2754・2758・2762 溝跡断面図



(単位：cm)

No.	種別	出土遺構・層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	分類	写真図版
1	土師器・台付甕	SD2754・1層	外面：〔台〕ハケメ→ナデ　内面：〔甕〕ヘラナデ〔台〕ヘラナデ	–	10.8	–	一部		
2	土師器・鉢台	SD2754・堆積土	外面：〔台〕ナデ→ヨコナデ、ハケメ　〔脚〕ハケメ、ヨコナデ→ヘラミガキ→貼付　内面：〔台〕ヨコナデ→ヘラミガキ→貼付　〔脚〕ハケメ→ヨコナデ	8.4	8.0	(6.5)	4/5		28－2
3	土師器・甕	SD2754・堆積土	外面：〔口～胴〕ヨコナデ→ハケメ　内面：〔口〕ハケメ〔胴〕ヘラナデ→手持ちヘラケズリ	(13.6)	–	–	一部		
4	土師器・壺	SD2894・確認面	外面：〔口〕ヨコナデ、ヘラケズリ→ヘラミガキ　〔体〕ハケメ→ヘラミガキ　内面：〔口〕ヘラミガキ〔体〕ハケメ→ナデ	21.2	–	–	1/5		
5	ミニチュア土器	SK2761・1層	外面：指オサエ→粗いナデ　内面：粗いナデ	6.8	4.4	(3.5)	4/5		36－8
6	須恵器・壺	SK2760・堆積土	内外面：ロクロナデ　口～肩部の割れ口を研磨して再利用	–	–	–	一部		
7	赤焼土器・皿	SD2762・2層	外面：ロクロナデ、回転糸切り　内面：ロクロナデ(コテ仕上げ)	(13.2)	(5.2)	3.9	1/4	A IV	

第129図　SK2760・2761 土壙、SD2754・2762 溝跡、SD2894 河川跡出土遺物

第Ⅳ章　考 察

今回の調査で発見した遺構は竪穴住居跡 8、掘立柱建物跡 68、掘立柱列跡 2、東西道路跡 1、区画溝跡 9、土壙 48、溝跡 41、池跡 1、井戸跡 19、方形周溝墓 2、水田跡 1、小溝状遺構群 15 などがある。出土遺物には土師器・須恵器・陶器・磁器・石製品・木製品があり、総量はテンバコで 140 箱になる。これらを年代別にみると古墳時代前期、古墳時代中期、奈良・平安時代、江戸時代以降に大別できる。以下、時代別に遺物や遺構の検討をおこない、最後にこれまでの調査成果との比較検討をとおして時代ごとの概要をまとめることとする。

Ａ．古墳時代

1．前　期

ａ．土　器

すべて土師器で、器種には坏・器台・高坏・鉢・壷・甕・甑・ミニチュア土器がある。遺構ごとにみてみると、ＳＸ2823 方形周溝墓をのぞいて出土点数が少なく、遺構ごとの比較や共伴関係を考えることが難しい。そこで、ここではＳＸ2823 出土土器の検討をおこない、他の遺構については年代を考える際に個別に考える。

①ＳＸ2823 出土土器の特徴（第 130 図）

坏　：器高に対して口径が大きいものかほぼ同じものを坏とする（註 1）。6 点ある。口径が 15 ㎝以上の大型品と 11 ㎝以下の小型品がある。器壁が薄く両面の調整はミガキが主であり、仕上げが丁寧である。

【小　型】平底で体部が屈曲する。体部中央が屈曲し、口径に対して底径が著しく小さいもの（1・2）と、体部上位が屈曲するもの（3）とがある。

【大　型】体部の屈曲が強いもの（4・5）と弱いもの（6）とに分けられる。

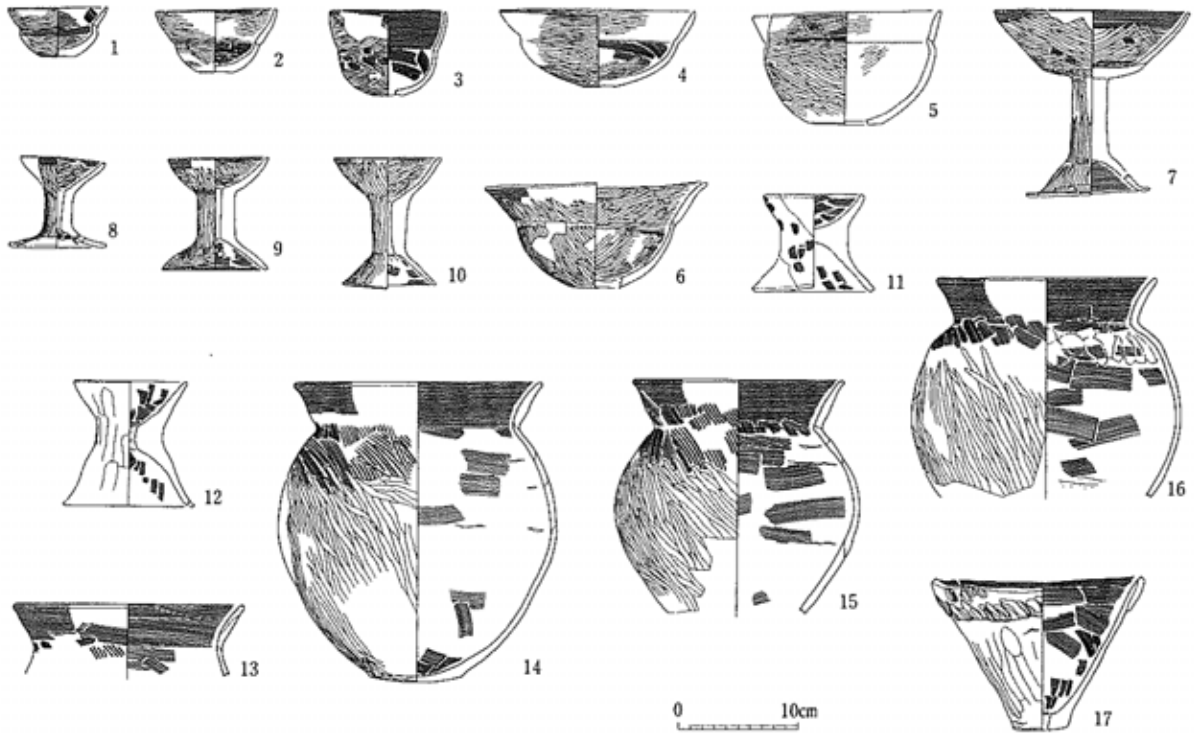
器台：6 点ある。高坏形で薄手の精製品と鼓形で厚手の粗製品がある。

【高坏形】脚上部が中実棒状で、下部が円錐状になる（8～10）。いずれも受け部に貫通孔があり、脚下部に円窓を 3～5 個もつ。外面の最終調整はヘラミガキであり、全体に仕上げが丁寧である。

【鼓　形】貫通孔があるもの（12）とないもの（11）がある。外面の調整はハケメやナデで、高坏形に較べて仕上げが雑である。使用によって、器面があれている（註 2）。

高坏：3 点あるが、全体の器形がわかるものは 1 点のみである。坏部は下端に稜をもち、直線的に開く。脚部は上部が中実棒状で、下部が円錐状である（7）。破片資料は脚上部が中実で、下方へゆるやかに開き、下部は円錐状となる。

甕　：7 点ある。全体の器形がわかるものは少ない。底部は平底である。口縁部が「く」字状に屈曲して外反するもの（14～16）と頸部の屈曲が弱いもの（13）がある。前者は最大径が胴部中央にあり、胴部は球形で、胴部外面にヘラミガキが施されるものがあり、作りが丁寧である。



第130図　SX2823 方形周溝墓出土土器

甕：1 点ある。鉢状で単孔式のものである（17）。複合口縁をもち、そこに指頭によるオサエが施されている。

②ＳＸ2823 出土土器の編年的位置

東北地方南部の古墳時代前期の土師器編年は、氏家和典によって第１型式の「塩釜式」が設定された（氏家：1957）。その後の宮城県内における塩釜式土器の編年案をみてみると、まず、蓄積された資料をもとに２段階の変遷が考えられた。代表的なものとしては加藤道男の論考（加藤：1989）がある（註 3）。丹羽茂は宮前遺跡の報告における３段階の変遷案（丹羽：1983）を踏まえ、名取市今熊野遺跡の報告で宮城県内の一括資料を集成・検討し塩釜式土器を3段階4時期に細分した（丹羽：1985）。この丹羽案は妥当なものとして各氏による編年案の基軸となる。

丹羽案以後の論考としては、古川一明・白鳥良一による３段階案（古川・白鳥：1991）をへて、次山淳よって高坏・小型丸底鉢・甕の３器種の変遷を軸とした６段階の細分案が示された（次山：1992）。最新ものとしては、辻秀人の丹羽案や次山案を踏まえた器形ごとの型式学的な変遷を追求した編年案がある（辻：1995）。この丹羽・次山・辻による編年案に対して佐久間公平は、佐沼城の報告でＳＤ105 出土一括資料をもとに疑義を提示し、「塩釜式」後半段階の編年について再考を促している（佐久間・小村田：1995）。

〈ＳＸ2823 出土土器の位置付け〉

ＳＸ2823 出土土器と組成を含めて直接対比できる土器群は今のところ確認されていない。そこで、器種ごとに検討を加え、最後に全体の位置付けについて考える。

坏は大型で体部中央が屈曲し、口縁部が外反するものが志波姫町鶴ノ丸遺跡５号住居跡（手塚:1981）に類例があり、丹羽編年のⅡＢ段階、辻編年のⅢ―3 期、小型で体部が屈曲し、外面にヘラミガキが施されるものは石巻市田道町遺跡３号住居跡（庄司・芳賀・岡：1992）や鶴ノ丸遺跡７号住居跡（手塚：前掲）に類例があり、丹羽編年のⅡＢ段階、辻編年のⅢ―1 期に位置付けられている。

鼓形の器台は鶴ノ丸遺跡６号住居跡（手塚：前掲）に類例があり、丹羽編年のⅡＢ段階、辻編年のⅢ―3 期に、坏部は下端に稜をもって直線的に開き、脚上部は棒状中実で、下部が円錐状の高坏は古川市留沼遺跡第３地点（手塚：1980）に類例があり、丹羽編年のⅢ段階、辻編年のⅢ4 期、単孔式で鉢形、複合口縁をもち、底部が厚い甑は留沼遺跡第４層上面（手塚：前掲）に類例があり、丹羽編年のⅢ段階、辻編年のⅢ―4 期に位置付けられている。

これらの器種のうち複数に類例が認められるものは、鼓形の粗製器台、坏部は下端に稜をもって直線的に開き、脚上部は棒状中実で、下部が円錐状の高坏、鉢形で複合口縁をもち、底部が厚い甑が名取市西野田遺跡第５住居跡（丹羽・阿部・小野寺：1974）や迫町佐沼城跡ＳＤ105 溝跡（佐久間・小村田：前掲）に類例があり、西野田遺跡は丹羽編年のⅢ段階、辻編年のⅢ―4 期に位置付けられている。

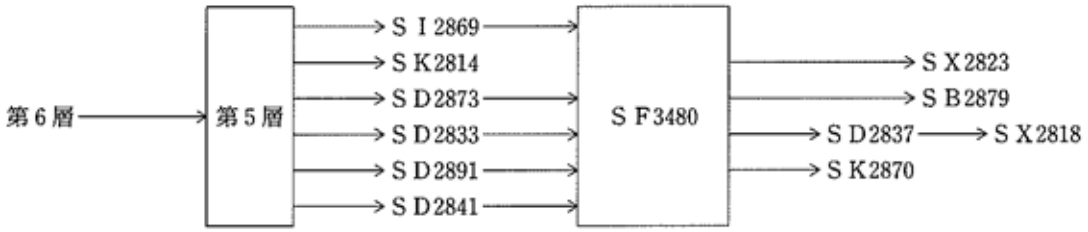
全体として丹羽編年のⅡＢ～Ⅲ段階、辻編年のⅢ―1～4 段階に相当し、このうち粗製器台・高坏・甑のセットは新しい様相を示している。したがって、従来の編年案では時間的に幅を持つことになるが、ＳＸ2823 周溝底面出土土器は方形周溝墓に供献されたものであり、きわめて一括性が高い資料である。塩釜式土器の後半段階については佐沼城の報文で編年案に対して再考の必要性が唱えられており（佐久間・小村田：前掲）、ここではＳＸ2823 出土土器が塩釜式土器の後半段階に属し、その中でも新しい傾向をもつことを指摘するにとどめる。

ｂ．遺　構

古墳時代前期の遺構はＸ区の竪穴住居跡１、方形周溝墓２、掘立柱建物跡１、土壙２、溝跡５、小溝状遺構群１、Ｘ～XI区の水田跡１、Ｖ・VI区の溝跡１、河川跡１などがあり、Ｘ区に多く分布する。

①重複関係と年代

Ｘ区における古墳時代前期の遺構重複関係を整理すると以下のようになる。



第131図　古墳時代前期の遺構重複関係

このうち、土器がまとまって出土したＳＸ2823 方形周溝墓は塩釜式土器後半段階に位置付けられた。ここでは他の遺構の年代について検討する。ＳＸ2818 方形周溝墓やＳＩ2969 住居跡からは、単純口縁で口頸部が長い壷が出土している。類例は留沼遺跡第１住居跡や竪穴遺構（手塚：前掲）にあり、塩

釜式の後半段階とみられる。その他の遺構や旧表土出土土器をみても丹羽編年のⅡA段階以降のものでありⅡB段階、Ⅲ段階のものが主体を占めることから、Ｘ区の古墳時代前期の遺構はいずれもその後半段階とみられる。

②方形周溝墓について

〈特　徴〉

ＳＸ2823 の周溝を含めた規模は 8.9×8.9mで、溝の深さは均一であり、陸橋部はない。ＳＸ2818 は 13.8×9.3m以上で、周溝の西側中央に幅が狭く、深さが浅くなる部分がある。遺物は台状部の縁辺におかれたものが周溝内に落ち込んだ状態で出土しており、とくにＳＸ2823 は出土状況から土器は台状部の北辺に並べられたと考えられる。

なお、ＳＸ2818 の台状部ほぼ中央にＳＢ2979 建物跡がある。両者の新旧関係は不明であるが、位置とともに方向がほぼ同じであることから、ＳＢ2879 はＳＸ2818 にともなう可能性がある。方形周溝墓の内部に掘立柱建物が検出される例は埼玉県行田市小敷田遺跡をはじめとして埼玉県、千葉県、東京都に類例があり、葬送儀礼にともなう施設であるとの指摘がある（吉田稔ほか：1991）。

〈土器の設置状況〉

第 132 図はＳＸ2823 の土器出土状況である。これをみると土器は方形周溝墓の周溝底面、北側から東側北端部にかけて出土しており、いずれも盛土の崩壊とともに内側から周溝内へ転げ落ちたものとみられる。土器は大きく五つのブロックからなり、それぞれを器種別にみるとＡ（№.1～6）の北西コーナー付近は坏A類、器台A類、甕が、Ｂ（№.7・8）の北辺中央部やや西側には甕と甑が設置されたと考えられる。ＣからＥ（№.9～17）はブロックをとび越えての接合関係が小型品 4 点（坏A類、器台A類、器台Ｂ類、高坏A1 類）で認められることから、本来は北東コーナー付近に設置されていたと考えられる。坏A・Ｂ類、器台Ａ・Ｂ類、高坏A1 類、甕がある。以上のことから、土器は周溝内側の北西コーナー付近から北東コーナー付近にかけて設置されたと考えられる。

ここで坏と器台についてみると、北東コーナー付近では大型の坏A類と高坏形の精製器台A類のみ認められる。一方、北東コーナー付近ではこれに加えて小型の坏Ｂ類、粗製器台Ｂ類がある。したがって、北西と北東のコーナーでは、供献土器のうち坏と器台に違いが認められる。

〈宮城県内の周溝墓との比較〉

第 2 表は宮城県内の周溝墓を集成したものである（註 4）。平面形は方形が主体を占め、時期は古墳時代前期に集中しており、とくに後半段階に多い。これらと山王遺跡の方形周溝墓を較べてみると、ＳＸ2823・2818 も前期の後半段階に属する。規模は 10～15m前後のものが多く、これに対しＳＸ2823 が 8.9mで小型の部類に入り、ＳＸ2819 は 13.8mで平均的な大きさといえる。

供献された土器は、20mを超える大型の周溝墓では甕が主体で、なかでも複合口縁や有段口縁をもつもの、底部や胴部が穿孔され、仮器化したものが目に付く。したがって、ＳＸ2918 の盲孔をもつ壷も墓への供献の際、仮器化したものと考えられる。一方、ＳＸ2823 は小型精製器種（小型坏・小型器台）と坏・高坏、煮炊具の甕・甑、炉器台と考えられる鼓形器台という組合せである。日常器の坏や

遺跡名	所在地	遺構名	平面形	規模(長軸×短軸:m)	陸橋	出土遺物	時期	備考
鶴ノ丸遺跡	志波姫町	第1方形周溝墓	方形	10.4×9.2	無	複合口縁壺（焼成後体部穿孔）、壺、甕	後半	・8基の周溝墓は群集しており，台地周縁部に位置する。同時期の住居はその内側にあり、両者の接点では重複するものがある。➡周溝墓と住居は限定された時間幅の中で占地を変えている。 ・1号墓の複合口縁壺は、南東隅の溝底面に据えられていた可能性がある。
		第2方形周溝墓	方形	10.3×8.5以上	不明		（後半）	
		第3方形周溝墓	方形	14.5×9.6以上	不明	甕	後半	
		第1円形周溝	円形	(10.5)	無	壺、甕	後半	
		第2円形周溝	円形(楕円)	6.7×6.1	無	壺、甕破片	（後半）	
		第3円形周溝	円形	(7.5)	不明		（後半）	
		第4円形周溝	円形	(12.0前後)	不明		（後半）	
		第5円形周溝	円形	(12.2)	不明		（後半）	
宇南遺跡	志波姫町	方形周溝	方形	10.2×9.9	無		（後半）	約100m離れた位置で、後半段階の住居跡3軒が発見されている。
東館遺跡	高清水町	方形周溝墓	方形	15.4×13.2	無	坏（焼成後体部穿孔）	後半	
熊野堂遺跡	中新田町	方形周溝墓	前方後方形	【台状部】主軸長：31.5 前方部幅：（最大）13.4 （最小）5.5 後方部幅：18.0 周溝幅：0.8～9.5	有	坏、器台（脚部） 複合・有段口縁壺（焼成前底部穿孔） 壺（頸部に凸帯）	前半	・陸橋は前方部と後方部にある。 ・遺物は周溝内の特定の部分から出土。 ・土器は底部穿孔の壺が主体を占める。 （熊野堂遺跡は現在整理中であり、データについては今後変更される可能性がある。）
新山崎遺跡	石巻市	第1号方形周溝墓	方形	14.5×12.0	無	小型甕	（前半）	・3基は隣接する。 ・2号墓の遺物は南側周溝から出土（ただし周溝東側は未調査）。（新山崎遺跡は現在整理中）。
		第2号方形周溝墓	方形	10.5×6.6以上	不明	小型壺（内面に赤彩）、甕	（前半）	
		第3号方形周溝墓	方形	8.0以上×3.0以上	不明	壺(外面に赤彩・口縁部に縄文・頸部に凸帯・焼成後底部穿孔か)	前半	
郷の目窪遺跡	大和町	第1号方形周溝墓	方形	一辺約13.0	無			・2基は隣接する。 （現在整理中であり、データは変更される可能性あり。）
		第2号方形周溝墓	方形	14.0以上×6.5以上	不明	複合口縁壺（焼成前底部穿孔）	後半	
多賀城跡	多賀城市	ＳＤ993	方形	19.5×17.0以上	有？	壺、甕	後半	・北西隅と北東隅が陸橋状。
山王遺跡	多賀城市	ＳＸ2823	方形	8.9×8.9	無	坏、器台、高坏、壺、甕、甑	後半	・同時期の住居と隣接し，畑と重複➡限られた時間幅で占地を変えている。 ・2基は隣接し、台状部に盛土を確認。
		ＳＸ2818	方形	13.8×9.3以上	不明	壺（胴部に穿孔）、甕	（後半）	
今熊野遺跡	名取市	第1号方形周溝墓	方形	24.0×21.4	有	複合・有段口縁壺（焼成前底部穿孔）、壺	後半	・方形周溝墓を10基確認。互いに隣接する。 ・方形周溝墓は同時期の住居より一段高い台地に立地し，20基程度の群集形態をとると推定される。これらは限られた時期に連続して営まれたとみられる。 ・土器は周溝から出土しているが、本来は台状部に据えられていたとみられる。 ・1号墓は三隅に陸橋をもつ。複合・有段壺は6個体出土しており、いずれも底部穿孔とみられる。 ・7号墓の周溝はL字状。隣接する4号墓と周溝を共有している可能性あり。
		第2号方形周溝墓	方形	一辺約14.4	不明		（後半）	
		第4号方形周溝墓	方形	9.0×8.7	無	坏、壺（焼成後胴部穿孔）	後半	
		第5号方形周溝墓	方形	9.8×6.2以上	不明		（後半）	
		第6号方形周溝墓	方形	14.0以上×8.0以上	不明	小型壺	（後半）	
		第8号方形周溝墓	方形	7.0×6.5以上	不明		（後半）	
		第9号方形周溝墓	方形	南北12～13	有？		（後半）	
		第10号方形周溝墓	方形	一辺約20.0	不明		（後半）	
五郎市遺跡	名取市	第1号方形周溝墓	方形	16.0×14.6	無			・尾根上で方形周溝墓7基、円形周溝墓1基確認。互いに隣接する。この南には方墳2基、円墳3基からなる宇賀崎古墳群がある。宇賀崎1号古墳の年代は塩釜式土器後半段階。 ・1号方形周溝墓に主体部？（楕円形、1.8×1.2）。 ・5号方形周溝墓は南東部に陸橋。 ・1号円形周溝墓は台状部に盛土。主体部？（隅丸方形、2.2×1.0）。
		第2号方形周溝墓	方形	4.2以上×2.2以上	不明	高坏		
		第3号方形周溝墓	方形	14.0×11.0	無			
		第5号方形周溝墓	方形	17.0×14.5	有	坏、壺（単純口縁・頸部に凸帯）、管玉	前半	
		第7号方形周溝墓	方形	8.3×7.0	無	坏	（後半）	
		第1号円形周溝墓	円形	径15.6	無	有段口縁壺	（後半）	
西野田遺跡	名取市	第1円形周溝	円形	径17.5	不明		（後半）	・同時期の住居は台地平坦部にあり，円形周溝墓は南縁斜面に位置する➡居住域と墓域の占地のあり方が明。
		第2円形周溝	円形	径14.5	無		（後半）	
戸ノ内遺跡	仙台市	方形周溝墓	方形	26.0×24.5	無	有段口縁壺（胴部に刻目ある凸帯・胴部に鋸歯文） 複合口縁壺（頸下部に円形浮文）、小型甕、高坏	前半	・同時期の住居跡4軒は北側に隣接する。 ・有段口縁壺は周溝の壁に正位の状態で埋納。
安久東遺跡	仙台市	方形周溝墓	前方後方形	【台状部】主軸長：21.5以上 前方部幅：（最小）4.5 （最大）7.0以上 後方部幅：12.2 周溝幅：1.4～3.5	不明	有段口縁壺（焼成前底部穿孔・赤彩） 高坏・甕	後半	・同時期の住居跡2軒は75mほど離れている。 ・遺物は周溝の特定の部分から出土。 ・土器は底部穿孔の有段口縁壺が主体を占める（10個体図示）。
藤田新田遺跡	仙台市	ＳＤ105	方形	12.0×11.5	不明	壺（赤彩あり）、台付甕、甕	（前半）	・互いに隣接する➡周辺が墓域か。 ・2基とも南側で周溝が途切れている。
		ＳＤ106	方形	13.5×8.4以上	不明	坏、高坏、壺、甕	前半	
紀向遺跡	仙台市	1号方形周溝墓	方形	7.0以上×6.0以上	不明			・遺跡東側は方形周溝墓や方墳・円墳からなる古墳群が形成されている。 ・方形周溝墓と古墳との重複関係は前者が古い（1号墓、3号墓→3号墳）。 ・方形周溝墓と方墳はほぼ同じ方向を向く。 ・5号墓は北側に陸橋。 （紀向遺跡は現在整理中であり，遺構の解釈やデータについては今後変更される可能性がある。）
		2号方形周溝墓	方形	9.5～10.5×8～10	不明			
		3号方形周溝墓	方形	9.5以上×9.5以上	無			
		4号方形周溝墓	方形	9.5～11×9.5～11	不明	甕		
		5号方形周溝墓	方形	10.0～11.0×5.0以上	有			
中在家南遺跡	仙台市	1号方形周溝墓	方形	12.2以上×11.4以上	不明	鉢	（後半）	・方形周溝墓は4基あり，他にその可能性があるものが1基ある。 ・周溝墓の分布範囲は東西110mで、この周辺が墓域であった可能性がある。
		2号方形周溝墓	方形	16.0以上×13.0以上	不明	壺	（後半）	
		3号方形周溝墓	方形	13.0前後×8.0以上	不明	壺（赤彩のものを含む）	（後半）	
		4号方形周溝墓	方形	8.0以上×3.5以上	不明	壺	（後半）	
四郎丸遺跡	仙台市	1号方形周溝墓	方形	26.0以上×6.0以上	不明	有段口縁壺	後半	・周溝墓の分布範囲は東西150m。この北200mには戸ノ内遺跡の方形周溝墓がある。
		2号方形周溝墓	方形	14.0以上×6.0以上	不明		（後半）	
		3号方形周溝墓	方形	一辺12.0以上	不明	坏	（後半）	
		(2次)1号方形周溝墓	方形	一辺27.0前後	不明	高坏、有段口縁壺、壺、甑、ミニチュア土器	後半	

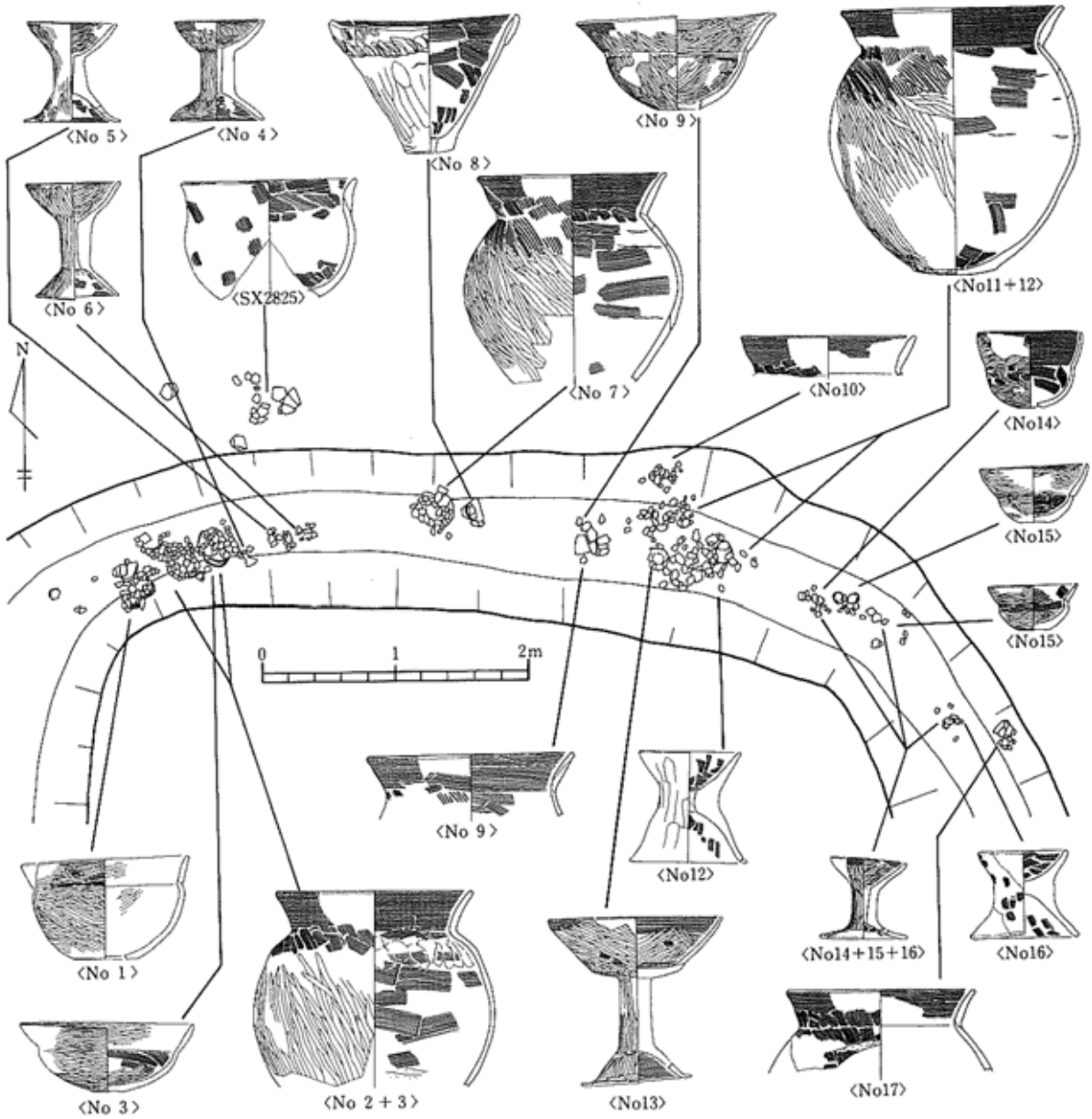
第２表　宮城県内の周溝墓

高坏、煮炊具が供献されるあり方は他の周溝墓にも類例があるが、ＳＸ2823 のように小型精製器種が供献される例は他にない。

C. まとめ

古墳時代前期の遺構はＸ区の竪穴住居跡１、方形周溝墓２、掘立柱建物跡１、土壙２、溝跡５、小溝状遺構群１、Ｘ～XI区の水田跡１、Ｖ・VI区の溝跡１、河川跡１などがあり、Ｘ区に多く分布する。

Ｘ区は八幡地区の北西部にあたり、南の東西にのびる自然堤防から北へ張り出した微高地の尾根上で竪穴住居跡、方形周溝墓のほか土壙や溝跡、小溝状遺構群などを検出した。このうち竪穴住居、方形周溝墓、小溝状遺構群には住居→小溝状遺構群→方形周溝墓という新旧関係があり、やせ尾根状の



第132図　SX2823 周溝内の土器出土状況（土器スケール：1/6）

微高地は居住域から耕作域、さらに墓域へと変遷している。

微高地の標高は 3.8m前後で、東西ともゆるやかに傾斜し、東は湿地（標高 3.2m）になるのに対し、西は東西 39mにわたって水田として利用されている（註 5）。水田の標高は 3.1～3.5mで、微高地との比高差は 30～70 ㎝ある。水田の西は湿地となる。

2. 中　期

a. 土　器

土師器と須恵器があるが、後者は甕が１点のみ出土している。これらのうち、図示できた土器を中心に整理・分類し、それらの組合せや特徴から年代について検討をおこなう。

①分　類（第133図）

〈土師器〉

器種には坏・高坏・蓋・壷・甕・甑がある。

坏：器高に対して口径が大きいものかほぼ同じものを坏とする。口縁部や体部の形態、法量から以下のように分類した。

【A類】底部から緩やかに口縁部にいたるもの。丸底と平底がある。細部の特徴から以下のように分けられる。

〔A1類〕口縁部が内弯するもの（1）。

〔A2類〕口縁部が直立気味になるもの。器高が浅いもの〈A2ａ類〉（2・3）と深く椀状となるもの〈A2ｂ類〉（4）がある。

〔A3類〕底部から内弯気味に立ち上がり、口縁部が外傾するもの。器高が浅いもの〈A3ａ類〉（5）と深く鉢状となるもの〈A3ｂ類〉（6）がある。

【B類】体上部が屈曲して口縁部が内傾もしくは直立気味になるもの。外面には弱い稜線ができる。丸底（7）と平底（8・9）がある。

【C類】口縁部がわずかに外反し、内面に稜線ができるもの。口縁端部ほど器壁がうすくなる。口縁部と体部の径はほぼ同じである。器高が浅い平底のもの〈C1 類〉（10）と深い椀状のもの〈C2類〉（11・12）がある。

【D類】口縁部が外傾もしくは外反するもの。丸底〈D1類〉（13）と平底〈D2類〉（14）がある。C類に較べて体部の膨らみが弱く、口縁が大きく開く。

【E類】強く膨らんだ体部に直立気味の口縁部がつくもの。内面に稜線ができる。口縁部が長いもの〈E1類〉（15）と短いもの〈E2類〉（16）とがある。

高坏：坏部は逆台形をなし、下端に稜をもつ。坏部の法量と脚部の形態から以下のように分けられる。

〈坏部〉

【A類】口径が16㎝以上の大型のもの（17・18）。

【B類】口径が14cm前後の小型のもの（19）。

〈脚部〉

【1類】柱状部が円錐形のもの。柱状部から裾部へ境をもたず連続的に移行する（20）。

【2類】柱状部と裾部の境が屈曲によって明瞭に区別されるもの。脚上部が柱実のもの〈2ａ類〉（17）と中空のもの〈2ｂ類〉（18）とがある。

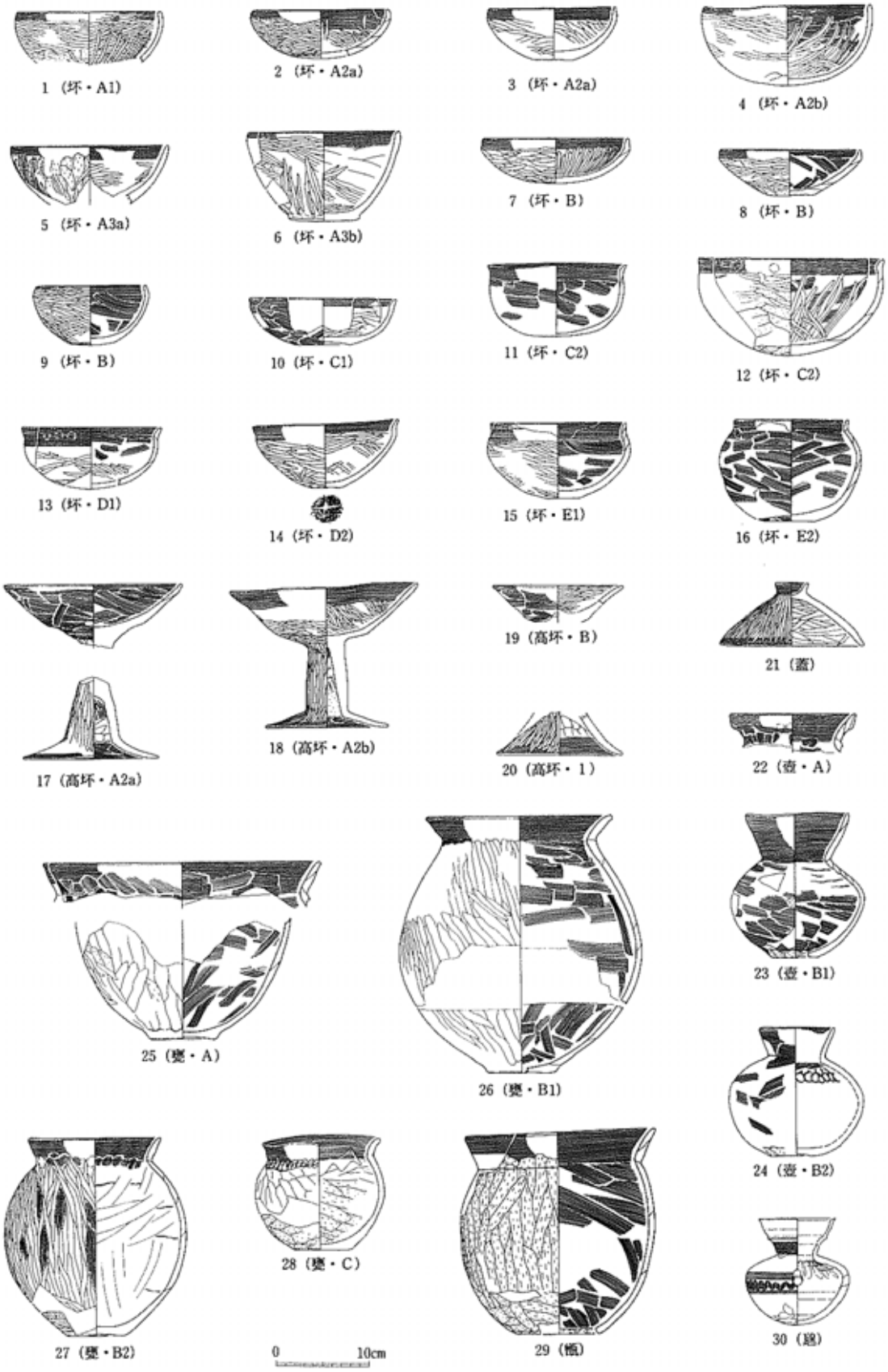
蓋：天井部から口縁部は円錐形をなし、リング状のつまみをもつ（21）。

壺：口縁部の形態から複合口縁〈A類〉と単純口縁〈B類〉に大別できる。

【A類】複合口縁の壺。頸部が短い。B類より口径が大きく器壁が厚い（22）。

【B類】単純口縁の壺。胴部は扁球状で口径が胴部径より小さく、口頸部の高さが胴部高より低い。平底。器高に対する口頸部の割合で細分できる。

〔B1類〕器高に占める口頸部の割合が大きいもの。胴部径に対する口径の割合も大きい（23）。



1～29：土師器　30：須恵器

第133図　土器分類図（古墳時代中期）

〔B2 類〕器高に占める口頸部の割合が小さいもの。胴部径に対する口径の割合も小さい（24）。

甕：器高が 12 ㎝前後の小型のもの〈C類〉とそれより大きいものとに分かれる。後者は口径が 14～20cmの中型〈B類〉と 25cm以上の大型〈A類〉に分けられる。

【A類】口径が 25 ㎝以上の大型のもの。頸部のくびれは弱く、口縁部は外傾する（25）。

【B類】口径が 14～20 ㎝の中型のもの。頸部のくびれが強いもの〈B1 類〉（26）と弱いもの〈B2 類〉（27）とがある。

【C類】器高が 12 ㎝前後の小型のもの。鉢状で頸部のくびれが弱い。くびれ部に刺突が施されている（28）。

甑：無底の甑で、胴部が丸みをもち、口径と胴部最大径がほぼ等しい（29）。

〈須恵器〉

聰：頸部に櫛描波状文。胴部は肩がよく張り、底部は尖り気味である。胴部の最も張り出したところに文様帯（平行沈線文＋櫛描波状文）があり、ここに円孔が穿たれる。胎土は精選されている（30）。陶邑ＴＫ216 型式（田辺：1981）と考えられる。

②出土土器の組合せ

分類した土器を各遺構ごとにまとめたのが第 3 表である。これをみるとＳＩ2983・3022 住居跡、ＳD3369 溝跡を除いて出土点数が少なく、遺構ごとの比較や共伴関係を考えることが難しい。そこでＳＩ2983・3022、ＳD3369 の検討をおこない、その成果をもとに他の遺構出土土器について考えたい。

〈ＳＩ2983 住居跡出土土器〉（第 134 図）

坏A2ａ・D2 類、高坏は全体の器形がわかるものがA2ａ・A2ｂ類、ほかに坏部はA類、脚部が2ａ・2ｂ類、壷A類、甕A・B1 類がある。

〈ＳＩ3022 住居跡出土土器〉（第 134 図）

坏A2ａ・C1・D1ｂ類、高坏は全体の器形がわかるものがA2ａ類、ほかに坏部はA・B類、脚部が1・2ａ類、蓋、壷B1 類、甕B1・B2・C類がある。

〈ＳD3369 溝跡出土土器〉（第 134 図）

坏A2ａ・A3ａ・A3ｂ・B・D1ａ・E1・E2 類、甕B2 類がある。

ＳＩ2983・3022 出土土器は坏A2ａ類、高坏A2ａ類、甕B2 類がともにみられ、複数の器種の異なる細別類型に共通性が認められる。また、ＳD3369 出土土器は坏A2ａ・B類、甕B2 類を主体としており、坏A2ａ類、甕B2 類はＳＩ2983･3022 出土土器群の特徴と共通する。したがってＳＩ2983･3022、ＳD3369 出土土器は一つのまとまりをもった土器群と考えられる。この場合、器種の組成にかたよりがあるＳD3369 出土土器は溝への廃棄の際、器種の選択がおこなわれた、もしくは欠落している器種は他の場所に捨てられたと考えられる。

〈ＳＩ2983・3022、ＳD3369 出土土器の特徴〉

器種には坏・高坏・蓋・壷・甕がある。高坏の坏部はいずれも逆台形で、下端に稜をもつ。底部か

遺構No		土師器																												須恵器
		坏												高坏(坏部)		高坏(脚部)			高坏		蓋	壺			甕				甑	瓶
		A1	A2a	A2b	A3a	A3b	B	C1	C2	D1	D2	E1	E2	A	B	1	2a	2b	A2a	A2b		A	B1	B2	A	B1	B2	C		
SI2983	P5底面																			2					1					
	P5上面										1			1			1		1											
	床面		1											1			1								1	1	1			
	堆積土		2															1				1								
SI2968(床面)										1																				
SI3395(掘方底面)		1		1					1																		1			
SI3022	P6・P7底面		1														1													
	床面							1						1	1				1		1					2	1	1		
	堆積土								1							1							1							
SI3012(2層上面)											1													1			1		1	
SI3293(周溝)			1																											
SI3525(床面)																								2						
SD3369	3層		2		1	1	2			2		1	1														2			
	2層		1				1																							
SK3041																								2			1			
SK3071							1																							
SD3540																														1

第3表　遺構出土土器一覧表〔古墳時代中期〕

ら屈曲することなく口縁部にいたる坏A類、大型の坏部に脚上部が中実で裾部が屈曲する高坏A2ａ類、中型で頸部のくびれが弱い甕B2類を主体とする。

これに坏では口縁部が屈曲するB類、口縁部がわずかに外反し内面に稜をもつC類、口縁部が外反するD類、強く膨らんだ体部に直立気味の口縁がのるE類、高坏は大型の坏部に脚部が中空で裾部が屈曲するA2ｂ類、坏部が小型のB類、脚部が円錐形の１類、天井部から口縁部は円錐形をなし、リング状のつまみをもつ蓋、壷は複合口縁のA類、中型で口径が胴部径より小さいB1 類、甕は中型で頸部のくびれが強いB1類、小型のC類がくわわる。

〈他の遺構出土土器〉

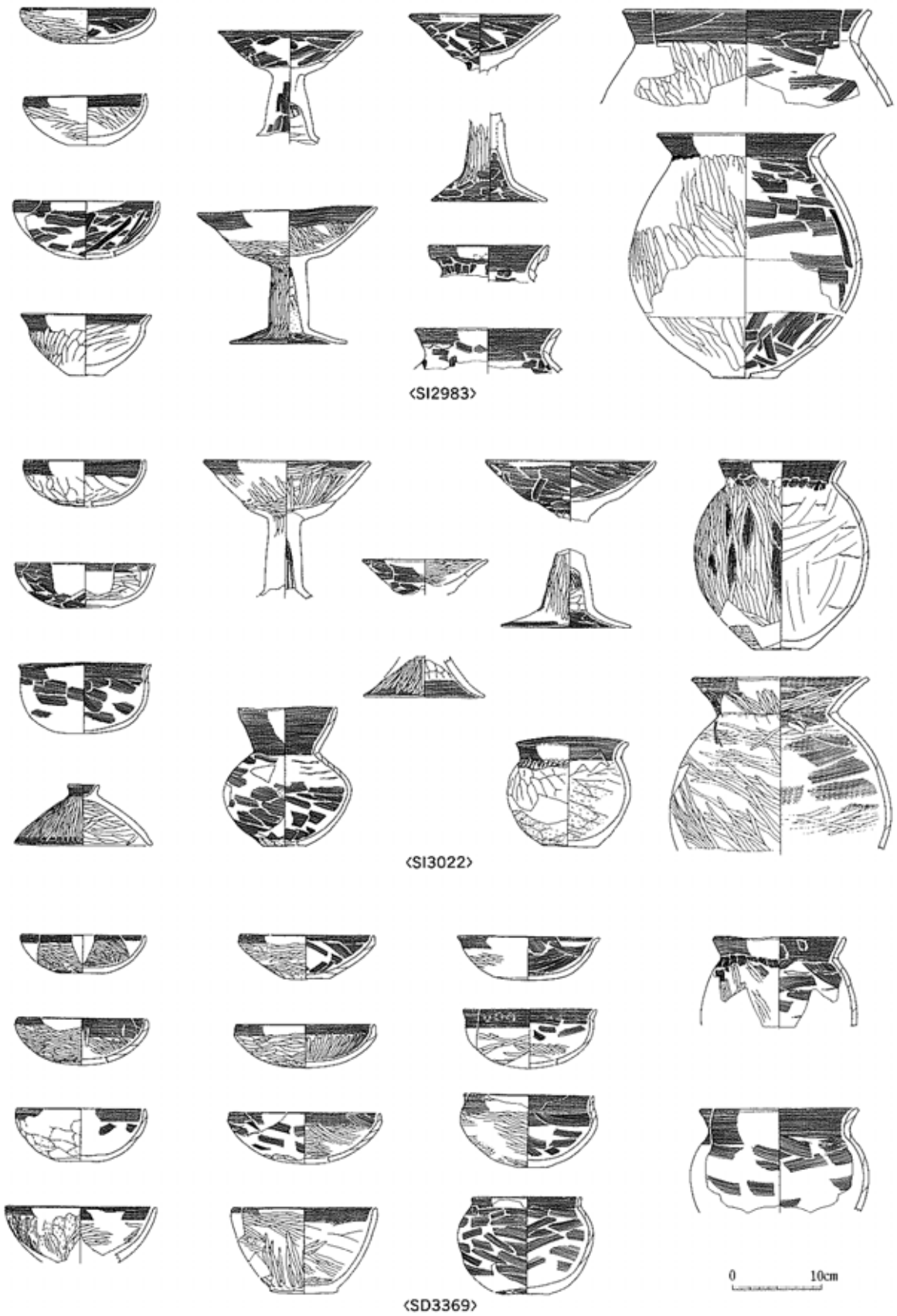
次にある程度土器が出土した遺構についてみてみる。ＳＩ3395からは坏A1・A2ｂ・C2類、甕B2類が１点ずつ出土している。こうした特徴はおおむねＩ群土器と共通する。ＳＩ3012からは坏D2類、壷B2類、甕B2類、無底の甑が出土している。これらは2層上面に廃棄されてもので一括性がたかい。ＳＩ2983・3022、ＳD3369出土土器と比較すると、坏D2類や甕B2類は共通するが、胴部径に対する口径、器高に対する口縁部の高さが著しく小さい壷B2 類、胴部が紡錘形で無底の甑はみられない。壷B2類はＳＩ3525やＳK3041からも出土している。

ＳＩ3012・3525 住居跡やＳK3041 土壙の出土土器は出土量が少なく、器種構成もあきらかではないが、壷の器形に大きな違いがあることから、ＳＩ2983・3022、ＳD3369出土土器とは別の土器群である可能性がある。

③土器の編年的位置

東北地方南部の古墳時代中期の土師器編年は、氏家和典によって第2型式の「南小泉式」と第3型式の「引田式」が設定された（氏家：1957）。その後、宮城県内では仙台市岩切鴻ノ巣遺跡の報告で引田式について独立した型式とは認められず、南小泉式に包括されるべきものという貴重な提起がおこなわれた（白鳥・加藤：1974）。こうした見解を受けて宮城県内では引田式は南小泉式に含めて考えられるようになる。

この立場に立った論考としては、まず加藤道男や丹羽茂があげられる。両氏は南小泉式をそれぞれ



第134図　SI2983・3022 住居跡　SD3369 溝跡出土土器

2 段階、3 段階に細分している（加藤：1989、丹羽：1983）。その後、古川一明・白鳥良一は古墳時代の土師器変遷を扱った論考で南小泉式を 3 段階に細分し（古川・白鳥：1991）、岩見は南小泉式から後期の「住社式」にかけての土器の整理をおこなった際、南小泉式を 2 段階に細分している（岩見・佐藤：1991）。また、小川淳一は加藤、丹羽、古川・白鳥による変遷案を踏まえ、柳沼賢治による福島県中通り地方における古墳時代全般の土師器変遷案（柳沼：1989）を参考にして、宮城県内の南小泉式土器を 5 段階に細分している（主浜・小川・熊谷：1992）。

一方、藤沢敦は研究史の再整理をおこない、器種の消長にもとづいた古墳時代中・後期の土器変遷案を提示した（藤沢：1992）。この中で、白鳥・加藤両氏の検討から南小泉式と考えられた岩切鴻ノ巣遺跡出土土器以降の土器群を、研究史と土器群の再検討をとおしてあらためて引田式土器と位置づけ、南小泉式には仙台市南小泉遺跡第 12 次調査 1 号住居跡出土土器（佐藤甲二ほか：1985）および名取市清水遺跡第Ⅱ群土器（丹羽・阿部・小野寺：1981）をあてている。

藤沢の設定した南小泉式は 1）小型精製器種の消滅、2）脚部中空裾広がりで坏部下端に稜を有する高坏の盛行、3）口径が胴部径にほぼ等しい小型壷の存在の 3 点に特徴づけられる。これに対し、岩見は仙台市藤田新田遺跡の古墳時代中期土器を分析する際、2 と 3 について南小泉遺跡 12 次調査 1 号住居出土土器が明確に示しているとは言い難いこと、3 についても多賀城市山王遺跡ＳＸ230 遺物包含層出土土器（菅原・吾妻ほか：1994）で小型壷と口径が胴部径より小さく、口縁部の低い中型壷が共伴していることから、南小泉式の捉え方は白鳥・加藤両氏の見解に従うとしている（後藤・村田・岩見ほか：1994）。

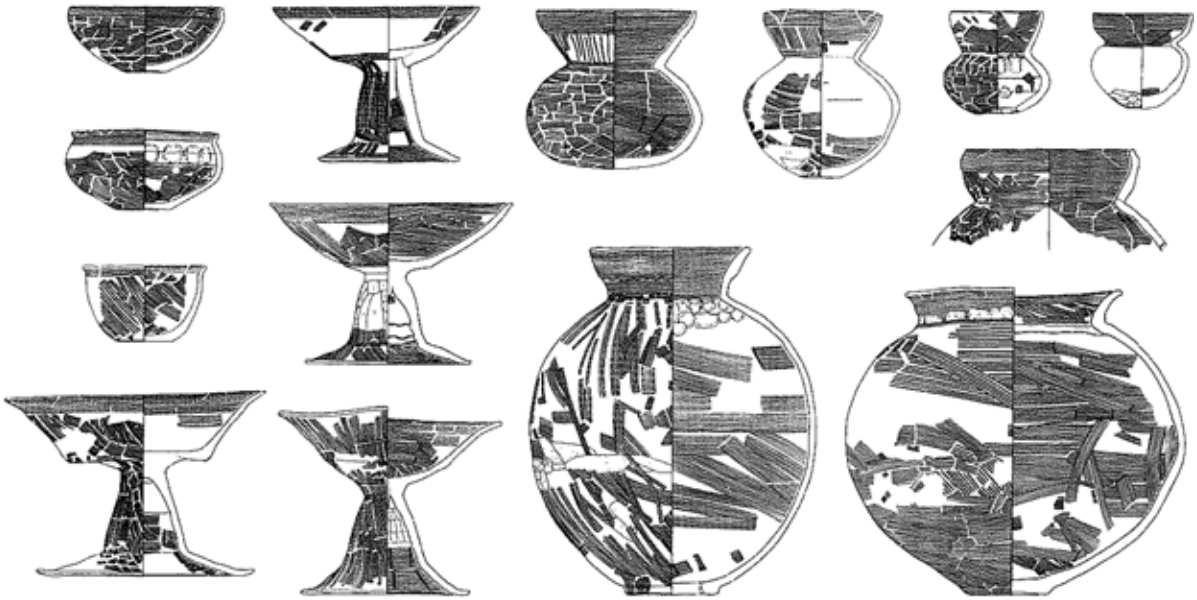
藤沢が提唱した南小泉式土器に対する岩見の疑義は妥当なものと考えられる。したがって、本稿における南小泉式の捉え方は白鳥・加藤両氏の考え方に従うことにする。

〈出土土器の位置付け〉（第 135 図）

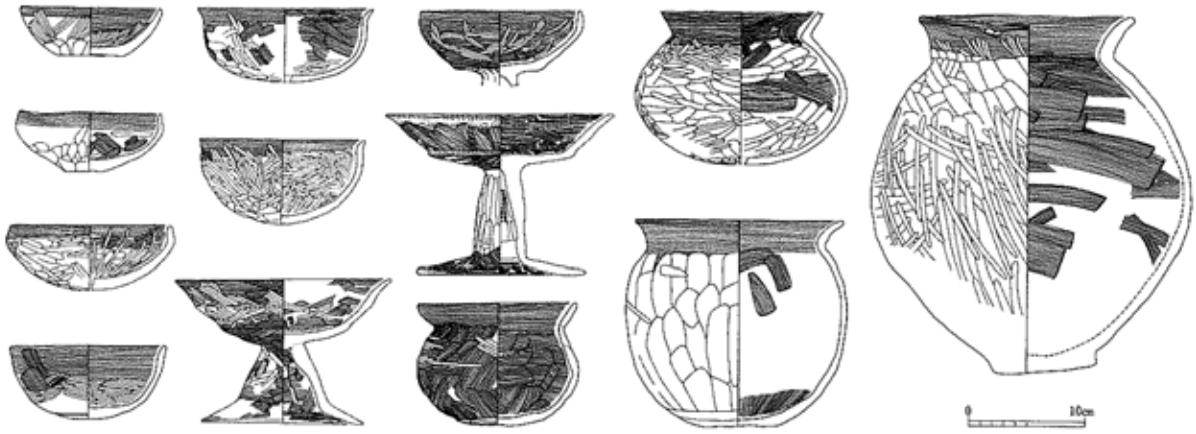
山王遺跡周辺における古墳時代中期の土器変遷は、先学が指摘するとおり器種構成が大きく変化する時期をもって 2 段階に大別できる（1 段階→2 段階）。さらに 1 段階は山王遺跡ＳＸ230 出土土器（菅原・吾妻ほか：前掲）と同遺跡ＳＸ058 出土土器（高倉：1981、1991９を比較すると、後者は坏が多く器形にバラエティがあること、大型壷や小型壷が少ないこと、高坏の脚部は円筒形のものが主体となること、甕の胴部が縦長のものがあることなどから細分が可能である。したがって南小泉式土器は、**1A段階：**山王遺跡ＳＸ230 遺物包含層出土土器→**1B段階：**山王遺跡ＳＸ058 遺構出土土器→**2 段階：**岩切鴻ノ巣遺跡第 1・2 号住居跡出土土器（白鳥・加藤：前掲）へと変遷すると考えられる。

本遺跡ＳＩ2983・3022、ＳD3369 出土土器の類例としては山王遺跡ＳＸ058 があげられる。同遺構は坏A1・A2ａ・A3ａ・Ｂ・C2・D1ａ類、壷A類があり、高坏はA2ｂ類、甕はB1・B2 類が主体である。こうした特徴はＳＩ2983・3022、ＳD3369 出土土器と共通しており、南小泉式土器 1Ｂ段階と考えられる。

また、ＳＩ2983・3022、ＳD3369 出土土器とは別の土器群である可能性が考えられたＳＩ3012・3525 住居跡やＳK3041 土壙出土土器は壷B2 類や無底の甑が 2 段階以降に出現すること、なかでも岩切鴻



〈山王遺跡　ＳＸ230遺物包含層出土土器〉



〈山王遺跡　ＳＸ058遺構出土土器〉

〈岩切鴻ノ巣遺跡第１号・第２号住居跡出土土器〉

第135図　南小泉式期の土器

ノ巣遺跡第１号住居跡出土土器には壷B2 類があり、無底の甑は把手の有無という違いがあるが、胴部が紡錘形である点は共通する。したがって、ＳＩ3012・3525 住居跡・ＳK3041 土壙出土土器は資料が少ないという制約があるが、2 段階とみられる。なお、これらの実年代は土師器と共伴する須恵器がないため不明であるが、ＳD3540 溝跡から出土した須恵器ハソウが陶邑ＴK216 型式期のものであるため、1B段階は5 世紀中頃に年代の一端が求められよう。

〈土器の赤彩について〉

第4 表は図示資料のうち、赤彩が施された土器をまとめたものである。これをみると坏・高坏・壷を中心に赤彩されたものが目立ち、とくに坏は全体の7 割を占めている。さらに赤彩が施されない土器でも胎土に赤色粒子を多量に含み、橙色を呈するものがある。これは胎土に意識的に鉄分を含ませて赤くしたものと考えられ、坏、高坏、蓋、中型壷（B2 類）、中・小型甕（Ｂ・Ｃ類）、甑に認められる。したがって、赤彩されたものと橙色を呈するものを加えた食膳具（坏・高坏・蓋・中型壷）における「赤い土器」は、47 ちゅう 37 点で全体の約 8 割を占めることとなり、赤い土器の割合がきわめて高いと言える。

なお、赤色顔料の分析はおこなっていないが、同時期の村田町新峯崎遺跡では蛍光X線分析により、ベンガラ（酸化鉄）の可能性が強いとの結果が出ている（阿部・須田・岩見：1991）。

	土師器																														
	坏													高坏（坏部）		高坏（脚部）			鉢（坏一脚）		蓋	壷			甕				甑
	A1	A2a	A2b	A3a	A3b	B	C1	C2	D1a	D1b	D2	E1	E2	A	B	1	2a	2b	A2a	A2b		A	B1	B2	A	B1	B2	C	
総数	1	8	1	1	1	4	1	1	3	1	2	1	1	3	1	1	3	2	2	2	1	1	1	5	2	3	7	1	1
赤彩	1	6	1			2	1	1	2	1	2		1	3	1		1		1				1	3					
胎土が橙色		1														1	1	1	1	1	1			2		1	3	1	1

第 4 表　赤彩土器の割合

b．遺　構

古墳時代中期の遺構はXI区で竪穴住居跡 1、XII区で竪穴住居跡 6、土壙 7、溝跡 2 などがある。XII区を中心に検出されているが、その分布は全体にまばらである。

〈竪穴住居跡〉

竪穴住居跡は 7 軒ある。このうちＳＩ2983 とＳＩ2988 には重複関係が認められ、少なくても 2 時期以上の変遷があることがわかる。時期が特定できるものは南小泉式土器 1B段階のＳＩ2983・3022 住居跡、2 段階のＳＩ3012・3525 住居跡で、他の 3 軒は出土土器からみてこの範疇におさまるものと考えられる。

個々の属性は第 5 表に示した。平面形態は正方形と長方形があり、規模は一辺が 5mを超えるものと 4m前後のものとがある。掘方埋土を床としており、ほぼ全形を検出した正方形の住居 2 軒（ＳＩ2983・3022）では対角線上に主柱を 4 本確認している。周溝が全周するＳＩ2988 では壁際に沿って壁材の痕跡が認められる。カマドは 3 軒の住居で確認されたが、東壁（ＳＩ2983）、北壁（ＳＩ3022）、南西隅（ＳＩ3012）と付設位置に統一性はみられない。

山王遺跡では、南小泉式期の竪穴住居跡は町地区のほかにも認められる。八幡地区では鍛冶工房を

遺構番号	平面形	規模(m)東西×南北	方　向	床	主柱穴・柱の径(cm)	周溝(壁材の痕跡)	カマドの有無・位置	貯蔵穴状ピット	火災	備　　考
ＳＩ2983	方形	5.2以上×5.6	N 4°E	掘方埋土	4個・14.0	無	有・東壁南寄り	1個		
ＳＩ2988	長方形	4.6×3.6	N25°E	掘方埋土	不明	有（有）	不明			
ＳＩ3395	方形	2.7以上×2.8以上	(N 7°E)	掘方埋土	不明	不明	不明			掘方埋土のみ残存
ＳＩ3022	方形	4.3×4.0	N 9°E	掘方埋土	4個・12.0	無	有・北壁東寄り	2個	○	柱材はクリ・クヌギ節
ＳＩ3012	方形	1.4以上×1.9以上	N18°E	掘方埋土	不明	不明	有・南西隅			
ＳＩ3293	方形	1.3以上×5.2	N26°E	掘方埋土	不明	有（無）	不明			
ＳＩ3525	不明	3.7以上×2.7以上	不明	掘方埋土	不明	不明	不明			掘方埋土のみ残存

第５表　竪穴住居跡一覧表〔古墳時代中期〕

含む住居跡が 25 軒、西町浦地区では石製模造品の工房を含む住居跡が 2 軒検出されている。これらの住居におけるカマドの付設をみると、1A段階と考えられる八幡地区（註 6）、1 段階とみられる西町浦地区ではカマドは付設されていない。一方、町地区は 1B段階の 2 軒、2 段階の 1 軒でカマドが認められる。したがって、山王遺跡では竪穴住居へのカマドの付設は 1B段階から認められ、2 段階以降普及するものとみられる。

Ｃ．まとめ

山王遺跡周辺における古墳時代中期の土器変遷は、器種組成の比率が大きく変化する時期をもって 2 段階に大別され、さらに 1 段階は細分が可能である（1A段階→1B段階→2 段階）。今回、山王遺跡町地区で検出された南小泉式期の遺構は 1B段階から 2 段階のものであると考えられた。

南小泉式期の遺構は本遺跡の別地点や周辺でも多数確認されている。1A段階は八幡地区で鍛冶工房を含む竪穴住居跡 25 軒と土壙、河川跡が検出され、河川の落ち際にはゴミ捨て場（ＳＸ230）が形成されている。ＳＸ230 からは土器や木製品のほか骨製の刀装具や儀仗頭飾、ト骨などが出土している（千葉：1992、菅原・吾妻ほか：1994）。

1B段階から 2 段階は、八幡地区から西約 600mにある東町浦・西町浦地区で豪族居館とみられる「コ」字状の溝跡をはじめとし、石製模造品の工房を含む竪穴住居跡、祭祀遺構とみられる遺物が多く出土する細長い土壙などが検出されている。また、両地区からは 5 世紀中葉～後葉の須恵器が 10 数点出土しており、同時期の一般集落とは様相を異にしている。このほか東町浦地区では河川跡に設置された堰とみられる遺構も発見されている（高倉：1991）。

今回調査した町地区は西町浦地区から北約 100mの位置にある。遺構は竪穴住居跡 7 軒のほか土壙や溝跡があり、時期は 1B段階から 2 段階である。竪穴住居が主体である点は八幡地区の様相に似るが、ＳＤ3369・3540 はある時期の区画溝とみられること、1 点ではあるが完形に近い須恵器が出土していることは、時期的な要因のほかに東町浦・西町浦地区に隣接するためとみられる。

以上を整理すると、山王遺跡における南小泉式期の遺構は、東の八幡地区に 1A段階の遺構が集中しており、西の東町浦・西町浦・町地区は 1B～2 段階の遺構が分布することがわかる。したがって、古墳時代中期の集落は東から西へ移動した可能性が考えられる。

本遺跡八幡・東町浦・西町浦・町地区の南小泉式期の遺構からは黒曜石製石器が出土している。製品はスクレイパーが主体を占める。また、西町浦地区ＳＸ058 遺構では南小泉式土器や石製模造品、琥珀玉とともに続縄文土器（後北C2 式）が 1 点、黒曜石製石器が数点発見されている（高倉：1991）。八幡地区から出土した黒曜石製石器について使用痕の分析をおこなったところ、使用方法としては皮

に対するスクレイピングが考えられ、皮製品の加工に黒曜石製石器が使われていたと推定されている（須藤・高橋：1997）。

黒曜石製石器は、東北地方における北海道系土器との共伴関係や北大式期前後における石器群との共通性から続縄文文化との関係が指摘されており（奥野：1983、佐藤信行：1984）、本遺跡の南小泉式期は北海道系文化と何らかの関係があったと考えられる。なお、宮城県における黒曜石製石器は大崎平野以北に多く分布し、南限は仙台平野とみられる（註 7）。本遺跡周辺では 2 段階の岩切鴻ノ巣遺跡でも出土している。

B．奈良・平安時代

1. 土　器

奈良・平安時代の土器には土師器・須恵器・赤焼土器・灰釉陶器がある。これらのうち、図示できた土器を中心に整理・分類し、それらの組合せや特徴から年代について検討をおこなう。

a．分　類（第 136 図）

〈土師器〉

器種には坏・高台坏・甕・羽釜がある。このうち、羽釜は 1 点のみ出土している。

坏：製作に際し、ロクロを使用しているもの（B類）と使用していないもの（A類）とがある。内面はすべてヘラミガキののち黒色処理される。法量や器形、細部の特徴から以下のように分類した。

【A類】製作に際してロクロを使用しないものである（以下、非ロクロ調整と呼ぶ）。平底で浅く、底部から内弯しながら立ちあがり、体部は外傾してそのまま口縁部にいたる（1）。

【B類】製作に際してロクロを使用するものである（以下、ロクロ調整と呼ぶ）。口径に占める底径の割合が大きいもの〈Ⅰ類〉と小さいもの〈Ⅱ類〉とがある。さらに法量から分けられる。

〔BⅠ類〕口径に占める底径の割合が大きいもの。底部の切離し技法はヘラ切り・静止糸切り・回転糸切りがある。内面のミガキは丁寧で、底部は同じ方向に施される。法量の大きいもの〈a類〉（3）と小さいもの〈b類〉（2）とがある。

〔BⅡ類〕口径に占める底径の割合が小さいもの。底部の切離し技法は回転糸切りで、なかには離し糸切りやまわし糸切りが含まれる（小川：1979）。再調整が施されるものは極めて少ない。内面のミガキの方向は体部が横位で、底部は放射状に施される。ミガキの施し方は全体に雑で、放射状ミガキは幅が広いものが主体である。法量から口径 13 ㎝以上、器高 3～5 ㎝の中型品（a類）、口径 12 ㎝前後の小型品（b類）、器高 6 ㎝以上の大型品（c類）に分かれる。

〈BⅡa1 類〉底部から直線的に外傾し、そのまま口縁部にいたるもの（5）。

〈BⅡa2 類〉底部から内弯気味に立ちあがり、体部は外傾してそのまま口縁部にいたるもの（6）。

〈BⅡa3 類〉底部から内弯気味に立ちあがり、体部は外傾して口縁部が軽く外反するもの（7）。

〈BⅡa4 類〉底部から内弯気味に立ちあがり、そのまま口縁部にいたるもの。他と較べて全体に厚手である（8）。

〈BⅡb類〉口径が 12 ㎝前後の小型品で、底部から内弯気味に立ちあがり、体部が外傾してそのまま

口縁部にいたるものと口縁部が軽く外反するものとがある（9）。

〈BⅡc類〉器高6㎝以上の大型品で、体部下端から底部に回転ヘラケズリが施される。内面のミガキは丁寧である（4）。

高台坏：坏部は底部から直線的に立ちあがりそのまま口縁部にいたる。台は付け高台で、外側に開いている（10）。

甕：ロクロ調整で、法量に大・小がある。

【A類】器高が20㎝以上の大型品である。長胴形で、胴部上半に格子タタキ、下半に縦位のヘラケズリが施される（12）。

【B類】器高が14㎝以下の小型品である。底部は切離しののちナデられるものと、回転糸切りのものとがある。前者は胴部下半にヘラケズリが施される（11）。

羽釜：口径10.2㎝、器高17.9㎝（推定）で最大径が胴部中位にあり、鍔部は斜め上方を向く。口縁部は強く内傾し、口唇部は丸くおさまる。胴下半にヘラケズリが施される（13）。

〈須恵器〉

器種には坏・高台坏・高台盤・蓋・壷・甕・円面硯がある。

坏：器形や細部の特徴、色調や硬度から以下のように分類することができる。このうちB類には色調や硬度の点で従来認識していた青灰色で硬いもののほか、灰白色を呈し軟質のものがあり、量的に後者が主体を占める。

なお、観察表では灰白色の坏を（ｉ）と示しており、底部の切離し、再調整技法は以下の記号で示している。

切離し：ａ＝ヘラ切り　ｂ＝回転糸切り　ｃ＝全面再調整（切離し不明）

再調整：1＝回転ヘラケズリ　2＝手持ちヘラケズリ

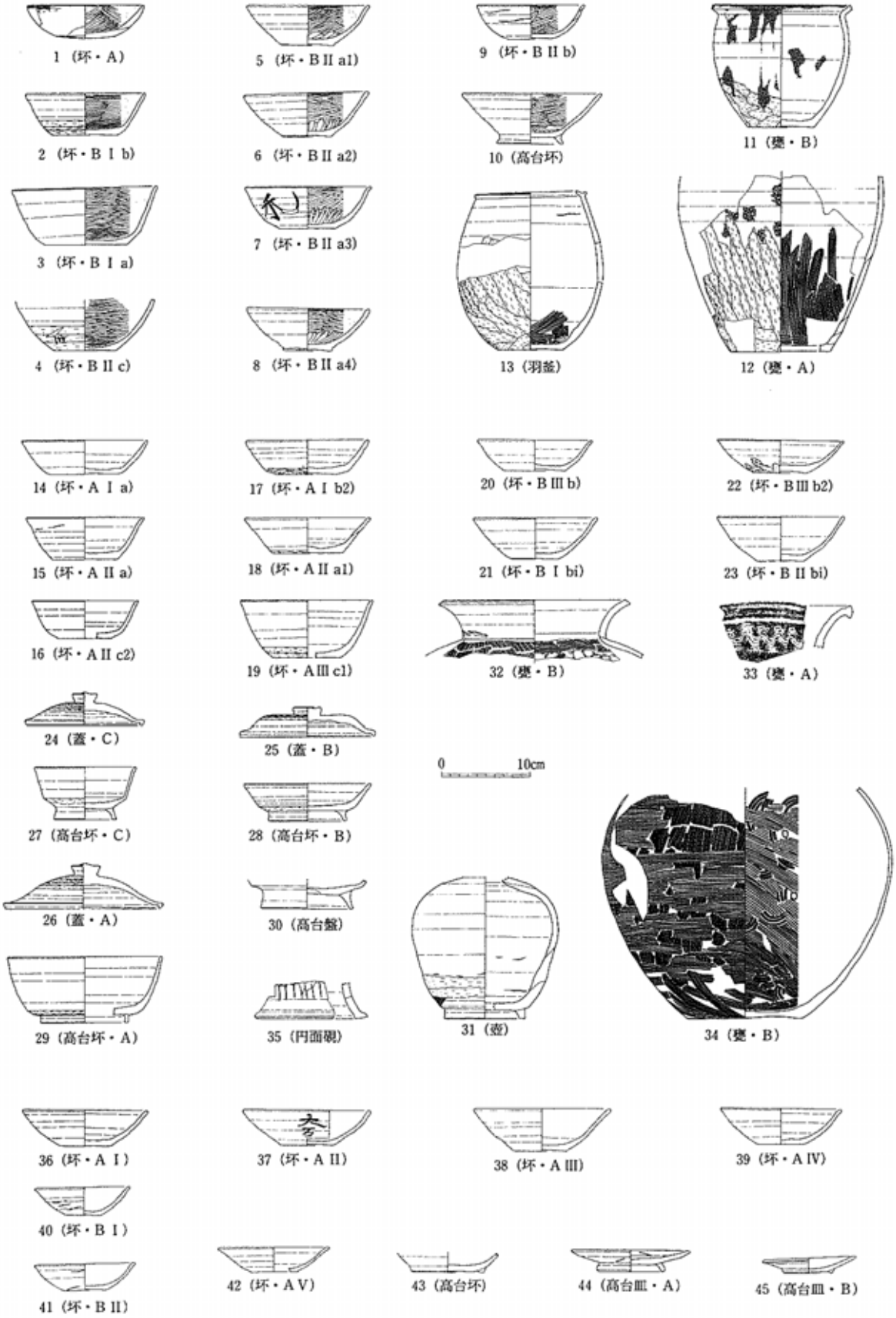
【A類】口径に対する底径の割合が大きいものである。底部の切離しはヘラ切りが多い。器形から以下のように分けられる。

〔ＡⅠ類〕底部から直線的に外傾し、そのまま口縁部にいたるもので、器高が浅く皿形を呈する。ヘラ切り無調整（14）が主体で、回転糸切りののち手持ちヘラケズリが施されるものが少数ある（17）。後者は法量に大・小がある。

〔AⅡ類〕底部から直線的に外傾し、そのまま口縁部にいたるもので、ＡⅠ類より器高が高く逆台形を呈する。ヘラ切り無調整（15）が主体を占めるが、ヘラ切りや回転糸切りののち再調整が施されるもの（16・18）もある。

〔AⅢ類〕底部から直線的に外傾し、そのまま口縁部にいたるもので、B類より法量が大きく椀状を呈する。底部の切離しは不明で、体部下端から底部全面に回転ヘラケズリが施される（19）。

【B類】口径に対する底径の割合が小さいものである。底部の切離しは回転糸切りが主体を占め、ヘラ切りは少ない。A類に較べて色調が灰白色を呈し軟質のもの（ｉ類）が目立つ。器形から以下のように分けられる。



1～13：土師器　14～35：須恵器　36～45：赤焼土器

第136図　土器分類図（奈良・平安時代）

〔ＢＩ類〕底部から直線的に外傾し、そのまま口縁部にいたるものである。回転糸切り無調整が主体を占めるが、ヘラ切り無調整が少しある（21）。

〔ＢⅡ類〕底部から内弯気味に立ちあがり、体部は外傾してそのまま口縁部にいたるものである。すべて回転糸切り無調整である（23）。

〔BⅢ類〕底部から内弯気味に立ちあがり、体部は外傾して口縁部が軽く外反するものである。回転糸切り無調整が主体で、ほかに回転糸切りののち手持ちヘラケズリが施されるものがある（20・22）。

高台坏：法量から大・中・小に分けられる。

【A類】口径が 17cm以上の大型品である。坏部の器高は深く椀状である。体部下端から底部に回転ヘラケズリが施される（29）。

【B類】口径 14～16cmの中型品である。坏部は浅く皿状である。体部下端から底部に回転ヘラケズリが施されるものが多い（28）。蓋B類とセットになる。

【C類】口径が 12 ㎝以下の小型品である。坏部の器高は深く、下端に稜をもつ。体部下端から底部に回転ヘラケズリが施される（27）。蓋C類とセットになる。

高台盤：台部が比較的高く、体部下端から底部に回転ヘラケズリが施される（30）。

蓋：法量から大・中・小に分けられる。

【A類】口径が 18cm以上の大型品である。器高は 5.2cmと高く、天井部に丸みをもつ。口縁部は外反して端部は下方内側に折れ曲がる。つまみは擬宝珠形である（26）。

【B類】口径が 15 ㎝前後の中型品である。天井部は水平で、口縁部は外反して端部は下方に折れ曲がる。つまみは擬宝珠形である（25）。第 88 図 6 は胎土や器形から福島県会津若松市大戸窯の製品と考えられる（註 8）。

【C類】口径が 14 ㎝以下の小型品である。天井部に丸みをもち、口縁部は外反して端部は下方内側に折れ曲がる。つまみは擬宝珠形である（24）。

壺：長頸壺と考えられる。高台をもち、胴部下端から底部に回転ヘラケズリが施される（31）。

甕：全体の器形がわかるものがなく、口径によって大・小に分けた。

【A類】口径が 30 ㎝以上の大型品である。頸部には櫛描き波状文が施される（33）。

【B類】口径が 20 ㎝台の小型品である。平底がある（32・34）。

円面硯：円形の硯面に輪状の台脚を有する「圏足硯」の圏足部である。方形の透かしの間にヘラ描きの平行線文が施される（35）。

〈赤焼土器〉

器種には坏・高台坏・高台皿がある。底部の切離し技法は回転糸切りで、なかには離し糸切りやまわし糸切りが含まれる（小川：1979）。

坏：法量から大・小に分けられる。

【A類】口径が 12～16 ㎝の大型品である。器形や細部の特徴から以下のように分類できる。

〔ＡＩ類〕底部から直線的に外傾し、そのまま口縁部にいたるものである（36）。

〔ＡⅡ類〕底部から内弯気味に立ちあがり、そのまま口縁部にいたるものである（37）。
〔AⅢ類〕底部から内弯気味に立ちあがり、体部は外傾してそのまま口縁部にいたるものである(38)。
〔AⅣ類〕底部から内弯気味に立ちあがり、体部は外傾して口縁部が軽く外反するものである（39）。
〔ＡＶ類〕器高が3㎝以下の皿形を呈するものである（42）。
【B類】口径が10～11.9㎝、器高3㎝前後の小型品である。
〔ＢＩ類〕底部から直線的に外傾し、口縁部が軽く外反するものである（40）。
〔ＢⅡ類〕底部から内弯気味に立ちあがり、体部は外傾してそのまま口縁部にいたるものである(41)。
高台坏：全体の器形がわかるものはない。低い三角高台がつく（43）。
高台皿：法量から大・小に分けられる。
【A類】口径が13㎝以上の大型品である。台は付け高台で、比較的高く、「ハ」字状に開く（44）。
【B類】口径が10～11.9㎝の小型品である。低い三角高台がつく（45）。

ｂ．出土土器の組合せと年代

分類した出土土器を遺構ごとにまとめたものが第6表である。これをみると、土器がまとまって出土しているのはＳK2763・2764・2850・2861・3014土壙であり、他の遺構は土器の出土点数が少なく、遺構ごとの比較や共伴関係を考えることはできない。したがって、ここではＳK2763・2764・2850・2861・3014土壙出土土器の検討をおこない、他は各遺構の年代を考える際、個別に取りあげる。

〔ＳK2764土壙出土土器〕（第137図）

ＳK2764土壙は底面と堆積土から土器が出土しているが、土器の特徴が共通するので一括して取り扱う。土師器坏A類、須恵器坏ＡＩａ類、須恵器高台坏B類、須恵器蓋B類がある。

山王遺跡で共通した内容をもつものとしては、ＳD2124溝跡5層出土土器（後藤ほか：1994）があげられる。ＳD2124は土師器坏A類、須恵器坏ＡＩａ類を主体とし、ほかに非ロクロ調整の土師器有段坏、土師器坏ＢＩ類、須恵器坏ＡＩｃ2類、須恵器高台坏B類、非ロクロ調整の土師器甕などが出土している。年代はＳD2124の年代観から8世紀後半と考えられる。

〔ＳK2763土壙出土土器〕（第137図）

ＳK2763土壙の堆積上は2層に分かれるが、土器の特徴が共通するので一括して取り扱う。須恵器

遺構		土師器													須恵器														赤焼土器								
		坏									高台坏	甕		鍋	坏						高台坏		蓋			甕		坏							鍋	高台皿	
		A	BⅠa	BⅠb	BⅡa1	BⅡa2	BⅡa3	BⅡa4	BⅡb	BⅡc		A	B		AⅠ	AⅡ	AⅢ	BⅠ	BⅡ	BⅢ	B	C	A	B	C	A	B	AⅠ	AⅡ	AⅢ	AⅣ	AⅤ	BⅠ	BⅡ		A	B
SK3014	底面														1																						
	2層		1												1	4							1		1												
	1層															2	1					1				1											
SK2861	3層																	1												1	1						
	2層				4	6	1	3			1							4	4	2								4	1	2	4					1	
	1層																		2													1					
SK2850	3層																																				1
	3上								2										1											1			1	11			1
	2層																																		1		
SK2763	2層											1			5	1																					
	1層														3																						
	堆積														1																						
SK2764	底面																				1																
	堆積	1													1						1			1													
SK2851													1			1											1										
SD2816B							1							1																	1						

第6表　遺構出土土器一覧表〔奈良・平安時代〕

坏ＡＩａ類を主体とし、須恵器坏ＡＩｂ2・ＡⅡａ類、須恵器壷、土師器甕A類がともなう。土師器坏は破片資料のみで数も少ないが、ロクロ調整である。

山王遺跡周辺で共通した内容をもつものとしては、多賀城跡ＳＩ2153 住居跡（柳沢：1993）、市川橋遺跡ＳK236 土壙（石川：1990）があげられる。ＳＩ2153 は土師器坏ＢＩｂ類、須恵器坏ＡＩａ・ＡⅡａ類を主体とし、ほかに土師器坏ＢＩａ類、土師器高台坏、須恵器坏AⅡ（a2・ｂ・ｃ2 類）、AⅢａ類、須恵器高台坏B・C類、須恵器蓋B類、須恵器壷、非ロクロ調整の土師器甕、土師器甕A・B類などが出土している。

ＳK236 土壙は須恵器坏ＡＩａ類を主体とし、ほかに非ロクロ調整で平底・逆台形の土師器坏、土師器坏ＢＩｂ類、須恵器坏ＡⅡａ類、須恵器高台坏B類、土師器甕B類、須恵器甕A・B類、平城京の土器分類で「壷G」とされる縦長の胴部をもつ長頸壷などが出土している。

年代は壷Gの年代観から 8 世紀末を上限とする 9 世紀前葉代と考えられている（柳沢：前掲）。したがって、ＳK2763 は 9 世紀前葉頃と考えられる。

〔ＳK3014 土壙出土土器〕（第 137 図）

ＳK3014 土壙の堆積土は 3 層に大別され、2 層と 1 層から土器がまとまって出土している。これらは接合関係が認められること、土器の特徴が共通することから一括して取り扱う。須恵器坏ＡⅡａ類を主体とし、土師器坏ＢＩａ類、須恵器坏ＡＩａ・ＡＩｂ2・AⅢｃ1 類、須恵器蓋A・C類、須恵器高台坏C類、須恵器高台盤がともなう。

山王遺跡周辺で共通した内容をもつものとして多賀城跡ＳＥ2101 井戸跡第Ⅲ層出土土器（真山：1992）があげられる。土師器坏ＢⅠ類、須恵器坏ＡⅡａ類を主体とし、ほかに土師器坏ＢⅡａ・ｃ類、須恵器坏ＡⅠ（ａ・ｂ）・ＡⅡｂ・AⅢａ類、須恵器高台坏B類、土師器甕A・B類、須恵器甕A・B類などがともなう。

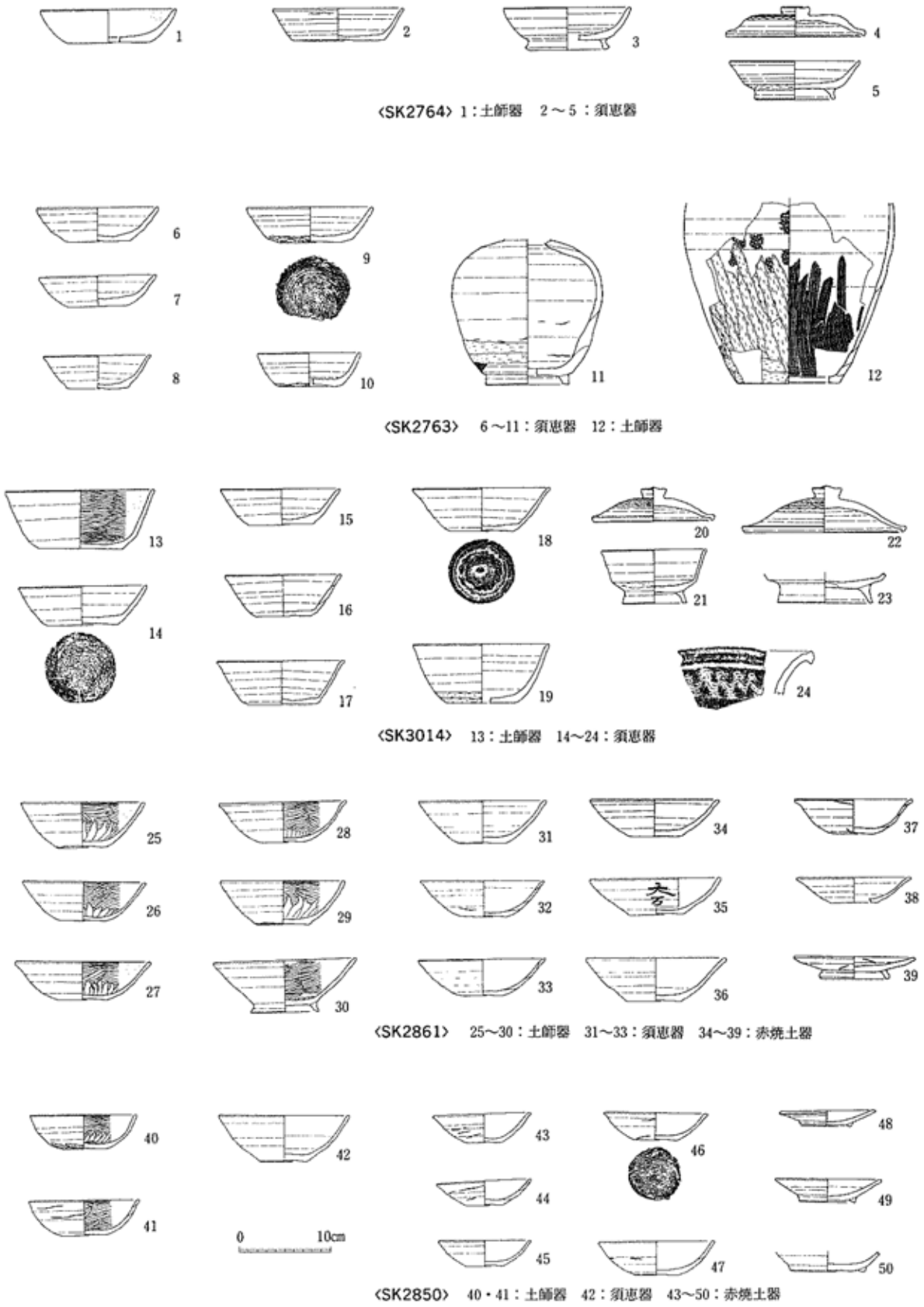
年代はＳＥ2101Ｂ第Ⅲ層が共伴した漆紙文書や墨書土器の年代観から 9 世紀第 2 四半期を中心とする頃と考えられている（村田：1994、柳沢：1994Ｂ）。したがって、ＳK3014 の年代は 9 世紀中葉でも古い時期と考えられる。

〔ＳＸ2861 土壙出土土器〕（第 137 図）

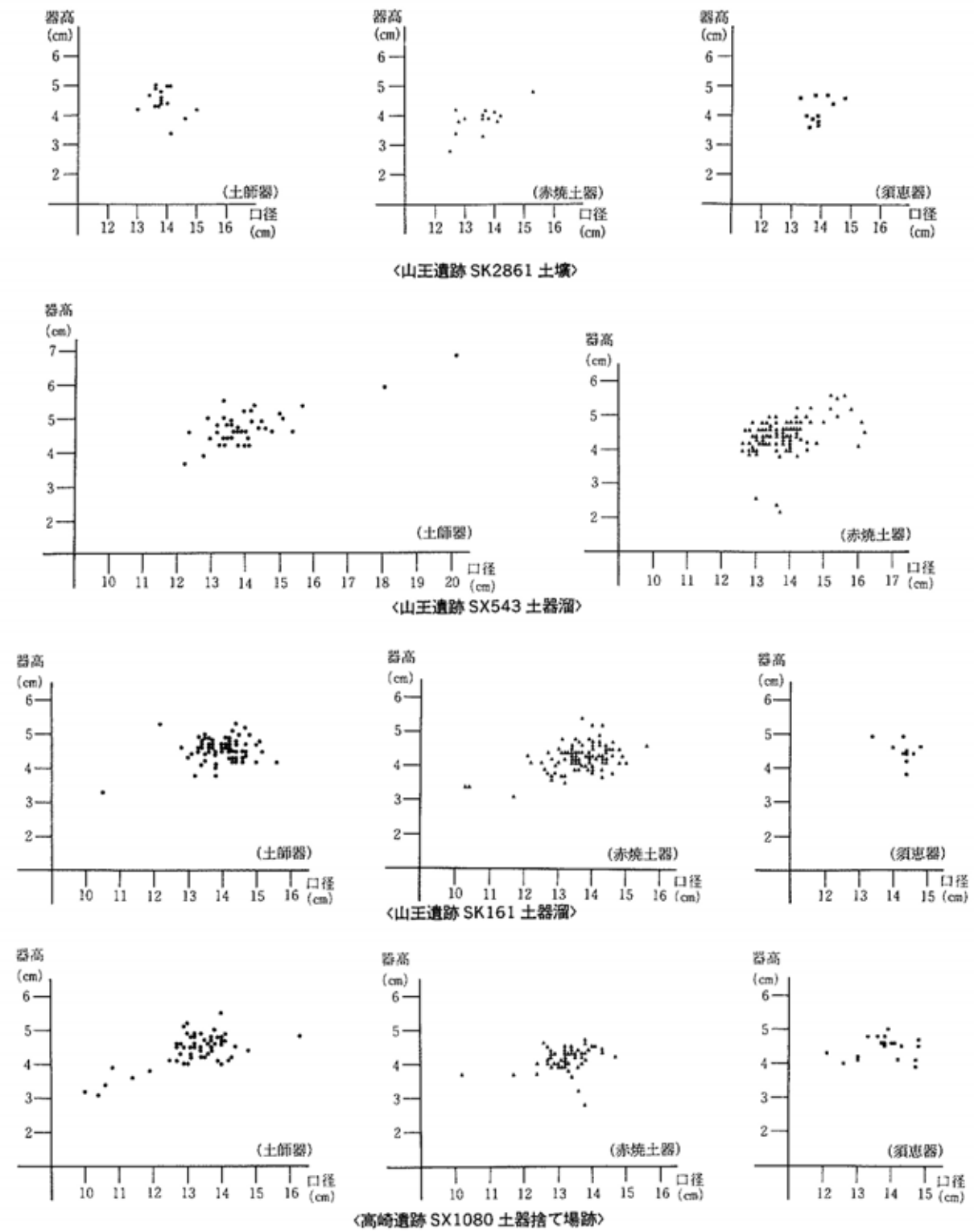
ＳK2861 土壙の堆壌土は 4 層に大別され、3 層は灰白色火山灰である。土器は 4 層を除く各層から出土しているが、特に 2 層から多量に出土している。各層の土器は特徴が共通することから一括して取り扱う。

土師器坏ＢⅡａ2～4 類、須恵器坏B類、赤焼土器ＡⅠ・AⅢ・AⅣ類を主体とし、土師器坏ＢⅡａ1 類、高台坏、赤焼土器坏AⅡ・ＡⅤ類、高台皿A類がともなう。これらはすべて食膳具であり、煮炊具や貯蔵具は破片がわずかに出土しているにすぎない。また、食膳具における土師器・須恵器・赤焼土器の割合は、それぞれ 35%・30%・35%であり、ほぼ同じである。

土師器坏は製作に際しロクロを使用している。器形は底部から内弯気味に立ちあがるものが多く、底部はすべて回転糸切り無調整である。内面のミガキの方向は体部が横位、体下部から底部が放射状である。ミガキの施し方をみると放射状ミガキは幅が広く、体部はミガキ残しの部分があったりと全



第137図　SK2763・2764・2850・2861・3014 土壙出土土器



第138図　坏の法量

体に雑である。

須恵器や赤焼土器の坏は坏底部から直線的に外傾するものと内弯気味に立ちあがるものとがある。底部はすべて回転糸切り無調整で、後者は内面の仕上げにコテ状工具が使われているものが多く、器面が平滑である。須恵器坏はすべて灰白色で軟質、黒斑を有するものがあるｉ類である（註 9）。赤焼

坏は土師器や須恵器に較べて小振りである（第138図）。

山王遺跡周辺で共通した内容をもつものとして山王遺跡ＳＫ161 土器溜（高倉：1991）、同遺跡ＳＸ543 土器溜（石川・相沢：1991）、高崎遺跡ＳＸ1080 土器捨て場跡（高野：1991、千葉：1995）などがあげられる（第138図）。ＳＫ161 は東西大路北側の土壙で、灰白色火山灰より新しい。大路で万燈会のような儀式を執りおこない、使用した灯明皿を一括廃棄した遺構と考えられている（千葉：1995）。土師器坏ＢⅡａ類、赤焼土器坏ＡⅠ・ＡⅡ類を主体とし、これに土師器坏ＢⅡｂ類、土師器高台坏、須恵器坏Ｂｉ類、赤焼土器坏Ｂ類、赤焼土器高台坏がともなう。食膳具における土師器・須恵器・赤焼土器の割合は、それぞれ40%・6%・54%であり、赤焼土器が半数以上を占める。

ＳＸ543 は東西大路に面した「北１西７区」（註10）にあり、灰白色火山灰より古い。「国守の館」で執り行われた何らかの儀式で使用した食器を一括廃棄した土壙と考えられている（石川・相沢：1991）。灰白色火山灰との関係は、古いと考えられる。土師器坏ＢⅡａ類、赤焼土器坏ＡⅡ・Ⅲ・Ⅳ類を主体とし、これに土師器坏ＢⅡｃ類、赤焼土器ＡⅤ類、土師器甕Ｂ類がともな丸食膳具における土師器・須恵器・赤焼土器の割合は、それぞれ33%・1%・66%であり、赤焼土器が６割以上を占める。

ＳＸ1080 は多賀城廃寺の南西約500mの地点にあり、浅い谷の部分に３回にわたって万燈会のような仏教儀式で便用した灯明皿の廃棄がおこなわれた土器捨て場である。灰白色火山灰は２回目と３回目の間に堆積している。一括廃棄された土器の数量は１回目が47個体、２回目が262個体、３回目が1246個体と推定されている。３回の廃棄は層位的な上下関係はあるが、型式的にはほぼ同一の土器群としてとらえることが可能である（千葉：1995）。土師器坏ＢⅡａ類、赤焼土器坏ＡⅠ・AⅢ・AⅣ類を主体とし、これに土師器ＢⅡｂ類、土師器高台坏（法量に大・小があり、後者は両黒）、須恵器Ｂｉ類、赤焼土器坏ＡⅤ類、赤焼土器坏Ｂ類などがともなう。食膳具における土師器・須恵器・赤焼土器の割合は、それぞれ33.4%・3.2%・63.4%であり、赤焼土器が６割を超える（誌11）。

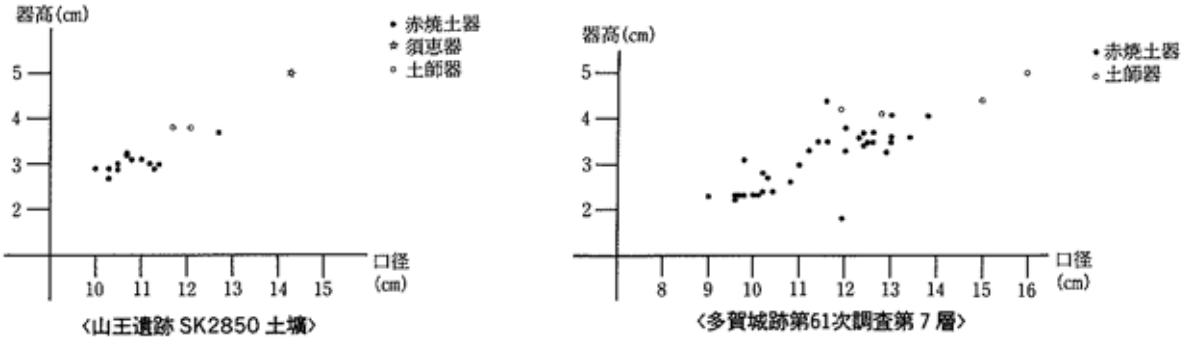
これらの土器は灰白色火山灰の上下で認められ、10世紀前半に位置付けられている（村田：1995）。灰白色火山灰は陸奥国分寺七重塔の調査成果から承平４年（934）を下限とする10世紀前葉に降下したと考えられている（註12）。したがって、ＳＫ2861 土壙出土土器の年代は10世紀前半と考えられる。

〔ＳＫ2850 土壙出土土器〕（第137図）

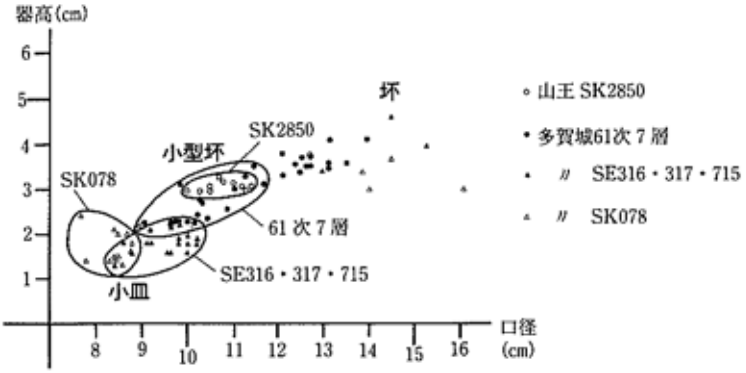
ＳＫ2850 土壙の堆積土は４層に大別される。土器は１層を除く各層から出土しているが、特に３層上面から多く出土しており、図示資料19点中17点とほとんどを占める。破片資料を含めた土器の特徴は各層で共通することから一括して取り扱う。

赤焼土器坏Ｂ類を主体とし、土師器坏ＢⅡｂ類、須恵器坏ＢⅡｂ類、赤焼土器坏AⅢ類、高台皿Ｂ類、高台坏がともなう。これらはすべて食膳具であり、煮炊具や貯蔵具は破片がわずかに出土しているに過ぎない。また、食膳具における土師器・須恵器・赤焼土器の割合は、それぞれ11%・6%・83%であり、赤焼土器が主体を占めている。

土師器坏は製作に際しロクロを使用している。口径が 12 ㎝前後の小型坏で、器形は底部から内弯気味に立ちあがる。底部は回転糸切りで、体部下端に軽い手持ちヘラケズリが施されているものがある。



第139図　坏・小型坏・小皿の法量



第140図　赤焼土器坏類の比較

須恵器坏は灰白色で軟質のｉ類であり、回転糸切り無調整、底部から内弯気味に立ちあがる。赤焼土器坏は底部が回転糸切り無調整で、内面の仕上げにコテ状工具が使われているものが多く、器面が平滑である。主体は口径 12 ㎝未満の小型坏（B類）で底部から内弯気味に立ちあがる（第 139 図)。

山王遺跡周辺で共通した内容をもつものとして多賀城跡第 61 次調査第 7 層（柳沢・進藤：1992）などがあげられる。61 次調査は政庁南西部の鴻の池地区と呼ばれる低湿地を調査した。その結果、灰白色火山灰をはさんだ上下の層から多量の土器や木製品が出土し、9 世紀後半から 10 世紀中頃以降にかけての土器変遷が層位的に確認されている。

第 7 層からは赤焼土器坏B類を主体とし（註 13）、これに土師器坏ＢⅡａ類、土師器高台椀（法量に大・小）、赤焼土器坏ＡⅠ・AⅢ・AⅣ類、赤焼土器高台坏、赤焼土器高台椀、赤焼土器高台皿Ａ・Ｂ類、赤焼土器耳皿、土師器甕Ａ類、須恵器甕Ｂ類、須恵器壷がともなう。この層の特徴は小型坏・小皿と低い高台をもつ高台椀が土器組成全体に占める割合が高いことである（第 139 図）。また、食膳具から須恵器は姿を消し、土師器・赤焼土器の割合は 22%・78%であり、赤焼土器が主体を占める。

ＳK2850 土壙は堆積土に灰白色火山灰を含むＳD2816B 溝跡より新しい。また、多賀城跡 61 次調査 7 層出土土器は灰白色火山灰との関係から 10 世紀中頃以降に位置づけられている（註 14）。したがって、ＳK2850 土壙出土土器の年代は、10 世紀中頃以降と考えられる。

第 140 図はＳK2850 土壙と同じく、土器組成の中で赤焼土器小型坏・小皿が主体を占める多賀城跡第 61 次調査第 7 層、第 14 次調査ＳE316・317 井戸跡、第 23 次調査のＳE715 井戸跡、第 4 次調査ＳK078 土壙における赤焼土器坏類の法量を比較したものである（註 15）。

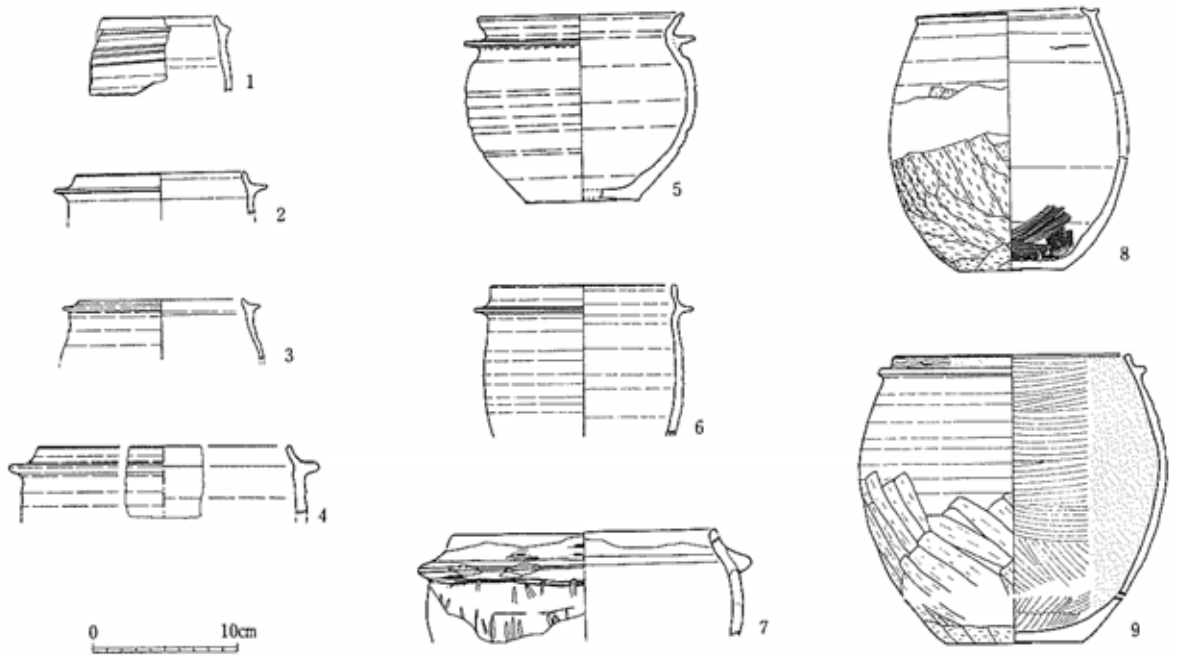
これをみると、小型坏や小皿の法量はＳK2850、61 次 7 層→ＳE316・317・715→ＳK078 へとゆるやかに小型化している。さらにＳK2850 と 61 次 7 層の小型坏を比較すると、前者は口径 10〜11.5 ㎝、

器高3㎝前後であるのに対し、後者は口径9～11㎝台、器高2～3.5㎝であるが、口径9～11㎝、器高2㎝台のものが多い。この違いを時間差とみることができれば、ＳＫ2850 土壙出土土器の年代は10世紀中頃以降に比定される小型坏や小皿が卓越する土器群のなかでも最も古い例となり、年代は10世紀中頃に位置付けられよう。

Ｃ．土師器羽釜について

ＳＤ2816B溝跡3層からは土師器羽釜が出土しており、時期は10世紀前半と考えられる。宮城県内における羽釜の類例は七ケ宿町小梁川遺跡10号住居跡（新庄屋・真山：1985）、仙台市中田畑中遺跡ＳＩ1住居跡と表土（長島・青沼：1983）、同市安久遺跡5号住居跡（伊東ほか：1975）、同市山口遺跡14号溝跡（田中ほか：1984）、多賀城市多賀城跡第61次調査第10層（柳沢ほか：1992）、同市山王遺跡多賀前地区南1・西1道路跡Ｅ期側溝（佐藤憲幸ほか：1996）、津山町柳津館山館跡1号住居（阿部恵：1984）などがあげられる（第141図）。時期は9世紀後葉から10世紀中頃である。

これらをみると、1）口径が8.1～17.6㎝、器高が12.4～19.0㎝といずれも小型もしくは小振りである（註16）。2）同時期の煮炊形態である土師器甕に較べて量がきわめて少ない。3）最大径が鍔部ではなく、胴部にあるものが4点ある。4）1点のみであるが内面黒色処理されたものがある、という特徴がある。したがって、宮城県内から出土した土師器羽釜は日常的に用いられた煮炊具ではなく別な用途に使われたものと考えられる。



1．山王遺跡多賀前地区道路跡Ｅ期側溝
2．多賀城跡第61次第10層
3．中田畑中遺跡表土
4．中田畑中遺跡ＳＩ１住居跡
5．安久遺跡5号住居跡
6．小梁川遺跡10号住居跡
7．山口遺跡14号溝跡
8．山王遺跡SD2816B溝跡3層
9．柳津館山館跡1号住居

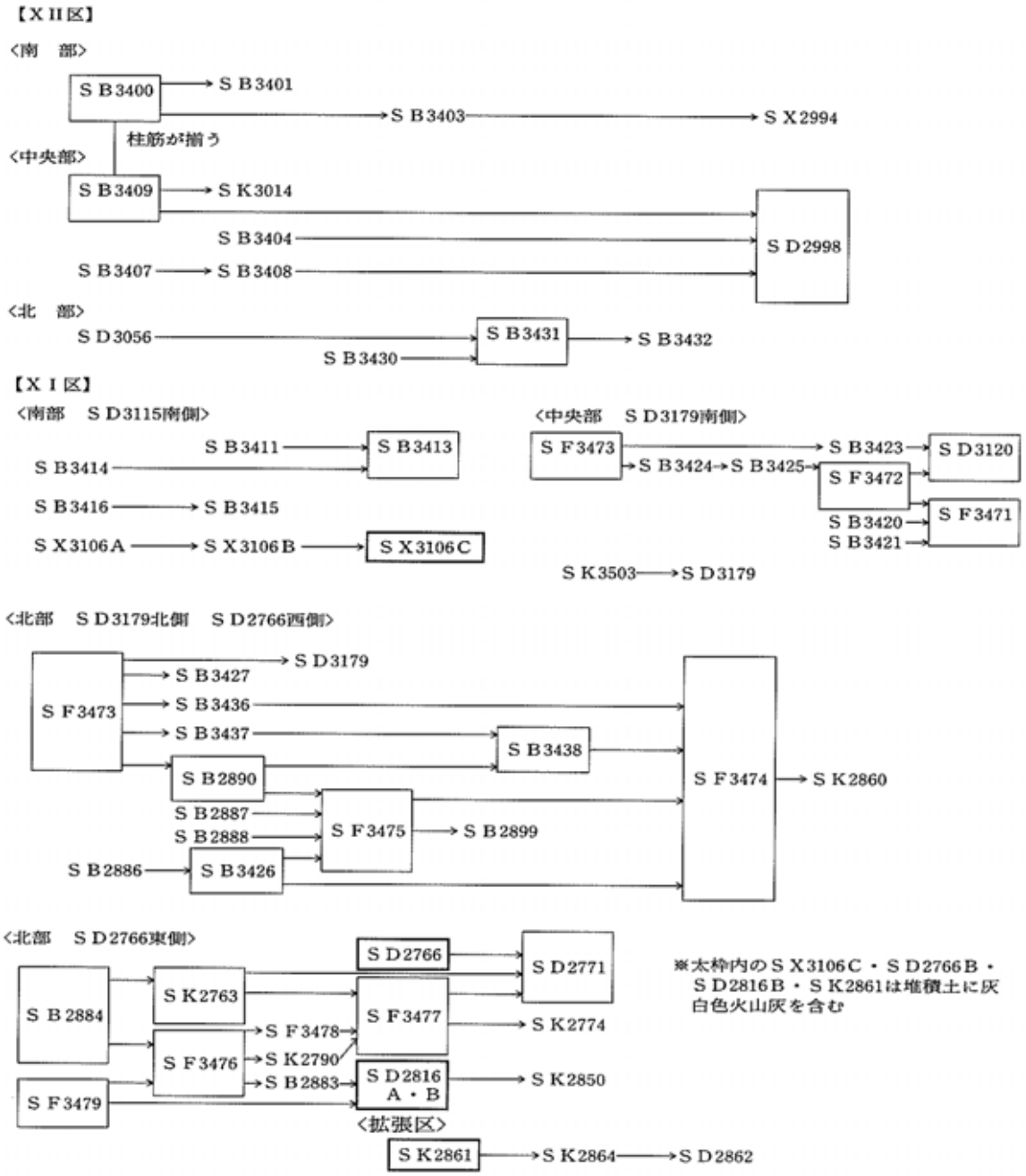
第141図　宮城県内出土の羽釜

2. 遺　構

検出した奈良・平安時代の主な遺構には東西道路跡 1、区画溝跡 2、掘立柱建物跡 46、掘立柱列跡 2、土壙 23、溝跡 26、小溝状遺構群 14 などがある。これらの遺構は主としてXI・XII区にみられる。とくにXI区のＳＤ2816 東西溝跡以南、ＳＤ2766 南北溝跡以西に多く分布している。したがって、以下ではXI・XII区の遺構について重複関係と年代の検討をおこない、両地区における遺構の変遷を考える。

a．重複関係

XI・XII区における奈良・平安時代の主な遺構について重複関係を整理すると以下のようになる。



第142図　XI・XII区の遺構重複関係

ｂ．年代

前節で土器がまとまって出土したＳＫ2763・2764・2850・2861・3014 土壙の年代を検討した結果、ＳＫ2764の9世紀後半が最も古く、新しいものはＳＫ2850で10世紀中頃以降であることがわかった。その他の遺構出土土器の特徴は、いずれもＳＫ2764からＳＫ2850の間に位置付けられるものである。このなかでＳＫ2850出土土器の特徴である土師器や赤焼土器の小型坏は、遺構から出土する例がきわめて少ない。したがって、奈良・平安時代の遺構の多くは8世紀後半から10世紀前半代に機能していたと考えられる。

以下、灰白色火山灰との関係や量は少ないが出土土器からある程度年代の把握が可能な遺構について検討する。

①道路跡

XI区南端で検出したＳＸ3106東西道路跡は、側溝で3時期の重複が認められる。最も新しいＣ期の側溝下層には灰白色火山灰の再堆積層が認められ、10世紀前葉には道路が機能していることがわかる。また、出土した土師器坏ＢⅡｃ類は類例が仙台市藤田新田遺跡ＳＤ302 河川跡（後藤・村田・岩見ほか：1994）にあり、Ｃ期の年代は10世紀前半代と考えられる。Ａ・Ｂ期の年代は側溝から出土した土師器が量は少ないがいずれもロクロ調整で、回転糸切りの坏を含むことから9世紀後半代とみられる。

②区画溝跡

ＳＤ2816Ａ・ＢはXI区北端で検出した東西溝跡で、東西83m分を確認した。2時期の変遷（Ａ→Ｂ）があり、Ｂ期の堆積土に灰白色火山灰を含む。土器はＢ期から土師器坏ＢⅡａ類、須恵器坏Ｂｉ類、赤焼土器坏Ａ類・土師器羽釜などが出土している。したがって、Ｂ期は10世紀前半を中心に機能しており、これより古いＡ期の年代は9世紀代とみられる。

ＳＤ2766Ａ・ＢはXI区北部西よりで検出した南北溝跡で、南北11m分を確認した。2時期の変遷（Ａ→Ｂ）があり、Ｂ期の堆積土に灰白色火山灰を含む。したがって、Ｂ期は10世紀前半を中心に機能しており、これより古いＡ期の年代は9世紀代とみられる。

ＳＤ2816とＳＤ2766の接続部分は撹乱で壊されているが、いずれも2時期の変遷があり、新しい時期に灰白色火山灰が堆積する点も共通することから、一連の区画溝と考えられる。また、ＳＤ2766は接続部分から北には延びていないことを確認しており、両者は「Ｔ」字状に接続するとみられる。

さらに、ＳＤ2766を南に延ばすと、ＳＸ3106東西道路跡の北側溝にぶつかる。北側溝でもＣ期に灰白色火山灰が堆積している。道路側溝に接続する敷地内部の区画溝は八幡地区や伏石地区などで検出されている（佐藤則之ほか：1997）ことから、ＳＤ2766とＳＸ3106の北側溝は「Ｔ」字状に接続するとみられる。したがって、ＳＸ3106の年代が9世紀後半から10世紀前半と考えられることから、ＳＤ2816・2766は9世紀後半から10世紀前半に機能していたとみられる。

③掘立柱建物跡

掘立柱建物跡はXI区で31棟、XII区で15棟の計46棟検出している。建物の規模や方向といった属性は第7表にまとめた。建物の分布をみるとＳＸ3106東西道路跡の北と南に分けられ、前者はさらにＳＤ

建物	棟方向	規模			方向	備考
		全体（南北×東西）	桁行	梁行	（ ）内は計測した場所	
S B3402	南北棟	3間×2間	西側柱列 5.50m(3.85(2間分)+1.65)	南妻 3.80m	N15°E(西側柱列)	
S B3400	南北棟	3間×3間	東入側柱列 6.25m(2.13+2.02+2.11)	南妻 6.64m(廂2.39+身4.25(2間分))	N 6°E(西側柱列)	東廂付き建物跡
S B3401	南北棟	3間×1間以上	西側柱列 7.09m(2.47+2.17+2.46)		N 8°E(西側柱列)	柱・礎板の樹種：クリ
S B3403	東西棟	4間×3間以上	南入側柱列 4.53m 以上(廂1.98+身2.55)	東妻 8.96m(廂2.02+身4.79+廂2.15)	N12°E(東側柱列)	南・北・東廂付き建物跡　礎板の樹種：クリ
S B3404	東西棟	2間×3間以上	北側柱列 3.57m 以上(1.75+1.82)	東妻 3.80m	N 4°E(東妻)	
S B3405	東西棟	2間×3間	北側柱列 5.45m(2.13+1.63+1.69)	東妻 3.55m(1.90+1.65)	E15°S(北側柱列)	
S B3408	南北棟	4間×2間以上	西側柱列 8.83m(2.24+2.12+2.27+2.19)	北妻 2.34m 以上	N 4°E(西側柱列)	
S B3409	東西棟	2間×3間	北側柱列 6.70m(2.17+2.22+2.31)	東妻 5.12m(2.67+2.45)	N 5°E(東妻)	
S B3406	東西棟	2間×3間以上	南側柱列 4.07m 以上(2.00+2.07)	西妻 4.42m(2.10+2.32)	N12°E(西妻)	
S B3407	東西棟	2間×3間以上	南側柱列 3.93m 以上(1.82+2.11)	西妻 3.73m(1.96+1.77)	N 9°E(西妻)	
S B3433	南北棟	3間×2間	東側柱列 6.00m	北妻 4.80m	N 2°E(東側柱列)	
S B3410	東西棟	2間×3間以上	南側柱列 4.51m 以上(2.18+2.33)	西妻 4.52m	ほぼ真北(西妻)	
S B3430	東西棟	2間×3間	南側柱列 6.32m(2.21+4.11(2間分))	東妻 4.59m	N 4°E(東妻)	柱・礎板の樹種：クリ
S B3431	南北棟	3間×2間	西側柱列 5.85m(1.77+1.77+2.31)	南妻 4.00m(2.18+1.82)	N 3°W(西側柱列)	総柱建物跡
S B3432	東西棟	2間×4間以上	南側柱列 5.86m 以上(1.83+2.23+1.80)	東妻 3.40m(1.30+2.10)	E 3°N (南側柱列)	
S B3411	南北棟	3間×2間	西側柱列 4.05m(1.42+1.21+1.40)	北妻 3.45m(1.81+1.64)	N 3°W(西側柱列)	東側柱列は2間
S B3412	南北棟	2間×1間以上			N 4°E(西側柱列)	西側柱列 4.76m(2.32+2.42)
S B3413	南北棟	3間×2間	東側柱列 4.47m(1.46+1.52+1.49)	北妻 4.34m(2.48+1.86)	N 9°E(東側柱列)	
S B3414		2間×2間以上			N 4°W(東側柱列)	総柱建物跡　総長：東側柱列 4.19m 北側柱列 1.79m以上
S B3415	南北棟	3間×2間	東側柱列 4.97m(1.62+3.35(2間分))	北妻 2.40m(1.15+1.25)	ほぼ真北(東側柱列)	
S B3416	南北棟	2間×2間	西側柱列 4.36m	北妻 3.39m	N 5°W(西側柱列)	
S B3417	東西棟	2間×2間	南側柱列 3.35m(1.99+1.36)	西妻 2.66m(1.31+1.34)	N20°E(西妻)	
S B3418	南北棟	3間×2間	西側柱列 5.46m(1.90+3.56(2間分))	北妻 4.24m(2.04+2.20)	ほぼ真北(西側柱列)	柱の樹種：クリ
S B3419	南北棟	3間×2間	西側柱列 5.62m(1.93+1.76+1.93)	北妻 3.30m(1.52+1.78)	N 2°W(西側柱列)	礎板の樹種：クリ
S B3420		2間×1間以上			N 6°E(西側柱列)	西側柱列 4.10m(2.20+1.90)
S B3421	南北棟	3間×1間以上	西側柱列 6.73m(2.02+4.71(2間分))		N 6°W(西側柱列)	
S B3422		2間×1間以上			N10°E(西側柱列)	西側柱列 2.75m(1.45+1.31)
S B3423	東西棟	2間×2間以上	北側柱列 2.69m 以上(1.79+0.90以上)	東妻 3.37m(1.69+1.68)	N 5°E(東妻)	
S B3424	東西棟	2間×2間	北側柱列 4.24m(2.20+2.04)	東妻 3.07m(1.57+1.50)	N 2°W(東妻)	総柱建物跡
S B3425	南北棟	3間×2間	西側柱列 5.86m(1.99+1.84+2.03)	北妻 4.07m(1.98+2.09)	N 3°W(西側柱列)	
S B3427	東西棟	2間×2間	南側柱列 4.03m(2.03+2.02)	東妻 3.27m	N 3°W(東妻)	
S B3436	南北棟	2間×2間	西側柱列 3.54m(1.90+1.64)	南妻 3.00m(1.55+1.45)	ほぼ真北(西側柱列)	
S B3437	南北棟	2間×2間	西側柱列 3.25m(1.64+1.61)	南妻 3.00m(1.43+1.57)	ほぼ真北(西側柱列)	
S B3438	東西棟	1間×2間	北側柱列 3.17m(1.68+1.49)	東妻 2.89m	N 6°E(東妻)	
S B2890	南北棟	3間×2間	西側柱列 5.86m(2.05+1.87+1.94)	北妻 2.87m(1.93+1.94)	ほぼ真北(西側柱列)	
S B2889	南北棟	2間×2間	西側柱列 3.33m 以上(1.88+1.50以上)	南妻 3.64m	E 2°S(南妻)	柱の樹種：クリ
S B3426	東西棟	2間×2間	南側柱列 4.57m(2.38+2.19)	西妻 2.75m(1.25+1.50)	ほぼ真北(西妻)	
S B3428		2間×2間以上			E 1°S(北側柱列)	柱間寸法：西側柱列 1.32+1.50 北側柱列 1.41+1.29
S B3429		1間以上×1間以上			N 7°E(西側柱列)	柱間寸法：西側柱列 2.97 北側柱列 2.97
S B2888	東西棟	2間×3間	南側柱列 4.78m(1.55+1.66+1.57)	西妻 2.90m(1.41+1.49)	E 2°S(南側柱列)	
S B2887	東西棟	2間×3間	南側柱列 4.52m(1.48+1.50+1.54)	西妻 3.63m	ほぼ真東(西妻)	
S B2886	東西棟	2間×2間	北側柱列 3.45m	東妻 3.20m	N 1°E(東妻)	
S B2885	東西棟	2間×2間	南側柱列 5.91m(廂1.67+身2.26+身1.98)	西妻 4.04m	ほぼ真北(西妻)	東廂付建物跡　廂の出1.67m
S B2884	南北棟	2間×2間	西側柱列 2.76m	南妻 2.21m(1.22+1.20)	N 6°E(西側柱列)	
S B2883	南北棟	2間×2間	東側柱列 4.60m	南妻 2.83m(1.38+1.45)	N 3°E(東側柱列)	
S B2880		1間以上×2間以上			E 4°S(北側柱列)	北側柱列の柱間寸法は2.30m 前後
S A2881		東西1間			E 2°S	柱間寸法 3.00m 前後
S A2882		東西1間			E 5°N	柱間寸法 3.15m 前後

第7表　掘立柱建物跡一覧表〔奈良・平安時代〕

276 南北区画溝跡の東と西に分けられる（第143図）。そこでＳX3106 の南を１区、その北でＳD2766 の西を２区、東を３区と呼び、地区ごとに掘立柱建物跡の検討をおこなう。

《1　区》

１区は北をＳX3106 東西道路跡に画された地区で、道路南側溝から調査区の南端までは約68mある。建物跡は15棟検出している。これらは南部の４棟（ＳB3400～3403）、中央部の７棟（ＳB3404～3409）、北部の４棟（ＳB3410、3430～3433）に分けられる。建物の方向をみると、南部と中央部が北に対して東に傾くのに対し、北部はほぼ真北方向もしくは北で西に傾く。

南部の建物群はＳB3400→ＳB3401・3403 という新旧関係があり、少なくとも２時期の変遷があることがわかる。建物の方向はＳB3400 がN6°Ｅ、ＳB3401 がN8°Ｅ、ＳB3403 がN12°Ｅであり、新しい方が東への傾きが強くなる。

建物の年代は柱穴埋土の出土土器をみると、ＳB3400 がロクロ調整の土師器坏・甕とともに須恵器坏Ａａ・Ａｂ類があることから、９世紀前半代と考えられる。ＳB3401 は量は少ないがロクロ調整の

土師器坏・甕とともに須恵器坏Ａａ・A2 類があることから 9 世紀前半代とみられる。ＳB3403 はロクロ調整の土師器坏・高台坏・鉢・甕や須恵器坏Ａａ類、灰釉陶器椀とともに須恵器坏ＢⅡｂ類が出土していること、9 世紀前半代のＳB3400 より新しいことから 9 世紀後半以降と考えられる。ＳB3402 はロクロ調整の土師器坏・甕とともに灰釉陶器椀などが少量出土している。建物の方向がＳB3403 に近く、埋土に灰釉陶器椀を含む点がＳB3403 と共通することから 9 世紀後半以降とみられる。

中央部の建物群はＳB3407→ＳB3408 という新旧関係があり、さらにこれらとＳB3406 が位置的に重複することから、3 時期の変遷があることがわかる。ＳB3406 とＳB3407 はともに梁行 2 間、桁行 3 間以上の東西棟であり（註 17）、西妻の位置や長さががほぼ同じであることから妻の柱位置を 1 間分ずらして建替えた建物と考えられる。したがって、ＳB3406・3407・3408 はＳB3406・3407 という東西棟からＳB3408 の南北棟へ変遷したとみられる。

建物の年代は柱穴埋土の出土土器をみると、ＳB3408 はロクロ調整の土師器坏・甕とともに須恵器坏Ａａ類があり、土師器坏はＢⅠ類で回転ヘラケズリや手持ヘラケズリが施されるものがあることから、9 世紀中葉頃と考えられる。ＳB3404・3406・3407 は量は少ないがロクロ調整の土師器坏・甕があることから 9 世紀以降とみられる。ＳB3409 はＳK3014 土壙より古いため下限は 9 世紀中葉である。柱穴埋土出土土器はロクロ調整の土師器坏・甕とともに須恵器坏Ａａ類があり、土師器坏はＢⅠ類で手持ヘラケズリが施されているものがあることから、9 世紀前半代と考えられる。ＳB3405・3433 は土器が僅少もしくはないため、年代の検討ができない。

北部の建物群はＳB3430→ＳB3431→ＳB3432 という新旧関係があり、さらにこれらとＳB3410 が位置的に重複することから 4 時期の変遷がある。建物の年代は柱穴埋土からの出土土器が少なく、特定はできない。ただし、建物の位置は北にあるＳB3410・3430 が道路の南側溝より 4mほど南に離れており、道路に規制されているとみられる。したがって、北部の建物群の年代は道路存続期である可能性が高く、建物は 4 時期の変遷をとることから、道路機能時をとおして存在したとみられる。

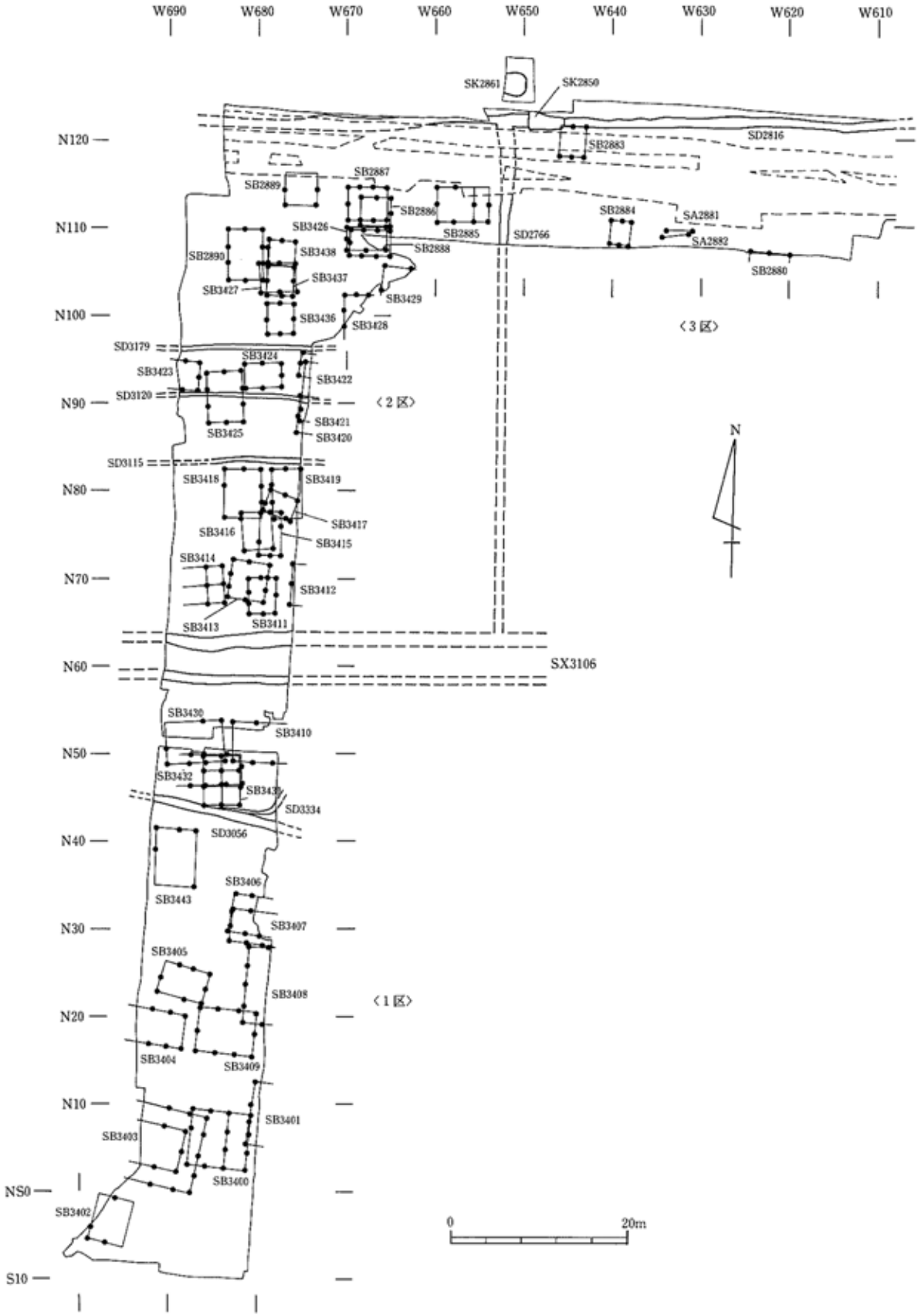
ここで建物の方向をみると、ａ：北で西へ 4 度以上傾くもの（ＳB3430）とｂ：ほぼ真北方向のもの（ＳB3410・3431～3433）であり、中央部から南の建物が東に傾くあり方と異なる。むしろ後述する 2 区の建物と方向が共通しており、ａがｂに先行するあり方も同じである。

《2　区》

2 区は北、東、南をそれぞれＳD2916 溝跡、ＳD2766 溝跡、ＳX3106 道路跡北側溝に囲まれた地区で、南北 58m、東西は 36m以上ある。

建物跡は 28 棟検出している。これらの建物の年代は柱穴埋土からの土器の出土が少なく、時期の特定はできない。ただし、9 世紀後半から 10 世紀前半に機能していたＳX3106 道路跡やＳD2766 区画溝と重複するものはなく一定の距離をおくことから、道路が機能していた時期のものとみられる。

ここで建物の方向をみると、ａ群：北で西へ 4 度以上傾くもの、ｂ群：ほぼ真方向のもの、ｃ群：北で東に 4 度以上傾くものとに分けられる。これらの新旧関係はａ群：ＳB3416→ｂ群：ＳB3415、ａ群：ＳB3414→ｃ群：ＳB3413、ｂ群：ＳB3411→ｃ群：ＳB3413、ｂ群：ＳB2890→ｃ群：ＳB3439 となり、類例は少ないがａ群→ｂ群→ｃ群という変遷が考えられる。また、ｂ群の中でも建物に



第143図　Ⅺ区・Ⅻ区の主な遺構

新旧関係があるもの（ＳＢ3424→ＳＢ3425）や４棟の建物が位置的に重複するもの（ＳＢ2886～2888・3426）があり、ｃ群でも２棟の建物が位置的に重複するもの（ＳＢ3420・3421、ＳＢ3421・3422）があり、ｂ群とｃ群は数時期の変遷があることがわかる。

なお、ｃ群のＳＢ3417は東への振れが20°と他の建物に較べて大きい。２区の建物の方向は真北を中心として西と東に振れるが、その幅は小さいものが大部分である。この点を重視すれば、東への振れが大きいＳＢ3417は道路機能時のものではなく、それより新しい10世紀中頃以降になる可能性がある。

《3　区》

３区は北、西、南をそれぞれＳＤ2816溝跡、ＳＤ2766溝跡、ＳＸ3106道路跡北側溝に囲まれた地区で、南北58m、東西は60m以上ある。

建物跡を３棟、柱列跡を２条検出している。このうちＳＢ2884はＳＫ2763土壙より古いことから、年代の下限は９世紀前葉と考えられる。また、ＳＢ2883はＳＤ2816溝跡より古く、ＳＢ2894とは間にＳＦ3476小溝状遺構群を介して新しいことから、年代は９世紀前葉から中頃とみられる。

④土壙

ＳＫ3524はXII区の中央部西側で検出した土壙である。底面から土師器坏ＢⅡａ類、須恵器坏BIIIｂ２類などが出土しており、年代は９世紀後半と考えられる。

ＳＫ3503はXI区の中央部西側で検出した土壙である。底面近くの堆積土中から須恵器坏ＡＩａ類、坏部が皿状の須恵器高台坏Ｂ類、非ロクロ調整の土師而器鉢が出土している。土器の様相がＳＫ2764と似ることから年代は８世紀後半と考えられる。

ＳＫ3124はXI区南部で検出した土壙である。底面から土師器坏ＢＩｂ類、須恵器坏ＡⅡａ1類、堆積土から須恵器坏ＡＩａ類・蓋・甕、土師器甕などが出土している。土器の様相はＳＫ2763やＳＫ3014と似ることから、年代は９世紀前半と考えられる。

ＳＫ2851はXI区北部中央で検出した土壙である。底面から須恵器坏ＡⅡａ類、土師器坏ＢＩａ類、底面直上の埋土から土師器甕Ｂ類、堆積土土層から土師器坏・蓋、須恵器蓋・甕Ｂ類などが出土している。土器の様相はＳＫ2763やＳＫ3014と似ることから、年代は９世紀前半と考えられる。

⑤その他の遺構

ＳＸ2999はXI区南側で検出した土器埋設遺構である。出土土器は須恵器坏ＡＩａ類で、その年代は８世紀後半から９世紀前半である。本遺構は位置や土器の年代からみてＳＢ3400建物跡にともなう地鎮跡とみられることから、遺構の年代は９世紀前半と考えられる。

ＳＤ3056はXII区北端で検出した東西溝跡で、14.3m分を確認した。堆積土から土器が少量出土しているが、土師器坏はいずれもロクロ調整であることから年代は９世紀以降とみられる。

ＳＦ3473はXI区中央から北部で検出された小溝状遺構群で、ＳＢ2890・3427・3436・3437建物跡より古いことから年代は10世紀前半以前とみられる。ＳＦ3475はXI区北部西側で検出した小溝状遺構群で、ＳＢ2899建物跡より古いことから10世紀前半以前とみられる。ＳＦ3476はXI区北部東側で検出した小溝状遺構群で、ＳＤ2816溝跡より古いことから９世紀後半以前とみられる。

C．遺構の変遷

Ⅴ区からⅫ区までの遺構の分布をみると、掘立柱建物跡をはじめとする多数の遺構はⅪ・Ⅻ区に集中しており、その東のⅤ～Ⅹ区における遺構のあり方と際だった違いをみせる。Ⅴ～Ⅹ区の遺構は出土遺物が少なく、数少ない年代を特定できる遺構はすべて9世紀以降である。そこで、ここでは遺構の集中しているⅪ・Ⅻ区について検討する。

Ⅺ・Ⅻ区で発見した奈良・平安時代の遺構は、前節で年代を検討した結果からＳＸ3106東西道路建設と廃絶を画期として、**A期：**道路建設前の8世紀後半から9世紀中葉、**B期：**道路機能時の9世紀後半から10世紀前半頃、**C期：**道路廃絶後の10世紀中頃以降の3期に大別できる。

【A期：ＳＸ3106道路建設前－8世紀後半から9世紀中葉】（第144図）

Ⅻ区では中央部から南に遺構が認められる。9世紀前葉から中葉頃のもので、ＳＢ3400・3401・3404・3406～3409建物跡、ＳＫ3014土壙、ＳＸ2999土器埋設遺構はこの時期と考えられる。建物は2間×3間のものが多いが、柱痕跡が25㎝前後で柱間寸法が2.2m以上になるものと、これより小さい柱痕跡が20㎝前後で柱間寸法が1.8～2mのものとがある。また、建物にはＳＢ3400→ＳＢ3401、ＳＢ3407→ＳＢ3408という新旧関係があり、さらに後者は位置的にＳＢ3406が重複するため、3時期以上の変遷がある。この中で東に廂をもつＳＢ3400南北棟とＳＢ3409東西棟は西側の柱筋を揃えて南北に並んでおり、同時期と考えられる。なお、Ⅻ区北部にはB期のＳＢ3431より古いＳＤ3056溝跡がある。方向がこの時期の建物と似ることから、建物群の北を画す区画溝の可能性がある。

この周辺はⅪ・Ⅻ区をとおして唯一、灰釉陶器が出土しているところである。灰釉陶器はＳＢ3400より新しいＳＢ3403やＳＢ3402建物跡の柱穴埋土から出土しており、A期に使用されたとみられる。さらに、ＳＫ3014土壙から出土した「館」と書かれた墨書土器は、Ⅻ区南部の建物群の性格を示唆するものと思われる。

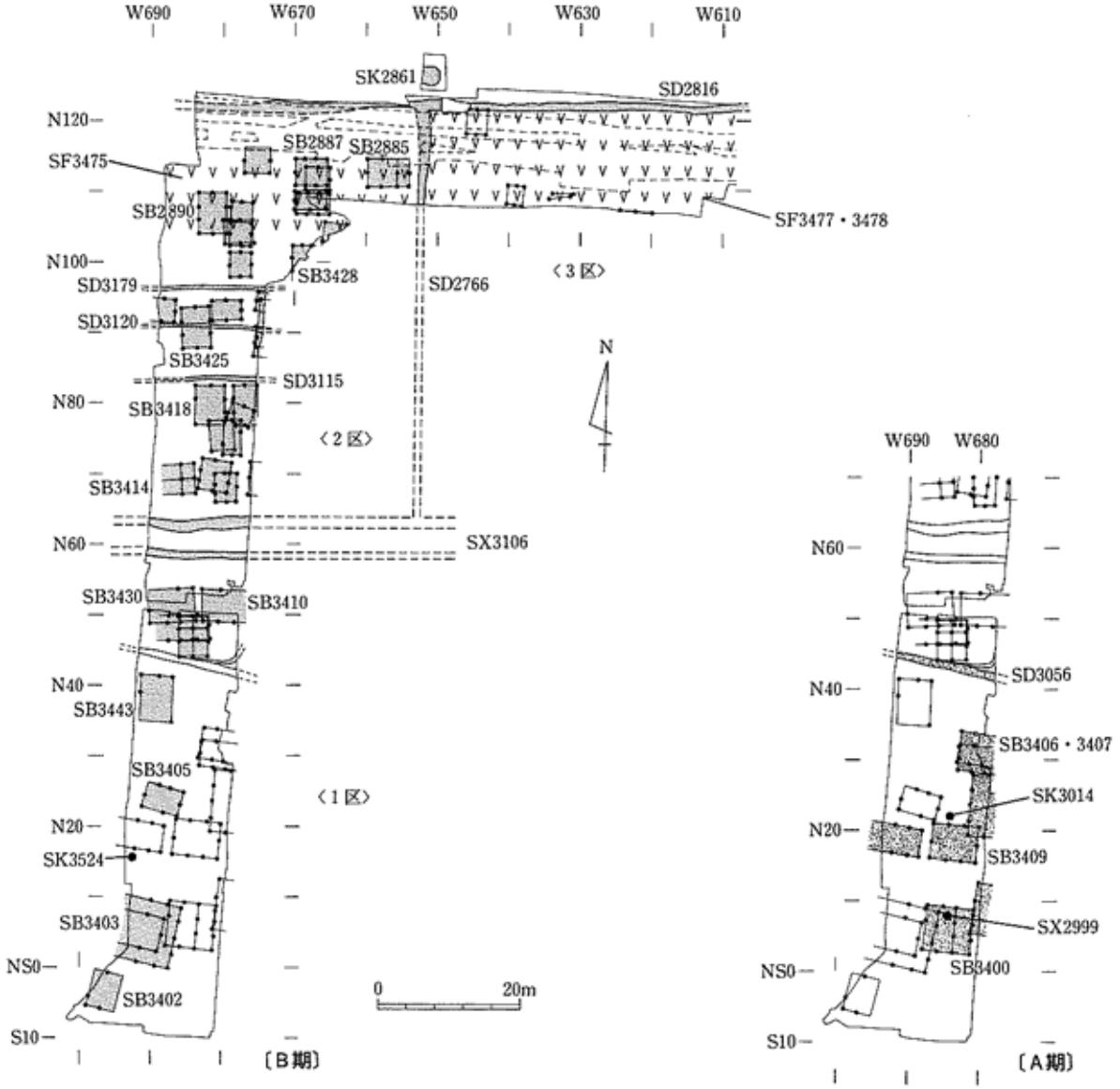
Ⅺ区では北部のＳＦ3473・3476・3479小溝状遺構群がこの時期と考えられ、主に耕作域として利用されていた。北部東側ではＳＢ2883・2884といった、1間×2間もしくは2間×2間の小型建物があり、ＳＫ2763・2764・2851・3124・3503土壙も本時期に属する。これらの遺構は出土土器からみて8世紀後半から9世紀前半頃とみられる。

【B期：ＳＸ3106道路機能時－9世紀後半から10世紀前半】（第144図）

主な遺構としては多数の掘立柱建物跡のほか区画溝跡、土壙、溝跡、小溝状遺構群などがある。この時期の遺構はＳＫ2861土壙を除くと、ＳＸ3106東西道路跡とその北で道路に平行するＳＤ2816東西溝跡、両者をつなぐＳＤ2766南北溝跡によって区画される。したがって、ＳＸ3106の南を1区、その北でＳＤ2766の西を2区、東を3区と呼び、地区ごとに遺構の変遷を検討する。

〈1　区〉

1区は北をＳＸ3106東西道路跡に画された地区で、道路南側溝から調査区の南端までは約68mある。1区全域に遺構が認められ、ＳＢ3402・3403・3405・3410・3430～3433建物跡、ＳＫ2968・3524土壙はこの時期とみられる。建物は2間×3間のものが多いが、柱痕跡が25㎝前後で柱間寸法が2.2m以上に



第144図　Ⅺ・Ⅻ区の遺構変遷図

以上になるものと、柱痕跡が20cm前後で柱間寸法が1.8～2mのものとがある。南の建物と北の建物に分けられ、方向は前者が北に対して東に傾くのに対し、後者はほぼ真北か北に対して西に傾くという違いがある。

南の建物のうちＳＢ3403は西側が新しい遺構によって壊されているが、北・東・南の3面に廂をもつ大きな建物である。時期はＳＢ3402・3403が9世紀後半以降と考えられ、ＳＢ3405も方向からみて同時期とみられる。

北の建物は4時期の変遷があることから、道路機能時をとおして存在したとみられる。建物の方向や変遷は2区と共通しており、柱痕跡が大きいもの（ＳＢ3430）が古く、小さいもの（ＳＢ3431・3432）が新しい。

《2　区》

2区は北、東、南をそれぞれＳＤ2816溝跡、ＳＤ2766溝跡、ＳＸ3106道路跡北側溝に囲まれた地区で、南北58m、東西は36m以上ある。

建物跡は28棟検出している。建物規模は2間×3間や2間×2間が大部分で、柱痕跡は20㎝前後で柱間寸法が1.8～2mのものもあるが、柱痕跡が10～15㎝で柱間寸法が1.7m以下のものが多く、1区に較べて小型の建物が目立つ。これらは南部の9棟（ＳＢ3411～3419）、中央部の6棟（ＳＢ3420～3425）、北部の13棟（ＳＢ2885～2890、3426～3429、3436～3438）に分けられる。建物の方向からａ群：北で西へ4度以上傾くもの、ｂ群：ほぼ真方向のもの、ｃ群：北で東に4度以上傾くものとに分けられ、ａ郡→ｂ群→ｃ群という変遷が考えられる。また、ｂ群とｃ群は数時期の変遷があることから2区の建物は道路機能時をとおして存在したとみられる。

ａ群の建物はＳＢ3414とＳＢ3416で、ＳＸ310棟西道路跡に近接した南側に位置する。ｂ群の建物は2区の全域にひろがる。また、ｂ群の建物のなかにはＳＢ2885とＳＢ2887、ＳＢ2887とＳＢ3428、ＳＢ2890とＳＢ3426、ＳＢ2890とＳＢ3418のように柱筋を揃える建物があり、建物の配置に計画性がうかがえるものがある。

このほか、ＳＤ3115・3120・3179東西溝跡は、堆積土の特徴から古代に属すると考えられ、ある時期における2区内の区画溝とみられる。とくに、ＳＤ3115・3179は建物跡と重複しておらず、長期間機能していた可能性がある。さらに建物変遷の中に入るＳＦ3475小溝状遺構群は、ある時期の空閑地を耕作域に利用したものとみられる。

《3　区》

3区は北、西、南をそれぞれＳＤ2816溝跡、ＳＤ2766溝跡、ＳＸ3106道路跡北側溝に囲まれた地区で、南北58m、東西は60m以上ある。

ＳＦ3477・3478小溝状遺構群がこの時期の遺構とみられる。したがって、道路機能時の3区北側は耕作域として利用されていたとみられ、ＳＤ2766をはさんで西に位置する2区が掘立柱建物が多く建ち並ぶあり方と際だった違いを示している。

以上をまとめると、1区や2区は掘立柱建物が多く営まれる。なかでも1区の南側は3面以上に廂をもつＳＢ3403を中心に建物が配されており、小型の建物が主体である2区とは性格が異なると考えられる。1区の南側は前代も廂付き建物を含む建物群が数時期変遷しており、灰釉陶器や「館」と書かれた墨書土器が出土していることから、一般の居住空間とは異なる、より格式の高い建物群と考えられる（註18）。2区は建物が全域に分布しており、それらは桁行が3間以下の小型のものが主体である。これらのなかには建物の配置に計画性がみられるものがあり、建物変遷のある時期は内部を溝で細分し、空閑地は耕作域として利用している状況もうかがえた。

これに対し、3区は主に耕作域として利用されており、1・2区とは土地利用のあり方が異なっている。また、ＳＤ2816北側のＳＫ2861土壙では10世紀前半に食膳具の大量廃棄が認められる。

【Ｃ期：ＳＸ3106道路廃絶後－10世紀中頃以降】

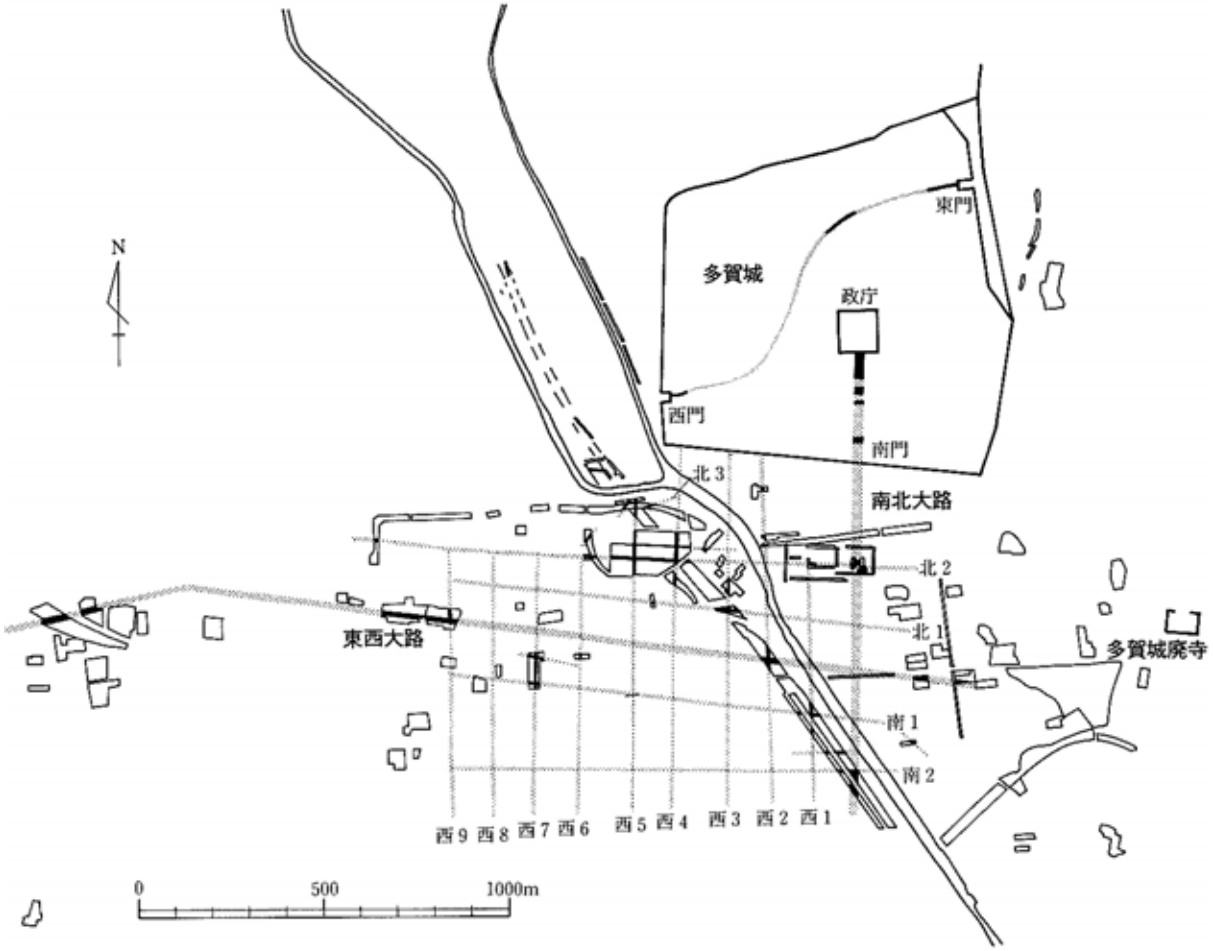
この時期の遺構で明らかなのはXI区北端のＳＫ2850土壙である。ほかにXI区北部西側のＳＦ3471・3472・3474小溝遺構群がこの時期とみられる。また、XI区の建物で方向が他と較べて東への振れが大きいＳＢ3417建物跡はこの時期に属する可能性がある。

3．まとめ

今回の調査で奈良・平安時代の遺構が多く発見されたXII区（町地区）やXI区（伊勢地区）について、これまでの調査成果を踏まえて位置付けをおこなってみたい。

近年、多賀城外の南面は平安時代前半に幅約 23mの南北大路や幅約 12mの東西大路をはじめ、多賀城政庁中軸線や外郭南辺築地を基準とした東西・南北の道路がつくられ、多賀城南西部の自然堤防上に方格地割が存在したことがあきらかとなってきている（第 145 図）。地割の内部は掘立柱建物跡のほか塀跡、区画溝跡、井戸跡などが多数検出されている。竪穴住居跡は少ない。また、中国陶磁器、国産の施釉陶器といった奢侈品、硯、墨書土器、石帯といった多賀城と密接な関わりをもった遺物が多くみられるなど、一般集落とは異なった都市的な空間を形成している。

方格地割は一度に施行されたものではなく、Ⅰ）8 世紀末頃の基幹道路（大路）の整備→Ⅱ）9 世紀初頭頃の東西大路をはさんで南北一区画ずつの方格地割の形成→Ⅲ）9 世紀後半頃の方格地割の南北への拡大といった 3 段階の変遷をへて完成している。ただし、これらの基準となる方向は、場所や時期によって異なり、また間隔も 110～140mとばらつきが認められる。方格地割の終末年代は 10 世紀後半代とみられ、ほぼ多賀城の終末年代と一致している（菅原ほか：1996）。したがって、多賀城外の南面における奈良・平安時代の遺構は、方格地割の形成を画期としてそれ以前と地割機能時、地割廃絶後に分けて考えられる（後藤ほか：1994）。



第145図　多賀城南面の方格地割

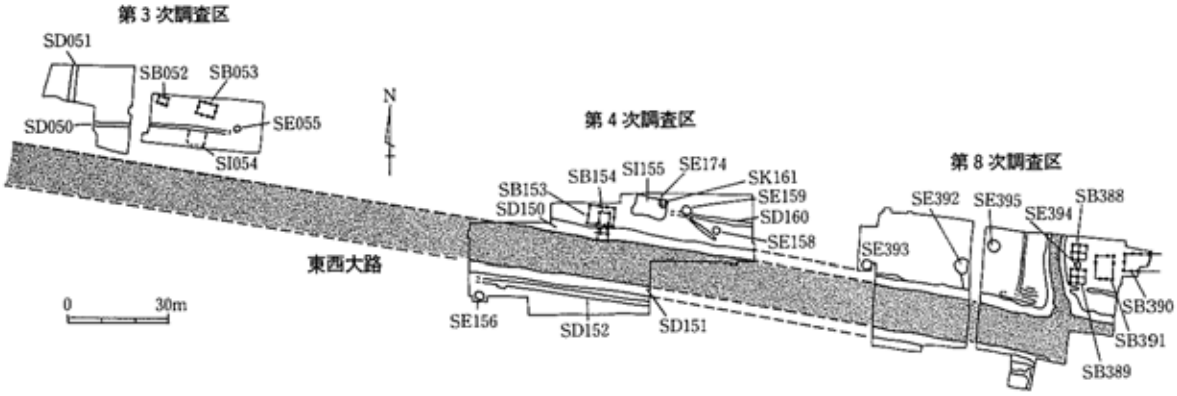
こうした成果をもとに八幡地区や町地区、伊勢地区検出遺構をみてみると、道路跡では八幡地区北西部のⅤ・Ⅶ・Ⅷ・Ⅹ区でそれぞれ西6・7・8・9南北道路の存在が想定されたが、いずれの調査区でも道路跡は検出されていない。西6道路跡は北2東西道路跡から北で方角が著しく東に傾くこと、試掘調査の結果、西7〜9道路が確認できなかったことから、西6通路より西の地域では南北道路が北2東西道路より北につくられていない可能性が指摘されていた（後藤ほか：前掲）が、今回の調査はこの指摘を裏付ける結果となった。

町地区や伊勢地区の遺構はA〜Cの3期に大別できる。町地区では9世紀前半（A期）に廂付建物を含む建物群が出現する。これはA期の年代が9世紀前葉から中葉であること、建物群が町地区の南に位置すること、建物の方向が北に対して東に傾くあり方は、東西大路の方向（E8°S）に規制されたと考えられることからみて、8世紀末頃に完成した東西大路が町地区の南をとおり、9世紀初頭頃にそれをはさむ南北一区画ずつの方格地割が形成されるという、方格地割Ⅰ期（以下、方格を略する）からⅡ期の動きに対応するものと考えられる。

9世紀後半から10世紀前半（B期）に北2道路や区画溝がつくられ、町・伊勢両地区に多数の建物が建ち並ぶあり方は、地割Ⅲ期における方格地割の南北への拡大の動きと軌を一にしている。建物の方向をみると、町地区の南側はA期と同じであるが、町地区北側から伊勢地区は真北を中心として東西への振れは小さい。これは北2道路の方向に規制されたためと考えられる。10世紀中頃以降（C期）に道路や建物群がなくなり、伊勢地区北側が耕作域として利用されることも10世紀後半代の方格地割の終末と対応すると考えられる。

従来、方格地割の西は西9南北道路と考えられていた（千葉：1994）。今回の調査地である町・伊勢地区は西9南北道路から西へ約200m離れている。しかし、町・伊勢地区における平安時代の遺構およびその変遷は、方格地割内部と同じあり方を示し、一連の動きをとるといえる。したがって、南北道路は検出されていないが、方格地割の範囲は西9道路よりさらに西へ延びると考えられる（註19）。

町・伊勢地区と同じく山王遺跡西側で調査がおこなわれたところとしては、町地区の南100mにある西町浦地区とその東60mの東町浦地区（相沢：1990、高倉：1991）がある。これらの成果と比較すると、前者は道路施行後、区画溝や多数の建物がつくられ、建物のなかには廂付きの大型のものもある



第146図　山王遺跡東町浦・西町浦地区の検出遺構

が、後者は東西大路沿いであるにもかかわらず、小規模な建物や竪穴住居、井戸、区画溝がつくられるにすぎず、それらの密度も希薄である（第146図）。したがって、方格地割西側における遺構のあり方は場所によって違いが認められる。

C．江戸時代以降

今回の調査では区画溝跡5、掘立柱建物跡21、井戸跡18、溝跡12、池跡1、土壙5などを検出した。遺構は西を南北区画溝跡によって画されている。敷地内部はXII区南側に掘立柱建物跡、井戸跡、土壙などが集中しており、XII区北側は掘立柱建物跡や溝跡、土壙が疎らに分布する。その傾向はXII区南側も同じで、井戸跡や溝跡、土壙が散在するのみである。

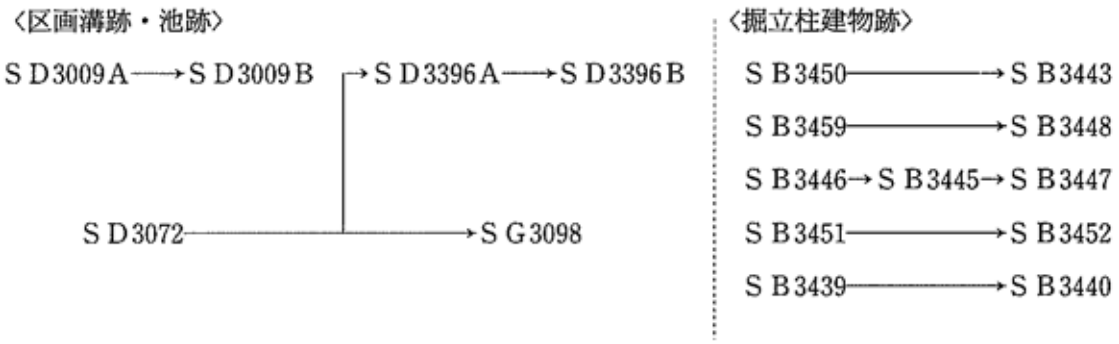
遺物はＳＤ3396Ａ・Ｂ区画溝跡、ＳＧ3098池跡を中心に陶磁器・土師質土器・瓦質土器・土製品・瓦・木製品・金属製品などが出土している。なお、遺物については出土量が少なく、ここでは検討できないため、事実記載で個別に述べている。したがって、ここでは遺構の検討のみおこなうこととする。

【遺　構】

前述したように、遺構はXII区からXI区の南側にかけて分布しており、とくにXII区の溝側に集中している。

a．重複関係

XI区、XII区における江戸時代以降の主な遺構について重複関係を整理すると以下のようになる。



第147図　江戸時代以降の遺構重複関係

b．年代

遺物がまとまって出土した遺構はＳＤ3396Ａ・Ｂ区画溝跡、ＳＧ3098池跡のみであり、他の遺構からの出土は少ない。ここでは両遺構のほかに、ある程度遺物が出土し年代の把握が可能な遺構についても検討をおこなう（註20）。

①区画溝跡

ＳＤ3396Ａ・Ｂ溝跡の堆積土からは、16世紀末から19世紀後半代の陶磁器が出土している（第54～61図）。なかでも肥前編年Ｖ期（註21）と考えられる肥前産陶磁器や19世紀前半から中頃の宮城県切込産の磁器小碗、福島県大掘相馬産の陶器碗など、19世紀代のものが多く出土していることから年代は19世紀と考えられる。

またＳＤ3072 溝跡は、ＳＤ3396 溝跡より古いこと、破片ではあるが堆積土から 18 世紀後半の大堀相馬産の陶器碗が出土していることから、年代は 18 世紀後半とみられる。

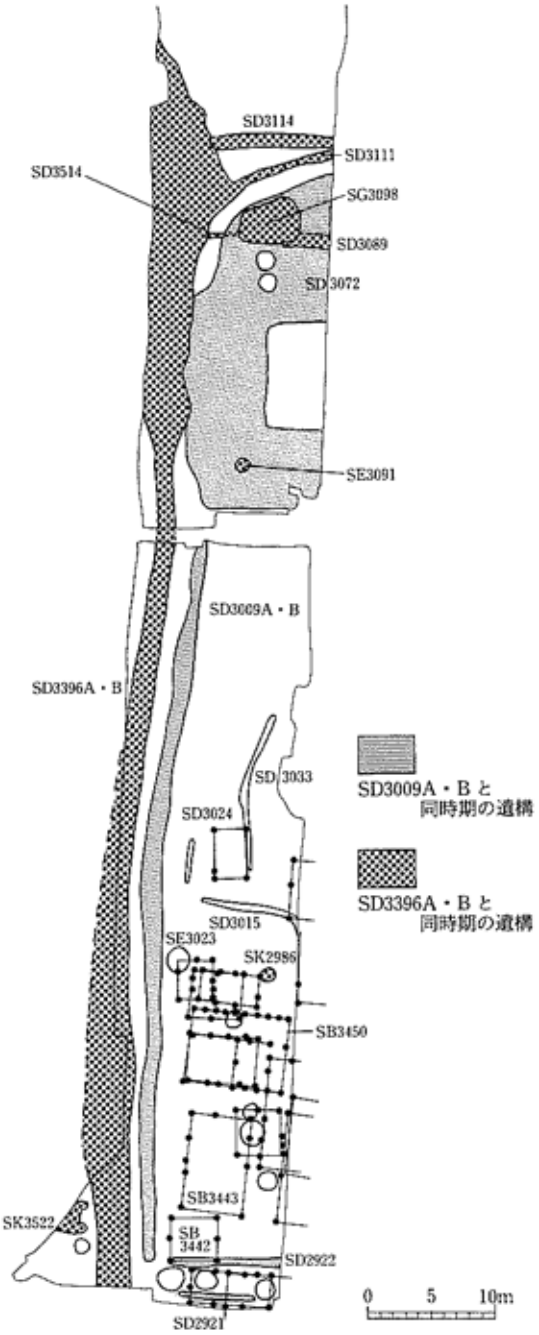
②掘立柱建物跡

柱穴から明確に年代を知りうる遺物は出土していない。

③井戸跡

ＳＥ3091 井戸跡は堆積土から 18 世紀代の陶磁器が出土していることから、年代は 18 世紀以降とみられる。ＳＥ2982 井戸跡は堆積土から大正時代以降と考えられる銅版絵付による磁器腕が出土しており、年代は大正時代以降と考えられる。

④池跡



第148図　江戸時代以降の主な遺構

ＳＧ3098 池跡はＳＤ3396 溝跡と接続していること、堆積土から瀬戸産の 18 世紀後半から 19 世紀前半の陶器中碗が出土していることから、年代は 19 世紀と考えられる。

⑤溝跡

ＳＤ3113 溝跡は堆積土から 18 世紀の瀬戸産陶器碗が出土しており、年代は 18 世紀以降とみられる。ＳＤ3089 溝跡はＳＧ3098 溝跡と接続していること、堆積土から 18 世紀後半から 19 世紀前半の陶器中碗が出土していることから、年代は 19 世紀と考えられる。

⑥土壙

ＳＫ2986 土壙やＳＫ3522 土壙は堆積土から大堀相馬産の 19 世紀前半から中頃の陶器中碗が出土していることから、年代は 19 世紀とみられる。ＳＫ3158 土壙は堆積土から美濃産の 16 世紀末から 17 世紀初めの陶器中碗が出土していることから、年代は 16 世紀末以降とみられる。ＳＫ3021 土壙では人為的に埋め戻した土から陶磁器や木製品がまとまって出土している。その中には大正時代以降と考えられる銅版絵付による磁器碗が出土していることから、年代は大正時代以降と考えられる。

Ｃ．遺構のあり方

前章での検討から区画溝はＳＤ3396 溝跡の年代が 19 世紀、これより古いＳＤ3072 溝跡は 18 世紀後半と考えられた。ＳＤ3009 溝跡についてはＳＤ3072 との

接続部分が撹乱で確認できず、しかも出土遺物から年代が特定できないが、両者はＳD3396 より古いこと、堆積土の状況が共通すること、底面レベルがほぼ同じであることからＳD3009 とＳD3072 は接続していたと考えられる。したがって、区画溝跡はＳD3009Ａ・Ｂ・ＳD3072→ＳD3396Ａ・Ｂという変遷をとったと考えられる。

第 148 図は 18 世紀後半から 19 世紀の遺構略図である。大別 2 期の区画溝の変遷にともなう遺構についてはスクリーントーンで示してある。掘立柱建物跡については重複関係を持つものがあるが、出土遺物などから年代を特定できず、どの時期の区画に属するのかは不明である。

全体的にみてXI区（伊勢地区）やXII区（町地区）の遺構は、溝で区画された南北に細長い敷地内に掘立柱建物や井戸、池、土壙などがつくられており、年代は 18 世紀後半から 19 世紀のものが主体を占めている。遺構は町地区（XII区）の南側に多くみられ、その北、伊勢地区（XI区）の南側にかけては井戸や溝、池、土壙がまばらに分布する。とくに掘立柱建物は町地区の南側に集中しており、主屋と付属建物からなっている。調査地の南には塩竈街道が東西に通っていたと考えられる。したがって、街道沿いは溝によって敷地割りがおこなわれ、その内部の利用のあり方は街道に面した部分に建物や井戸を中心とした居住域があり、敷地の奥は井戸や池、溝、土壙などがまばらにつくられたと考えられる。

南宮周辺は江戸時代の初めに伊達家の命をうけた組頭成田氏とともに移った足軽が屋敷を構えた地域である（多賀城町誌編纂委員会：1967）。今回の調査で検出した護岸設備をもつ区画溝は町地区南の山王遺跡西町浦地区でも発見されている（高倉：1991、桑原・高野・千葉：1993）。時期は江戸時代後期である。したがって、江戸時代後期の南宮周辺は東西に走る塩竈街道を中心として、その両側に溝で画された敷地割りがおこなわれていたと考えられる。

第Ⅴ章　ま　と　め

県道泉塩釜線建設にともなう発掘調査は平成 4・5・7・8 年の 4 年間おこなわれた。その結果、山王遺跡北側を東西に横断する形で南北 15m、東西 910mにわたって調査したことになり、各時代の土地利用の一端があきらかとなっている。

古墳時代前期は、微高地の尾根上にあたるＸ区東半部（八幡地区北西部）に竪穴住居や方形周溝墓、小溝状遺構群などがつくられる。微高地の標高は 3.8m前後あり、東西ともゆるやかに傾斜し、東は湿地になるのに対し、西のＸ区西半部からXI区東側は水田（標高 3.1～3.5m）として利用され、さらにその西は湿地となる。東の湿地はVI区西半部まで続く。標高が 3.2～3.4mとなるVI区東半部からIII区西端は、溝跡や河川跡が認められる。さらにその東や南は徐々に低くなり、東の落ち際（III区西半部）には遺物包含層が形成され（後藤ほか：1994）、南のＪ区には水田（標高 3m前後）がつくられる（千葉・鈴木ほか：1997）。

古墳時代中期以降は、ほぼ現在と同じ地形となる。八幡地区から西へ向けてみてみると、Ｉ区からVI区中央部へは西へ緩やかに傾斜している。VI区西端付近からはさらに低くなって湿地となる。湿地

はⅧ区まで続くが、その西端から再び高くなりはじめ、XI区（伊勢地区）をへて山王遺跡西側に位置するXII区（町地区）が最も標高が高くなる。旧表土は古墳時代中期については不明である。奈良・平安時代は部分的に残っており、これをみるとⅧ区の標高は約3.4m、XI区北部では4.3～4.4mである。江戸時代以前の旧表土はXI区からXII区に部分的に残る。標高はXI区北側で 4.2mあり、南へいくほど高くなって、XII区南端では4.9mになる。

古墳時代中期の遺構としては、竪穴住居7軒のほか土壙や溝がある。XII区を中心にXI区の南端にかけてまばらに分布する。Ⅰ区からⅣ区の八幡地区北側では、奈良・平安時代の遺構が多数検出されている。遺構の分布は東側が濃く、西へいくほど希薄になっていく。Ⅲ区中央から西側には居住施設はなく、平安時代の溝や土壙、小溝状遺構が散在するだけになる。こうした状況はⅥ区東側まで続き、その西は湿地となる。湿地はⅧ区西端まで続き、Ⅸ区からⅩ区（八幡地区北西部）では平安時代以降に小溝状遺構群や溝がつくられる。さらに標高が高くなるXI区東側（伊勢地区北東部）になると、奈良時代後半から小規模な建物や土壙、小溝状遺構群がつくられる。最も標高の高いXII区（町地区）や北隣のXI区西側（伊勢地区西側）では遺構が多数つくられる。その主体は掘立柱建物で、とくにXII区では廂付大型建物もみられる。

江戸時代の遺構はXI区（伊勢地区）南側からXII区（町地区）にみられる。遺構は西を南北方向に延びる溝（堀）によって区画された敷地内にあり、当時の街道に面したXII区南側に掘立柱建物を中心に井戸や溝、土壙などが多数つくられ、敷地の奥にあたるXII区北側からXI区は少数の掘立柱建物や池、井戸、溝がつくられるにすぎない。

以下、山王遺跡北側から西側の古墳時代前期、古墳時代中期、奈良・平安時代、江戸時代以降について時代ごとの概要をまとめる。なお、Ⅰ区からXII区の名称は前国調査時からの通し番号である。Ⅰ区は八幡地区の北東部にあたり、以後西に向けて番号がふえていき、Ⅹ区は八幡地区北西部、XI区は伊勢地区、XII区は町地区にあたる。

【古墳時代前期】

(1)　八幡地区北西部（Ⅹ区）の調査では、東西にのびる自然堤防から北へ張り出した微高地の尾根上で竪穴住居跡1軒、方形周溝墓2基のほか土壙や溝跡、小溝状遺構群などを検出した。このうち竪穴住居、方形周溝墓、小溝状遺構群には住居→小溝状遺構群→方形周溝墓という新旧関係があり、微高地は居住域から耕作域、さらに墓域へと変遷していた。

(2)　微高地の標高は3.8m前後で、東西ともゆるやかに傾斜し、東は湿地（標高3.2m）になるのに対し、西は水田として利用されている。水田の標高は 3.1～3.5mで、さらにその西は湿地となる。水田との比高差は30～70㎝である。塩釜式期の水田跡は本遺跡八幡地区Ｊ区、多賀前地区南部、西町浦地区西部で確認されており、八幡地区や多賀前地区の時期は出土土器から後半期と考えられている（千葉・鈴木はか：1997、菅原ほか：1995）。古墳時代前期の水田は自然堤防の周縁にかなりひろがっており、面積は数万㎡におよぶものと考えられる。

(3)　今回の調査で水田を経営していた集落の一部が見つかったこと、集落に近接して方形周溝墓か

らなる墓域が形成されていたことが判明した。水田を経営していた人々の集落本体は、調査区南側の自然堤防上と考えられる。東町浦地区や多賀前地区北側の調査で塩釜式後半段階の土器が出土しており（相沢：1990、後藤憲幸ほか：1996）、この周辺に集落が想定される。

【古墳時代中期】

(1)　山王遺跡周辺における古墳時代中期の土器変遷は、器種構成が大きく変化する時期をもって2段階に大別され、さらに五段階は細分が可能である（1A段階→1B段階→2段階）。町地区で検出された南小泉式期の遺構は1B段階と2段階のものであると考えられた。

(2)　山王遺跡における南小泉式期の遺構は、東の八幡地区に1A段階の遺構が集中しており、西の東町浦・西町浦・町地区は1B～2段階の遺構が分布することから、集落が東から西へ移動した可能性が考えられる。

(3)　山王遺跡八幡・東町浦・西町浦・町地区の南小泉式期の遺構からは黒曜石製石器が出土している。製品はスクレイパーが主体を占める。黒曜石製石器は、東北地方における北海道系土器との共伴関係や北大式期を前後する時期の石器群との共通性から北海道の続縄文文化との関係が指摘されており、本遺跡の南小泉式期は北海道系文化と何らかの関係があったと考えられる。

【奈良・平安時代】

(1)　八幡地区北西部のⅤ・Ⅶ・Ⅷ・Ⅹ区でそれぞれ延6・7・8・9南北道路の存在が想定されたが、いずれの調査区でも道路跡は検出されていない。西6道路跡は北2東西道路跡から北で方向が著しく東に傾くこと、試掘調査の結果、西7～9道路跡が確認できなかったことから、西6道路より西では南北道路が北 2 東西進路より北につくられていない可能性が指摘されていた（後藤ほか：1994）が、今回の調査はこの指摘を裏付ける結果となった。

(2)　町地区や伊勢地区の遺構はA～Cの3期に大別できる。A期は9世紀後半から9世紀中葉で、伊勢地区北部は主に耕作域として利用された。町地区では中央から南に遺構が分布し、東西大路の完成を契機として9世紀前半から中葉に廂付大型建物を含む建物群がつくられ、3時期以上の変遷をとる。これらは遺構や遺物のあり方から一般の居住施設とは異なり、より格式の高い建物群と考えられる。

B期は9世紀後半から10世紀前半で、伊勢地区南端に東西道路がつくられる。これは位置や方向、規模からみて北2東西道路跡と考えられ、西9南北道路より西に東西道路が延びることがあきらかになった。町地区では、前代に続いて中央から南に廂付大型建物がつくられ、これを中心に建物が配されているほか、北側の北2道路沿いには新たに建物群がつくられる。伊勢地区では北2道路の完成とともに区画溝がつくられ、南北区画溝の西側は道路や溝に規制された小型の掘立柱建物が多数出現し、空閑地を耕作域として利用していた。一方、東側北部は耕作域となっている。これは東側が低いためで、地形の制約によって土地利用のあり方が異なっている。

C期は10世紀中頃以降で、道路が廃絶する。伊勢地区は主に耕作地となり、他に土壙がつくら

れるのみとなる。この時期の町地区の遺構は不明である。

(3)　今回の調査地である町・伊勢地区は西9南北道路から西へ約200m離れている。町・伊勢地区における平安時代の遺構およびその変遷は、方格地割内部と同じあり方を示し、一連の動きをとるといえる。したがって、南北道路は検出されていないが、方格地割の範囲は西9道路よりさらに西へ延びると考えられる。

(4)　町・伊勢地区と周じく山王遺跡西側で調査がおこなわれたところとしては、東町浦・西町浦地区がある。これらの成果と比較すると、前者は道路完成後、区画溝や多数の建物がつくられる。そのなかには廂付きの大型のものもあるが、後者は東西大路沿いであるにもかかわらず、小規模な建物や竪穴住居、井戸、区画溝がつくられるにすぎず、それらの密度も希薄である。したがって、方格地割西側における遺構のあり方は場所によって違いが認められる。

【江戸時代以降】

(1)　町・伊勢地区の調査では、溝で区画された南北に細長い敷地内に掘立柱建物や井戸、池、土壙などがつくられていることがわかった。年代は18世紀後半から19世紀のものが主体を占める。これらの遺構は町地区の南側に多くみられ、その北、伊勢地区の南側にかけては井戸や溝、池、土壙が疎らに分布する。とくに掘立柱建物は町地区の南側に集中しており主屋と付属建物からなっている。建物群の南には塩竈街道が東西に通っていたと考えられる。

したがって、街道沿いは溝（堀）によって南北に敷地割りがおこなわれ、その内部の利用のあり方は街道に面した部分に建物や井戸を中心とした居住域があり、敷地の奥は井戸や池、溝、土壙などが疎らにつくられたと考えられる。さらに今回の調査では確認できなかったが、敷地の奥には小規模な畑といった耕作地、屋敷神などをまつる祠なども設けられたと思われる。

(2)　今回の調査ではＳＤ3396Ａ・Ｂ区画溝跡、ＳＧ3098池跡などから陶磁器、漆器、土師質土器、瓦質土器などが出土している。とくに陶磁器と漆器が多い。したがって、江戸時代の食器組成は陶磁器とともに漆器の占める割合が高かったと考えられる。また、遺構の堆積土から出土したイネ、ヒエ、ソバ、コムギ属、ナス属、シソ属、ウリ属、ナシ属、ノブドウ属、カヤ、トチノキ、オニグルミ、モモなどの植物遺体は、前述の食器とともに当時の食生活の一端を示すものといえよう。

註1)　この器種については、古墳時代前期土器の研究で「鉢」もしくは「小型鉢」とされるものである。「坏」という名称は従来の塩釜式土器研究で用いられてきた。辻氏が指摘した（辻：1994）ように、「坏」は銘々器であり、その意味からすれば古墳時代前期の小型の土器は中期後半以降「坏」とは機能が異なると考えられる。この問題についてほ、土師器の小型器種における器形や調整、器種組成の比率の検討を踏まえたうえで系譜をあきらかにしなければならないと考える。したがって、その検討をおこなっていない本報告書では、従来の呼称である「坏」を用いることにする。

註2)　この器種は関東地方などで「炉器台」や「器台状脚形土器」、近畿地方で「支脚形土製品」などと呼ばれ、炉におかれて使用されたものと考えられている（鶴見：1994）。ＳＸ2823の出土品も他の小型器種が使用痕跡

が明瞭でないのに対し、本器種は2次的な加熱を受けて変色し、器面があれている。

註3)　加藤道男氏の論考は論文集の発行が1989年であるが、論考自体の脱稿は1982年10月である。

註4)　第2表の作成にあたっては、仙台市教育委員会の後藤甲二氏、石巻教育委員会の木暮亮氏、福島市文化財調査室西村博幸氏からご教示いただいた。また、表中で（　）で示したものは推定で求めたものである。時期についてはＳＸ2823 出土土器の編年的位置で述べたように、丹羽編年のⅡ～Ⅲ段階について再考の必要がある。したがって、ここでは塩釜式土器について丹羽編年のⅠ段階およびそれ以前を前半、Ⅱ～Ⅲ段階を後半と大きく捉えておくことにする。

誌5)　ＳＦ3552 水田跡の耕作土が認められた範囲は東西39mであるが、Ｘ区西側で検出したＳＸ2842 はこの水田にともなう大畦の可能性がある。ＳＸ2842 のように畦の中央部が溝となる例は、山王遺跡多賀前地区で検出された古墳時代前期のＳＦ3124 水田跡Ⅰ区の大畦3がある（菅原ほか：1995）。ＳＸ2842 を大畦とみた場合、ＳＦ3552 水田跡の範囲は東西約65mとなる。

註6)　八幡地区で検出された遺構の年代は、土器の特徴から概報で紹介されていないものを含めてＳＸ230 と同時期と考えられる。資料の実見に際しては多賀城市埋蔵文化財センターの千葉孝弥氏の配慮をいただいた。

註7)　4～5 世紀にみられる続縄文武土器や北大式土器、黒曜石製石器といった北海道系の遺物は、大崎地方とその北側に多く分布し、南限は仙台平野である。こうした北の地域（とくに東北地方北部）との交流を示す遺構や遺物は6世紀以降も認められ、ほぼ8世紀いっぱい続く。分布の状況は前代と同じである。とくに7世紀後半から 8 世紀前半の栗原地方は、東北地方北部の土器圏に含まれ、同時期の大崎地方の土器にもその影響が色濃く認められる（村田：1997）。

註8)　会津大戸窯製品の宮城県内への搬入は8世紀後半の南原33号窯式期の段階から10世紀前葉の上雨屋112号窯式段階まで認められる（石田：1994）。その主体は9世紀前半から中頃の上雨屋12号窯式期、南原19号窯式期であり、この時期は大戸窯の生産量がピークに達している。搬入品を器種別にみると、長頸壷が圧倒的に多く中型甕や広口壷がこれに次ぐ。これに対し坏・高台坏・蓋といった小型品は少ない。出土地は城柵跡や官衙跡が多く、なかでも多賀城とその周辺が主たる消費地となっている。

註9)　ⅰ類は従来の青灰色で硬質の須恵器と異なり、灰白色や褐色を呈し、軟質に焼き上がったもので重さも軽い。外面の体部から底部、内面の口縁部から底部にかけて黒斑が認められるものがある。また、器の断面を見ると中心が黒色で、その両側が灰白色となるものがある。消費地では9世紀後葉に出現し、10世紀前半に盛行して後半代にはなくなる。

こうした須恵器が窖窯から出土した典型例は、秋田県能代市十二林窯跡がある（高橋学ほか：1989）。同窯は9世紀末から10世紀初頭に操業したと考えられ、窯内部から灰白色や褐色を呈し、黒斑をもつ須恵器が一定量出土している。

窖窯で灰白色の須恵器が生産された理由としてほ、窯詰めの方法が変化したためと考えられる。これまでの方法は甕などの大型品を火前や中軸線上に置き、その間や側壁沿いの空間に小型品を並べた大型品をメインにした配置であった。これが9世紀後半以降、生産器種が坏・壷・甕を主体としたものに限定されてくると、窯体内の下半に壷や甕といった大型品、上半部に小型品の坏を配置するようになる。その結果、壷や甕は青灰色で硬質な焼成が維持されるが、坏は軟質化や還元不良化が目立つようになる。

註10)　方格地割内部の各産国の名称は、大路を基準にしてそれぞれ近い区画から東西・南北に番号をつけて呼んでいる。「北1西7区」は東西大路から北に1区画目、南北大路から西に7区画めにあたる。

註11)　高崎遺跡ＳＸ1080 土器捨て場跡は3回の廃棄が認められるが、出土土器は型式的にほぼ同一の土器群としてとらえられる。したがって、第2層上面から第5層までの土器を一括してあつかい、食膳具の割合を算出した。

註12)　灰白色火山灰の年代については、従来は陸奥国分寺七重塔焼失にともなう焼土層の関係から求めた10世紀前半とされてきたが、最近はその幅をせばめて10世紀前葉と考えられている（柳沢・進藤：1992）。

註13)　多賀城跡調査研究所では、酸化炎焼成で内黒手法が施されない素焼きの土器を須恵系土器と呼んでいる。

註14)　61次調査第7層出土土器の年代について柳沢和明氏は、10世紀第3四半期頃と考えている（「多賀城跡における古代末土器編年」『第3回古代末期土器群の勉強会資料』1996年）。

註15)　第146図は柳沢和明氏が多賀城跡第62次調査で出土した須恵系土器小皿・小型坏・坏の検討で用いた法量比較グラフにＳＫ2850 土壙出土土器のデータを加えたものである（柳沢：1993）。

註16)　群馬県の例をみてみる。多野郡吉井町黒熊中西遺跡では、遺構期が1～10期まで設けられている。このう

ち10世紀第1四半期と考えられる6期以降は、羽釜が煮炊具の主体となる。10世紀代に位置付けられた6・7・8期は住居の軒数が多く、土器の出土量も多い（山口：1994）。そこで6～8期における羽釜の法量をみてみると、口径は17.2～26.6㎝で、平均21.2㎝、器高は22.0～30.9㎝で、平均25.2㎝である。これと較べて宮城県内出土の羽釜は口径8.1～17.6㎝、器高12.4～19.0㎝であり、小型と指摘できる。

註17)　ＳＢ3406・3407建物跡の東側は、多賀城市埋蔵文化財調査センターが1994年に発掘調査をおこなっている（第28次調査）。その結果、古代の柱穴を検出しているが、その組合せについては検討中ということで今回の報告にいかすことができなかった。

註18)　本調査区の東隣接地を調査した多賀城市の第28次調査区からは、須恵器双耳坏が出土している。宮城県内の双耳坏の集成をみると、年代は8世紀後半から9世紀中頃に集中しており、そのほとんどは須恵器である。分布をみると、城柵や官衙およびその周辺からの出土が多い（村田：1996）。この点からも1区の建物群の性格の一端をうかがうことができる。

註19)　この考え方に立てば、町地区Ａ期の建物群のあり方から北1東西道路が西9道路より西へ延びていた可能性も指摘できよう。

註20)　陶磁器の産地同定や生産年代については、東北陶磁文化館の本田泰貴氏に教示いただいた。

註21)　大橋康二氏は江戸時代の肥前産陶磁器をⅠ期からⅤ期に分けて考えている（大橋：1988・1989・1990）。それによるとⅠ期が1590～1600年代、Ⅱ期が1600～1650年代、Ⅲ期は1650～1690年代、Ⅳ期は1690～1780年代、Ⅴ期は1780～1850年代である。

〈引用・参考文献〉（著者別、五十音順）

相沢清利（1990）『山王遺跡　ー第9次調査報告書ー』　多賀城市文化調査報告書第22集

阿部　恵（1984）『柳津館山館跡』　宮城県文化財調査報告書第102集

阿部・須田・岩見（1991）『新峯崎遺跡』　村田町文化財調査報告書第9集

荒井　格（1991）『鴻ノ巣遺跡』　仙台市文化財調査報告書第148集

井汲隆夫（1992）「近世やきものの器種分化」『内藤町遺跡』　新宿区内藤町遺跡調査会

石川俊英（1990）『市川橋遺跡　ー第7次調査報告書ー』　多賀城市文化財調査報告書第21集

石川・相沢（1991）『山王遺跡　ー第9次調査報告書ー』　多賀城市文化財調査報告書第26集

石田明夫（1994）『会津大戸窯　遺物編』　会津若松市文化財調査報告書第37号

伊東信雄ほか（1975）『安久遺跡発掘調査概報』　仙台市教育委員会

岩見・後藤（1991）「合戦原遺跡」『合戦原遺跡ほか』　宮城県文化財調査報告書第140集

氏家和典（1957）「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯

大橋廉二（1988）『西有田の古窯』　西有田町史編纂委員会

大橋康二（1989）「肥前陶磁」『考古学ライブラリー』55

大橋康二（1990）「肥前陶磁の変遷と流通」『江戸のくらし』　新宿歴史博物館

小川貴司（1979）「回転糸切り技法の展開」『考古学研究』第26巻第1号

笠原信男ほか（1995）『仙台　堤のやきもの』　東北歴史資料館

加藤・辺見（1982）「宮城県多賀城市〈東北学院古墳〉発掘調査速報」『紀要』13　東北学院大学東北文化研究所

加藤道男（1989）「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢Ⅱ』

金森安孝ほか（1988）『東光寺遺跡』　仙台市文化財調査報告書第112集

興野義一（1983）「宮城県における黒曜石製小型円形削器と共伴して北大式土器を出土する遺跡について」『北奥古代文化』第14号

熊谷・長島・豊村（1996）「第107次調査」『郡山遺跡ＸＶＩ』　仙台市文化財調査報告書第210集

桑原・高野・千葉（1993）「掘り出された近世の様子」『多賀城市史』2　近世・近現代

古泉　弘（1997）「江戸の考古学」『考古学ライブラリー』48

後藤秀一ほか（1994）『山王遺跡八幡地区の調査』　宮城県文化財調査報告書第162集

後藤・村田・岩見ほか（1994）『藤田新田遺跡』宮城県文化財調査報告書第163集

佐久間・小村田（1995）『佐沼城跡』　迫町文化財調査報告書第2集

佐久間・佐藤ほか（1993）『上野館跡』　宮城県文化財調査報告書第156集

佐久間・本田（1990）「東北地方における近世窯業と陶磁器をめぐる問題」『東北大学埋蔵文化財調査年報』3
東北大学埋蔵文化財調査委員会
佐藤甲二ほか（1985）『南小泉遺跡　ー第12次発掘調査報告書ー』　仙台市文化財調査報告書第80集
佐藤信行（1984）「宮城県内の北海道系遺物」『宮城の研究』第1巻
佐藤　巧（1974）『宮城の古民家』　宮城県民家緊急調査報告書
佐藤　巧（1979）『近世武家住宅』　叢文社
佐藤憲幸ほか（1996）『山王遺跡Ⅲ－多賀前地区遺物編ー』　宮城県文化財調査報告書第170集
佐藤則之ほか（1997）『山王遺跡Ⅴ－八幡・伏石地区他ー』　宮城県文化財調査報告書第174集
主浜・小川・熊谷（1992）『土手内』　仙台市文化財調査報告書第165集
庄司・芳賀・岡（1995）『田道町遺跡』　石巻市文化財調査報告書第7集
白鳥・加藤（1974）「岩切鴻ノ巣遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ』　宮城県文化財調査報告書第35集
新庄屋・真山（1985）「小梁川遺跡」『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ』　宮城県文化財調査報告書第107集
菅原・吾妻ほか（1994）『山王遺跡Ⅰ－古墳時代中期遺物包含層編ー』　宮城県文化財調査報告書第161集
菅原弘樹（1993）「多賀城周辺の様子」『日本歴史』第544号
菅原弘樹（1994）「方格地割と遺跡の性格」『第20回古代城柵官衙遺跡検討会資料』
菅原弘樹ほか（1995）『山王遺跡Ⅱ－多賀前地区遺構編ー』　宮城県文化財調査報告書第167集
菅原弘樹ほか（1996）『山王遺跡Ⅳ－多賀前地区考察編ー』　宮城県文化財調査報告書第171集
須藤・高橋（1997）「山王遺跡出土石器の使用痕分析」『山王遺跡Ⅰ』　多賀城市文化財調査報告書第45集
芹沢長介（1987）『東北の近世陶磁』　東北陶磁文化館
高倉敏明（1980）『館前遺跡』　多賀城市文化財調査報告書第1集
高倉敏明（1981）「山王遺跡」『山王・高崎遺跡発掘調査概報』　多賀城市文化財調査報告書第2集
高倉敏明（1991）「山王遺跡」・「市川橋遺跡」『多賀城市史』4　考古資料
高倉・千葉・相沢（1984）『市川橋遺跡ー第3次調査報告書ー』　多賀城市文化財調査報告書第5集
多賀城町誌編纂委員会（1967）『多賀城町誌』第4篇　近世史
多賀城市埋蔵文化財調査センター（1989）「新田遺跡ー第9次調査ー」『年報』3　多賀城市文化財調査報告書第20集
高野芳宏（1986）「第48次調査」『年報』1985　宮城県多賀城跡調査研究所
高野芳宏（1991）「高崎遺跡井戸尻地区の調査」『多賀城市史』4　考古資料
高橋学ほか（1989）「十二林遺跡」『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』
秋田県文化財調査報告書第178集
田中則和ほか（1984）『山口遺跡Ⅱ』　仙台市文化財調査報告書第61集
田辺昭三（1981）『須恵器大成』
千葉・石本（1991）『山王遺跡ー第10次調査概報ー』　多賀城市文化財調査報告書第27集
千葉孝弥（1992）「留守氏の館と市のにぎわい」『よみがえる中世』7
千藥孝弥ほか（1992）『山王遺跡ー第12次調査概報ー』　多賀城市文化財調査報告書第30集
千葉孝弥（1994Ａ）「多賀城周辺遺跡の様相」『第20回古代城柵官衙遺跡検討会資料』
千葉孝弥（1994Ｂ）「多賀城周辺の道路遺構」『季刊考古学』第46号
千葉孝弥ほか（1995）『高崎遺跡ー第11次調査報告書ー』　多賀城市文化財調査報告書第37集
千葉孝弥（1995）「多賀城城外の道路と方格地割り」『古代文化』第47巻第4号
千葉孝弥（1997）「多賀城外の様子」『第23回古代城柵官衙遺跡検討会資料』
千葉・鈴木ほか（1997）『山王遺跡Ⅰ』　多賀城市文化財調査報告書第45集
次山　淳（1992）「塩釜式土器の変遷とその位置づけ」『究班』
鶴見貞雄（1994）「粗製器台の用途を考える」『研究ノート』3号　茨城県教育財団
辻　秀人（1989）「東北古墳時代の画期について（その1）」『福島県立博物館紀要』第3号
辻　秀人（1994）「東北南部における古墳出現期の土器編年その1」『東北学院大学論集　歴史学・地理学』第26号
辻　秀人（1995）「東北南部における古墳出現期の土器編年その2」『東北学院大学論集　歴史学・地理学』第27号
手塚　均（1980）「留沼遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅲ』　宮城県文化財調査報告書第65集
手塚　均（1981）「鶴ノ丸遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ』　宮城県文化財調査報告書第81集

東京都教育委員会（1991）『お江戸八百八町地下探検図録』
長島・青沼（1983）『中田畑中遺跡』　仙台市文化財調査報告集第53集
長島・熊谷（1995）「燕沢遺跡第8次調査」『仙台平野の遺跡群ＸＩＶ』　仙台市文化財調査報告書第195集
丹羽・柳田・阿部（1974）「西野田遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ』　宮城県文化財調査報告書第35集
丹羽・阿部・小野寺（1981）「清水遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ』　宮城県文化財調査報告書第77集
丹羽　茂（1983）「宮前遺跡」『朽木橋横穴古墳群・宮前遺跡』　宮城県文化財調査報告書第96集
丹羽　茂（1985）「今熊野遺跡」『今熊野遺跡・一本杉遺跡・馬越石塚』　宮城県文化財調査報告第104集
藤沢　敦（1992）「引出式再論」『歴史』第79輯
藤沢敦ほか（1993）「仙台城二の丸跡第5地点（MN5）の調査」『東北大学埋蔵文化財調査年報』6　東北大学埋蔵文化財調査委員会
藤沢敦ほか（1994）「仙台城二の丸跡第5地点（MN5）付帯施設区域の調査」『東北大学埋蔵文財調査年報』7　東北大学埋蔵文化財調査委員会
古川・白鳥（1991）「土師器の編年　東北」『古墳時代の研究』6
松本秀明（1995）「山王遺跡の位躍と遺跡周辺の地形環境」『山王遺跡Ⅱ』　宮城県文化財調査報告書第167集
松本秀明（1996）「山王遺跡の地形学的背景」『山王遺跡Ⅴ－多賀前地区考察編－』　宮城県文化財調査報告書第171集
真山　悟（1992）「第60次調査」『年報』1991　宮城県多賀城跡調査研究所
宮城県多賀城跡調査研究所（1976）「第26・27次調査」『年報』1975
宮城県多賀城跡調査研究所（1978）「第30次調査」『年報』1978
村田晃一（1992）「多賀城周辺における奈良・平安時代の須恵器生産」『東日本における古代・中世窯業の諸問題』シンポジウム資料
村田晃一（1994）「土器からみた官衙の終末」『古代官衙の終末をめぐる諸問題』
村田晃一（1995）「宮城郡における10世紀前後の土器」『福島考古』第36号
村田晃一（1996）「宮城県における双耳坏の分布」『窯研通信』第7号
村田晃一（1997）「陸奥中部にみる北との交流」『蝦夷・律令国家・日本海』シンポジウム資料
八木光則（1993）「陸奥中部における古代末期の土器群」『歴史時代土器研究』第8号
柳沼賢治（1989）「福島県中通り地方の土師器」『福島県に於ける古代土器の諸問題』シンポジウム資料
柳沢・進藤（1992）「第61次調査」『年報』1991　宮城県多賀城跡調査研究所
柳沢和明（1993）「第62次調査」『年報』1992　宮城県多賀城跡調査研究所
柳沢和明（1994Ａ）「第64次調査」『年報』1993　宮城県多賀城跡調査研究所
柳沢和明（1994Ｂ）「東北の施釉陶器」『古代の土器研究3　－施釉陶器－』　古代の土器研究会
山口逸弘（1994）『黒熊中西遺跡（2）』　群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第169集
吉田稔ほか（1991）『小敷田遺跡』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集

付編1　山王遺跡町地区出土木製品の樹種同定

パレオ・ラボ　松 葉 礼 子

1．はじめに

宮城県多賀城市に位置する山王遺跡の 1995・1996 年に調査した町・伊勢・八幡地区から出土した木製品計 88 点について樹種を同定した。発掘調査の結果、古墳時代前期・中期、奈良・平安時代、江戸時代以降の遺構や遺物が発見された。木製品は、主に桶や下駄等の生活用具と建築材が中心である。これらの木製品の樹種を明らかにする事で、本遺跡の木材利用の一端を明らかにする事を目的として、調査を行った。

2．方法と記載

同定には、木製品から直接片歯剃刀を用いて、木材組織切片を横断面（木口と同義・写真図版ａ）、接線断面（板目と同義・写真図版ｂ）、放射断面（柾目と同義・写真図版ｃ）の 3 方向作成した。これらの切片は、ガムクロラールにて封入し、乾燥させ永久標本とした。機種の同定は、これらの標本を光学顕微鏡下で観察し、原生標本との比較により樹種を決定した。これらの内、各分類群を代表させる標本については写真図版を添付し、同定の証拠とするとともに同定根拠は後述する。結果は、表 2：山王遺跡町地区出土木製品樹種同定結果に示す。

なお、作成した木材組織プレパラートは、標本番号（ＭＩG170～257）を付し、(株)パレオ・ラボに保管されている。

＜同定根拠＞

アカマツ　Pinus densiflora Sieb. et Zucc.　PINACEAE　(写真図版 46－1ａ～1ｃ)

水平・垂直両樹脂道をともに持つ針葉樹。早材から晩材への移行はやや急で、年輪界は明瞭、垂直樹脂道が晩材部に見受けられる。垂直・水平両樹脂道の周囲にはエピセリウム細胞があるが、薄壁の為壊れている。放射組織は単列同性と、水平樹脂道を含む紡錘形のものからなる。放射組織の上下端に見られる放射仮道管の水平壁には鋸歯状の肥厚が著しい。分野壁孔は大型の窓状で、一分野に 1～2 個。

以上の形質から、マツ科のアカマツの材と同定した。常緑高木の針葉樹で、北海道～屋久島の温帯から暖帯にかけて分布する。

スギ　Cryptomerica japonica (L.fil.) D.Don　TAXPDIACEAE　(写真図版 46－2ａ～2ｃ)

水平・垂直両樹脂道を持たない針葉樹材。早材から晩材にかけての移行は急で、年輪界は明瞭である。樹脂細胞が早材部から晩材部にかけて散在する。放射組織は放射柔細胞からなり単列同性。分野壁孔は、大型のスギ型で、通常一分野あたり 2 個存在する。

以上の形質により、スギ科のスギの材と同定した。スギは、常緑の針葉樹で、本州～屋久島の温帯から暖帯、主として太平洋側に多く存在している。

ヒノキ　Chamaecyparis obtusa(Sieb.et Zucc.)Endl.　CUPRESSACEAE　(写真図版46－3ａ～3ｃ)

水平・垂直両樹脂道を持たない針葉樹。早材から晩材への移行はやや急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞が早材部と晩材部の境に散在しており、水平壁は結節状に肥厚している。放射組織は放射柔組織のみからなり単列同性。分野壁孔は中型のトウヒ～ヒノキ型で、一分野に1～3個。

以上の形質から、ヒノキ科のヒノキの材と同定した。ヒノキは、常緑高木の針葉樹で福島県～屋久島の温帯に分布する。

アスナロ　Thujopsis dolabrata Sieb. et Zucc.　CUPRESSACEAE　(写真図版47－4ａ～4ｃ)

水平・垂直両樹脂遺を持たない針葉樹材。早材から晩材にかけての移行はやや急である。樹脂細胞は早材部から晩材部にかけて接線方向に散在する。放射組織は背の低い単列で、柔細胞のみからなる。分野壁孔は小型のヒノキ～スギ型で、1分野あたり2～4個存在している。

以上の形質により、ヒノキ科のアスナロの材と同定した。アスナロは、本州～九州に分布する常緑高木の針葉樹である。

イヌガヤ　Cephalotaxus harringtonia(Knight)K.Koch　CEPHALOTAXACEAE　(写真図版47－5ａ～5ｃ)

水平・垂直両樹脂道を共に持たない針葉樹。早材から晩材にかけての移行は緩やかで晩材部は少ない。樹脂細胞が散在する。仮道管に顕著な螺旋肥厚が見られ、放射組織はすべて放射柔細胞からなり単列同性。分野壁孔は1～2個のトウヒ型。

以上の形質により、イヌガヤ科のイヌガヤの材と同定した。イヌガヤは、常緑小高木から低木の針葉樹で、本州（岩手県以南）～九州に分布する。

ハンノキ属ハンノキ亜属　Alnus Subgen. Alnus　BETULACEAE　(写真図版47－6ａ～6ｃ)

小型の道管が単独あるいは放射方向に複合して散在する散孔材。道管の穿孔は 20～30 本程度の横棒からなる階段状。放射組織は同性で、単列と複合状があり、放射組織と道管相互の壁孔は密である。

以上の形質により、カバノキ科のハンノキ亜属と同定した。ハンノキ亜属には、ハンノキ、ケヤマハンノキ等7種が含まれる。いずれも、落葉性の低木～高木である。

クリ　Castanea creneta Sieb.et Zucc.　FAGACEAE　(写真図版48－7ａ～7ｃ)

年輪の始めに、やや放射方向に伸びた大型の丸い管孔が一列に並ぶ環孔材。晩材部では、小型で、薄壁の角張った管孔が、火炎状から放射状に配列する。道管の穿孔は単一。木部柔組織は、晩材部で接線状から単接線状。放射組織は単列同性で、道管との壁孔は、対列状を呈す。

以上の形質より、ブナ科のクリの材と同定した。クリは、北海道～九州の温帯下部から暖帯にわたって分布する落葉性高木、あるいは中高木である。

ブナ属　Fagus sp.　FAGACEAE　（写真図版48－8ａ～8ｃ）

小型で丸い管孔が年輪界に向けて徐々に径を減じながら散在する散孔材。道管の穿孔は単一、もしくは横棒の少ない階段状。放射組織は巾の広い複合状と単列のものがあり同性。

以上の形質により、ブナ科のブナ属の材と同定された。ブナ属には、北海道～九州の温帯に分布するブナと本州（岩手県以南）～九州の中間温帯に分布するイヌブナとが含まれる。

コナラ属コナラ亜属クヌギ節　Q.Subgen.Quercus Sect. Cerris　FAGACEAE（写真図版48－9ａ～9ｃ）

年輪のはじめに丸い大道管が一列に並び、晩材部では徐々に径を減じた丸い道管が放射方向に配列する環孔材。道管の穿孔は単一、放射組織は、複合放射組織と単列同性の物からなり、道管との壁孔は柵状。木部柔組織が、接線方向にほぼ帯状に分布する。

以上の形質により、ブナ科のコナラ属クヌギ節の材と同定した。クヌギ節は、いずれも落葉高木のクヌギ（岩手県以南～琉球）とアベマキ（山形県以西～九州）が含まれる。

ケヤキ　Zelkova serrata（Thunb.）Makino　ULMACEAE　写真図版49－10ａ～10ｃ）

年輪の始めに大型で丸い管孔が一列に並ぶ環孔材。晩材部では、薄壁の多角形の小道管が多数集合して接線方向～斜め接線方向に配列する。道管穿孔は単一、小道管内部には螺旋肥厚を持つ。木部柔組織は、周囲状～連合翼状を呈し、放射組織は1～8列程度の異性で、その上下端は時に大きめの結晶細胞が見られる。

以上の形質により、ニレ科のケヤキの材と同定した。ケヤキは、本州～九州の暖帯～温帯の谷あい、斜面などの適潤な肥沃地に広く分布する。

ヤマグワ　Morus australis Poir.　MORACEAE　（写真図版49－11ａ～11ｃ）

年輪の始めに、大道管がならび、そこから順次径を減じた小道管が接線状～斜め接線状に配列する傾向を持つ環孔材。道管の穿孔は単一で、時にチローシスを含む。小道管は螺旋肥厚をもち、木部柔組織は周囲状。放射組織は異性で、1～5細胞幅程度である。

以上の形質により、クワ科のヤマグワの材と同定した。ヤマグワは、落葉低木で、北海道～琉球の温帯～亜熱帯に分布する。

サクラ属　Prunus sp.　ROSACEAE　（写真図版49－12ａ～12ｃ）

小型の丸い道管が、単独あるいは数個放射方向に複合して散在する散乱材。道管の穿孔は単一で、内壁には明瞭な螺旋肥厚をもつ。放射組織は1～5細胞幅程度で、同性に近い異性。

以上の形質から、バラ科のサクラ属の材と同定した。日本のサクラ属は、落葉・常緑の低木～高木で25種が知られている。

トチノキ　Aesculus turbinata Blume　HIPPOCASTANACEAE　（写真図版50－13ａ～13ｃ）

小形で丸い管孔が単独あるいは数個複合して均一に分布する散孔材。道管の穿孔は単一で、道管内壁に螺旋肥厚が有る。放射組織は単列同性で、しばしば層階状に配列する。道管との壁孔は小形で密であるが、ヤナギ属のように蜂の巣状を呈す事はない。

以上の形質より、トチノキ科のトチノキの材と同定した。トチノキは、北海道～九州の主に暖帯～温帯に分布する落葉高木である。

キリ　Paulownia tomentosa (Thunb.) Steud.　SCROPHULARIACEAE　（写真図版50－14ａ～14ｃ）

大型で丸い道管が年輪の始めに並び、徐々に径を減じた丸い小道管が単独あるいは数個複合して放射方向に配列する環孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は早材部で周囲状、晩材部で周囲状～連合翼状を呈し著しい。放射組織は同性で４細胞幅程度。

以上の形質により、ゴマノハグサ科のキリの材と同定した。キリは、落葉高木で、本州～九州の暖帯から温帯にかけて自生状態をなすが、植栽される事が多い。

第１表　山王遺跡町地区　時代別樹種同定

時代	製品名	部位等	アカマツ	スギ	ヒノキ	ヒノキ属	アスナロ	ヒノキ科	針葉樹	イヌガヤ	ハンノキ属	クリ	ブナ属	クヌギ節	ケヤキ	ヤマグワ	サクラ属	トチノキ	キリ	タケ亜科
古墳時代	柱										1	1		1						
奈良・平安時代	桶			1																
	挽物	皿													1					
	建築部材			1	1															
	礎板											4								
	柱											4								
	櫂											1								
江戸時代	杓文字	柄						1												
	手桶	取手		1			1													
	桶	底			1															
	柄杓																			1
	挽物												1							
	槽											1						1		
	漆器					1							17							
	箸						1													
	木簡		1		1		1													
	刀形				1															
	差歯下駄	本体													4	1			1	
	差歯下駄	歯													7				1	
	連歯下駄			1								1			2					
	建築部材			1	1															
	柱			1					1			2								
	横槌													1						
	不明			2	3		3	1	1	1		1			2		1			

タケ亜科 Subfam. Bambusoideae sp. GRAMINALS （写真図版50－22ａ～22ｂ）

原生木部の小道管の左右外方に大型の道管が一対あり、その外側には師部がある。それら全体を厚壁の繊維からなる維管束鞘が取り囲んでいる。そのような維管束が、柔組織中に散在し不斉中心柱を為している。

以上のような形質から、イネ科タケ亜科の稈であると同定した。

3. 考 察

山王遺跡町・伊勢・八幡地区で出土した木製品は、古墳時代（4 世紀後半、5 世紀中頃～後半）計 3 点、奈良・平安時代（8 世紀後半～10 世紀後半）計 14 点、江戸時代以降計 71 点である。大まかに 3 つの時代に分かれる。木製品自体は、遺構毎にさらに時期が細分されるが、今回はこの 3 つの時期区分にしたがって考察する。

製品毎にその使用傾向を見てみる。まず、建築材では、古墳時代の柱でハンノキ亜属、クリ、クヌギ節が使用されていたが、奈良・平安時代には、柱や礎板はクリを使用し、他の部材ではスギ、ヒノキも用いていた。江戸時代以降でも奈良・平安時代同様の樹種が見られる。挽物・漆器では、奈良・平安時代ではケヤキ材を用いていたのに対し、江戸時代ではブナ属材へと変化している。木簡や形代は、本遺跡町地区では江戸時代のみの出土であるが、地域的に近い市川橋遺跡館前地区出土の 8～9 世紀の形代・木簡とは異なり、墨のりの悪いアカマツ、そしてヒノキ、アスナロであった。市川橋遺跡では、特に斎串ではモミ属が非常に多いが、今回は確認されなかった（註 1）。

一方、江戸時代の横槌でも 8～9 世紀の市川橋遺跡と同様にクヌギ節を使用し、槽はトチノキが使用されていた。製品の製作・機能上の理由から樹種を限定する要因がある場合には、時代により樹種が変化しない製品もある。

これらの結果を考えるに、製作上、もしくは使用上、樹種を限定する要因がある場合以外は、材の需要と供給、加工技術の発展等により機種が変化している。本遺跡では、古墳時代には、低地に生えていて手に入りやすいが、保存性の悪いハンノキ亜属の様な材も柱として使用しているのに対し、奈良・平安時代では、多くの住居で柱は保存性の高いクリ材へと変化している。しかし、クリ材が柱に適していると知っていながらも、江戸時代には供給量の多さからクリ材以外にも山地からスギ、ヒノキ等の針葉樹材も導入されてゆく。挽物も同様に、丈夫で挽きやすいケヤキ材が優秀な材であると知りながらも、ケヤキの自生する平地の開発、過度の伐採等で、ケヤキ材が不足するため、耐久性はないが資源の大量にあるブナ属材へと移行する。

江戸時代迄に、このような変化が見られるが、この傾向は江戸の都市域とは異なる。新宿区にある細工取遺跡（能代 1992）では、桶、曲物をはじめ、木製品のほとんどがヒノキ、もしくはサワラで製作されている。細工町遺跡では、製品による樹種の差はなく、異なる目的でも同じ樹種が使用されている。山王遺跡の場合は、江戸時代迄に用材選択も変化しているが、古代から用いていた樹種が無くなったわけではなく、相対的に材が不足する事により、補足的に山地の木材が導入された結果であると考えられる。

ただ、江戸時代では下駄等の服飾品では、流行（市田 1992）があり、一概には材質、植生のみでは判断できない場合も多く、細工町遺跡で差歯下駄の歯でケヤキが多いからといって、堅い材質のケヤキが適材であるとは言えない場合がある。今回、差歯下駄の歯、本体、連歯下駄で、ケヤキ、キリ材が使用されているが、これらが材質が選択基準であるか、木目等に依るものであるかは、断定できない。

註 1)　1995・1996 年に発掘調査した市川橋遺跡館前地藪では、5 世紀から 11 世紀の河川跡が確認されている。特に 7 世紀から 10 世紀後半は多量の木製品が出土しており、このうち主なものについては山王遺跡と同時期に樹種同定を行っている。今回の報告にあたり、その成果を参考にしている。なお、市川橋遺跡出土木製品の樹種同定については、同遺跡の発掘調査報告書に掲載予定である。

【引用文献】

市田京子．1992．江戸時代の下駄．江戸遺跡研究会第 5 回大会要旨．237－258pp．江戸遺跡研究会．

能代修一．1992．細工町遺跡．174－187pp．新宿区厚生部遺跡調査会．

第 2 表の内容　山王遺跡町地区出土木製品樹種同定結果

MIG	樹　種	製品名	部位等	備　考	木取り	登録	遺構番号	時　期
242	クリ	櫂？	未製品			87	ＳＫ2851	9 世紀前半
236	ヒノキ	不明品			柾目	81	ＳＫ2951	時期不明
240	スギ	不明品			板目	85	ＳＫ2764	8 世紀後半
235	ケヤキ	挽物皿			柾目	80	ＳＫ2860	8 世紀後半～10世紀前半
237	スギ	建築部材			柾目	82	ＳＫ2860	8 世紀後半～10世紀前半
239	スギ	曲物	底			84	ＳＤ2801	9 世紀以降
241	ヒノキ	建築部材？				86	ＳＫ2850	10世紀中頃以降（中頃カ）
238	ブナ属	漆器皿			横木取り	83	ＳＫ2815	中世以降
214	ケヤキ	下駄	歯	差歯下駄	板目	53	ＳＥ2925	18世紀～19世紀
215	針葉樹	不明品	板状		柾目	54	ＳＥ2930	18世紀～19世紀
212	クリ	下駄		連歯下駄	板目	52	ＳＥ3527	18世紀～19世紀
213	ケヤキ	下駄	台	差歯下駄	板目	53	ＳＥ3527	18世紀～19世紀
170	ブナ属	漆器椀		内赤外黒	横木取り	1	ＳＤ3396Ａ	19世紀
171	ブナ属	漆器椀		内赤外赤	横木取り	3	ＳＤ3396Ａ	19世紀
172	ブナ属	漆器椀		内赤外黒	横木取り	4	ＳＤ3396Ａ	19世紀
173	ブナ属	漆器椀		内外黒内赤	横木取り	5	ＳＤ3396Ａ	19世紀
174	アスナロ	不明品	円盤状		柾目	6	ＳＤ3396Ａ	19世紀
175	ブナ属	漆器小皿			柾目	7	ＳＤ3396Ａ	19世紀
176	アスナロ	箸				8	ＳＤ3396Ａ	19世紀
177	アスナロ	不明品				9	ＳＤ3396Ａ	19世紀
178	ケヤキ	下駄	後半部	差歯下駄	板目	11	ＳＤ3396Ａ	19世紀
179	ケヤキ	不明品			板目	12	ＳＤ3396Ａ	19世紀
180	ブナ属	漆器椀		外赤内黒外二文様	横木取り	13	ＳＤ3396Ａ	19世紀
181	ブナ属	漆器皿		外黒内赤	横木取り	14	ＳＤ3396Ａ	19世紀
182	ブナ属	漆器椀		外赤内赤	横木取り	21	ＳＤ3396Ｂ	19世紀
183	ブナ属	漆器椀		外赤内赤 高台内黒屋号	横木取り	22	ＳＤ3396Ｂ	19世紀
184	ブナ属	漆器椀		外赤内赤 高台内黒印判	横木取り	23	ＳＤ3396Ｂ	19世紀
185	ブナ属	漆器椀		外赤内赤	横木取り	24	ＳＤ3396Ｂ	19世紀
186	ヒノキ	漆不明品			ほぼ柾目	27	ＳＤ3396Ｂ	19世紀
187	ケヤキ	下駄	歯	差歯下駄	板目	29	ＳＤ3396Ｂ	19世紀
188	ケヤキ	下駄			斜め	30	ＳＤ3396Ｂ	19世紀
189	ケヤキ	下駄	台	差歯下駄	板目	32	ＳＤ3396Ｂ	19世紀
190	ケヤキ	下駄	前歯	差歯下駄	板目	32	ＳＤ3396Ｂ	19世紀
191	ケヤキ	下駄	後歯	差歯下駄	板目	32	ＳＤ3396Ｂ	19世紀

MIG	樹　種	製品名	部位等	備　考	木取り	登録	遺構番号	時　期
192	スギ	下駄		連歯下駄	板目	33	ＳＤ3396Ｂ	19世紀
193	ケヤキ	墨壺	滑車		斜め	37	ＳＤ3396Ｂ	19世紀
194	ブナ属	挽物小皿		中心に穴有り	横木取り	36	ＳＤ3396Ｂ	19世紀
195	ヒノキ科	不明品	棒状		丸木	38	ＳＤ3396Ｂ	19世紀
196	アスナロ	木簡			板目	39	ＳＤ3396Ｂ	19世紀
197	アカマツ	木簡			板目	40	ＳＤ3396Ｂ	19世紀
198	ヒノキ	不明品			斜め	41	ＳＤ3396Ｂ	19世紀
199	クヌギ節	横槌			丸木	44	ＳＤ3396Ｂ	19世紀
200	アスナロ	手桶	取っ手		柾目	46	ＳＤ3396Ｂ	19世紀
201	トチノキ	槽			横木取り	47	ＳＤ3396Ｂ	19世紀
211	イヌガヤ	農具？			丸木分枝	51	ＳＫ2986	19世紀
216	スギ	不明品	角棒状			55	ＳＫ2986	19世紀
217	アスナロ	不明品	角棒状			55	ＳＫ2986	19世紀
218	ブナ属	漆器椀		内赤外黒	横木取り	56	ＳＧ3098	19世紀
219	ブナ属	漆器椀			横木取り	57	ＳＧ3098	19世紀
220	ブナ属	漆器椀		内赤外黒	横木取り	58	ＳＧ3098	19世紀
223	クリ	槽				61	ＳＧ3098	19世紀
224	クリ	不明品			ミカン割後四角	62	ＳＧ3098	19世紀
225	スギ	手桶	取っ手		柾目	63	ＳＧ3098	19世紀
226	ヒノキ	不明品	棒状		板目	64	ＳＧ3098	19世紀
227	スギ	不明品				65	ＳＧ3098	19世紀
228	スギ	建築部材			板目	66	ＳＧ3098	19世紀
229	ヒノキ	建築部材			板目	67	ＳＧ3098	19世紀
202	ヤマグワ	下駄	台	差歯下駄		48	ＳＫ3522	19世紀
203	ケヤキ	下駄	歯	差歯下駄	柾目	48	ＳＫ3522	19世紀
204	ケヤキ	下駄		連歯下駄		48	ＳＫ3522	19世紀
205	キリ	下駄	歯	差歯下駄	柾目	49	ＳＫ3522	19世紀
206	ケヤキ	下駄	台	差歯下駄	板目	49	ＳＫ3522	19世紀
207	キリ	下駄	台	差歯下駄		49	ＳＫ3522	19世紀
208	ケヤキ	下駄	歯	差歯下駄	柾目	49	ＳＫ3522	19世紀
209	ケヤキ	下駄	歯	差歯下駄	柾目	49	ＳＫ3522	19世紀
210	ブナ属	漆器椀		無地黒	横木取り	50	ＳＫ3522	19世紀
221	ブナ属	漆器蓋		内赤外赤	横木取り	59	ＳＫ3522	19世紀
				高台内黒屋号				
222	タケ亜科	柄杓				60	ＳＫ3522	19世紀
230	ヒノキ	桶	底			68	ＳＫ3021	大正時代
231	サクラ属	不明品	棒状	断面▲		74	ＳＫ3021	大正時代
232	ヒノキ属	漆器				76	ＳＫ3021	大正時代
233	ヒノキ	刀形			板目	77	ＳＫ3021	大正時代
234	ヒノキ科	漆器しゃもじ	柄	赤漆	柾目	78	ＳＫ3021	大正時代
256	ハンノキ節	柱			芯持ち丸木	14	ＳＢ2879	４世紀後半
254	クリ	柱			芯持ち丸木	10	ＳＩ3022	５世紀中頃～後半
255	クヌギ節	柱			芯持ち丸木	11	ＳＩ3022	５世紀中頃～後半
257	クリ	柱			芯持ち丸木	15	ＳＢ2890	９世紀後半～10世紀前半
248	クリ	礎板			板目	3	ＳＢ3430	９世紀後半～10世紀前半
249	クリ	礎板			板目	4	ＳＢ3419	９世紀後半～10世紀前半
250	クリ	柱			芯持ち丸木	12	ＳＢ3401	９世紀前葉～中葉
251	クリ	礎板				13	ＳＢ3401	９世紀前葉～中葉
252	クリ	柱			芯持ち丸木	5	ＳＢ3418	９世紀後半～10世紀前半
253	クリ	柱			芯持ち丸木	1	ＳＢ3430	９世紀後半～10世紀前半
247	クリ	礎板			柾目	2	ＳＢ3403	９世紀後半～10世紀前半
243	クリ	柱				7	ＳＢ3450	18世紀～19世紀
246	クリ	柱			芯持ち	9	ＳＢ3450	18世紀～19世紀
244	スギ	柱			丸木	6	ＳＢ3459	18世紀～19世紀
245	針葉樹	柱				8	ＳＢ3449	18世紀～19世紀